鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（175）

南九州西回り自動車道建設（野田IC～高尾野IC）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（XXXV）

外畠（ほかはた）遺跡

（出　水　市）

2012年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

巻頭カラー2

序　文

この報告書は，南九州西回り自動車道出水阿久根道路（高尾野 IC ～野田 IC 間）の建設に伴って，平成 22 年度に実施した出水市荘上に所在する外畠遺跡の発掘調査の記録です。

外畠遺跡は，縄文時代から近世の複合遺跡であり，各時代の遺構と遺物が出土しました。

縄文時代では，後期に該当する土坑 26 基と配石状遺構 4 基が見つかりました。なかでも，土坑では，小形壺形土器が納められた土坑や，２枚の石皿・台石が立てた状態で納められた土坑など特殊な事例が発見されています。

古代では，土坑 6 基や溝状遺構などが発見されました。土坑には，土師器の甕が納められているものや，青銅製の装身具などが出土したものがあり，当時の有力者の墓と考えられます。また，溝状遺構からは，短期間のうちに捨てられた土師器をはじめとする遺物が多量に見つかりました。古代の生活を解明する上で重要な手がかりとなるものと期待されます。

他にも中世の集落や近世の墓が見つかっていて，縄文時代から現在に至るまで，当地域で人々の生活が連綿と営まれてきたことがわかりました。

本報告書を県民をはじめ多くの方々に御覧いただき，地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値を御理解いただくことにより，国民の共有財産として文化財が保護・活用されることを祈念しております。

最後に，調査に当たりご協力をいただいた国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所，出水市教育委員会，関係各機関並びに発掘調査・整理作業に従事された地域の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成 24 年 3 月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　長　　寺　田　仁　志

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほかはたいせき
書名	外畠遺跡
副書名	南九州西回り自動車道建設（野田 IC ～高尾野 IC）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXV
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 175 集
編集者名	森幸一郎　　花田寛典
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒 899 － 4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995 － 48 － 5811 FAX　0995 － 48 － 5821
発行年月	2012 年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ほかはたいせき 外畠遺跡	かごしまけん 鹿児島県 いずみし 出水市 しょうかみ 荘上	46208	45	32° 4′ 27″	130° 16′ 53″	試掘調査 2010.05.06 ～ 2010.05.07 2010.05.11 本調査 2010.05.10 ～ 2011.01.28	135.5 10,500	南九州西回り自動車道建設に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
外畠遺跡	集落	縄文時代 後期～晩期	土坑 26 基 配石状遺構４基	市来式土器，北久根山式土器，磨消縄文土器，三万田式土器，黒川式土器，入佐式土器，石鏃，磨石・敲石類，打製石斧，磨製石斧，石皿・台石など	
	散布地	弥生時代～古墳時代		入来式土器，黒髪式土器，成川式土器など	
	集落	古代	土坑６基 掘立柱建物１棟 溝状遺構１基	土師器，内黒土師器，須恵器，刀子，青銅製品など	
	集落	中世	掘立柱建物４棟 土師器埋納柱穴１基 方形竪穴建物１基 竪穴状遺構３基 土壙墓２基 土坑３基 焼土２基 炭化物集中箇所１基 柱穴	土師器，須恵器，瓦質土器，白磁，青磁，滑石製石鍋，洪武通寶，鉄釘など	
	墓	近世	土壙墓 15 基 区画溝１基	陶磁器類，寛永通寶，鉄釘，人骨など	

要約

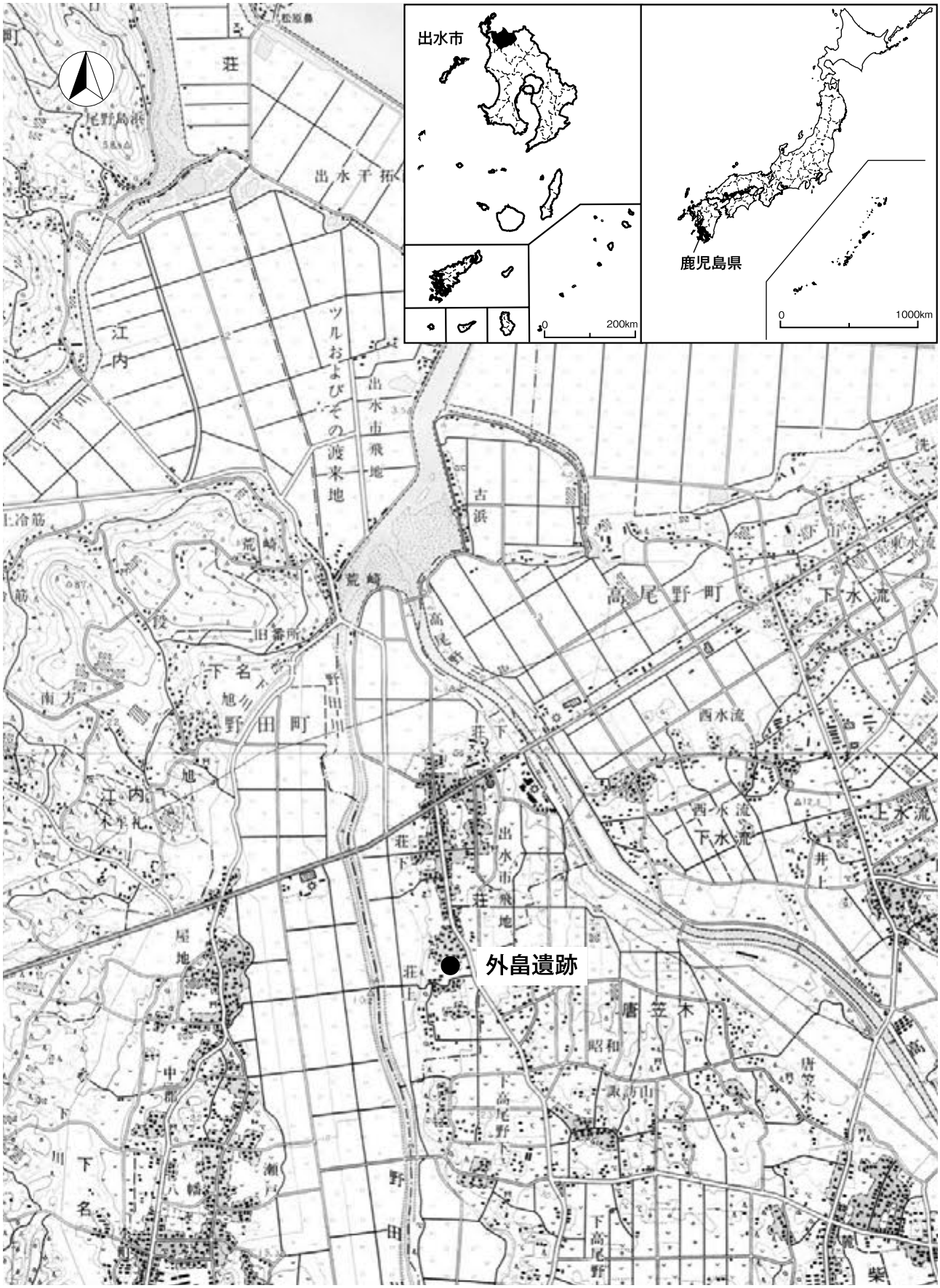
外畠遺跡は縄文時代，古代，中世，近世の複合遺跡である。

縄文時代は後期を中心に，土器や石器と共に，石材を伴う土坑が多数検出されている。なかでも，小形壺形土器が納められているものや，２枚の石皿・台石が立位で配置されているものなど，特殊な事例も発見されている。縄文時代後期の祭祀・精神活動を解明する上で貴重な資料となった。

古代は，土坑群と掘立柱建物跡，自然流路を利用した溝状遺構が検出されている。土坑からは土師器の甕が出土しており，墓としての機能が想定される。また，溝状遺構からは，短い期間で廃棄された遺物が発見された。

中世では，方形竪穴建物や掘立柱建物跡，土壙墓などが検出された。当遺跡の所在地近辺が「荘」という地名であることも併せて，古代から中世にかけての調査成果は，当地域における土地利用の変遷過程を示す貴重な成果である。

近世は，複数の土壙墓と，それを区画する溝状遺構が検出された。近世における出水地方の人々の形質，埋葬方法などを明らかにする貴重な成果が上がった。



外畠遺跡位置図　(1:25,000)

例　言

1　本書は，南九州西回り自動車道出水阿久根道路建設に伴う外畠遺跡の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は鹿児島県出水市荘上 1100 － 1 番地他に所在する。

3　外畠遺跡は，平成 19 年度に鹿児島県文化財課が実施した分布調査によって発見され，「西ノ下遺跡」として遺跡台帳に登録された。平成 22 年度の発掘調査では，「西ノ下遺跡」の名称を用いた。しかし，平成 23 年 4 月 1 日付けで「外畠遺跡」への遺跡名変更が行われたため，本報告書では「外畠遺跡」の名称を用いる。

4　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所から鹿児島県教育委員会が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

5　発掘調査事業は，平成 22 年度に実施し，整理・報告書作成事業は，平成 23 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文，挿図，表，図版の遺物番号は一致する。

7　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

8　本書で用いたレベル数値は，世界測地系に基づく２級基準点「基Ⅱ－９」を基準にした。
「基Ⅱ－９」の標高はＨ＝ 17.930m である。

9　物注記等で用いた遺跡記号は「Ｈハタ」である。

10　本書で使用した方位は，全て真北である。

11　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は（有）ふじたに委託した。

12　遺構図，遺物分布図の作成及びトレースは，森幸一郎が整理作業員の協力を得て行った。

13　出土遺物の実測･トレースは，森が整理作業員の協力を得て行った。また，遺物実測の一部を（株）九州文化財研究所（石器）に委託し，森が監修した。

14　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘が行った。

15　本報告に係る自然科学分析は，花粉分析及び放射性炭素年代測定，リン・カルシウム分析を（株）パリノ・サーヴェイに委託した。

16　金属器の保存処理は，中村幸一郎が整理作業員の協力を得て行った。

17　人骨の実測及び分析は，竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学教授）に依頼した。分析結果について玉稿を頂き，付論として掲載した。

18　本書の編集は，森が担当し，執筆担当は以下のとおりである。

第１章　森
第２章　花田寛典
第３章　第１節・第２節　森
　　第３節　１　森・桑波田武志
　　２　花田
　　３　森・花田
　　４　森・花田・鶴田静彦
　　５　森・鶴田
第４章　(株) パリノ・サーヴェイ
付　論　竹中正巳 (鹿児島女子短期大学)
第５章　森

19　出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　例

1　陶磁器の分類および編年は，以下の文献を参考にした。

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2　pp.55 ～ 70

森田　勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　pp.10 ～ 33

太宰府市教育委員会編 1983『大宰府条坊跡Ⅱ』太宰府市の文化財第７集

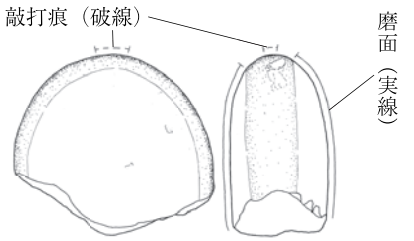
太宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集

2　本報告書に登場する遺構の略号は以下のとおりである。

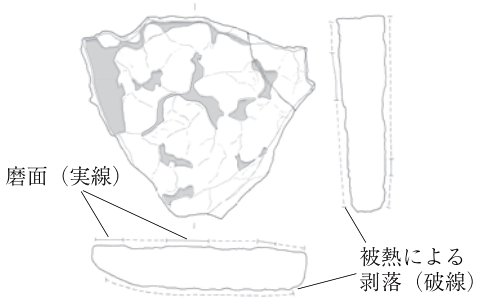
略　号	遺 構 の 種 類
SB	掘立柱建物跡
SD	溝状遺構
SI	方形竪穴建物・竪穴状遺構
SK	土坑
SP	柱穴
ST	土壙墓
SX	配石状遺構・焼土・炭化物集中箇所

3　遺構実測図において表現の都合上，土坑の断面図と遺物等の見通し図の実測位置が異なるものがある。見通し図の実測位置を ┗ で表現して区別した。

4　石器の実測表現については，表現のわかりにくい箇所には以下のような補助的な表現を行った。

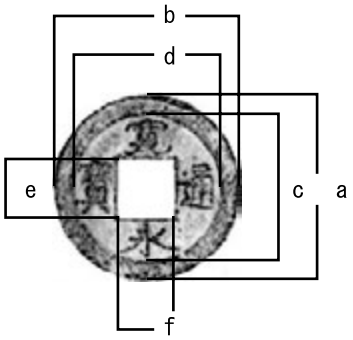


磨石・敲石類

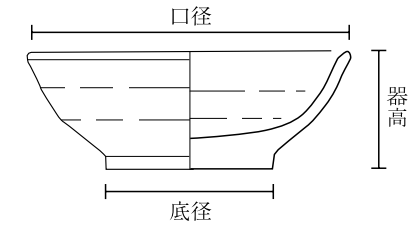


石皿・台石

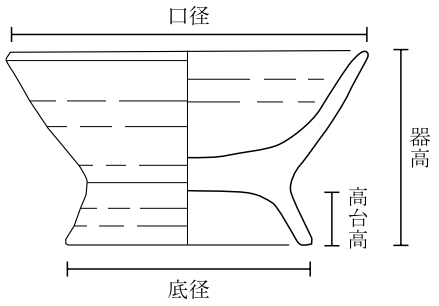
5　古銭は以下の箇所を計測した。アルファベットは観察表と対応する。



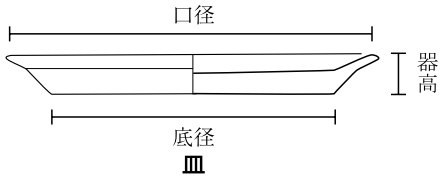
6　土師器の法量は以下のように計測した。



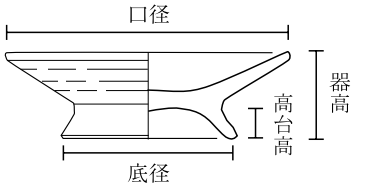
坏



埦



皿



皿（高台が付くタイプ）

目　次

巻頭カラー
序文
報告書抄録
例言・凡例

第１章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査…… 1
　第３節　本調査…… 2
　第４節　調査の経過…… 3
　第５節　整理・報告書作成業務…… 4

第２章　遺跡の位置と環境…… 5
　第１節　地理的環境…… 5
　第２節　歴史的環境…… 5

第３章　調査の方法と成果…… 12
　第１節　調査の方法…… 12
　第２節　層序…… 14
　第３節　調査の成果…… 17
　　１　縄文時代の調査…… 17
　　２　弥生時代・古墳時代の調査…… 83
　　３　古代の調査…… 85
　　４　中世の調査……118
　　５　近世ほかの調査……136
　　観察表……147
第４章　自然科学分析……177

付　論　鹿児島県出水市外畠遺跡人骨……185

第５章　総括……191

写真図版……199

挿　図　目　次

第１図　試掘トレンチの配置図 …… 2
第２図　地形分類図 …… 6
第３図　周辺遺跡位置図 …… 11
第４図　グリッド配置図・トレンチ配置図 …… 13
第５図　基本層序 …… 14
第６図　土層断面図 …… 16
第７図　縄文時代の調査範囲 …… 17
第８図　縄文時代の遺構配置図 …… 18
第９図　SK４ …… 21
第10図　SK４出土遺物① …… 22
第11図　SK４出土遺物② …… 23
第12図　SK４出土遺物③ …… 24
第13図　SK６・出土遺物① …… 25
第14図　SK６出土遺物② …… 26
第15図　SK８ …… 28
第16図　SK８出土遺物① …… 29
第17図　SK８出土遺物② …… 30
第18図　SK55 …… 31
第19図　SK55出土遺物① …… 32
第20図　SK55出土遺物② …… 33
第21図　SK78・出土遺物① …… 34
第22図　SK78出土遺物② …… 35
第23図　SK53・出土遺物 …… 36
第24図　SK54・出土遺物 …… 36
第25図　SK57・出土遺物① …… 37
第26図　SK59・出土遺物 …… 37
第27図　SK57出土遺物② …… 38
第28図　SK13・出土遺物① …… 39
第29図　SK13出土遺物② …… 40
第30図　SK13出土遺物③ …… 41
第31図　SK20 …… 42
第32図　SK20出土遺物 …… 43
第33図　SK44・出土遺物 …… 44
第34図　SK60・出土遺物 …… 46
第35図　SK61・出土遺物① …… 47
第36図　SK61出土遺物② …… 48
第37図　SK49・出土遺物 …… 49
第38図　SK50・出土遺物 …… 49
第39図　SK51・出土遺物 …… 50
第40図　SK42・出土遺物 …… 51
第41図　SK42・SK50・SX64出土石器　接合状況 …… 51
第42図　SK43 …… 52
第43図　SK48・出土遺物 …… 52
第44図　SK46・出土遺物 …… 53
第45図　SK69・出土遺物 …… 53
第46図　SK47 …… 54
第47図　SK58 …… 54
第48図　SX52・出土遺物 …… 55
第49図　SX64 …… 56
第50図　SX65 …… 56

第 51 図　SX66・出土遺物 …… 56
第 52 図　SK45・出土遺物 …… 57
第 53 図　SK21 …… 57
第 54 図　遺構外出土土器① …… 60
第 55 図　遺構外出土土器② …… 61
第 56 図　遺構外出土土器③ …… 62
第 57 図　遺構外出土土器④ …… 63
第 58 図　遺構外出土土器⑤ …… 64
第 59 図　遺構外出土土器⑥ …… 65
第 60 図　遺構外出土土器⑦ …… 66
第 61 図　遺構外出土土器⑧ …… 67
第 62 図　遺構外出土土器⑨ …… 68
第 63 図　遺構外出土土器⑩ …… 69
第 64 図　遺構外出土土器⑪・土製品 …… 70
第 65 図　遺構外出土石器① …… 73
第 66 図　遺構外出土石器② …… 74
第 67 図　遺構外出土石器③ …… 75
第 68 図　遺構外出土石器④ …… 76
第 69 図　遺構外出土石器⑤ …… 77
第 70 図　遺構外出土石器⑥ …… 78
第 71 図　遺構外出土石器⑦ …… 79
第 72 図　遺構外出土石器⑧ …… 80
第 73 図　遺構外出土石器⑨ …… 81
第 74 図　遺構外出土石器⑩ …… 82
第 75 図　弥生時代・古墳時代遺物 …… 84
第 76 図　古代の調査範囲 …… 85
第 77 図　古代土師器　坏・皿　分類 …… 87
第 78 図　古代土師器　埦　分類 …… 88
第 79 図　古代の遺構配置図（J ～ L － 18 ～ 20 区）…… 89
第 80 図　SK68・出土遺物 …… 90
第 81 図　SK70・出土遺物 …… 91
第 82 図　SK72 …… 92
第 83 図　SK72 出土遺物 …… 93
第 84 図　SK73・出土遺物 …… 95
第 85 図　SK74・出土遺物 …… 96
第 86 図　SK77・出土遺物 …… 97
第 87 図　SB67・出土遺物 …… 98
第 88 図　SP106，SP107，SP117・出土遺物 …… 99
第 89 図　SD38 ……100
第 90 図　SD38 埋土堆積状況・断面 ……101
第 91 図　SD38 下層遺物出土状況 ……102
第 92 図　SD38 下層出土　土師器坏① ……103
第 93 図　SD38 下層出土　土師器坏② ……104
第 94 図　SD38 下層出土　土師器坏③ ……105
第 95 図　SD38 下層出土　土師器埦① ……106
第 96 図　SD38 下層出土　土師器埦② ……108
第 97 図　SD38 下層出土　土師器埦③・皿ほか ……109
第 98 図　SD38 下層出土　土師器甕・二次加工品 ……110
第 99 図　SD38 下層出土　須恵器 ……111
第 100 図　SD38 上層・中層出土遺物 ……112
第 101 図　SD38 Ⅱ層・撹乱ほか出土遺物 ……113
第 102 図　遺構外出土遺物① ……116
第 103 図　遺構外出土遺物② ……117
第 104 図　中世の調査範囲 ……118
第 105 図　中世の遺構配置図（１） ……120
第 106 図　中世の遺構配置図（２） ……121
第 107 図　SB16，SB41，SB119 ……122
第 108 図　SB119 － P5・出土遺物 ……123
第 109 図　SP79・出土遺物 ……123
第 110 図　SB120・出土遺物 ……124
第 111 図　SI 7 ……125
第 112 図　SI 7 出土遺物 ……126
第 113 図　SI11，SI40 ……127
第 114 図　SI19・出土遺物 ……129
第 115 図　ST62，ST63・出土遺物 ……130
第 116 図　土坑・柱穴ほか ……131
第 117 図　遺構外出土遺物① ……133
第 118 図　遺構外出土遺物② ……134
第 119 図　遺構外出土遺物③ ……135
第 120 図　近世の調査範囲 ……136
第 121 図　土壙墓群・SD36 ……137
第 122 図　ST17・出土遺物 ……138
第 123 図　ST22・出土遺物 ……139
第 124 図　ST23・出土遺物 ……139
第 125 図　ST24・出土遺物 ……140
第 126 図　ST27・出土遺物 ……140
第 127 図　ST35・出土遺物 ……141
第 128 図　ST25，ST26・出土遺物 ……142
第 129 図　土壙墓群・遺物出土地点 ……143
第 130 図　土壙墓出土遺物 ……144
第 131 図　遺構外出土遺物① ……145
第 132 図　遺構外出土遺物② ……146
第 133 図　暦年較正結果 ……179
第 134 図　暦年較正結果 ……182
第 135 図　花粉化石 ……183
第 136 図　縄文時代の遺構変遷案 ……192
第 137 図　小形壺形土器（１）・参考資料 ……194
第 138 図　遺構・包含層出土石器機種別点数 ……195
第 139 図　遺構・包含層出土石器機種別組成率 ……195
第 140 図　剥片石器石材利用率（重量比） ……195
第 141 図　石材利用地域別依存率（重量比） ……195
第 142 図　SD38 下層出土　土師器坏・埦の分布と組成 …197
第 143 図　中世の遺構変遷案 ……198
第 144 図　外畠遺跡及び隣接地の残存状況 ……198

表　目　次

第 1 表　試掘調査結果 …… 2
第 2 表　周辺遺跡地名（1）…… 9
第 3 表　周辺遺跡地名（2）…… 10
第 4 表　石器分類表 …… 15
第 5 表　石材分類表 …… 15
第 6 表　磨石・敲石類使用状況観察表 …… 80
第 7 表　縄文時代の遺物観察表（1）……147
第 8 表　縄文時代の遺物観察表（2）……148
第 9 表　縄文時代の遺物観察表（3）……149
第 10 表　縄文時代の遺物観察表（4）……150
第 11 表　縄文時代の遺物観察表（5）……150
第 12 表　縄文時代の遺物観察表（6）……151
第 13 表　縄文時代の遺物観察表（7）……152
第 14 表　縄文時代の遺物観察表（8）……153
第 15 表　縄文時代の遺物観察表（9）……154
第 16 表　縄文時代の遺物観察表（10）……155
第 17 表　縄文時代の遺物観察表（11）……156
第 18 表　縄文時代の遺物観察表（12）……156
第 19 表　縄文時代の遺物観察表（13）……156
第 20 表　縄文時代の遺物観察表（14）……157
第 21 表　縄文時代の遺物観察表（15）……158
第 22 表　弥生時代・古墳時代の遺物観察表 ……158
第 23 表　古代の遺物観察表（1）……159
第 24 表　古代の遺物観察表（2）……160
第 25 表　古代の遺物観察表（3）……161
第 26 表　古代の遺物観察表（4）……162
第 27 表　古代の遺物観察表（5）……163
第 28 表　古代の遺物観察表（6）……164
第 29 表　古代の遺物観察表（7）……165
第 30 表　古代の遺物観察表（8）……166
第 31 表　古代の遺物観察表（9）……166
第 32 表　古代の遺物観察表（10）……166
第 33 表　古代の遺物観察表（11）……166
第 34 表　古代の遺物観察表（12）……167
第 35 表　古代の遺物観察表（13）……167
第 36 表　古代の遺物観察表（14）……168
第 37 表　古代の遺物観察表（15）……168
第 38 表　古代の遺物観察表（16）……168
第 39 表　古代の遺物観察表（17）……168
第 40 表　古代の遺物観察表（18）……169
第 41 表　古代の遺物観察表（19）……169
第 42 表　古代の遺物観察表（20）……169
第 43 表　古代の遺物観察表（21）……169
第 44 表　古代の遺物観察表（22）……169
第 45 表　古代の遺物観察表（23）……170
第 46 表　古代の遺物観察表（24）……170
第 47 表　中世の遺物観察表（1）……170
第 48 表　中世の遺物観察表（2）……171
第 49 表　中世の遺物観察表（3）……171
第 50 表　中世の遺物観察表（4）……171
第 51 表　中世の遺物観察表（5）……171
第 52 表　中世の遺物観察表（6）……171
第 53 表　中世の遺物観察表（7）……171
第 54 表　中世の遺物観察表（8）……172
第 55 表　中世の遺物観察表（9）……172
第 56 表　中世の遺物観察表（10）……172
第 57 表　中世の遺物観察表（11）……172
第 58 表　中世の遺物観察表（12）……172
第 59 表　中世の遺物観察表（13）……173
第 60 表　近世の遺物観察表（1）……173
第 61 表　近世の遺物観察表（2）……174
第 62 表　近世の遺物観察表（3）……175
第 63 表　近世の遺物観察表（4）……175
第 64 表　近世・近代ほかの遺物観察表（1）……175
第 65 表　近世・近代ほかの遺物観察表（2）……176
第 66 表　近世・近代ほかの遺物観察表（3）……176
第 67 表　近世・近代ほかの遺物観察表（4）……176
第 68 表　近世・近代ほかの遺物観察表（5）……176
第 69 表　近世・近代ほかの遺物観察表（6）……176
第 70 表　花粉分析結果 ……177
第 71 表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果 ……178
第 72 表　放射性炭素年代測定結果 ……181
第 73 表　土壌理化学分析結果 ……183
第 74 表　縄文時代の土坑・配石状遺構 ……191
第 75 表　剥片石器利用石材一覧 ……195
第 76 表　古代の土坑 ……196
第 77 表　土坑出土の土師器甕の特徴 ……196

図　版　目　次

外畠遺跡全景（東から）…… 図版 1
外畠遺跡近景（西から）…… 図版 2
ツル保護対策　鳥インフルエンザ対策ほか…… 図版 3
調査前風景　土層断面…… 図版 4
N･O － 24･25 区遺物出土状況ほか
K ～ P － 23 ～ 27 区　空撮 …… 図版 5
SK 4 と周辺の遺構　SK 4 検出状況 …… 図版 6
SK 4 埋土堆積状況・完掘 …… 図版 7
SK 6 検出状況・半截・埋土堆積状況・完掘 …… 図版 8
SK54，SK55 検出状況
SK55 検出状況・埋土堆積状況・完掘
SK78 …… 図版 9
N － 25 区遺構検出状況 …… 図版 10
SK53 検出状況・完掘
SK13 検出状況・半截・完掘 …… 図版 11
SK60，SK61 検出状況・完掘
SK20 遺物出土状況・埋土堆積状況・完掘 …… 図版 12
SK57 検出状況・土器出土状況
SK44，SK45 検出状況・埋土堆積状況…… 図版 13
SK45 遺物出土状況　SK 8 検出状況・完掘
SK49，SK50，SK51 検出状況　SK49 完掘 …… 図版 14
SK50 埋土堆積状況・完掘　SK51 検出状況・完掘
SX52，SX64，SX65 検出状況　SX66 検出状況
SK43 検出状況・埋土堆積状況 …… 図版 15
SK48 検出状況・完掘　SK59 検出状況・完掘
SK58 検出状況・完掘
SK69 検出状況・完掘 …… 図版 16
SK21 検出状況・埋土堆積状況・完掘
SK42 検出状況ほか
SK77，SK68 検出状況　SK77 遺物出土状況 …… 図版 17
SK77 埋土堆積状況・完掘 …… 図版 18
SK68 埋土堆積状況・完掘　SK72，SK73 検出状況
SK72 埋土堆積状況・青銅製品出土状況・完掘
SK73 埋土堆積状況・遺物出土状況 …… 図版 19
SP71・SK70 検出状況　SK70 埋土堆積状況・完掘
SK74 検出状況・埋土堆積状況・遺物出土状況
K － 18・19 区遺構検出状況 …… 図版 20
SB67 完掘　SB67 － P 7 半截
SP71 検出状況ほか
SD38 検出状況（西から） …… 図版 21
SD38 － 1 トレンチ（A － A'）
SD38 － 2 トレンチ（B － B'）
SD38 下層遺物出土状況 …… 図版 22
SD38 完掘
SI 7 …… 図版 23
SP79 遺物出土状況・完掘 …… 図版 24
SB16 検出状況　SB41 完掘
SI11 検出状況・完掘
SI19 検出状況・遺物出土状況ほか …… 図版 25
SK39，SI40 検出状況・埋土堆積状況
ST62，ST63 検出状況・埋土堆積状況・完掘…… 図版 26
ST63 骨粉出土状況　SK18　SK15
近世土壙墓群，SD36 …… 図版 27
SD36 埋土堆積状況ほか
ST23 埋葬人骨検出状況　ST27 埋葬人骨検出状況 … 図版 28
ST17 埋葬人骨検出状況　ST35 埋葬人骨検出状況
縄文時代の遺物（１）…… 図版 29
縄文時代の遺物（２）…… 図版 30
縄文時代の遺物（３）…… 図版 31
縄文時代の遺物（４）…… 図版 32
縄文時代の遺物（５）…… 図版 33
縄文時代の遺物（６）…… 図版 34
縄文時代の遺物（７）…… 図版 35
縄文時代の遺物（８）…… 図版 36
縄文時代の遺物（９）…… 図版 37
縄文時代の遺物（10）…… 図版 38
縄文時代の遺物（11）…… 図版 39
縄文時代の遺物（12）…… 図版 40
縄文時代の遺物（13）…… 図版 41
縄文時代の遺物（14）…… 図版 42
弥生時代・古墳時代の遺物…… 図版 43
古代の遺物（１）…… 図版 44
古代の遺物（２）…… 図版 45
古代の遺物（３）…… 図版 46
古代の遺物（４）…… 図版 47
古代の遺物（５）…… 図版 48
古代の遺物（６）…… 図版 49
古代の遺物（７）…… 図版 50
古代の遺物（８）…… 図版 51
中世の遺物（１）…… 図版 52
中世の遺物（２）…… 図版 53
中世の遺物（３）…… 図版 54
中世の遺物（４）・近代の遺物 …… 図版 55
中世の遺物（５）…… 図版 56

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経過

国土交通省九州地方整備局鹿児島国道事務所（以下，鹿児島国道事務所）は，「南九州西回り自動車道出水阿久根道路建設」の施工計画に基づき，事業区内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照合した。

これを受けて，県文化財課は平成18年度に阿久根～野田インターチェンジ間の，平成19年度に野田～高尾野インターチェンジ間の分布調査を実施した。その結果，阿久根～野田インターチェンジ間では中郡遺跡群など６遺跡を，野田～高尾野インターチェンジ間では外畠遺跡をはじめとする５遺跡を確認した。

野田～高尾野インターチェンジ間分布調査結果

遺跡名	所在地	時代	備考
西宮ノ脇遺跡	出水市下知識町	縄文～古代	周知
野添遺跡	出水市下知識町	縄文～古墳	新発見
前原遺跡	出水市下知識町	弥生～古代	新発見
中尾遺跡	出水市福ノ江町	古墳～中世	新発見
外畠遺跡	出水市荘上	古墳～中世	新発見

外畠遺跡の試掘調査は，県文化財課が主体となり，県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）とともに実施した。また，出水市教育委員会の協力も受けた。

試掘調査は，平成22年５月６～７日と５月11日の３日間実施し，事業対象面積18,300㎡に対し，試掘トレンチを17か所設定した。調査面積は約135.5㎡である。

平成22年５月６～７日の２日間の調査では，９か所のトレンチを設定（第１図上のトレンチ番号１～９）し，小型バックホウと人力で掘り下げを行った。その結果，トレンチ番号６・７・８で遺構・遺物が確認された。そのことから，遺跡の西側（第１図上の太線Ａの範囲）については本調査が必要であると判断され，平成22年５月10日から本調査を実施することとなった。

次いで，５月11日には，さらに８か所のトレンチを設定（第１図上のトレンチ番号10～17）し，試掘調査を実施した。その結果，トレンチ番号13で遺構・遺物が確認され，遺跡中央付近（第１図上の太線Ｂの範囲）も本調査が必要であると判断された。なお，遺跡の東側はシラスまで掘削を受けており，遺構及び遺物は確認されなかったことから，本調査の必要はないと判断した。

試掘調査の結果，当初計画されていた事業対象面積18,300㎡に対し，10,500㎡（第１図上の太線Ａ及び太線Ｂの範囲）について本調査が必要であると判断された。このことを受けて，再度三者で協議を行い，設計変更等が不可能なことなどから本調査を実施することとなった。

本調査及び報告書作成作業は，埋文センターが担当し，本調査は平成22年５月10日から平成23年１月28日まで実施した。調査の結果，縄文時代から近世までの遺構・遺物が発見された。

報告書作成作業は，平成22年度中に遺物の洗浄や図面整理等を行い，平成23年度に本格的に実施した。

第２節　事前調査

１　分布調査

分布調査は，平成20年３月19日に実施した。

調査体制

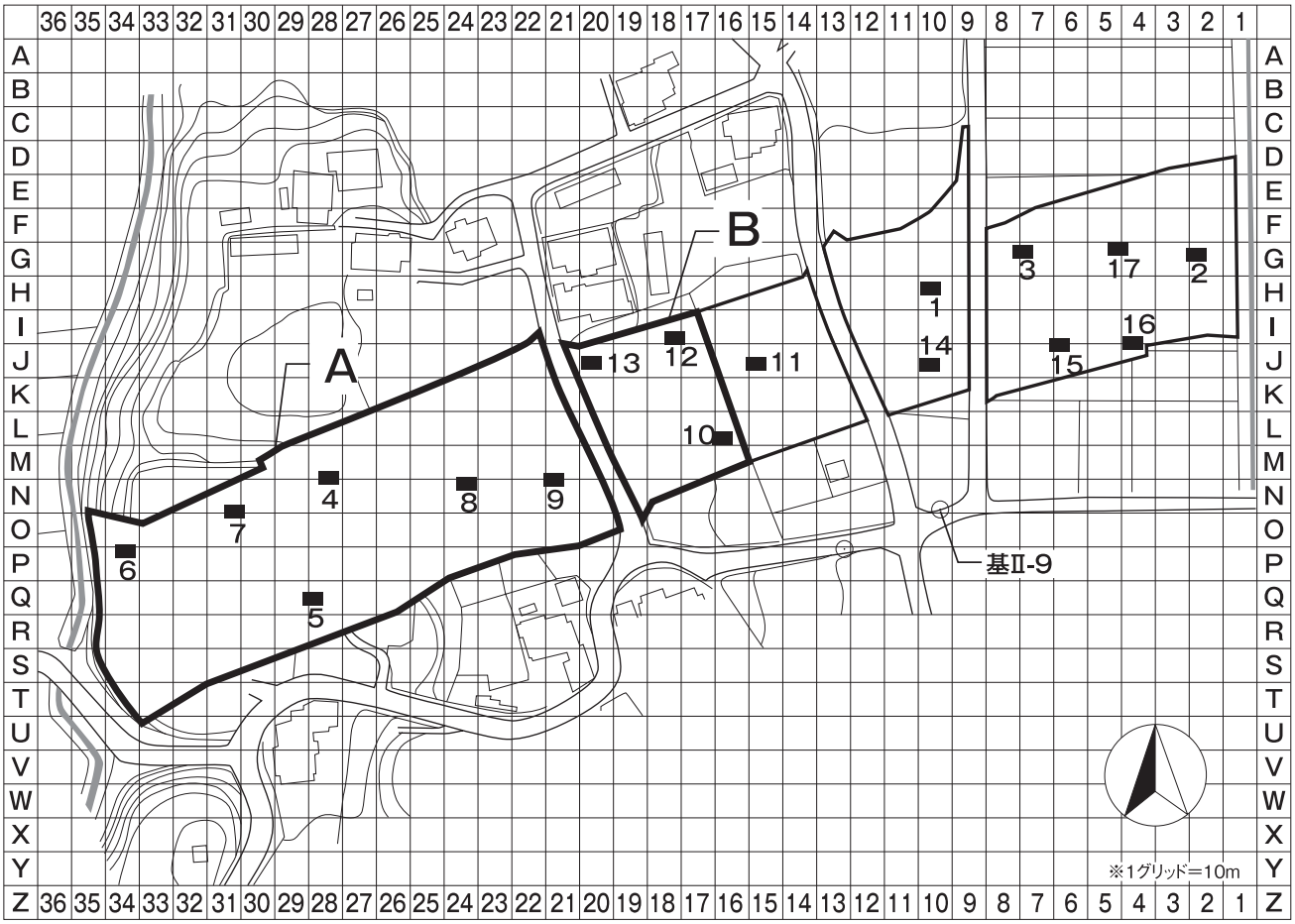
事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査総括　鹿児島県教育庁文化財課
　課長　木原　俊孝
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
　課長補佐　福山　徳治
　主任文化財主事兼
　埋蔵文化財係長　青﨑　和憲
調査担当　鹿児島県教育庁文化財課
　文化財主事　堂込　秀人
　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　文化財主事　日髙　勝博
　文化財主事　羽嶋　敦洋
立会者　九州地方整備局鹿児島国道事務所
　調査課計画係長　松尾　和敏
　（西回り推進室）技官　祝迫　龍一

２　試掘調査

試掘調査は，鹿児島県教育委員会が主体となり，県文化財課及び埋文センターが，平成22年５月６～７日と５月11日の３日間実施した。

調査体制

事業主体　鹿児島県教育委員会
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査総括　鹿児島県教育庁文化財課
　課長　有川　昭人
調査企画　鹿児島県教育庁文化財課
　課長補佐　中尾　純則
　主任文化財主事兼
　埋蔵文化財係長　堂込　秀人
調査担当　鹿児島県教育庁文化財課
　文化財主事　川口　雅之



第１図　試掘トレンチの配置図

第１表　試掘調査の結果

トレンチ番号	規模（㎡）	表土厚（cm）	表土下の層	調査最下層	調査深度（cm）	調査結果
1	6	28	Ⅳ	Ⅷ	186	なし
2	6	119	−	−		水田利用のための盛土
3・14～17	6	35	Ⅷ	Ⅷ	65	なし
4・5	12	90	Ⅴ	Ⅸ	198	なし
6・7	31	20	Ⅸ	Ⅸ	35	溝状遺構を検出
8	15	35	Ⅲ	Ⅴ	45	中世陶磁器，縄文土器，黒曜石出土
9	7.5	50	−	−	190	水田利用のための盛土
10	6	75	Ⅷ	Ⅷ	75	なし
11	6	64	Ⅷ	Ⅷ	64	なし
12	10	40	Ⅷ	Ⅷ	74	なし
13	6	30	Ⅲ	Ⅲ	35	青磁，縄文土器出土

鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　田畑　哲治
文化財研究員　森　幸一郎
調査協力　出水市教育委員会　主査　岩﨑　新輔

第３節　本調査

試掘調査の結果を踏まえ，本調査は平成22年5月10日から平成23年1月28日の期間に実施した。調査組織については，以下のとおりである。

調査体制

事業主体　国土交通省九州地方整備局
鹿児島国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査責任者　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
調査企画者　次長兼総務課長　田中　明成
次長兼南の縄文調査室長　中村　耕治
調査第二課長　井ノ上秀文

	主任文化財主事兼	
	調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
調査担当者	文化財主事	田畑　哲治
	文化財研究員	森　幸一郎
調査事務	総務係長	大園　祥子
	専門員	鳥越　寛晴
調査指導	熊本大学文学部永青文庫研究センター	
	所長	甲元　眞之
	鹿児島大学	
	准教授	本田　道輝
	教授	小林　哲夫

第４節　調査の経過

調査の経過については，日誌抄を月ごとに集約して記載する。

５月

主な調査区　Ｌ～Ｐ－22～27区

調査開始に伴う作業員オリエンテーション。調査区内グリッド設定，レベル移動。Ｌ～Ｐ－22～27区表土除去。

10日　調査開始。環境整備，プレハブ設置，重機・ベルトコンベア搬入。

24日　岩﨑新輔氏（出水市教育委員会）来跡

６月

主な調査区　Ｌ～Ｐ－23～26区

主な遺構　SK４，SK６，SK８（縄文時代の土坑），SI７（中世の方形竪穴建物），SP79（中世の土師器埋納柱穴）を検出。

I･J－17～20区，Ｌ－25区，Ｍ－26区にトレンチを設定し旧石器（Ⅶ層以下）の確認を行う。旧石器時代の包含層及び遺物なし。

Ｏ－20・21区にトレンチを設定し，掘り下げを行う。遺構及び包含層なし。

11日　岩﨑氏来跡

７月

主な調査区　Ｋ～Ｐ－24～27区

主な遺構　SK13（縄文時代の土坑），SB16（中世の掘立柱建物跡）検出。SK４，SI７掘り下げ。

14日　堂込秀人氏（県文化財課）視察

16日　荘小学校５年生11名遺跡見学

22・23日　甲元眞之氏調査指導

８月

主な調査区　Ｋ・Ｌ－23・24区，Ｌ～Ｏ－27～29区

主な遺構　SI19，SI40（中世の竪穴状遺構）検出。近世土壙墓群及び溝状遺構（SD36）検出，掘り下げ。

調査区西端斜面部にトレンチを３か所設定し，掘り下げを行う。斜面貝塚及び包含層なし。

２・３日　調査区西側斜面部の土砂流失対策

９月

主な調査区　K･Ｌ－23・24区，Ｌ～Ｏ－27～29区，Ｔ－33・34区

主な遺構　近世土壙墓群及び溝状遺構（SD36）の掘り下げ。

Ｍ～Ｏ－29・30区，Ｑ～Ｔ－31～34区表土除去。

６日　出水睦雄氏（出水市議会議員）来跡

岩崎氏来跡

10日　小里泰弘氏（衆議院議員）来跡

10月

主な調査区　K･Ｌ－23・24区，Ｌ～Ｐ－24～26区，Ｎ～Ｓ－28～34区

主な遺構　近世土壙墓群及び溝状遺構（SD36）調査終了。SD38（古代の溝状遺構）検出。

５日　後期調査開始

20日　竹中正巳氏（鹿児島女子短期大学）来跡

有川昭人文化財課長ほか１名現地視察

22日　ツル保護対策のため，調査区境界に目隠し用遮光ネットを設置

11月

主な調査区　Ｍ～Ｏ－24～26区，Ｍ～Ｐ－28・29区，Ｏ・Ｐ－31～33区

主な遺構　SI７，SI19，SI40，SB16掘り下げ。SD38検出，掘り下げ。縄文時代後期の土坑及び配石状遺構を検出。

12月

主な調査区　Ｍ～Ｏ－24～26区，Ｏ・Ｐ－31～33区

主な遺構　SD38掘り下げ。縄文時代後期の土坑及び配石状遺構の検出，掘り下げ。

１日　ツル保護対策のため，ブルーシートから文化財保護シートへ変更

10日　空中写真撮影

16日　本田道輝氏調査指導

21日　小林哲夫氏調査指導

１月

主な調査区　Ｉ～Ｌ－16～21区，Ｍ～Ｐ－24～27区，Ｐ・Ｑ－31～34区

主な遺構　SD38掘り下げ。縄文時代後期の土坑及び配石状遺構の検出，掘り下げ。SB67（古代の掘立柱建物跡）及び古代の土坑郡の検出，掘り下げ。

Ｉ～Ｌ－16～21区表土除去。

５日　鳥インフルエンザ予防のため駐車場出入口に消毒槽設置及び消石灰散布

28日　調査終了

第５節　整理・報告書作成業務

１　整理・報告書作成作業の組織

本報告書作成に伴う整理・報告書作成作業は，平成22年度に遺物の洗浄と図面整理等を行い，本格的には平成23年４月から平成24年３月にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センター西回り整理作業所で行った。

整理･報告書作成時に係る組織は以下のとおりである。

調査主体　鹿児島県教育委員会

作業統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所長	寺田　仁志
作成企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第二課長	冨田　逸郎
	主任文化財主事兼	
	調査第二課第二調査係長	鶴田　靜彦
作成担当	文化財研究員	森　幸一郎
	文化財調査員	花田　寛典
事務担当	総務係長	大園　祥子
	主査	岡村　信吾
企画委員	文化財主事	黒川　忠広
調査指導	鹿児島女子短期大学	
	教授	竹中　正巳
	鹿児島大学法文学部	
	教授	本田　道輝

報告書作成指導委員会

平成23年11月22日（火）　次長ほか７名

報告書作成検討委員会

平成23年11月29日（火）　所長ほか10名

２　整理作業の経過

整理作業の経過は以下のとおりである。

平成22年度

２月　図面整理

３月　図面整理

竹中正巳氏調査指導

平成23年度

４月　遺物の洗浄・選別，図面整理，遺構トレース，原稿執筆

５月　遺物の選別・接合・復元，図面整理，遺構図トレース，分布図作成，原稿執筆，石器実測委託，年代測定及び花粉分析委託

６月　遺物の選別・接合・復元，図面整理，遺構図トレース，原稿執筆

７月　遺物の復元・実測・拓本，図面整理，遺構図トレース，原稿執筆

８月　遺物の復元・実測・拓本，図面整理，遺構図トレース，原稿執筆，年代測定及びリン・カルシウム分析委託

９月　遺物の復元・実測・拓本・トレース，遺構図トレース，レイアウト，原稿執筆

竹中正巳氏調査指導

10月　遺物の復元・実測・拓本・トレース，遺構図トレース，レイアウト，原稿執筆

本田道輝氏調査指導

11月　遺物の復元・実測・拓本・トレース，遺構図トレース，レイアウト，原稿執筆，観察表作成

12月　遺物の復元・実測，レイアウト，原稿執筆，観察表作成，写真撮影

１月　校正，遺物・図面等の整理，収納作業

整理作業風景

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

外畠遺跡は，鹿児島県出水市荘上に所在する。出水平野西端の標高約 15m に位置し，紫尾水系の扇状地扇端部を流れる野田川によって形成された，河岸段丘上にある畑地帯に立地している。

現在の出水市は，平成 18 年（2006 年）３月 13 日に出水市と野田町，高尾野町の合併によって発足した。鹿児島県の北西端（北緯 32° 05′，東経 130° 21′）に位置しており，市の北側は熊本県水俣市と接し県境をなす。また，東側は伊佐市，西側は阿久根市，南側はさつま町と薩摩川内市にそれぞれ接している。

出水市の地形は，出水平野を中心に，北東は矢筈岳，南は紫尾山，北西は八代海に囲まれている。

矢筈岳は標高 687.3m の旧期火山であり，全体を構成する岩石は主なものとして，輝石安山岩である。頂上は二つの峰に分かれており，低い方を雌岳，高い方を雄岳と呼称している。この雄岳は，頂上が南北に二つに分かれており，熊本県側から見ると箭の筈のように見えた事が，名前の由来といわれている。

紫尾山は標高 1,066.8m で，九州山地の一部である肥薩地塊の主峰であり，北薩一の高峰である。西縁には花崗閃緑岩が露出しており，南部ではホルンフェルスを形成している。

この紫尾山の名前の由来には諸説ある。その一つが，継体天皇の時代に，僧侶である空覚が，山頂から麓にかけて，紫の雲がたなびいていた様子から名付けたという説である。

また，空覚により，頂上に上宮権現と呼ばれる社が建てられ，山麓には紫尾山祁答院神輿寺と，現在の紫尾神社である紫尾山三所権現が建立された。この社の名前から，別名上宮山とも呼ばれている。

出水市では紫尾山の山麓部を中心に，二種類の丘陵性でなだらかな台地が形成され，高位段丘面となり点在している。一つは，姶良溶結凝灰岩の上にシラスが覆うシラス台地である。出水平野を形成する扇状地の東側に集中して立地している。現在はシラスの採掘が行われており，一部が掘削されている。

もう一つは，不整合なシラス台地の上に砂礫層が堆積している高位段丘面である。扇状地の西側に集中して立地している。近年開発された地域であり，現在は柑橘園が広がっている。

また，出水平野には，矢筈岳や紫尾山系を水源とする多くの河川があり，河川の水域には扇状地が形成される。代表的な河川としては，矢筈岳を水源とするものに米ノ津川が，紫尾山を水源とするものに高尾野川や野田川が挙げられる。

米ノ津川は，矢筈岳山系の黒田山や朝日岳を水源としており，多くの支流と合流しながら出水市を北西に貫流し，八代海へ流入する。

高尾野川は，紫尾山を水源とし，旧高尾野町を北流して八代海に流れ込む。扇状地の中流部では，冬になると伏流水となり，涸川となる事から，古くは水無川と呼ばれていた。

野田川は，紫尾山系の一つである遠矢岳を水源とし，旧野田町の中央部を，いくつかの支流と合流しながら北流する河川である。近世以降，河口部が干拓されたことにより，高尾野川と合流するようになった。

これらの河川が，山間部から平野部に流れ出すことで，流速を低下させ，扇状に展開することによって扇状地が形成される。扇状地の扇側には，河川が蛇行することにより，河岸段丘が形成される。出水市では，松山と野添の二つの地点を頂として扇状地が形成されており，複合扇状地となっている。

扇状地では，河川により流れ出した砂礫により，砂礫層が構成されており，下層にはローム層が堆積している。

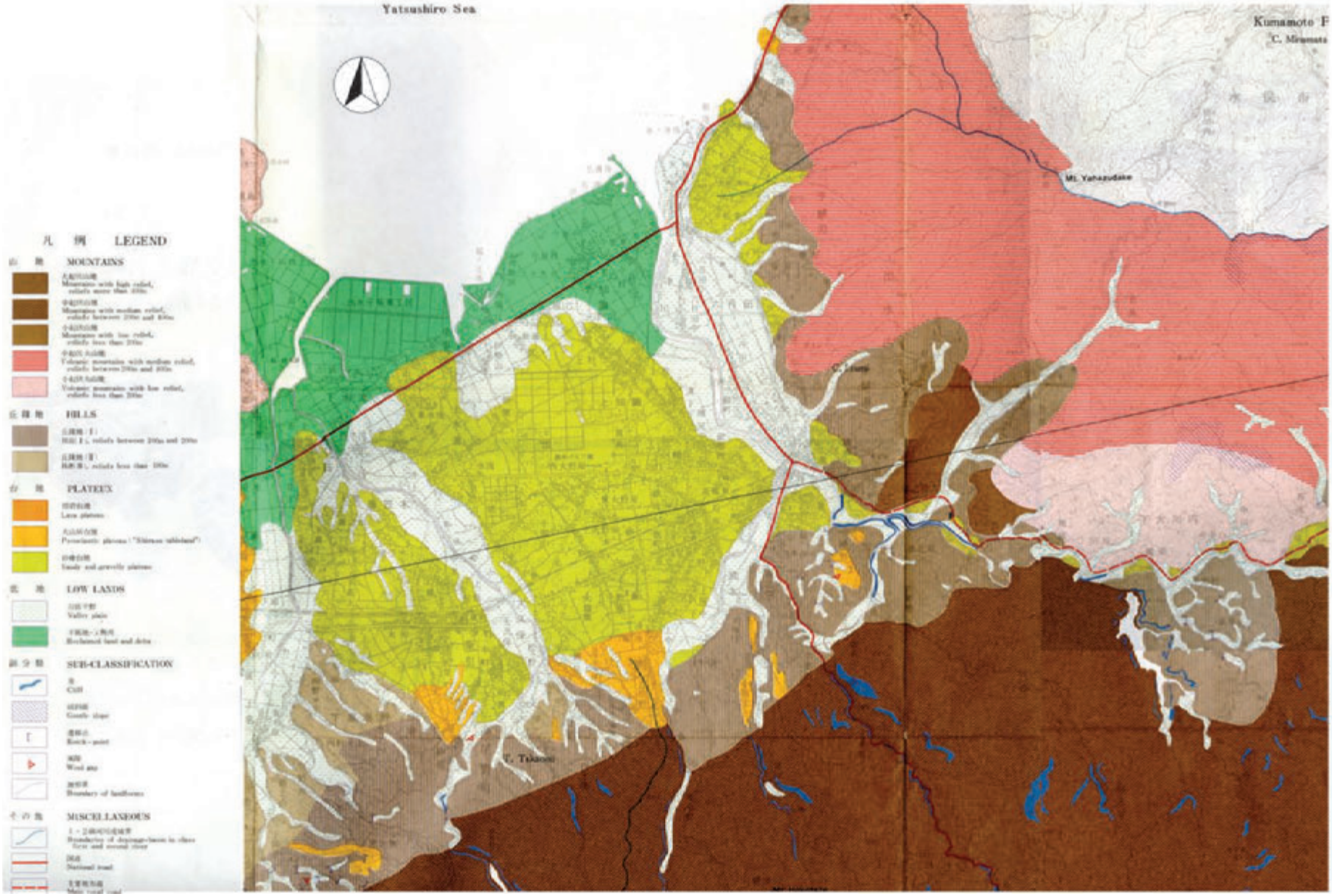
砂礫層で構成されているため，河川は地下に染み込み，ローム層の上を伏流水となって流れている。扇状地扇端部では，河川による侵食等により，河岸段丘が発達し，段丘の崖下は，ローム層が地表面に近くなる。その結果，伏流水の水面が地表に出現し，豊富な湧水がみられる。出水市では，このような地域には，古くから集落が発達している。

河川の下流では，氾濫原が沖積低地を発達させ，県内でも有数の穀倉地帯となっており，広大な水田が広がっている。また，八代海には，近世以降に作られた干拓地が続いており，水田地帯となっている。

出水の干拓地はツルの飛来地としても知られている。毎年 10 月上旬から 11 月上旬頃になると，荒崎の干拓地には，一万羽を超えるツルが飛来し，２月上旬から３月下旬頃まで越冬する。ツル及び飛来地は「鹿児島県のツル及びその渡来地」として，国の特別天然記念物に選定されている。

第２節　歴史的環境

昭和 36 年（1961 年），鹿児島県教育委員会による遺跡地名表作成事業が実施された。出水市では，当時出水高校教諭であった池水寛治氏が調査員として，出水地方の分布調査や発掘調査を行なった。これにより，旧石器時代や縄文時代の重要な遺跡が多数発見されることとなった。



第２図　地形分類図　（1:200,000）

旧石器時代の遺跡としては，上場遺跡や大久保遺跡，狸山遺跡，郷田遺跡，池ノ段遺跡などがあるが，分布は上場高原一帯に集中している。その中でも，旧石器時代の代表的な遺跡として上場遺跡と狸山遺跡が挙げられる。

上場遺跡は，池水氏が分布調査の際に石器を発見し，出水高校考古学部員と共に調査を行ったことで，本県で初めて旧石器時代の遺跡であることが判明した学史的に重要な遺跡である。昭和 40 年（1965 年）の１次調査に始まり，昭和 50 年（1975 年）の５次調査まで行われている。

上場遺跡は，上場高原の小丘陵地に立地しており，旧石器時代から縄文時代草創期までの文化層が６枚存在している。２層下部から３層上部では，細石刃や細石刃核とともに爪形文土器が出土している。これにより，細石刃と爪形文土器が共伴することが判明している。４層上部では２基の土坑が検出されており，旧石器時代の住居として報告されている。５層のパミス混じりのローム層が AT に相当しており，６層は AT 下位に相当する。６層は，さらに上層と下層に分けられ，上層からはナイフ形石器や台形石器，掻器，削器，折断剥片が出土し，下層からは礫器，礫核石器が出土した。

狸山遺跡は出水高校考古学部員によって発見され，池水氏により発掘された遺跡である。２層の上部からは縄文時代前期の曽畑式土器，２層の下部と３層上部からは縄文時代早期の塞ノ神式土器，３層下部からは縄文時代早期の撚糸文土器，４層からは旧石器時代の台形石器や石核，スクレイパーが出土した。このことから，狸山遺跡では，旧石器時代から縄文時代前期にかけて，継続的に生活が営まれていたと考えられ，重要な遺跡である。

縄文時代になると，遺跡の分布域が高台から平野部へと変化する。さらに，扇状地扇端部には，荘貝塚や出水貝塚，江内貝塚といった本県では数少ない貴重な貝塚も発見されている。

外畠遺跡に近接する荘貝塚は，出水市荘に所在し，高尾野川と野田川に挟まれた扇状地扇端の傾斜面に立地する。轟式土器を主体としており，全国的にも数少ない縄文時代前期の貝塚である。

昭和 43 年（1968 年）に発見され，その後昭和 48 年（1973 年）の第１次調査から昭和 63 年（1988 年）の第４次調査まで発掘調査が行われているが，いずれも貝塚の周辺部の調査しかされておらず，貝塚の大部分は現在でも残存している。

第１次調査では，貝塚の北端を確認している。また，縄文時代前期の轟式土器を主体とする貝層（４層）が確認されており，当時の放射性炭素年代測定法によって BP5,496 ± 60 の結果を得ている。

第２次調査では，台地の東側を南北方向に調査が行われた。その結果，貝塚の上層に複数の文化層が発見されたため，貝塚が形成されて以降，この一帯は繰り返し生活が行われていたと考えられている。第３次・第４次調査では，第１次調査と重複する地点の調査が行われた。

調査の結果，貝塚からは巻貝と二枚貝が出土しており，イノシシやシカ，キジなどの動物骨も出土した。また石器では，貝の採取具とされる双角状石器をはじめ，石鏃や石匙などの小型の石器が多量に出土しており，貝塚特有の構成を示している。

出水貝塚は，出水市上知識尾崎に所在し，現在の海岸線から約４km 離れた扇状地の縁辺部に立地する。大正６年（1917 年）に尾崎の台地先端に貝殻や石斧が散布していることが発見され，大正８年（1919 年）の荒田道明氏による踏査により確認された。

大正９年（1920 年）に山崎五十麿氏が試掘調査を行い，調査結果を『考古学雑誌』に発表した。同年，長谷部言人氏を中心に本県で初めて貝塚としての発掘が行われ，出水貝塚と名付けられた。その後，昭和 28 年（1953 年）に河口貞徳氏による試掘調査が，昭和 29 年（1954 年）に山内清男氏を中心に発掘が実施されたが，縄文時代中期の人骨と埋葬遺構が発見された。また，河口氏は出水貝塚出土の深鉢を，出水貝塚を標識遺跡とする出水式土器とし，縄文時代後期に位置づけた。

最近では，平成８年（1996 年）から平成 11 年（1999 年）にかけて，出水市教育委員会によって３度の確認調査が行われた。その結果，貝塚の範囲は台地縁辺部を巡るように，延長約 100m，幅約 30m，面積 3,000㎡であることが判明している。

貝塚以外の縄文時代の遺跡としては，中里遺跡や大坪遺跡，柿内遺跡，下柊迫遺跡，沖田岩戸遺跡などが見つかっている。

大坪遺跡は，出水市美原町に所在し，米ノ津川の東に位置する沖積低地に立地する。九州新幹線建設に伴い，埋文センターによって，平成 10 年（1998 年）に確認調査が，平成 11 年（1999 年）から２年間に渡って本調査が実施された。

調査の結果，縄文時代から近世・近代に至る複合遺跡であることが判明した。縄文時代では，後期末から晩期にかけての上加世田式土器や入佐式土器，黒川式土器が主体をなし，37 基の埋設土器や，多くの玉類が出土しているのが特徴である。

埋設土器は，底部に穿孔がみられる深鉢である。古いタイプのものには，浅鉢が蓋として被せてあるが，新しいタイプのものには，深鉢が蓋として被せられているものが１基みられたが，原則として蓋はみられなかった。この事から，新しいタイプの深鉢には木の蓋が使用されていた可能性を指摘されている。

また，大坪遺跡では多くの玉類が出土している。玉類の出土状況は，上加世田式土器の分布域と入佐式土器の

分布域に分かれており，明確な時期差が見られ，石材や仕上げの有無などに差異が認められる。上加世田式土器に伴う玉類は，透明感のある良質な石材が用いられ，薄手で規格性がみられる。それに対し，入佐式土器に伴う玉類は，濃い緑色の石材が用いられ，大きさや形にバリエーションを持っている。また，大坪遺跡出土の玉類は，完成品の他に，製作途中のものや原石，薄片などが見つかっていることから，玉類の生産遺跡として長期的に存続したと考えられている。

弥生時代になると，遺跡が希薄になる。牟田尻遺跡などの遺跡が発見されているが，遺構や遺物の出土量はごく少量である。

古墳時代になると地下式板石積石室墓（板石積石棺墓）が分布しており，代表的な遺跡として溝下古墳群や堂前古墳群が挙げられる。

溝下古墳群は，出水市文化町に所在し，米ノ津川左岸の河岸段丘上に立地している。溝下古墳群は，地下式板石積石室墓７基，石蓋土坑墓１基などに伴い，多くの副葬品が出土している。特筆すべき点として，短甲や金環が出土している点を挙げられる。それらは，当時の権威の象徴であり，全国的にも大型の前方後円墳など限られた古墳から出土している。これらの資料は地下式板石積石室墓の墓制を解明する上で，重要な資料である。しかしながら，遺構の詳細が不明であるため，遺跡の評価は定まっていない。

８世紀になると，「出水」は文字資料の中に出現する。天平８年（736 年）の『薩麻国正税帳』は，国の基本財政を示すもので，正税の収納，支出を記載していることから，律令制の地方行政及び支配形態を知る上で貴重な資料である。『薩麻国正税帳』は，保管期間を過ぎた後，写経等に再利用されて断片的に残存している。その残書に，出水郡の酒や穀物などの収納や支出に関することや，国司に関することと推定される記載が，17 行確認されている。

初めて「出水」の名が確実に文献に明記されているのは，平安時代初期に編纂された『続日本記』である。宝亀９年（778 年）11 月の条によると，遣唐使が薩摩国出水郡に漂着したとされている。

10 世紀に作られた『和名類聚抄』には，薩摩の郷名が記されており，薩摩国は 13 郡 35 郷から構成されているという。その中で和泉郡は５郷で構成されている。この中の一つである山内郷は，現在の野田や高尾野に位置したとされる。平安時代になると，山門院が設立することで，山内郷は和泉郡から独立した荘園となる。その後，12 世紀になると，鎌倉幕府によって島津荘が成立し，そのため山門院は消滅することになる。

元暦２年（1185 年）８月の『頼朝下文』により，惟宗忠久が島津荘下司職に補任され，初代島津氏となる。忠久は，木牟礼城に守護所を設置し，守護被官である本田貞親を入部させた。

本田貞親は守護所とは別に，出水市野田町屋地に役所を置いたとされている。屋地に所在する中郡遺跡群では，平成 21 年度から，南九州西回り自動車道建設に伴い埋文センターにより発掘調査が実施されている。その結果，中世に該当する堀立柱建物跡や方形堅穴建物等が検出されている。また，遺物では全国的にも出土例の少ない青白磁の龍首水注が出土している。これらの調査結果から，本田貞親が置いたとされる役所と関連の深い施設が想定されている。

木牟礼城は出水市江内に所在し，シラス台地上に立地している。木牟礼城は，亀ヶ岡城や亀井山城と並び，出水市最古の城跡である。現在は残存しておらず，記念碑を残すのみである。木牟礼城は，島津家５代貞久まで薩摩国守護所として守護勢力の拠点となっていた。

建久８年（1197 年）の『薩摩国図田帳』によると，山門院は 200 町あり，その中には，大宰府天満宮の別当寺である安楽寺領老松荘が含まれている。老松荘は現在の荘地区に所在していたと推定されており，24.4 町あるとされている。老松荘は他の薩摩国内の安楽寺領と異なり，地頭が置かれておらず，在地領主がいないことから，領家安楽寺の一円支配であったと考えられる。

承久３年（1221 年）に大宰府から，国司に対して安楽寺領を侵さないように宣旨が出されている。同年には，安楽寺領に対する武士の狼藉を停止するように，幕府からも六波羅下知状が達せられている。以上のことから老松荘も，山門院郡司や守護被官本田氏などの近傍の武士からの侵略を受けていた可能性がある。

外畠遺跡は，出水市荘上に位置し，中世の方形堅穴建物や堀立柱建物跡が発見されている。外畠遺跡は，老松荘の一部，もしくは隣接地として関連の深い遺跡である。

明徳３年（1392 年）に南北朝の統一がなされた後，薩摩と大隅では総州家と奥州家に分かれて，島津氏の内部抗争が起こる。薩摩国を領した総州家の久世は，大隅国を領する奥州家の久豊らと各地で戦った。

永享２年（1430 年）に総州家の久林が，島津忠国によって殺害された。その後，忠国は弟の用久に薩州家を興させ，出水地方を与えることになる。この時に，老松荘もその支配下に入ることで，荘園としては消滅したと考えられている。

その後，戦国期を通して，出水地方では薩州島津家の支配が続く。豊臣秀吉による朝鮮出兵，いわゆる文禄・慶長の役において，薩州家７代忠辰が，島津本家である島津義弘の軍命に背いた。このため，文禄２年（1593 年）５月１日に秀吉の命により薩州家は改易されることとなり，出水郡は豊臣家直轄の蔵入地となった。その結果，大きな混乱が起こり，出水は荒廃したとされている。

秀吉の死後，朝鮮出兵の論功行賞により，慶長４年（1599 年）に出水は島津本家の領地となり，その後江戸幕府が崩壊するまで，出水は島津氏によって支配された。

また，近世を通して出水は，島津藩の 108 外城のひとつであり，いわゆる「麓」として機能していた。その中でも出水の「麓」は最大規模である。現在に至るまで武家集落は連綿と維持され，平成７年（1996 年）に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

昭和 18 年（1943 年）になると，大野原の台地に出水基地飛行場が建設され，海軍航空隊が設置された。出水基地はその後，昭和 20 年（1945 年）に特攻隊の基地となり，200 名以上の隊員が出撃したが，同年の空襲により基地は壊滅する。

現代の出水市は，林業や水産業も行われているが，稲作を中心とする田園都市である。その他，柑橘類の生産や養鶏が盛んに行われている。

主要参考文献

池水寛治ほか 1970「鹿児島県出水市溝下古墳群」『鹿児島考古』５

池水寛治 1974「鹿児島県上場遺跡発見の住居」『鹿児島考古』９

出水市教育委員会 1979『荘貝塚』出水市埋蔵文化財調査報告書 1

出水市教育委員会 1989『荘貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書 3

出水市教育委員会 2000『出水貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書 11

出水市郷土史編集委員会 2005『出水郷土誌』上巻・下巻

鹿児島県企画部土地対策課 1979『北薩地域土地分類基本調査出水』

角川書店 1983『角川日本地名大辞典』

平凡社 1998『鹿児島県の地名』

第２表　周辺遺跡地名（1）

	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
1	竹林城跡	高尾野町江内木牟礼	台地	中世		『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
2	川骨	高尾野町江内	台地	縄文，古墳	土器，成川式土器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
3	木牟礼	高尾野町木牟礼	台地	弥生（後）		
4	木牟礼城跡	高尾野町江内尾崎	台地	中世		『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
5	東笠掛	野田町下名屋地	台地	古墳～中世	成川式土器，土師器，須恵器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
6	中林	野田町下名中林	丘陵地	中世	中世磁器	
7	北山田	野田町下名	台地	近世	薩摩焼，水田跡	平成 21 年度調査
8	六枝	野田町下名六枝	丘陵地	中世・近世	青磁，染付，陶器	
9	中郡遺跡群	野田町下名中郡	台地	縄文（早），中世	土器，土師器，陶磁器	平成 21 年度調査
10	木牟礼城屋形跡	野田町下名屋地ほか	丘陵地	中世	水の手，土塁，折れひずみ	『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
11	大園	野田町下名大園	台地	中世	土師器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
12	山内寺跡	野田町下名中郡	台地	建久７年		
13	木ノ上城跡	野田町下名中郡	丘陵地	中世		『野田町郷土誌』
14	崩上城跡	野田町下名中郡	丘陵地	中世		『野田町郷土誌』
15	感応寺跡	野田町下名八幡	台地	中世（鎌倉）建立		『出水風土記』
16	大畠	野田町下名瀬戸大畠	台地	縄文，中世	溝状遺構，柱穴，縄文土器，土師器，須恵器，陶磁器	『大畠遺跡』野田町教育委員会
17	袋之城跡	野田町下名袋之城	丘陵地	中世	土塁，空堀	『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
18	松ヶ迫Ａ	野田町上名松ヶ迫	丘陵地	縄文，近世	チャート，近世陶磁器	
19	野田畠	野田町下名田多園	台地	縄文～中世	竪穴建物，ピット，晩期土器，土師器，瓦質土器	『野田畠遺跡』出水市教育委員会
20	春	野田町下名下田多園	台地	古墳～中世	成川式土器，土師器，染付	『大畠遺跡』野田町教育委員会
21	松ヶ迫Ｂ	野田町上名松ヶ迫	丘陵地	中世，近世	青磁，近世陶磁器	
22	桜ヶ城跡	野田町下名桜ヶ城	丘陵地	中世	土塁，空堀	『野田町郷土誌』
23	茅迫	野田町下名茅迫	丘陵地	縄文	チャート	
24	城内貝塚	野田町上名城内	山麓緩斜面	縄文，中世	貝層（二枚貝）	
25	亀井山城跡	野田町上名本城	丘陵地	保元平治期	堀，空堀，土塁，ピット	『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
26	新城跡（野田）	野田町上名新城	丘陵地	中世	帯郭，空堀，土塁	『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
27	上名遺跡群	野田町上名	低地	中世	土師器	
28	下名遺跡群	野田町下名	低地	縄文～中世	押型文土器，石鏃，土師器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
29	湯之谷	野田町上名湯之谷	丘陵地	縄文，古墳	チャート，古墳時代土器	
30	藤原	野田町上名藤原	台地	縄文，近世	黒曜石，磨石，近世染付	
31	石倉Ａ	野田町上名石倉	河岸段丘	近世	近世染付，陶磁器	
32	大迫口Ｂ	野田町上名大迫口	台地	近世	近世染付，陶器	
33	石倉Ｂ	野田町上名石倉	山麓緩斜面	縄文，近世	黒曜石，チャート石核，染付	
34	大丸Ａ	野田町上名大丸	山麓緩斜面	縄文，近世	黒曜石，チャート剥片，瓦質土器，近世陶磁器	
35	大丸Ｂ	野田町上名大丸	山麓緩斜面	縄文，近世	磨石敲石，近世染付	
36	大丸Ｃ	野田町上名大丸	台地	縄文	チャート原石，剥片，チップ	

第３表　周辺遺跡地名（2）

	遺跡名	所在地	地形	時代	遺構・遺物等	備考
37	涼松	野田町上名涼松	台地	近世	素焼瓦，近世陶器，染付	
38	丸尾	出水市荘下	扇状地縁辺	縄文，中世	黒曜石，陶磁器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
39	桑水流	出水市荘下	扇状地縁辺	平安，中世	土師器，陶磁器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
40	荘上	出水市荘上	台地	中世（鎌倉）	土師器，青磁	
41	荘上Ⅱ	出水市荘上	台地	古代	土師器，須恵器	
42	田淵	出水市荘下	扇状地縁辺	縄文，古墳	貝殻，土器，須恵器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅶ）』
43	堀ノ内	出水市荘下	扇状地	平安，中世	青磁，土師器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
44	下高尾野	高尾野町下高尾野	台地	弥生（後）		
45	**外畠**	**出水市荘上**	**扇状地扇端**	**縄文～近世**	**土坑，配石状遺構，溝状遺構，方形竪穴建物，土壙墓など 土器，石器，土師器など**	**本報告書**
46	宮田	出水市荘下	扇状地縁辺	平安，中世	土師器，陶磁器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
47	松ヶ角	高尾野町唐笠木	台地	古代	土師器	
48	小村	出水市荘上	扇状地	平安，中世	土師器，陶磁器	『市内遺跡（上場遺跡他）発掘調査等報告書』出水市教育委員会
49	松ヶ野	高尾野町下高尾野	台地	縄文，古墳，中世	貝殻円筒形土器，土師器，青磁，石鏃，打製石斧	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
50	出し道	高尾野町唐笠木	台地	縄文，中世	黒曜石，土器，土師器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
51	諏訪下	高尾野町唐笠木	台地	縄文，中世	貝殻円筒形土器，土師器	『北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書（Ⅴ）東町・高尾野町・平成７年度』鹿児島県教育委員会
52	放光寺	高尾野町下高尾野放光寺	扇状地	縄文～古墳，中世	土器，石器，人骨，土壙墓	『放光寺遺跡』鹿児島県教育委員会
53	新城跡（高尾野）	高尾野町下高尾野新城	河岸段丘	中世	堀，空堀，土塁	『新城跡』高尾野町教育委員会
54	船迫	高尾野町下高尾野高松	台地	縄文～弥生	中期土器，免田式土器	『放光寺遺跡』鹿児島県教育委員会
55	諏訪	高尾野町唐笠木	台地	縄文～弥生		
56	横馬場	高尾野町柴引・唐笠木	台地	縄文～弥生		
57	上石坂	高尾野町下高尾野上石坂	丘陵地	近世	近世陶磁器	
58	柴引遺跡群ａ	高尾野町下高尾野・柴引	台地	縄文～弥生		
59	芥田	高尾野町下高尾野芥田	台地	古代，近世	土師器，近世陶磁器	
60	本迫	高尾野町下高尾野本迫	台地	縄文，古墳，近世	縄文晩期土器，古墳時代土器，近世陶磁器	
61	道上	高尾野町下高尾野道上	台地	近世	近世陶磁器	
62	水天原	高尾野町下高尾野水天原	台地	古墳，近世	古墳時代土器，近世陶磁器，寛永通宝	
63	本城跡	高尾野町下高尾野高城	台地	中世		『鹿児島県の中世城館跡』鹿児島県教育委員会
64	高尾野焼窯跡	高尾野町下高尾野内野ノ下	山麓緩斜面	近世	大型陶器，摺鉢，窯道具	
65	建具堀	高尾野町下高尾野建具堀	台地	古墳，近世	古墳時代土器，近世陶磁器	
66	段の原	高尾野町下高尾野段の原	山腹緩斜面	縄文，近世	敲石，近世陶磁器	
67	青木	野田町上名青木	沖積地	縄文，古代，近世	土師器，近世陶器，黒曜石	
68	上平田	野田町上名上平田	沖積地	古代，中世，近世	土師器，青磁，青白磁，中近世染付，薩摩焼，近世陶磁器	
69	七枝	野田町上名七枝	沖積地	中世，近世	中近世染付，青磁碁笥底，薩摩焼，近世陶磁器	
70	新田	野田町上名新田	沖積地	古代，中世，近世	朱塗土器，土師器，青磁，白磁，中近世染付，近世陶磁器	
71	野角	野田町上名野角	沖積地	古代，中世，近世	朱塗土器，瓦質摺鉢，青白磁，染付，鉄滓，近世陶磁器	
72	覚珍	高尾野町下高尾野覚珍	台地	中世，近世	青磁，近世陶磁器	
73	篭土山	野田町上名篭土山	台地	縄文，古代，中世	土師器，須恵器，土錘，瓦質土器，中世染付，磁器，黒曜石	
74	竹林	野田町上名竹林	台地	縄文，古代，近世	土器，土師器，近世陶磁器，黒曜石	
75	大迫Ａ	野田町上名大迫	山麓緩斜面	近世	鉄滓	
76	大迫Ｂ	野田町上名大迫	台地	縄文，中世，近世	瓦質摺鉢，近世陶磁器，チャート	
77	小野段	野田町上名小野段	河岸段丘	近世	近世陶磁器	
78	笠山Ａ	高尾野町下高尾野笠山	河岸段丘	縄文，古代，近世	黒曜石，チャート，土師器，近世陶磁器	
79	山仁田	野田町上名山仁田	河岸段丘	縄文，中世，近世	中近世染付，黒曜石	

第３図　周辺遺跡位置図（1:25,000）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

１　発掘調査の方法（第４図）

外畠遺跡は，標高約 13 ｍの出水平野を形成する扇状地の扇端に位置する。遺跡の西端は野田川によって形成された河岸段丘となる。野田川を挟んだ西岸の丘陵には，同じく南九州西回り自動車道建設に伴い発掘調査が行われた中郡遺跡群が所在する。

調査区の設定は，２級基準点「基Ⅱ－９」（世界測地系 X=－102038.850，Y=－67893.909，H=17.930）を基準点とし，２級基準点「基Ⅱ－８」（X=－101791.897，Y=－67404.479，H=15.199）を後視点として，解放トラバースを設定し，X・Y 座標値の一の位を０とした地点に測量杭を設定した。調査区は 10 ｍ間隔に東から西へ１，２，３，北から南へ A，B，C との調査区割りを設定した。

発掘調査は，平成 22 年５月 10 日から平成 23 年１月 28 日までの作業員実働 141 日間で実施した。調査対象面積は 10,500㎡である。

調査の方法は，重機（バックホウ）によって表土を除去した後に人力による発掘を進めた。第二節で詳しく述べるが，層堆積は全体的に不安定であり，さらに，遺跡の西側の大部分はシラス（Ⅶ・Ⅷ層）まで掘削を受けている状況であった。また，遺物包含層（Ⅲ層）は，遺跡の東側から中央の一部に残存しているのみであった。そのため，地形測量は，層堆積が比較的良好な部分のみで行い，遺構検出面であるⅣ～Ⅵ層の上面で一括して測量することとした。

Ⅲ層が残存している場合の遺物の取り上げは，遺構に関係のないと判断されるものについては，グリッドごとに一括で取り上げた。その後，層堆積の状況に応じて，Ⅳ～Ⅵ層の上面において遺構の精査を実施した。また，シラスまで掘削を受けている地点においても，表土直下での遺構の検出を試みた。

M・N－16～19 区及び L～P－20・21 区，調査区西端の河岸段丘面（O～T－34・35 区）については，トレンチ調査の結果，遺構及び包含層が確認されなかったため，全面調査は行わなかった。

旧石器時代の遺物包含層の有無を確認するために，層堆積が比較的良好な地点を選んでトレンチを設定し，Ⅶ～Ⅷ層まで掘り下げを行ったが，包含層及び遺物は確認されなかった。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構については，遺構の種類に関わらず検出された順に遺構番号を付与し，遺構種類の略号と組み合わせたものを遺構名称として用いた。また，調査の過程で遺構でないと判断したものについては欠番とした。

遺構は，概ね２ｍ四方以上のものを方形竪穴建物・竪穴状遺構と認定し SI の略号を用いた。２ｍに満たないものについては，土坑として取扱い SK の略号を用いた。なお，土坑のなかで土壙墓と判断されるものには ST の略号を用いた。50cm に満たないものについては柱穴と判断した。掘立柱建物跡には略号 SB を用い，構成する柱穴には建物ごとに P と番号を組み合わせた名称を与えた。それ以外の柱穴については遺構配置図に記録した後に掘り下げを行い，遺物が出土したものには SP の略号を用いた。また，石器や礫がまとまって検出されたが，掘り込みを確認できなかったものは配石状遺構とし，SX の略号を用いた。

外畠遺跡では，遺構検出面であるⅣ～Ⅵ層の上面で縄文時代後期から中世までの遺構が混在した状況で検出された。遺構は，出土遺物と埋土によって，黒褐色土のものを中世，灰褐色土のものを古代，褐色から暗褐色土のものを縄文時代後期と判断した。

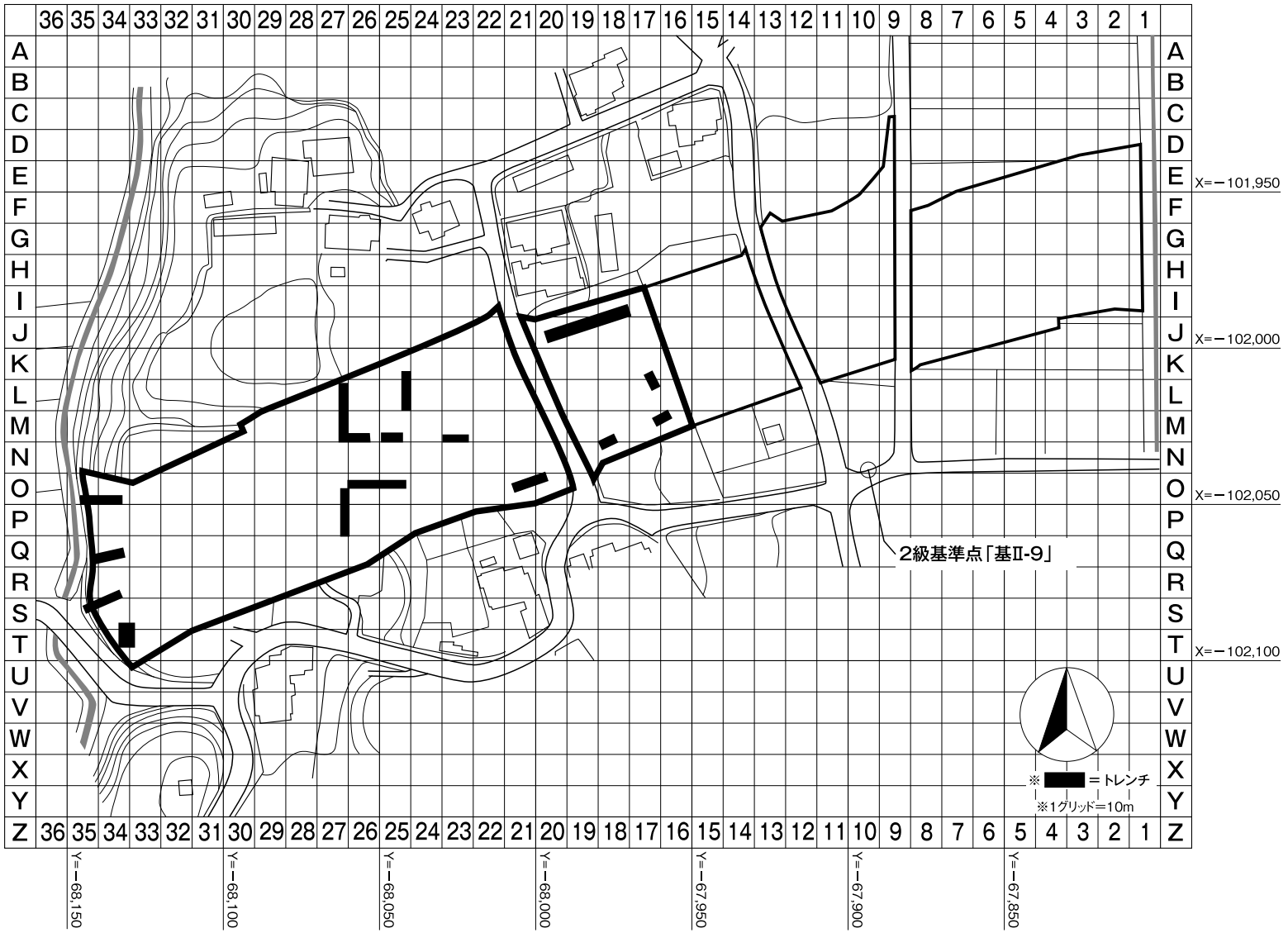
遺構の調査は，検出状況の写真撮影・実測を実施した後に，土坑については半截，方形竪穴建物・竪穴状遺構については土層観察用のベルトを十字に設定し，４分の１区画ずつ掘り下げた。遺構の性格・状況に応じて遺物出土状況の記録作成や取り上げ，土層堆積状況の記録等を行った。遺構の認定については，埋土の状況や床面の状態，遺物出土状況等を基に判断した。

遺物の取り上げは，各時代を共通して土器の小破片については，掘り下げ時に，グリッドごとに一括で取り上げた。大型の土器片や石器類については検出面での遺物出土状況を観察し，遺構の検出を行った後，遺構に関係の無いと判断されるものについてはグリッドごとに一括で取り上げを行った。

３　整理作業の方法

遺物の水洗いは平成 22 年度中にその大半を実施し，残りを平成 23 年度に実施した。水洗作業の方法は，土器や陶磁器類，礫石器類に関してはブラシを用いたが，黒曜石や安山岩製の剝片石器類については超音波洗浄機を用いた。

注記は，注記記号「H ハタ」を頭に，包含層・表土から出土した遺物には続けて「区」，「層」の順番で記入した。遺構から出土した遺物については，「H ハタ」に続いて「遺構名称」，「取り上げ番号」を記入した。なお，土器の爪先大の小破片や摩滅の著しいものについては注記を省略した。



第４図　グリッド配置図・トレンチ配置図

遺物の接合は，土器類と陶磁器類を中心に行った。まず，土器類と陶磁器類の抽出・分類を行い，種類ごとに同一遺構内，同一グリッドでの接合作業を行い，徐々に接合範囲を広げていった。文様や胎土が特徴的なものに関しては適宜抽出して接合を行った。石器類については，石皿の破片のみ接合を行った。

4　出土遺物の分類について

(1)　土器類・陶磁器類

外畠遺跡では，包含層の残存状況が悪く，さらに沖積地という遺跡の立地状況から，縄文時代から近代に至る遺物が混在する状況で出土した。そのため，出土遺物の大部分については，整理作業の段階で時代・時期の判断を行った。分類については，各時代・時期に選別した後に行った。分類の視点・基準は時代・時期ごとに異なり，各節に詳しい。

(2)　石器類（第４・５表）

石器及び石材の分類は第４・５表のとおりである。石材の分類は肉眼観察を基本として，質感・不純物の混入具合等をもとに分類した。

剥片やチップ類については，石材の細分・石材産地の推定を可能なものはそれを行い，それぞれの出土量を重量で計測した。

第２節　層序

外畠遺跡の基本層序は第５図のように整理した。外畠遺跡は扇状地の扇端に立地し，土層の堆積状況が全体的に悪い。遺跡内における傾向として，東から西に向かって堆積はより不安定になる。なお，分層及びテフラの認定については，小林哲夫氏の指導を受けた。

Ⅱ層は黒褐色でしまりがない。斜面や凹地などごく一部にのみ堆積が確認された。

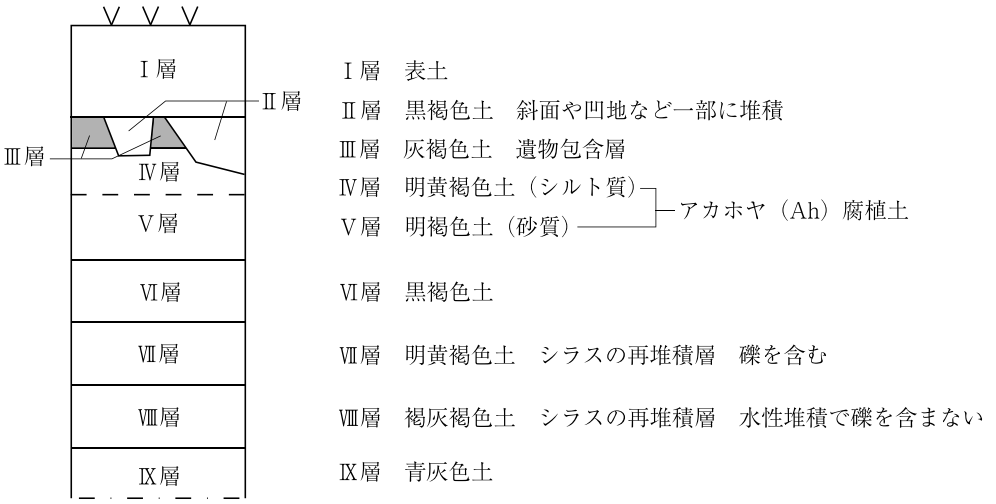
Ⅲ層は遺物包含層である。灰褐色でしまりがよい。縄文時代から中世までの遺物が混在していた。調査区の東側から中央部にかけての一部にのみ堆積が確認された。

Ⅳ層及びⅤ層はアカホヤ火山灰（Ah）の腐植土である。本来は同一のものであるが，調査区で土質が異なり，調査区の東側のシルト質のものをⅣ層，中央から西側の粒子が粗い砂質のものをⅤ層と区別した。

Ⅵ層は黒褐色で地点によって土質が異なる。調査区の西側ではしまりのないシルト質で，調査区の中央付近では粘性が強く，よくしまる。

Ⅶ層は明黄褐色の砂質で，１～３cm 程度の礫を含む。シラス（入戸火砕流由来）の再堆積層である。Ⅷ層はシラス（入戸火砕流由来）の水性堆積で，礫を含まない。

Ⅸ層は青灰色のシルト質で，粘性が非常に強く，とてもよくしまる。また，Ⅷ層とⅨ層の境界で湧水がみられる。



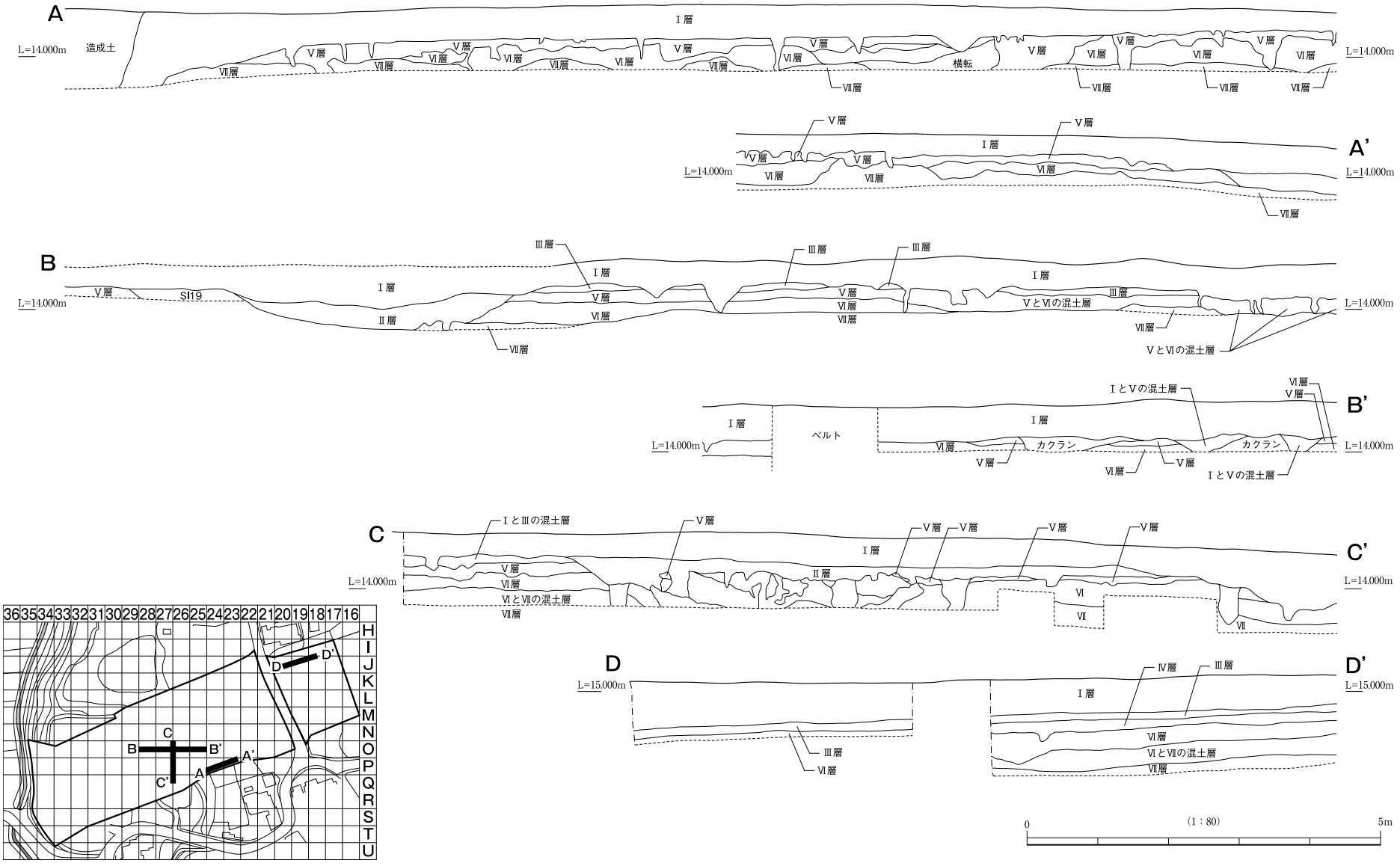
第５図　基本層序

第４表　石器分類表

器種	分類		概要
剥片石器	石鏃		剥片を素材として両側縁部に押圧剥離を施してある小型から中型の三角形状の石器群を石鏃とした。
		1	全体の形状がほぼ正三角形
		2	全体の形状がほぼ二等辺三角形
		3	全体の形状がほぼ五角形
	スクレイパー		剥片の素材などに二次加工を行い，刃部整形を施してあるものをスクレイパーとした。
	石匙		スクレイパーにつまみ部を作り出したものを石匙とした。
	楔形石器		ピエス・エスキーユとも称される。表面観は方形で，上縁端部及び下縁端部は直線的でほぼ平行に位置する。刃部断面観が凸レンズ状に鋭角をなす。基部及び刃部には使用による微細剥離痕が両面に観察される。
	ドリル		穿孔あるいは穿穴に使用された加工道具。つまみ部と棒状の錐部を有し，主要剥離面や礫皮面をつまみ部とするものなどがある。
石核			剥片石器素材の剥片を採取した残存石材。
石製品			上記石器に該当せず，用途が不明なもの。
礫石器	磨製石斧		礫に剥離調整や敲打調整を加えて形を整え，砥石で磨いた斧型の石器。 縄文時代以降に盛行するが，旧石器時代にも刃部の一部を磨いた局部磨製石斧や刃部磨製石斧がみられる。
	打製石斧		縄文時代後期以降に盛行する。形態的には短冊形，撥形，有肩形などがある。扁平な礫の周縁から剥離調整で加工される。
	磨石・敲石類		礫を素材とし，磨面・敲打痕・凹みのいずれかを有する。複数の機能を併せ持つものもある。
	石皿・台石		大礫を利用し，磨面・凹面を有する。周縁を敲打整形したものもある。
	砥石		礫を利用し，削痕が確認されるもの。
	石錘		左右一対の抉り部を有する。抉り部以外の側面に敲打痕等は確認できない。

第５表　石材分類表

器種	分類	概要
黒曜石	1	黒色のガラス質で，不純物が多く，光を通す黒曜石である。伊佐市日東周辺で産出する黒曜石に比定される。
	2	飴色のガラス質で，不純物をほとんど含まない良質の黒曜石である。伊佐市から熊本県人吉市の桑ノ木津留で産出される黒曜石に比定される。
	3	漆黒の弱ガラス質で不純物を含み，光を通さない黒曜石である。薩摩川内市樋脇町上牛鼻周辺で産出する黒曜石に比定される。
	4	黒色のガラス質で，不純物をまったく含まない良質の黒曜石である。佐賀県伊万里市腰岳で産出する黒曜石に比定される。
	5	黒色ガラス質で，白い小さな粒子が多く含まれ，ややざらつき感がある良質の黒曜石である。産地の推定は難しいが，県内産ではなく，西北九州産と推定される。
	6	青灰色の弱いガラス質で，不純物の少ない良質の黒曜石である。長崎県佐世保市針尾周辺で産出する黒曜石に比定される。
	7	灰白色の弱ガラス質で，ややざらつき感のある黒曜石である。大分県姫島村で産出する黒曜石に比定される。
安山岩	1	一般的な安山岩。輝石や石英，角閃石を多く含み，基質はややざらついた質感を呈する。
	2	一般的な安山岩に比べ，青灰色を呈する。
	3	一般的な安山岩に比べ，多孔質である。
蛇紋岩		緑色を基調とし，白色の斑紋が入る。
頁岩		泥や粘土の固結した岩石で，平行な平面で割れる傾向がある。黒色のものが多いが，褐色系の色のものもある。非常に細粒で，肉眼では粒子の識別が出来ないものが多い。粒度均質。さびが付着するものもある。
砂岩		砂粒・石英粒が集合して固まった堆積岩の一種。
ホルンフェルス		硬質化が著しく，鉱物が相累なって帯状もしくは斑状を成すもの。
チャート	1	灰色に黒い縞状を呈する。
	2	白色を呈する。


A
L=14.000m
造成土
Ⅰ層
Ⅴ層
Ⅵ層
Ⅶ層
横転
A'
B
Ⅲ層
Ⅱ層
SI19
ⅤとⅥの混土層
B'
ベルト
カクラン
ⅠとⅤの混土層
C
ⅠとⅢの混土層
ⅥとⅦの混土層
C'
D
L=15.000m
Ⅳ層
D'
0
(1：80)
5m

36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16
H I J K L M N O P Q R S T U
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'

第６図　土層断面

第３節　調査の成果

１　縄文時代の調査

（1）　調査の概要（第７・８図）

縄文時代の調査は，主にＭ～Ｐ－23～28区で行った。第２節で述べたとおり，調査区全体の層堆積が非常に不安定で，残存状況も悪かった。そのため，遺構の検出は，Ⅲ層が残存している地点ではⅢ層直下で行い，それ以外の地点では表土直下で試みた。ほとんどの遺構は表土直下で検出された。

Ⅳ層以下の堆積状況も均一ではないため，遺構の検出は調査区の堆積状況に応じて行った。遺構検出面はⅣ層，Ⅴ層，Ⅵ層のいずれかということになる。このことは，古代及び中世の遺構についても同様のことを指摘できる。したがって，外畠遺跡に関しては各時代の生活面から下層で遺構を捉えていることになる。

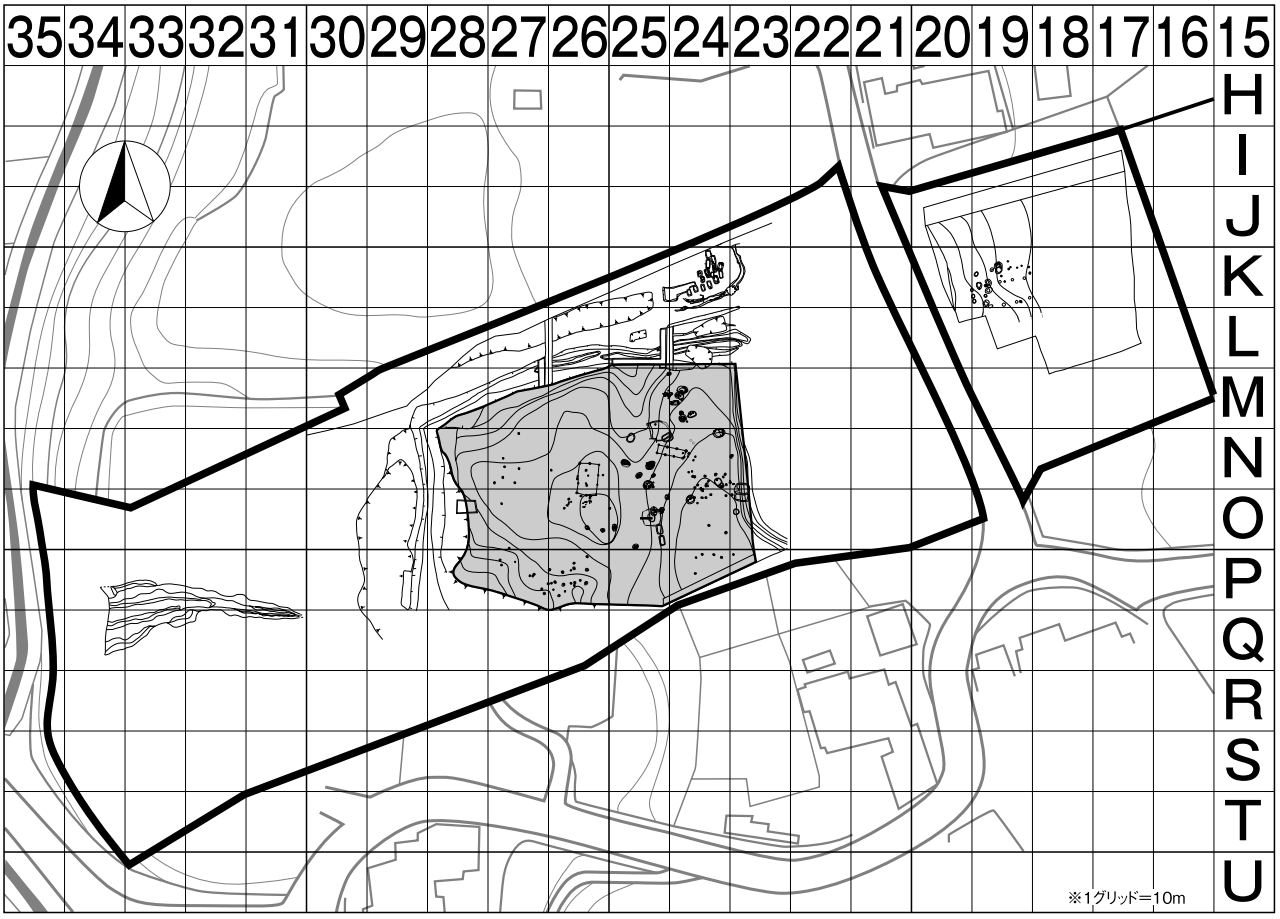
調査区の西側はシラスまで掘削を受けており，縄文時代の遺構を確認することはできなかったが，古代の溝状遺構（SD38）の埋土中から縄文時代の土器と石器類が多量に出土しており，縄文時代の遺構は調査区全体に拡がっていた可能性を示唆している。

縄文時代の遺構埋土は，褐色から暗褐色であり，土色・土質ともにⅣ～Ⅵ層に非常に類似しており，検出作業は困難を極めた。遺物や礫の散布状況を参考にし，遺構の存在の可能性がある地点では，わずかな土色・土質の違いを頼りに平面プランを推定した。平面プランが不明瞭なものについては，先行してトレンチを設定し，掘り込み等の有無の判断を行った。

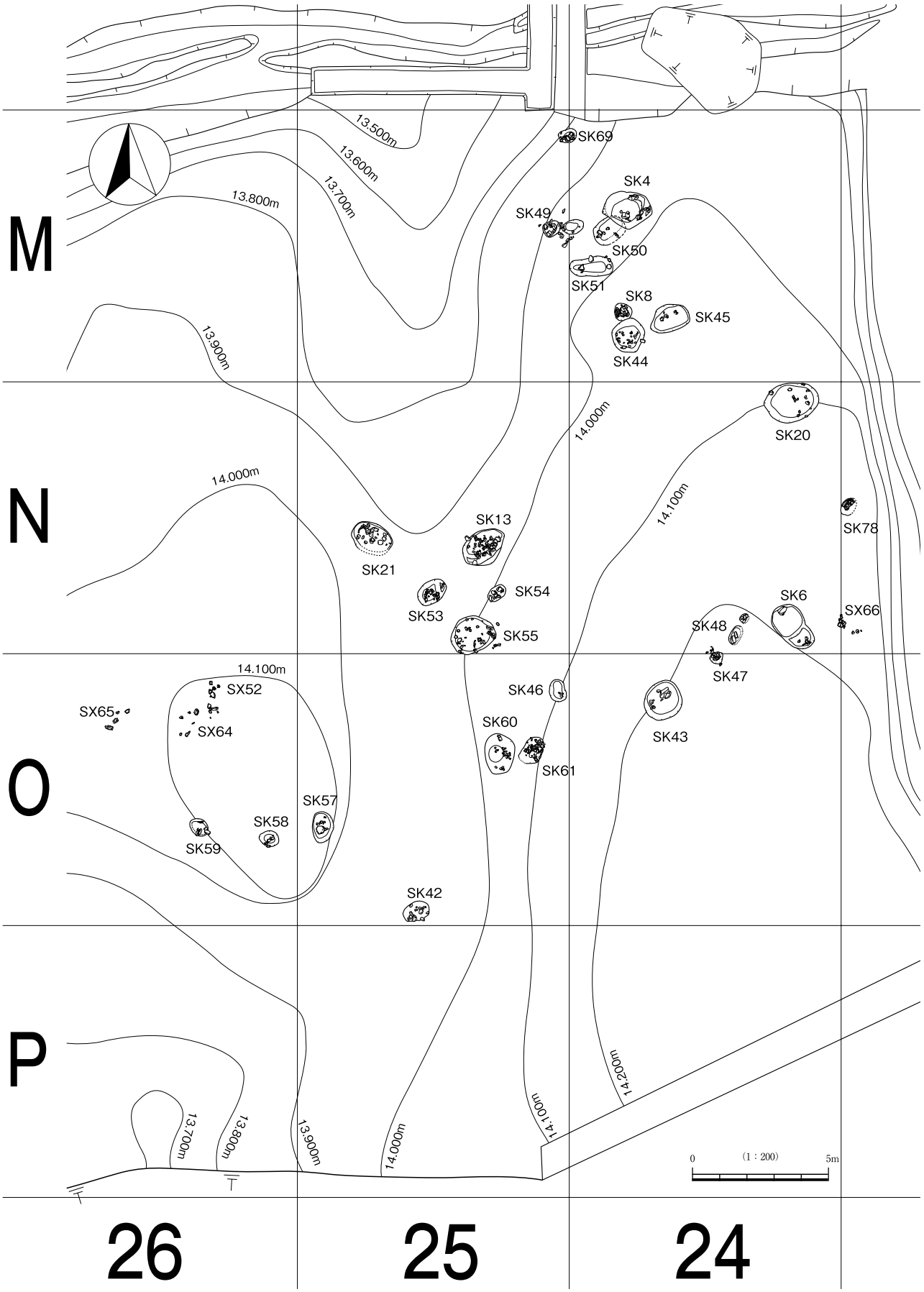
最終的に土坑26基，配石状遺構４基を検出することができたが，検出できなかった遺構もあると考えられる。

遺構の調査は，各時代を共通して，検出状況の記録写真を撮影し，必要に応じて検出状況の実測を行った。その後，半截もしくは土層観察ベルトを設定し，埋土の堆積状況を観察しながら掘り下げを行った。土坑の床面の判断は，埋土堆積状況の変化や埋土に含まれる炭化物の有無，硬化面等の把握に依った。床面の不明瞭なものについては，完掘後に断ち割りを行ったものもある。

遺構の配置状況は第８図のとおりである。検出された遺構は土坑と配石状遺構であり，住居跡や集石などは検出されなかった。ほとんどの土坑は石皿等の石器類や自然礫を伴っており，それが遺構検出や認定の大きな手がかりとなった。



第７図　縄文時代の調査範囲（アミの範囲）



第８図　縄文時代の遺構配置図

（2） 遺構

ア　土坑

土坑は 26 基検出された。全てⅤ層もしくはⅥ層上面での検出である。土坑にはいくつかのパターンがみられ，以下のように４つに分類した。

１類　石皿・台石の完形品ないし大型の破片，あるいは扁平な大型の礫を伴うものを１類とした。比較的掘り込みがしっかりしているものが多い。埋土に含れる土器片が少ないものと，大型の破片を含むものの２パターンがみられる。

２類　２類は，掘り込みはある程度深く，しっかりしているが，１類とは異なり石皿・台石を含まない。遺物が豊富に出土する。

３類　掘り込みが浅いものを３類とした。石皿・台石の破片を伴うものが多い。

４類　小型のものを４類とした。

ただし，上述のように，遺跡の残存状況が悪いため，本来の形状に即した分類ではない可能性がある。

（ア） １類

１類の土坑は９基検出された。ただし，SK59 については，３類に含めた方が良いかもしれない。

SK4（第９～ 12 図）

検出状況　SK ４は，M － 24 区のⅤ層上面で検出された。遺構は中世の土坑（SK10・SK15）及び縄文時代の土坑 SK50 に切られる。さらに，中央から南西側は植物による撹乱を受ける。

切り合い　調査当初は単一の土坑であると考えていたが，埋土の堆積状況から，埋土１～３までの土坑Ｂと，埋土５・６の土坑Ａの二つの土坑が切り合っていると判断した。

埋土　埋土は褐色から暗褐色を呈し，シルトから砂質で，Ⅳ層及びⅤ層に類似する。土坑Ａの埋土の方が，土坑Ｂのものと比較して粘性が強くよくしまる。

形状・規模　平面形は土坑Ａ・Ｂともに楕円形であったと想定される。規模は現状で，長軸 147cm，短軸 145cm，検出面からの深さ 32cm である。想定される土坑Ｂの規模は，長軸約 120cm，短軸約 110cm である。

遺物　遺物は，完形の小形壺形土器が１点，石皿・台石が３点，土器の小破片が 10 点，礫 12 点，黒曜石チップ１点が出土した。出土状況から小形壺形土器（１）と石皿・台石（８）は土坑Ｂに伴うものであり，磨石・敲石類（４・５）及び石皿・台石の破片（６・７），礫は土坑Ａに伴うものであると判断した。土器３点，石器５点を図化した。

土器　１は小形の壺形土器である。色調は浅黄色を呈し，胎土に１～３mm 程度の白色の鉱物を含む。大きさは，器高 9.3cm，口径 4.7cm，頸部の最大径 7.4cm，胴部の最大径 10.6cm である。口唇部は幅 1.5cm 程度で平坦に作り出される。器壁は厚く，底部が 2.0cm，胴部が 1.0cm 程度である。胴部は球形に近い形状をしているが，胴部の張り出す高さは一定ではなく，器形は歪む。面Ａは，器面の調整が丁寧で，張り出した部分の稜がはっきりしている。面Ｂ・Ｄから面Ｃに向かい，器面の調整が雑になり，張り出しの稜が不明瞭になる。

口唇部及び胴部全体に，幅１～３mm の沈線で文様が描かれ，さらに刺突による擬似縄文も施される。口唇部の沈線文は，内から外に向かって鋸歯状の文様構成となる。頸部には，径が最小となる箇所に横方向の沈線が１周巡るが，沈線は最低７回に分けて施されている。

胴部は，面Ａでは直線と曲線を組み合わせた抽象的な沈線文が描かれるが，面Ｂ～Ｄでは直線的な沈線２本１組を基本とし，菱形あるいは渦巻き状の文様が構成される。底部にも沈線が数本みられるが，文様は構成していない。

擬似縄文に規則性は確認できないが，菱形状の沈線文の中心付近に径２mm 程度，深さ１～２mm で他の擬似縄文と比較して大きく深い刺突が行われる箇所がある。

胎土及び器面の調整，施文方法，文様構成から，縄文時代後期の磨消縄文系土器の影響を受けたものであると判断される。なお，第 10 図の実測図では，表現が煩雑になるため，擬似縄文は省略した。

２は土坑Ｂ埋土２から出土した。胎土中に１～３mm 程度の白色の鉱物を含み，胎土は１のものと類似する。口縁を肥厚させ，口唇部に刻目状の沈線が施される。また，肥厚した口縁部が薄くなり胴部へと変化する箇所には，刺突状の痕跡もみられる。３は深鉢の底部である。検出面出土のものと接合したため混入の可能性がある。

石器　４・５は砂岩製の磨石・敲石類である。４は被熱により破砕している。４・５ともに表裏両面に磨面が認められ，側面には敲打痕が観察できる。４の裏面は，中央付近が凹む。

６～８は石皿・台石である。６は砂岩製である。表面中央部に凹凸のなめらかな面が，その周辺にざらざらした粗い面が残されている。中央部のなめらかな面は凹部にも及んでいるため，単純な磨り作業によるものと断定できない。７は安山岩製で，約４分の３が欠損している。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。使用面には顕著な光沢は認められないものの，明確な凹みがある。

８は安山岩製であり，欠損している。表面中央には使用による浅い凹みがあり，結果左側縁と前方に縁が残っている。右側縁は欠損しており，縁の有無は不明であるが，手前には縁は見られない。

SK6（第 13・14 図）

検出状況・切り合い　SK 6 はＮ－ 24 区のⅤ層上面で検出された。SK 6 も調査当初は単一の土坑と想定していたが，埋土堆積状況から，埋土１と埋土２のそれぞれが個別の土坑であると判断した。埋土は褐色から暗褐色で，シルト質である。

形状・規模　現状での平面形は，南北に長い楕円形で，規模は長軸 192cm，短軸 115cm である。検出面からの深さは，埋土１で 29cm，埋土２で 18cm である。断面形は，埋土１の土坑は，床面はほぼ平坦で，壁面の立ち上がりが明瞭で箱形となる。埋土２の土坑の断面形は，すり鉢状になると想定される。

遺物　遺物は，土器片 44 点，石器３点が出土した。土器片は小破片で摩滅しているものが多い。土器４点，石器３点を図化した。

土器　９～ 11 は口縁部である。９は表面が摩滅している。口縁部が断面三角形で，市来式土器系の土器である。10・11 は埋土１から出土した。10 は，口縁部が断面三角形で，大きく開く。口唇部には刻目状の刺突文が施され，口縁部直下には，幅１mm 程度の沈線文が巡る。11 は，色調がにぶい黄色を呈する。胎土は１～３mm 程度の鉱物を含み粗粒だが，内外面には丁寧なナデが施されていて，非常にきめ細かい。口唇部を平坦にして，刻目状の沈線文が施される。12 は深鉢の胴部で，埋土２から出土した。

石器　13・14 は埋土２から出土した。13 は安山岩製の磨石・敲石類である。表裏面に磨面が形成される。14 は頁岩製の打製石斧である。刃部及び基部の一部が欠損している。剥離により器体の整形を行っている。

15 は安山岩製の石皿・台石である。検出面に一部露出し，埋土１から立位で検出された。表面は真っ平らで，使用による光沢が高い部分にのみ確認される。片側の側縁には表面側からの連続する剥離痕が観察される。

SK8（第 15 ～ 17 図）

検出状況　SK8 はＭ－ 24 区のⅤ層上面で検出された。SK44 が南側に位置していて，南側の一部は SK44 に切られる。

形状・規模　平面形は円形で，長軸 67cm，短軸 64cm，検出面からの深さ 20cm である。断面形はすり鉢状になる。他の１類と比較して小型である。

埋土　埋土は褐色で，しまりがない。

遺物　遺物は，大型の石皿・台石１点と縄文土器 20 点が出土した。検出状況は，石皿･台石は横位で検出され，その上と西側に土器が重なり合うように検出された。土器９点と石器１点を図化した。

土器　16・17 は，口縁部が肥厚し文様帯を形成する。16 は，口唇部は面取りされ平坦で，刻目状に沈線が施される。18 は，口縁部が外反する。外面に磨消縄文あるいは擬似縄文と考えられる痕跡が観察されるが，摩滅していて断定はできない。色調と胎土が 24 と類似する。

19 は市来式土器系の台付皿形土器の口縁部である。表面の摩滅が著しい。20 は器壁が薄く，胎土が層状を呈する。器面には丁寧なナデが施され，きめ細かい。詳細は不明である。21・22 は深鉢の胴部である。21 は大型の深鉢だが，器面の摩滅が著しく詳細は不明である。21 は，色調が橙色を呈する。23 と同一個体の可能性がある。

23 は，深鉢である。色調は橙色を呈する。口縁部はやや肥厚し，断面三角形となり，わずかに内側に屈曲する。口縁は波状になり，波頂部のほうが肥厚が大きい。口唇部には深さ２mm 程度の２本の沈線文が施される。口縁部の形態や，施文方法は松山式土器に類似する。

24 は磨消縄文系土器の鉢である。胴部下半は無いが，色調がにぶい黄色を呈し，胎土が同一であること，それが他に余りみられないこと，同一の土坑からまとまった状態で出土したことから同一個体と判断し図のように復元した。胴部下半は外傾し，胴部の張り出し部に沈線文と磨消縄文，「J」の字状の渦巻状の文様が施される。鐘崎式土器の可能性が高いが，鐘崎式土器の典型的な文様ではないことを本田道輝氏に指摘された。

石器　25 は安山岩製の石皿・台石である。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。特に片側側面の赤化は２～３mm の厚さに及んでおり，顕著である。いくつかに破砕しているが，被熱によるものと考えられる。使用による光沢が表面の高い部分にのみ確認され，凹みはない。

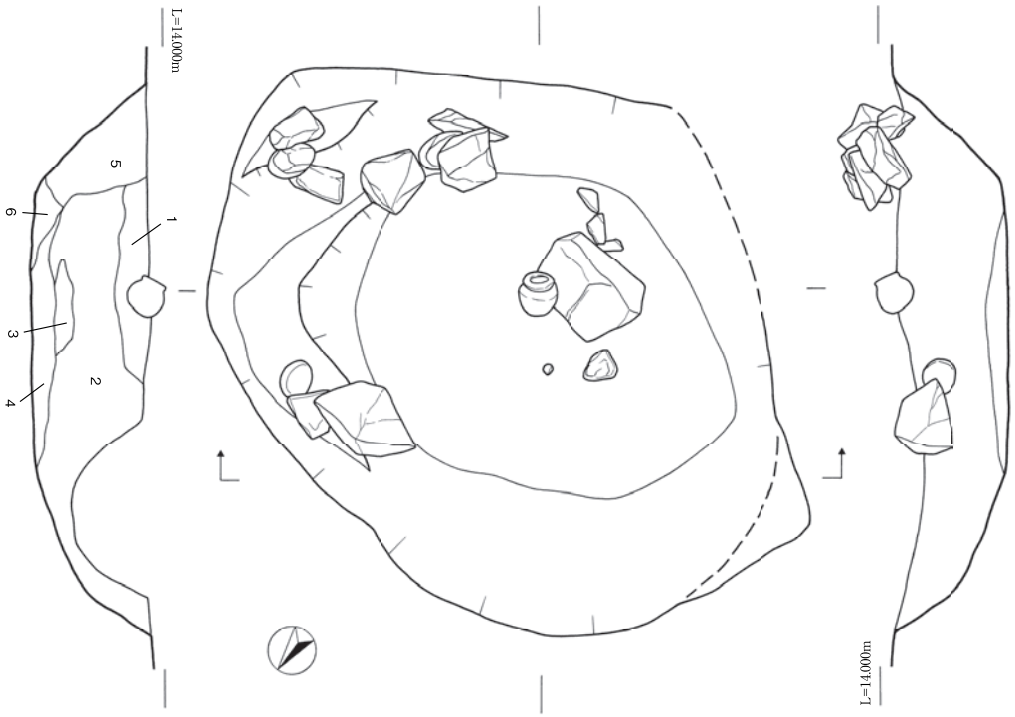
SK55（第 18 ～ 20 図）

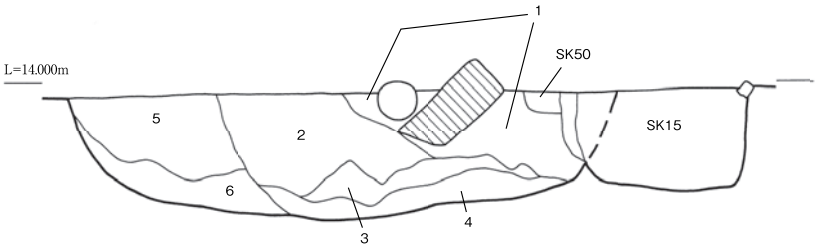
検出状況　SK55 はＮ･Ｏ－25 区，Ⅵ層上面で検出された。検出状況は礫や土器片が散乱している状況であった。平面形が不明瞭であったため，礫等の検出状況の記録作成後，長軸に沿ってトレンチを設定し，掘り込みの有無及び埋土の堆積状況の確認を行った。

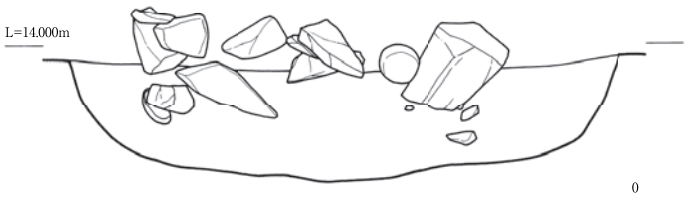
形状・規模　平面形は南側が凹んだ円形で，規模は長軸 163cm，短軸 132cm，検出面からの深さ 28cm である。床面が平坦で，壁面の立ち上がりが比較的明瞭で，断面形は箱形となる。

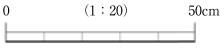
埋土　埋土は２層に分層され，床付近に暗褐色土が，その上にしまりのある褐色土が堆積していた。

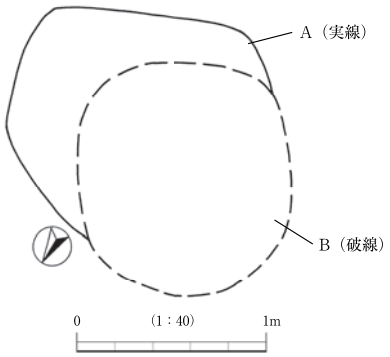
遺物出土状況・撹乱の範囲　遺物は土器片 25 点，石器５点が出土した。検出面の遺物には，縄文時代晩期の土器片や土師器が含まれていた。第 18 図の遺物出土状況のように，晩期の土器片と土師器片が出土したレベルは L=14.000 ～ 14.100m の範囲に限られる。それは検出面付近で散乱していた礫のレベルと一致する。







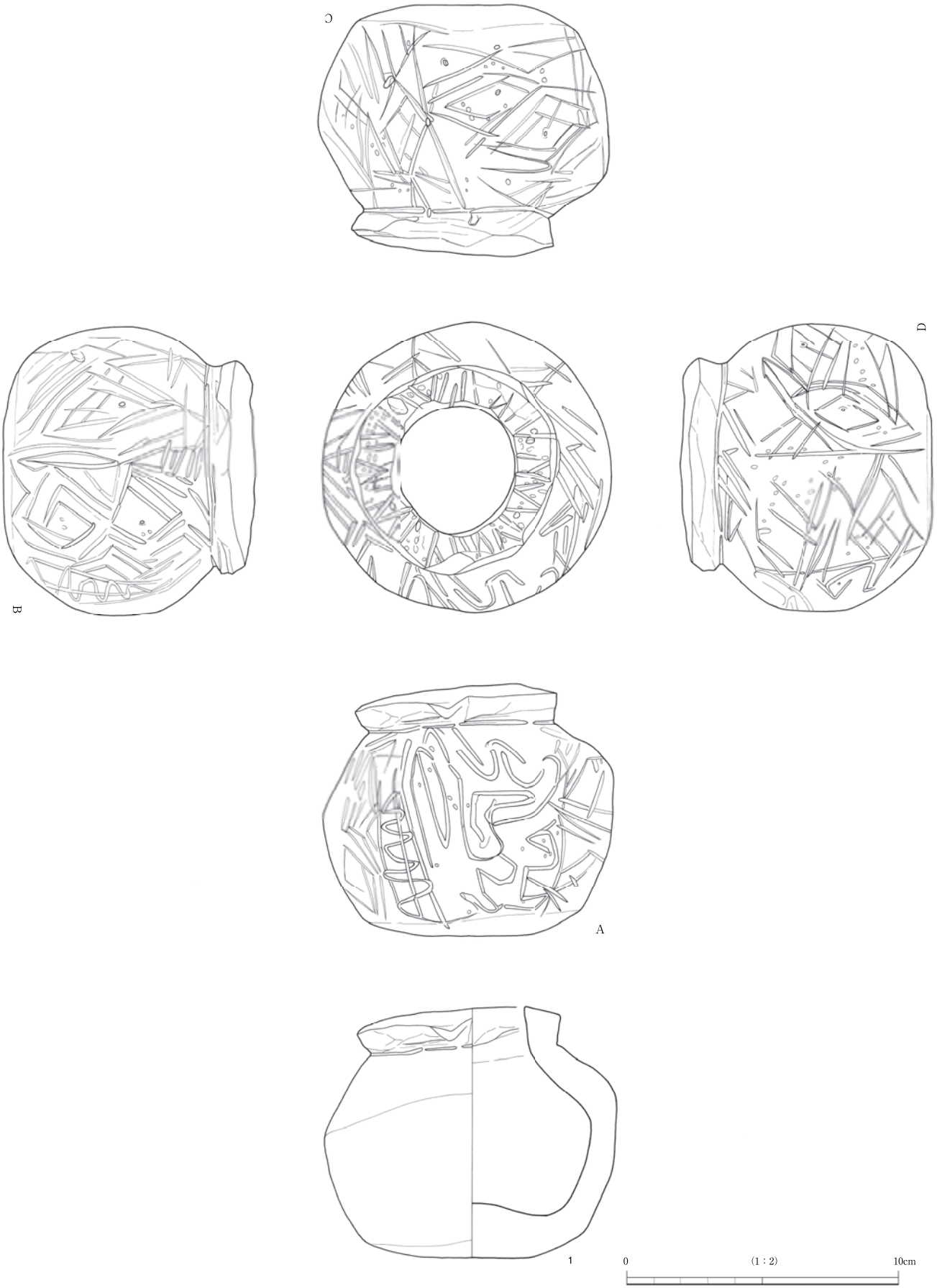




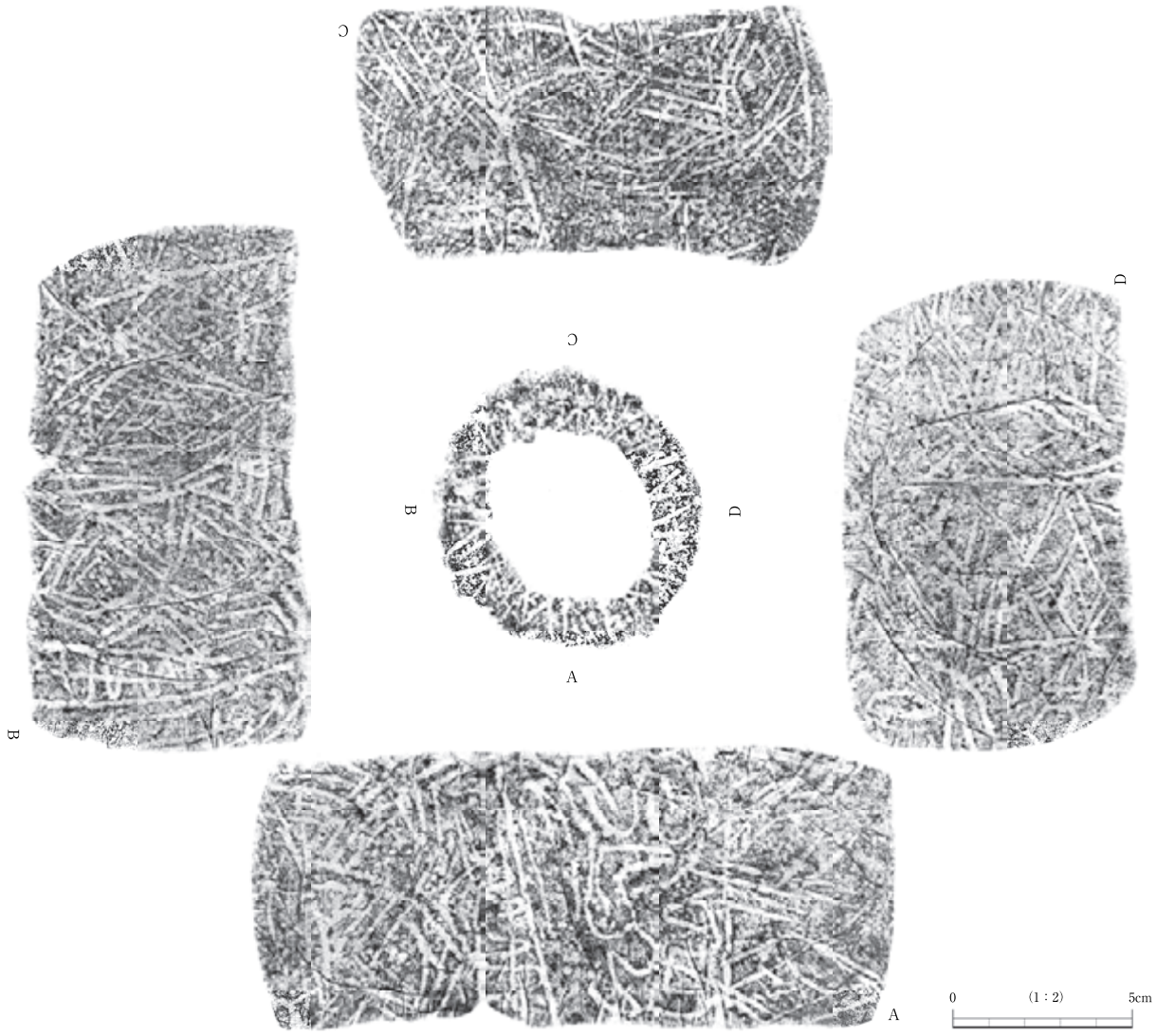
埋土注記

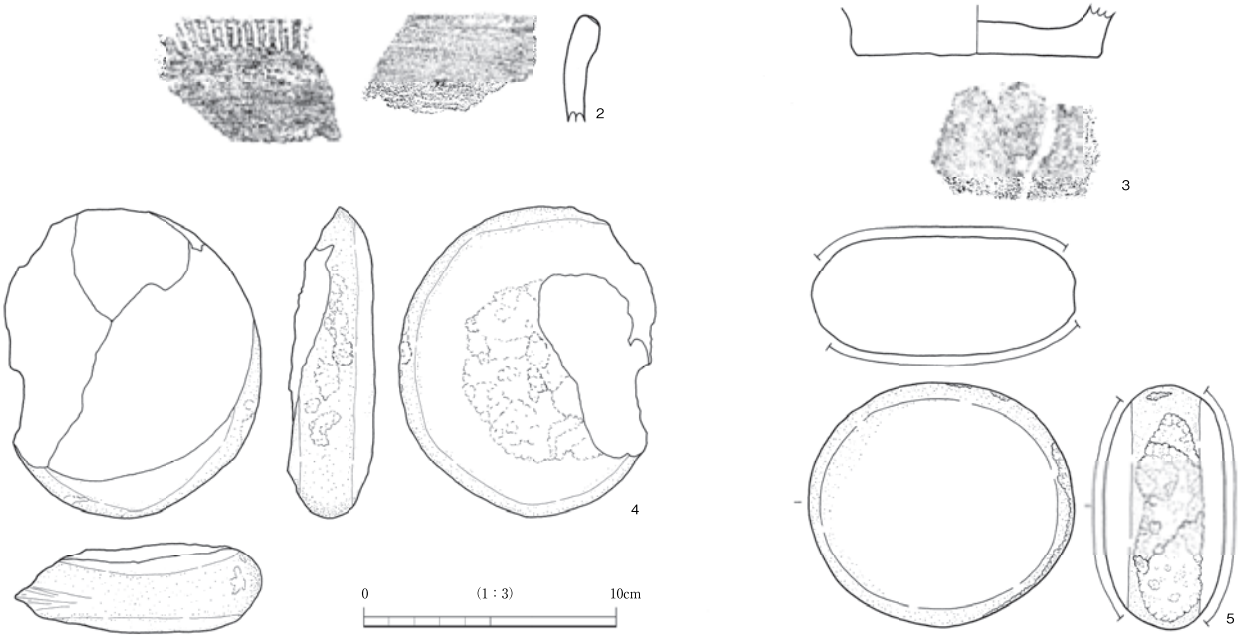
A	1	褐色土	(Hue10YR 4/4)	砂質～シルト質
	2	暗褐色土	(Hue10YR 3/4)	砂質～シルト質　炭化物を含む
	3	暗褐色土	(Hue7.5YR 3/4)	砂質～シルト質　しまりがない
	4	暗褐色土	(Hue10YR 3/4)	砂質～シルト質　よくしまる
B	5	褐色土	(Hue10YR 4/6)	シルト質　粘性が強い
	6	暗褐色土	(Hue10YR 3/4)	砂質～シルト質
		しまりがよく，⑤よりも粘性が強い		

第９図　SK4

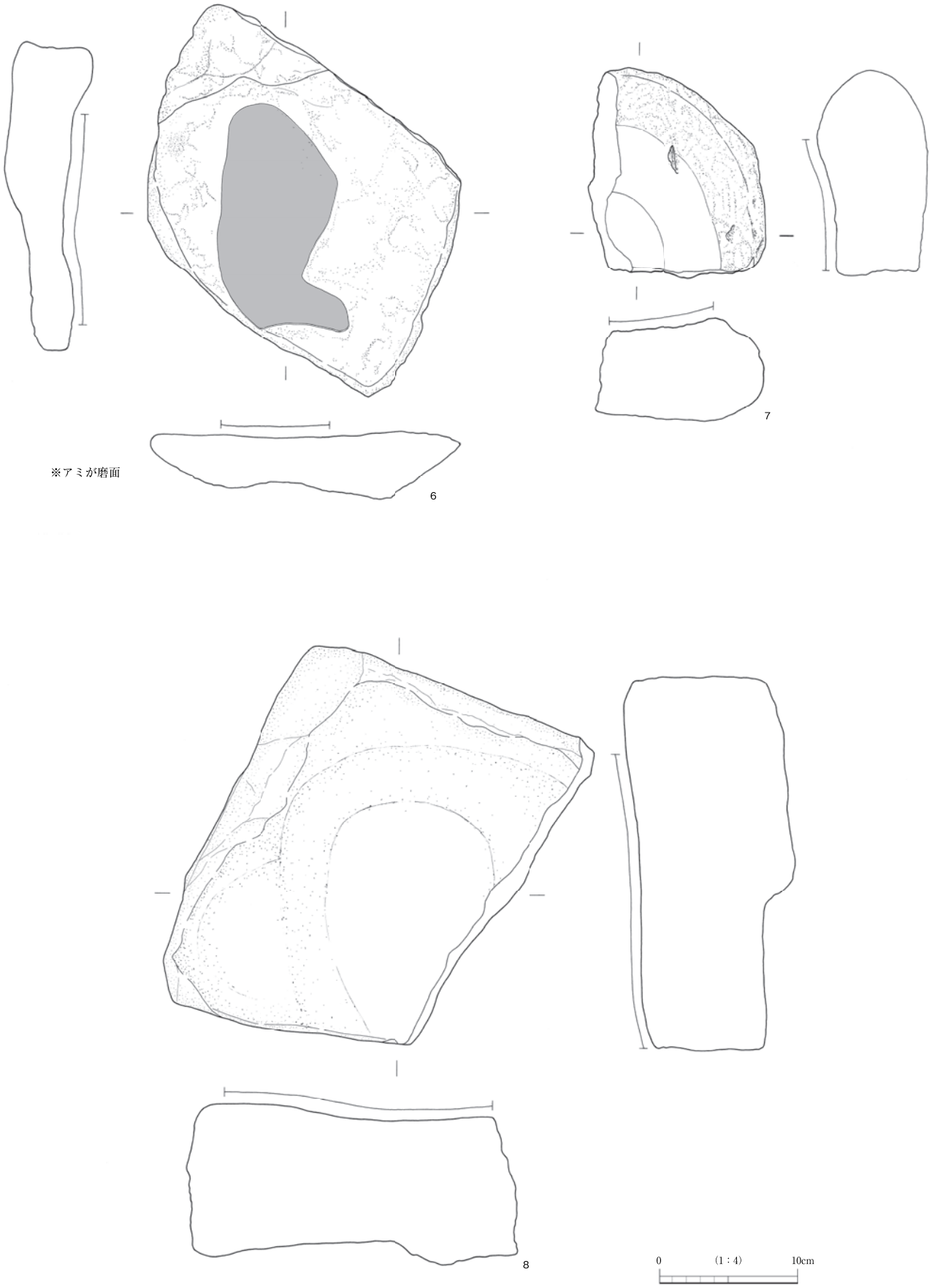


第 10 図　SK4 出土遺物①

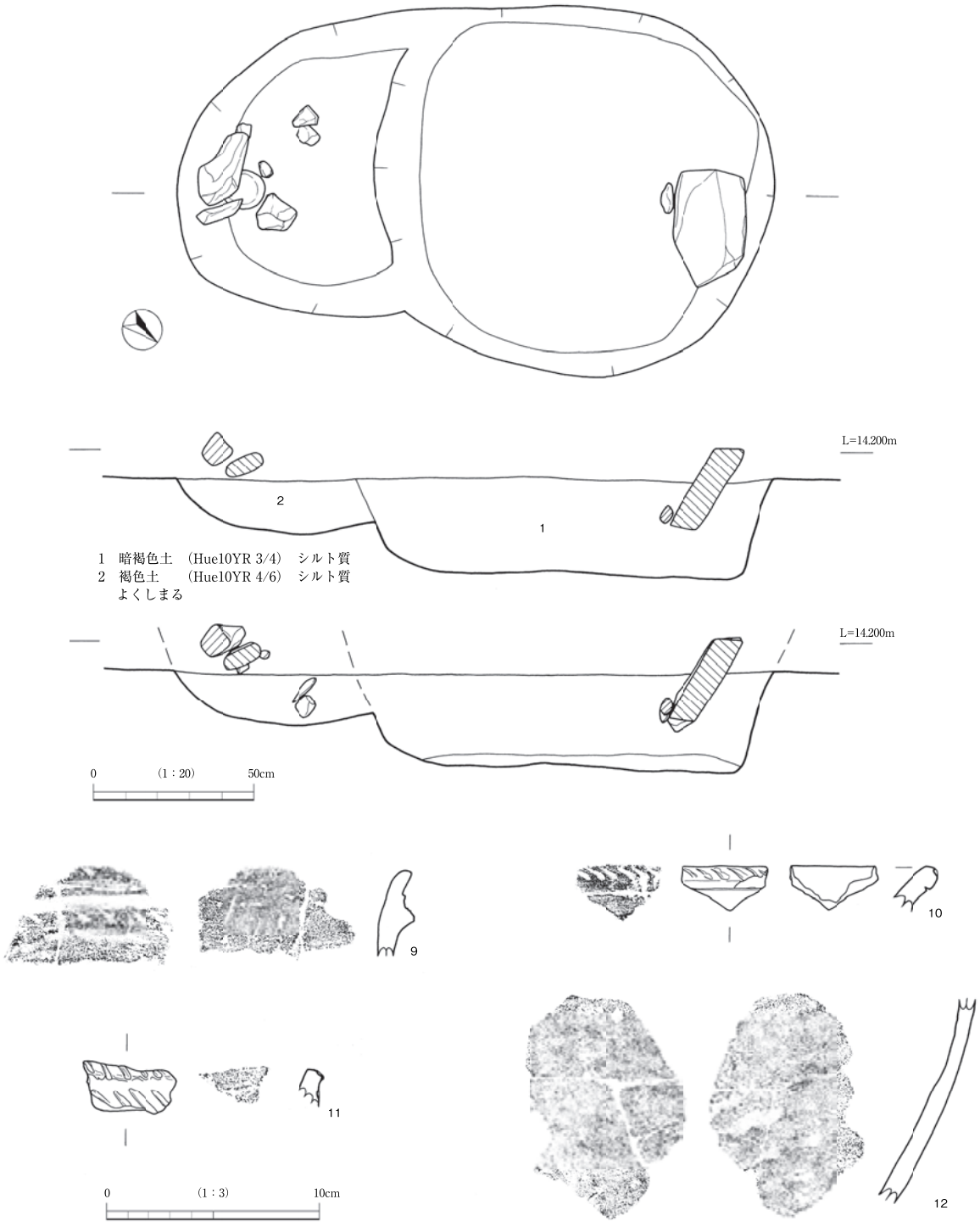




第 11 図　SK4 出土遺物②



第 12 図　SK4 出土遺物③



第 13 図　SK6・出土遺物①

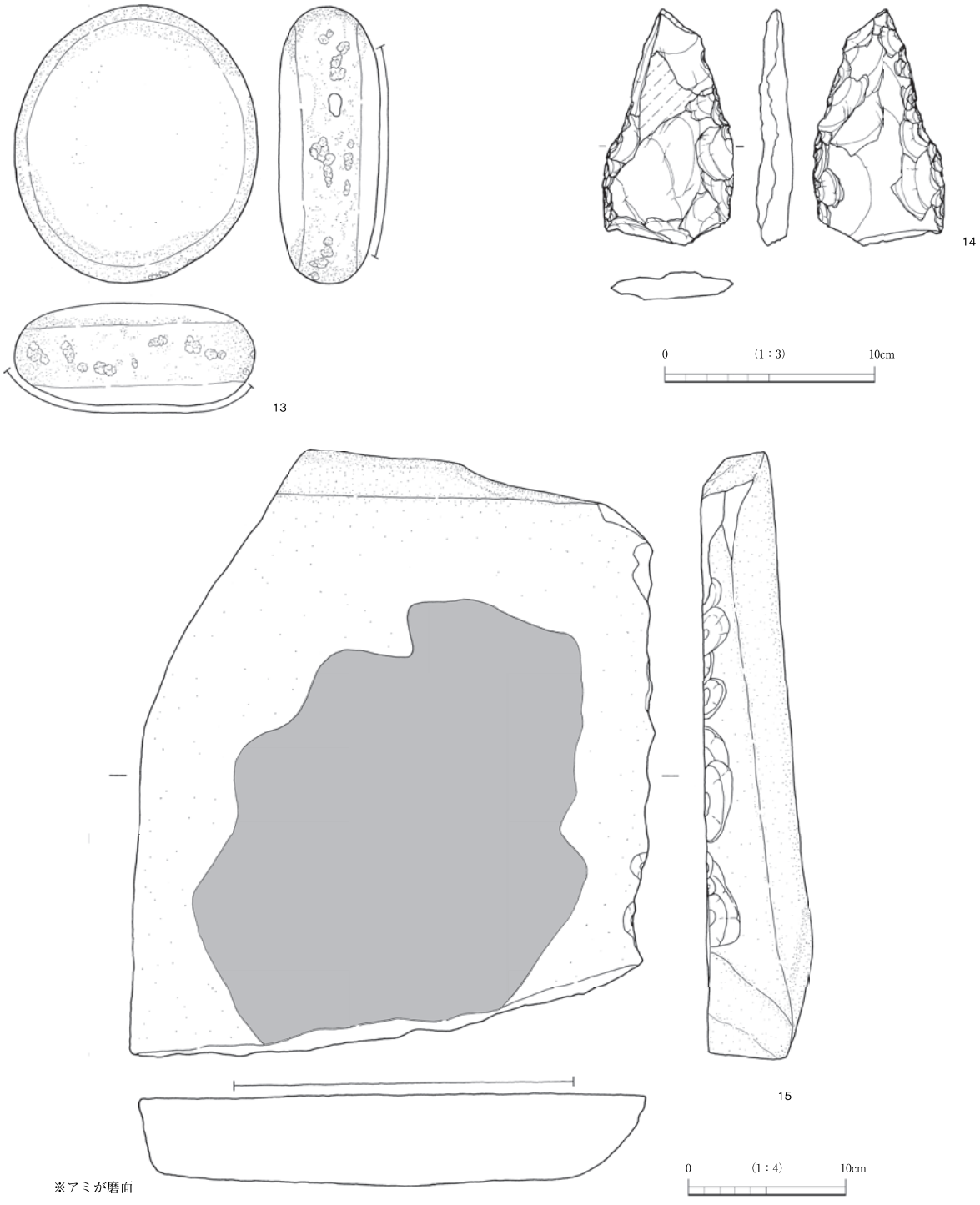
以上のことから，SK55 付近では，L=14.000 ～ 14.100m まで造成や撹乱が及んでいると判断される。したがって，埋土及び出土遺物から，SK55 は縄文時代後期の土坑であると判断した。

遺物　遺物は，検出面で出土したものを含めて，土器片７点，石器４点を図化した。

土器　26・27 は埋土から出土した。26 は，口縁が断面三角形を呈し，文様帯となる。市来式土器系の深鉢である。27 は深鉢の胴部である。胎土に角閃石を多く含む。

28 ～ 32 は，検出面で出土した。28 は無文の口縁部で，口唇部が平坦になる。29 は深鉢の胴部である。30 は上げ底状の底部で，内面に爪状の圧痕がみられる。31・32 は，内面にはミガキが施されるが，外面には条痕を残す。晩期の深鉢である。

石器　33 ～ 35 は磨石・敲石類である。33・34 は埋土から出土した。33 は扁平な花崗岩で，表裏面に凹みがみ



第 14 図　SK6 出土遺物②

られる。34 は安山岩で，表面は使用により大きく剝離する。表面の残存箇所と裏面全体に磨面が形成され，裏面の中央には凹みもみられる。35 は検出面で出土した。風化により使用痕を確認できなかった。

36 は安山岩製の石皿・台石である。上半が検出面に露出し，立位の状態で検出された。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。周辺の剝落は被熱によるものと考えられる。使用面は表裏両面ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られる。表面にだけ浅い凹みがある。

SK78（第 21・22 図）

検出状況　SK78 はＮ－ 23 区，Ⅴ層上面で石皿・台石が一部露出する状態で検出された。遺構の東側は，SX １及び SX ３の調査時に設定したトレンチによって消滅した。

形状・規模　推定される平面形は楕円形で，残存する範囲における規模は長軸 66cm，短軸 49cm，検出面から

の深さ 26cm である。北西側の壁面の立ち上がりは明瞭だが，南東側は不明瞭で，断面形は，三角形状になる。

埋土　埋土はわずかに粘性のある灰黄褐色土である。

石器・礫の出土状況　SK78 は１類の土坑の中でも特殊な特徴を示す。石皿･台石２点が立位で平行に据えられ，検出面直下で，その中間から石核が２点検出された。その他，土坑内から 16 点の礫が出土した。石器と礫は土坑内の北側に偏り，平面長方形状に配置されていた。礫の内訳は，砂岩 13 点，頁岩３点である。なお，埋土中から土器は出土しなかった。

石器　石器４点を図化した。37 は西北九州系黒曜石の石核である。礫の表面と裏面の両面に作業面を設定し，それぞれ周縁から求心の剥離により剥片を剝出している。結果，残核が円盤状を呈している。38 は砂岩製の石核である。厚手の礫から剥片を剝出しており，打面転移により作業面は２か所設定されている。

39 は多孔質安山岩製である。礫周辺への敲打により，台形状に整形が行われている可能性が高い。表面には使用による浅い凹みがあり，結果左右と前方に縁が残っている。手前には縁は見られない。風化のためか，多孔質という特徴のためかは不明であるが，使用面に顕著な光沢はみられない。

40 は安山岩製であり，欠損している。使用面は表裏ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られる。表面にのみ浅い凹みがある。

SK53（第 23 図）

検出状況・埋土　SK53 は N － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。埋土はにぶい黄褐色土で，植物による浸食を受け，しまりがない。

形状・規模　平面形は楕円形で，長軸 116cm，短軸 82cm，検出面からの深さ 10cm である。断面形は，床面は平坦だが，壁面の立ち上がりは緩やかではっきりしない。

礫の検出状況　土坑内からは，土器１点と礫 17 点が出土した。土坑の西側に扁平な砂岩が立位で出土したが，使用痕は確認されなかった。その他の礫は，土坑の中央付近で，やや散乱した状態で検出された。

土器　土器１点を図化した。41 は埋土中から出土した土器片である。口縁部は断面三角形を呈し，外傾する。市来式土器系の深鉢である。

SK54（第 24 図）

検出状況・埋土　SK54 は，N － 25 区，Ⅵ層上面で一部の礫が露出する状態で検出された。埋土は暗褐色で，植物による浸食を受ける。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 74cm，短軸 46cm，検出面からの深さ 14cm である。断面形はすり鉢状になる。

礫の検出状況　土坑内からは砂岩・安山岩の礫９点が出土した。土坑の中央からやや東側よりに，扁平な安山岩２点が「V」の字状に配される。ともに使用痕は観察されなかった。中央からやや西側では大型の安山岩が１点検出され，土坑中央には一段下がって６点の礫がまとまって検出された。

土器　土器１点を図化した。42 は SK54 の検出面で出土した。小破片であり詳細は不明である。

SK57（第 25・27 図）

検出状況・埋土　SK57 は O － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。埋土は暗褐色土で，植物による浸食を受けしまりがない。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 115cm，短軸 77cm，検出面からの深さ 11cm である。断面形は，床面は平坦で，壁面はなだらかに立ち上がる。

遺物　遺物は土器片３点と石皿・台石が１点出土した。

土器　43 は口縁を肥厚させ文様帯とする。44 は深鉢の胴部である。45 は，石皿･台石（47）の下から出土した。口縁部が肥厚し，外面の口縁部直下に二重に粘土を貼り付け，沈線状の文様を作り出している。波状口縁であり，波頂部の外面には，縦方向に粘土が貼り付けられる。北久根山式土器の強い影響を受けている。

石器　47 は安山岩製の石皿・台石である。検出状況は横位であったが，47 の下から 45 が出土していることから，本来は立位であった可能性もある。横位剥離痕が１か所，欠損が１か所確認される。使用面が表裏ともに確認され，それぞれ使用による顕著な光沢が見られるが，凹みはほとんどない。

SK59（第 26 図）

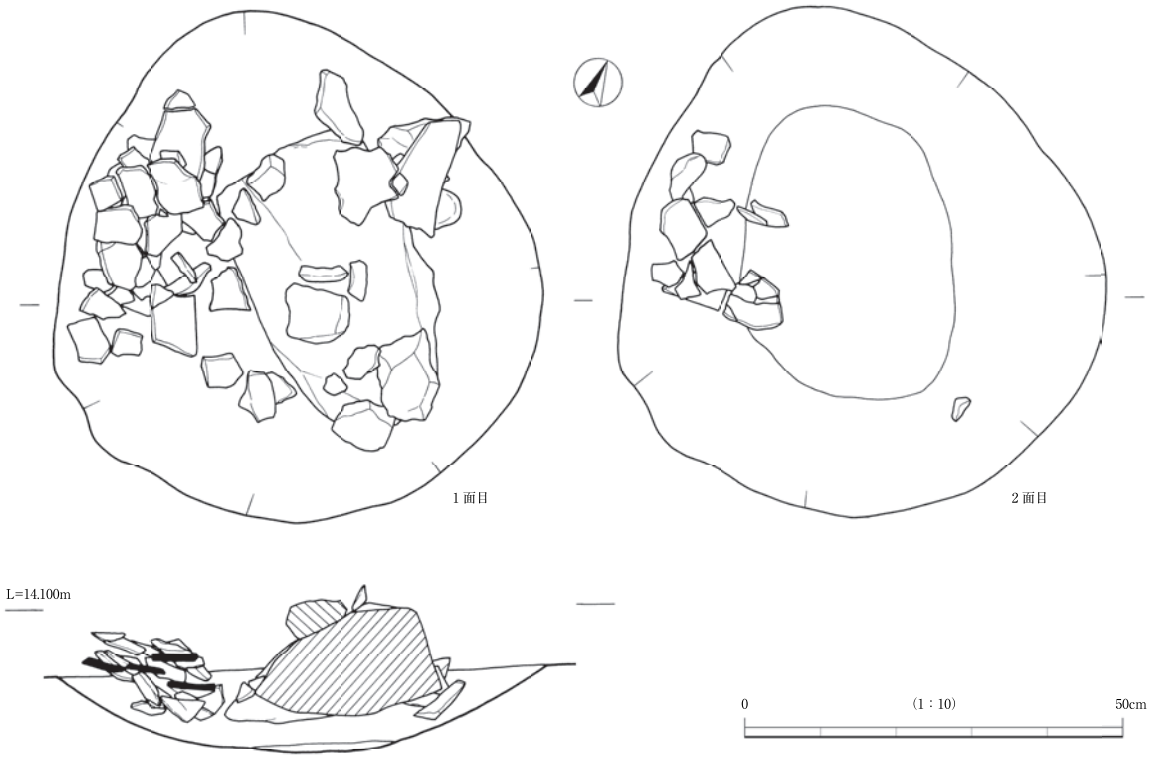
検出状況・埋土　SK59 は O － 26 区，Ⅵ層上面で検出された。検出時には土坑のプランを確認できず，大型の礫の中心を通るように実測の主軸を設定した。そのため，土坑の長軸と実測用の軸は一致しない。埋土は黄褐色土で，植物の浸食を受ける。１類としたが，３類のほうが妥当かもしれない。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 75cm，短軸 58cm，検出面からの深さ 10cm である。ただし，一部の礫が床面よりも下から検出されていることから，完掘していない可能性もある。

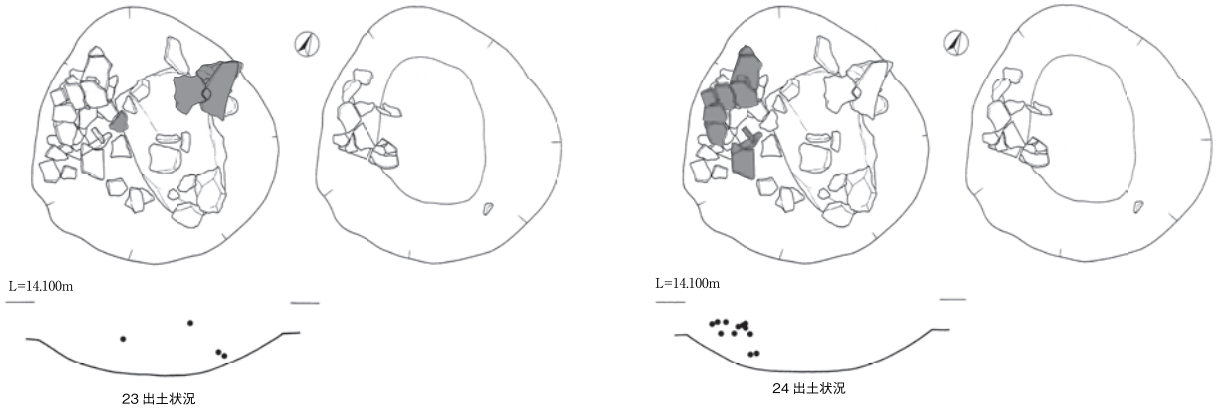
石器　遺物は，石皿・台石が１点出土した。46 は安山岩製で，欠損している。使用面には顕著な光沢が見られるが，凹みはない。

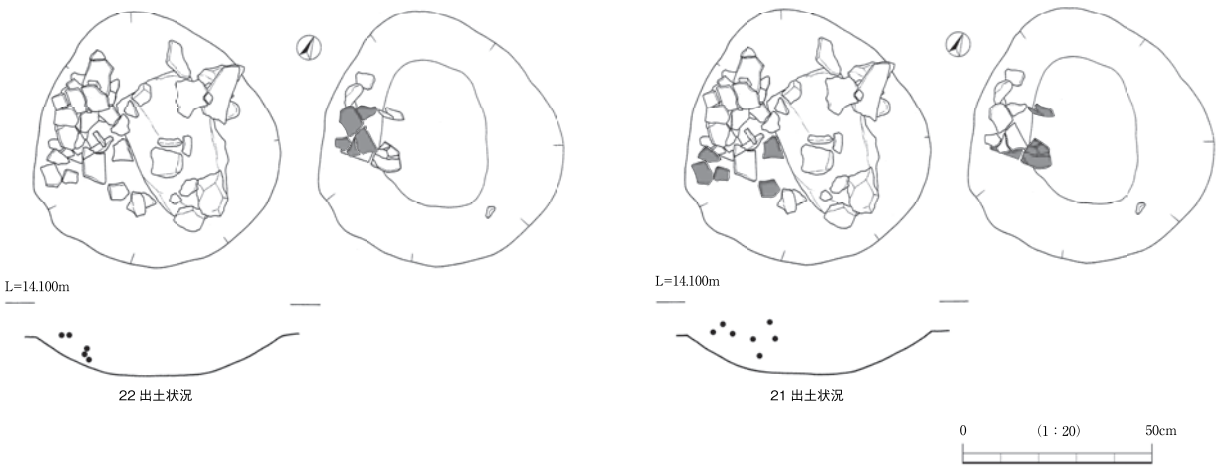
（イ）２類

２類は５基検出された。

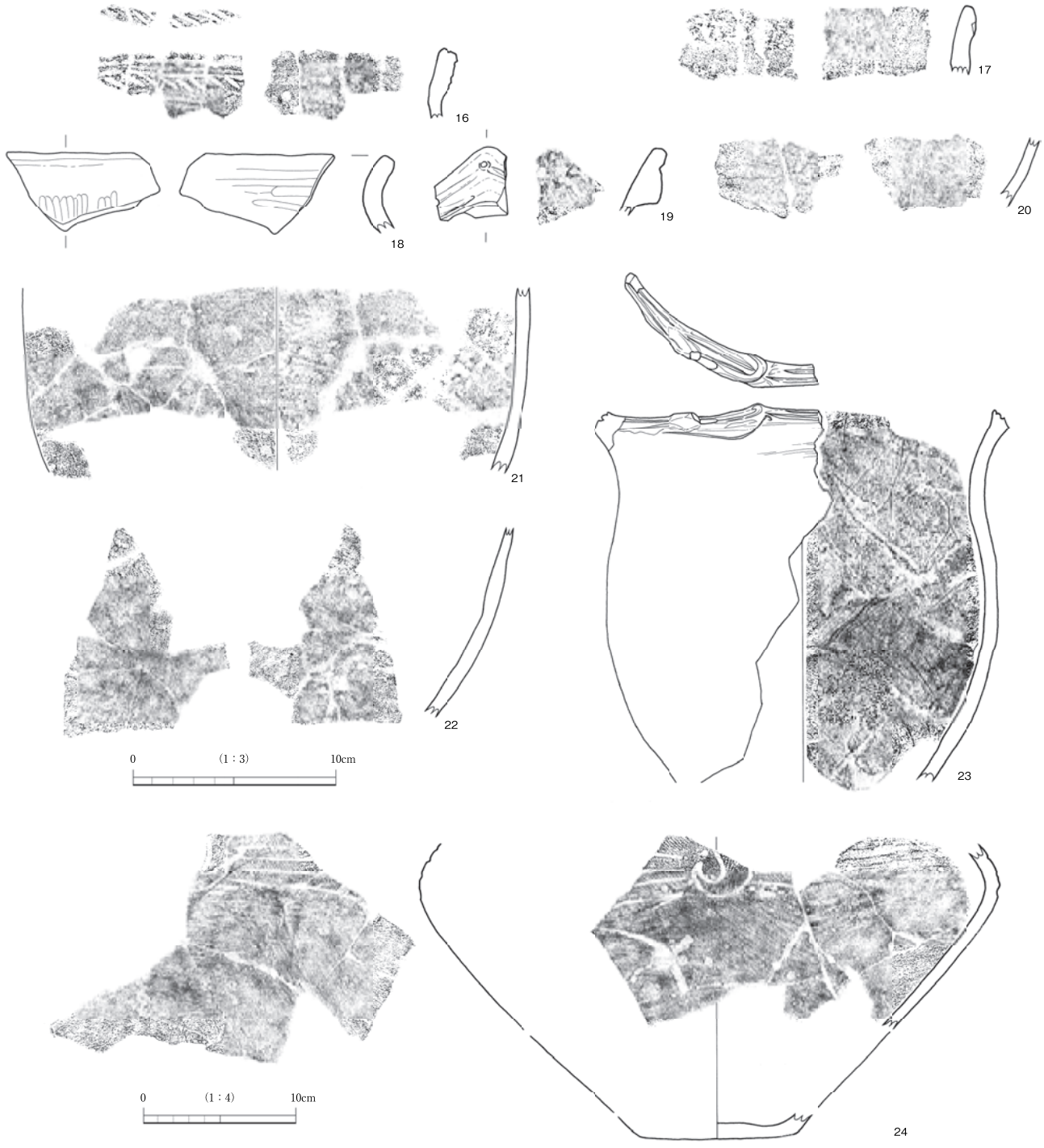


埋土　褐色土（Hue7.5YR4/4）　砂質





第 15 図　SK8



第 16 図　SK8 出土遺物①

SK13（第 28 ～ 30 図）

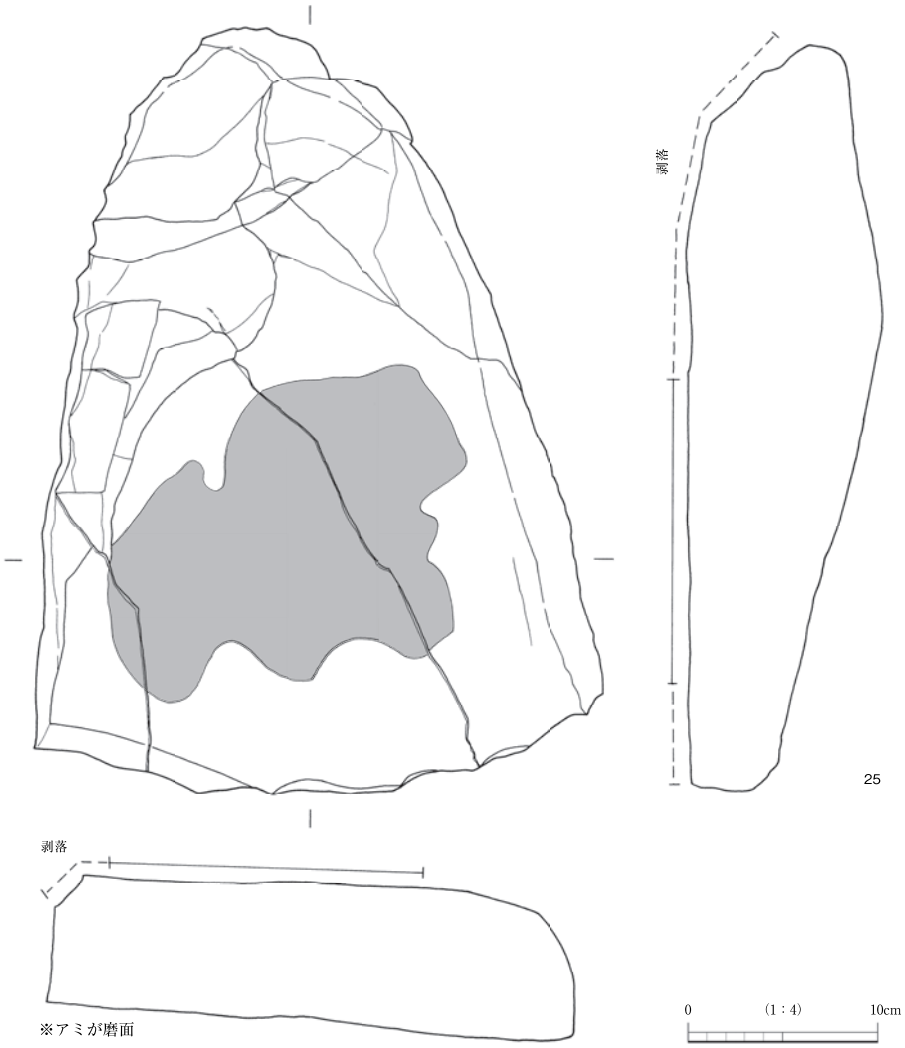
検出状況　SK13 は，N － 25 区，Ⅴ層上面で検出された。検出面では，砂岩や安山岩の礫や土器片が散乱している状況であった。

形状・規模　平面形は東西方向に長い楕円形だが，南側の掘り込みがはっきりしない。規模は長軸 174cm，短軸 125cm，検出面からの深さ 22cm である。

断面形は，床面はほぼ平坦で，壁面はやや外傾するが，立ち上がりは明瞭である。南側の壁面のみ緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は暗褐色砂質土を基本とする。

遺物　埋土中から多量の土器片が出土し，大型の破片だけでも 35 点にのぼる。大型の破片のみ出土状況を実測し，小破片は埋土一括で取り上げた。検出面付近では礫が出土したが，使用痕を観察できた石器は 1 点のみの出土である。土器 20 点，石器 1 点を図化した。



第 17 図　SK8 出土遺物②

石器　48 は砂岩製の砥石である。床面付近から出土した。表裏両面と右側面に使用痕が確認される。被熱により破砕している。

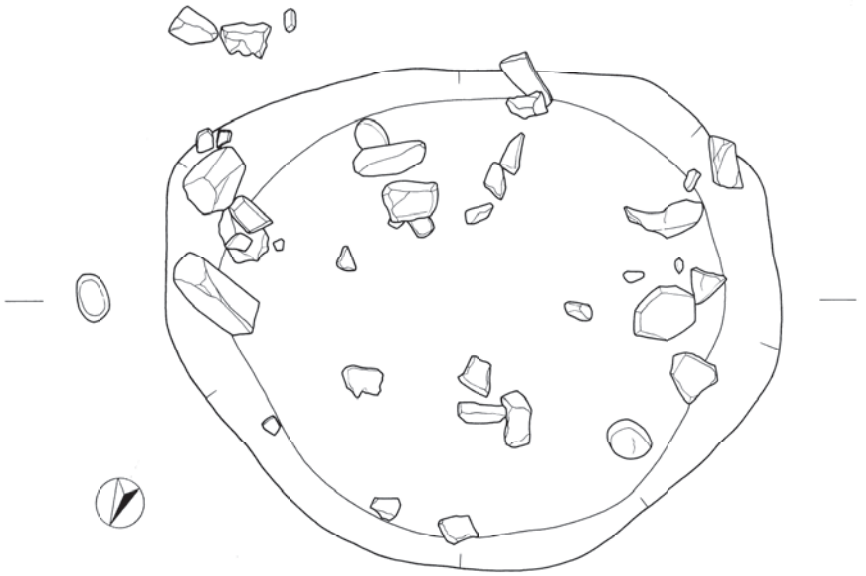
土器　49 は台付皿形土器の脚部である。検出面付近から出土した。色調は赤褐色を呈し，胎土に１～５mm 程度の白色の鉱物を含む。透かし孔をもち，底部の下端には，右下方向の刻目が施され，その上に２本の沈線文が描かれる。内面はミガキが施される。北久根山式土器の台付皿形土器である。

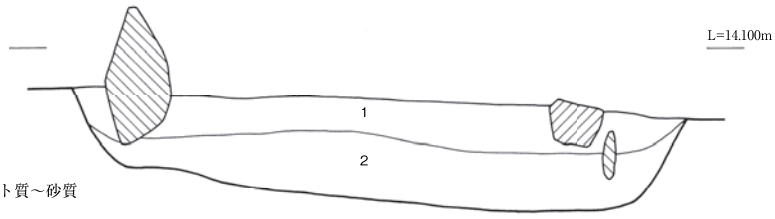
50 ～ 53 は深鉢の底部である。50・51 は，底部に脚台が付くタイプである。51 は底部内面を強く押圧した痕跡を観察できるが，胴部を制作した後に，底部に粘土を入れ，それを押し当てた痕跡だと考えられる。52・53 は平底で，安定する。

54 ～ 60 は磨消縄文系土器の鉢・浅鉢である。54 は浅鉢である。埋土中から破片の状態で出土したが，接合の結果ほぼ完形品となった。底部はやや上げ底状で，胴部は外傾する。胴部の張り出し部分に稜を形成して屈曲し，頸部となる。胴部の張り出しから，その下 1.5cm の幅で磨消縄文が施される。口縁部は断面三角形に肥厚し，口唇部の幅は広くなる。口唇部には，二重の沈線と，刻目が施される。口縁部の一部は張り出し，上方向から穿孔された４つの孔が文様の特徴となる。口唇部の張り出しは現状では２か所だが，口唇部の形状と，刻目の文様構成から，本来は４か所に設定されていたと想定される。ただし，文様の種類は不明である。

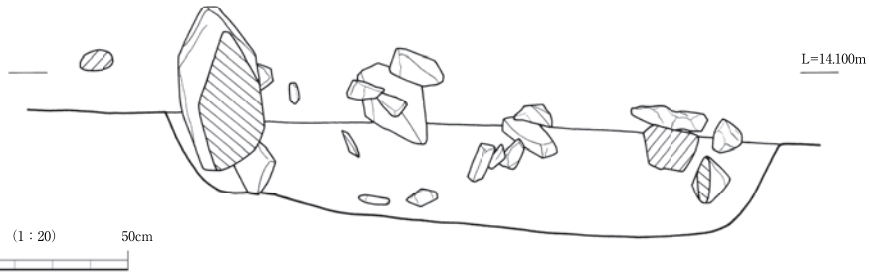
55 は口縁部で，沈線文と磨消縄文がみられる。外面と口唇部に赤色顔料の痕跡が認められる。56 は胴部の屈曲部で，外面に沈線文と刺突文がみられる。55 と 56 は色調と胎土が同一である。57 は，幅の広い縄文地による磨消縄文が施される。

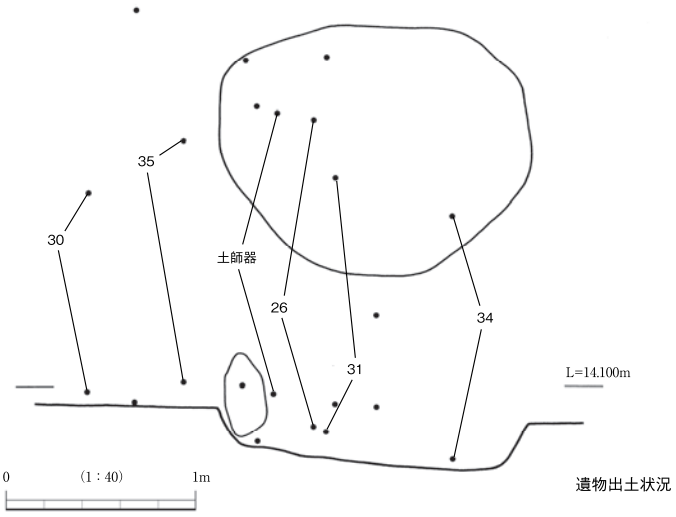
59 は浅鉢である。54 と同様に，胴部張り出しに稜が形成され，屈曲するタイプだと思われる。内外面に丁寧なミガキを施し，外面の胴部張り出しに２点の刺突文が確認される。60 は鉢である。内外面に丁寧なミガキが施される。胴部張り出し付近に，沈線文と磨消縄文がみ





1　褐色土　（Hue7.5YR 4/4）　シルト質～砂質
　　粘性があり，よくしまる
2　暗褐色土　（Hue10YR 3/4）　砂質～シルト質
　　3 ～ 5mm 程度の小礫をわずかに含む





遺物出土状況

第 18 図　SK55

第 19 図　SK55 出土遺物①

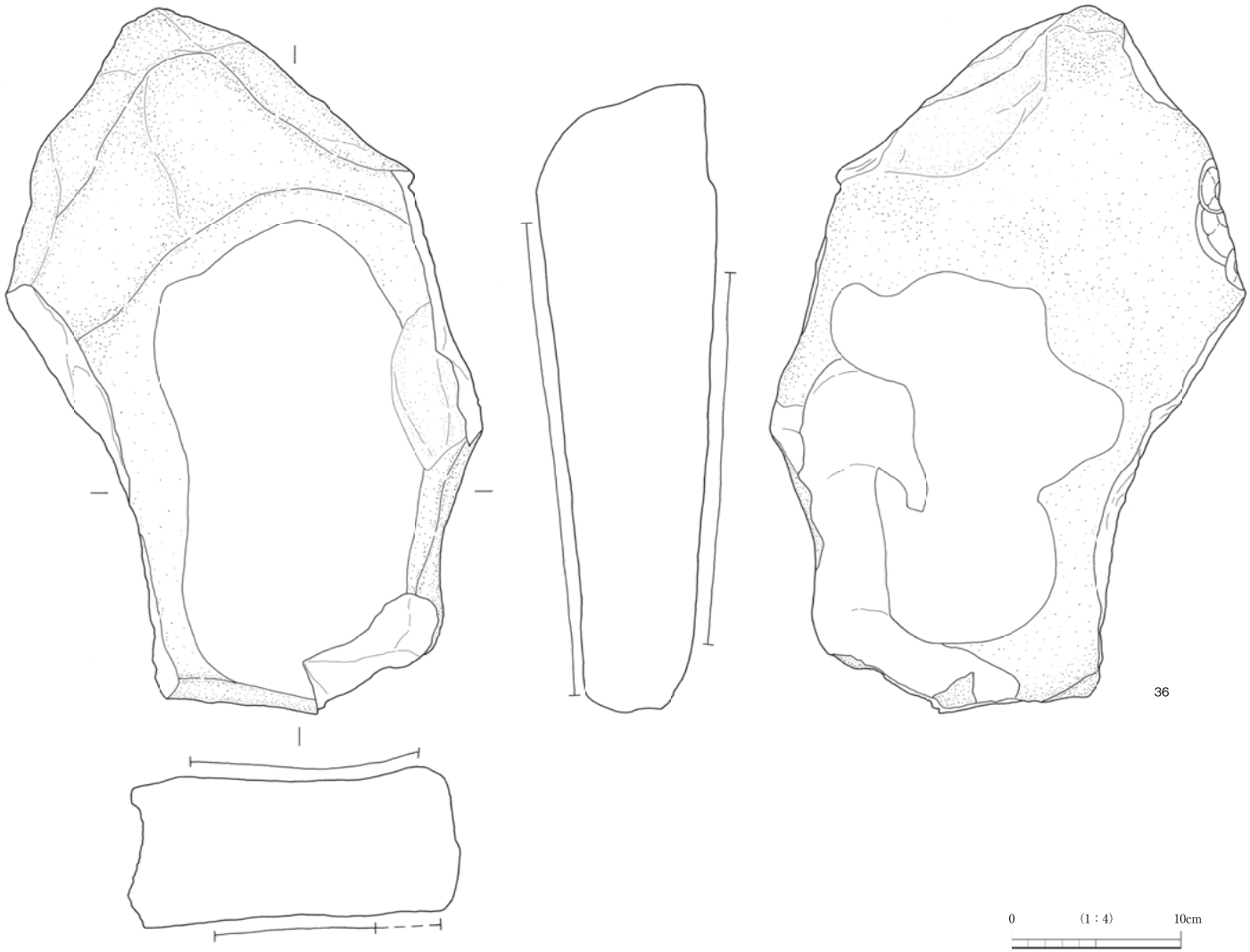
られる。胎土に角閃石を多く含む。

61 ～ 68 は深鉢である。61 は小型の深鉢で，口縁部は断面三角形で，口縁部付近が文様帯となる。口唇部は平坦で，沈線文が施される。62・63 は同一個体の可能性がある。口縁部を肥厚させ，文様帯が形成される。

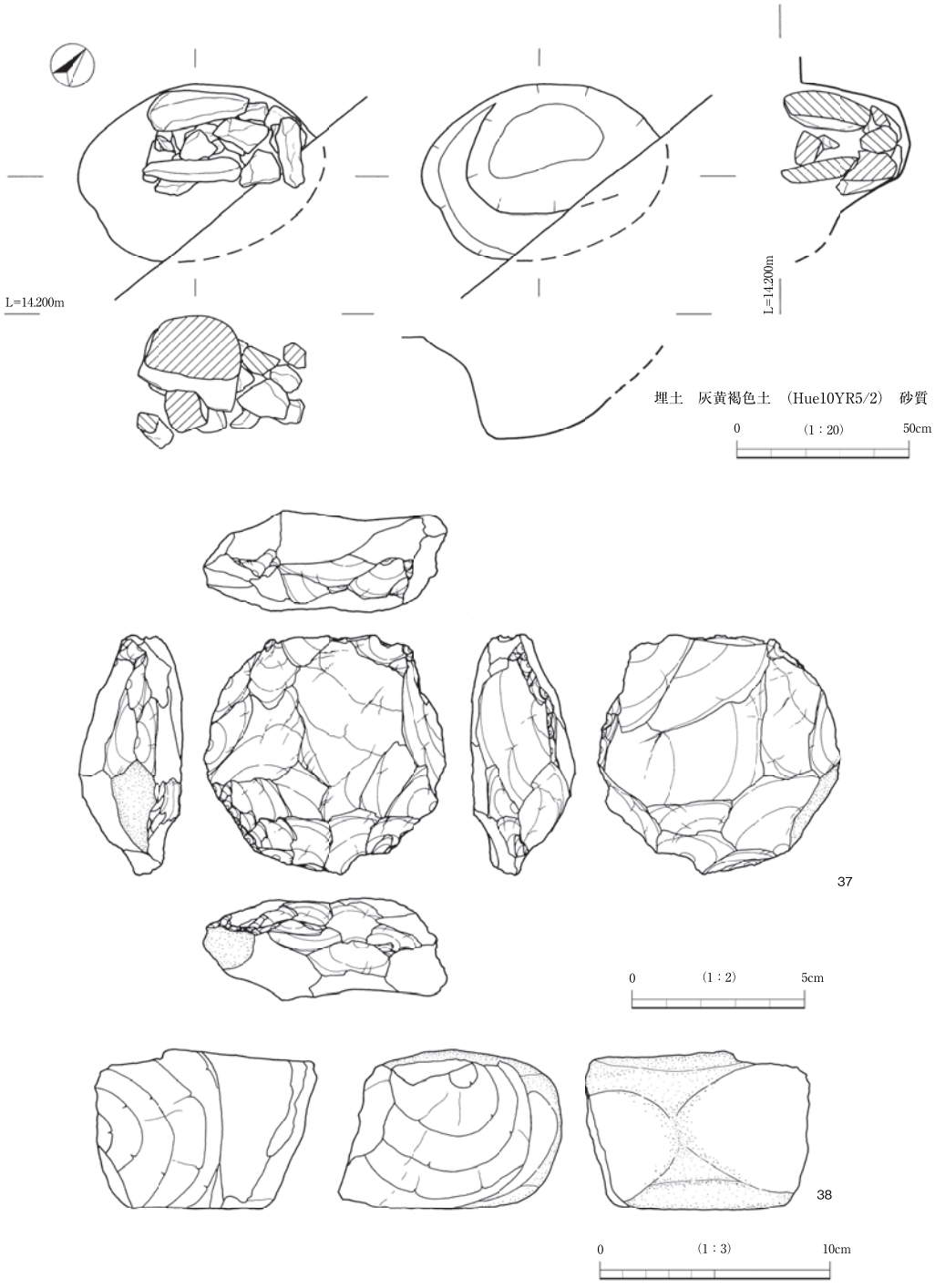
66 は，内外面にミガキが施されている。深鉢としたが，鉢の可能性もある。67 は胴部が張り出し，口縁部が外傾する形状になると思われる。68 は大型の深鉢だが，表面が摩滅している。

SK20（第 31･32 図）

検出状況・形状・規模　SK20 は N － 24 区，Ⅴ層で検出された。平面形は東西に長い楕円形で，規模は長軸 202cm，短軸 145cm で，今回の調査で検出された縄文時代の土坑で最大となる。Ⅴ層上面での検出作業段階で，SK20 周辺には土器片が集中して出土したが，平面プランが不明瞭であり，Ⅴ層をやや掘り下げた段階で平面プランを確定した。そのため，本来はさらに大型の土坑であった可能性もある。



第 20 図　SK55 出土遺物②



第 21 図　SK78・出土遺物①

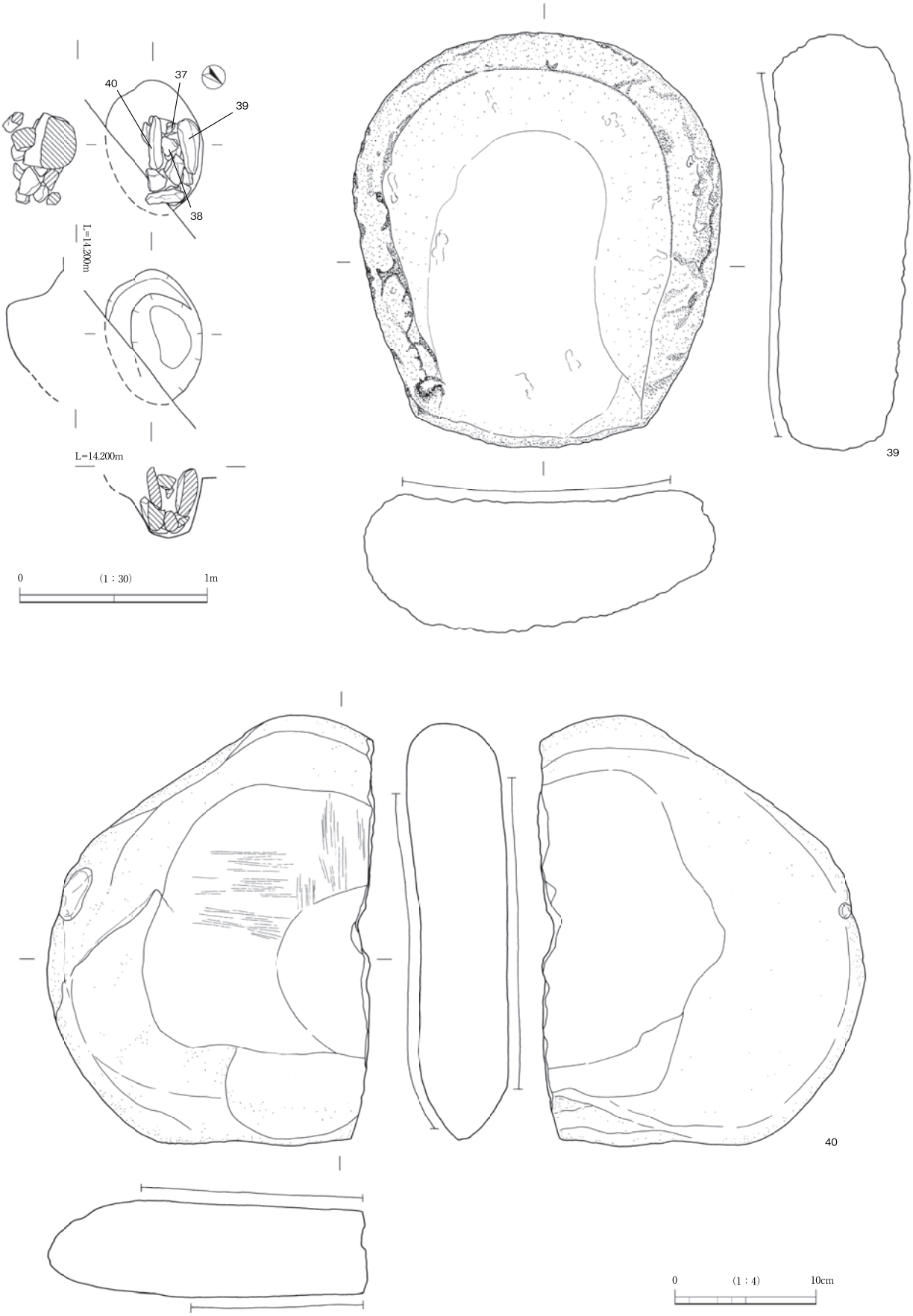
検出面からの深さは 20cm で，断面形はすり鉢状になる。

埋土　埋土は暗褐色から褐色土を基本とする。

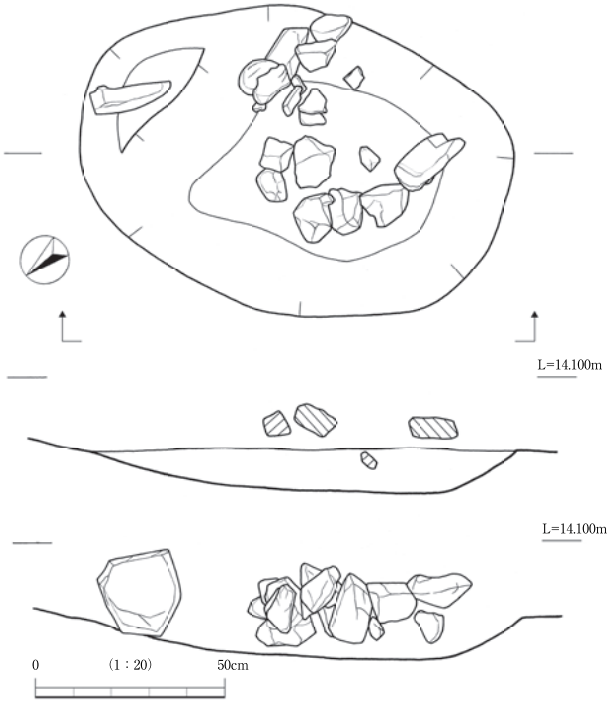
遺物　遺物は，土器片 104 点，礫 4 点，埋土 1 から炭化種子 1 点が出土した。土器 16 点を図化した。

土器　69 は口縁部が外反する。口縁部を肥厚させ文様帯とし，沈線により文様が描かれる。70 は摩滅が著しい。71 は胎土の色調がにぶい黄橙色を呈し，SK 8 出土の 18・23 と類似する。口縁部はやや肥厚し断面三角形状になり，外反する。

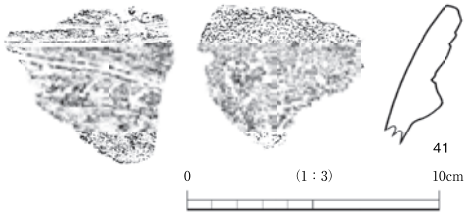
72・73 は深鉢の胴部である。74 は内面にミガキ様のナデが施され，鉢か浅鉢の可能性がある。76 は器種不明だが，内面には工具痕がみられる。75 は，器壁が厚手で，色調がにぶい黄橙色を呈する。77 は器壁が薄手で内傾し，内外面に貝殻条痕がみられる。78 は胎土中に 1 ～ 3 mm 程度の鉱物を含み，外面に貝殻による条痕がみられる。



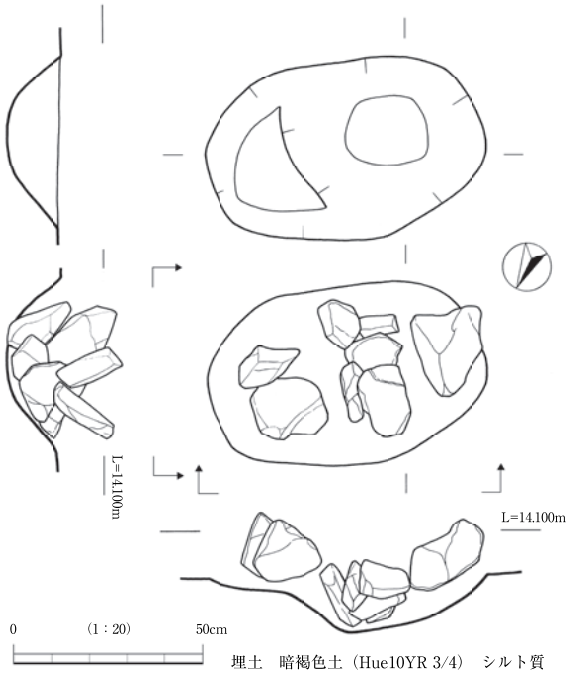
第 22 図　SK78・出土遺物②



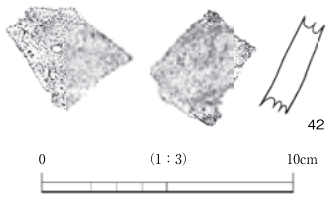
埋土　にぶい黄褐色土（Hue10YR 4/3）　砂質　植物による浸食を受ける



第 23 図　SK53・出土遺物



埋土　暗褐色土（Hue10YR 3/4）　シルト質
植物による浸食を受ける



第 24 図　SK54・出土遺物

79 は深鉢の底部で，平底で安定する。80 は脚台タイプの深鉢の底部で，指頭による押圧の痕跡が観察できる。

81･83 は，磨消縄文系の鉢・浅鉢である。81 は口縁部で，口唇部に刺突文が施され，さらに一部が張り出す。83 は胴部で，色調が赤褐色を呈し，胎土に黒雲母を含む。外面には沈線文と磨消縄文が施され，内面の上部にも沈線文状の凹みが３か所みられる。

82 は浅鉢の胴部で，胴部が張り出し稜を形成して屈曲するタイプになると想定される。外面の張り出し部の下には幅１mm の沈線文が描かれる。

84 は台付皿形土器の脚部である。内面にはミガキが施され，外面の下部に２本の沈線文が巡り，一部に貝殻による刺突文も施される。市来式土器の台付皿形土器と判断したが，他の遺跡で出土しているものよりも大型であるという指摘を，本田道輝氏から受けた。

SK44（第 33 図）

検出状況　SK44 は M － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。SK ８と切り合いが認められ，SK44 が SK ８を切る。東側 20cm には SK45 も隣接する。

形状・規模　平面形は，南側がやや突き出た円形で，規模は長軸 124cm，短軸 120cm，検出面からの深さ 14cm である。断面形はすり鉢状になる。

埋土　埋土は暗褐色土を基本とする。

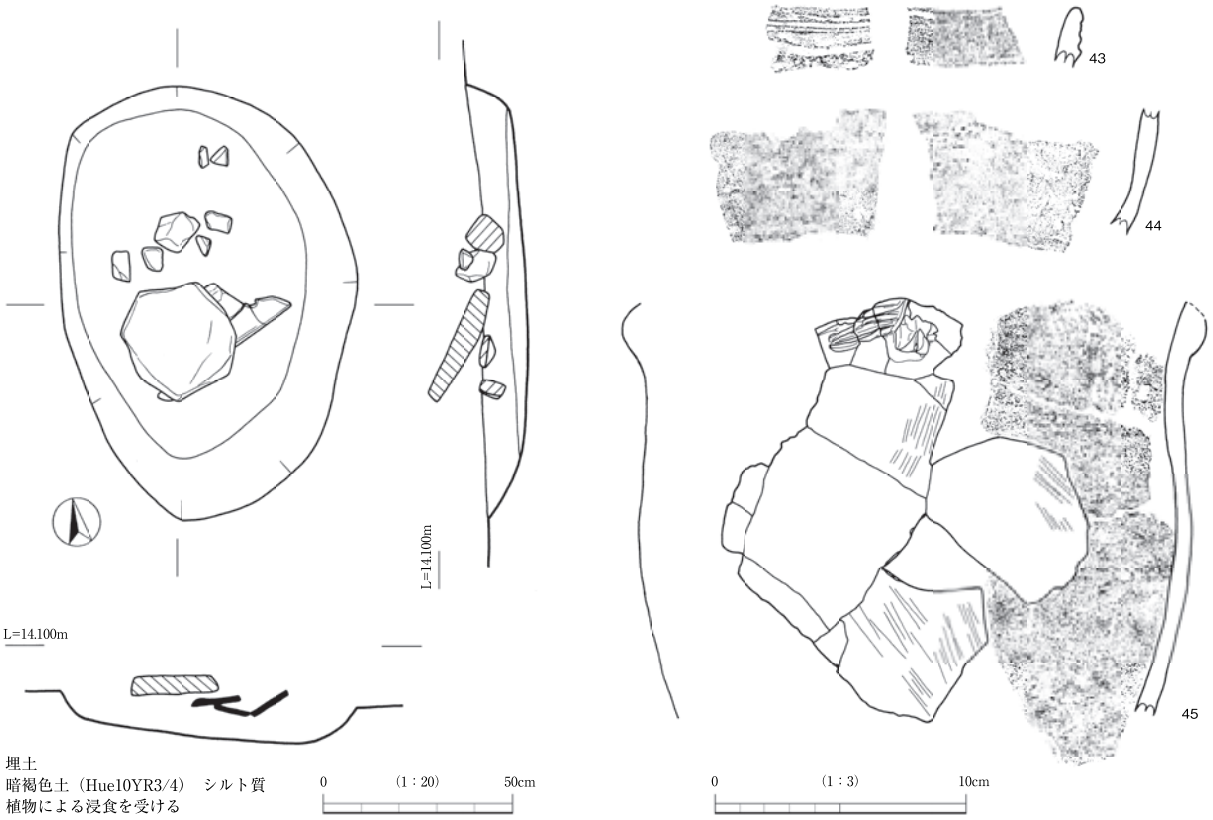
遺物　遺物は土器片 22 点，石器３点が出土した。また，床面直上から炭化種子１点が出土している。土器５点，石器３点を図化した。

土器　85･86･88 は，深鉢の口縁部で，口縁部が断面三角形を呈し，市来式土器に該当する。いずれも表面が摩滅していて，胎土に１～５mm 程度の鉱物を含むことが観察できる。85 は沈線と貝殻による刺突によって施文される。

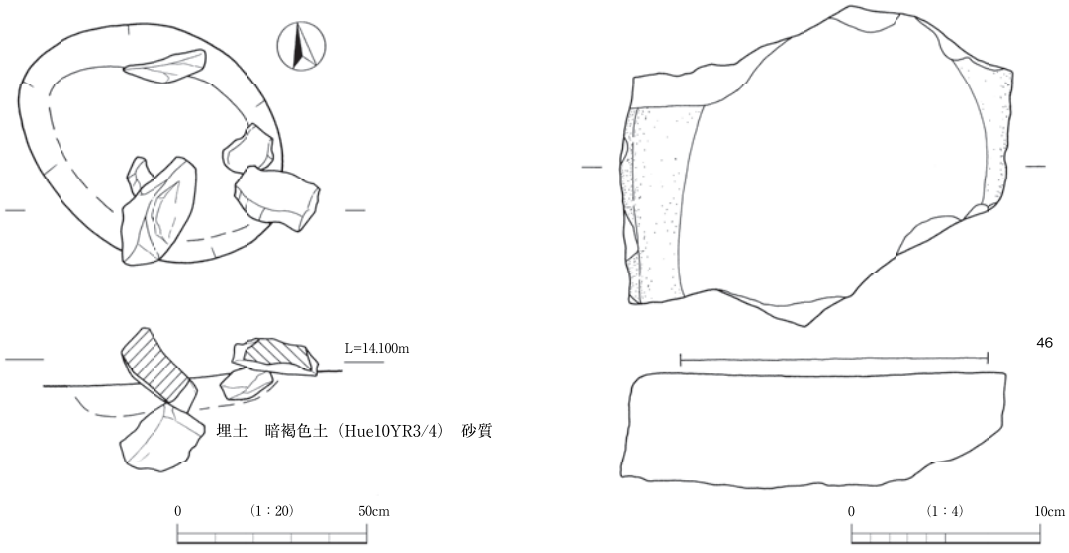
87 は小型の深鉢の胴部と考えられるが，詳細は不明である。89 は深鉢の胴部で，包含層から出土したものと接合した。

石器　90 は霧島山系黒曜石製の石鏃で二等辺三角形鏃である。凹基で，腹面・背面ともに素材剥片面を多く残す。

91 は安山岩製の石錘である。扁平な小型の礫の相対する側縁を剥離して抉りを形成している。92 は石灰岩



第 25 図　SK57・出土遺物①



第 26 図　SK59・出土遺物

製の磨石・敲石類である。一部破損しているが，形状は使用により算盤玉状になる。表裏両面に磨面が認められ，側面には顕著な敲打痕が認められる。

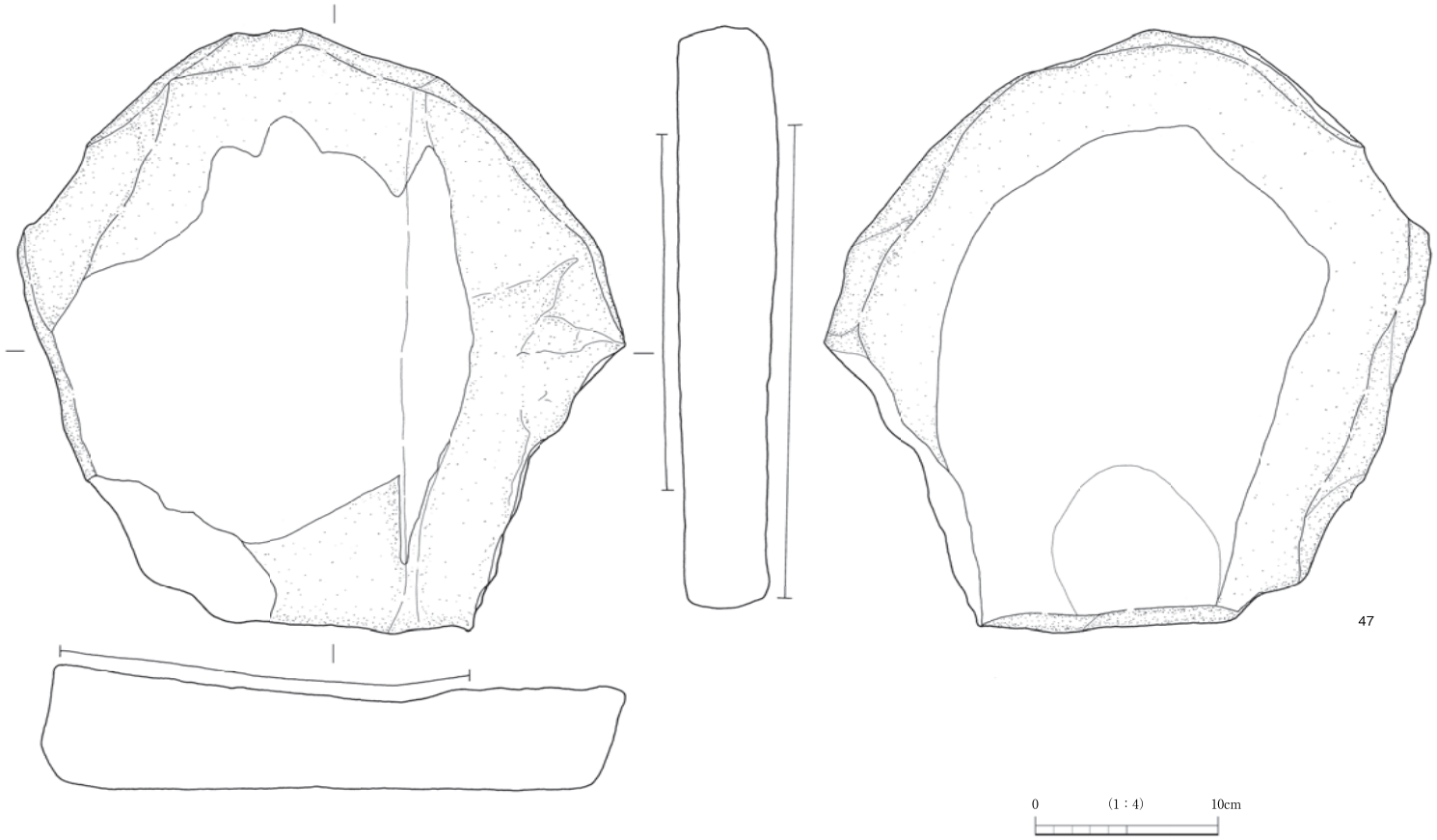
SK60（第 34 図）

検出状況　SK60 は O － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。中世の竪穴状遺構（SI19）と隣接していて，南側の３分の２は，SI19 に切られて消滅している。

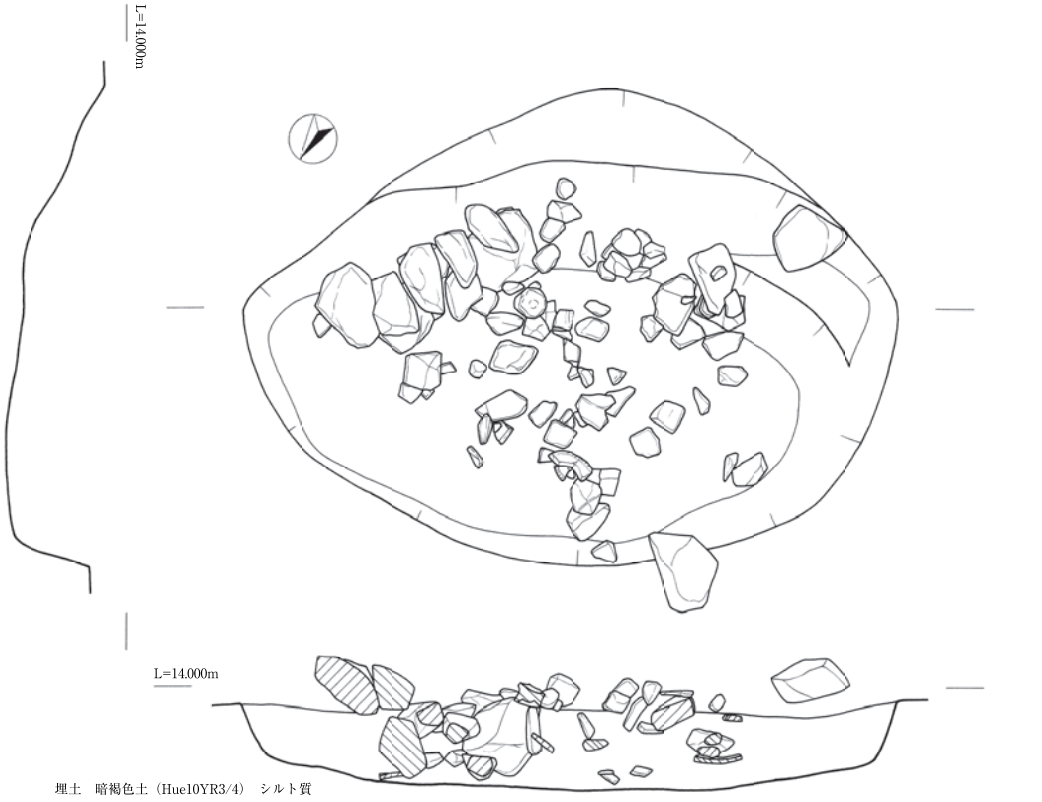
形状・規模　想定される平面形は楕円形で，現状での規模は，長軸 150cm，短軸 105cm である。検出面からの深さ 25cm で，床面から壁面の立ち上がりははっきりしない。

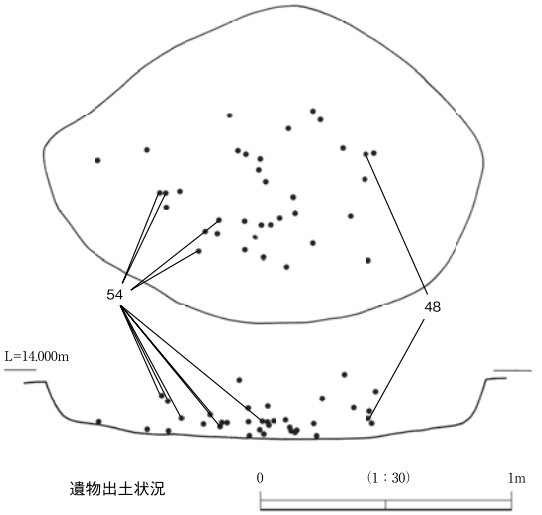
埋土　埋土は暗褐色からにぶい黄褐色でシルト質である。一部に SI19 からの浸食が認められる。

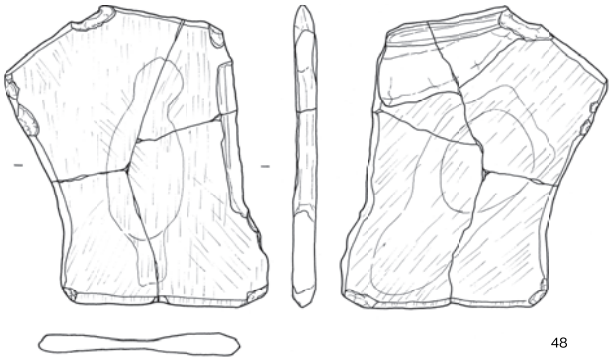
遺物　遺物は土器片 11 点，石器１点が出土した。土器８点，石器１点を図化した。

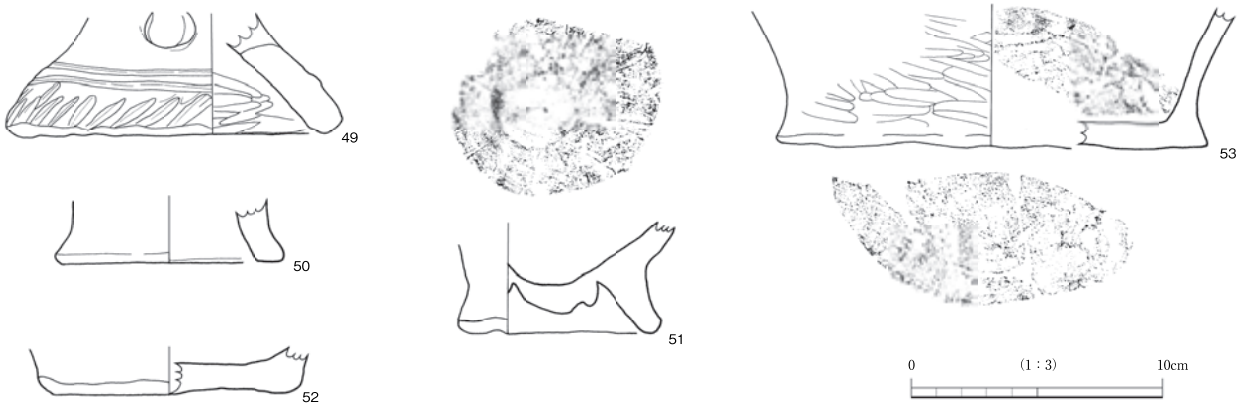


第 27 図　SK57 出土遺物②

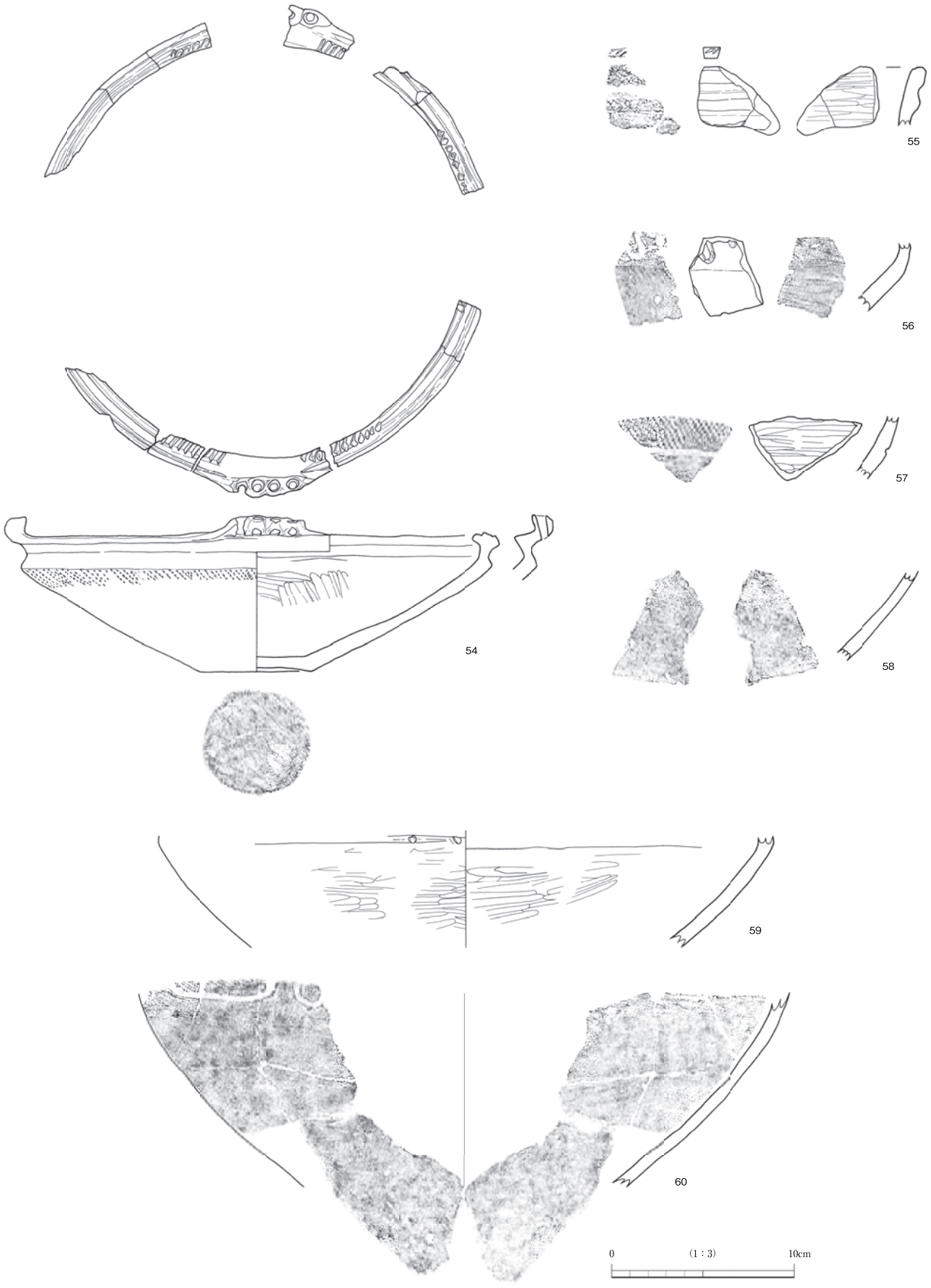




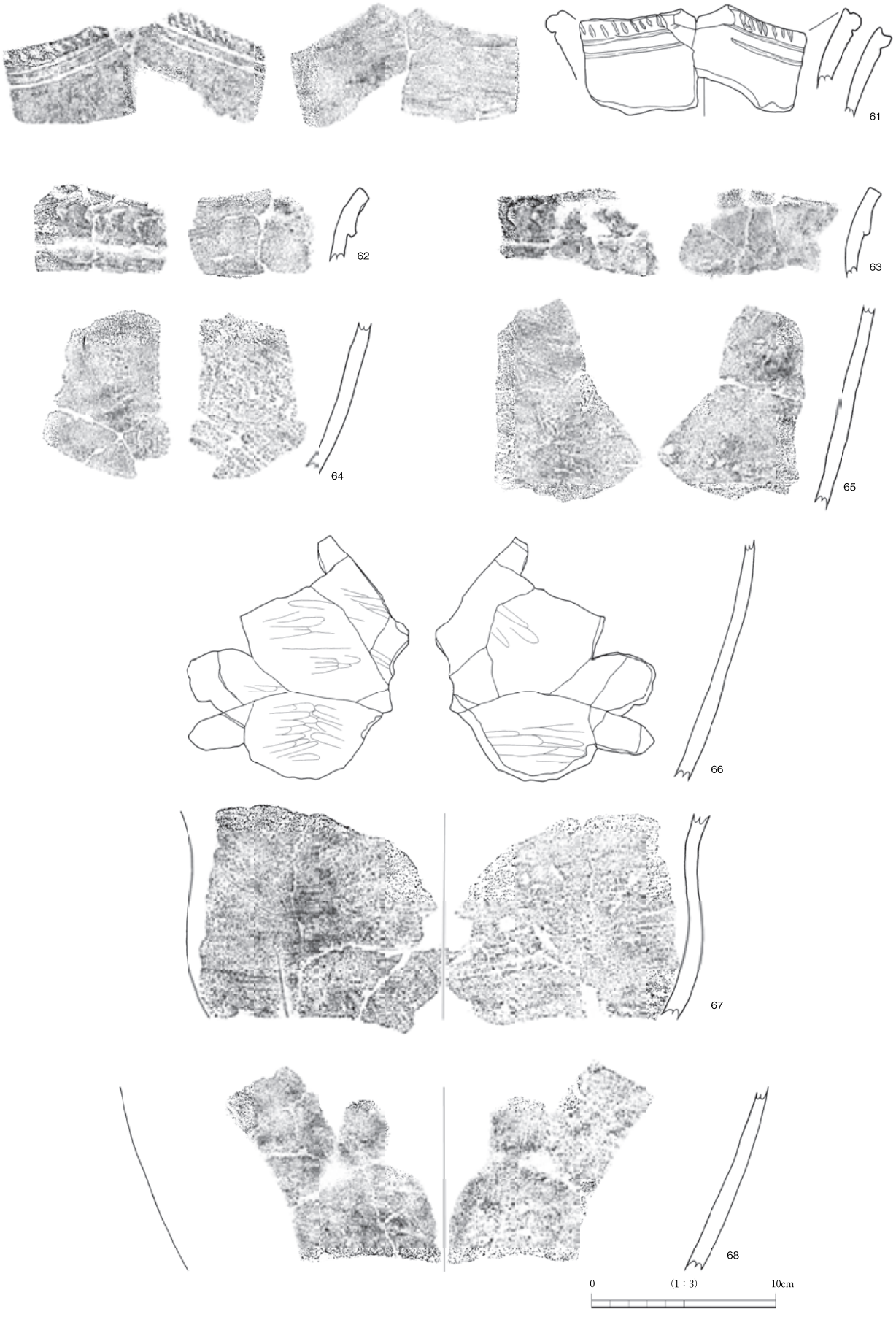




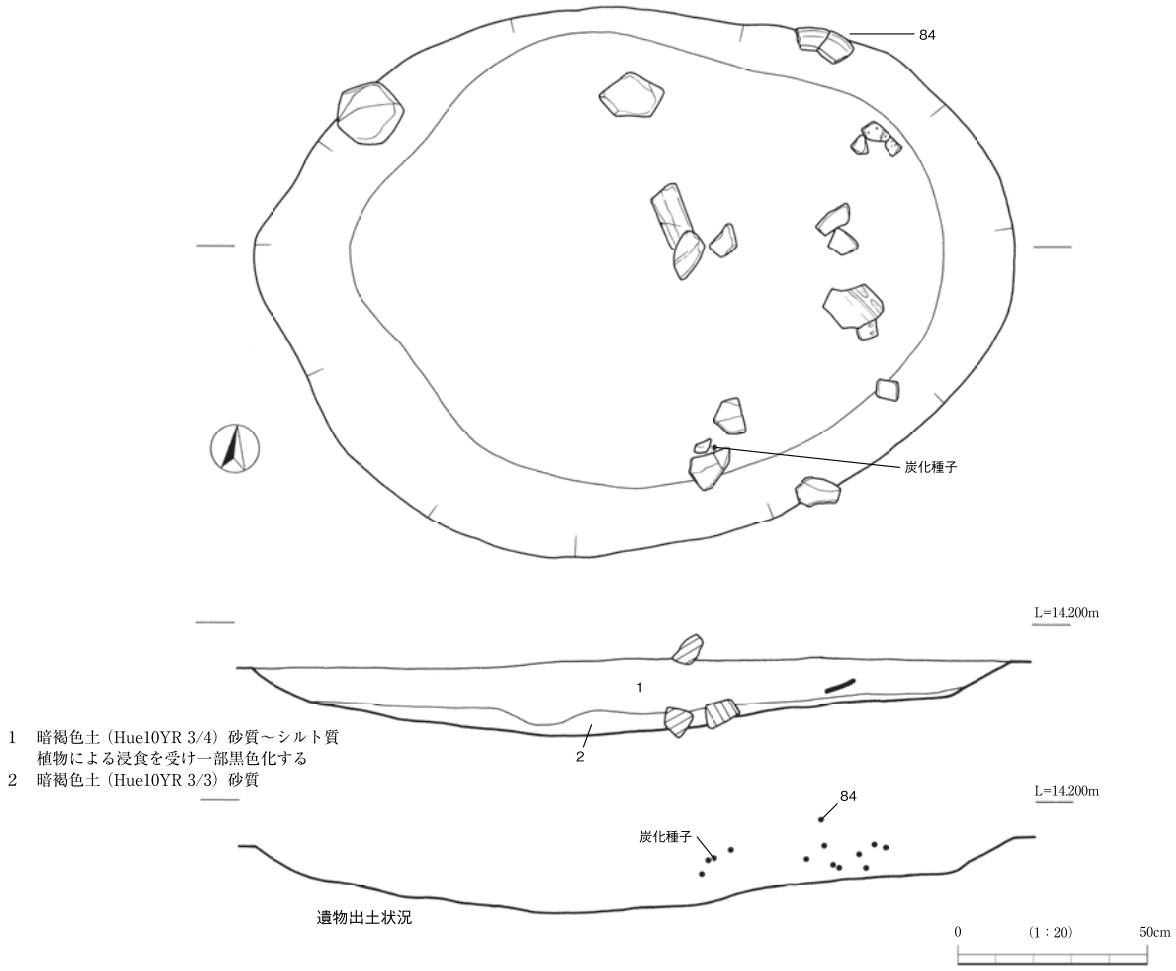
第 28 図　SK13・出土遺物①



第 29 図　SK13 出土遺物②



第 30 図　SK13 出土遺物③



第 31 図　SK20

石器　93 は砂岩製の磨石・敲石類である。被熱による破砕で，大部分が欠損している。表裏両面に磨面が形成される。

土器　94・98 は胎土に滑石を含む。縄文時代中期の阿高式系統の土器で，流れ込みである。94 は凹線により施文される。

95 は，皿形土器もしくは台付皿形土器の口縁部である。色調がにぶい黄橙色を呈し，器壁が厚く硬質である。胎土及び焼成の状況は SK20 の 75 に類似する。口縁部が肥厚し断面三角形状となり，わずかに内側に屈曲する。口唇部には沈線文が施され，波頂部には沈線状の刻目が 8 か所入れられる。口縁部の形状と施文方法は松山式土器と類似する。

97 は深鉢の胴部である。96 は，内外面にミガキが施される。鉢もしくは浅鉢の胴部である。99 は深鉢の胴部で，脚部付近である。胎土に黒雲母を含む。100 は台付皿形土器の脚部で，沈線と貝殻による刺突によって施文される。

SK61（第 35･36 図）

検出状況　SK61 は O － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。SI19 と隣接していて，南西側の一部が SI19 に切られる。

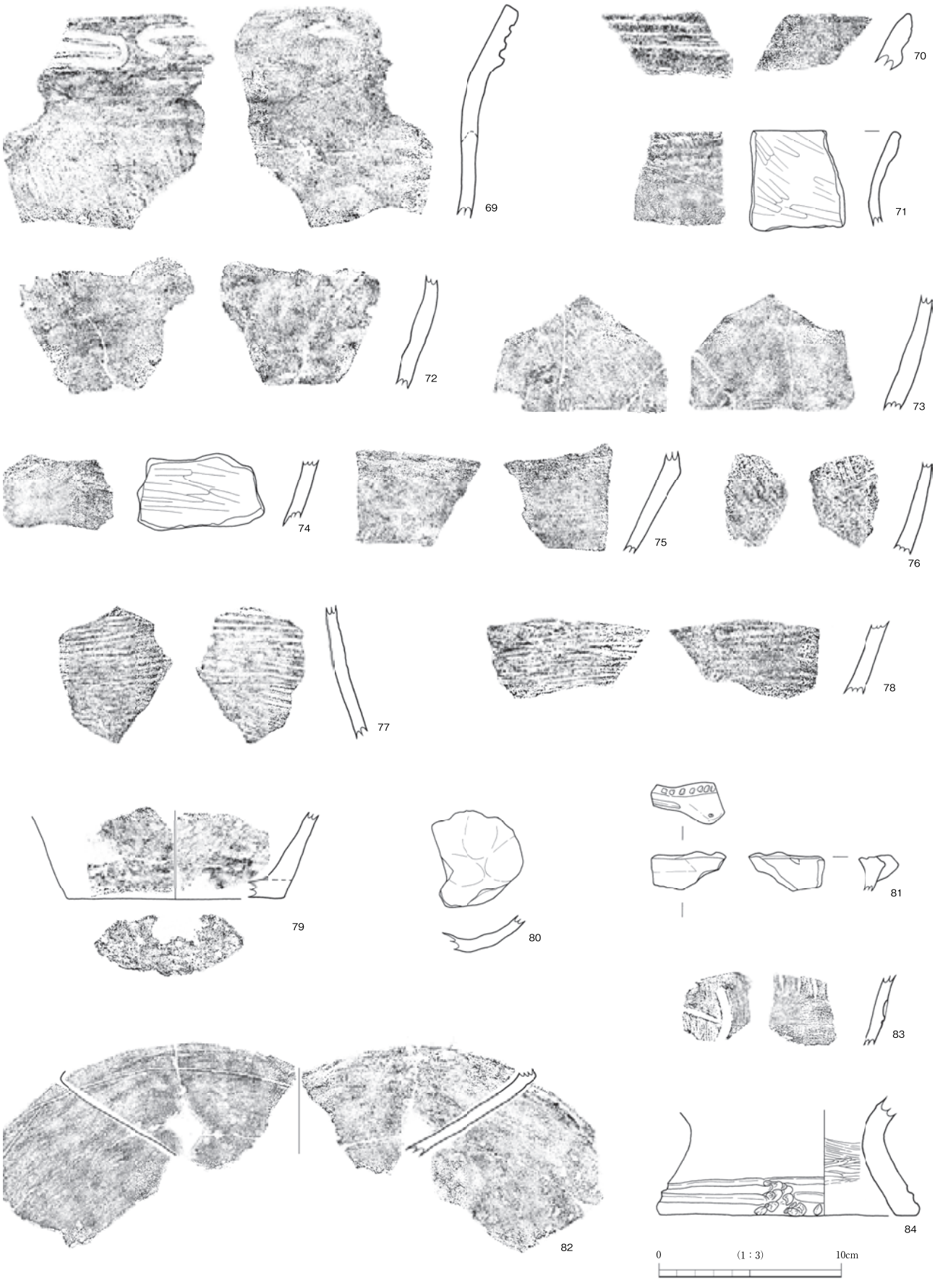
形状・規模　平面形は楕円形で，現状での規模は，長軸 104cm，短軸 74cm である。検出面からの深さ 20cm で，断面形はすり鉢状になる。

埋土　埋土は褐色土・にぶい黄褐色土をベースとして，床面付近の暗褐色土には炭化物が含まれる。

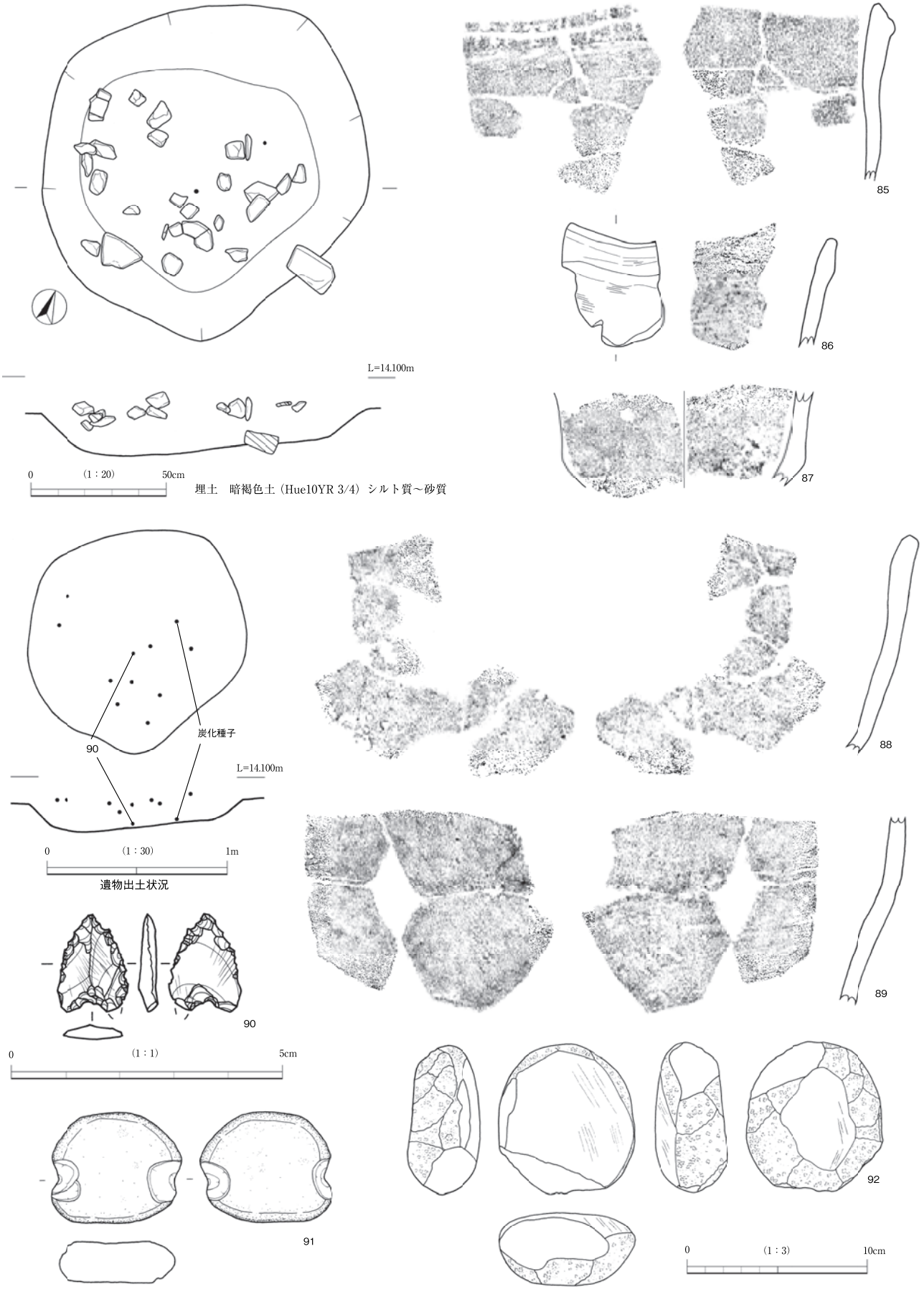
遺物　土器片 49 点，石器 4 点が出土した。そのうち土器 10 点，石器 4 点を図化した。

石器　101 ～ 104 は磨石・敲石類である。101 ～ 103 は砂岩製である。101 は，表裏両面に磨面が形成される。102 は目の粗い砂岩製で，短軸側の両面に敲打痕が認められる。103 は三角柱状の形状を呈し，長軸及び短軸に敲打痕が認められる。104 は安山岩製で，表裏両面に磨面が形成され，裏面にはわずかに凹みもみられる。短軸の側面には敲打痕も観察される。

土器　105･109 は，胎土に滑石を含む。105 は摩滅しているため表面は非常に滑らかである。口縁部の一部に渦巻状の突起をもち，口唇部及び口縁部外面に凹点文がみ



第 32 図　SK20 出土遺物



第 33 図　SK44・出土遺物

られる。109 は深鉢の胴部で，内面の摩滅が著しい。両者とも縄文時代中期の阿高式土器系統の土器で，流れ込みである。

106 は北久根山式土器の深鉢である。胎土に１～５mm 程度の鉱物を含む。胴部は張り出し，口縁部は外反する。口縁部はわずかに波状となる。口縁部には２本の沈線によって，「V」の字状の文様と横方向の沈線文が描かれる。口唇部には貝殻による刺突文が施される。

107 は深鉢の口縁部で，口縁部は肥厚し，断面三角形となる。市来式土器の系統である。108 は深鉢の胴部である。

110 ～ 112 は磨消縄文・擬似縄文が施される。110 は，外面は灰黄色，内面は黒褐色を呈し，胎土に３～５mm 程度の鉱物を含む。口縁部がわずかに肥厚し，外反する。口縁部の外面には貝殻による擬似縄文が施される。胴部には沈線文と，沈線間に擬似縄文が施文される。内面には，丁寧なミガキが施され，黒色を呈する。北久根山式土器の鉢に該当する。

111 は，SK57 の埋土中から出土したものと接合した。胎土に１～２mm 程度の白色の鉱物を多く含む。口縁部は肥厚し，文様帯となり，沈線文と磨消縄文が施される。口唇部は平坦に成形され，沈線文と刺突文が施される。いわゆる縁帯文土器の初期のものと考えられる。SK61 と SK57 は約 8.5m の距離がある。

112 は胴部の破片で，沈線文と擬似縄文，渦巻文が施される。113 は，鉢もしくは浅鉢の底部である。底部外面に何らかの圧痕が認められる。114 は深鉢の底部である。

（ウ）３類

３類は５基検出された。

SK49（第 37 図）

検出状況　SK49 は，M － 24・25 区，Ⅴ層上面で検出された。検出時は，砂岩・安山岩の礫が散乱している状況であり，東西方向に長い楕円形の土坑を想定した。

形状・規模・埋土　調査の結果，66 × 53cm の土坑①と，77 × 50cm の土坑②が並列することが判明した。検出面からの深さは，土坑①が 16cm，土坑②が８cm である。土坑①・②ともに埋土は黄褐色土である。

遺物　遺物は土器片２点，礫 22 点が出土した。礫には使用痕等は観察されなかった。土器２点を図化した。

115 はⅢ層出土の土器片と接合した。内外面に丁寧なミガキが施され，器壁は薄い。縄文時代晩期の精製の浅鉢と想定される。外面には焼成後につけられた線刻状のものがみられる。116 は，深鉢の胴部である。器壁が厚い。晩期に該当するものと考えられる。

SK50（第 38 図）

検出状況・切り合い　SK50 は，M － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。遺構の南東側は中世の土坑（SK15）に切られる。また，埋土堆積状況の検討の結果，SK ４を切ることが判明したが，SK ４調査時に判明したため，遺構の北東側は SK ４の調査時に掘削した。

形状・規模　想定される平面形は楕円形で，現状での規模は，長軸 123cm，短軸 80cm，検出面からの深さ 10cm である。断面形は，床面は平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は黄褐色土で，SK ４の埋土よりも明るい。

遺物　遺物は，土器４点，石器１点，礫３点が出土した。土器１点と石器１点を図化した。

土器　117 は，口縁が肥厚し，断面が三角形を呈する。市来式土器である。２本の沈線文がみられる。表面の摩滅が著しい。

石器　118 は安山岩製の磨石・敲石類である。表裏両面に磨面と凹みが観察される。磨面は面の全体ではなく，限定的に観察される。側面には敲打痕がみられる。

SK51（第 39･41 図）

検出状況　SK51 は，M － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 158cm，短軸 74cm，検出面からの深さ９cm である。断面形は，床面は平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。

埋土　埋土は褐色土で，Ⅴ層に類似する。

遺物　土器８点，石器２点が出土した。土器４点，石器２点を図化した。

石器　119 は安山岩製の磨石・敲石類である。表面の中央に顕著な凹みがみられる。本遺跡から出土している他の磨石・敲石類と比較してサイズが大きいため，台石としての機能も推定される。

127 は石皿・台石の破片である。SK42 と SX64 から出土したものと接合した。SK42 の項目で報告する。

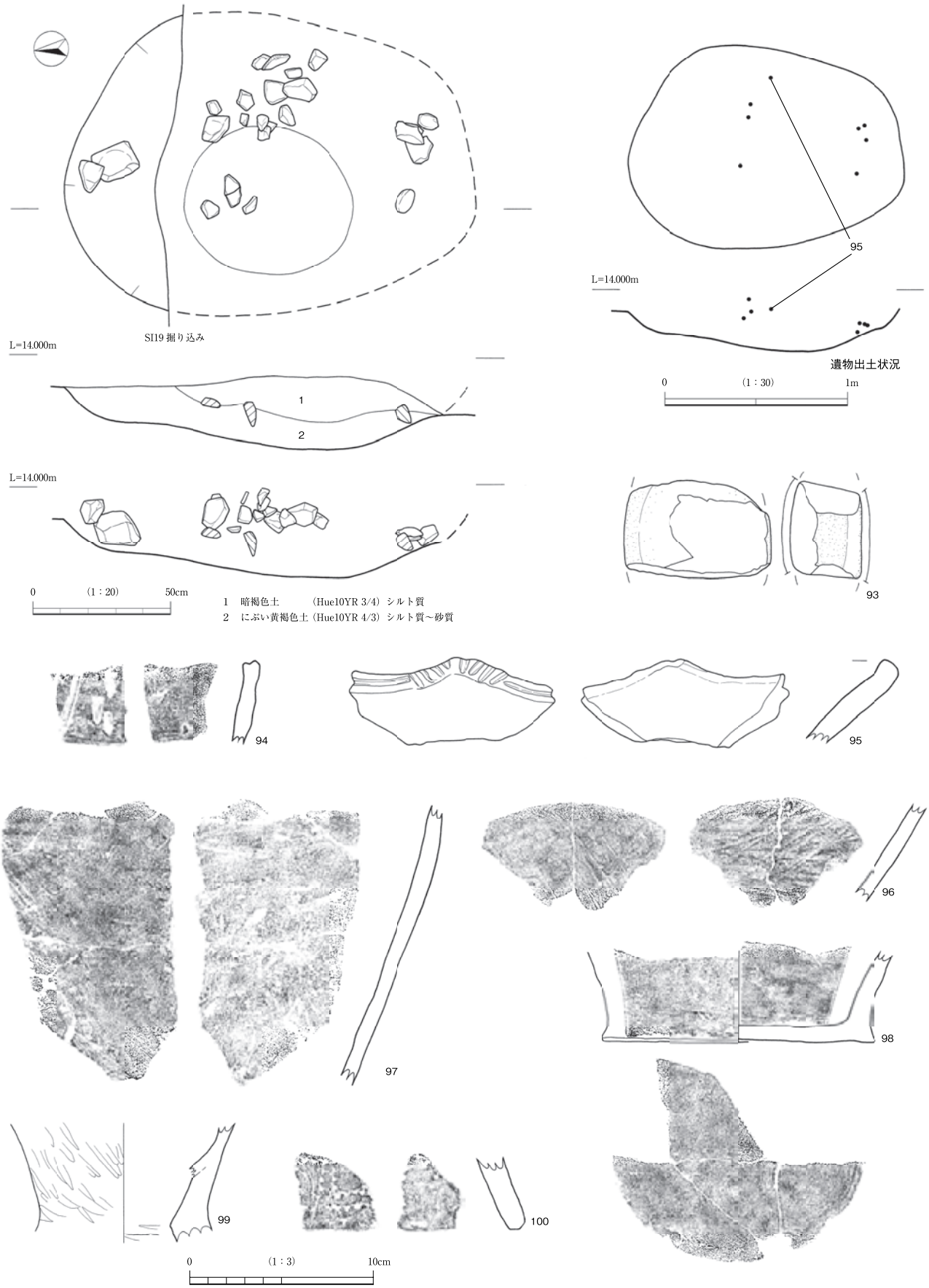
土器　120 は深鉢の胴部である。121・122 は鉢もしくは浅鉢の胴部で，磨消縄文と沈線文の組み合わせがみられる。123 は浅鉢の底部である。胎土中に２～８mm 程度の鉱物が含まれる。

SK42（第 40・41 図）

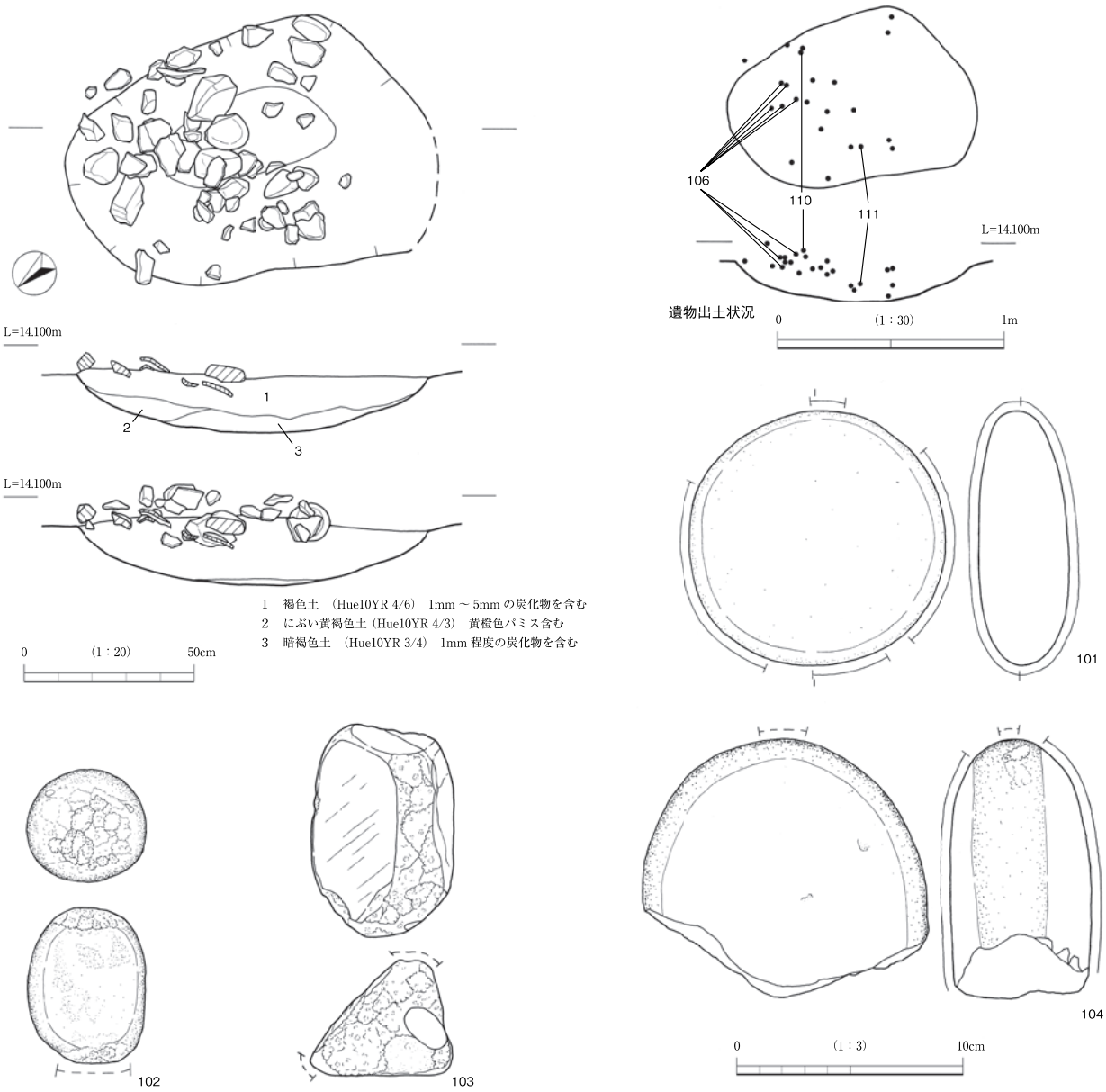
検出状況　SK42 は O － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。検出時に礫が散乱している状況で，礫を取り上げた後に，土坑が検出された。植物による浸食を受けており，土坑の残存状況は悪い。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 98cm，短軸 71cm である。検出面からの深さが６cm 程度だが，床面を特定することはできなかった。

遺物　遺物は土器片２点，石器２点が出土した。



第 34 図　SK60・出土遺物



第 35 図　SK61・出土遺物①

土器　125・126 は深鉢の胴部である。126 は，内外面にミガキが施される。

石器　124 は花崗岩製の磨石・敲石類である。約 2 分の 1 が欠損している。表裏面に磨面が形成され，側面に敲打痕が確認される。

127 は安山岩製の石皿・台石で，約 3 分の 1 が欠損している。残存部は 3 点に破損しており，それぞれ SK42・SK51・SX64 から出土したものが接合した。礫周辺は敲打により長円形に整形されている。使用面には顕著な光沢が見られ，明確な凹みが確認される。

各遺構間の距離は，SK42 － SK51 間が約 24.5m，SK42 － SX64 間が約 11m，SK51 － SX64 間が約 22m である。

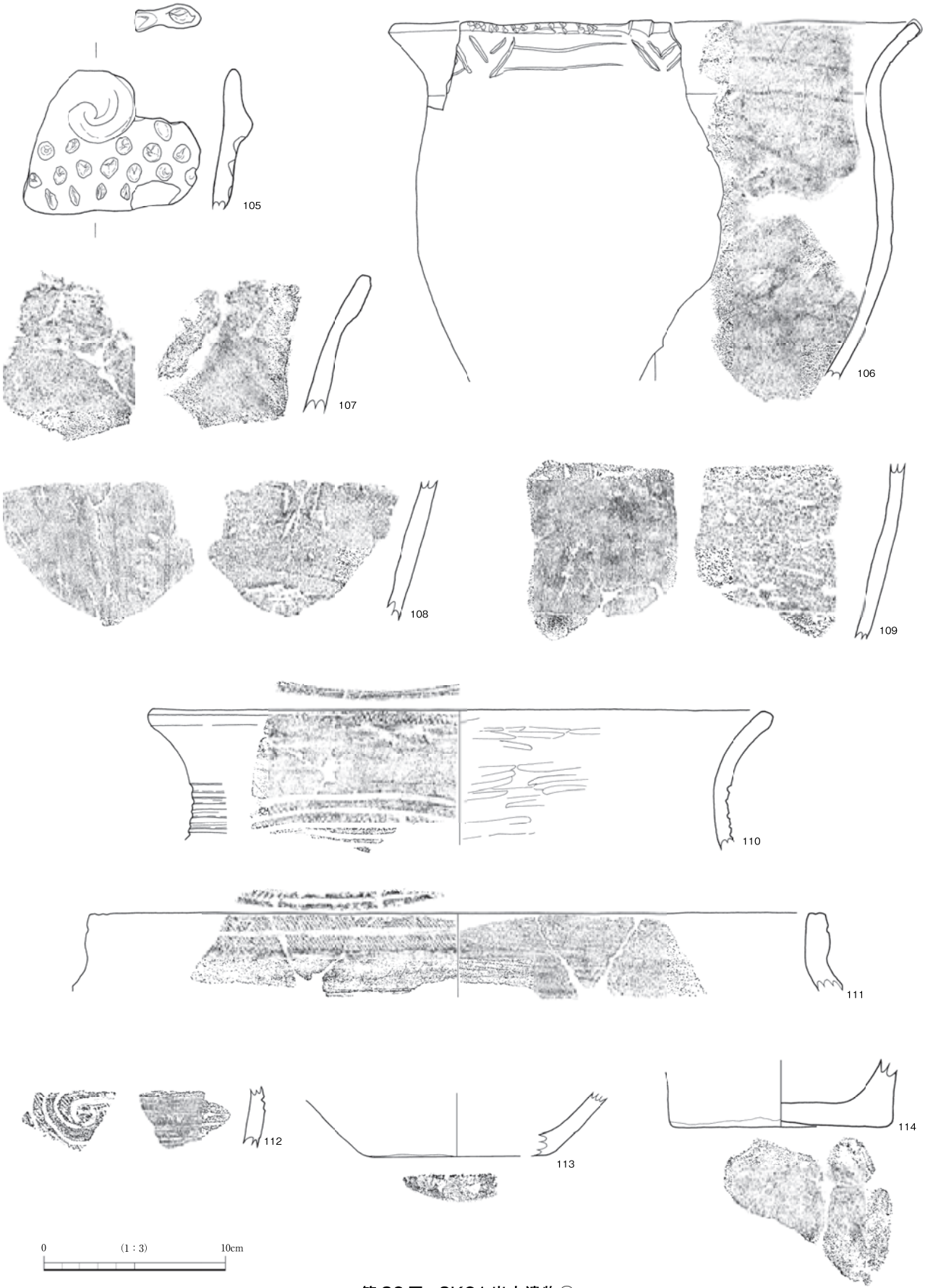
SK43（第 42 図）

検出状況　SK43 は O － 24 区で検出された。SK43 は，土層が横転している地点に掘り込まれていた。

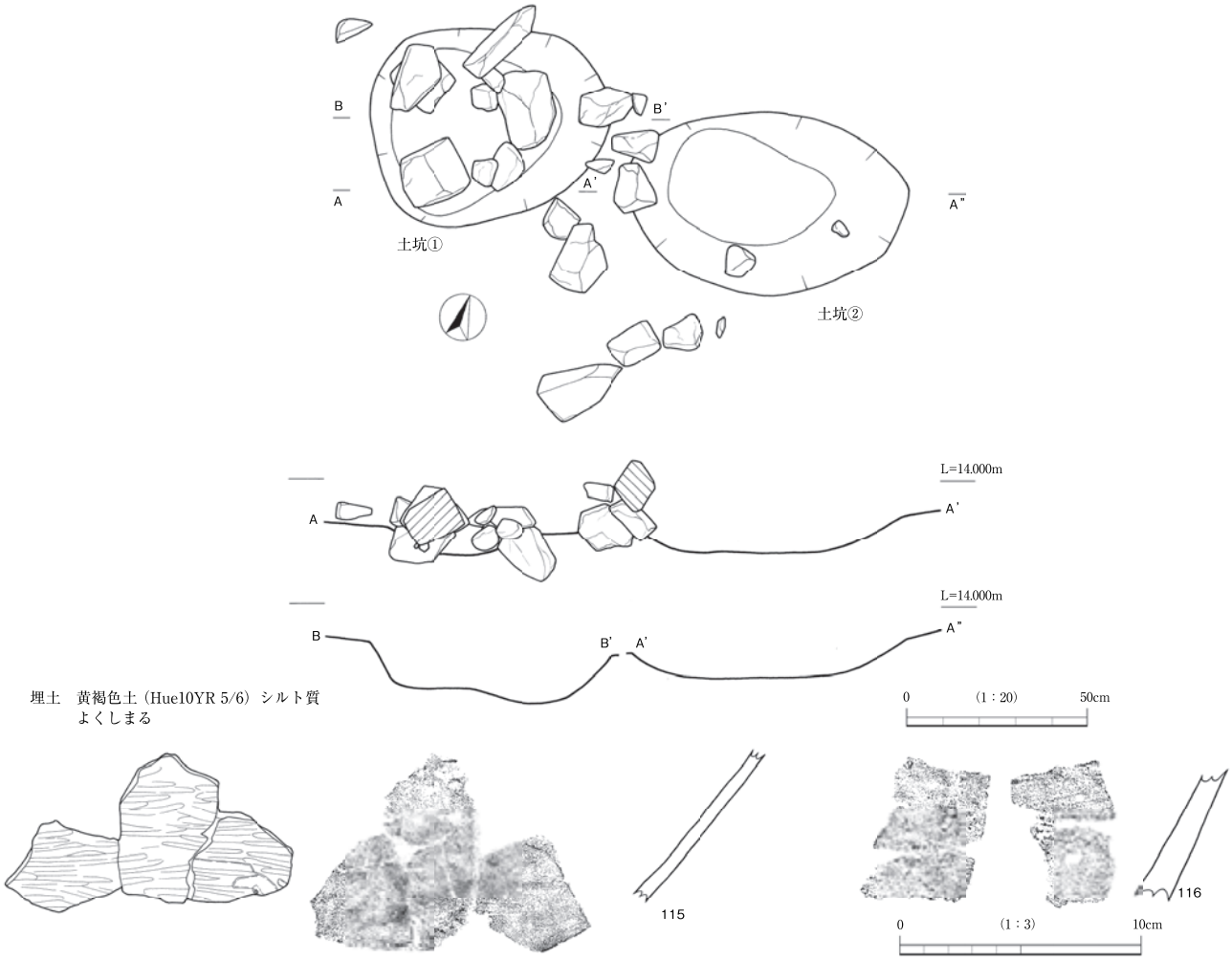
形状・規模　平面形は円形で，規模は直径 138cm である。検出面からの深さは 23cm で，断面形はすり鉢状になると想定される。

埋土　埋土は褐色で，植物による浸食を受ける。

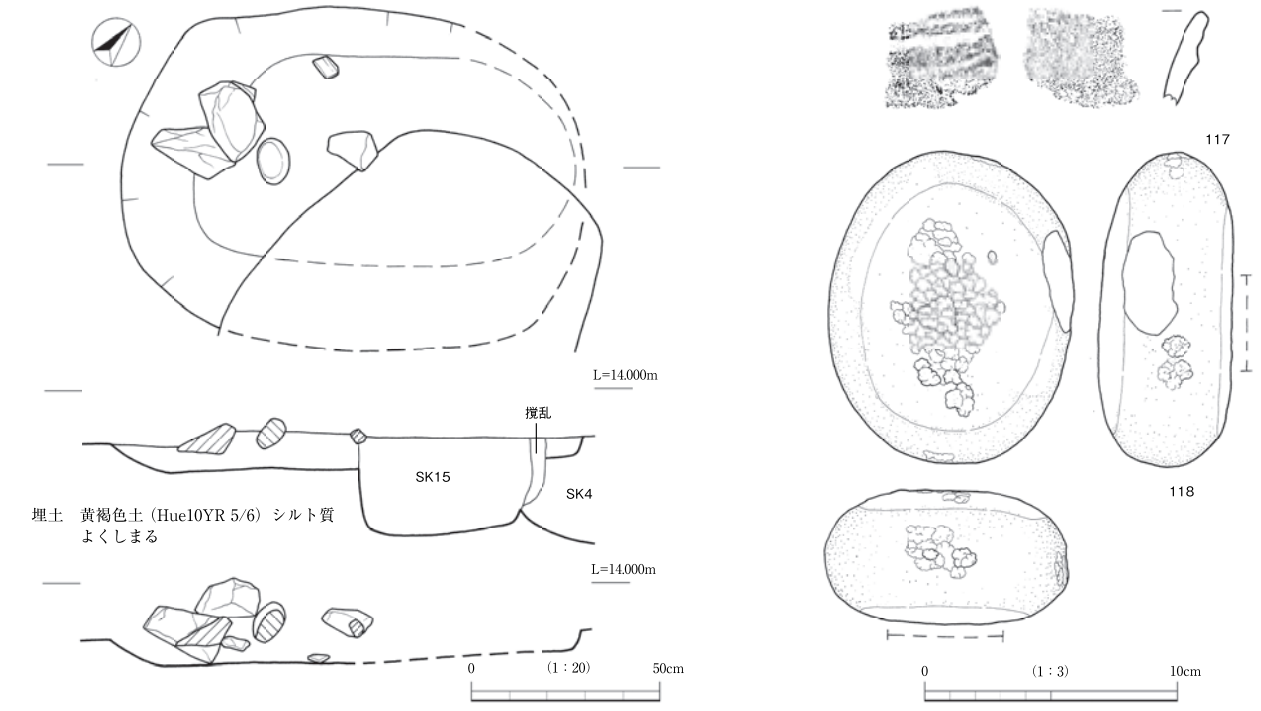
礫の検出状況　埋土中からは，土坑の中央からやや北寄りに大型の安山岩が 2 点，その他に拳大の礫が 8 点，合



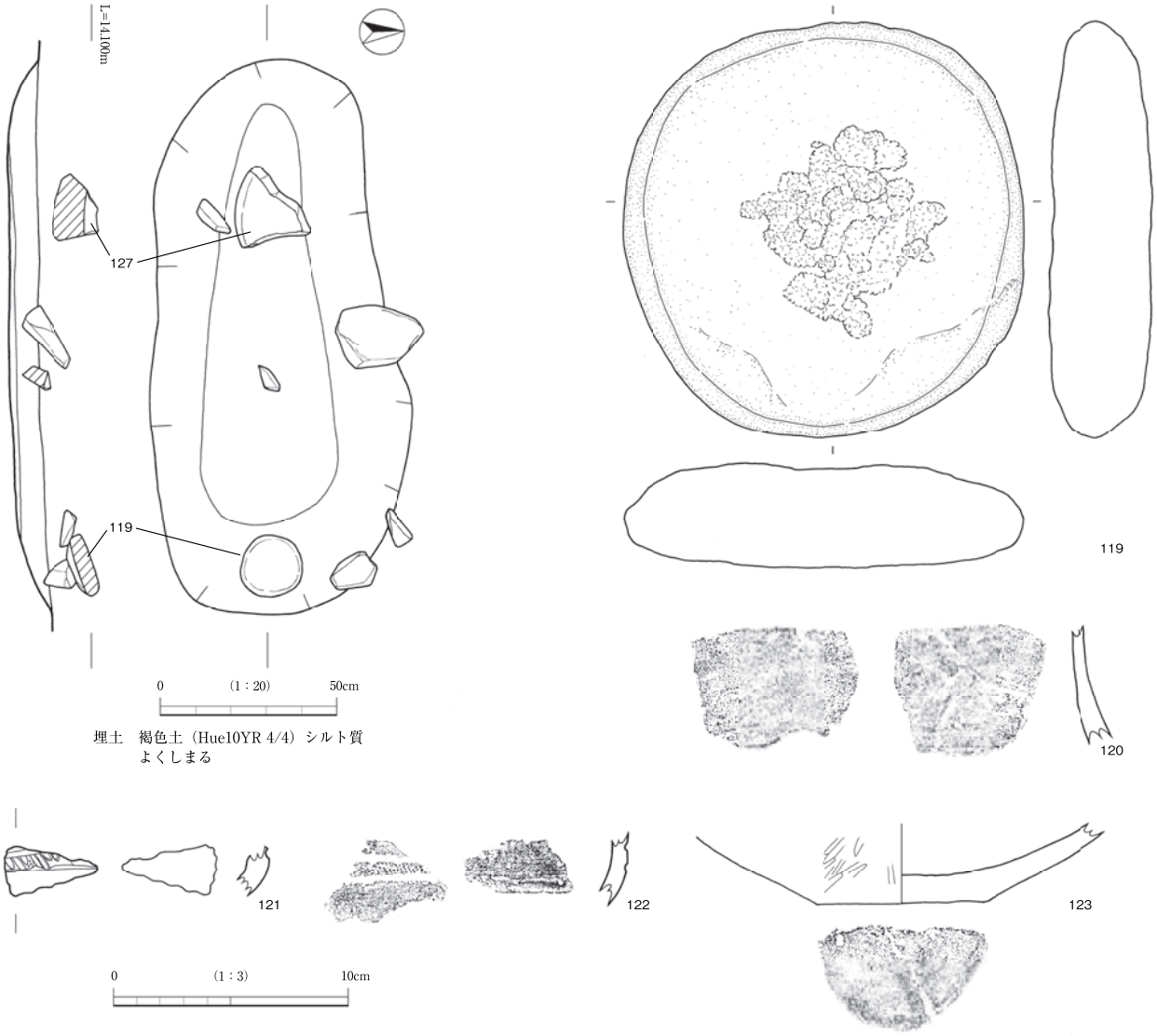
第 36 図　SK61 出土遺物②



第 37 図　SK49・出土遺物



第 38 図　SK50・出土遺物



第 39 図　SK51・出土遺物

計 10 点の礫が出土した。大型の安山岩は，平らな面が向かい合った状態で検出されたが，いずれも使用痕は確認されなかった。

（エ）　4 類

4 類は 5 基検出された。平面の規模が 50 ～ 80cm 程度のものを 4 類としたが，検出面からの深さや，礫の有無など様々なものがある。

SK48（第 43 図）

検出状況・形状・規模　SK48 は N － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。検出時は配石状遺構と想定していたが，トレンチを設定し，土坑の有無を確認した結果，72 × 40cm の楕円形の土坑①と，35 × 30cm の円形の土坑②が検出された。

埋土　土坑①・②ともに埋土は褐色土である。

遺物　土坑①から石皿・台石が 1 点出土した。128 は安山岩製で，欠損している。一部に被熱による赤化がみられ，二次利用された可能性が高い。使用面には顕著な使用痕は確認されないものの，浅い凹みがあり，片側のみに縁が残っている。

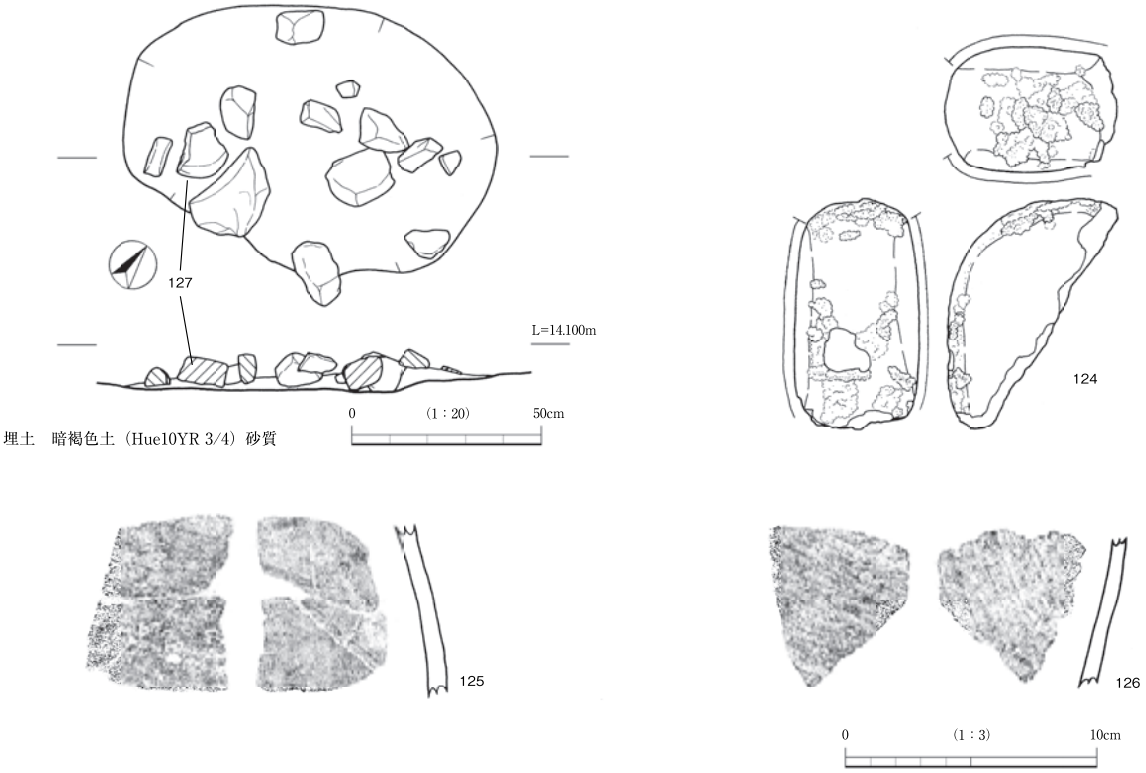
SK46（第 44 図）

検出状況　SK46 は O － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。植物による浸食を受け，残存状況は悪い。

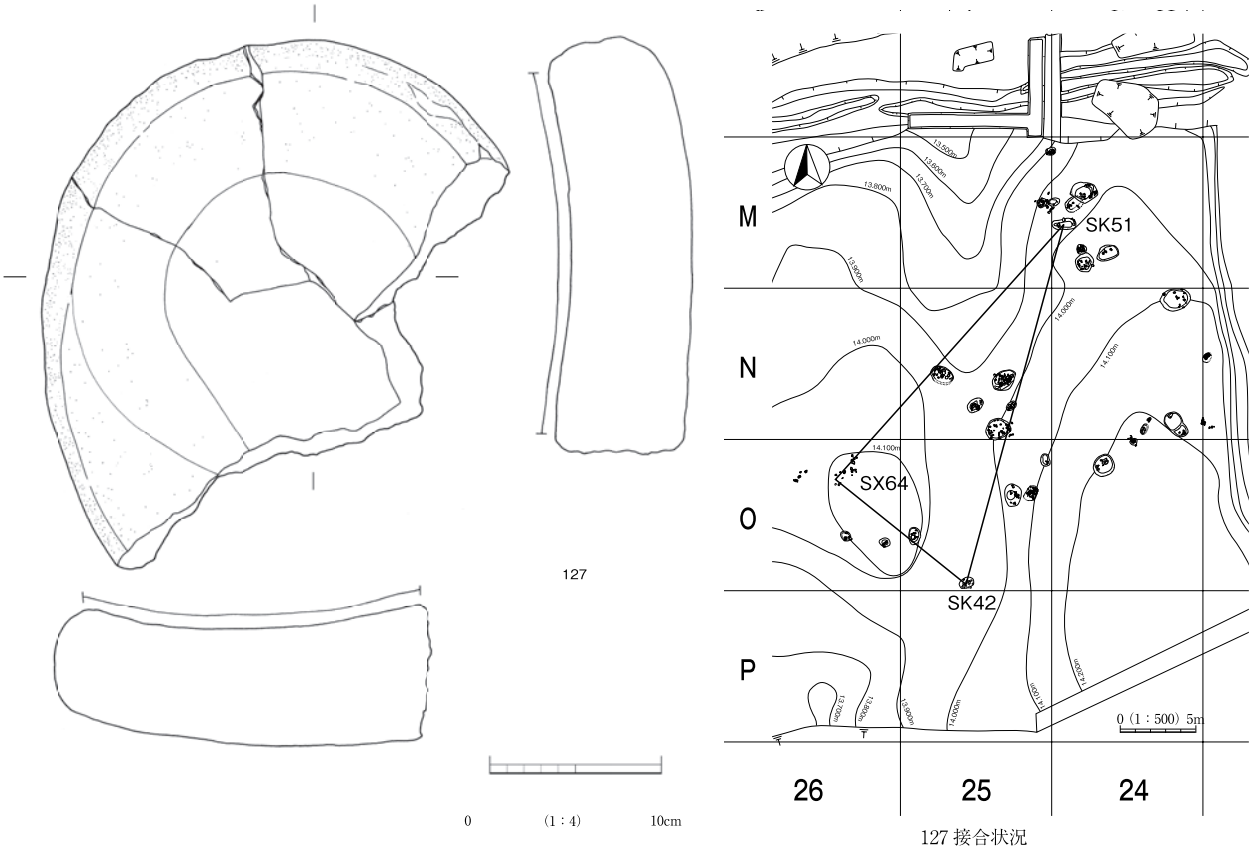
形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 82cm，短軸 60cm，検出面からの深さ 10cm である。

埋土　埋土は褐色土で，植物の浸食を受けしまりがない。

遺物　遺物は，検出面で土器片 2 点と礫 1 点が出土した。129 は深鉢の底部である。胎土に滑石を含み，内外面にミガキが施される。

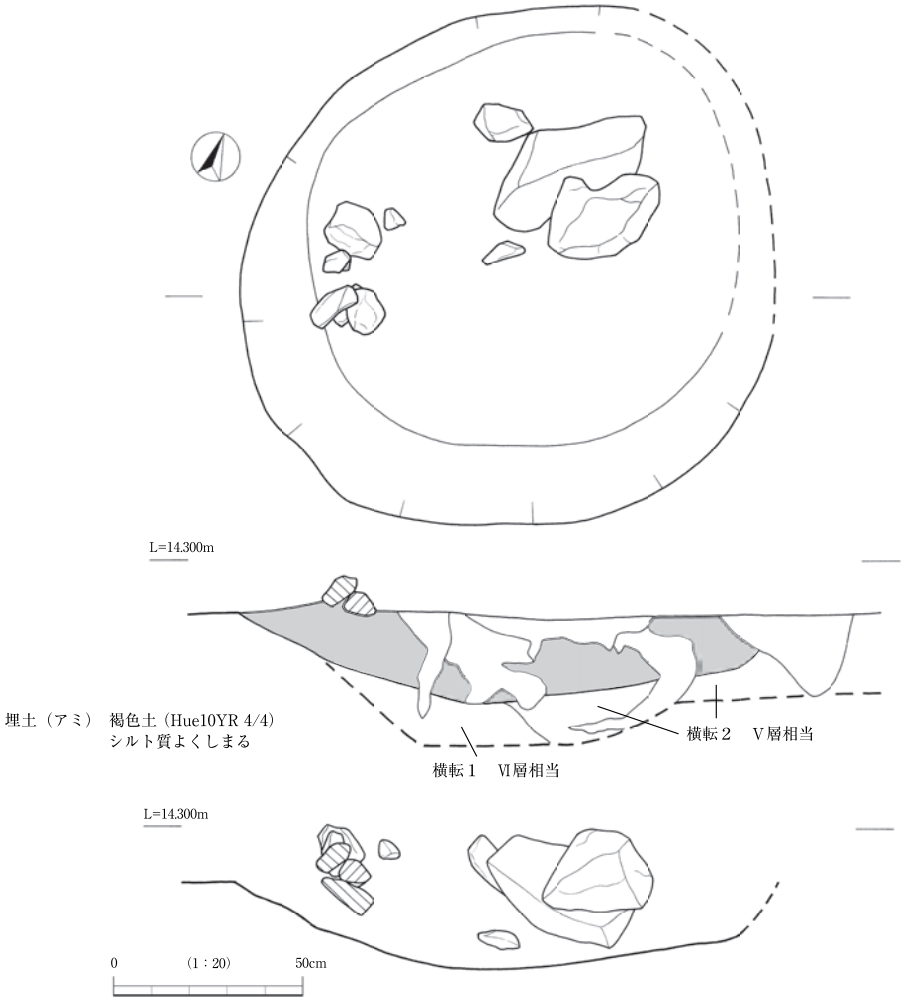


第 40 図　SK42・出土遺物

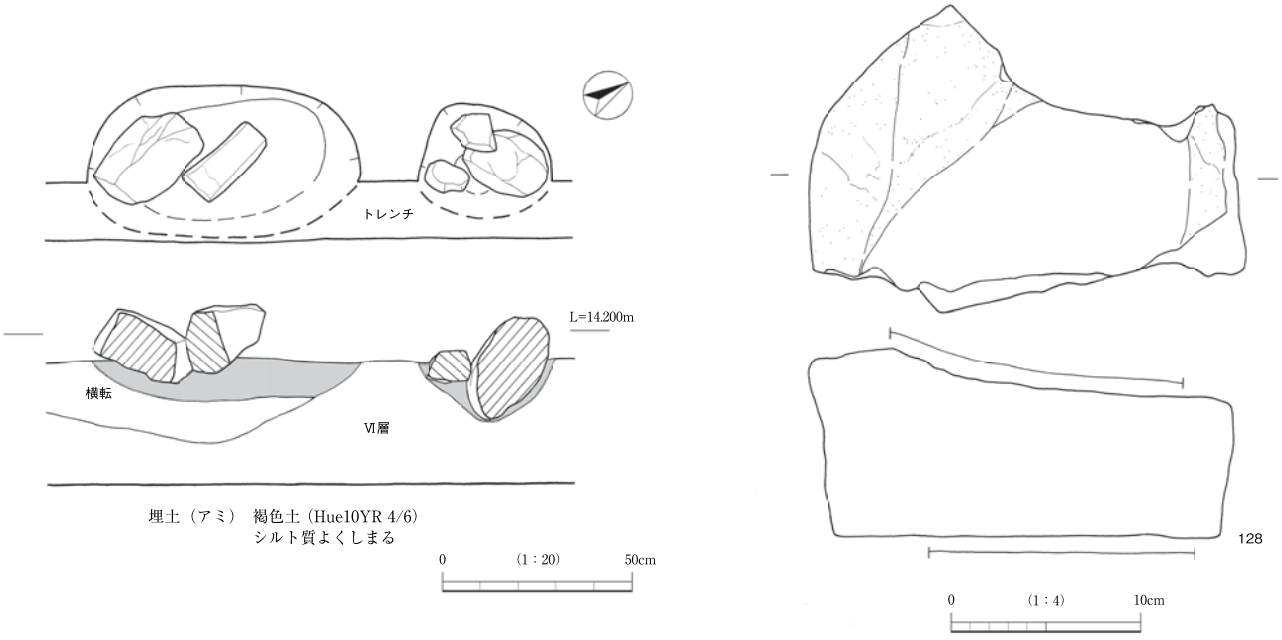


127 接合状況

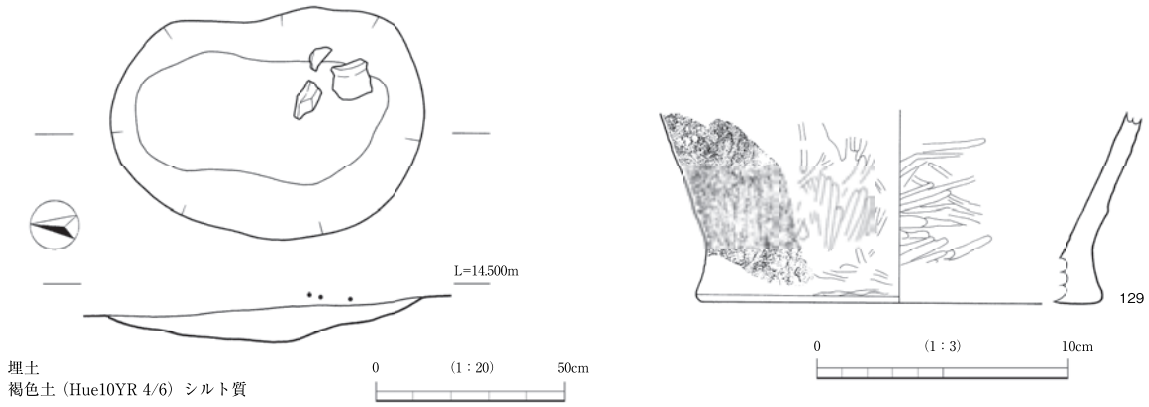
第 41 図　SK51・SK42・SX64 出土石器　接合状況



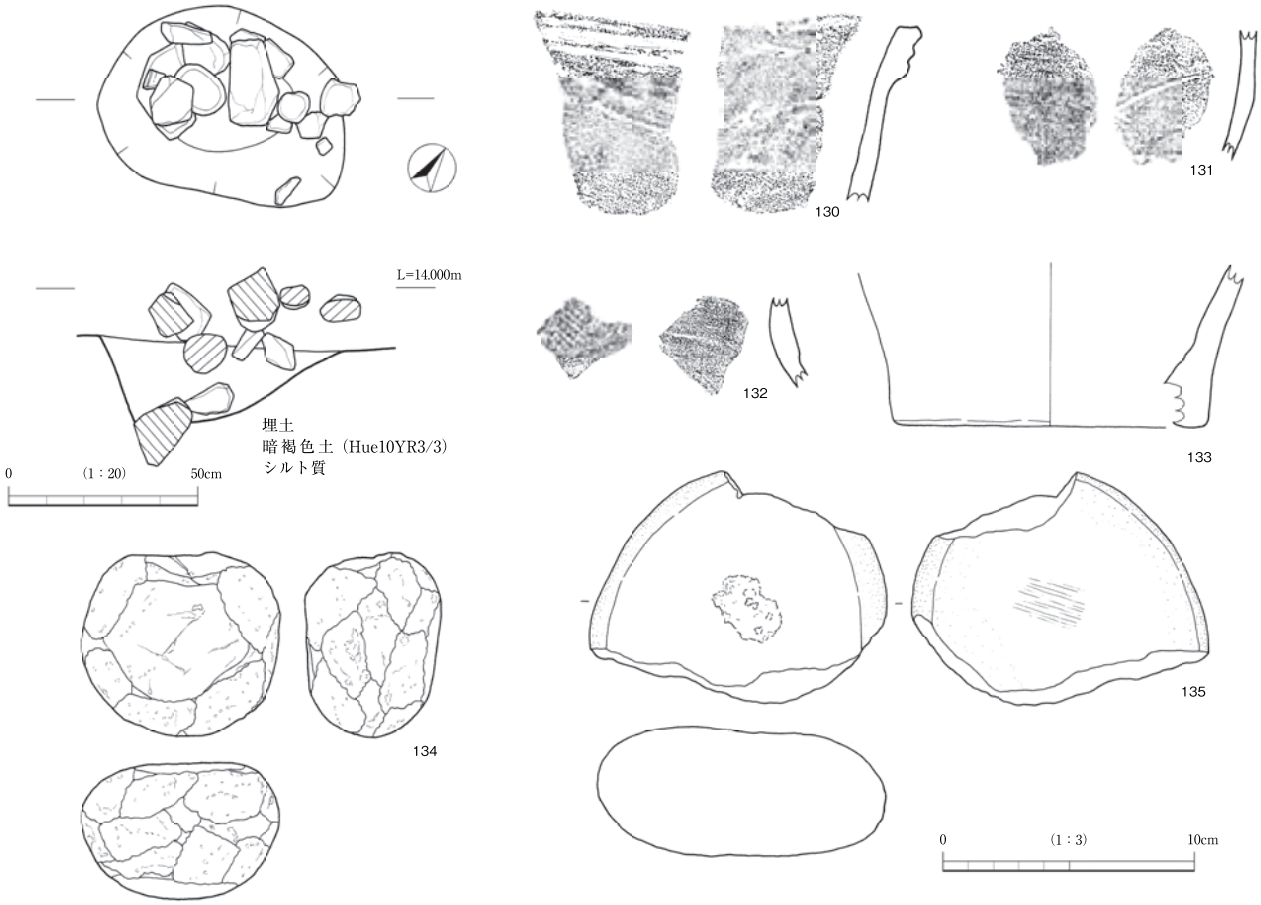
第 42 図　SK43



第 43 図　SK48・出土遺物



第 44 図　SK46・出土遺物



第 45 図　SK69・出土遺物

SK69（第 45 図）

検出状況　SK69 は M － 24・25 区，Ⅵ層上面で検出された。

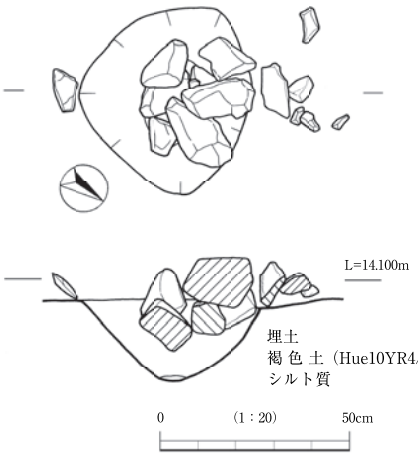
形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 64cm，短軸 48cm である。検出面からの深さ 22cm で，植物による浸食で，床面は一部破壊されている。

埋土　埋土は暗褐色土で，植物の浸食を受け，しまりがない。

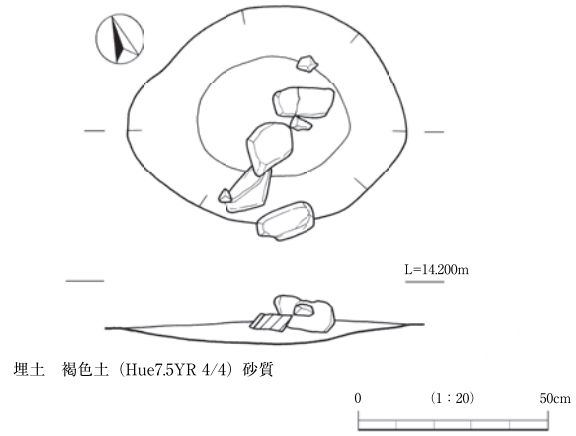
遺物　遺物は土器片 12 点，石器２点，礫 10 点が出土した。土器４点，石器２点を図化した。

土器　130 は深鉢である。Ⅲ層出土のものと接合した。口縁部を肥厚させ文様帯とし，２本の沈線文が施される。口唇部は平坦に成形される。131 は深鉢の胴部である。133 は深鉢の底部で，表面の摩滅が著しい。

132 は磨消縄文系の土器である。器面は黒色を呈するが，一部に赤色顔料を塗布されていた痕跡が認められる。



第 46 図　SK47



第 47 図　SK58

石器　134 は石灰岩製の磨石・敲石類である。側面に顕著な敲打痕が確認され，使用により形状は算盤玉状になる。135 は安山岩製の磨石・敲石類で，被熱により破砕する。表面に磨面が形成される。表面の中央に凹みが観察される。

SK47（第 46 図）

検出状況　SK47 は，O － 24 区，Ⅴ層上面で礫が露出する状態で検出された。

形状・規模　平面形は南西がわずかに突き出した円形で，規模は長軸 49cm，短軸 46cm，検出面からの深さ 21cm である。

埋土　埋土は褐色土である。

礫の検出状況　礫は土坑の北東側に集中して 13 点出土した。いずれも使用痕は確認されなかった。

SK58（第 47 図）

検出状況・埋土　SK58 は O － 26 区，Ⅵ層上面で，礫が露出した状態で検出された。埋土は褐色土で，植物による撹乱を受けしまりがない。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 74cm，短軸 57cm，検出面からの深さ 6 cm である。なお，遺物は出土しなかった。

イ　配石状遺構

石器及び礫がまとまって検出されたが，掘り込みを確認できなかったものを配石状遺構とした。配石状遺構は４基検出された。

SX52（第 48 図）

検出状況・規模　SX52 は O － 26 区，Ⅵ層上面で，石皿･台石２点と礫 10 点が 140 × 50cm の範囲にまとまった状況で検出された。

遺物　土器１点と石器２点が出土した。

土器　136 は，外面は黒色を呈し，胎土中に１～２mm 程度の白色の鉱物が含まれる。

石器　137・138 は石皿・台石である。両者とも立位に近い状況で検出された。137 は安山岩製である。全面に被熱による剥落が見られ，わずかに残された使用面に光沢が見られる。凹みはない。

138 は砂岩製であり，約２分の１が欠損している。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。使用面は表裏ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られるが，凹みはない。表面には磨面と共に敲打痕が確認される。

SX64（第 49 図）

検出状況・規模　SX64 は O － 26 区，Ⅵ層上面で，石皿・台石の破片１点と礫８点が 116 × 60cm の範囲にまとまって検出された。

石器　127 は SK51 ・ SK42 から出土したものと接合した。詳細は上述のとおりである。

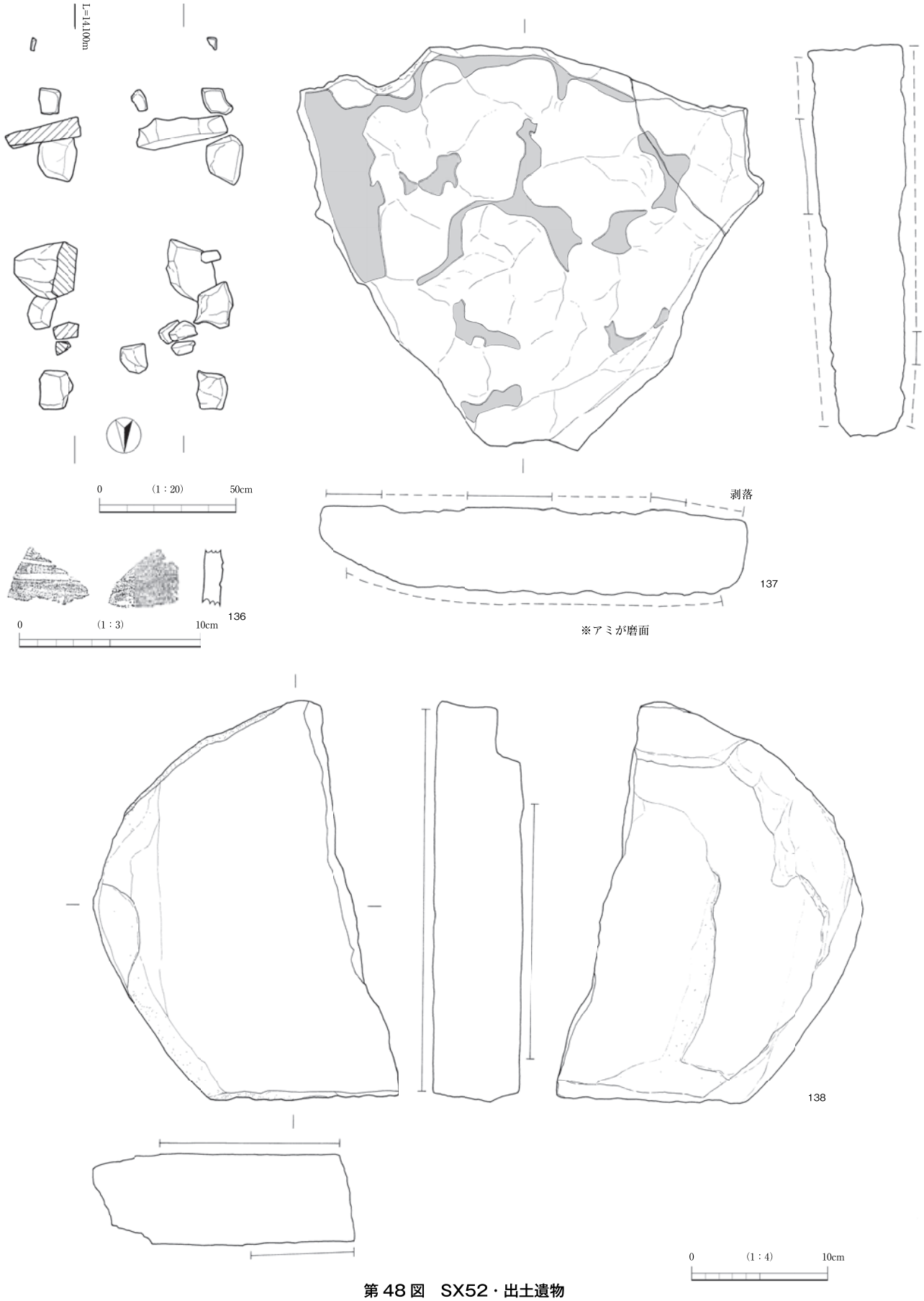
SX65（第 50 図）

検出状況・規模　SX65 は O － 26 区，Ⅵ層上面で，礫６点が 115 × 55cm の範囲にまとまって検出された。礫に使用痕は認められなかった。

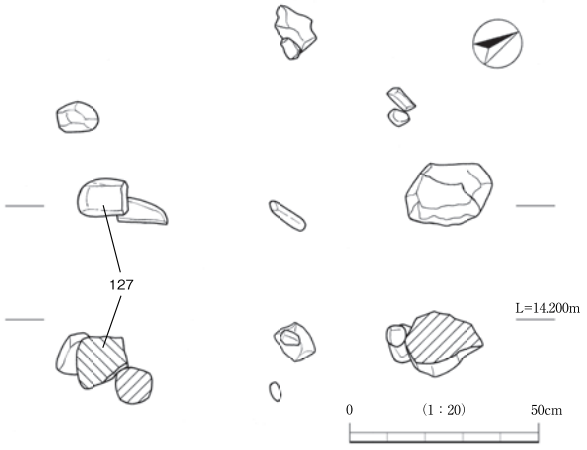
SX66（第 51 図）

検出状況・規模　SX66 は N － 23・24 区，Ⅴ層上面で検出された。磨石・敲石類１点と礫９点が，100 × 58cm の範囲にまとまった状況で検出された。礫の１点は日東産の黒曜石の原石である。

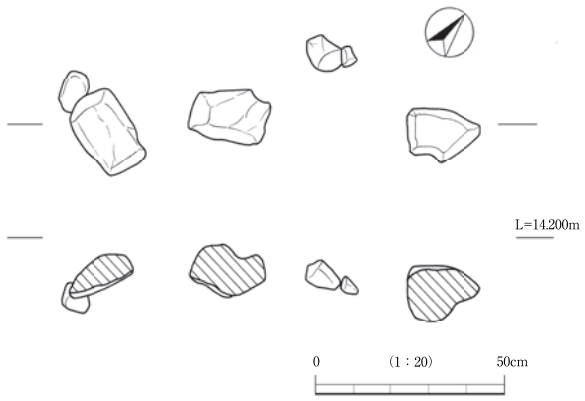
石器　139 は安山岩製の磨石・敲石類である。表裏両面に磨面が形成され，表面には凹みもみられる。側面には敲打痕が確認される。



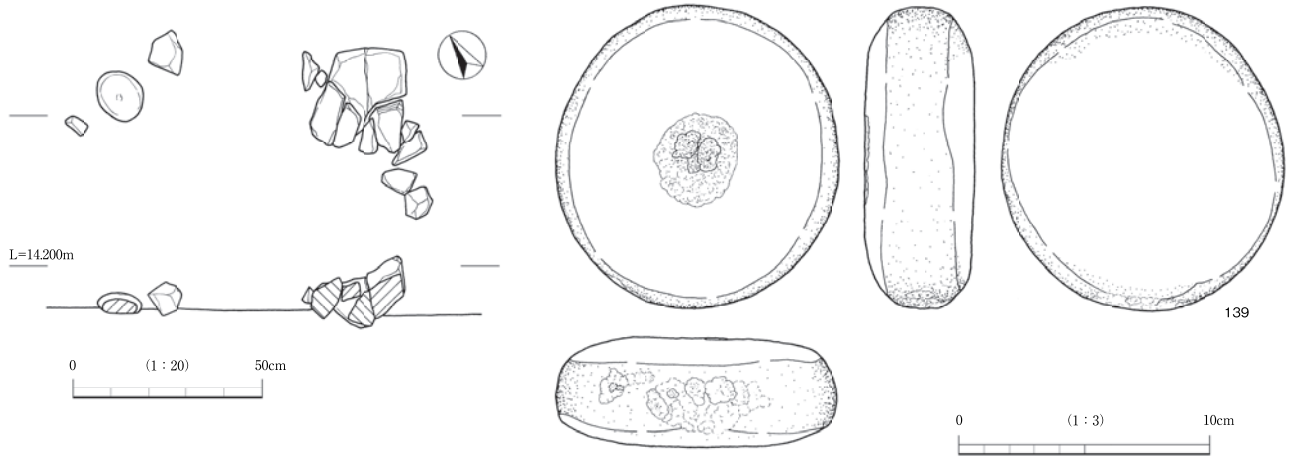
第 48 図　SX52・出土遺物



第 49 図　SX64



第 50 図　SX65



第 51 図　SX66・出土遺物

ウ　その他

その他は，埋土や検出状況は縄文時代の土坑と類似するが，遺物の混入がみられるなど時代決定の不確定なものである。２基を報告する。

SK45（第 52 図）

検出状況　SK45 は M － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。西側 20cm には SK44 が隣接する。

形状・規模　平面形は楕円形である。西側がやや突き出しているのは，調査時に掘り過ぎたためである。規模は長軸 151cm，短軸 99cm，検出面からの深さ 13cm である。

埋土　埋土はにぶい黄褐色土で，隣接する SK44 の埋土よりも明るい。埋土は他の縄文時代のものと類似する。

遺物　遺物は土器片が 15 点出土した。４点を図化した。

140 は土器の底部である。器形は半球状で，内外面にミガキが施される。型式は不明だが，古墳時代の埦の可能性が想定される。140 は床面付近から出土しているが，混入か遺構に伴うものなのか判断できなかった。

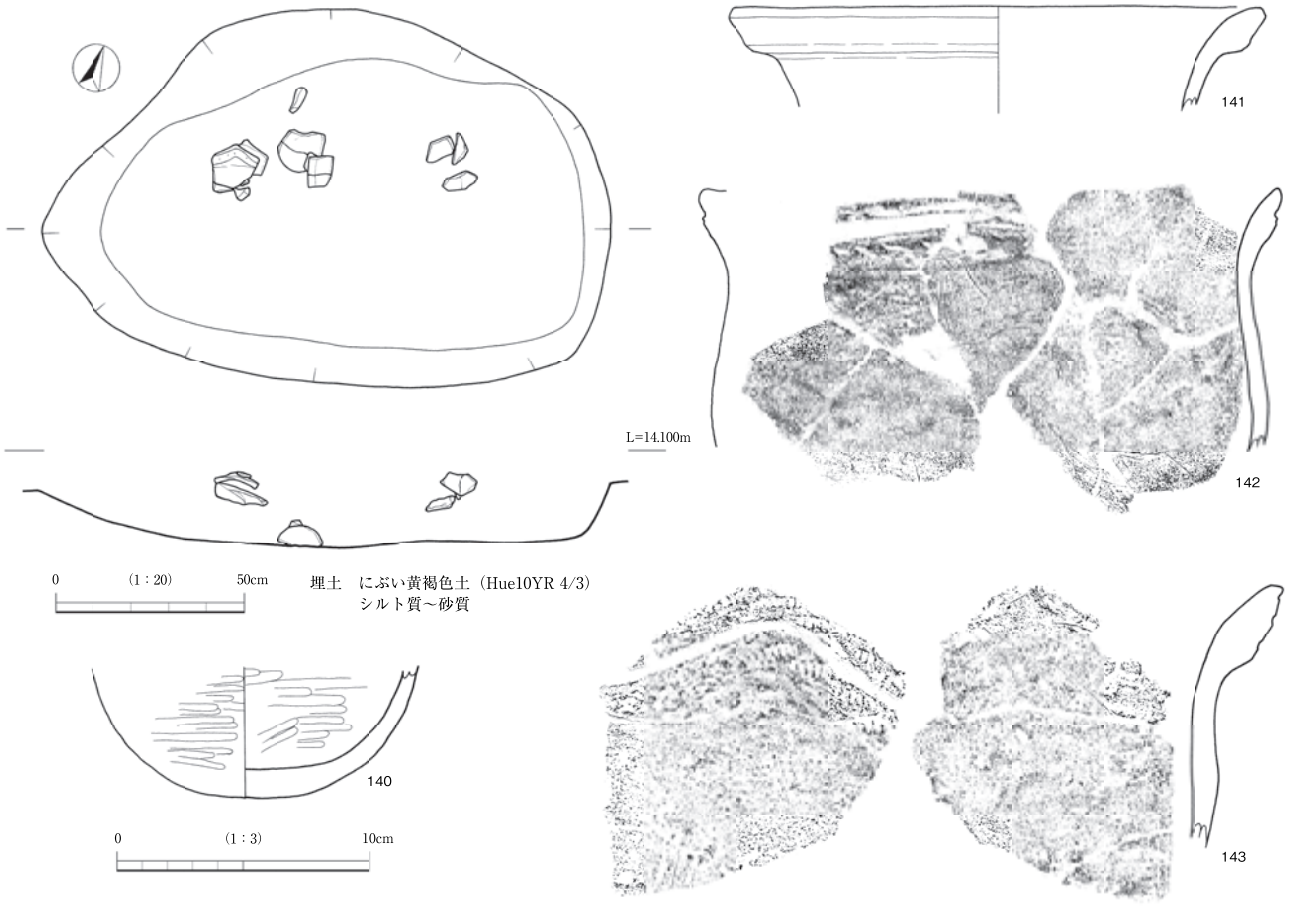
SK21（第 53 図）

検出状況　SK21 は N － 25 区，Ⅴ層上面で検出された。検出時は，砂岩と安山岩がまとまって確認されたが，土坑の平面形が不明瞭であった。そこで，検出状況の記録作成後に南側の４分の１を断ち割り，埋土の堆積状況を観察し土坑の平面形を決定した。

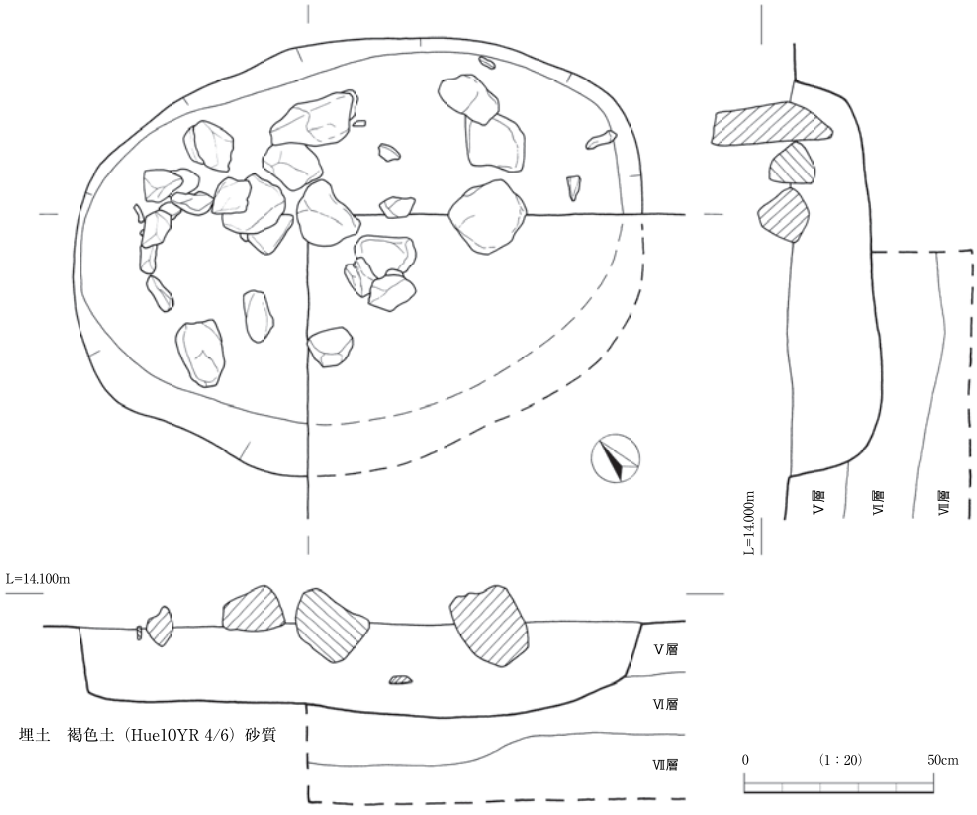
形状・規模　平面形は東西方向に長い楕円形で，規模は長軸 149cm，短軸 115cm，検出面からの深さ 21cm である。断面形は，床面は平坦で，壁面の立ち上がりがはっきりし，箱形となる。

埋土　埋土は褐色で，しまりのない粘質土である。

礫・遺物　検出された礫は全て安山岩と砂岩で，使用痕等は確認されなかった。また，埋土からは，時代・時期を特定可能な遺物は出土しなかった。



第 52 図　SK45・出土遺物



第 53 図　SK21

(3)　遺構外出土土器（第 54 ～ 64 図）

Ⅲ層・表土・撹乱等から出土した土器を，遺構外出土土器として，一括して報告する。土器は，縄文時代中期から晩期のものが出土している。

ア　阿高式土器・阿高系の土器（第 54 図）

145 と 152 は胎土に滑石を含み，凹線文が描かれる。縄文時代中期後半の阿高式土器である。144・146 ～ 148 は，胎土に滑石は含まないが，凹線文が描かれることから阿高式系統の土器である。

イ　南福寺式土器（第 54 図）

149 ～ 151・153 は，凹線がやや狭くなり，文様が口縁部に集中することから，南福寺式土器に該当する。151 は，外面から口縁部内面に赤色顔料が塗布される特徴的なものである。

ウ　貝殻文系土器（深鉢）（第 54 ～ 56 図）

松山式土器　154 は口縁が断面三角形を呈し，内側にわずかに屈曲する。口唇～口縁部には沈線文と刺突文が施される。縄文時代後期中頃の松山式土器に相当する。

市来式土器系　155 ～ 173 は口縁部を肥厚させ断面三角形とし，そこを文様帯とする。文様帯には，沈線文や貝殻による刺突文，刻目が施される。縄文時代後期中頃の市来式土器が大半を占めるが，後述の様に，御手洗Ｃ式土器なども含まれるので，市来式土器系とした。

155 の口唇部は平坦に面取され，刻目が施される。159 も口唇部が平坦に成形され，刻目が施される。さらに内面は，沈線で「S」の字状の文様が描かれる。

163 は，波状口縁で，波頂部に「S」の字状の貼り付け文と沈線文が施される。

167・168 は，色調が赤褐色を呈する。口縁部の文様帯には，沈線文と貝殻による刺突文が施される。168 は口唇部にも貝殻刺突文が認められる。172 は，色調が赤褐色を呈し，胎土に白色の鉱物を含む。口縁部には貼り付け文が施される。167・168・172 には，中九州地方の御手洗Ｃ式土器や北久根山式土器の影響が認められる。

北久根山式土器　178 ～ 181 は北久根山式土器の深鉢である。178・179 は，色調がにぶい黄橙色を呈し，胎土に角閃石を多く含む。わずかに肥厚させた口縁部に「W」の字状の貼り付け文をもち，ヘラ状工具で羽状の沈線文を入れられる。180 は，口縁部に「W」の字状の貼り付け文をもつ。口縁帯には押し引き状に刺突する疑似縄文が施される。口縁部は，実測図よりも外反が大きくなる可能性がある。

181 は，胎土に角閃石や，1 ～ 5 mm 程度の鉱物を含む。口縁部は大きく外反し，口縁下 4 ㎝と口唇部を肥厚させて文様帯を作る。傾斜した口唇部には，左下がりの短沈線が刻目状に施される。また，口縁部文様帯の下半には，右下がりの沈線を巡らす。外面の器面調整はミガキ様のナデである。182 は，実測図よりも外反が大きくなる可能性がある。

その他　183 は，口縁部をゆるく内湾させ肥厚した文様帯をもち，沈線により三角形状の文様が描かれる。西平式土器もしくは太郎迫式土器に該当すると考えられる。

底部（平底）　184 ～ 190 は深鉢の底部で，平底のものである。185 や 186，190 の底面には，圧痕状の凹みがみられるが，何に由来するものかは不明である。

底部（脚台）　191 ～ 198 は脚台付きの深鉢である。194 ～ 198 は，製作手法が窺える。198 のような丸餅状の底がみられることから，脚台部分と胴部を作り上げた後に，丸めた粘土を内側から押し当てて成形したと思われる。

エ　磨消縄文系土器（鉢・浅鉢）（第 57 ～ 59 図）

鐘崎式土器　199 ～ 203 は鐘崎式土器の口縁部である。199 は直線上に開く体部から，丸く内湾した胴部をもち，口唇部を断面三角形に肥厚させる。口縁部から胴部の張り出し付近までを文様帯とする。R 撚りの縄文地に，太めの沈線による文様を施し，一部には鉤手文もしくは渦巻状の文様が描かれる。口唇部には沈線文と刺突文が施される。また，口唇部の一部を張り出させ，上方から貫通させた 2 か所の穿孔が文様の特徴となる。色調が灰色であることや，胎土に茶色の微粒子や透明の火山ガラスが含まれることも含めて，県内で出土する鐘崎式土器と共通する。

201 は幅広の磨消縄文がみられる。202 は，口唇部の文様構成が 199 と共通する。203 の口唇部には，竹管状の工具による刺突文がみられる。

北久根山式土器　204 ～ 209 は北久根山式土器に該当する。204 と 205 は，肩部は内傾し頸部となり，そこから大きく外反する口縁部をもつものである。沈線文とその間に粗い縄目の磨消縄文が施される。206 は，口縁部には磨消縄文と沈線文が施され，口唇部は平坦に成形され連続刺突文が施される。207・208 は口縁端部に磨消縄文を巡らす。209 は，肥厚させた口縁部外面と貫通孔のある口縁部内面に，L 撚りの縄文が施される。

辛川式土器　210 は，ゆるく外反した口縁部に，内側に屈曲させた幅の狭い文様帯がつくもので，２条の沈線が巡る。ミガキによる丁寧な仕上げで，色調は黒色を呈する。213 は大ぶりではあるが 210 と同様の器形をなし，文様帯には沈線文と R 撚りの縄文が施される。210・211 は辛川式土器に該当する。

鐘崎式土器・胴部　212 ～ 218 は胴部で，鐘崎式土器に該当する。214 は，縦方向の沈線文と刺突文がみられる。215 には，沈線文と磨消縄文，「J」の字状もしくは鉤手状の文様がみられる。

西平式土器・胴部　219は，沈線を引いた後に，沈線間に縄文を充填し，沈線間をナデ消す磨消縄文がみられる。西平式土器に該当する。

太郎迫式土器・胴部　220は，色調が黒褐色を呈する。R撚りの粗い縄文と窓枠状の沈線がみられる。太郎迫式土器に該当すると判断した。

底部　221～228は鉢・浅鉢の底部で，底面は平底もしくはやや上げ底状になる。磨消縄文系土器から縄文時代後期終末の上加世田式土器までの磨研土器に伴うものである。

オ　台付皿形土器・皿形土器（第59図）

229～242は台付皿形土器もしくは皿形土器と考えられるものである。

市来式土器系　229・230・232・237・238・241は市来式土器あるいは御手洗C式土器に該当する。229・232は，内外面及び口唇部に沈線文が施される。230は，貝殻による刺突文がみられる。237・238・241は脚台部である。脚部下端に文様帯が形成される。

磨消縄文土器系　231・233・234・235・236・239・240は磨消縄文系の土器に伴うものである。231は瘤状の突起部で，刺突文がみられる。233は，胎土に黒雲母や1～2mm程度の白色の鉱物を含む。234は内面に「S」の字状の沈線文が描かれる。北久根山式土器に該当する。235・236は，口縁部内面に浮線状の文様帯をもつ。239・240は脚台部で，竹管状の工具による沈線文と，渦巻状の文様，さらに透かし孔がみられる。

その他　242は台付皿形土器の脚台と判断したが，内面がハケ目状の調整であり，土師器甕の可能性もある。

カ　縄文時代後期末～晩期相当の深鉢（第60～62図）

口縁部　243は内側に強く屈曲する口縁部で，口縁帯に2条の凹線を巡らす。上加世田式土器もしくは御領式土器に該当すると考えられる。

244～285は縄文時代後期から晩期に該当すると考えられる深鉢である。条痕地のものは，入佐式土器新段階以降の縄文時代晩期に位置付けられるが，詳細は不明である。

244～270は口縁部である。244・245は，胴部上半から口縁部がやや内傾する。246～252は，口縁付近が外反する。248は，胴部に焼成後の穿孔が施され，口縁部外面には押圧による幅1cmほどの浅い凹みがみられる。253・254は，口縁付近が直線的である。255～263は，胴部上半から口縁部がわずかに内湾する。261は口縁部がやや肥厚する。263は，口縁がやや肥厚し，内側に屈曲する。

270・271は，細い沈線が巡るもので，入佐式土器新段階に該当する。269は貫通した刺突がみられるものだが，孔列文に関するものか不明である。

胴部　271～285は深鉢形土器の胴部片である。280･283にはミガキがみられるが，それ以外は条痕による器面調整である。一般的に器面調整はミガキから条痕へ変遷することから，ミガキ調整は入佐式土器古段階以前で，条痕調整は入佐式土器新段階から黒川式土器にかけてのものであると判断される。275は頸部と口縁部の境界にリボン状に小さな突起を貼り付けるもので，入佐式土器新段階から黒川式土器への過渡期のものと考えられる。

底部　286～298は張り出しのある底部である。入佐式土器新段階から黒川式土器に特徴的なものである。底部に圧痕条の凹みがみられる資料があるが，何に由来するものかは不明である。

キ　縄文時代後期末～晩期相当の鉢・浅鉢（第63図）

口縁部　299～301は口縁部に凹線状の文様帯をもつものであり，三万田式土器に該当する。299は，三万田式土器でも新しいタイプのもので，胎土に角閃石が目立つ。

302・303・306は，わずかに外反しながら開く口縁部に，断面が楕円形で肥厚した玉縁状の口唇部が付くものである。内外面が沈線状となるが，口縁部と一体化していることから，入佐式土器から黒川式土器にかけてのものである。

304・305は口縁の一部に突起をもつもので，黒川式土器に該当する。308は扁平な胴部に外反する長めの口縁部をもち，口唇部は丸く肥厚する。口縁部にはヒレ状の突起が付く。胴部は丸く仕上げるもので，橋状把手からリボン状に推移する過程にある突起をもつ。口縁部が長い点や胴部の丸みがきついこと，胴部突起が橋状把手の雰囲気を残すことから，入佐式土器に近いと考えられる。309は，丸い胴部に短い口縁部が付くもので，黒川式土器の中でも新しいタイプである。307は，胴部が「く」の字に屈曲するもので，入佐式土器以前のものである。

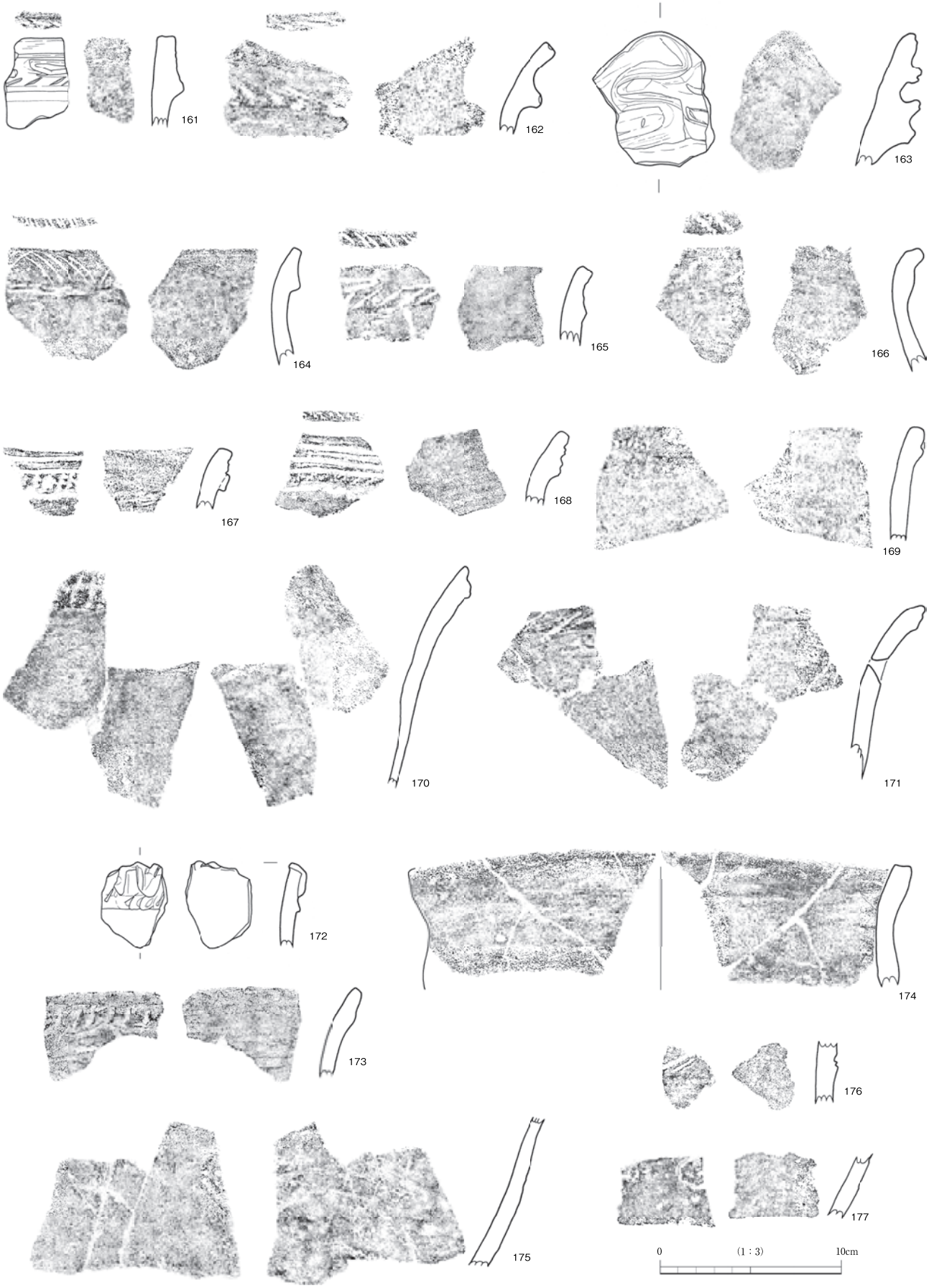
胴部　310～317は胴部である。310～313は，胴部が「く」の字に屈曲するもので，入佐式土器以前の段階のものと考えられる。317は，他と比較して器壁が厚い。詳細は不明である。

ク　不明土器（第64図）

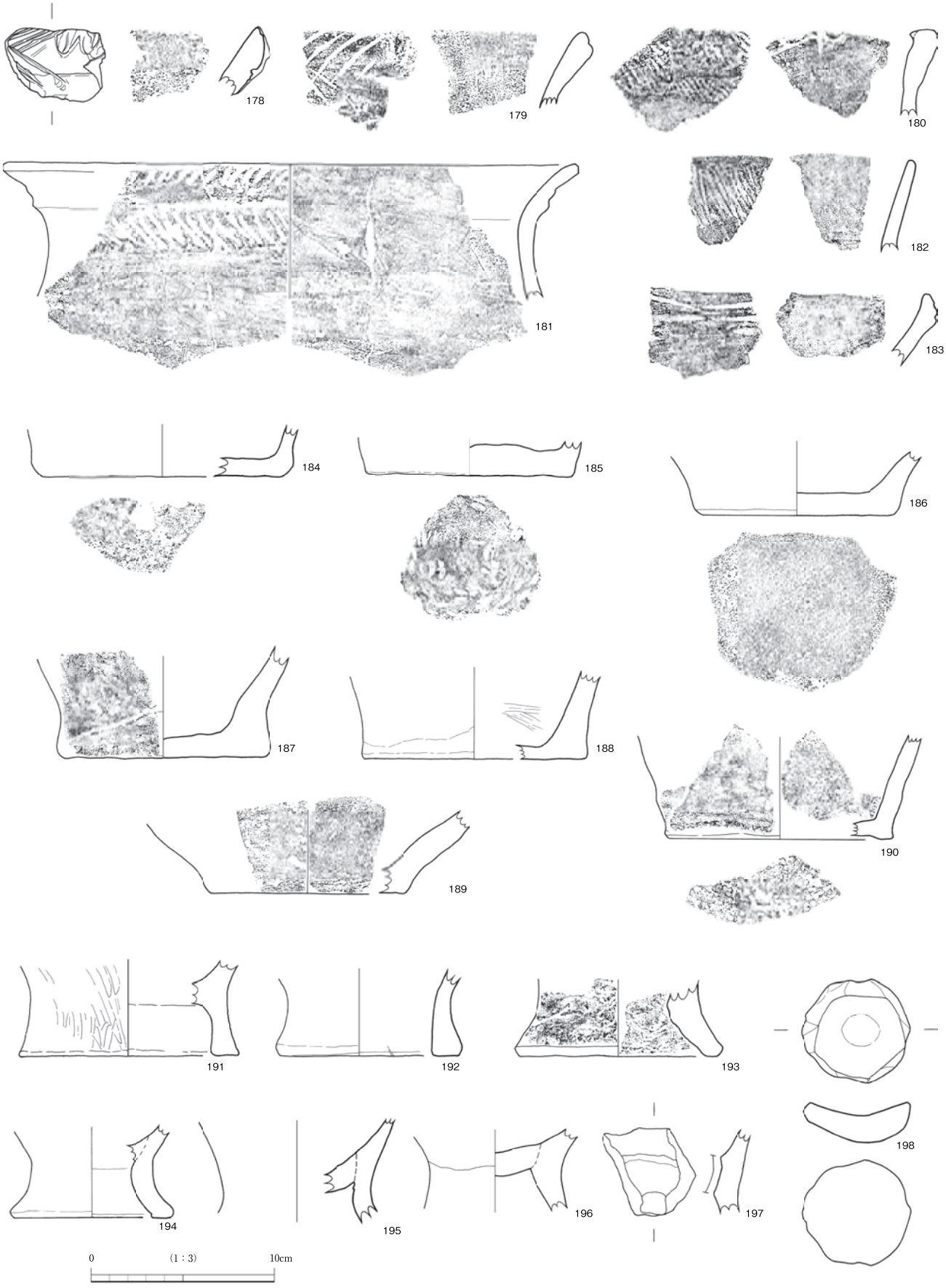
318～332は詳細不明の土器を一括して掲載した。318は，色調が赤褐色を呈し，条痕地に不規則な浅い沈線がみられる。指宿式土器の影響を受けている可能性がある。319・321・322にも浅い沈線がみられるが，どの型式になるか不明である。322は，胎土中に2mm程度の白色の鉱物が含まれる。

320は刻目のある突帯で区画された口縁部文様帯に羽状の沈線が施されるもので，南福寺式土器や出水式土器の系譜を引くものと思われる。

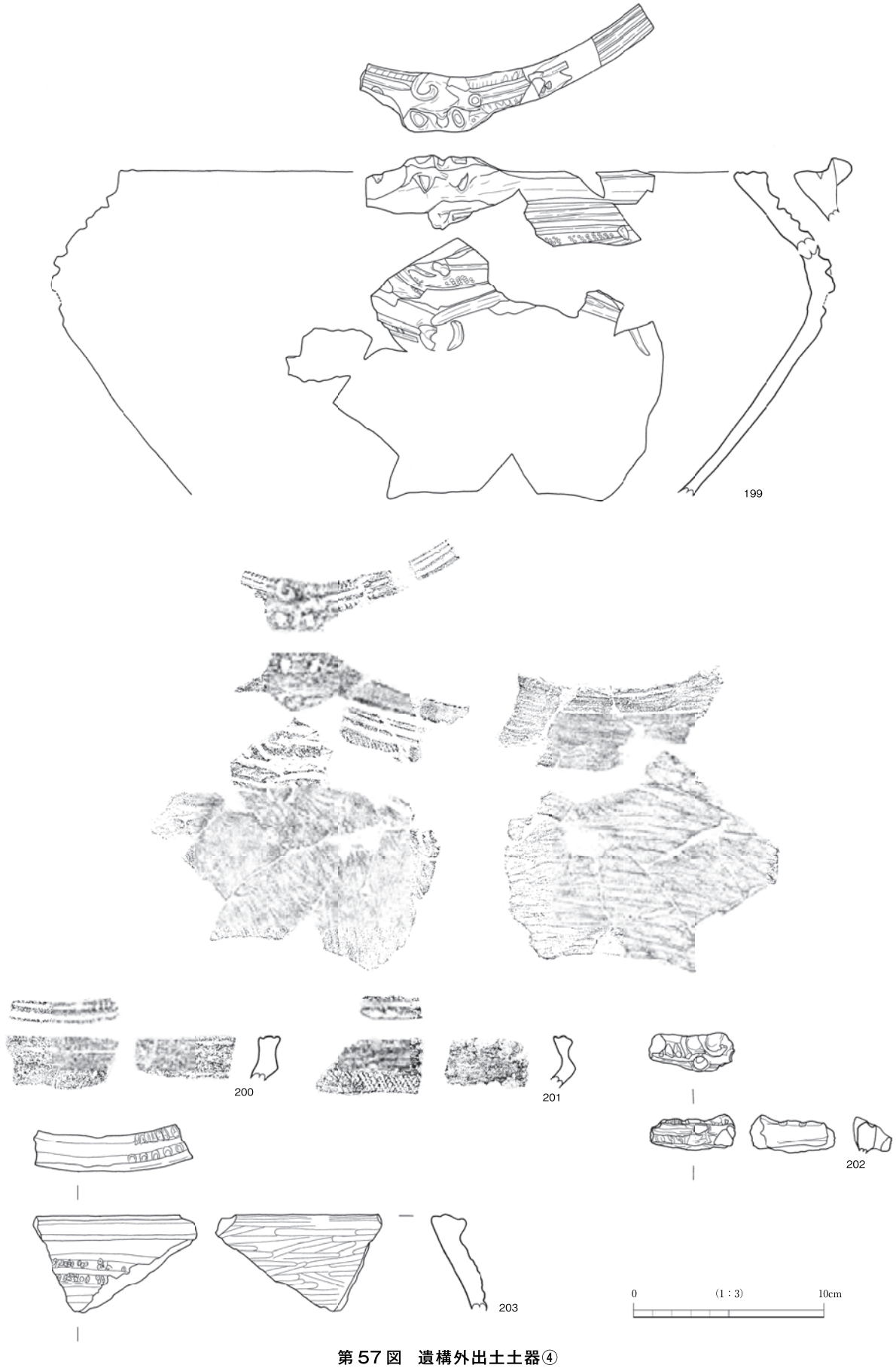
第 54 図　遺構外出土土器①



第 55 図　遺構外出土土器②



第 56 図　遺構外出土土器③



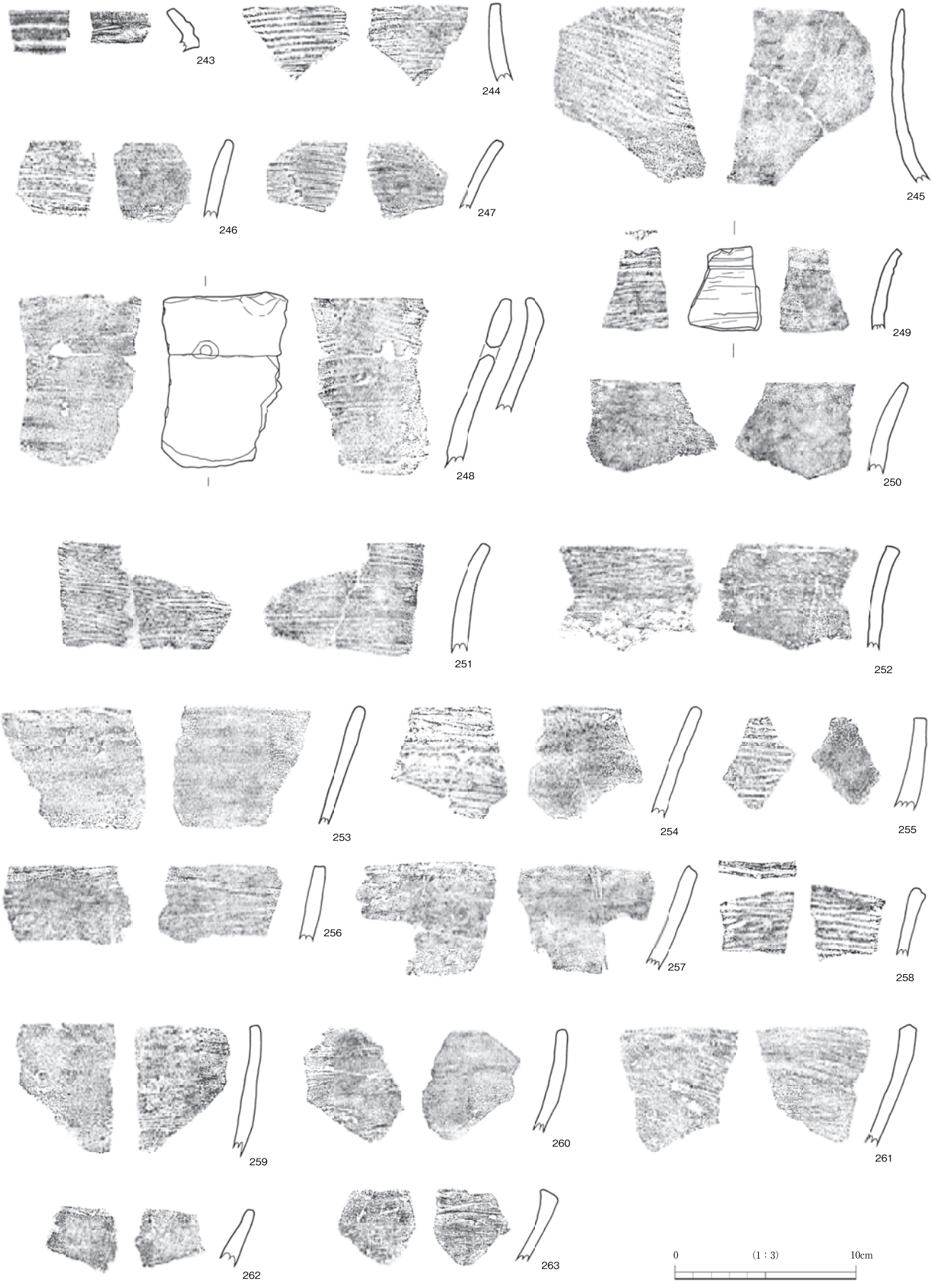
第 57 図　遺構外出土土器④

第 58 図　遺構外出土土器⑤

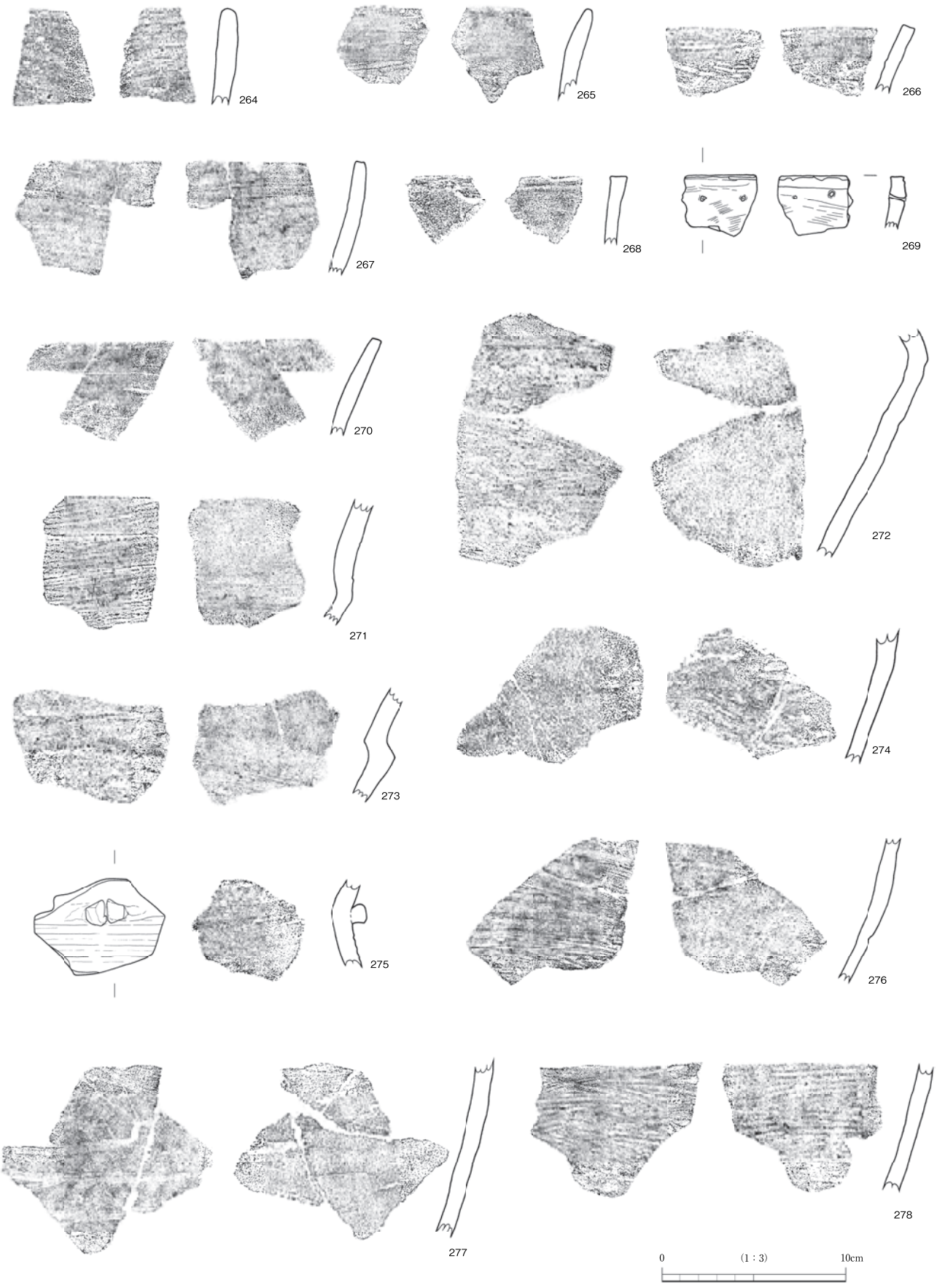
第 59 図　遺構外出土土器⑥

323 は口縁端部のみを内側に折り曲げるもので，口唇部には 2 列の押し引き文が巡る。側縁部には太めの刻目を入れ，鶏冠状となる。この様な特徴は，縄文時代中期後半の中尾田Ⅲ類土器の中にみられる。

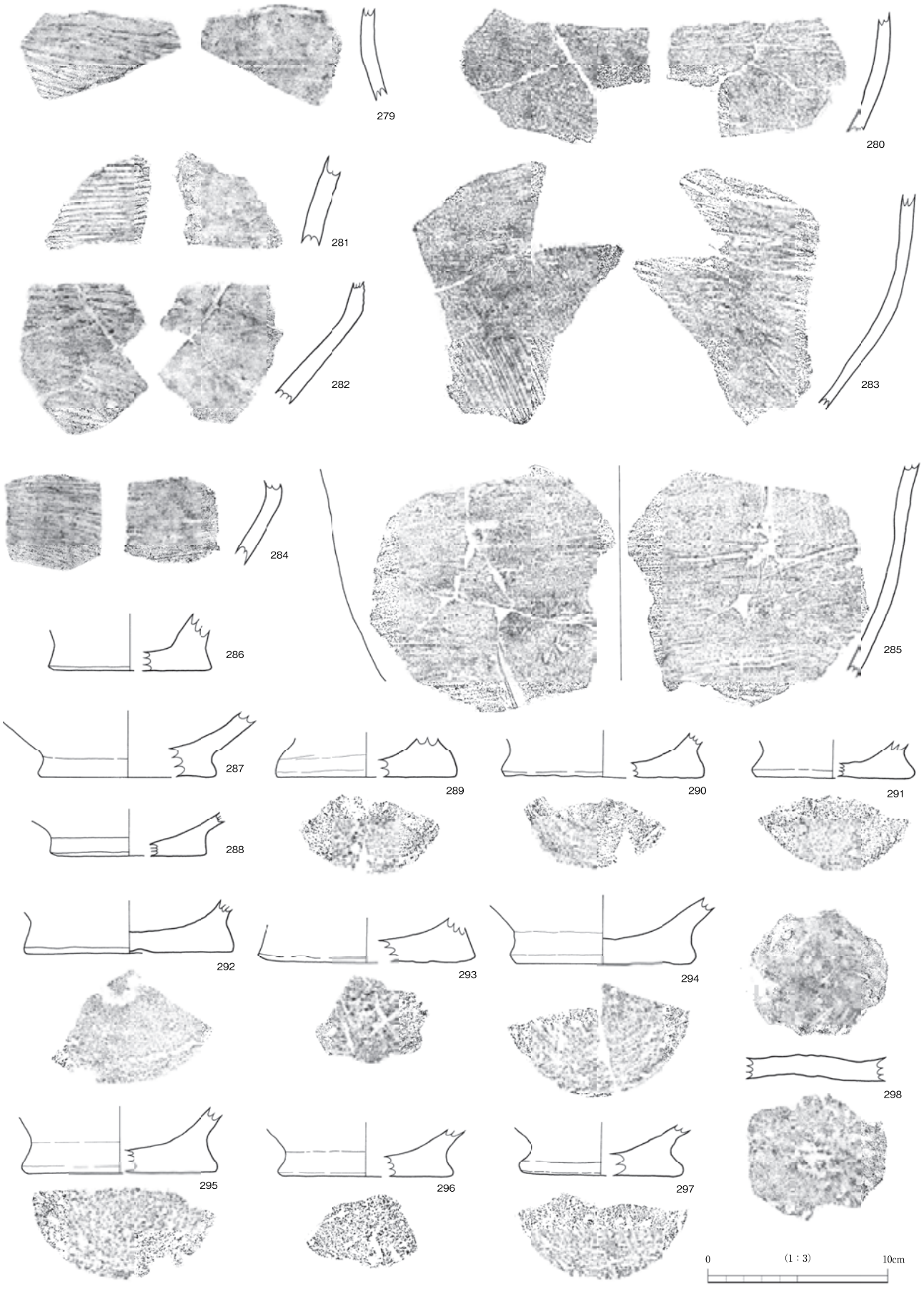
324・325 は口縁部を肥厚させ，凹線を巡らす。口縁帯が狭いことから，上加世田式土器よりは古く位置付けられる。326 は，沈線端部に刺突する。327 は傾き不明である。R 撚りの縄文と沈線文をもつもので，沈線の延長上には刺突文もみられる。326・327 は，胎土や色調が北久根山式土器に類似する。328 は口縁部端に沈線が施される。329 は，器壁が厚手で，胴部から口縁部は内湾する。口唇部の一部に突起が付けられ，左下方向の沈線状の刻目が入れられる。331 は，器壁が薄く，内外面にハケ目状の痕跡がみられる。



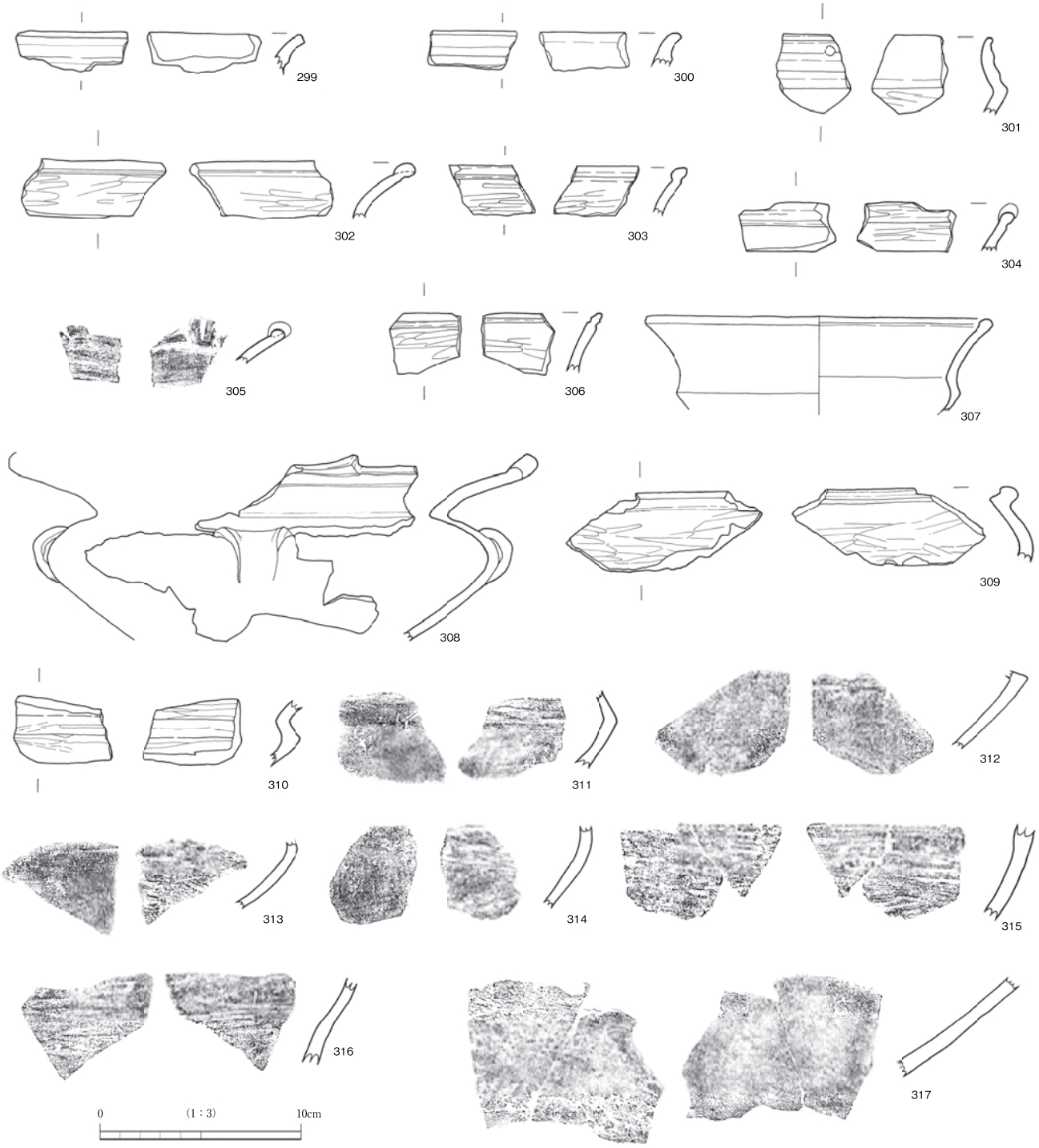
第 60 図　遺構外出土土器⑦



第 61 図　遺構外出土土器⑧



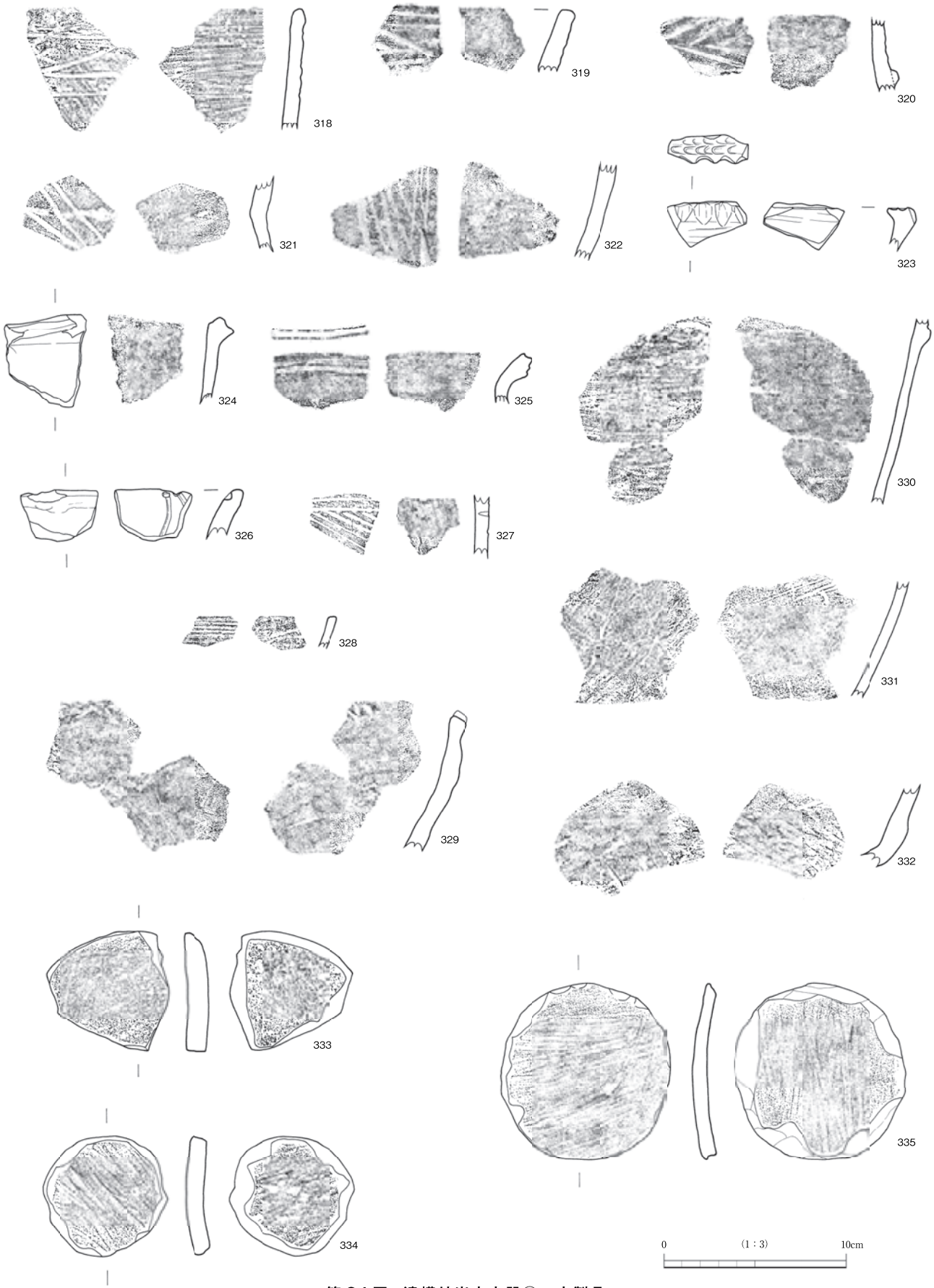
第 62 図　遺構外出土土器⑨



第 63 図　遺構外出土土器⑩

(3)　土製円盤加工品（第 64 図）

333 ～ 335 は，土器片に剥離を加え円形に加工したものである。縄文時代後期に一般的にみられるが，335 のような大型の土製円盤加工品は少ない。



第 64 図　遺構外出土土器⑪・土製品

（4） 石器（第 65 ～ 74 図）

石器も土器と同様に，包含層及び表土，撹乱から出土した。包含層の残存状況が悪く，さらに，出土数が少ないので，一括で報告する。

石器の出土の傾向としては，石鏃をはじめとする剥片石器類は少なく，磨石・敲石類や石皿・台石などの礫石器類が多い。

ア　石鏃（第 65 図）

石鏃は 21 点出土している。石鏃はその形状から正三角形鏃及び二等辺三角形鏃，五角形鏃の３つに分類され，全て無茎鏃である。

（ア） 正三角形鏃（第 65 図 336 ～ 343）

336 は安山岩製である。凹基で，先端部は僅かに欠損している。337 は桑ノ木津留産黒曜石製である。平基で，基部の一部に自然面を残す。338 は霧島山系黒曜石製である。浅い凹基で，腹面に剥片素材面を多く残す。339 は霧島山系黒曜石製である。凹基で，片側の基部が欠損している。

340 は腰岳産黒曜石製である。凹基で，両側辺はやや内湾する。先端部からの衝撃で器体の半分が欠損している。342 は腰岳産黒曜石製である。凹基で，抉りはＵ字状に深い。返しの先端は直線状に仕上げられている。片側の返しの欠損は，調査時のものである。

343 は霧島産系黒曜石製である。凹基で，返しの先端は直線状に仕上げられている。上方からの衝撃で先端部が欠損している。341 はチャート製である。凹基で，素材剥片の縁辺のみに簡易な加工を施し全体を整形している。

（イ） 二等辺三角形鏃（第 65 図 344 ～ 354）

344 は腰岳産黒曜石製である。浅い凹基で，腹面に剥片素材面を多く残す。先端部は僅かに欠損している。345 は濃い青灰色を呈する西北九州産の黒曜石製である。浅い凹基で，腹面に剥片素材面を多く残す。先端部は僅かに欠損している。

346 は姫島産黒曜石製である。凹基の長身鏃で，抉りはＵ字状である。腹面に剥片素材面を多く残している。347 は霧島山系黒曜石製である。凹基の長身鏃である。

348 は安山岩製である。凹基の長身鏃で，両側縁は鋸歯状に仕上げられている。

349 は西北九州産黒曜石製である。凹基で，抉りは直線状で深い。両側縁の返し部分は鋸歯状に仕上げられている。350 は霧島山系黒曜石製である。凹基で，抉りは直線状で深く，片側が欠損している。

351 はチャート製である。凹基で，抉りは直線状で深い。352 はチャート製である。抉りは直線状で深い。両側縁は鋸歯状に仕上げられている。先端部の欠損は調査時のものである。

353 は上牛鼻産黒曜石製である。凹基で，側縁は外湾している。先端部と基部は欠損している。354 は霧島山系黒曜石製である。凹基で，抉りはＵ字状である。腹面に剥片素材面を多く残し，背面には一部自然面を残す。上方からの衝撃で先端部は欠損している。

（ウ） 五角形鏃（第 65 図 355･356）

355 は西北九州産黒曜石製である。平基で背面の一部に自然面を残している。先端部は欠損している。両側縁基部付近も角がみられ，七角形とも言える。356 は白色を呈するチャート製である。浅い凹基で，両側縁は内湾している。上方からの衝撃で先端部が欠損している。

イ　不明（第 66 図 357）

357 は腰岳産黒曜石製である。上辺と両側辺に微細剥離痕が認められる。

ウ　楔形石器（第 66 図 358 ～ 360）

358 は腰岳産黒曜石製である。打撃面には背面・腹面の両側に微細剥離痕が観察される。機能部には背面にのみ微細剥離痕が観察される。359 は腰岳産黒曜石製である。打撃面，機能部ともに背面・腹面の両側に微細剥離痕が観察される。背面の一部に自然面を残す。

360 は腰岳産黒曜石製である。縦長の剥片を利用し，打面側を打撃面として，剥片端部を機能部として使用している。打撃面，機能部ともに背面・腹面の両側に微細剥離痕が観察される。特に打撃面から腹面にかけて，大きな剥離痕が観察される。

エ　石匙（第 66 図 361･362）

361 は灰色に黒色の縞状を呈するチャート製である。横形で，器体の一部が欠損している。362 は玻璃質安山岩製である。横長の剥片を縦位に利用し，腹面と背面に素材剥片面を多く残している。横型で，片側の欠損は調査時のものである。

オ　スクレイパー（第 66 図 363･364）

363 は日東産黒曜石製である。厚手の剥片を素材とし，腹面からの二次加工により内湾する刃部を形成している。刃部には微細剥離痕が観察される。

カ　ドリル（第 67 図 365･366）

365 は腰岳産黒曜石製である。横長剥片を横位に利用し，打面から背面方向への二次加工と，打面に対する側縁から腹面・背面への二次加工により刃部を形成している。刃部には使用による顕著な摩滅が観察される。二次加工の施されない剥片の縁辺には，微細剥離痕が観察される。366 は腰岳産黒曜石製である。

キ　石核（第 67 図 367 ～ 369）

367 は西北九州産黒曜石製である。368 は日東産黒曜石製である。小型円礫の縁辺に打面を設定し，半周程度剥片を剥出した後，作業面に打面を転移し，再び半周程度剥片を剥出している。

369 は日東産黒曜石製である。厚手の剥片を素材とし，腹面側，背面側への交互剥離により剥片を剥出している。作業面と対する側縁は腹面からの二次加工により刃部を形成し，スクレイパーとして転用している。

ク　磨製石斧（第 68・69 図 370 ～ 383）

370 は安山岩製の石斧である。刃部は両刃である。基部から側面に向けて一部欠損している。剥離による整形の後，器面全体を磨いている。371 は安山岩製の石斧であり，刃部は欠損している。基部形状は棒状をなし，敲打により整形している。

372 は砂岩製の石斧であり，刃部は欠損している。礫素材の形状を利用しながら基部を中心に敲打により整形している。373 は砂岩製の石斧であり，刃部が欠損している。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。

374 はホルンフェルス製の石斧であり，刃部は欠損している。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。基部から表裏両面に剥離痕が見られる。375 は砂岩製の石斧であり，刃部は欠損している。基部形状は棒状をなし，礫素材の形状を利用しながら一部敲打により整形している。

376 はホルンフェルス製の石斧であり，基部は摂理面で欠損している。刃部は両刃で，幅５～６㎜の潰れが確認される。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。

377 は砂岩製の石斧であり，基部が欠損している。刃部は両刃であり，先端には幅２～３㎜の潰れが確認される。敲打による整形の後，側面のみが磨かれている。378 は砂岩製の石斧である。基部は欠損している。刃部は両刃である。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。

379 は頁岩製の石斧である。基部は欠損している。刃部は両刃である。敲打による整形の後，器面全体を磨いている。欠損時の剥離が基部側から刃部に到達しており，その剥離面に向けて側縁から細かい剥離痕が見られることから，欠損後も何らかの形で再利用されていると考えられる。380 は頁岩製の石斧の刃部である。刃部は片刃で，バチ状に開いている。器体が扁平なため刃角が鋭角である。剥離による整形の後，器面全体を磨いている。

381 は蛇紋岩製の石斧の刃部である。刃部は片刃で，一部欠損している。敲打と剥離による整形の後，器面全体を磨いており，側面には一部敲打痕が残されている。382 はホルンフェルス製の石斧の刃部の一部である。両刃で，刃部には表裏両面に欠損剥離が見られる。

383 は頁岩製の小型の石斧である。刃部は鑿状を呈し，細かい欠損剥離が見られる。敲打と剥離による整形の後，器面全体を磨いている。

ケ　打製石斧（第 69 図 384 ～ 388）

385 は蛇紋岩製の打製石斧である。剥離により器体の整形を行っており，一部礫皮面を残す。刃部には著しい潰れが観察される。

384 は頁岩製の打製石斧である。剥離により器体の整形を行っている。386 は頁岩製の打製石斧である。全体的に風化が進んでいる。器体が半分剥離しており，本来の半分の厚さになっている。器体の基部近くに抉りが見られる。387 は頁岩製の打製石斧であり，基部が欠損している。剥離により器体の整形を行っている。388 は頁岩製の石斧の未製品である。剥離整形の途中で器体が折れたものと考えられる。全体的に風化が進んでいる。

コ　石製品（第 69 図 389）

389 は砂岩製の石製品である。穿孔貝による穿孔のある石が遺跡内に持ち込まれたものである。

サ　石錘（第 70 図 390・391）

390･391 は安山岩製の石錘である。いずれも扁平な小型の安山岩の相対する側縁を剥離して抉りを形成している。

シ　磨石・敲石類（第 70・71 図 392 ～ 408，第６表）

磨り・敲き・凹み等，それぞれ単独の機能のものと複数の機能を有しているものを一括して取り扱った。各石器の使用状況については，第６表のとおりである。

ス　石皿・台石（第 72 ～ 74 図 409 ～ 414）

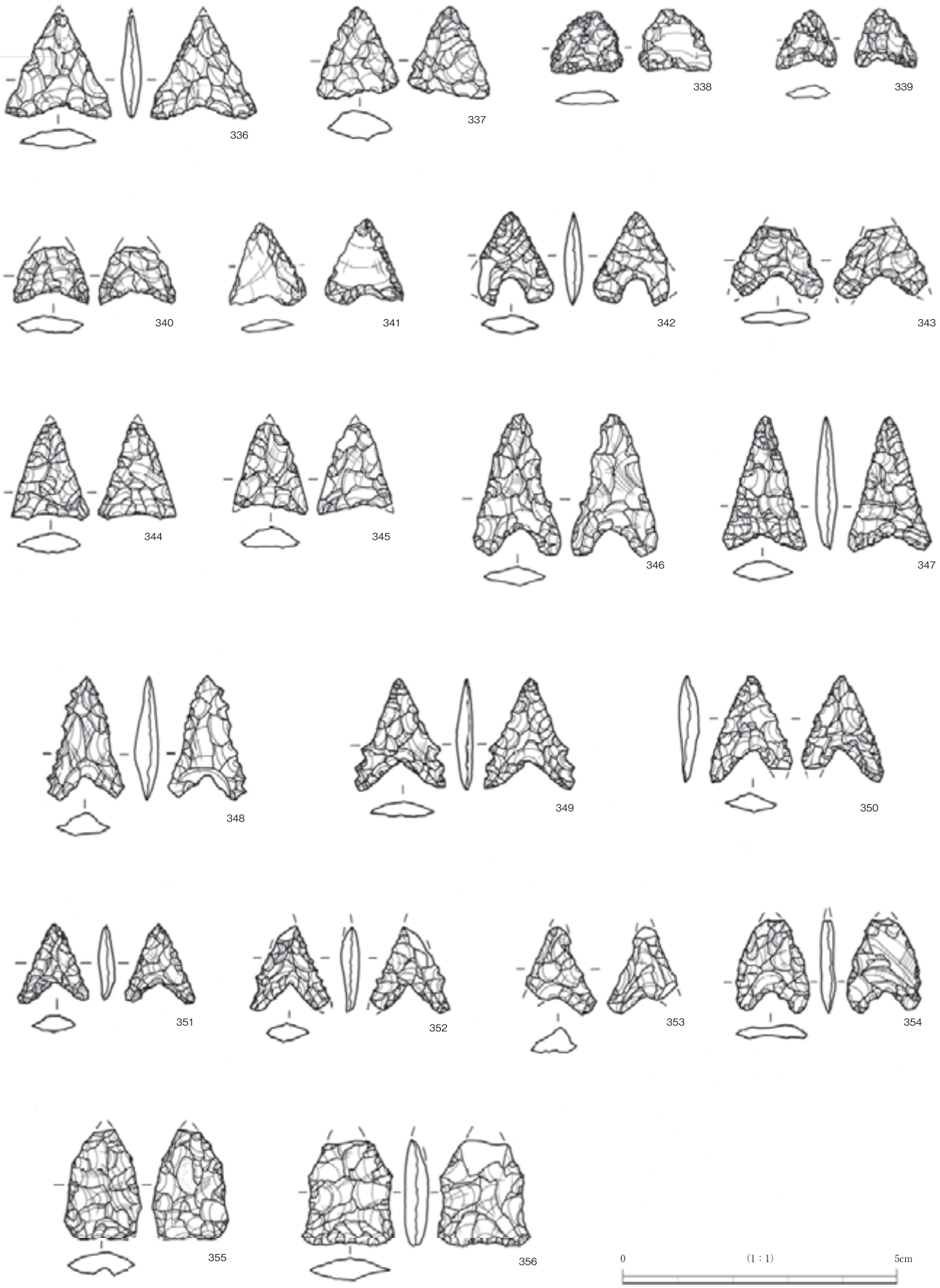
409 は安山岩製である。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。周辺の剥落は被熱によるものと考えられる。使用面には顕著な光沢が見られるが，凹みはない。

410 は安山岩製で，欠損している。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。裏面の剥落は被熱によるものと考えられる。使用面には顕著な光沢が見られるが，凹みはない。

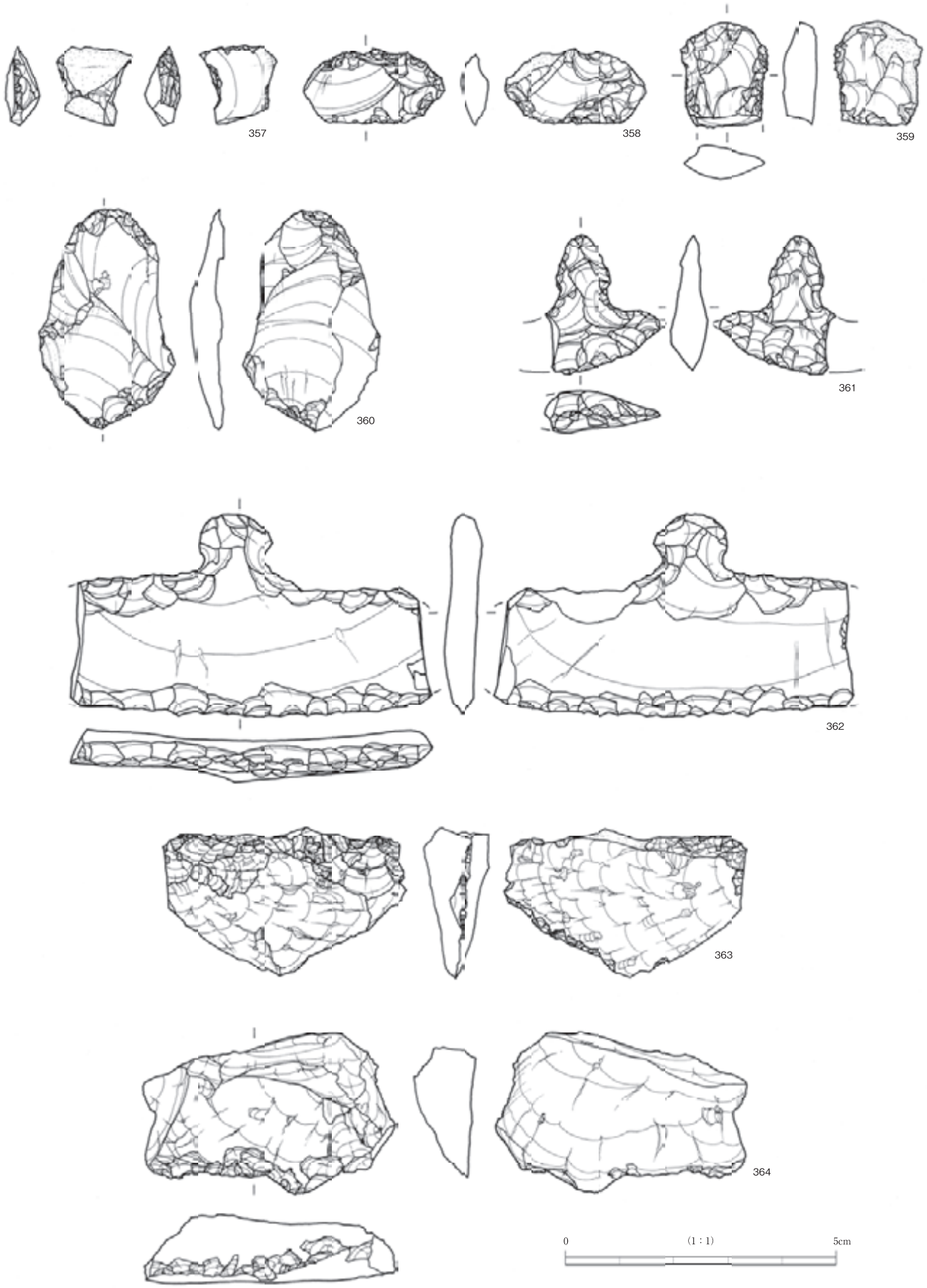
411 は安山岩製である。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。周辺の剥落は被熱によるものと考えられる。使用面は表裏ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られ，浅い凹みがある。

412 は安山岩製で，欠損している。使用面は表裏ともに確認され，それぞれ顕著な光沢が見られる。表面にのみ浅い凹みがある。

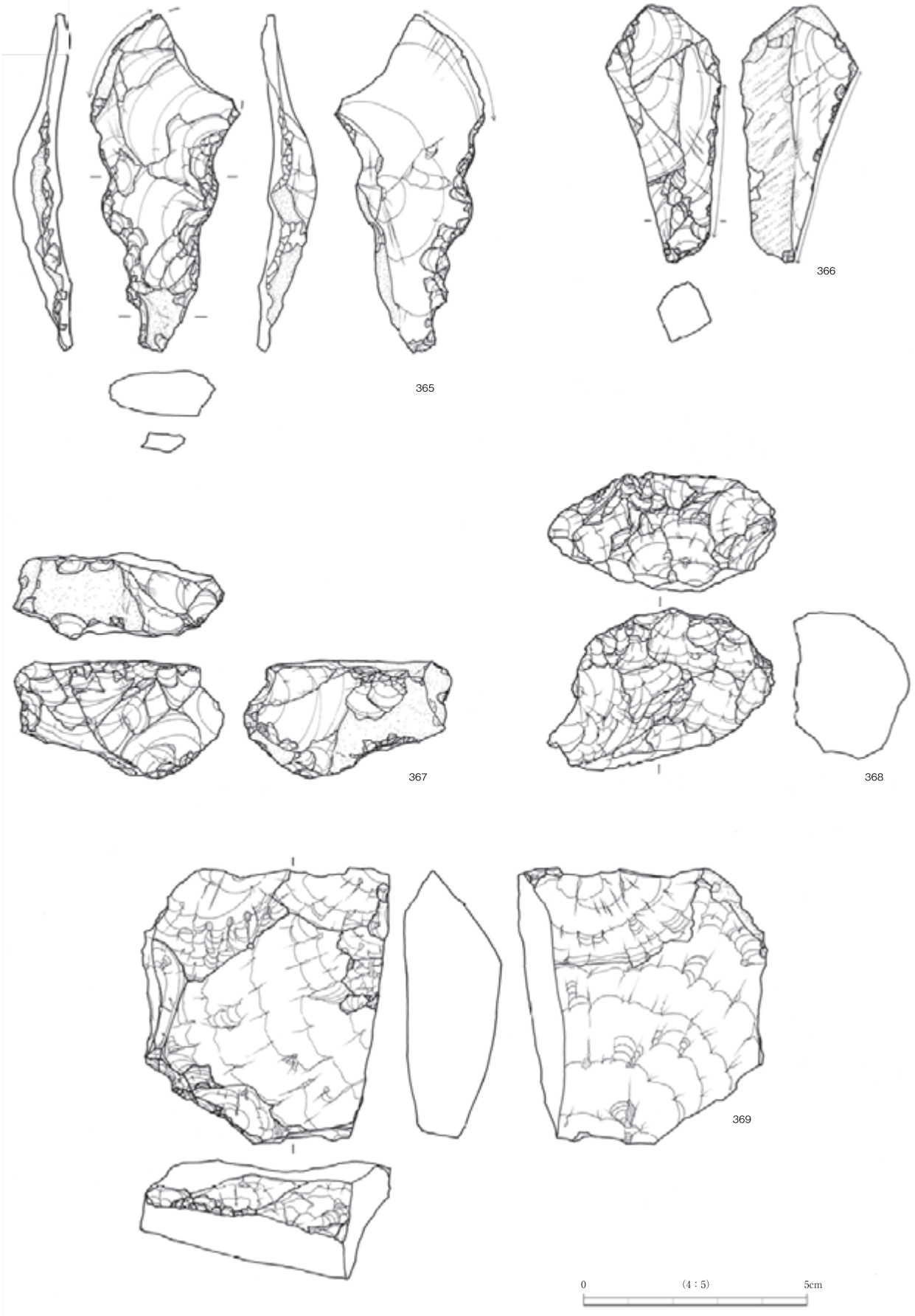
413 は安山岩製である。礫には被熱による赤化が確認



第 65 図　遺構外出土石器①

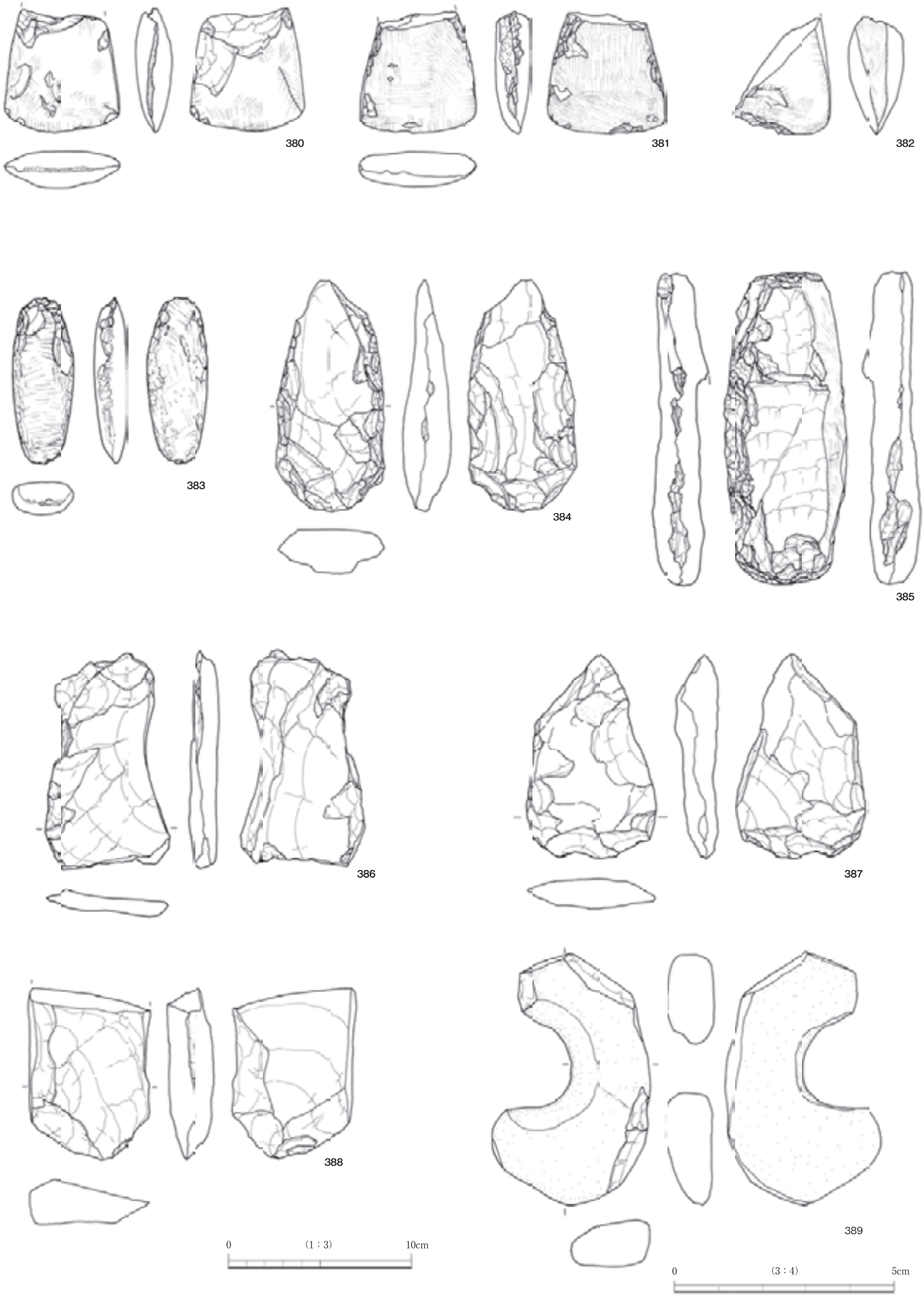


第 66 図　遺構外出土石器②

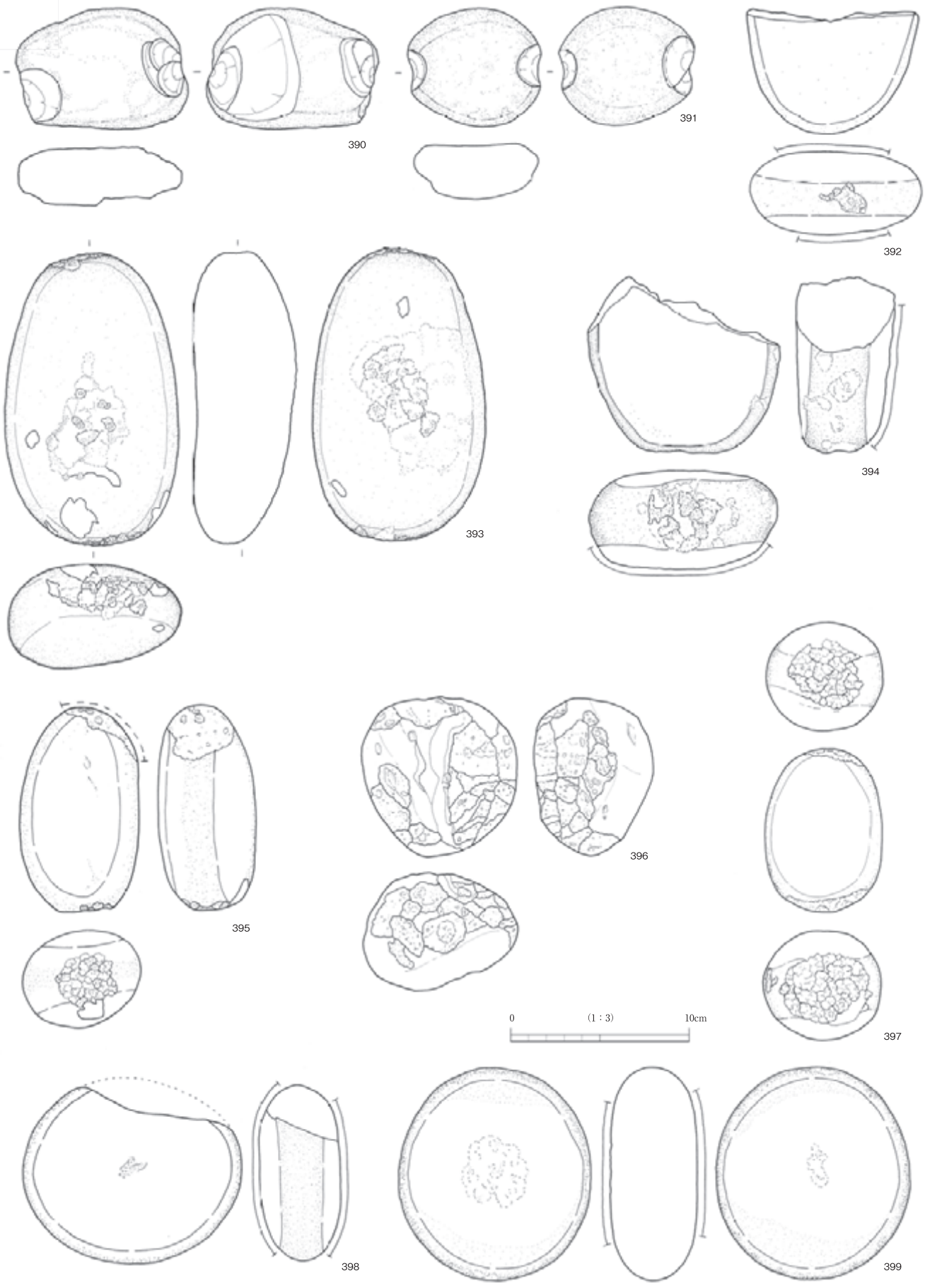


第 67 図　遺構外出土石器③

第 68 図　遺構外出土石器④



第 69 図　遺構外出土石器⑤



第 70 図　遺構外出土石器⑥

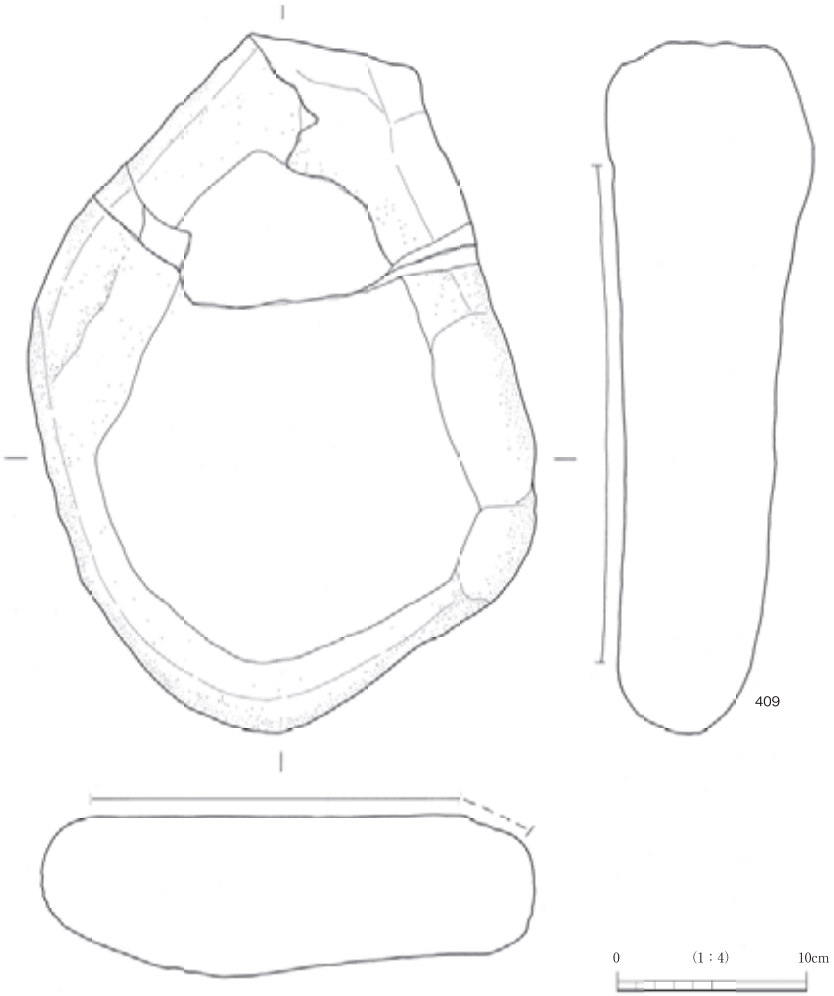
第 71 図　遺構外出土石器⑦

され，二次利用された可能性が高い。周辺の剥落は被熱によるものと考えられる。使用面には顕著な光沢が見られ，浅い凹みがある。

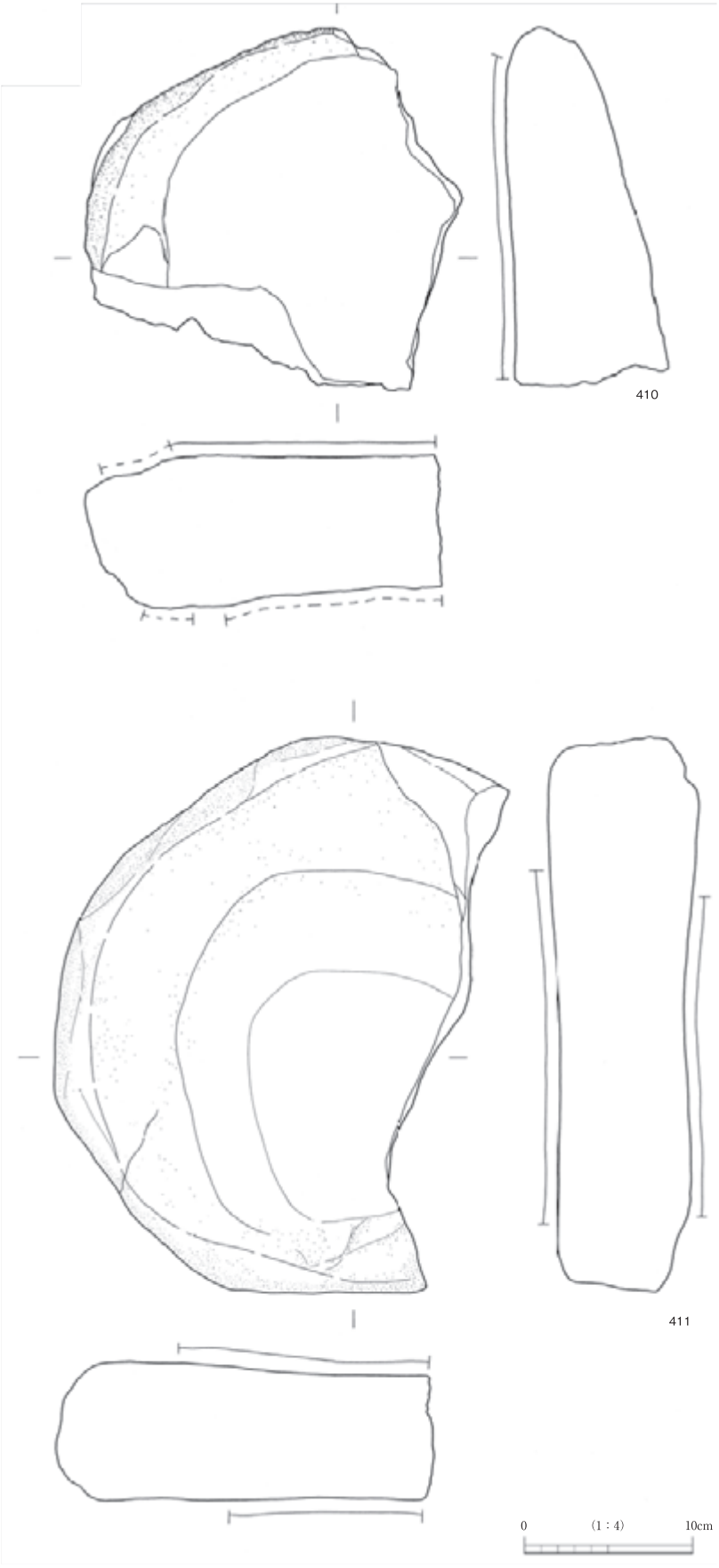
414は安山岩製で，約４分の３が欠損している。礫には被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。使用面には顕著な光沢が見られ，明確な凹みがある。

第６表　磨石・敲石類使用状況観察表

遺物番号	石材	器種	磨		敲		凹		備考
			表	裏	短軸側	長軸側	表	裏	
391	砂岩	磨・敲石	○	○	○	○			裏面中央への垂直打撃により破損
392	安山岩	敲・凹石			○		○	○	
393	安山岩	敲石	○	○	○	–			被熱による破砕
394	安山岩	敲石			○	○			
395	石灰岩	敲石			○				
396	砂岩	磨・凹石	○	○			○		
397	砂岩	磨・凹石	○	○			○	○	欠損
398	砂岩	磨・凹石	○	○			○		
399	砂岩	磨・凹石	○	○			○	○	
400	安山岩	磨・凹石	○	○			○	○	被熱による破砕
401	安山岩	磨・敲・凹石	○	○	○		○		
402	砂岩	磨・敲・凹石	○	○	○	○	○	○	
403	安山岩	磨・敲・凹石	○	○	○	○	○		被熱による破砕
404	安山岩	磨・敲・凹石	○	○	○	○	○		
405	安山岩	磨・敲・凹石		○	○		○		
406	砂岩	磨・敲・凹石	○	○	○	○	○		
407	砂岩	磨・敲・凹石	○		○		○		



第72図　遺構外出土石器⑧



第 73 図　遺構外出土石器⑨

第 74 図　遺構外出土石器⑩

2　弥生時代・古墳時代の調査（第 75 図）

本遺跡では，弥生時代・古墳時代の遺構は検出されなかった。しかし，包含層及び表土から少数の土器が出土したため，小破片も含めて 16 点の報告を行う。

（1）　甕（415 ～ 422）

415 は黒髪Ⅰ式土器である。内外面に横ナデが施されている。口縁部は厚みがあり，上方に傾き口縁部内面が張り出している。張り出しがやや強いことから，黒髪Ⅰ式土器の新段階である。口縁部外面には煤が付着している。

416 は黒髪Ⅱ式土器の丹塗土器である。外面は横ナデを施した後に丹が塗られている。内面は丹塗磨研である。内面は外面に比べ，厚く丹が塗られており，丁寧に磨かれている。

417 は須久Ⅰ式土器である。内外面に横ナデが施されている。口縁部の断面は方形に近く，上方へ弱く傾いている。口縁部外面には煤が付着している。

418 は入来Ⅱ式土器である。口縁部が下方へ垂れている。口縁部にミガキが施されている。419 は入来Ⅱ式土器である。外面はハケ目が施されている。内面及び底面にはナデが施されている。底部はわずかに上げ底の中実脚台である。外面に薄く煤が付着しており，内面に薄くコゲが付着している。

420 は型式不明である。弥生時代後期から古墳時代前半のものと考えられる。外面はナデが施されている。内面は，底が平坦である。底から胴部に移行する部分に変換点がある。工具によって，平滑に成形されており，丁寧にナデが施されている。高台部は大きく開いている。内面は丁寧にナデが施されている。上下が逆の可能性がある。

421 は中津野式土器である。外面はナデ後に縦方向のハケ目が施されている。内面はナデが施されている。脚部内面はナデが施されている。脚部はやや外反しながら開く小さなもので，端部は外を向き丸くおさまっている。脚部内面の天井部は丸くなっている。脚部が小さいことから，小型の甕と考えられる。

422 は型式不明の丹塗土器である。外面は丹が塗られており，横方向のミガキが施されている。断面方形の突帯が施されている。

（2）　壺（423 ～ 426）

423 は黒髪Ⅱ式土器である。外面には口縁部から頸部にかけて，ミガキ具による 1 セット 4 条の暗文が，等間隔に施されている。暗文の上から縦方向にハケ目が施されており，頸部にハケ目板の端部痕が残っている。最後に全体にナデを施すことでハケ目を磨り消している。内面には分割ミガキが施されている。横方向に 3 cm 程度の幅のミガキを上から下まで施し，下までミガキを施したら，右に同じようにミガキを繰り返し施している。

424・425 は型式不明だが，弥生時代後期の土器と考えられる。外面全体に不規則なハケ目が施されており，胴部下半には成形に使用した工具板による縦方向の擦過痕が残っている。突帯部は貼り付け突帯である。貼り付けた後に，横ナデが施されているが，突帯下部に継ぎ目が観察できる。突帯は先端がやや丸みを帯びた断面三角形の突帯に刻目が施されている。425 は，外面全面に不規則なハケ目が施されている。突帯部は貼り付け突帯である。突帯下部の貼り付け部分には，上から粘土を塗って突帯と胴部との貼り付け痕を隠している。突帯は先端がやや丸みを帯びた断面三角形の突帯に刻目が施されている。424 と 425 は良く似た胎土である。

426 は中津野式土器である。外面には全面に不規則なハケ目が施されている。内面には丁寧なナデが施されている。

（3）　高坏（427 ～ 430）

427 は型式不明の丹塗土器である。内外面全体に丹塗りされているが，内面から口縁部外面にかけては厚く，口縁以外の外面は薄い。口縁部の下に断面三角形の二条突帯が施されている。突帯は貼り付けによって作られている。突帯上部は，丁寧なナデによる調整が施されている。突帯下部は，粗いナデが施されており，貼り付けの痕跡が観察できる。突帯の下には縦方向のハケ目による調整が施されているが，その後にケズリによって成形されている。

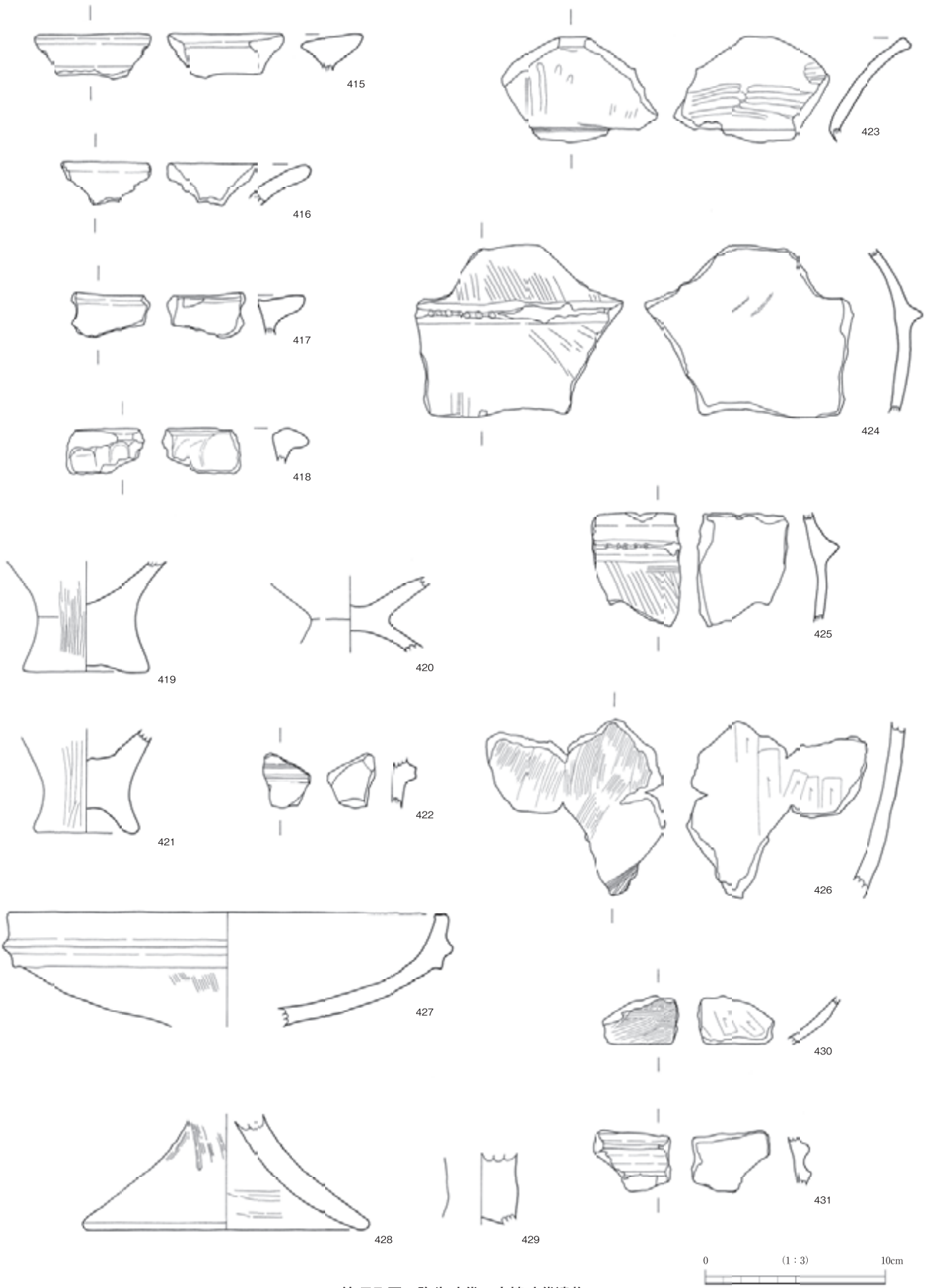
428 は型式不明の丹塗土器である。外面は薄い丹塗りの後にハケ目を施し，最後にミガキが施されている。内面は工具による成形を行った後にナデが施されている。427 と 428 は良く似た胎土である。

429 は型式不明である。脚中部であると考えられるが，器壁が摩滅しており，坏部と脚部が残存していないため，詳細は不明である。

430 は中津野式土器である。外面は全面に不規則なハケ目が施されている。内面は，丁寧にナデが施されている。坏部の形態は，途中で屈折し外反するものである。

（4）　器種不明（431）

431 は黒髪Ⅱ式土器の丹塗土器である。器種は不明である。外面は丹塗磨研が施されている。内面は，ナデが施されている。



第 75 図　弥生時代・古墳時代遺物

3　古代の調査

（1）　調査の概要（第 76 図）

古代の調査はＪ～Ｌ－ 18 ～ 20 区，Ｐ・Ｑ－ 31 ～ 34 区の２地点で行った。

Ｊ～Ｌ－ 18 ～ 20 区　Ｊ～Ｌ－ 18 ～ 20 区は，一部にⅢ層の残存が確認されたが，宅地造成や畑地としての利用の際に，大部分がⅣ層上面まで掘削を受けた状況であった。したがって，遺構は表土直下のⅣ層上面で検出されたが，当時の生活面より下層での検出と判断される。

Ｊ～Ｌ－ 18 ～ 20 区では，土坑６基と掘立柱建物跡１棟，柱穴群が検出された。検出状況から，土坑が掘立柱建物跡及び柱穴群に切られることが確認された。

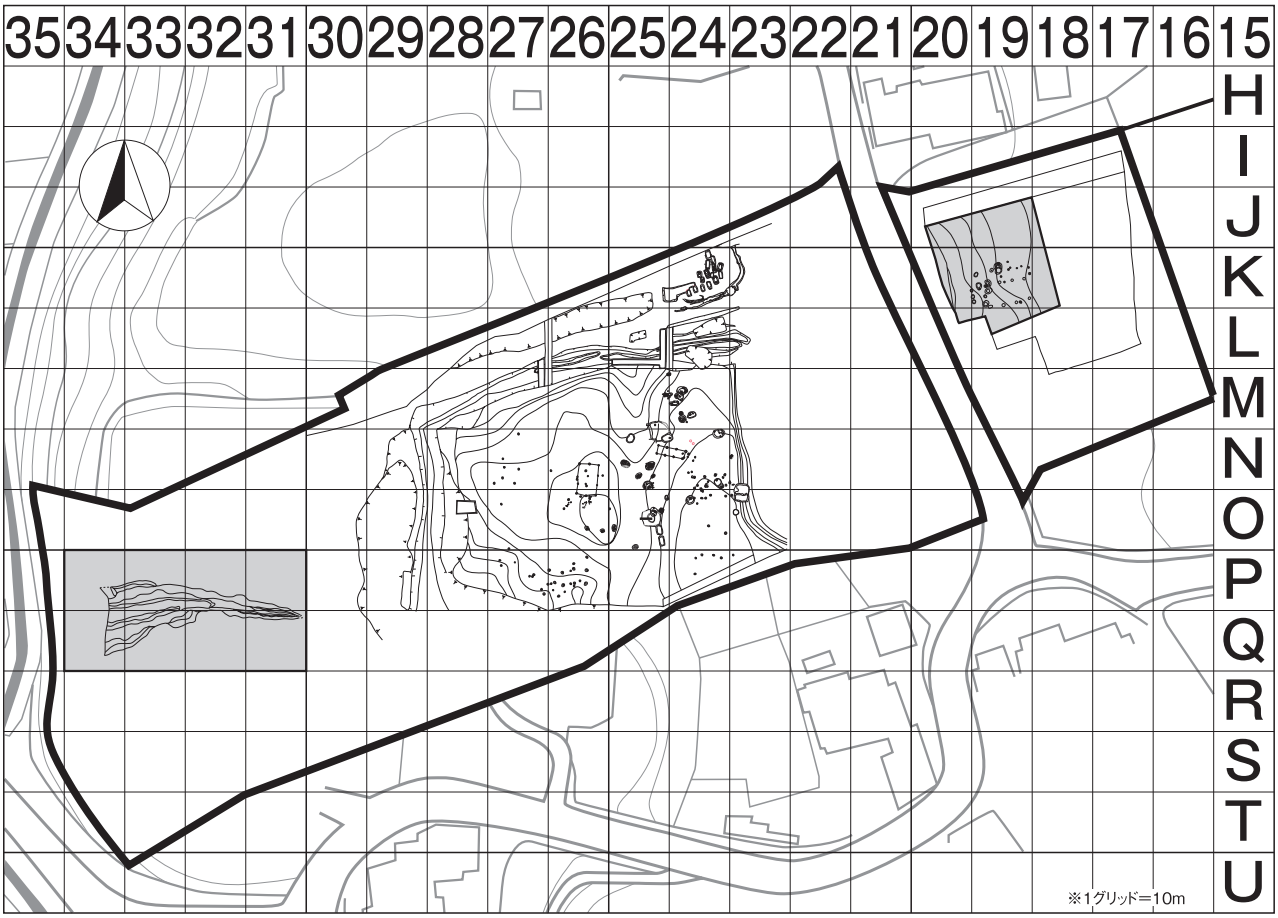
そこで，遺構の検出状況の記録写真を撮影した後，まず掘立柱建物跡と柱穴群の調査を行った。掘立柱建物跡を構成する柱穴は軸をそろえて半截し，柱痕跡の確認を行った。それ以外の柱穴は，調査期間の都合で，検出後に直ちに完掘した。

土坑は長軸に沿って半截し，土層堆積状況の観察を行い，必要な記録を作成した後，完掘した。床面の判断は，埋土堆積状況の変化や，炭化物の堆積，硬化面等の把握に依った。

遺物の取り上げは，土器・陶磁器類の小破片については，掘り下げ時にグリッドごとに一括で取り上げた。大型の破片については遺構検出後に，遺物出土状況を観察し，遺構に関係の無いと判断されるものについてはグリッドごとに一括で取り上げを行った。遺構に関係すると判断された遺物については，遺構内出土遺物と同様の取扱いをした。

Ｐ・Ｑ－ 31 ～ 34 区　Ｐ・Ｑ－ 31 ～ 34 区はシラス（Ⅷ層）まで掘削を受けていた。さらに，表土は造成により堅く叩きしめられている状況であった。しかし，表土中から，古代から中世にかけての遺物が豊富に出土し，またトレンチ調査の際に，溝状遺構の可能性が想定される黒褐色土の堆積が確認された。そこで，調査区全面の表土を除去し，遺構の検出を試みた。その結果，東西に延びる溝状遺構（SD38）が検出された。

SD38 の調査は，平面プランの検出と同時に南北方向のトレンチを２か所設定し，埋土堆積状況の確認を行った。その結果，上半には近年の造成の影響が及んでいることが確認されたが，埋土の下半に古代から中世の層堆積が良好な状態で残存していることが確認された。そこで，上半については重機を用いて掘り下げを行った。その後，人力により中世に該当する面での平面プランの検出を行い，そこで検出状況の記録写真を撮影した。



第 76 図　古代の調査範囲（アミの範囲）

埋土下半については，人力による分層発掘を行った。SD38の埋土中から出土した遺物は，各層ごとにグリッド一括で取り上げを行ったが，床面付近の遺物については，トータルステーションを用いて出土地点を記録しながら取り上げた。

SD38の遺物出土状況や埋土の堆積状況等から判断して，M・T－30～34区において旧地形からの大幅な改変があったことは確実であり，古代の遺構は，調査区西側の全体に拡がっていた可能性が高い。

なお，縄文時代と中世の遺構が検出されたM・P－23～28区からは，古代の遺構は検出されなかった。

(2) 土師器の分類

外畠遺跡では，SD38の下層を中心に古代の遺物が豊富に出土した。中でも土師器の坏・埦の出土量が多く，それらとともに土師器の皿や甕，内黒土師器，須恵器などが出土した。そこで，底部外面の切り離し技法がヘラ切りのものを対象として，土師器の坏・埦・皿を第77・78図のとおり分類した。

内黒土師器は出土量が少なく，さらに大半が小破片であり器種・器形を判断できるものが少ない。よって，器種・器形の判断できるものについては土師器坏及び土師器埦の分類に準じる。

ア 土師器坏（第77図）

法量及び器形，調整技法から6類に分類した。器形では底部の形状と体部から口縁部の形態に，調整技法では底部外面から体部下端の調整に特に注目した。

イ 土師器埦（第78図）

高台のあるものを埦とした。法量及び器形，調整技法から8類に分類した。特に高台の形状と高さに注目した。

ウ 土師器皿（第77図）

出土量は少ない。法量及び器形，調整技法から4類に分類した。

(3) 遺構

ア 土坑（第79図）

土坑は6基検出された。6基は密集して分布していて，全てK－19区のⅣ層上面で検出された。また，掘立柱建物跡（SB67）及び柱穴群と分布が重複しており，SK73の一部は掘立柱建物跡の柱穴（SB67－P1）に切られることから，土坑群が古く，SB67及び柱穴群が新しいと判断できる。

SK68（第80図）

検出状況 SK68は，SK77の北に位置し，SK77と一部を切り合った状況で検出された。平面プランの検出状況と埋土の堆積状況から，SK68がSK77に切られていることが判断された。

形状・規模 想定される平面形は歪んだ円形で，規模は残存している箇所で約130cmである。断面形は段掘り状になっていて，底面の中央付近が約10cm深くなる。検出面からの深さは45cmである。

埋土 埋土は4層に分層した。埋土にアカホヤやシラスのブロックが含まれる。床面中央の一段深くなった箇所には，黒褐色で炭化物や焼土塊を含んだ埋土4が堆積していた。

遺物 遺物は土師器片84点，須恵器片14点が出土した。うち10点を図化した。

土師器 432～434は坏もしくは埦である。432・433は，体部が開き，口唇部は先細りする。体部外面下半に回転ヘラケズリの痕跡を明瞭に残す。体部内面はナデが施される。胎土は浅黄色を呈する。434は，体部の外傾がきつい。体部の内外面にはナデが施される。胎土は浅黄橙色を呈する。435は埦の底部である。底部の中央を非常に薄く仕上げる。

436は内黒土師器の埦である。内面には非常に丁寧なミガキが施されていて光沢がある。外面には回転ナデの痕跡を残す。

437は甕である。土坑の床面で検出された。胴部は薄く，口縁部は真っ直ぐに開きながら立ち上がる。外面は，底部から下半にはハケ目が施される。上半から口縁部は摩滅しているが，一部に横方向のハケ目を観察できる。内面は，底部付近はナデ，胴部は左上方向のケズリが施されるが，胴部上半はミガキ様のナデによりケズリの痕跡が消される。口縁内面はハケ目が施される。

須恵器 438～441は須恵器である。438は甕の頸部である。外面は格子目タタキによって成形されている。内面は，頸部付近に横ナデが施されており，胴部には青海波の当具痕が残る。439・441は甕の胴部である。外面には格子目タタキ痕が，内面には青海波の当具痕が観察される。440は甕の胴部である。外面には格子目タタキ痕が，内面には平行の当具痕がみられる。

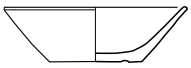
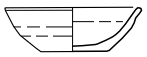
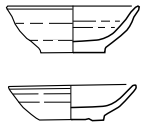
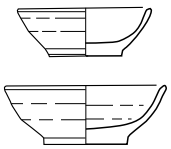
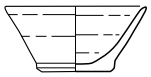
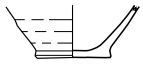
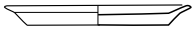
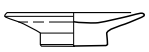
SK70（第81図）

検出状況 SK70は，6基の中で最も南で検出された。

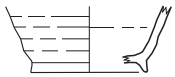
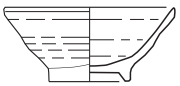
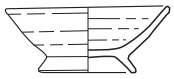
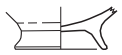
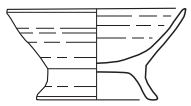
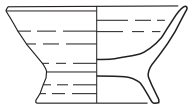
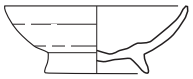
形状・規模 平面の形状は楕円形で，規模は長軸111cm，短軸90cmである。断面形は，床面はほぼ平坦で，壁面は開き気味に立ち上がる。検出面からの深さは50cmである。

埋土 埋土は3層に分層した。埋土1と3には微細な炭化物が多く含まれる。

遺物 遺物は，土師器片26点，須恵器片2点，鉄製品1点が出土した。うち4点を図化した。

坏1類		**法量**　口径 12.5 ～ 14.2cm，底径 5.0 ～ 7.3cm，　高さ 3.9 ～ 4.3cm **器形**　底部は平坦で，底部から体部は内外面に稜をもって立ち上がる。体部は直線的で外傾する。 **調整**　内外面全体に丁寧なナデが施され，器面に凹凸はほとんど残らないが，外面下端に回転ヘラケズリの痕跡を残すものもある。底部外面は切り離し後にナデを施すが，ヘラ切りの痕跡が残る。
坏2類		**法量**　口径 10.4 ～ 14.4cm，底径 5.2 ～ 7.4cm，高さ 3.3 ～ 3.9cm **器形**　体部はやや丸味を帯び，口縁はわずかに外反する。器壁が厚めで，口唇部は丸味を帯びる。 **調整**　内外面に横ナデもしくは回転ナデを施し，外面には凹凸が残る。底部外面にもナデが施されるが，切り離しの痕跡が残るものが多い。見込みを押圧することで底部が薄くなるものが多い。
坏3類		**法量**　口径 9.6 ～ 11.2，底径 4.4 ～ 6.4, 高さ 3.5 ～ 4.7cm の高いものと，2.4 ～ 3.3cm の低いものがある。 **器形**　底部がやや厚みを持ち，円盤状を呈するものもある。体部はやや丸味を帯びるが，２類に比べ直線的である。器壁は２類と比較して薄手で，口唇部は先細りする。 **調整**　内外面に横ナデもしくは回転ナデを施し，外面に凹凸がわずかに残る。大部分のものが，底部外面の切り離し後に雑なナデが施される。
坏4類		**法量**　口径 10.4 ～ 12.6cm，底径 5.8 ～ 6.8cm，高さ 3.8 ～ 5.1cm で，法量にはばらつきがある。 **器形**　円柱状の底部を持ついわゆる「充実高台」である。体部はやや内湾気味に立ち上がり，丸味を帯びる。高台下端が垂直のものと，やや開くものがある。 **調整**　内外面に回転ナデが施される。底部外面は切り離し後に丁寧なナデが施される。切り離しによって生じた余分な粘土をきれいにナデ消すものと，放置するものがある。
坏5類		**法量**　口径 8.8 ～ 11.2cm，底径 5.4 ～ 7.0cm，高さ 3.7 ～ 5.1cm で，口径に対して器高が高い。 **器形**　外観は充実高台のように見えるが，底部を薄く仕上げるため円柱状の底部にはならない。体部は直線的で，わずかに内湾するものも存在する。 **調整**　内外面に回転ナデを施す。特に見込みに強いナデが施されるため，見込みは水平な面を持たず，底部は薄くなる。底部外面は切り離し後に丁寧なナデが施される。
坏6類		**法量**　底径 5.4 ～ 7.0cm **器形**　全体の器形がわかるものは無い。見込みに押圧と強いナデが施され，水平な面に仕上げられる。 **調整**　見込みのナデは強く，指頭の痕跡が残る。底部外面は，底部切り離し後にナデが施され，ヘラ切りの痕跡はあまり残らない。外面下端に，粘土が付着するものもある。焼成が良好で，硬質なものが多い。
皿1類		**法量**　口径 12.9 ～ 14.6cm，底径 9.0 ～ 11.0cm，高さ 1.5cm **器形**　器高が低く，底部は水平で大きい。底部から体部は稜をもって立ち上がり，口縁部は外反する。 **調整**　内外面にナデを施す。内面の底部から体部へ変化する箇所に強めのナデ施され，浅い凹みが作られる。底部外面は切り離し後に丁寧にナデを施す。
皿2類		**法量**　口径 11.0cm, 底径 6.8cm, 高さ 3.3cm，高台高 1.1cm **器形**　ハの字状に開く高台を持つ。体部は皿２類よりも外傾が弱い。 **調整**　内外面の全体に丁寧なナデが施される。
皿3類		**法量**　口径 10.9 ～ 11.8cm，底径 5.3 ～ 6.0cm，高さ 2.5 ～ 2.8cm **器形**　円柱状の高台を持つ。体部は直線的で，器壁が厚く口唇部は丸味を帯びる。 **調整**　内外面に横ナデが施される。底部外面は切り離し後にナデが施される高台外面下端は，切り離し時に生じた余分な粘土が付着する。
皿4類		**法量**　口径 10.8cm，底径 5.6 ～ 5.8cm，高さ 2.5cm **器形**　厚手の底部を持ち，口縁部付近がやや内湾する。坏３類を浅くしたような器形である。 **調整**　内外面にナデが施される。底部外面の切り離し後には雑なナデが施される。

第 77 図　古代土師器　坏・皿　分類

埦1類		**法量**　底径 7.9～10.0cm，高台高 0.7～0.8cm **器形**　高台は低く，端部は角張る。底部は水平で，体部はわずかに外傾し，箱形になる。 須恵器の模倣品である。 **調整**　内外面に回転ナデが施され，外面には凹凸が明瞭に残る。内外面に赤色顔料が塗布される。
埦2類		**法量**　口径 11.8～14.2cm，底径 6.0～8.4cm，高さ 5.6～6.7cm，高台高 0.4～1.1cm **器形**　高台は低く，端部は角張る。底部は水平で，高台内面と高台の境界には稜がつく。 体部は１類よりも外傾する。 **調整**　内外面に回転ナデが施され，外面には回転ナデによる凹凸が明瞭に残る。
埦3類		**法量**　口径 12.4 ～ 14.0cm，底径 6.5 ～ 8.7cm，高さ 4.4 ～ 5.3m，高台高 0.8 ～ 1.5cm。 **器形**　高台はハの字状に開き，端部は丸味を帯びる。体部はわずかに内湾する。 **調整**　胎土中に１～２mm 程度の砂粒を含むものが多く，内外面にナデを施されるが，砂粒の移動の痕跡が明瞭に残る。
埦4類		**法量**　底径 6.2 ～ 8.6cm，高台高 1.0 ～ 1.8cm **器形**　高台内面は水平な面となり，稜をもって高台となる。高台はほとんど開かず，高台端部は平坦に作り出される。 **調整**　内外面にナデが施される。見込みに押圧と強いナデが施されるものがある。胎土に砂粒を含む。
埦5類	A  B 	底部の厚さが１cm 未満のものをＡ，１cm 以上のものをＢとする。 **法量**　口径 13.0 ～ 15.2cm，底径 5.5 ～ 9.8cm，高さ 6.7 ～ 7.6cm，高台高 1.1 ～ 2.2cm　。 **器形**　高台が高く，ハの字状に開く。Ａの高台端部は平坦になるが，Ｂの高台端部は丸味を帯びる。 体部はわずかに内湾する。口縁部がわずかに外反するものもある。高台内面と高台の境界が不明瞭なものが多いが，Ａ類には高台内面を水平にし，高台との境界に稜を持つものもある。 **調整**　内外面に横ナデを施す。高台内面から高台外面には丁寧なナデが施される。体部外面の下端から口縁のナデは雑で，高台の接合痕を残すものが多い。体部から口縁部よりも高台付近に丁寧な調整が施される資料が多い。
埦6類		**法量**　底径 6.2 ～ 7.6cm，高台高 1.0 ～ 1.1cm **器形**　高台は低く，埦３類よりも開く。体部の立ち上がりは開く。 **調整**　内外面の体部に回転ナデが施される。見込みにはナデが施されるが雑である。高台貼り付け後に，粘土の接合痕は丁寧にナデ消されるが，底外面の切り離し痕は未調整で痕跡を明瞭に残す。
埦7類		**法量**　口径 14.6cm，底径 8.0cm，高さ 5.2cm，高台高 1.0cm **器形**　高台はハの字状に開き，薄手で端部は先細りする。体部の立ち上がりは開らく。 全体的に器形が歪む。 **調整**　見込みには指頭による成形時の凹凸が明瞭に残る。内外面にナデを施すが雑であり，ケズリによる凹凸が残る。
埦8類		**法量**　不明 **器形**　全体の器形は不明である。 **調整**　高台を貼り付けた後に，高台内面と高台の境界に，何らかの工具で刺突を行う。

第 78 図　古代土師器　埦　分類

鉄製品　442 は鉄製の刀子である。埋土２から４片に分かれた状態で出土した。長さ 13.6cm，厚さ 3.7mm である。断面形は，刃部は二等辺三角形状で，基部は長方形状になる。基部の一部には木片が付着している。

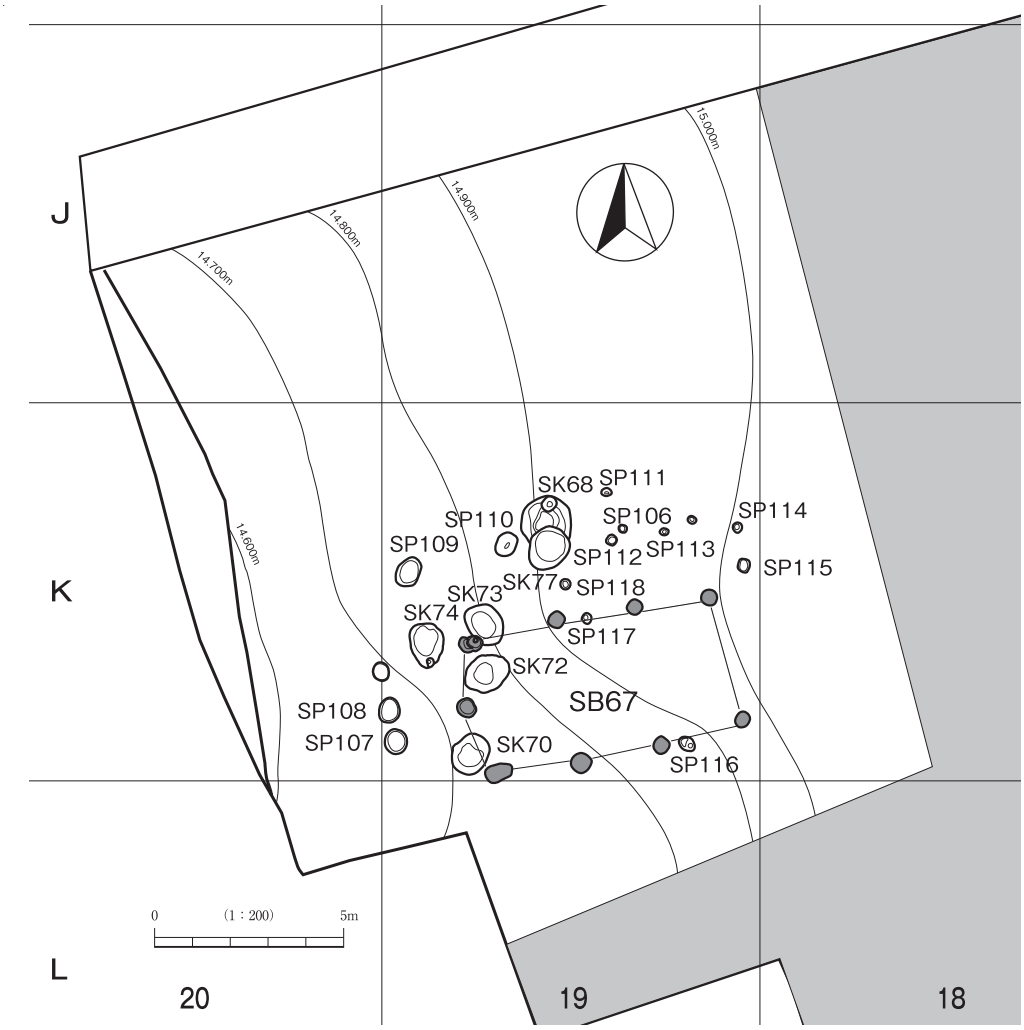
土師器　443 は甕である。検出時に一部が露出していたが，出土状況の観察から，埋土２に覆われていたと想定される。胎土はにぶい黄橙色を呈する。胴部がやや張り出し丸みを持ち，口縁部は開く。器壁は薄く仕上げられる。胴部外面の下半にタタキの痕跡を明瞭に残す。胴部上半から口縁部内面にかけては，横方向のハケ目の後に，丁寧なナデが施される。胴部内面は，左上方向のケズリが施された後に，ミガキ様のナデが施される。

須恵器　444 は壺の胴部である。内外面にナデが施される。445 は甕の胴部である。外面には格子目タタキ痕が，内面には青海波の当具痕が残る。

SK72（第 82・83 図）

検出状況　SK72 は SK73 の南側で検出された。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 126cm，短軸 95cm，検出面からの深さは 61cm である。



第 79 図　古代の遺構配置図（J ～ L － 18 ～ 20 区）

埋土　埋土は７層に分層した。土坑下部に堆積している埋土６・７には炭化物・炭化材・焼土塊が含まれる。土師器甕（455）は，埋土４まで埋め戻された後に，埋土３が堆積している部分が掘り込まれ，正位置で据えられたと考えられる。なお，455 内の埋土は，黒褐色土で炭化物と焼土塊を含んでいた。

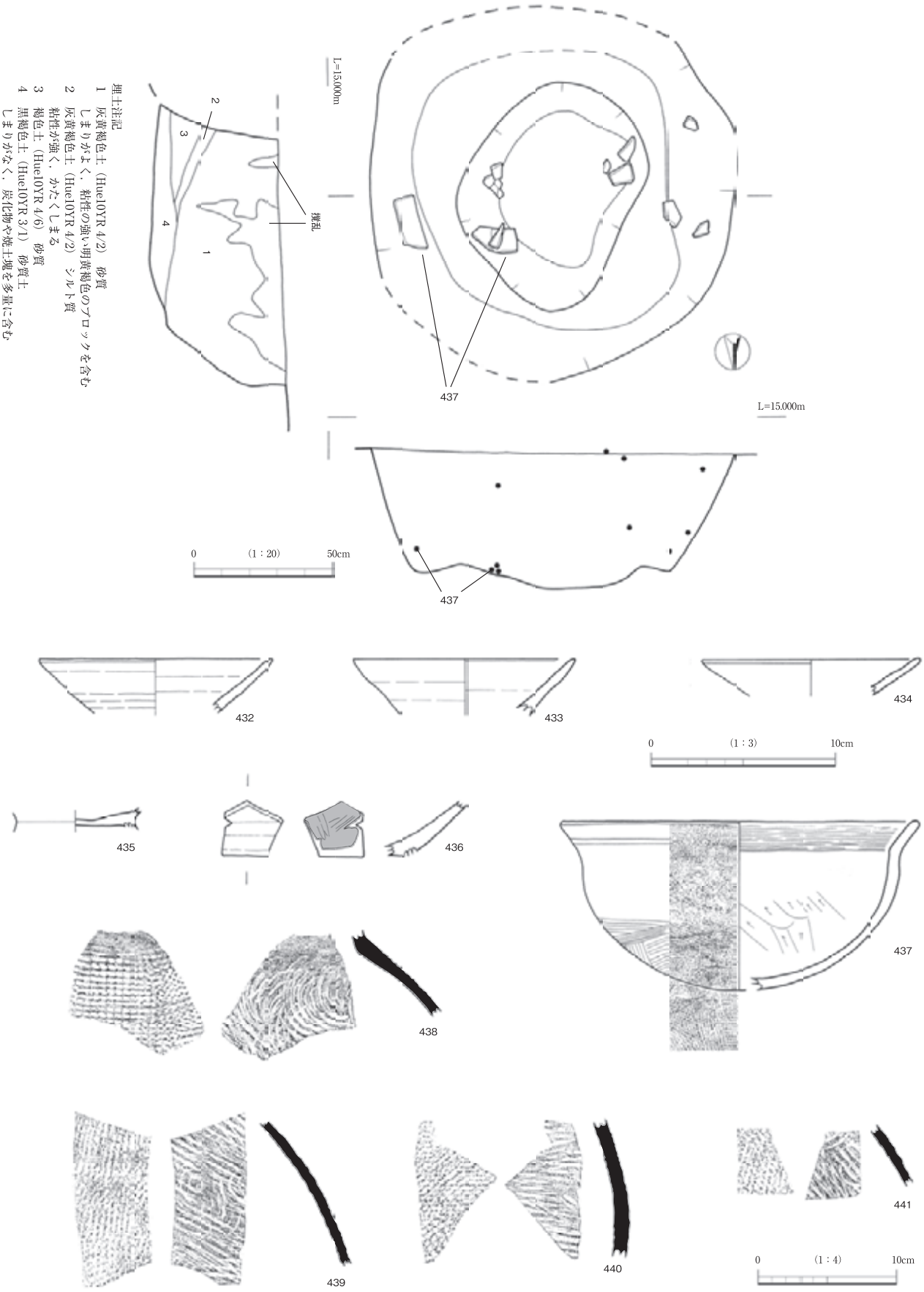
遺物　遺物は，土師器 76 点，須恵器６点，陶磁器類３点，青銅製品４点が出土した。土師器９点，須恵器１点を図化し，青銅製品の写真を掲載した。また，一部に植物による撹乱が入るため，中世の遺物が混入していた。

土師器　446 ～ 451 は土師器である。446 は墨書土器である。器種は不明である。447 は埦である。体部は真っ直ぐに立ち上がり，口縁はやや外反する。448 は埦で，体部の内外面に煤が付着している。450 は埦の底部である。高台は低く，ややひらく。底部は薄く仕上げられる。体部は箱形になると思われる。埦１類に該当する。451 は坏の底部である。底部は薄く，体部は外傾する。底部外面には，ヘラによる切り離し後にナデを施す。坏２類に該当する。

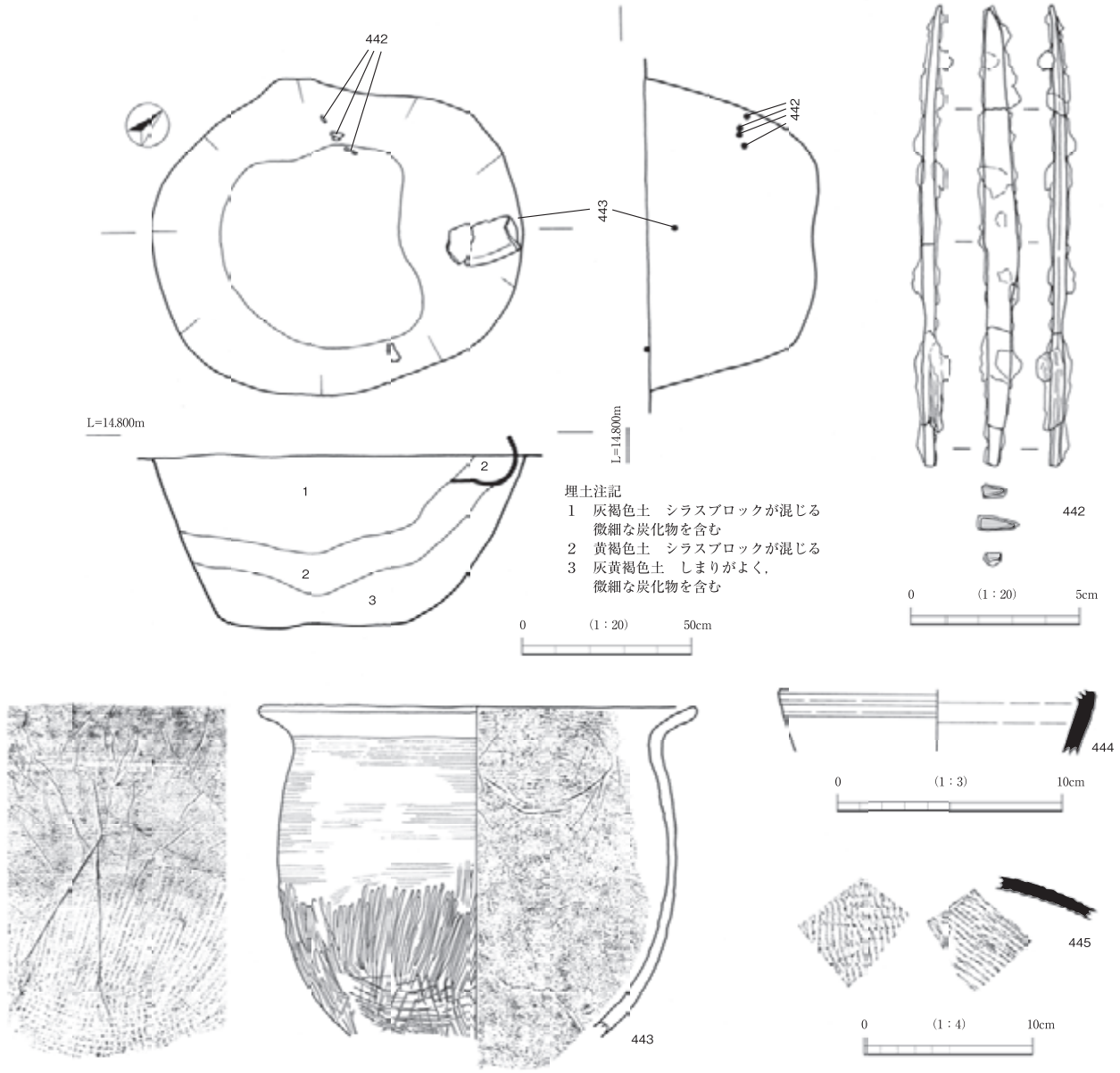
455 は完形品の土師器の甕である。土坑内に正位置で据えられていた。体部は長胴で，体部上半がわずかに張り出す。口縁は短く，開く。外面の底部から胴部下半にはタタキ痕を明瞭に残し，上半から口縁にかけては横方向のハケ目調整の後に，丁寧なナデが施される。内面は，底部から口縁まで左上方向のケズリが施され，さらに上半にはミガキ様のナデが施される。口縁は横方向のハケ目調整が施され，一部にはナデも施される。

須恵器　454 は二重口縁壺の口縁部である。器面全体に丁寧なナデが施されている。胎土は良質で，焼成も特に良好である。

青銅製品　456 ～ 458 は青銅製の製品である。劣化しているため，図化することはできなかった。製品には全て銀の付着が確認された。456 は長さ約８mm 程度で，「へ」の字状に湾曲する。458 はもともと一つであったが，劣化により破損した。458a は長さ約 2.3cm で，458b は長さ約 1.2cm で，「コ」の字状に曲がる。



第 80 図　SK68・出土遺物



第 81 図　SK70・出土遺物

SK73（第 84 図）

検出状況　SK73 は SK72 の北側，SK74 の東側で検出された。南側の一部を SB67 － P1 に切られる。

形状・規模　平面形は楕円形で，長軸 119cm，短軸 90cm である。断面形は，床面はほぼ平坦で，壁面は開き気味に立ち上がる。検出面からの深さは 33cm である。

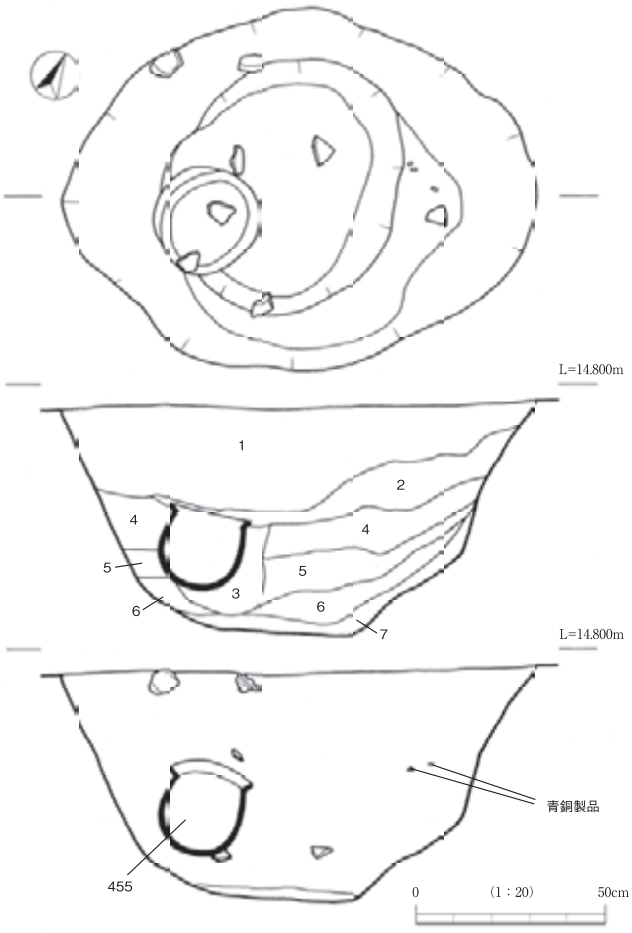
埋土　埋土は，5 層に分層した。明褐色土を基本として，床面付近の埋土 4 は微細な炭化物を含む。

遺物　遺物は土師器片 44 点，須恵器 6 点が出土した。古代の土坑でこの SK73 のみが大型の土師器の甕を伴わない。12 点を図化した。

内黒土師器　459･460 は内黒土師器の埦である。459 は，高台は外れているが，ほぼ完形品である。高台の外れた箇所は，特に摩滅が著しい。体部は直線的でやや外傾する。内面にはミガキが施されるが，胴部は縦方向で，口縁部付近は横方向である。内面は摩滅しているが，光沢を残す部分もある。床面外面は，ヘラ切り後にナデが施されるが，雑である。器形は土師器埦 2 類に相当する。460 は，器壁がやや厚い。内面には丁寧なミガキが施され，光沢がある。

土師器　461 は，坏である。破片のため詳細は不明だが，内面は灰色を呈し，ミガキが施される。

462・463 は埦である。同一個体の可能性も想定されるが，個別に図化した。胎土はにぶい橙色を呈する。内面には回転台の利用による砂粒の移動の痕跡が残るが，ナデは丁寧である。胴部の一部に横方向のケズリが施され，段がつけられる。464 は埦である。体部は直線的で，口縁部は外反する。内外面にナデの痕跡を明瞭に残す。



埋土注記
1　オリーブ褐色土（Hue2.5Y 4/3）
　やや粘質があり，暗灰黄色と黄褐色のブロックが混じる。炭化物を含む
2　粘性の強い暗褐色土（Hue10YR 3/3）と
　黄褐色土（Hue10YR 5/6）がブロック状に混じる
3　黒褐色土（Hue10YR 2/2）
　1 ～ 3cm 程度の炭化物のブロックを多く含む
4　にぶい黄褐色土（Hue10YR 4/3）
5　暗褐色土（Hue10YR 3/4）
6　褐色土（Hue10YR 4/6）
　1 ～ 5cm 程度の炭化材や，1 ～ 1.5cm 程度の焼土塊を多く含む
7　灰白色土（Hue10YR 3/4）
　粘性の強いブロックが混じる。炭化物や焼土を含む

第 82 図　SK72

465 は，土師器で器種不明である。胴部の外傾がきついことから，皿の可能性がある。

466 は坏の底部である。底部切り離し後に雑なナデが施される。胴部外面下端に回転ヘラケズリの痕跡を残し，そのため胴部下端から体部への変化点に段がつく。内面にはナデが丁寧に施される。底部は薄い。

467・468 は甕である。467 は破片資料だが，上辺の一部に焼成後の穿孔がみられる。

須恵器　469・470 は甕の胴部である。外面は格子目タタキである。内面は，平行の当具痕の上から丁寧にナデが施されている。

SK74（第 85 図）

検出状況　SK74 は SK73 の南側で検出された。土坑の南側を中世の柱穴に切られる。

形状･規模　平面形は，南側が突き出た歪んだ楕円形で，規模は長軸 115cm，短軸 88cm である。断面形は，床面はほぼ平坦で，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは 35cm である。

埋土　埋土は 5 層に分層した。埋土のベースは灰黄褐色土で，床面付近の埋土 5 は微細な炭化物を含む。

遺物　遺物は，土師器片 31 点，須恵器片 11 点が出土した。11 点を図化した。

内黒土師器　471 は内黒土師器の破片で，器種不明である。内面には丁寧にミガキが施され，光沢がある。

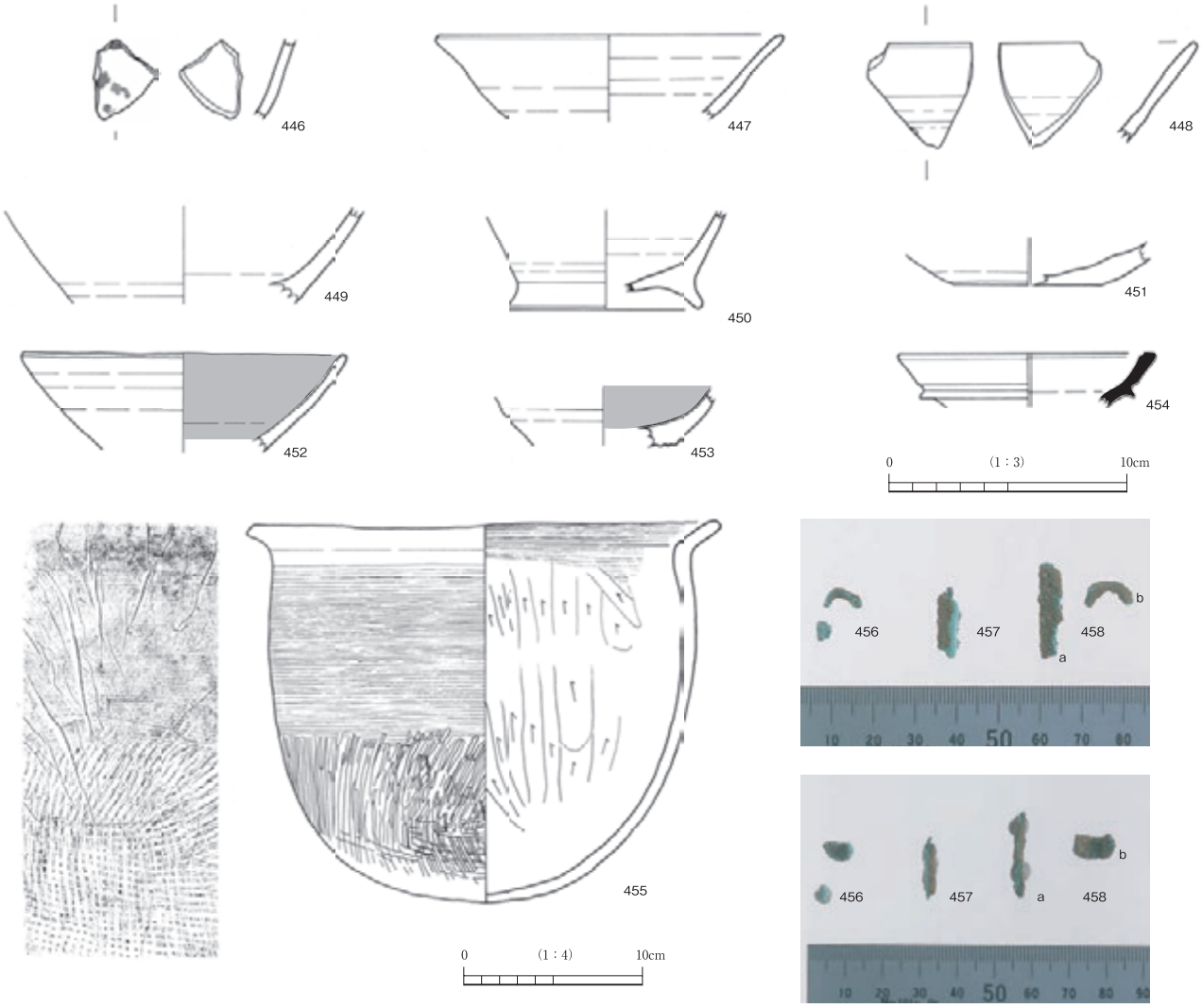
土師器　472 は土師器埦 4 類である。撹乱付近から出土したため，混入の可能性がある。外面には，高台を貼り付けた後に丁寧なナデが施され，高台内面の中央は，粘土が盛り上がる。

474 は甕である。土坑の床面付近から，外面を上に向けた状態で検出された。胴部は丸みを帯びて，やや張り出す。口縁部はやや開き，短い。胎土は明黄褐色を呈する。胴部外面下半には格子目状のタタキ痕を明瞭に残す。外面胴部上半には，ハケ目は施されず，横方向を基本としたナデが施される。ナデは丁寧ではなく，粘土の接合痕を残す箇所もある。胴部内面は，左上方向のケズリが施され，口縁部から胴部上半の一部には丁寧な横方向のナデが施される。

須恵器　475・476 は甕の口縁部である。475 は，外面には平行タタキ痕が，内面は青海波の当具痕が観察される。内面は，叩きの後に丁寧にナデが施されている。外面から内面口縁部にかけて，自然釉が付着している。476 は，外面には平行タタキの痕跡が残る。内面にはやや小さい青海波の当具痕がみられる。頸部内面は，ケズリの後にナデが施されている。外面から口縁部内面にかけて，自然釉が付着している。

477 は壺の頸部である。内外面にナデが施されており，全面に自然釉が施釉されている。

478・480 は須恵器甕の胴部上半である。外面は平行タタキである。内面は青海波の当具痕である。外面全体に薄い自然釉が付着している。479 は甕の胴部である。外面は平行タタキである。内面は青海波と平行の当具痕の上から，全体にナデが施される。非常に丁寧に作られている。481 は須恵器甕の胴部である。外面は平行タタキである。内面は青海波と平行の当具痕の上から，全体にナデが施されている。非常に丁寧に作られている。



第 83 図　SK72 出土遺物

SK77（第 86 図）

検出状況　SK77 は，SK68 と南北に並んで位置する。SK77 が SK68 を切っている。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 120cm，短軸 103cm である。断面の形状は，床面はほぼ平坦で，壁面は，開き気味に立ち上がり，やや外傾する。検出面からの深さは 40cm である。

埋土･土師器甕出土状況　調査時には分層していないが，土師器甕の 482 と 483 の出土状況及び接合状況から判断して，少なくとも 2 層に分層可能であったと考えられる。土師器甕の 482 と 483 は土坑の西側に偏って検出され，482 の下部から 483 は出土した。エレベーションでは，ともに南から北方向に傾斜している。また，482 は，土坑の北西に大型の破片がまとまって出土したが，焼土と炭化物を多く含んだ土が付着していた。

遺物　遺物は，土師器片 73 点，須恵器片 3 点が出土した。14 点を図化した。

土師器　482 は甕である。埋土から破片の状態で出土したが，接合の結果ほぼ完形品となった。長胴で，胴部はやや張り出す。口縁部は短く，やや開く。器壁は厚い。底部から胴部外面下半にかけては不定方向のハケ目が施され，胴部外面上半から口縁付近にかけては，縦方向のハケ目が施される。口縁付近はハケ目の上から横方向に雑なナデも施される。胴部内面は，左上方向のケズリが施されるが，角度が一定しない。口縁部内面には横方向のハケ目の後に，ナデが施される。

483 は甕である。胴部がやや張り出し，口縁部は開く。482 と比較して器壁は薄い。胴部外面下半には不定方向のハケ目が施され，胴部上半には横方向のハケ目が施される。口縁部にはハケ目は施されず，丁寧なナデが施される。胴部内面には，左上方向のケズリが施され，口縁部には横方向のハケ目の後に，ナデが施される。ナデは胴部上半の一部まで及ぶ。

484 は甕である。口縁部は開き，長い。胴部外面には横方向のハケ目が，口縁部にはナデが施される。口縁部内面にはハケ目が施される。胎土は黄橙色である。

487 ～ 489 は土師器の埦２類である。体部は立ち，口縁部はわずかに外反する。

487 には墨書がみられるが，文字の判読には至らなかった。また，487 は，SK77 と SK70 の埋土から出土したものが接合したものであるが，墨書のある破片のみ SK70 から出土した。胎土は浅黄色で，粒子がやや粗い。胴部外面には回転ナデによる凹凸が残る。胴部内面にも回転ナデが施されるが，見込みの調整は雑である。

490・491 は土師器の坏２類である。底部からの立ち上がりは外傾し，胴部は直線的である。490 は，口縁部付近がやや内湾し，薄く仕上げられる。

492 は土師器で，器種不明である。外面に焼成後に施された線刻がみられる。494 は，土師器の埦２類である。高台を貼り付けた後にナデが施されるが，高台の接合痕が明瞭に残っている。

495 は内黒土師器の埦である。内面は丁寧なミガキが施され，光沢がある。

須恵器　495 は高台のある坏である。

イ　掘立柱建物跡

SB67（第 87 図）

検出状況　SB67 は K － 18・19 区で検出された。土坑と分布域が重複するが，柱穴Ｐ１が SK73 を切っていることから，土坑よりも新しいものと判断される。

規格・規模　主軸は N10° W で，規格は２間×３間である。柱間は，桁行が一間 201 ～ 228cm，梁行が一間 178 ～ 190cm である。P1 及び P7 には柱の立て替えの痕跡が確認された。SP71 は，調査時には，SB67 とは独立した土坑としていたが，SP71 の形状・規模及び SB67 の柱穴の並びから，SB67 を構成する柱穴と判断した。

遺物　遺物は，SP71 から土師器２点，須恵器１点が出土し，他の SB67 の柱穴からは，土師器 66 点，須恵器 14 点が出土した。

SP71（P9）出土遺物（497 ～ 499）　497 は SP71 の埋土１から，一部が検出時に露出する状態で出土した。内面は，見込みが押圧されていることから水平ではなく，体部との境界が不明瞭である。底部外面は水平で，体部との境界はやや丸みを帯びるが明瞭である。体部は直線的で，外観は箱形となる。調整は，内面の体部から口縁部には横ナデが施され，底部外面には切り離し後にナデが施されるが，外面下端には切り離し時に生じた粘土が付着している。外面には回転ナデによる凹凸が認められる。土師器坏１類である。

499 は須恵器の甕の肩部である。外面は格子目タタキである。内面は青海波の当具痕である。

P1 出土遺物（500）　500 はＰ１から出土した。土師器の坏の底部である。坏１類もしくは２類である。

P7 出土遺物（501 ～ 503）　501 ～ 503 はＰ７から出土した。501 は土師器の埦の底部である。高台は外れている。502 は内黒土師器である。内面には丁寧なミガキが施されている。503 は土師器の甕である。胎土はにぶい黄橙色を呈する。胴部外面には縦方向のハケ目が施される。ハケの目が細かく，櫛状の工具が想定される。口縁は丁寧にナデられる。胴部内面にはケズリが施され，口縁部内面はハケ目の上から，ナデが施される。

P8 出土遺物（504 ～ 508）　504 ～ 508 はＰ８から出土した須恵器である。504 は壺の口縁部である。内外面に横ナデが施される。内面には斑点状の自然釉が付着している。505 は甕の頸部である。外面は格子目タタキである。内面は，ケズリの後にナデが施されている。肩部は青海波の当具痕である。外面全体に自然釉が付着している。

506 は甕の胴部下半である。外面は平行タタキで，内面は平行の当具痕である。内面にはナデが施されている。507 は甕の胴部上半である。外面は格子目タタキである。内面は青海波の当具痕である。508 は甕の胴部下半である。外面は平行タタキで，内面は平行の当具痕である。

ウ　柱穴（第 88 図）

柱穴は K － 19 区を中心に，16 基が検出された。そのうち，当該期の遺物が良好な状態で出土した３基を報告する。

SP106

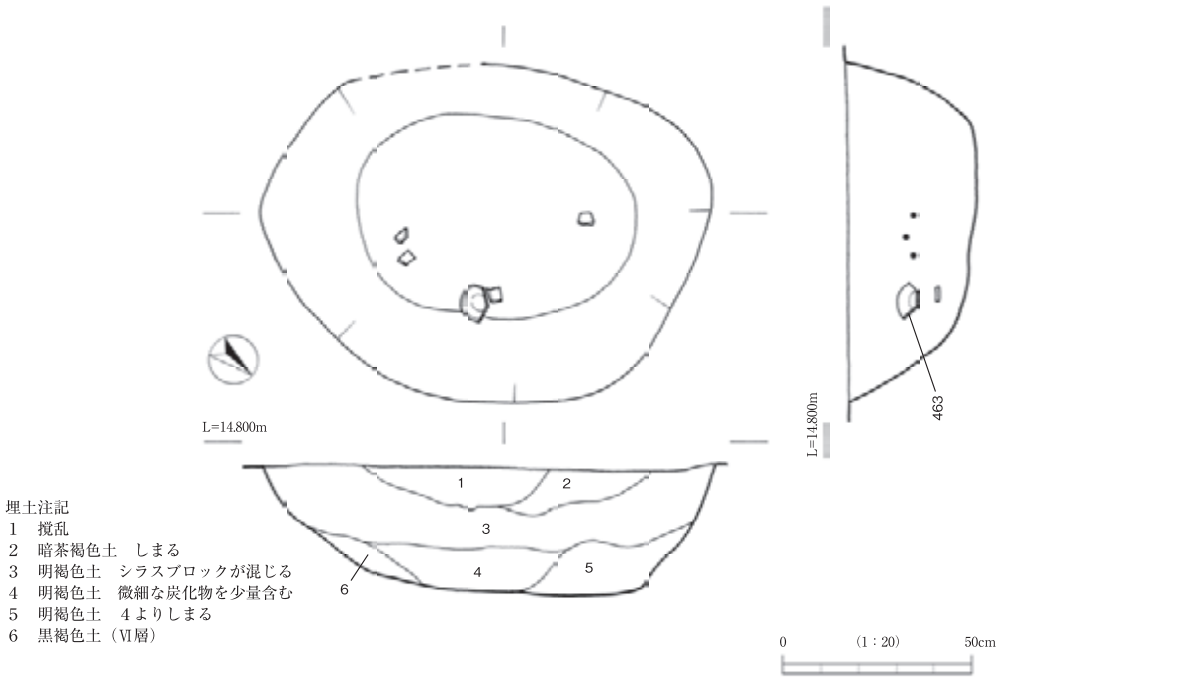
検出状況・規模　SP106 は K － 18 区のⅣ層上面で検出された。平面形は円形で，規模は 23 × 21cm，検出面からの深さは 50cm である。埋土は灰褐色砂質土である。

遺物（509）　検出面直下で 509 が伏せられた状態で出土した。509 は土師器埦２類である。高台は低く，ほぼ垂直である。高台端部は丁寧に成形され，断面は台形になる。体部は直線的で，体部外面下半には回転ヘラケズリの痕跡を残す。内面は，見込みには指頭による不定方向のナデ，体部には回転ナデが施される。

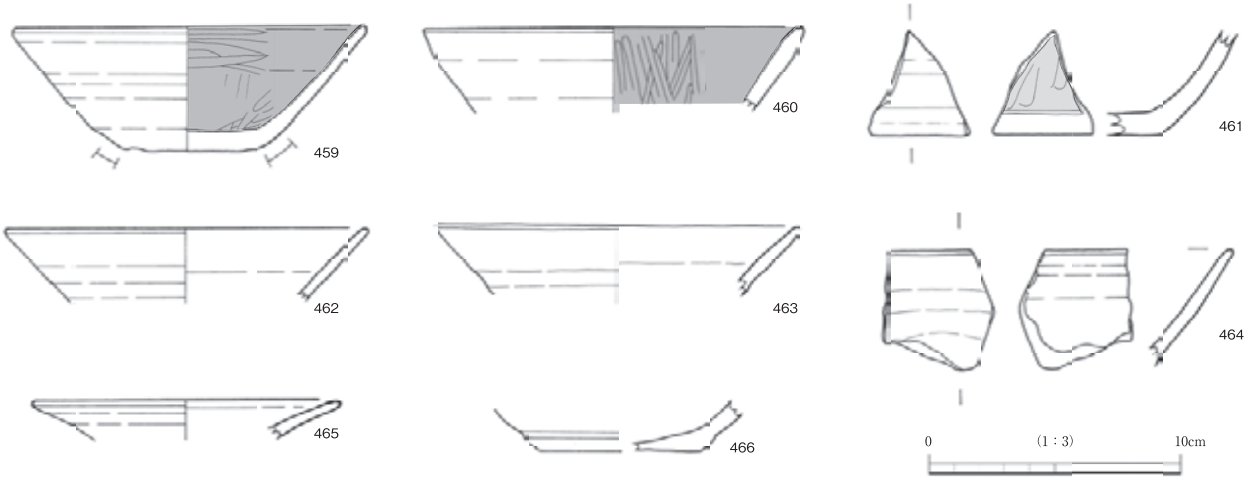
SP107

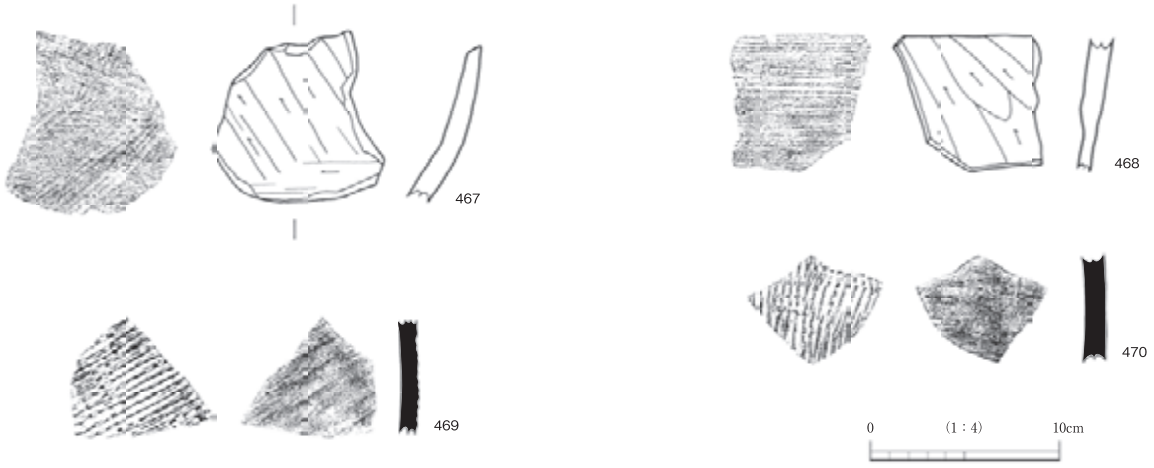
検出状況・規模　SP107 は K － 19 区のⅣ層上面で検出された。平面形は円形で，規模は 66 × 59cm，検出面からの深さは 18cm である。他の柱穴と比較して大型で浅い。土坑の可能性がある。埋土は不明である。

遺物（510 ～ 512）　511・512 は土師器の埦である。色調及び胎土が同一であり，同一個体の可能性がある。体部外面の高台から胴部下半は赤色系の色調をしていて，体部上半から口縁部，さらに内面は黒色系の色調を呈する。また，512 は高台を貼り付ける箇所に刻みが入れられている。

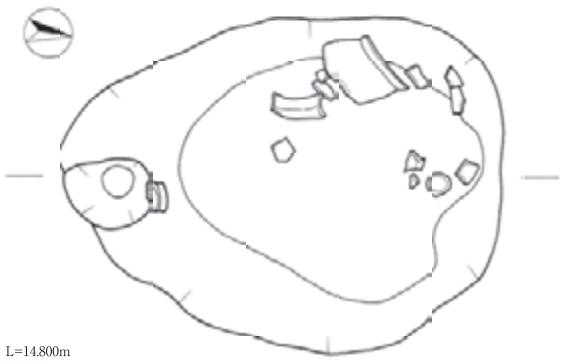


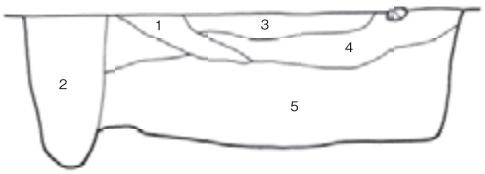
埋土注記
1　撹乱
2　暗茶褐色土　しまる
3　明褐色土　シラスブロックが混じる
4　明褐色土　微細な炭化物を少量含む
5　明褐色土　4よりしまる
6　黒褐色土（Ⅵ層）

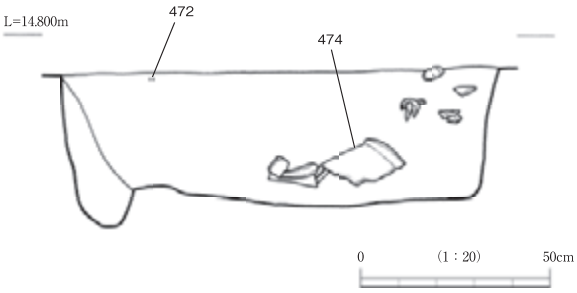




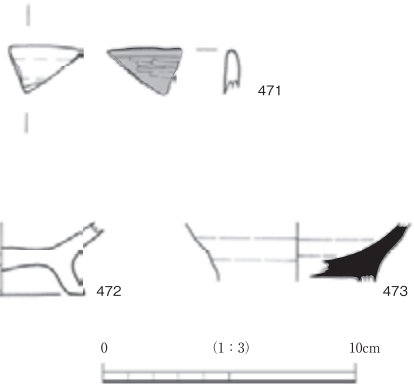
第84図　SK73・出土遺物

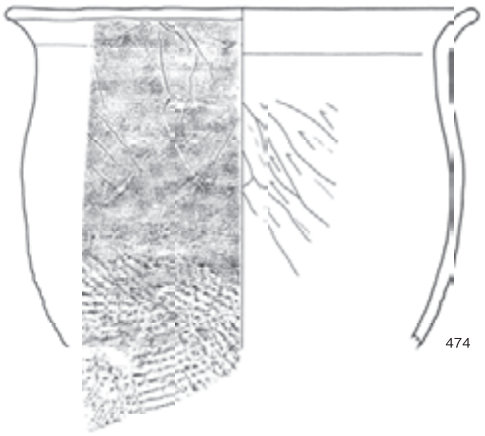


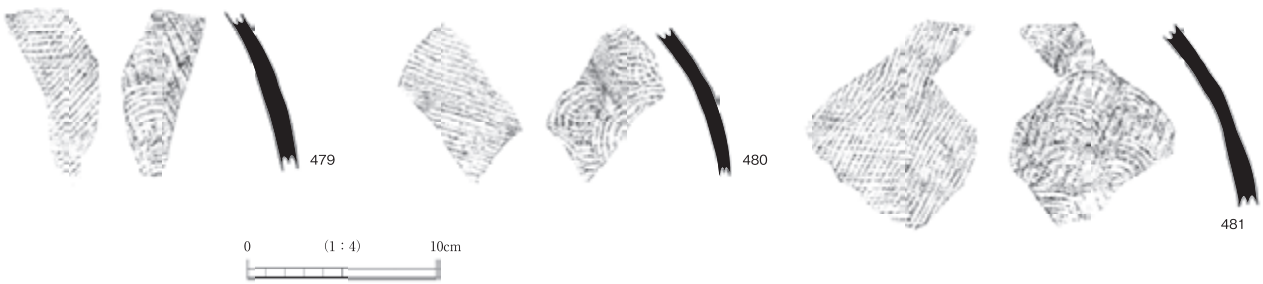




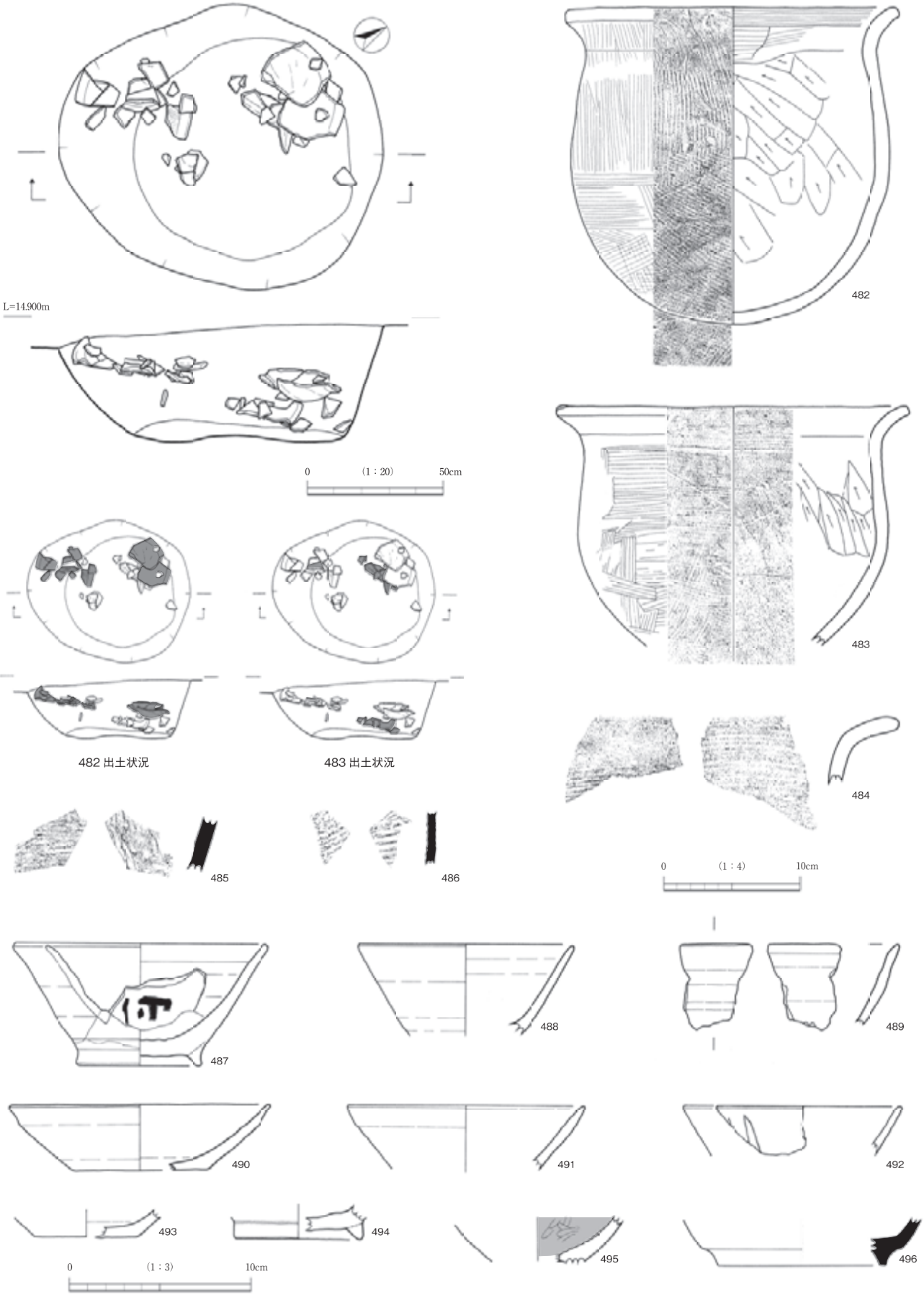
埋土注記
1　撹乱
2　暗灰黄色土（Hue2.5Y 5/2）　SK74 よりも新しい柱穴の埋土
3　浅黄色土（Hue2.5Y 8/4）　シラスのブロックをベースとする
4　灰黄褐色土（Hue10YR 5/2）
5　灰黄褐色土（Hue10YR 5/2）　微細な炭化物を含む



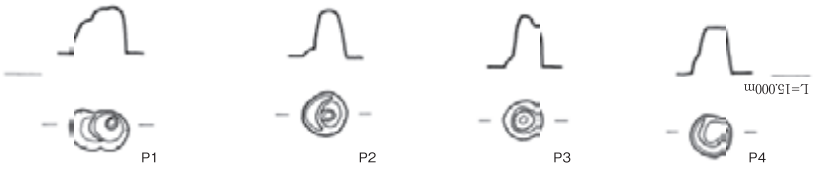


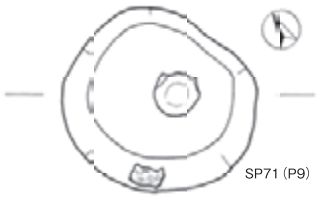


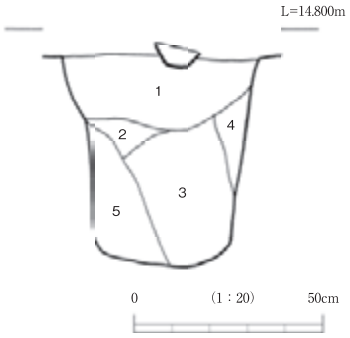
第 85 図　SK74・出土遺物

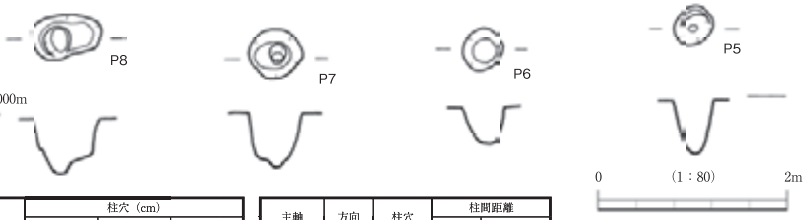


第 86 図　SK77・出土遺物





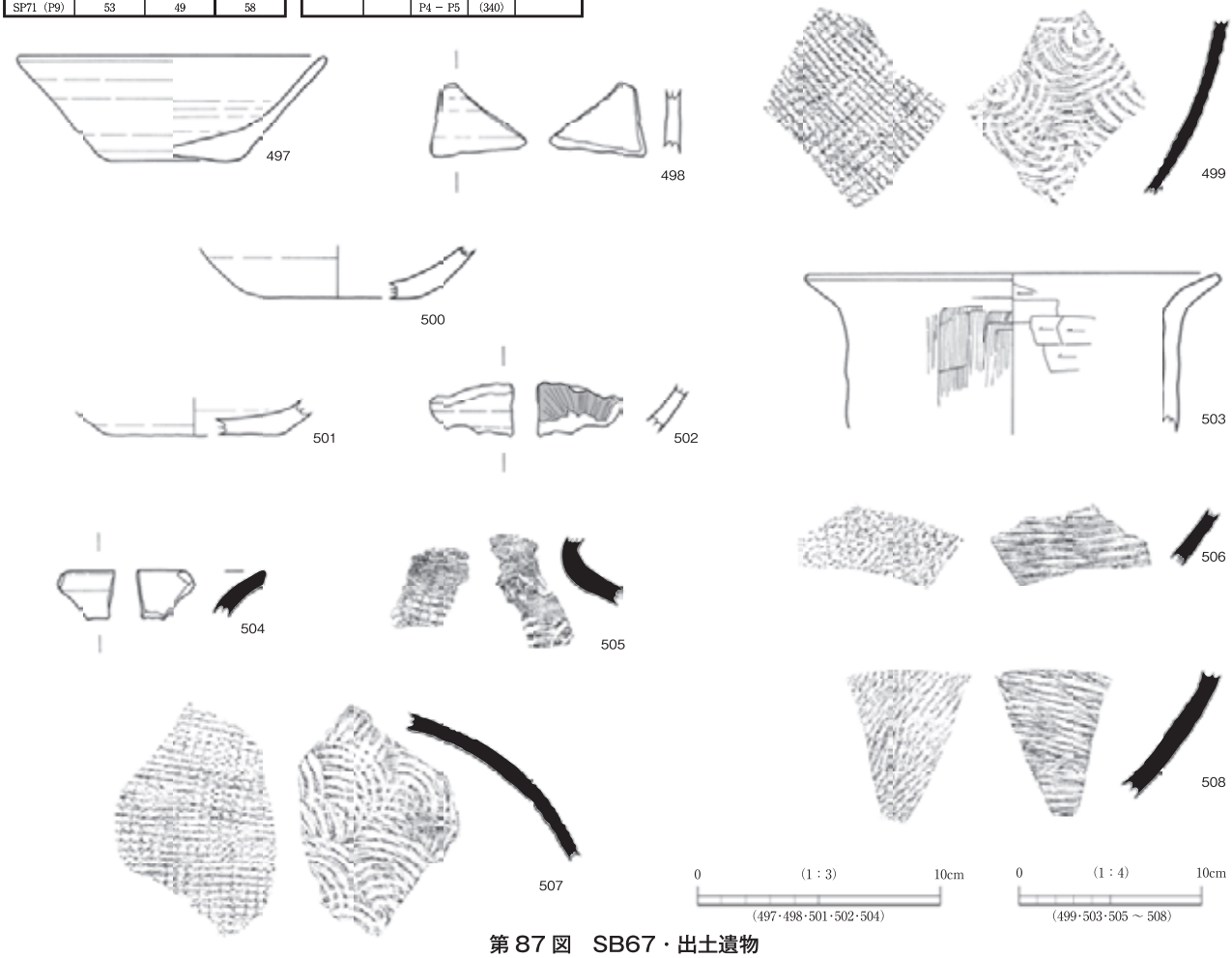




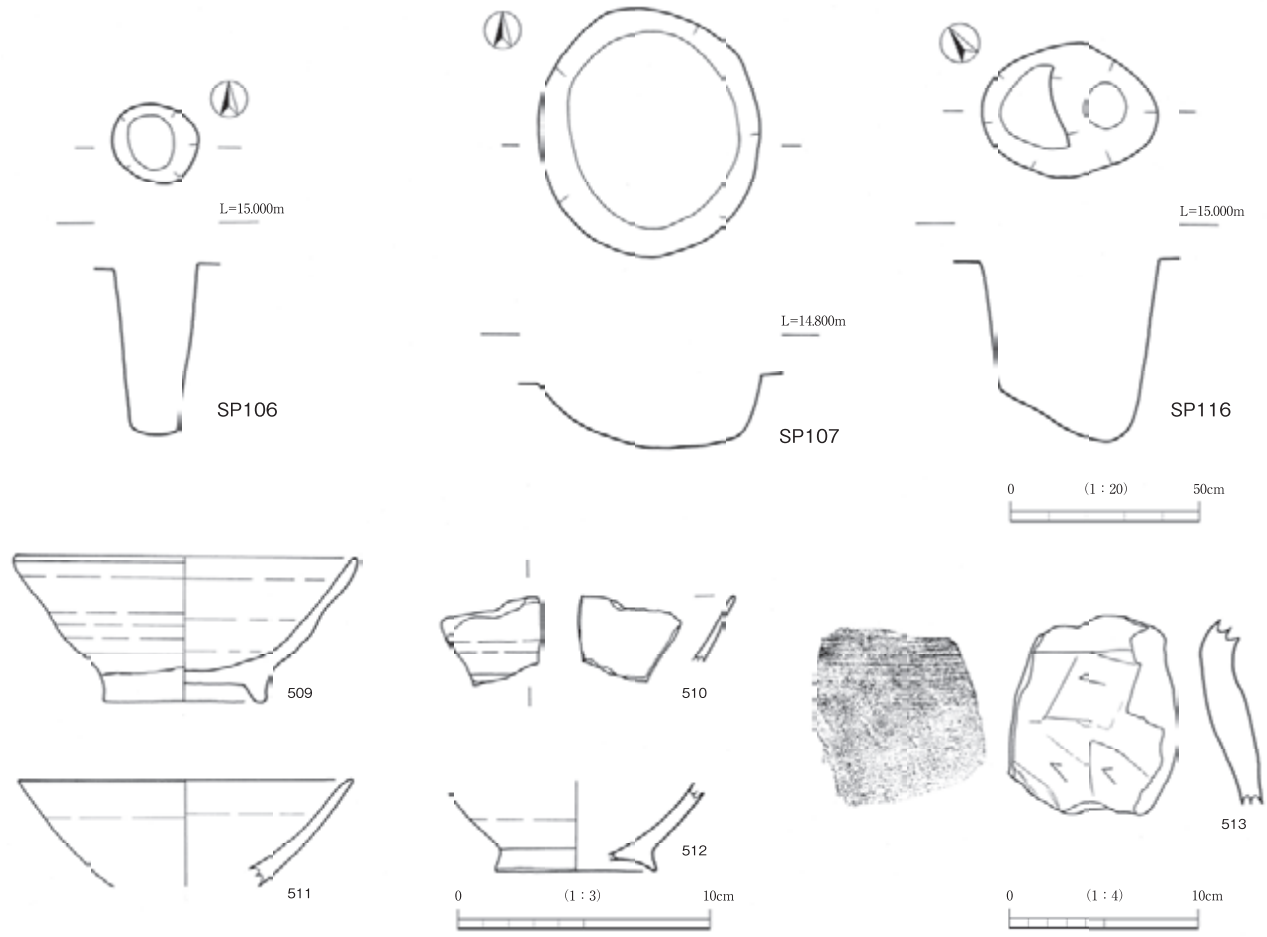
No	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
P1	62	41	51
P2	46	46	49
P3	42	42	55
P4	43	43	49
P5	42	41	58
P6	46	44	41
P7	55	53	58
P8	72	48	58
SP71（P9）	53	49	58

主軸	方向	柱穴	柱間距離	
			cm	尺
N12° W	桁行	P1 － P2	228	7.55
		P2 － P3	206	6.82
		P3 － P4	201	6.66
		P5 － P6	221	7.32
		P6 － P7	219	7.25
		P7 － P8	228	7.55
	梁行	P1 － P9	178	5.89
		P8 － P9	190	6.29
		P4 － P5	(340)	

1　褐色土（Hue10YR 4/6）　砂質で，粘性が強い
2　1と2の混土
3　暗褐色土（Hue10YR 3/4）　ややしまりがある
4　褐色土（Hue10YR 4/6）をベースとして，
　　黒褐色土（Hue10YR 3/1）が混じる
5　褐色土（Hue10YR 4/6）　ややしまりがある



第 87 図　SB67・出土遺物



第 88 図　SP106，SP107，SP117・出土遺物

SP116

検出状況・規模　SP116 は K － 18 区のⅣ層上面で検出された。平面形は楕円形で，規模は 48 × 36cm，検出面からの深さ 49cm である。埋土の詳細は不明である。

遺物（513）　513 は土師器の甕である。器壁が厚く，胴部外面の下半はナデられ，上半は横方向のハケ目が施される。内面は左上方向のケズリが施される。

エ　溝状遺構

SD38

（ア）　遺構の形状及び埋土の状況

検出状況　SD38 は P・Q － 31 ～ 34 区で検出された。上述のように，調査区の西側はシラス（Ⅷ層）まで削平を受けている状況であり，遺構の上部は消失している。また，埋土の上半（第 90 図　土層 B － B' の埋土①～⑦）には，近年の造成の影響が及んでいた。

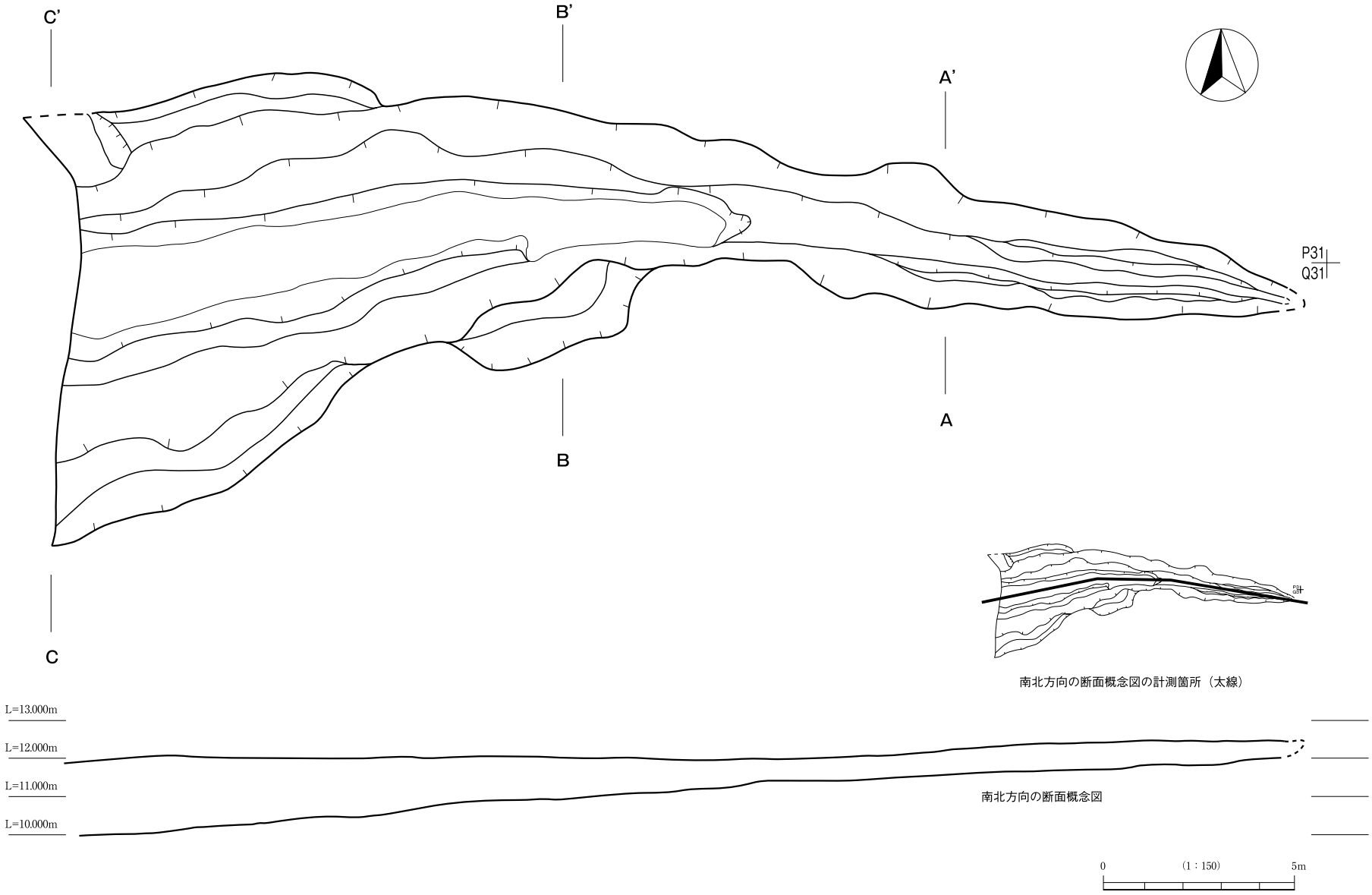
形状・規模　現状での平面形は，ほぼ真東から真西に長軸を持ち，南に向かって緩やかな弧を描き，東から西に向かって「V」の字状に広がる。床面は東から西に向かって傾斜し，東西の高低差が約 2 m ある。短軸（南北方向）での断面の形状は，床面は平坦で箱形となる。現状での規模は，東西 32.3m，南北 0.6 ～ 10.8m，検出面からの深さ約 30 ～ 250cm である。

埋土　埋土の上半はⅡ層と類似する砂質の黒褐色土が堆積していた。埋土の下半については，以下のように 3 層に分層して発掘を行った。なお，埋土の番号は第 90 図の土層 B － B' の埋土注記と対応する。

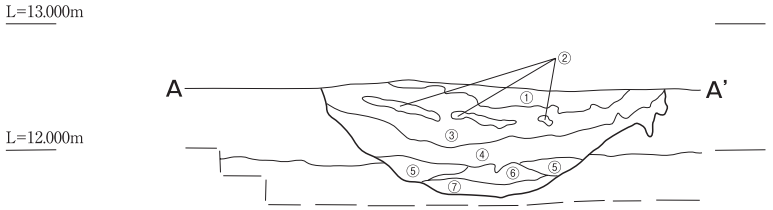
上層：埋土⑧～⑩
中層：埋土⑪～⑫
下層：埋土⑬～⑮

遺物出土状況　上層及び中層には，貿易陶磁器類や糸切り底の土師器など中世に該当する遺物が含まれる。下層の出土遺物は，土師器は，底部の切り離しがヘラ切りによる坏・埦が大半を占めた。

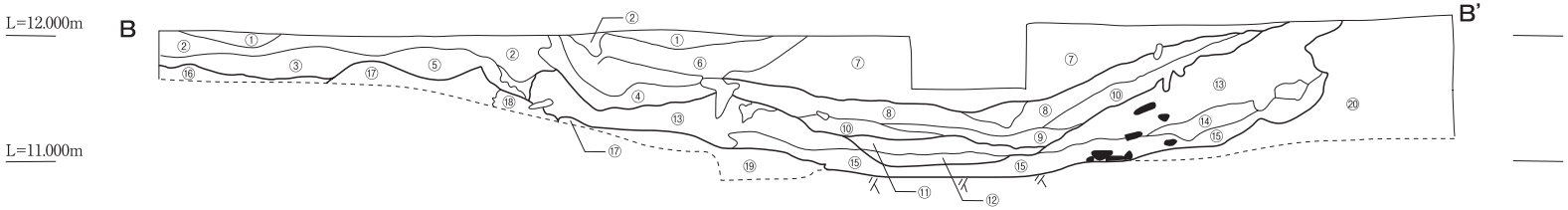
また，上層上面からは，縄文時代の石器を含んだ礫が大量に検出された。SD38 の埋没過程で，投棄されたものであると想定される。


C'
B'
A'
P31
Q31
A
B
C
L=13.000m
L=12.000m
L=11.000m
L=10.000m
南北方向の断面概念図の計測箇所（太線）
南北方向の断面概念図
0
(1：150)
5m

第 89 図　SD38



下層
- ①黒褐色土（Hue7.5YR3/2）　黄色系のパミス及び炭化物を含む
- ②にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　炭化物を含む
- ③にぶい黄褐色土（Hue10YR4/3）　岩片，小礫を含む
- ④褐色土（Hue10YR4/4）　小礫，土師器を含む
- ⑤褐色土（Hue10YR4/4）　砂質
- ⑥灰黄褐色土（Hue10YR4/2）　砂質
- ⑦暗灰黄色（Hue2.5Y4/2）　2～5cm 程度の垂円礫を多く含む



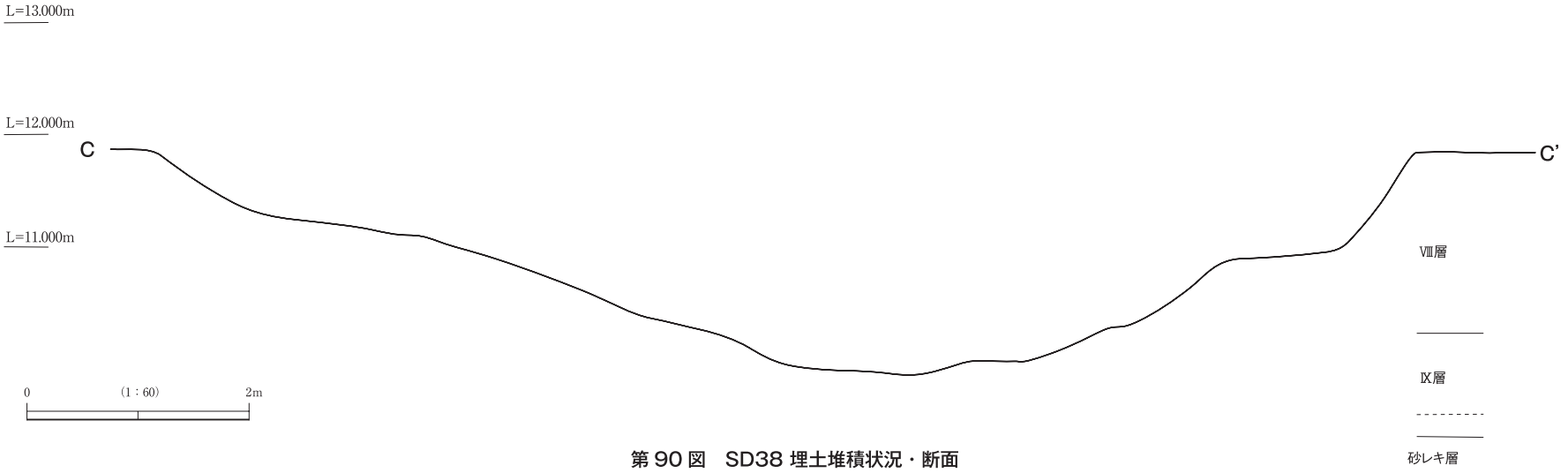
- ①灰白（Hue7.5YR 8/1）　しまり強い。粘質なし，シラス
- ②暗褐色土（Hue7.5YR 3/4）　しまり強く，硬い。やや粘質がある
- ③暗褐色土（Hue7.5YR 4/2）　しまり強く，硬い。砂を含み，①と②の混じり
- ④明黄褐（Hue10YR 6/8）　しまり強く，硬い。砂質
- ⑤灰褐（Hue7.5YR 6/2）　しまり強く，硬い。砂質（シラス）
- ⑥にぶい褐色土（Hue7.5YR 5/3）　しまり強く，硬い。5mm～1cm 程度の礫を含む。橙色のパミス状の粒を含む
- ⑦褐色土（Hue7.5YR 4/3）　やや粘性あり
  5mm～1cm 大の礫を含む。橙色のパミス状の粒を含む

上層
- ⑧にぶい褐色土（Hue7.5YR 5/3）　やや粘質あり
- ⑨にぶい褐色土（Hue7.5YR 5/4）　粘性が大きく，しまりがない。
- ⑩にぶい褐色土（Hue7.5YR 5/4）　やや粘質があり，しまりがない。1～2cm 程度の礫をわずかに含む

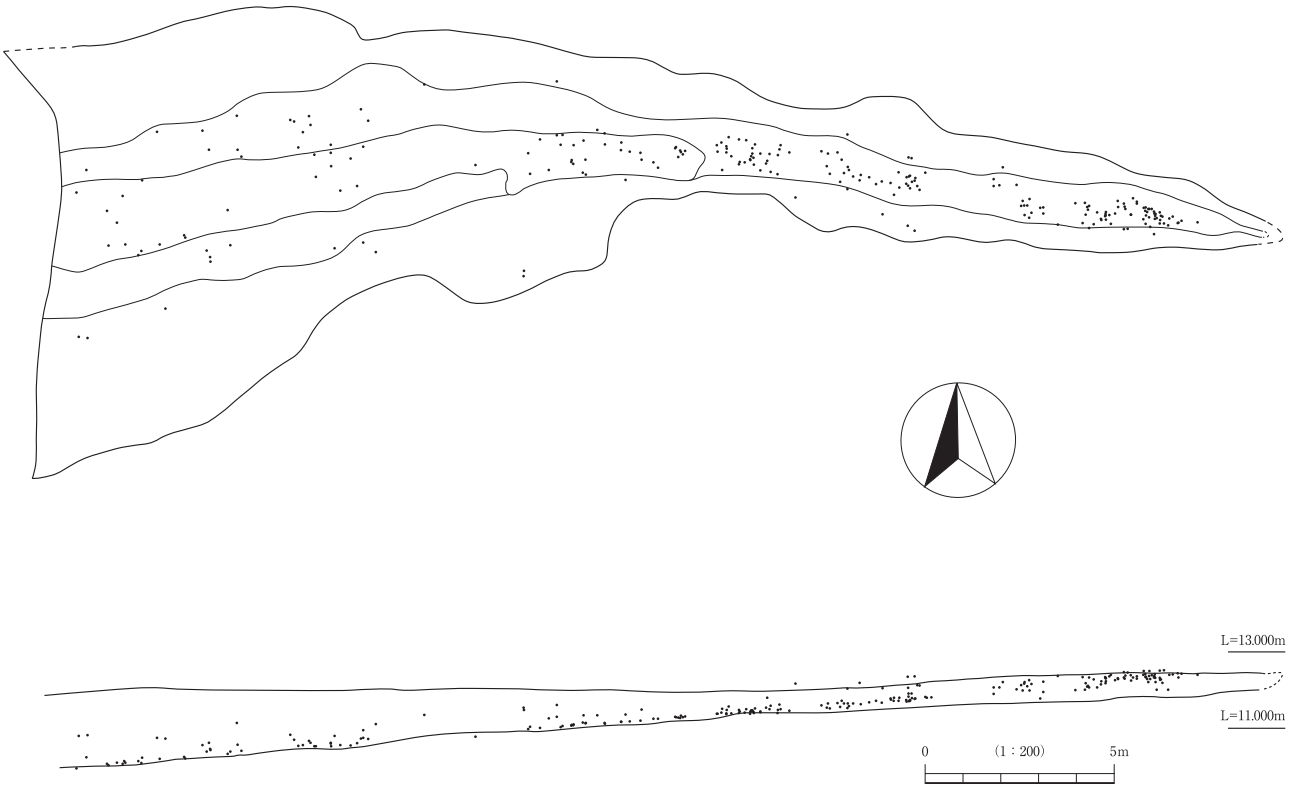
中層
- ⑪灰褐色土（Hue7.5YR 4/2）　粘性が大きく，しまりがない。1cm 大の礫をわずかに含む
- ⑫黒褐色土（Hue7.5YR 3/1）　粘性が大きく，しまりがない

下層
- ⑬明黄褐（Hue10YR 6/6）　しまり強く，硬い。砂質
- ⑭にぶい褐色（Hue7.5YR 6/3）　粘性はなく，しまりが強い。質
- ⑮にぶい褐色土（Hue7.5YR 5/3）　粘性が大きく，しまりがない。1～15cm 程度の礫を多く含む

- ⑯灰褐色（Hue7.5YR 5/2）　Ⅷ層
- ⑰にぶい橙（Hue7.5YR 6/4）　Ⅷ層
- ⑱明黄褐（Hue10YR 7/6）　Ⅷ層
- ⑲灰白（Hue7.5YR 8/2）　Ⅷ層
- ⑳明褐灰（Hue7.5YR 7/2）　Ⅷ層



第 90 図　SD38 埋土堆積状況・断面



第 91 図　SD38 下層遺物出土状況

（イ）　下層出土遺物

下層からは，土師器 1,143 点，須恵器 18 点，陶磁器類 1 点が出土した。土師器が 98％を占める。土師器の器種は，坏と埦が大半を占め，皿や甕などは少ない。

残存状況が良好なもの 172 点を図化した。法量については観察表を参照されたい。

土師器坏（第 92 ～ 93 図）

土師器坏 1 類（514 ～ 518）　514 は，底部外面には切り離し後にナデが施されるが，ヘラ切りによる渦巻き状の痕跡を明瞭に残す。515･516 は，胎土が橙色を呈する。515 は，底部外面の切り離し痕がナデによって消される。516 は，体部の立ち上がりの外傾がきつい。見込みを押圧することにより底部を薄くする。515 は，底部から体部は稜をもって立ち上がる。底径に対して見込みが小さい。

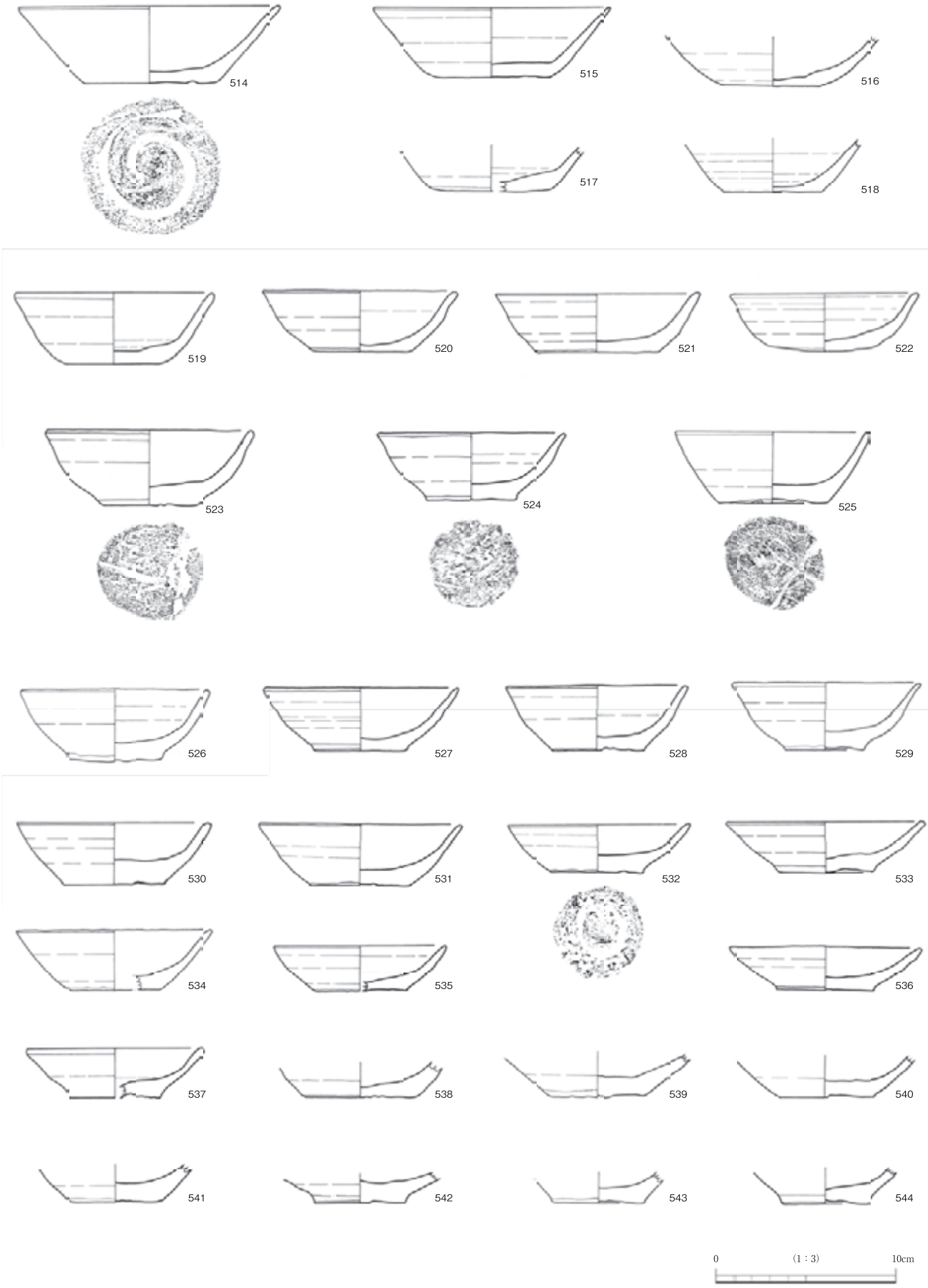
土師器坏 2 類（519 ～ 522）　519 は，見込みが押圧され，底部が薄くなる。520 は，胴部外面の上半は，丁寧にナデが施されるが，下半には回転ヘラケズリの痕跡を明瞭に残す。底部外面はヘラ切り後にナデを施す。

521 は口径 11.4cm，底径 6.7cm で，口径に対し底径が大きく，見込みを押圧しないため他の 2 類と比較して底部が厚い。外面に回転ナデによる凹凸を明瞭に残す。522 は，器壁がやや厚手で，口縁部がわずかに外反する。外面下端にはケズリの痕跡が残る。

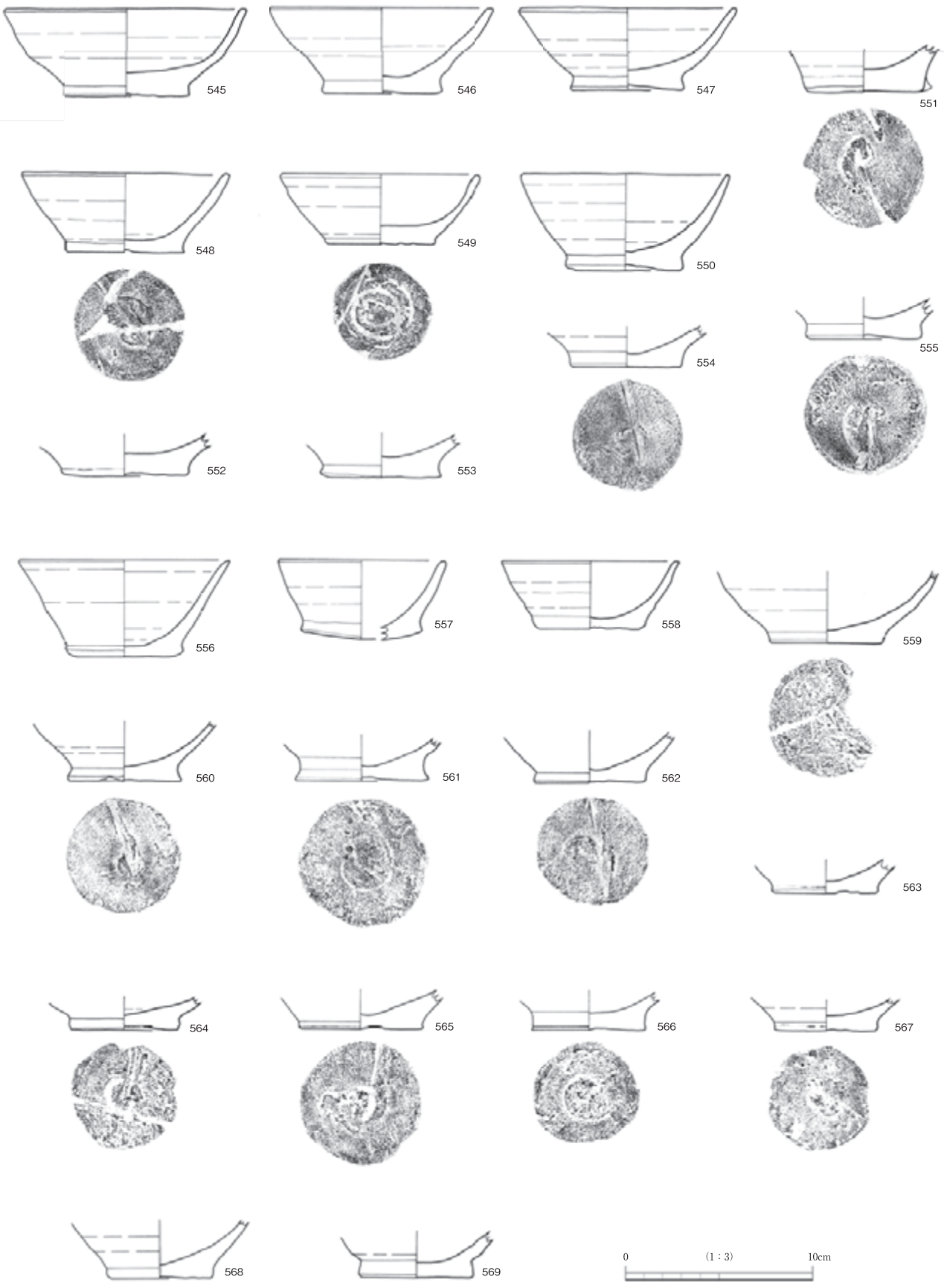
土師器坏 3 類（523 ～ 544）　523 ～ 531・534 は土師器坏 3 類で，器高が高いものである。523・525 は外面の口縁部の下に強いナデが施されることによって凹みが作られる。523 の底部外面には，切り離し後に体部を起こす際に用いたと想定される棒状の工具痕を確認できる。524 は，底部が厚く，円盤状になる。525 は，他の 3 類と比較して体部が直線的である。器形が歪み，底部を外面から押圧することでやや上げ底状になる。

526 は，底部が厚く円盤状になる。527 は，内外面に丁寧な横ナデが施される。外観は円盤状の底部にみえるが，見込みに強いナデが施されていて，底部は薄くなる。外面の下半には回転ヘラケズリによる凹凸が残る。

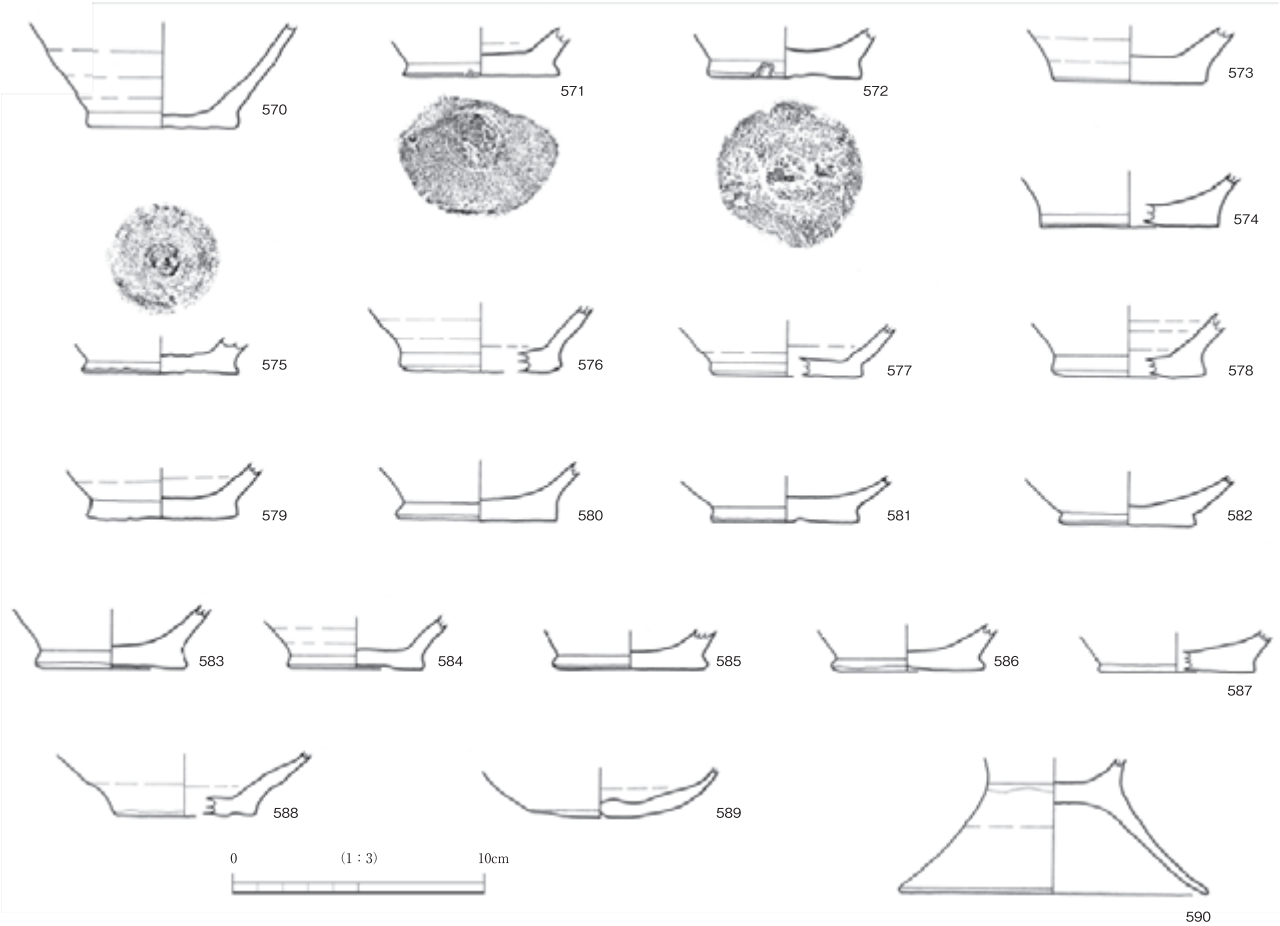
528 は，体部が直線的で，立ち上がりは外傾する。529 は他の 3 類と比較すると，口径に対する底径の割合が小さい。体部はやや丸みを帯び，口縁部は外反する。530 は，体部の立ち上がりは立ち気味で，体部はわずかに内湾する。内外面にナデを施すが，見込みの中央付近は未調整で，粘土が盛り上がる。531 は，体部の立ち上がりは立ち気味で，体部上半はやや外傾する。内面には反時計回りの回転ナデが施される。534 は直線的な体部である。



第 92 図　SD38 下層出土　土師器坏①



第 93 図　SD38 下層出土　土師器坏②



第 94 図　SD38 下層出土　土師器坏③

532・533，535 ～ 537 は土師器坏３類で器高が低いものである。532 は，器壁が厚めで，口唇部は丸みを帯びる。533 は，体部の外傾がきつい。内面は，見込みを一度押圧し，そこから一連の流れで左回りにナデが施される。535 は体部が丸みを帯びる。

536 は，見込みに２か所押圧された痕跡がみられる。底部外面には切り離し後に丁寧なナデが施され，体部を起こす際の工具痕が確認される。537 は，見込み中央付近が凹む。器壁が厚く，口唇部は丸みを帯びる。体部はやや立ち気味で，口縁部はわずかに外反する。

538 ～ 544 は土師器坏３類の底部である。538 は底径 6.4cm で大型である。外面下端にケズリの痕跡を残す。539 は，外面下端に強いナデが施され凹む。540 は，胎土が黄橙色を呈し，硬質である。内外面に丁寧なナデが施され，底部外面の切り離し痕が残らない。541 は，外面の下端に底部切り離しによる粘土の付着が確認される。542 は，見込みの外縁に同心円状に強いナデが施され，体部との境界が凹む。544 は見込みと底部外面に押圧の痕跡がある。

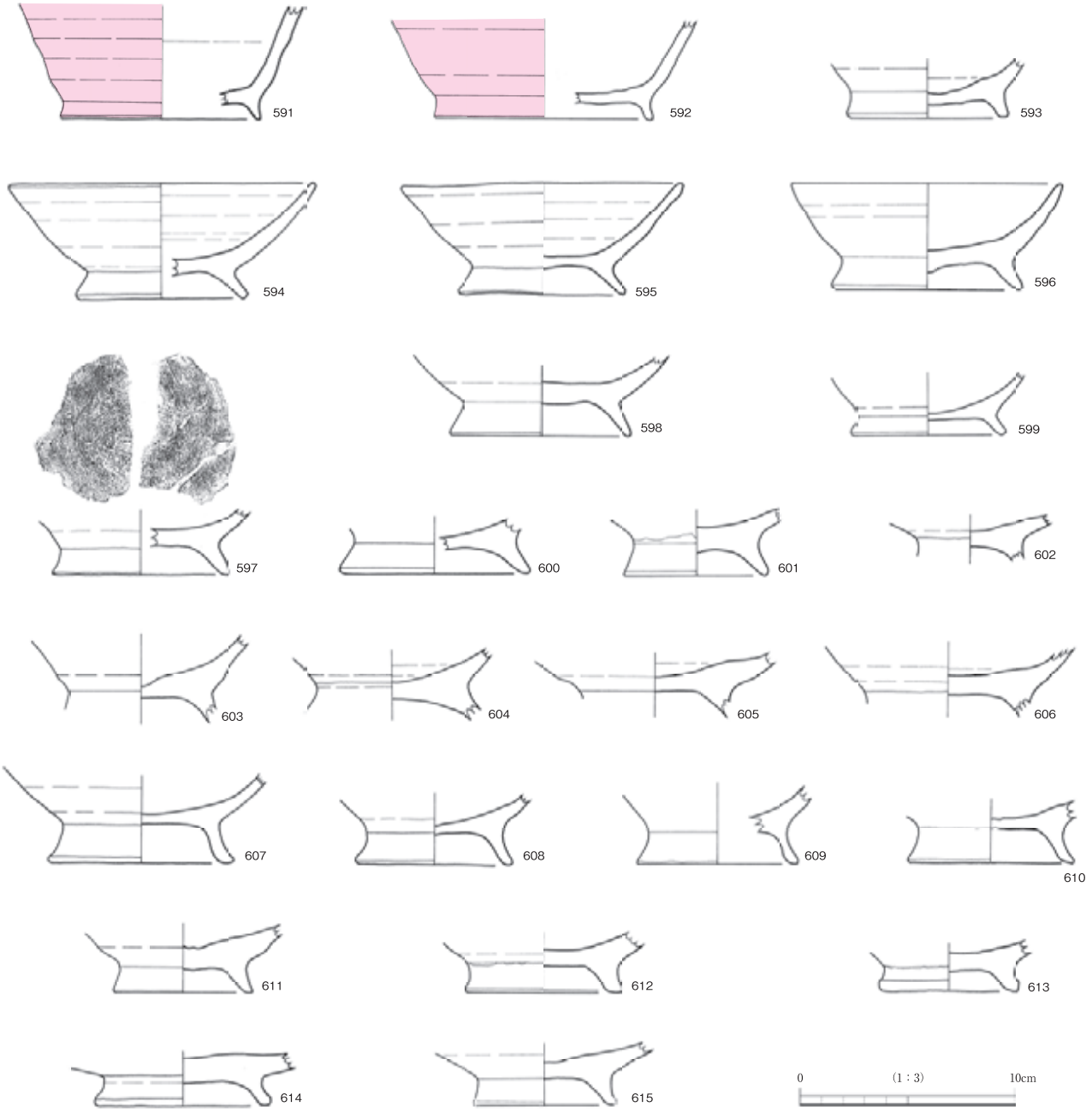
土師器坏４類（545 ～ 555）　545 は，胎土が灰白色を呈し，粒子が非常に小さい。体部は丸みを帯び，口縁部はわずかに外反する。546 は，体部は直線的でわずかに内湾する。内面は，見込みに強いナデが施され，そこから一連の流れで内面全体に横ナデが施される。底部外面の切り離し痕は丁寧にナデ消される。

547 は，器面全体に丁寧なナデが施される。底部切り離しの痕跡は完全に消される。548 は，胎土がにぶい橙色で，黒雲母を含む。器面全体に丁寧なナデが施される。底部外面から高台の下端に，棒状の工具痕がみられる。

549 は，胎土が橙色を呈する。器面全体に丁寧なナデが施される。外面の口縁部の直下に強いナデが施され，凹む。550 は，胎土が浅黄色を呈し，黒雲母を含む。体部がやや深めで，口唇部は先細りする。551 は，底部外面と高台下端に棒状の工具痕がみられる。高台下端は未調整で，底部切り離しによって生じた粘土が付着する。

552 は底径 6.8cm と大型で，体部の立ち上がりが外傾する。外面下端の調整は雑で，一部に粘土が付着する。553 は，器面全体に丁寧なナデが施される。554 は，内面のナデはやや雑で，砂粒の痕跡が残る。底部外面に棒状の工具痕がみられる。555 は，胎土がにぶい橙色を呈し，黒雲母を含む。

土師器坏５類（556 ～ 569）　556 は，体部は直線的で，



第 95 図　SD38 下層出土　土師器埦①

器壁が薄い。見込みが押圧されることにより，底部は薄くなる。外面は，底部から口縁部まで丁寧にナデが施される。557・558 は小型のタイプである。557 は，器面全体に丁寧なナデが施されるが，底部は水平ではなく，安定しない。558 は，体部が内湾する。外面には回転ナデによる凹凸が残る。

559 は底径 6.3cm で，大型である。胎土は浅黄色を呈し，黒雲母を含む。見込み中央を押圧し，反時計回りのナデを施す。外面下端は未調整である。

560 ～ 569 は坏５類の底部である。底部付近だけでは坏５類と坏４類との区別が困難なため，一部に坏４類が含まれることも考えられる。

560 は器面全体に丁寧な横ナデが施されるが，砂粒の痕跡が残る。底部外面と体部下端に棒状の工具痕が観察される。561 は底径 7.0cm で大型である。胎土に 1 mm 程度の砂粒が含まれ，やや粗粒である。562 は，見込みから体部内面下半に強いナデが施される。

563 は，胎土が橙色を呈する。焼成が良好で，硬質である。内外面には丁寧なナデが施される。564 は，見込みに強い押圧が加えられる。外面下端の調整は雑で，切

り離しによって生じた粘土が付着している。

564・566は，胎土に黒雲母を含む。焼成が良好で，硬質である。565は，見込み中央から反時計回りの強いナデが施され，渦巻状の痕跡がみられる。567は，胎土がにぶい黄橙色を呈し，粒子が小さい。内外面には，丁寧なナデが施されるが，体部下端から底部外面にかけては未調整で，切り離しによって生じた余分な粘土が付着している。568・569は体部の立ち上がりが内湾気味である。568は内外面に丁寧なナデが施されるが，外面下端は未調整である。

土師器坏６類（570 ～ 587） 土師器坏６類の資料は全て底部付近の破片資料で，全体の器形が判明するものは出土していない。

570は，最も残存状況がよい。見込みの中心から反時計回りの強いナデが施され，見込みと体部の境界が凹む。底部外面から外面下端には丁寧なナデが施され，底部切り離しの痕跡は残らない。体部外面には回転ナデの凹凸が残る。572は外面下端から底部にかけての一部に，底部切り離し後に体部を起こす際に用いられたと考えられる棒状の工具の痕跡が残る。

571・574 ～ 576・579・583 ～ 585は，見込みに強いナデが施され，指頭の痕跡がみられる。580は胎土が橙色を呈し，粒子が小さい。焼成が良好で，硬質である。内外面には丁寧なナデが施される。583・585は体部下端に粘土が付着する。581･587は胎土に黒雲母を含み，硬質である。見込みのナデがやや弱く，体部の立ち上がりは開く。

577は，見込み外縁のナデが強く，凹む。外面には回転ナデによる凹凸が残る。578は，胎土はにぶい黄橙色を呈し，焼成がかなりよく，硬質である。見込みの中心から回転ナデが施され，胎土中の砂粒の痕跡を観察できる。582は，内外面に丁寧なナデが施される。

586は，胎土が灰黄色を呈し，胎土中に１～２mm程度の砂粒が含まれ，粗粒である。見込み中央付近にナデが施される。

その他（588 ～ 590） 588 ～ 590は他に類例がみられなかった資料である。588は，体部の立ち上がりは垂直に近いが，急激に開く。底部は薄く水平な面を作り出しているが，それが押圧と強いナデによるものか判断できなかった。底部外面には，ヘラ切り痕が明瞭に残る。

589は底部付近のみ残存している。底部を水平に作り出さない。見込みを押圧し，そこから一連の流れで内面にナデを施す。

590は高台内面の粘土の盛り上がりから，脚台付き坏の脚部と判断した。１点のみの出土である。

土師器埦（第 95 ～ 97 図）

土師器埦１類（591・592） 591・592ともに上層から下層にかけて出土した破片資料が接合したものである。内外面に赤色顔料が塗布される。

土師器埦２類（593） SD38下層からは，593が１点のみ出土した。高台が低く，端部は角張る。見込みを押圧し，底部を薄くする。内外面で色調が異なり，内面は灰黄色，外面は浅黄色を呈する。

土師器埦３類（594 ～ 606） 594・595は胎土中に１～２mm程度の砂粒を含み，粗粒である。595は，焼成がやや不良で，見込みに亀裂が入る。596は胎土に黒雲母を含む。口縁部直下が強い横ナデによって凹む。

597は，胎土がにぶい黄橙色を呈し，粒子が小さい。焼成が特に良好で，硬質である。見込みに布目圧痕がみられる。598は底径8.3cmとやや大型である。器壁が厚く，胎土に１mm程度の砂粒を含み，粗粒である。599は，胎土が橙色で，黒雲母を含む。高台は大きく開き，高台内面には高台の貼り付け痕が残る。体部はやや丸みを帯びる。

600は底径8.7cmで，やや大型である。胎土に黒雲母を含む。601は底径6.5cmでやや小型だが，底部が厚さ1.2cmと厚い。高台外面に横方向のハケ目のような痕跡がみられる。

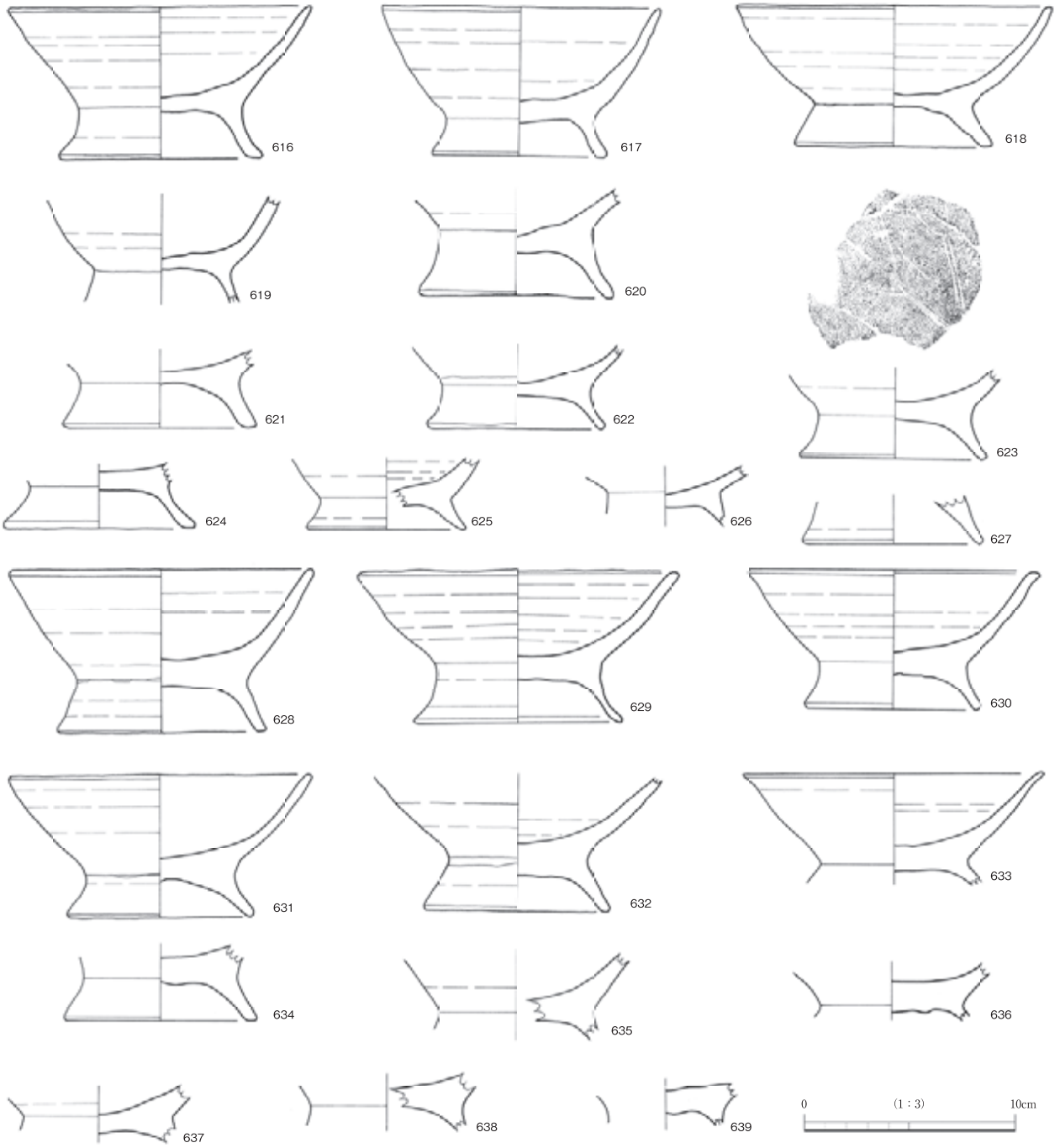
602 ～ 606は底部付近の資料である。体部と高台の開き具合から埦３類に含めたが，法量にばらつきがある。603・605は，見込みが押圧され凹む。体部の立ち上がりは外傾する。606は，高台内面の径が5.0cmあり大型である。

土師器埦４類（607 ～ 615） 資料は全て底部から体部の下半にかけての破片資料であり，全体の器形がわかるものはない。

609は，胎土に１～２mm程度の砂粒を含み，粗粒である。外面に高台の接合痕を残す。608・610は，高台がやや高い。高台は床に向かって徐々に開き，端部は平坦になる。見込みの中心を押圧し，その周囲に同心円状に強いナデが施される。610は胎土に１～３mm程度の砂粒を含む。

612は，胎土に砂粒や鉱物を多く含み，器面が粗い。高台の器壁が厚く，端部は幅６mm程度の平坦面となる。611･615は胎土中に鉱物･砂粒を多く含む。底部は厚く，体部はやや外傾する。

607 ～ 610は，胎土中に砂粒を含まず，器面が滑らかである。器面全体に丁寧なナデが施されるが，外面の高台の接合痕は明瞭に残る。見込みには不定方向のナデも施される。607は底径8.8cmと大型である。体部はやや

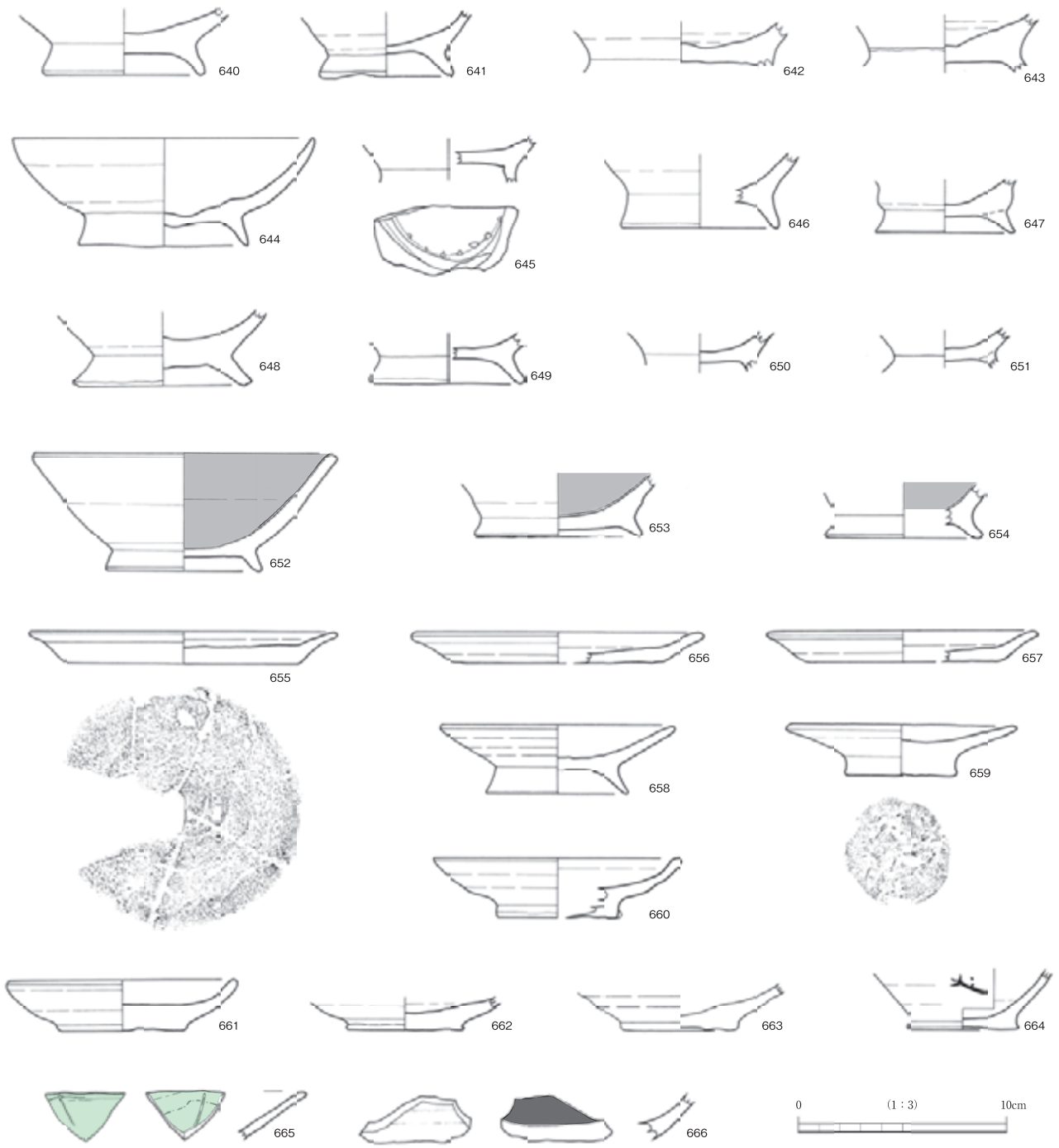


第 96 図　SD38 下層出土　土師器埦②

丸みをもって立ち上がる。613 は底径 6.1cm と小型である。高台の器壁が厚い。高台端部は幅 7 mm 程度の平坦面となる。614 は底径 8.0cm と大型だが，高台高は 1.0cm と低い。底部は厚く，体部の立ち上がりは，外傾がきつい。615 は底径 6.8cm で大型であり，底部の厚さは 1.1cm と厚い。体部の立ち上がりはかなり外傾すると想定される。高台内面と高台の境界に同心円状に強いナデが施され，ナデの痕跡が明瞭に残る。

土師器埦 5 類（616 ～ 639）　616 ～ 627 は，底部の厚さが 1.0cm 未満の土師器埦 5 A 類である。616 は胎土中に鉱物と砂粒を豊富に含み，器面はやや粗い。高台内面は水平な面となり，高台の開きは他の 5 類よりも弱い。617 は，胎土が橙色を呈する。体部外面から口縁部のナデは雑で器面に凹凸が残る。高台はあまり開かず，高台端部は平坦になる。

618 は，胎土が浅黄色を呈し，胎土に含まれる砂粒と鉱物の粒子が大きい。高台は開き気味で，器壁が厚く，端部は丸みを帯びる。高台内面の中心に強いナデを施し凹ませ，さらにその外に同心円状に強いナデを施す。



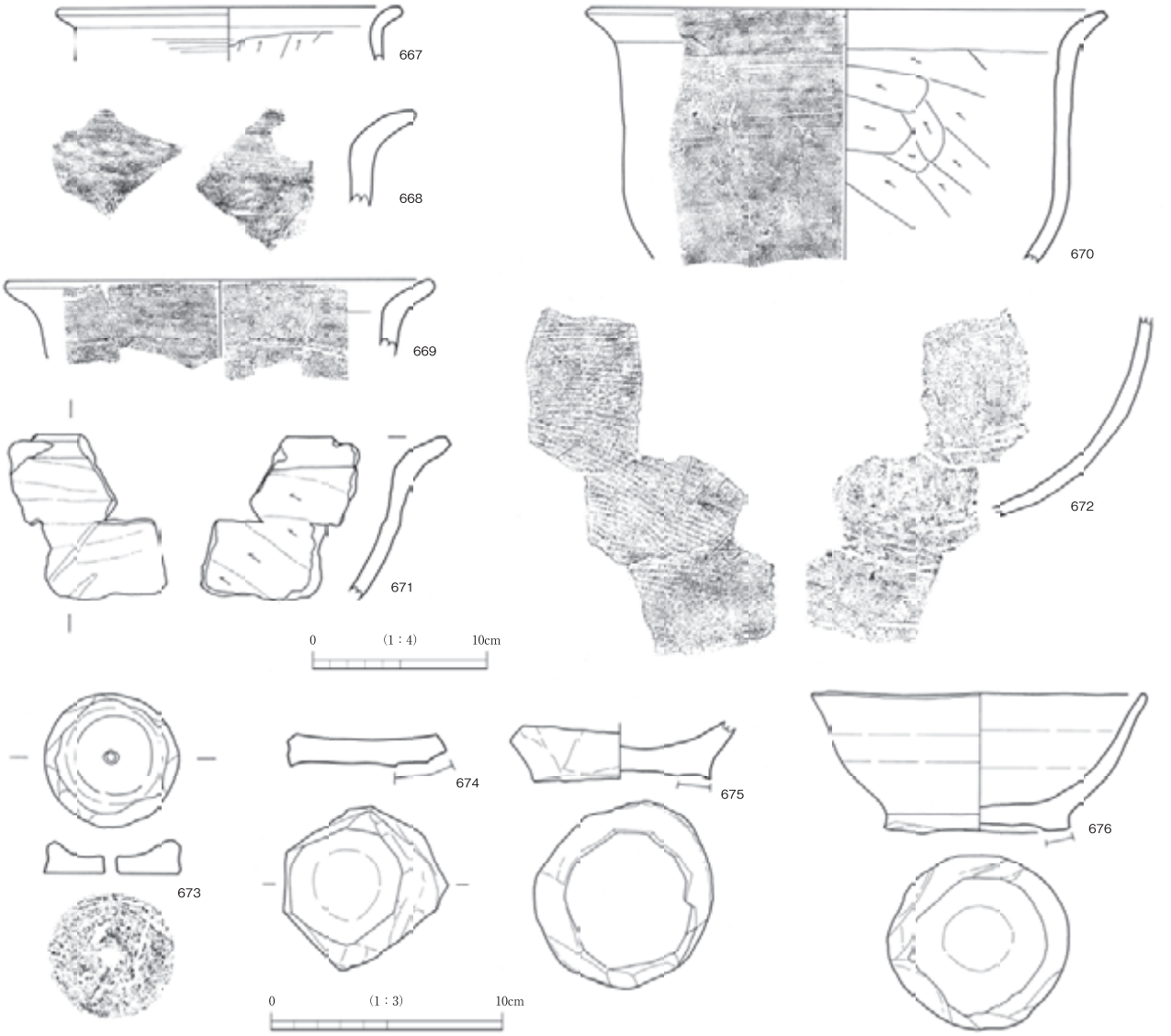
第 97 図　SD38 下層出土　土師器埦③・皿ほか

619 は，胎土の粒子が小さく，表面が滑らかである。体部下端にケズリの痕跡が残る。

620・622・623 は，胎土中に鉱物を多く含む。高台内面は水平な面ではなく，高台との境界は不明瞭で，高台の開きが大きい。623 は，内面に木葉痕がみられる。622 の内面と 620 の高台の一部の表面が赤色を呈することから，赤色顔料が塗布されていた可能性がある。

621 ～ 627 は，高台の形状及び底部の厚さから埦 5A 類とした。621 は橙色を呈する。高台内面と高台の境界付近に工具による刺突の痕跡がみられる。625 は，外面及び高台内面が赤色を呈する。赤色顔料を塗布された可能性がある。

628 ～ 639 は土師器埦 5 B 類である。底部の厚さが 1.5cm 程度と厚い。628 は，体部の立ち上がりが内湾気味で，口縁部はわずかに外反する。629 は，胎土に含まれる鉱物の粒子が大きい。628 よりも器壁が厚く，体部



第 98 図　SD38 下層出土　土師器甕・二次加工品

はやや丸みを帯び，口縁部の外反も大きい。630 は，胎土が橙色を呈し，胎土中に 1 ～ 3 mm 程度の砂粒を含む。体部はやや丸みを帯びて，口縁部は外反する。631 は，高台が「ハ」の字状に開き，高台内面と高台の境界は不明瞭である。見込みに強いナデを施し，そこから反時計回りの横ナデを内面全体に施す。

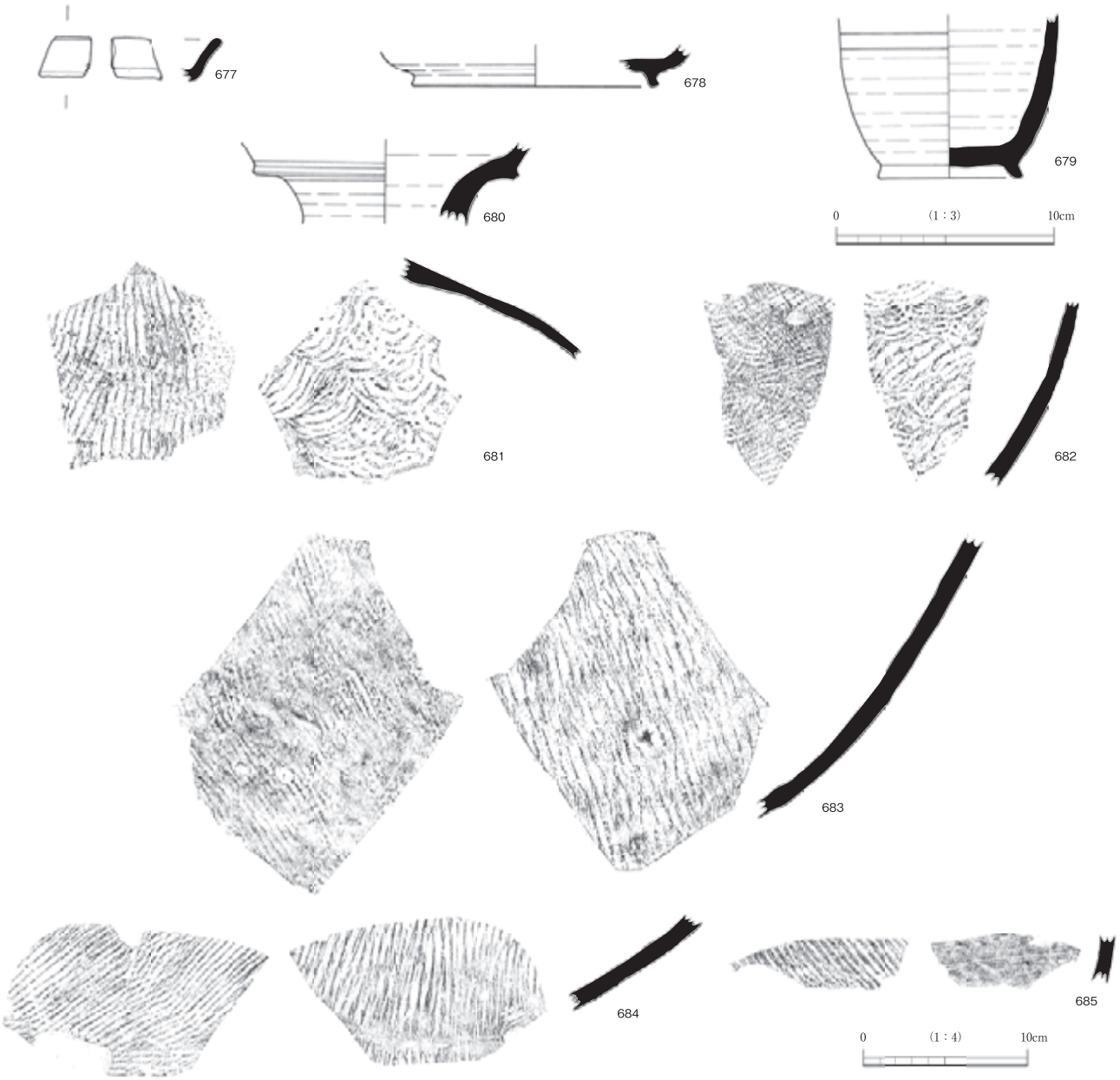
632 は，他の埦 5 B 類と比較して胎土の粒子が小さく，器面が滑らかである。高台が「ハ」の字状に開き，器壁が厚く，端部は丸みを帯びる。633 は，体部が外傾する。口縁部は外反し，口唇部は先細りする。634 は，胎土の粒子が小さく，器面は滑らかである。見込みから反時計回りのナデが施される。635 ～ 639 は底部の厚さから 5 B 類とした。638 は胎土に黒雲母を含む。

土師器埦 6 類（640 ～ 643）　埦 6 類は，器面は浅黄橙色を呈するが，胎土は黒褐色のものである。埦 6 類は胎土を主体とした分類であり，器形は埦 3 類に近い。見込みに凹凸が認められるのも特徴の一つである。640 は，高台が低く，開きが大きい。見込みにナデを施すが，方向に規則性はみられない。高台内面にヘラによる切り離しの痕跡が残る。

641 は，見込みが押圧され，底部は薄くなる。642 は，見込みにケズリによる凹凸が残る。643 は，見込みに強いナデが施され，連続して横ナデが行われる。底部外面にヘラによる切り離しの痕跡が残る。

土師器埦 7 類（644）　土師器埦 7 類は，644 が 1 点のみ出土した。胎土は灰白色を呈し，粒子が非常に小さい。坏 4 類の 545 に胎土が類似する。体部は一度開き，丸みをもって立ち上がる。

土師器埦 8 類（645・646）　破片資料のみで，全体の



第 99 図　SD38 下層出土　須恵器

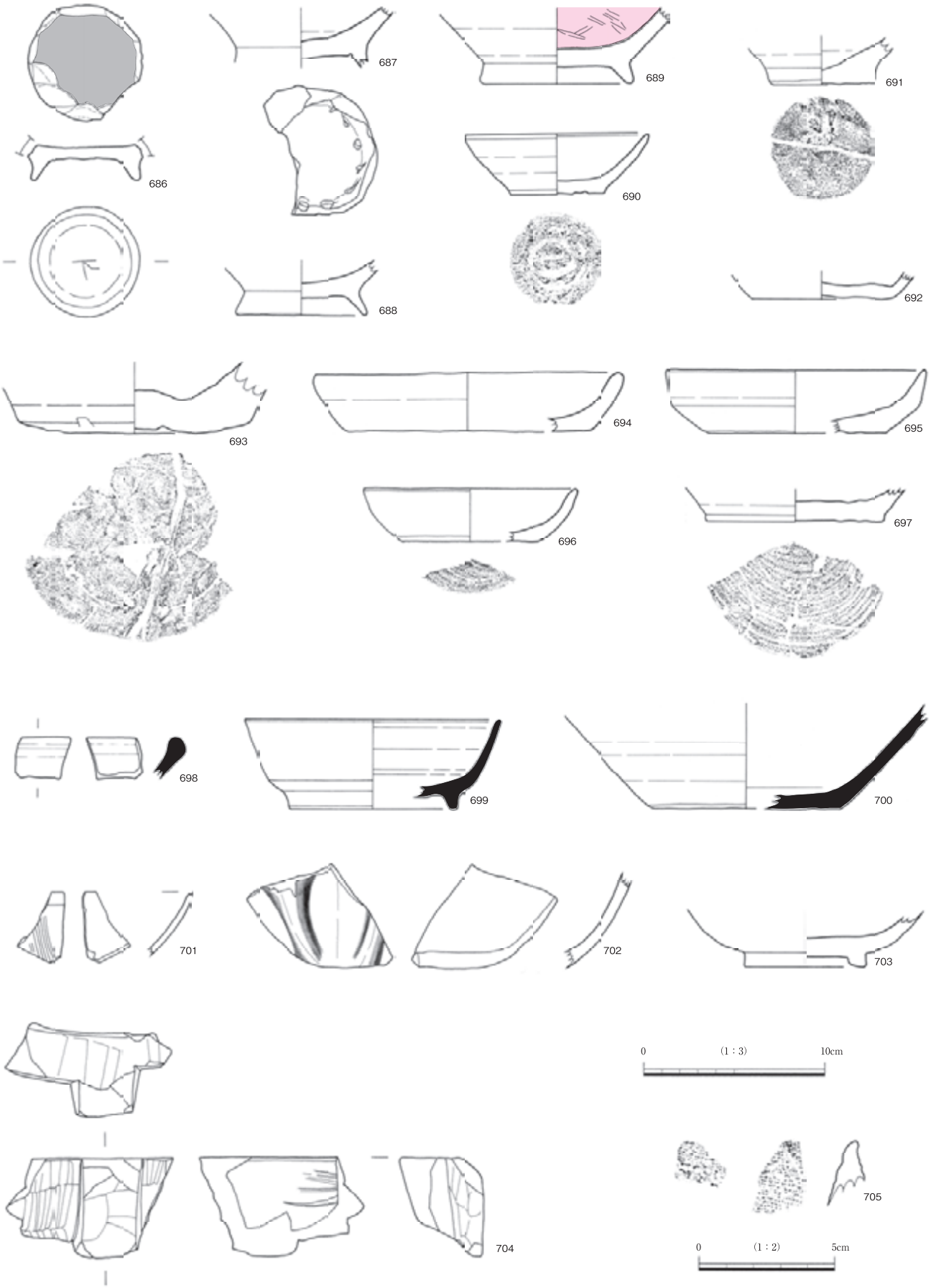
器形がわかるものはない。高台を貼り付けた後に，高台と高台内面の境界に棒状の工具により刺突された痕跡が認められる。

その他（647 ～ 651）　器形が不明で，残存箇所に他のものにはみられない特徴がみられるものを，その他として報告する。

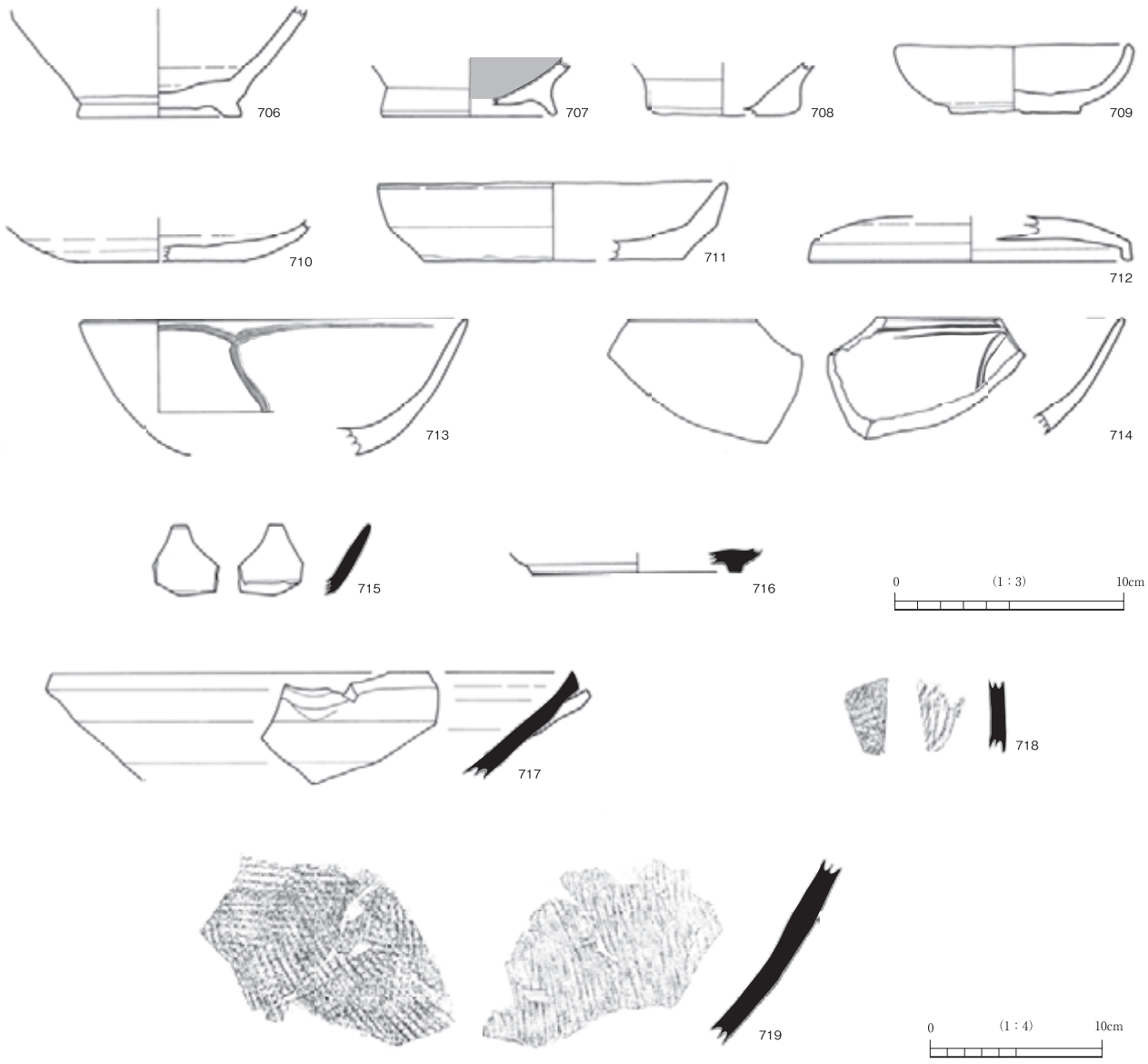
647 は，見込みが強く押圧され，底部は薄くなる。高台と体部の境界が一度凹み，そこから盛り上がって体部となる。高台は「ハ」の字状に開く。648 は，高台は低く，大きく開く。高台の器壁は厚く，端部は角張るように成形される。高台の端部には，調整によるものと考えられる沈線状の凹みが巡る。底部は厚さ 1.5cm と厚い。器形は埦２類に類似する。650・651 は，見込みが押圧され薄くなる。土坑群から出土したものと類似する。

内黒土師器（第 97 図 652 ～ 654）

652 ～ 654 は内黒土師器である。内面には，丁寧なミガキが施され，光沢がある。652 は，唯一全体がわかる資料である。高台は低く，端部は角張る。体部は外傾し直線的である。器形は土師器埦２類に相当する。653 は底部である。高台の形状から土師器埦２類に相当すると思われる。底部は薄い。654 は，埦の高台のみの出土で，652・653 と比較して高台が高い。



第 100 図　SD38 上層・中層出土遺物



第 101 図　SD38 Ⅱ層・撹乱ほか出土遺物

土師器皿（第 97 図 655 ～ 663）

土師器皿１類　655 ～ 657 は土師器皿１類である。器高が平均 1.5cm と扁平である。655 は，見込みに反時計回りの強いナデが施され，わずかに凹凸が残る。

土師器皿２類　658 は高台を持つ土師器皿２類である。１点のみの出土である。器面全体に反時計回りのナデが施される。

土師器皿３類　659･660 は土師器皿３類である。659 は，体部が直線的である。660 は，体部がやや丸みを帯び，口縁部は内湾気味である。

土師器皿４類　661 ～ 663 は土師器皿４類である。坏３類の器高が低いタイプをさらに扁平にしたような器形である。

661 は，体部がわずかに内湾し，口縁部は丸みを帯びる。662 は，内面に反時計回りの強いナデが施され，凹凸が残る。底部外面は黒色を呈する。663 は胎土の粒子が小さく，表面が滑らかである。見込みは，押圧と強いナデが施され凹む。

墨書土器（第 97 図 664）

664 は墨書土器である。SD38 下層出土のもので墨書を確認できたものは１点のみのである。文字の判読には至らなかった。土師器坏６類である。

緑釉陶器（第 97 図 665）

665 は緑釉陶器の皿である。１点のみの出土である。内外面に劃花文がみられる。山元信夫氏によると，越州窯系青磁の模倣品で，５～６の輪花を有すると想定され

る。内外面にミガキが施されることから，京都産の可能性が高いということである。

不明土器（第 97 図 666）

666 は，内面が黒色を呈する。鉄釉の可能性がある。

土師器甕（第 98 図 667 ～ 672）

土師器の甕は，坏・埦を主体とする供献具と比較して出土量が圧倒的に少なく，全体の器形がわかるものも出土しなかった。

667 は，器壁が薄く，口径が 19.8cm と小型である。口縁部は開き，ナデが施される。体部外面には横方向のハケ目が，体部内面には右上方向のケズリが施される。668 は，器壁が厚く，口縁部は開く。口縁から体部上半にはナデが施される。体部の一部にはケズリの痕跡が認められる。

670 は，胎土に３～ 10mm 程度の小礫を含む。胴部は直線的である。口縁部は短く，やや開く。胴部内面には左上方向のケズリが施され，器壁は薄い。胴部外面から口縁部内面には横方向のナデが施される。また，外面には煤が付着する。

671 は，体部が外傾することから，胴部の短い鉢状の器形になると想定される。胎土に５mm 程度の小礫が含まれる。胴部外面上半には左上方向のナデが施され，器面に凹凸が認められる。胴部内面には，左上方向のケズリが施される。

672 は胴部下半である。胎土に１～７mm 程度の砂粒・小礫を含む。外面には横方向を基本としたハケ目が，内面にはケズリが施される。

紡錘車・土師器二次加工品（第 98 図 673 ～ 676）

673 は土師器坏の底部を用いた紡錘車である。中央に直径５mm の穴が穿孔される。

674・675 は，高台の剥がれた箇所と体部に剥離が加えられている。676 は土師器埦５Ａ類である。高台が破損した後に，剥離が加えられている。

須恵器（第 99 図 677 ～ 685）

677 は坏の口縁部である。内外面にナデが施される。678 は坏の底部である。内外面にナデが施される。679 は壺の底部である。調整は，内外面共に回転ナデが施される。

680 は備前系の壺の口縁部付近である。内外面は回転ナデが施され，外面には褐色の釉薬が施釉されている。内面は，口の広がった部分に自然釉が付着している。

681 は甕の頸部である。外面は格子目タタキで，内面は青海波の当具痕がある。外面には自然釉が付着している。683 は備前系の甕の胴部である。外面は格子目タタキで，内面には平行の当具痕がある。外面に茶褐色の釉薬が施釉されている。684 は甕の胴部である。外面は平行タタキで，内面は平行の当具痕である。

685 は器種不明である。外面は平行タタキ，内面は回転ナデが施される。

（ウ） 上層及び中層出土遺物（第 100 図）

中央層上層からの出土遺物は，糸切り底の土師器や，龍泉窯系青磁碗１類などが出土した。まとめて報告する。

内黒土師器・二次加工品（第 100 図 686）

686 は内黒土師器の埦である。高台の形状から土師器埦２類に比定される。高台内面に「下」の字のような線刻が焼成後に行われる。また，見込みの外縁を意図的に剝離している。

土師器（第 100 図 687 ～ 697）

687 は土師器埦８類である。高台を貼り付けナデ調整を施した後に，高台内面と高台の境界に刺突が施される。689 は，内面にミガキが施され，さらに赤色顔料が塗布される。高台の形状から土師器埦２類に比定される。688 は土師器埦３類である。胎土に軽石が混入されている。

690 は土師器坏３類である。692 は坏もしくは皿である。胎土に１～３mm 程度の小礫が含まれる。見込みと体部の境界に同心円状に強いナデを施し凹ませる。

693 は大埦もしくは鉢である。底部外面に棒状の圧痕が認められる。

694 ～ 697 は，底部切り離しが糸切りの土師器である。

須恵器（第 100 図 698 ～ 700）

698 は口縁が肥厚し，丸みを帯びる。山元信夫氏によると，東播系の須恵器で，篠産で確実であるということであった。

699 は，坏の口縁部から胴部である。700 は鉢の底部である。外面には回転ナデが施される。

青磁（第 100 図 701 ～ 703）

701 は同安窯系青磁の碗である。外面に縦方向の櫛目文がみられる。702・703 は龍泉窯系青磁碗１類である。702 には連弁文がみられる。703 は，見込みに目跡が認められる。

滑石製品（第 100 図 704）

704 は滑石製石鍋で，縦方向の把手がつくタイプである。口唇部の把手の左右で器壁の厚さが異なるが，外面に煤が付着することや調整痕から判断して，二次加工・再利用によるものではない。外面は，鑿による調整の痕跡が明瞭に確認される。

焼塩土器（第 100 図 705）

焼塩土器は 705 の１点のみが出土した。内面から外面の口縁部付近まで布目の圧痕がみられる。体部上半から口縁に向けて鋭く先細りする。

（エ） 埋土上半（Ⅱ層相当層）及び撹乱出土遺物（第 101 図）

SD38 の埋土上半及び撹乱から出土した資料を一括して報告する。

土師器・内黒土師器（第 101 図 706 ～ 712）

706 は土師器埦２類である。黄橙色を呈し，胎土には１～３mm 程度の砂粒が含まれる。

707 は内黒土師器の埦である。残存している範囲での底部の厚さが 2.5mm と非常に薄い。高台内面と高台の境界には強いナデが施され，凹む。高台の器壁は薄いが，端部は丁寧に成形され，平坦面が作り出される。

708 は土師器の坏である。底部の厚さが 3.5mm と薄い。内外面に丁寧なナデが施される。坏６類に該当する。

709 は土師器坏３類である。底部が厚く，円盤状になる。体部は丸みを帯び，外面下端にケズリの痕跡が認められる。

710 は土師器皿で，胎土の粒子が小さく，表面は滑らかである。内外面の調整が非常に丁寧であり，外面にはヘラミガキが施される。

711 は坏で，底部切り離しは糸切りである。底部外面と体部の立ち上がりには明確な稜がつく。体部下半は外傾するが，中程で稜をもって立ち上がり口縁部となる。

712 は土師器の蓋である。

青磁（第 101 図 713・714）

713・714 は龍泉窯系青磁碗１類である。713 は口縁部に輪花は認められず，内面には方彫りで４～５分割されるが，飛雲文・花文は認められない。

須恵器（第 101 図 715 ～ 719）

715 は坏の口縁部から底部である。内外面共にナデが施される。716 は坏の底部である。内外面共にナデが施される。外面には全面に自然釉が付着している。717 はこね鉢の口縁部注口である。内外面共に回転ナデが施される。718 は壺の胴部である。外面は平行タタキの後に，回転カキメが施される。719 は甕の胴部である。外面は格子目タタキで，内面には平行な当具痕がみられる。外面全体に薄い釉薬が施釉されている。

（4） 遺構外出土遺物（第 102・103 図）

古代の遺構外における出土遺物は，包含層及び表土，撹乱のものがあるが，出土量が少ないため一括して報告する。

ア 土師器（第 102 図 720 ～ 734）

720 は土師器の蓋である。外面にはヘラケズリとナデが施され，わずかに凹凸が残る。

721・722 は土師器坏５類に該当する。722 は底部外面に「一」の字状の線刻が施される。723 は土師器坏６類である。底部外面には，丁寧にナデが施され，ナデ調整後に「一」の字状の線刻が施される。

724 ～ 726 は皿である。724 は，体部の器壁は厚めで，体部は丸みを帯びる。内面は見込みの中心から反時計回りにやや強めのナデが施される。外面の口縁部と体部には丁寧なナデが施される。725 は，見込みの中央付近が凹み，内外面ともに底部と体部との境界が不明瞭である。器面の調整が丁寧で，内面にはヘラミガキが，外面にはヘラケズリの後にミガキが施される。726 は皿の底部である。

727 は土師器埦１類である。焼成が非常に良好で，硬質である。高台は低く，断面が台形状になる。728 は埦３類で，高台は低く，「ハ」の字状に開くが，わずかに内湾する。底部の厚さが 3.5mm と非常に薄い。

729・730 は甕である。729 は口径 15.6cm で，やや小型の甕である。内面には煤が付着する。口縁部は開き，胴部は張り出すと想定される。外面から口縁部内面には丁寧なナデが施される。胴部には左上方向のケズリが施されるが，胴部と口縁部の境界には横方向のケズリが施される。

730 は，口縁部は短く，やや開く。口唇部は先細りし，先端は丸くなる。外面から口縁部内面には丁寧なナデが施される。胴部内面には右上方向のケズリが認められる。731 は，器壁が薄い。口縁部は開き，口唇部は角張る。外面は横方向のハケ目を施した後に，ナデが施される。732 は，口縁部は短く，わずかに開く。外面には丁寧なナデが施される。口縁部内面には目の小さなハケ目がみられる。胴部内面にはほぼ真横に近い左上方向のケズリが認められる。

733 は頸部の破片資料である。胎土が赤褐色を呈し，胎土に滑石の混入が認められる。胴部外面には縦方向のハケ目が，胴部内面には左上方向のケズリがみられる。

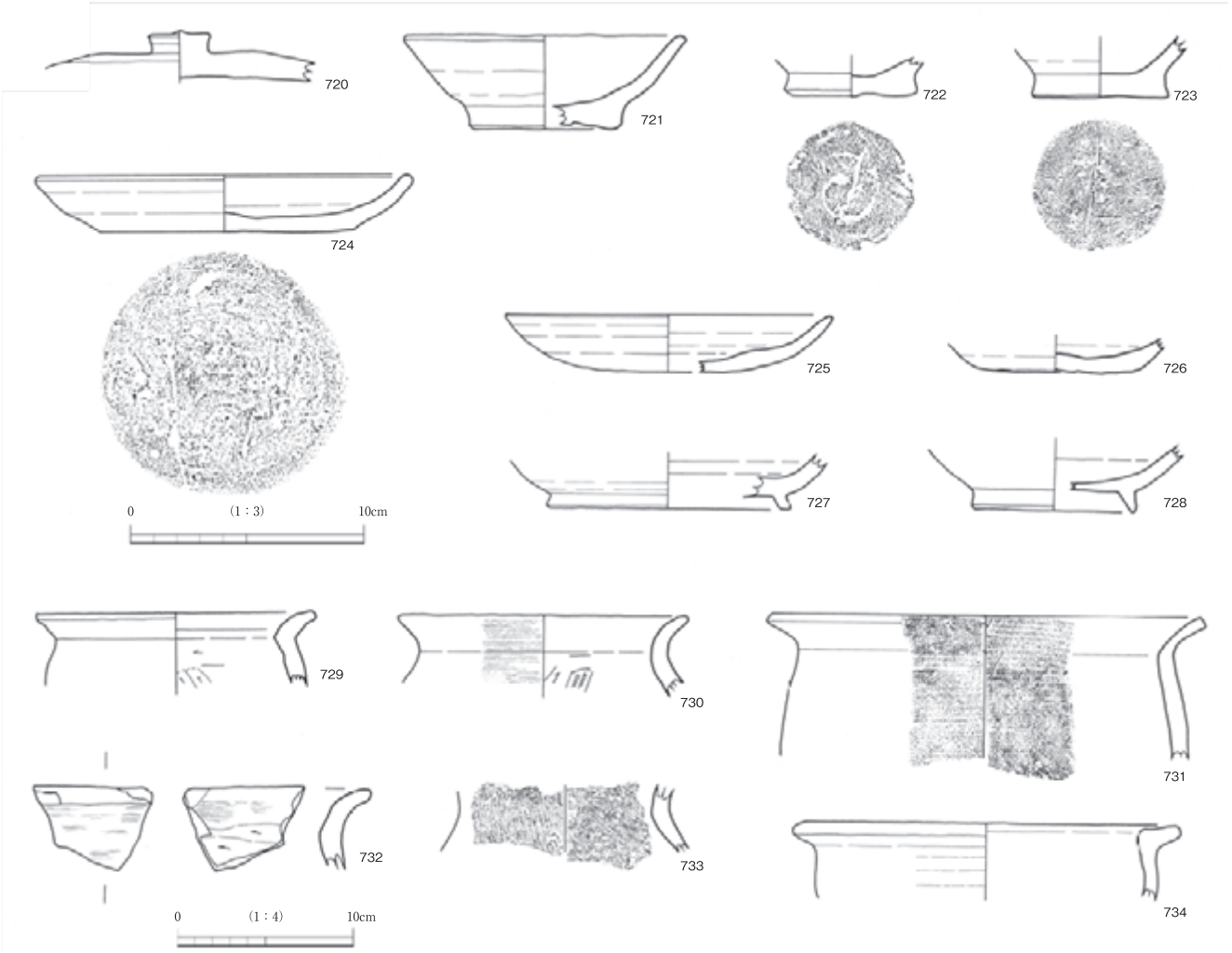
734 は口径 22cm である。口縁部は短く，開く。口唇部は角張る。胴部の短い鉢状になると想定される。

イ 須恵器（第 103 図 735 ～ 753）

735・736 は蓋である。735 は，天井部が低く扁平である。内外面共に回転ナデが施されている。外面には自然釉が付着している。また，内面には，重ね焼きによる付着物が見られる。736 は，天井部が高く全体的にやや丸みを帯びている。外面はケズリの後にナデが施されている。外面には重ね焼きによる付着物がみられる。

737 は高台付坏である。高台の幅は狭く，高さが低い。

738 ～ 740 は坏で，全て底部の切り離しはヘラ切りで



第 102 図　遺構外出土遺物①

ある。738 は，口縁部から受け部が消失している。外面全体に自然釉が付着している。739 は，外面はヘラケズリによる成形の後に，ナデによる調整が施される。外面全体に自然釉が付着している。740 の外面は，ヘラケズリによる調整が施される。成形時の轆轤回転は，738・740 は右回転で，739 は左回転である。

742 ～ 745・750 は壺である。742 ナデの方向が上下で異なり，その境目に接合痕が見られることから，上下を別々に製作し，最後に接合して製作していると考えられる。743 は壺としているが，底部にタタキが施されていることから，壺ではない可能性もある。

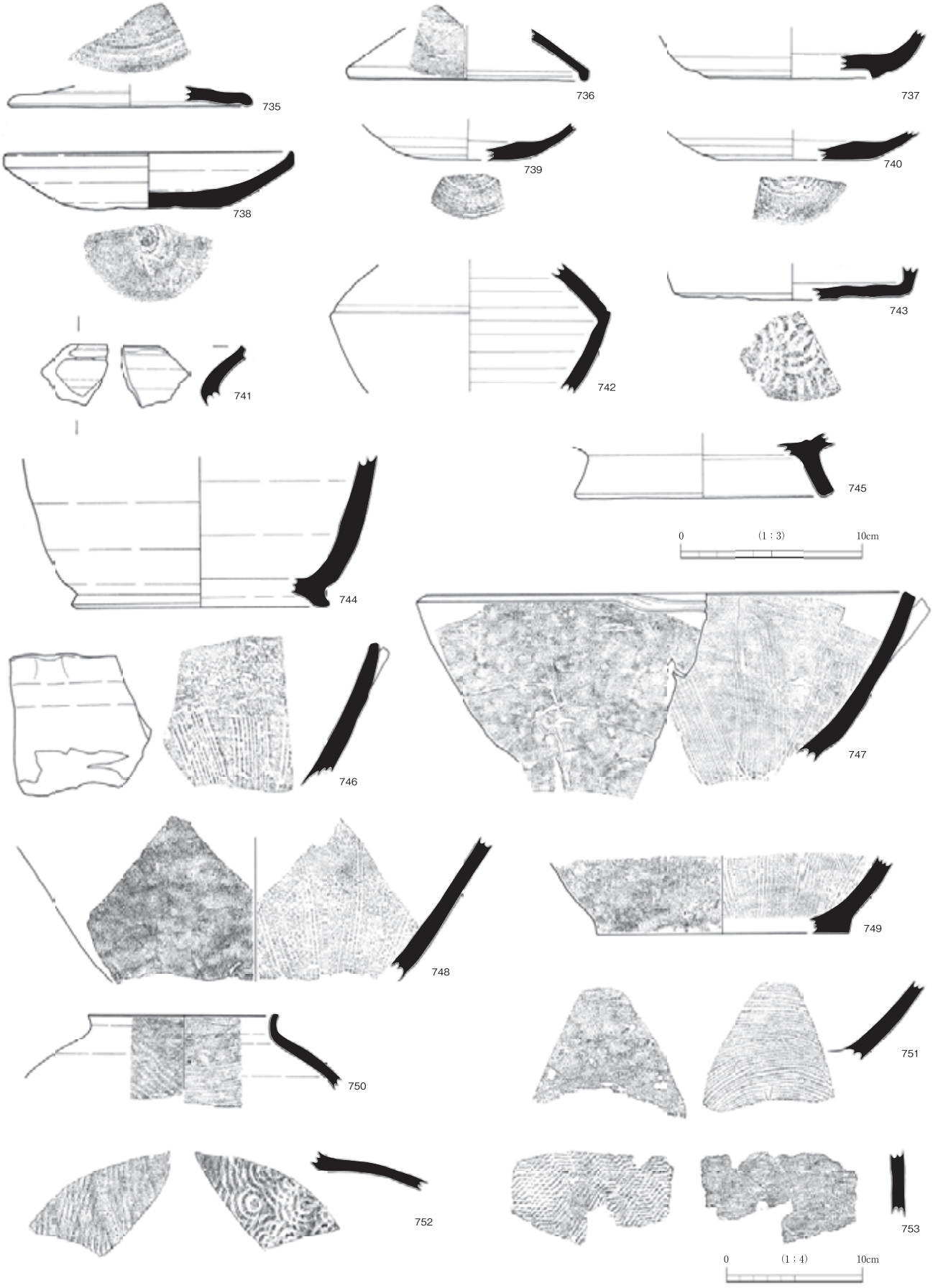
744 は，胴部に丸みが無く，高台は外傾する。胴部下半の内外面はケズリにより成形され，胴部外面は平行タタキにより成形されている。内面には，板状の当具による痕跡が観察できるが，全面に丁寧なナデが施されている。

745 は壺の底部で，底部内面は絞った様な皺がある。750 は口縁部である。外面に刺突文を施文した後に，丁寧な回転ナデが施されている。

741・752 は甕である。741 は内外面に回転ナデが施されている。752 は，外面が平行タタキにより成形されている。外面全体には透明度の高い自然釉が付着している。

751・753 はこね鉢である。753 は外面に「ハ」の字状のタタキによって成形されている。内面はヘラによる調整が施されている。751 は，外面にナデが施されているが，全体的に摩滅している。内面には，ヘラによる調整が施されている。

746 ～ 749 は擂鉢である。747 は内面に 11 本で 1 セットのすり溝がみられる。749 は，内面に木製工具によるナデが施されており，10 本で 1 セットのすり溝が施されている。748 は，7 本で 1 セットのすり溝が施されている。746 は 10 本で 1 セットのすり溝が施されている。



第 103 図　遺構外出土遺物②

4　中世の調査

（1）　調査の概要

中世の調査は，主にＭ～Ｐ－23～28区で行った。遺構の分布域は縄文時代のものと重複する。縄文時代の調査と同様に，Ⅲ層が残存している地点ではⅢ層直下で，それ以外の地点では表土直下で遺構の検出を行った。遺構検出面はⅣ層，Ⅴ層，Ⅵ層のいずれかであり，当該時代の生活面から下層で遺構を捉えていることになる。なお，黒～灰褐色を呈する遺構埋土を中世に該当するものと判断し，縄文時代の遺構と区別した。

中世の遺構は，掘立柱建物跡４棟，方形竪穴建物１基，竪穴状遺構３基，土師器埋納柱穴１基，土壙墓２基，土坑３基，炭化物集中箇所１基，焼土２基，柱穴64基を検出した。また，３古代の調査で述べたとおり，SD38の中層及び上層からは，中世の遺物が出土している。

遺構の調査は，まず検出状況の記録写真を撮影し，必要に応じて検出状況の実測を行った。その後，方形竪穴建物と竪穴状遺構については，十字に土層観察用のベルトを設定し，４分の１ずつ掘り下げを行った。それ以外の遺構については，半截し，堆積状況を観察しながら掘り下げを行った。土坑の床面の判断は，埋土堆積状況の変化や埋土に含まれる炭化物の有無，硬化面等の把握に依った。

遺物の取り上げは，土器・陶磁器類の小破片については，掘り下げ時にグリッドごとに一括で取り上げた。大型の破片については，遺構検出後に，遺構との関係の有無を判断し，遺構と関係がないものはグリッド一括で取り上げ，遺構との関係があるものは遺構内出土遺物と同様の取扱いをした。

（2）　遺構

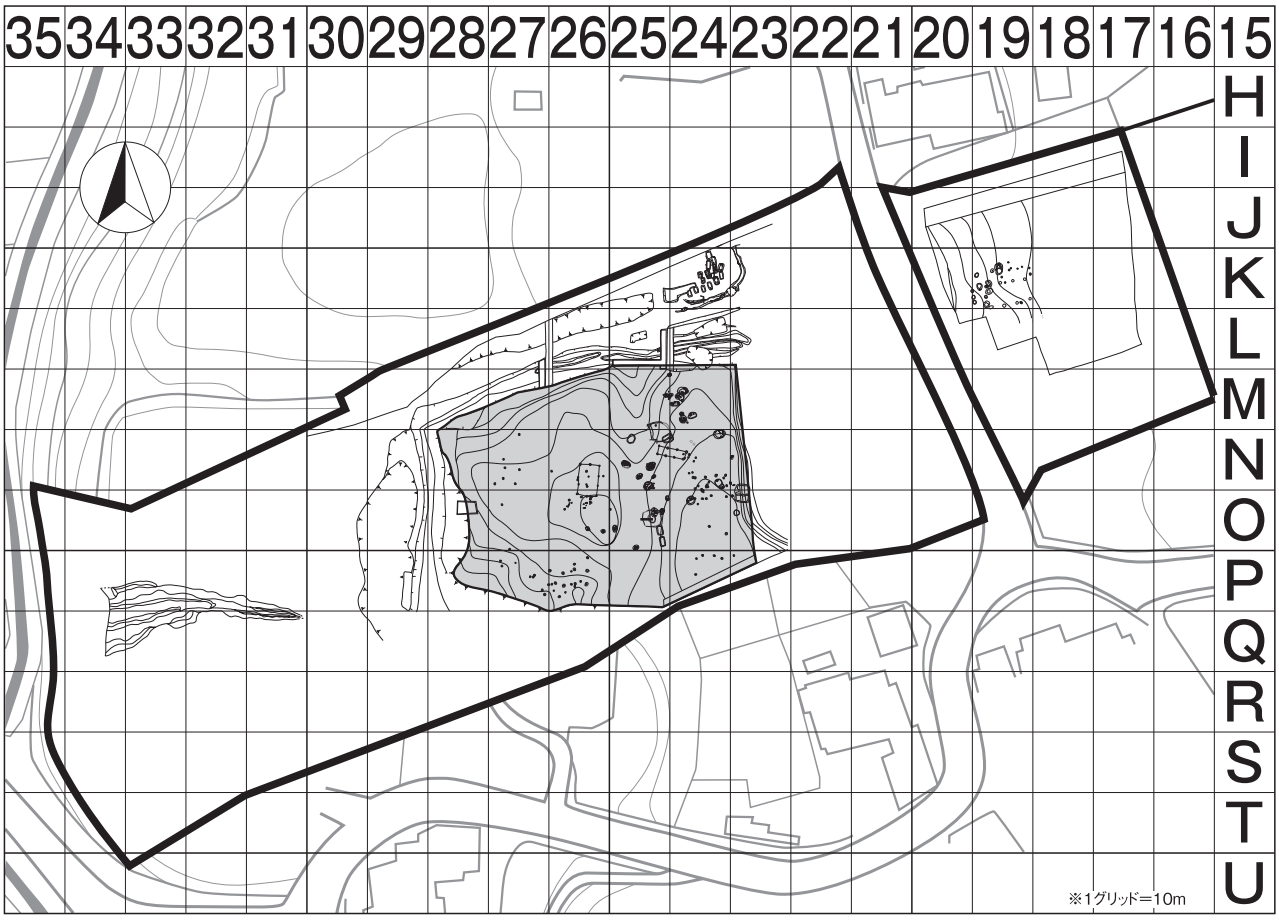
ア　掘立柱建物跡（第107・108・110図）

掘立柱建物跡は４棟検出された。規格や柱穴の形状等に共通性はみられない。

SB16（第107図）

検出状況　N･O－26区，Ⅵ層上面で検出された。

規格・規模　規格は２間×３間で，総柱である。主軸はＮ５°Ｅを示す。柱間は，桁行が一間120～220cm，梁行が一間156～176cmである。Ｐ８及びP12は，並列して２基の柱穴が検出されていて，柱を立て替えた可能性がある。



第104図　中世の調査範囲（アミの範囲）

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を基本とする。規模は直径 20 ～ 37cm，検出面からの深さ 33 ～ 76cm とややばらつきがある。埋土は黒褐色土で，床面付近のしまりが強い。埋土から土器の小破片が出土したが，図化には至らなかった。

SB41（第 107 図）

検出状況　N － 24･25 区，Ⅵ層上面で検出された。

規格・規模　規格は 1 間× 3 間で，主軸は N12° W を示す。柱間は，桁行が一間 136 ～ 160cm，梁行が一間 128 ～ 146cm である。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は，円形もしくは楕円形である。規模は直径 21 ～ 40cm，検出面からの深さ 30 ～ 56cm で，規模にばらつきがある。埋土は黒褐色土で，床面付近のしまりが強い。埋土から土器の小破片が出土したが，図化には至らなかった。

SB119（第 107･108 図）

検出状況　N･O － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。分布が SI11 と重複していて，P5（SP87）が SI11 を切っている。

規格・規模　規格は 2 間× 3 間で，主軸は N 3° W を示す。柱間は，桁行が一間 166 ～ 196cm，梁行が一間 168 ～ 189cm である。

柱穴の形状・埋土　柱穴の平面形は，円形もしくは楕円形である。規模は直径 33 ～ 44cm，検出面からの深さ 29 ～ 52cm で，規模にばらつきがみられる。埋土は黒褐色土で，床面付近のしまりが強い。

P5・出土遺物　P 5 は SB119 を形成する柱穴のひとつで，平面形が楕円形を呈する。規模は 41 × 29cm で，検出面からの深さは 52cm である。P 5 の検出面付近で滑石製石鍋（757）が出土した。一部欠損するが，ほぼ全体が残存している。757 は，鍔が巡るタイプの石鍋で，外面には器面を整形する際の鑿痕が明瞭に観察できる。

また，特筆すべき点として，SP79 の埋土から出土した破片と接合したことを挙げられる。ただし，意図的に異なる柱穴に納められたのか否かは不明である。

SB120（第 110 図）

検出状況　SB120 は P － 26 区，Ⅵ層上面で検出された。

規格・規模　規格は 2 間× 3 間で，主軸は N 7° W を示す。柱間は，桁行が 188 ～ 218cm，梁行が 211 ～ 224cm である。

柱穴の形状・埋土　平面形は楕円形で，規模は長径 34 ～ 64cm，検出面からの深さ 30 ～ 60cm である。埋土は褐色土で，他の掘立柱建物跡の埋土と比較して粘性が弱く，しまりもない。

P1（SP81）・出土遺物　SB120 を構成する柱穴では，P 1（SP81）から瓦質土器と青磁碗が出土した。瓦質土器 3 点を図化した。758 は，釜の口縁部で，口縁部はやや肥厚する。759・760 は擂鉢で，体部の外傾が弱い。口縁部は断面三角形状に成形され稜を持つが，全体的に歪む。

また，図化には至らなかったが，青磁碗は高台付近が出土したが，線描の連弁文を持つものである。

イ　土師器埋納柱穴（第 109 図）

SP79（第 109 図）

検出状況　N － 24 区，Ⅴ層上面で，土師器が一部露出する状態で検出された。

形状・規模　平面形は楕円形で，規模は長軸 28cm，短軸 24cm，検出面からの深さ 36cmである。床面は平坦で，断面形は円筒形になる。

埋土　埋土はにぶい黄褐色土で，上部は，しまりがなく粘性も弱いが，下部は，やや粘性があり，しまりが強くなる。

遺物・礫出土状況　SP79 からは，土師器坏 2 点，青磁碗 1 点，滑石製石鍋の破片 2 点，礫 14 点が出土した。

土師器の坏は，大小を入れ子状にし，伏せられた状態で検出された。土師器坏の直下からは，扁平な安山岩が横位で検出された。さらに，その安山岩の下部から，他の礫と青磁碗，滑石製石鍋が検出された。

ほとんどの礫には被熱や整形等の痕跡は確認されなかったが，最上部から検出された安山岩には被熱の痕跡がみられ，被熱後に一部を打ち欠いて扁平になるように整形した痕跡が観察される。

以上のことから，柱穴の機能喪失後に，根石を再利用もしくは新たに礫を配し，その上に扁平に整形された安山岩を水平に据え台状にし，土師器の坏 2 点を配したものであると想定される。

遺物　755・756 は土師器の坏である。755 は口径 13.2 cm，756 は口径 9.0cm で，大小のセットである。底部の切り離しは糸切りによる。底部外面は水平だが，立ち上がりは丸みを帯びる。内面には雑なナデが施される。

757 は，龍泉窯系の青磁碗である。見込みに方彫りによる草花文がみられる。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。754 は上述のとおりである。

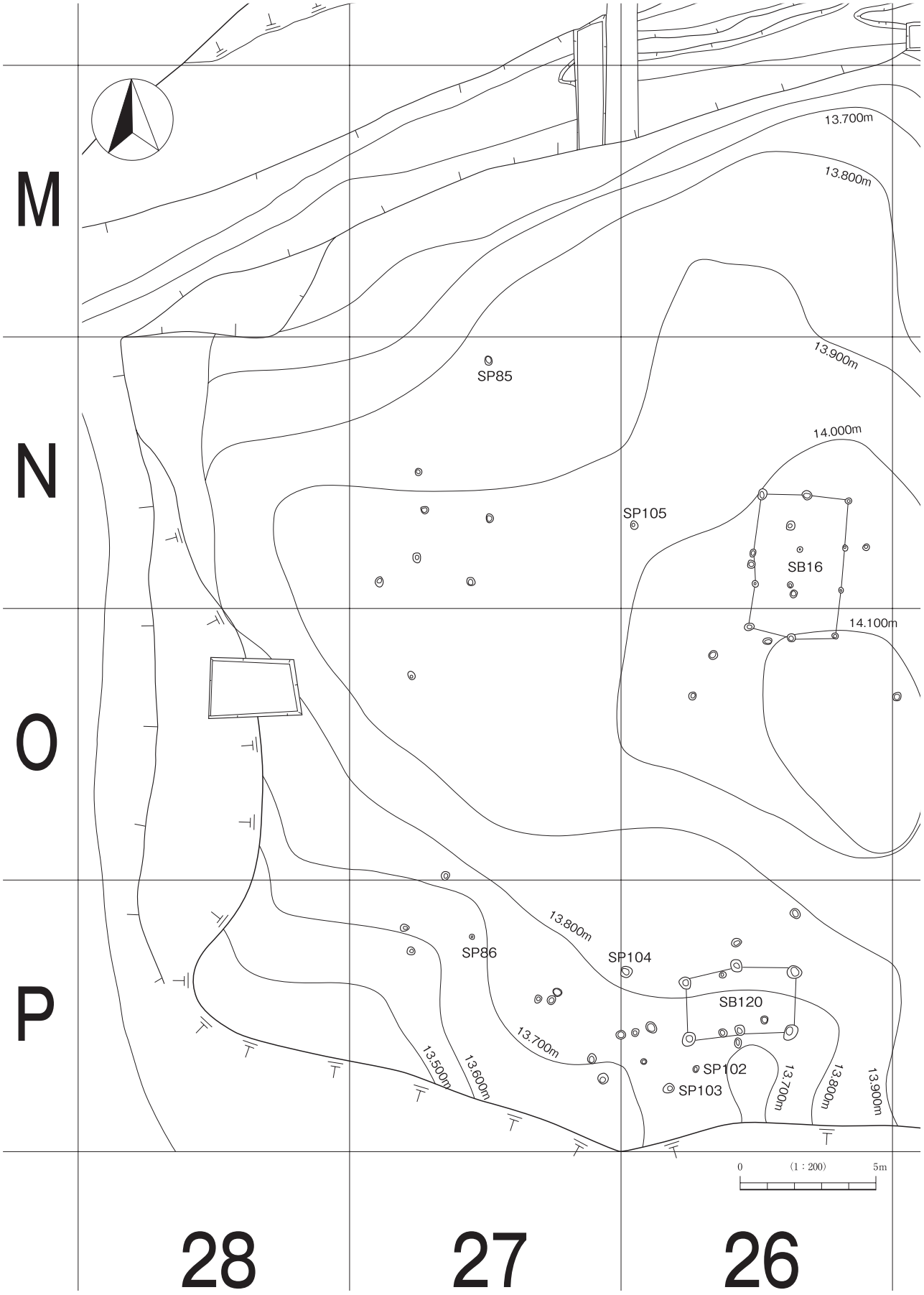
ウ　方形竪穴建物・竪穴状遺構

平面形が方形で，一辺が 2 m を超えるものを方形竪穴建物・竪穴状遺構とした。確実に建物跡と判断できたものを方形竪穴建物，それ以外のものを竪穴状遺構とした。

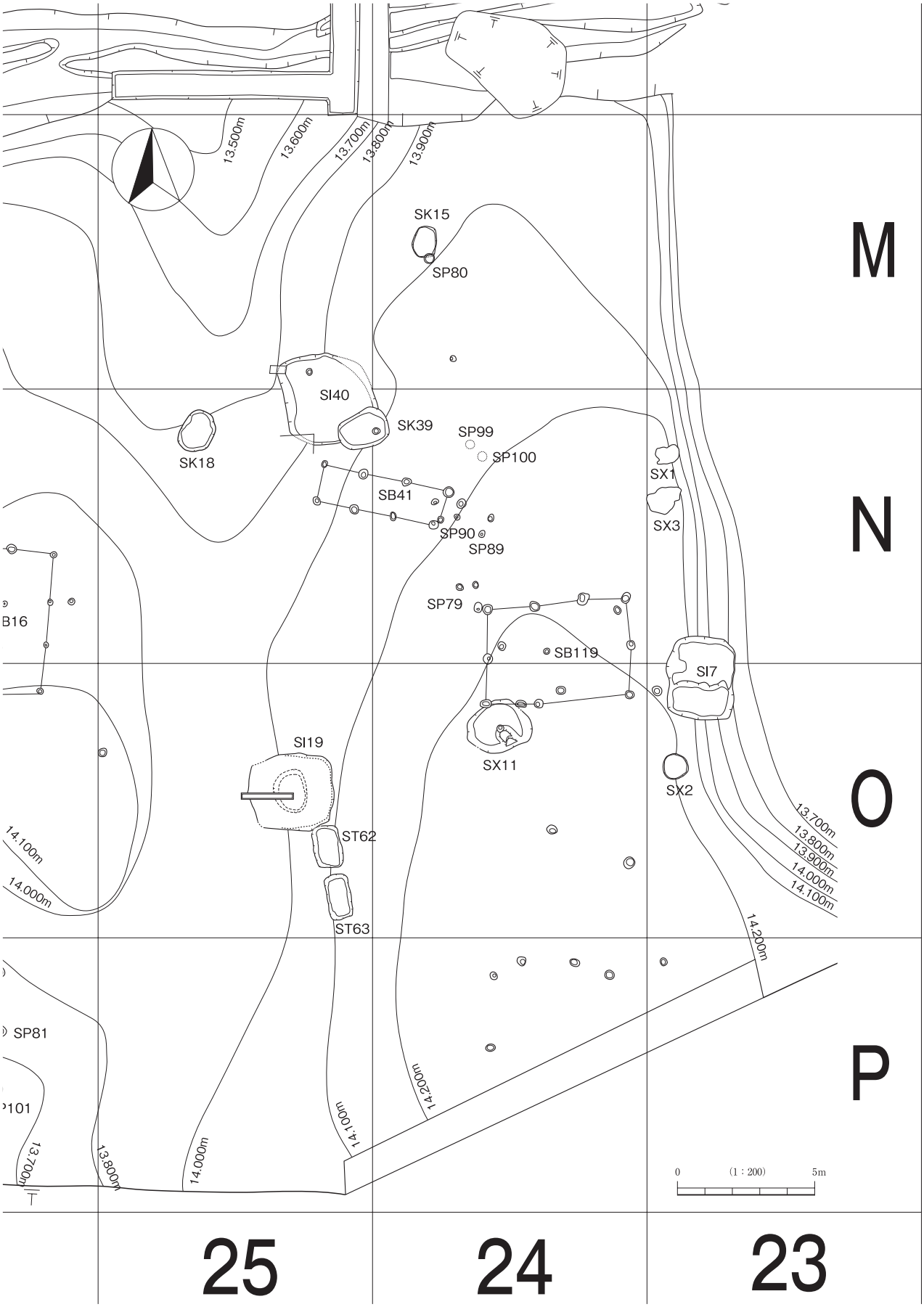
（ア）　方形竪穴建物（第 111・112 図）

SI7（第 111・112 図）

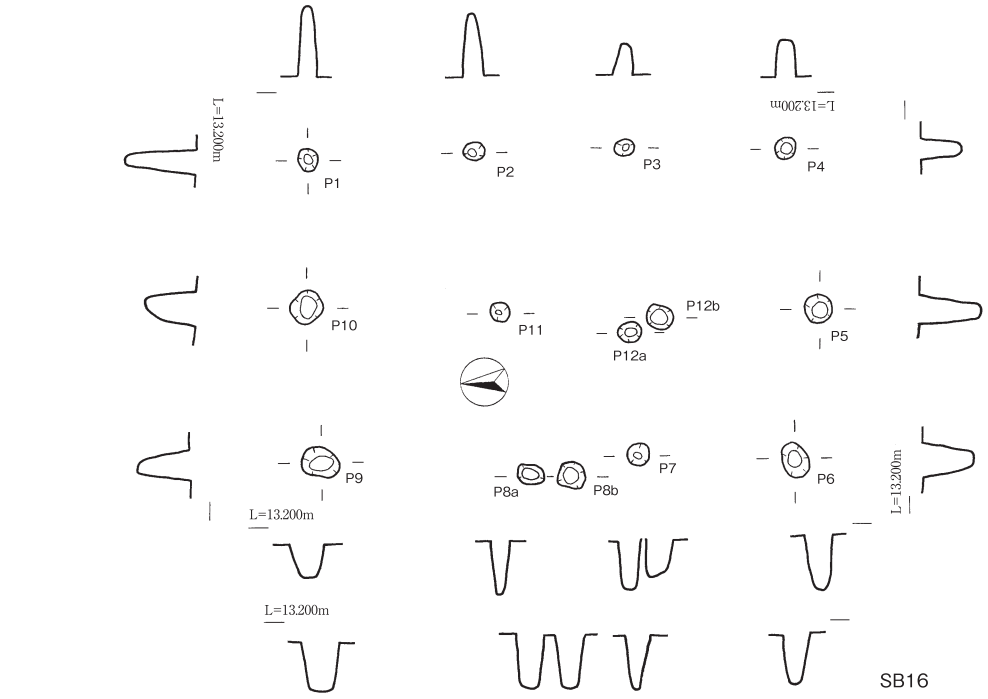
検出状況　N･O － 23 区，Ⅴ・Ⅵ層上面で検出された。後世の削平により，遺構の東側の上部は残存していない。



第 105 図　中世の遺構配置図（1）

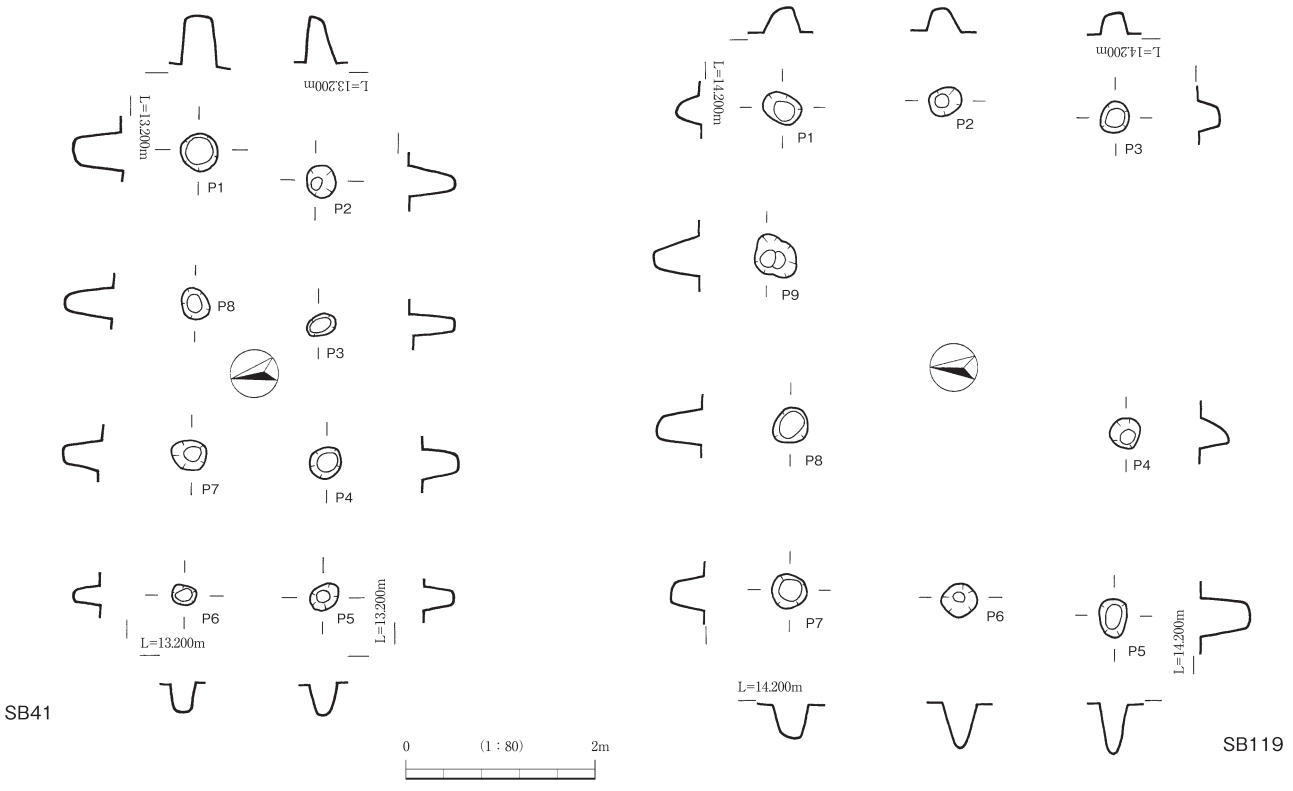


第 106 図　中世の遺構配置図（2）



No		柱穴（cm）		
		長径	短径	深さ
P1		25	21	76
P2		23	20	67
P3		21	18	33
P4		24	21	39
P5		30	30	67
P6		37	28	55
P7		25	24	58
P8	a	29	22	55
	b	31	29	57
P9		41	32	56
P10		36	36	54
P11		21	21	57
P12	a	24	21	53
	b	29	27	43

主軸	方向	柱穴	柱間距離	
			cm	尺
N5° E	桁行	P1 － P2	172	5.70
		P2 － P3	164	5.43
		P3 － P4	168	5.56
		P8a － P9	220	7.28
		P7 － P8a	120	3.97
		P6 － P7	164	5.43
	梁行	P9 － P10	168	5.56
		P1 － P10	156	5.17
		P5 － P6	160	5.30
		P4 － P5	176	5.83



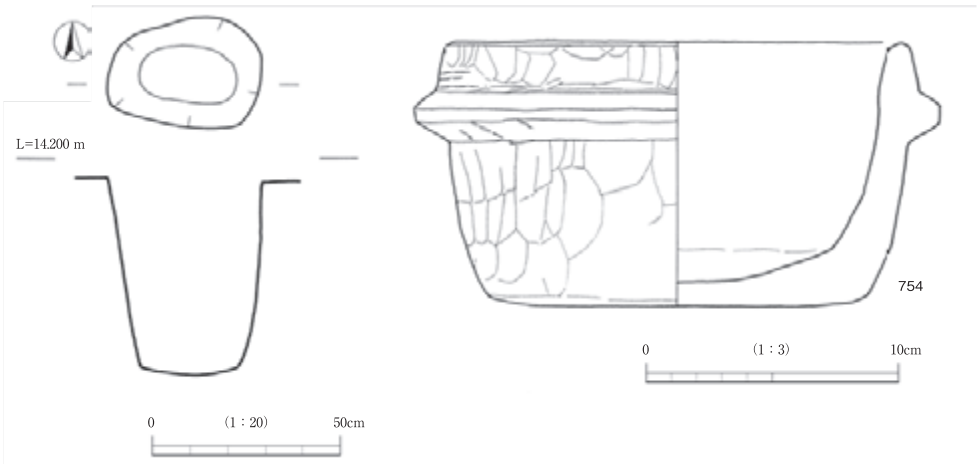
No	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
P1	40	39	56
P2	33	32	49
P3	31	21	45
P4	34	31	39
P5	29	27	32
P6	25	21	30
P7	36	32	41
P8	35	29	52

主軸	方向	柱穴	柱間距離	
			cm	尺
N12° W	桁行	P1 － P8	160	5.30
		P7 － P8	160	5.30
		P6 － P7	148	4.90
		P2 － P3	148	4.90
		P3 － P4	144	4.77
		P4 － P5	136	4.50
	梁行	P1 － P2	128	4.24
		P5 － P6	148	4.90

No	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
P1	41	32	26
P2	35	29	25
P3	33	31	23
P4	33	33	31
P5	41	29	52
P6	37	34	50
P7	37	35	36
P8	35	35	47
P9	44	41	48

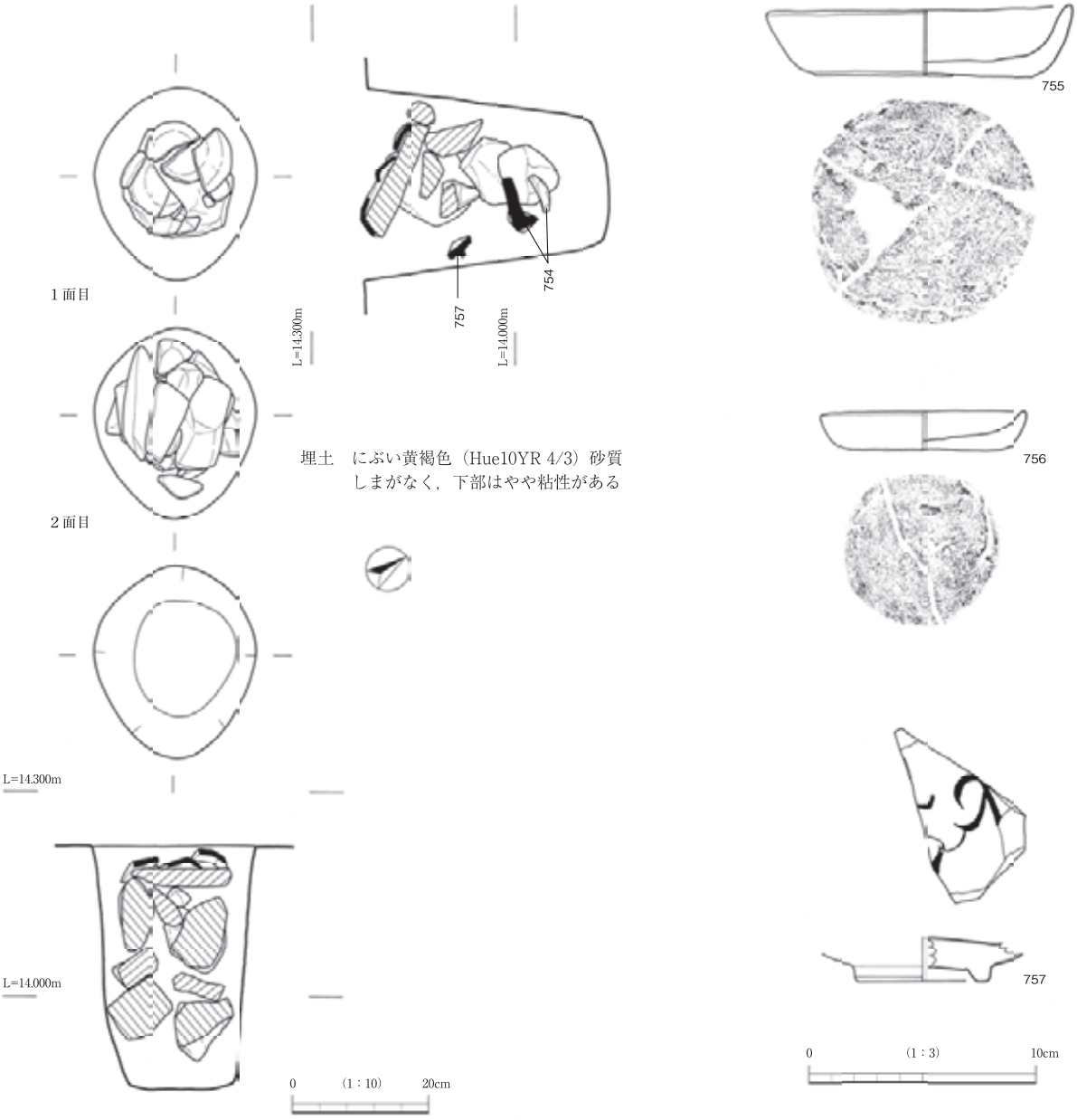
主軸	方向	柱穴	柱間距離	
			cm	尺
N3° W	桁行	P1 － P9	160	5.30
		P8 － P9	172	5.70
		P7 － P8	176	5.83
		P3 － P4	(340)	(11.26)
		P4 － P5	196	6.49
	梁行	P1 － P2	170	5.63
		P2 － P3	188	6.23
		P6 － P7	180	5.96
		P5 － P6	168	5.56

第 107 図　SB16，SB41，SB119

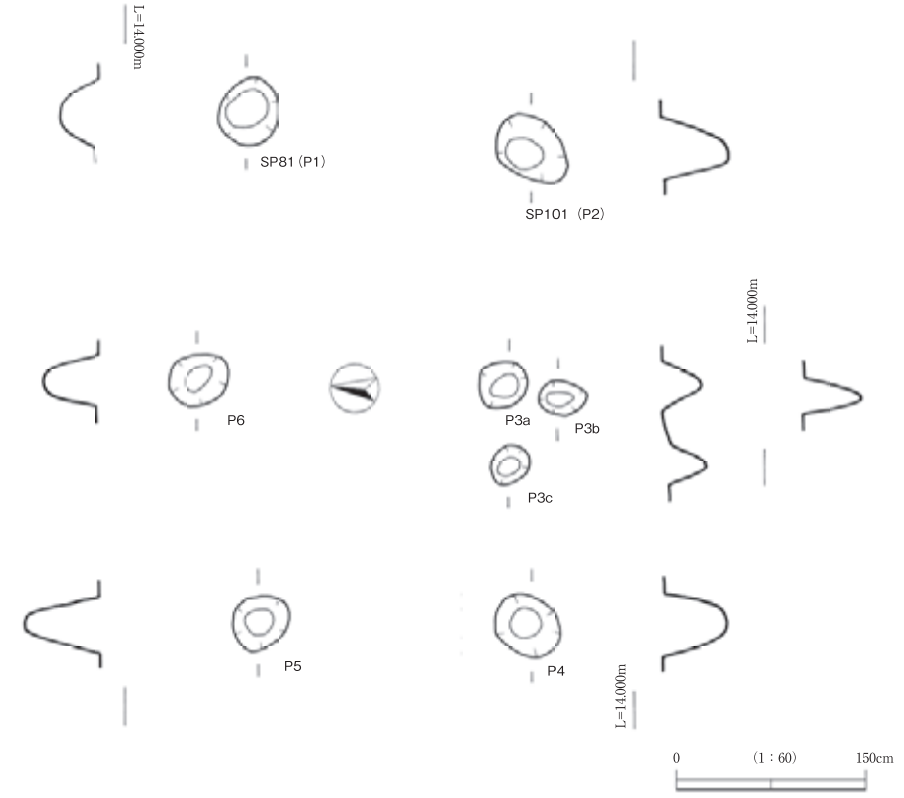


754 出土状況

第 108 図　SB119 － P5・出土遺物

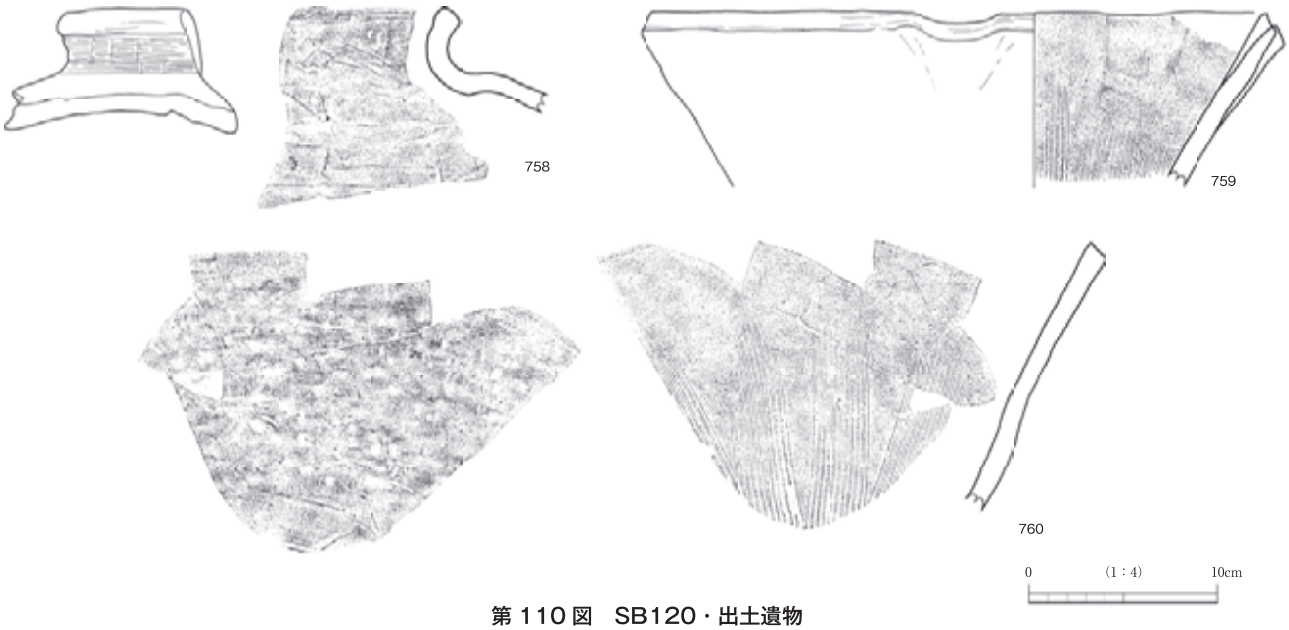


第 109 図　SP79・出土遺物



No		柱穴（cm）		
		長径	短径	深さ
P1		55	48	31
P2		64	47	57
P3	a	38	34	31
	b	38	26	48
	c	34	29	30
P4		56	48	55
P5		46	41	60
P6		48	41	42

主軸	方向	柱穴	柱間距離	
			cm	尺
N7° W	桁行	P1 － P6	218	7.22
		P5 － P6	199	6.59
		P2 － P3a	188	6.23
		P3a － P4	190	6.29
	梁行	P1 － P2	224	7.42
		P4 － P5	211	6.99



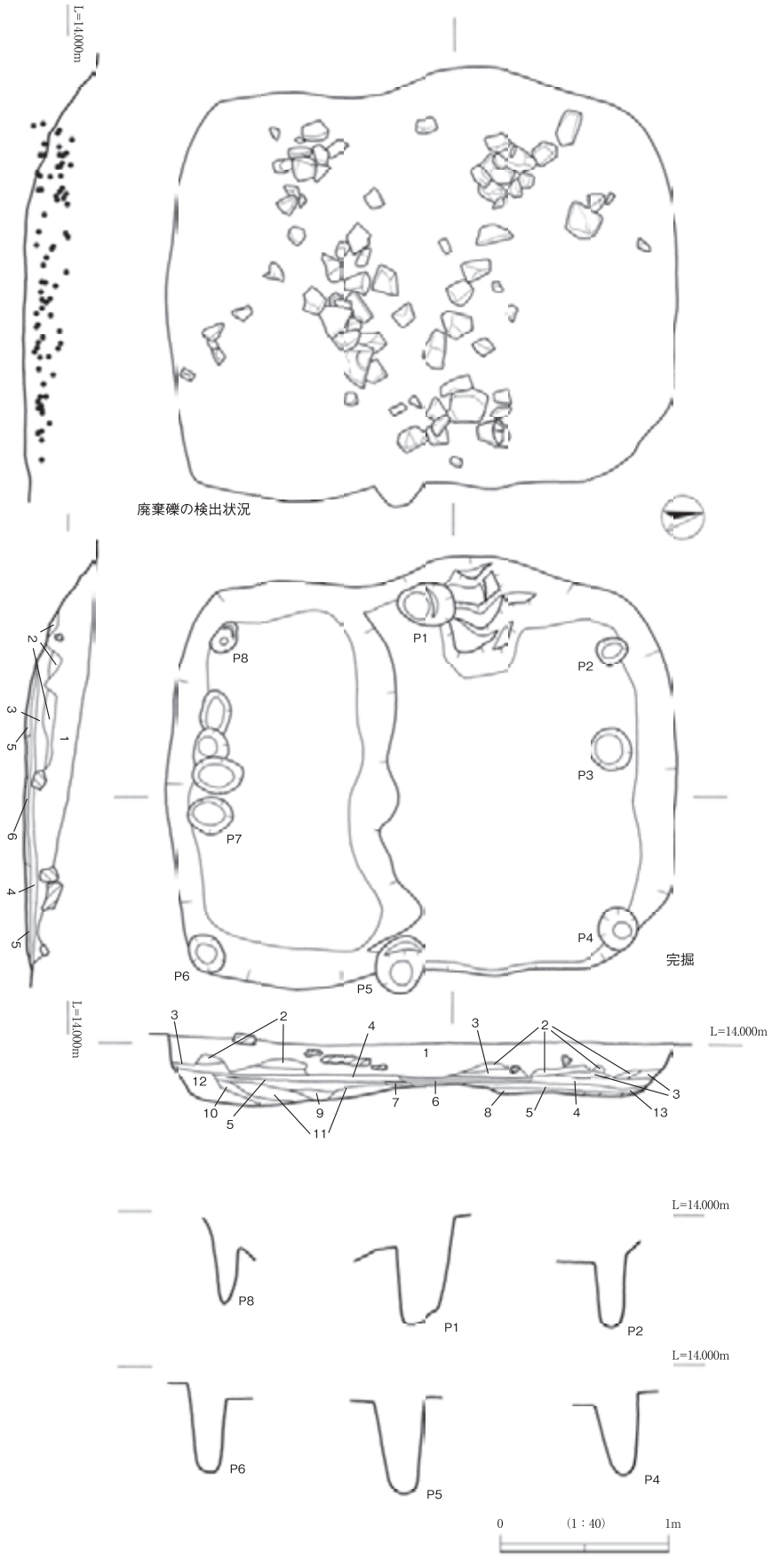
第 110 図　SB120・出土遺物

形状・規模　平面形は南北に長い長方形で，規模は南北 304cm，東西 247cmである。床面は平坦でなく，南側が 10 ～ 15cm 程度深く掘り下げられていて，段掘り状になる。壁面は，床面からほぼ垂直に立ち上がるが，西側中央部は，地山がスロープ状に掘り残されている。

埋土　埋土は 13 層に分層した。埋土２・４・５及び８は，粘性が強くしまりもよいことから，床面と判断した。床面は貼り床ではなく，床面として利用する際に，叩きしめられたような状況であった。また，埋土６・７は遺構の中央付近で確認されたが，しまりがなく炭化物を多く含む。堆積状況から，埋土４・５が床面として機能していた際の地床炉と想定される。

南側の段掘り部分には，粘性のあるややしまる埋土が堆積していたが，床として機能していたものか否かは判断できなかった。また，埋土 12 はＰ７の埋土である。

柱穴　柱穴は８基確認された。Ｐ１･Ｐ２，Ｐ４～Ｐ６，Ｐ８は，平面形が円形ないし楕円形で，規模は長径 20 ～ 30cm である。床面からの深さは 40 ～ 55cm で，しっ



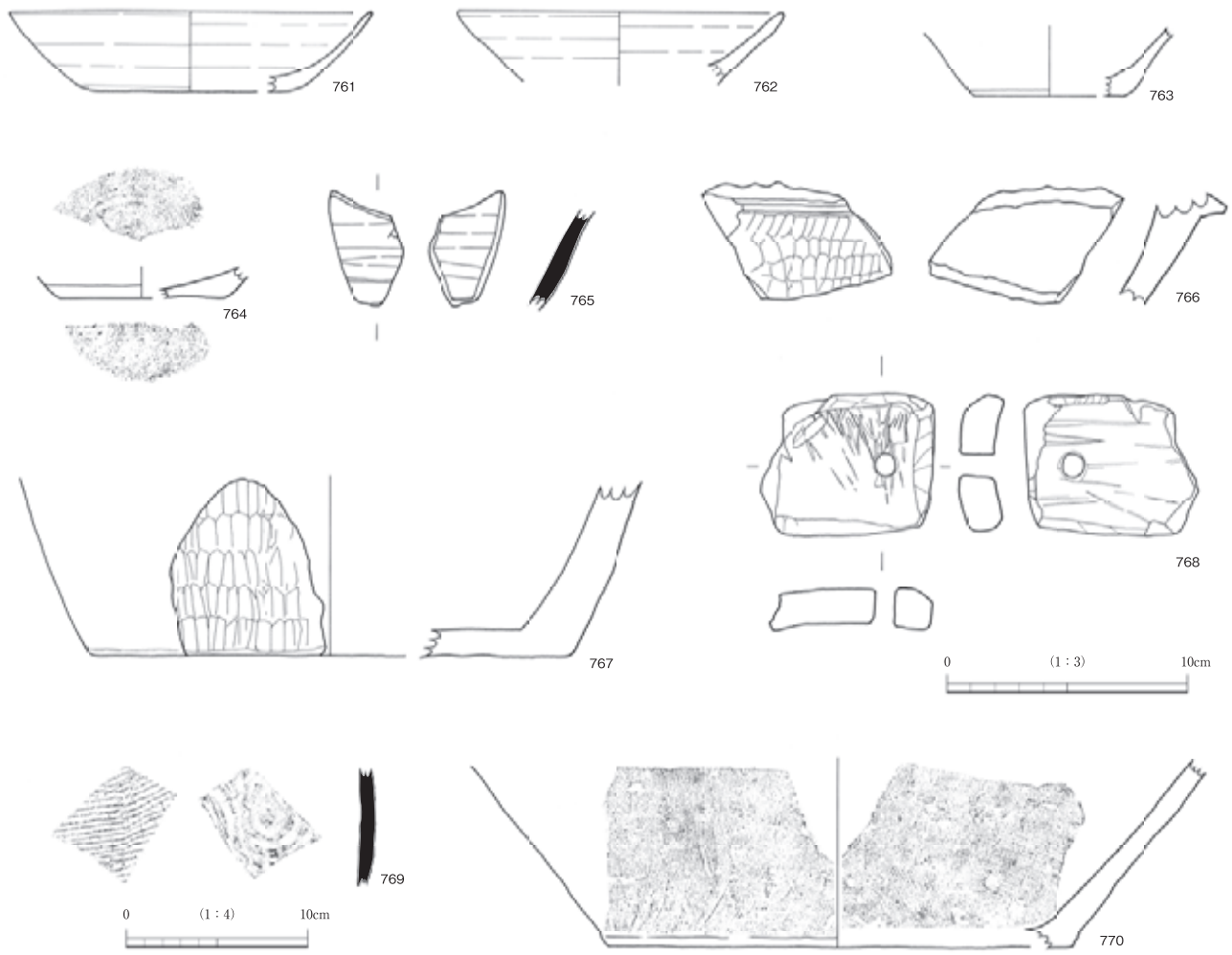
埋土注記

1 黒褐色土（Hue10YR 2/2）
やや粘性があるが，しまりはない
2 床面１
黒褐色～褐色土（Hue10YR 2/2 ～ Hue7.5YR 4/4）
粘性があり，固くしまる
3 暗褐色土 (Hue10YR 3/4)
とても粘性が強くよくしまる
4 床面２
褐色土（Hue10YR 4/4） 砂質
水分を含むと粘性が強くなる
固くしまる。10mm 程度の軽石が混じる
上面は上から２段目の床面
5 床面３
灰黄褐色土（Hue10YR 4/2）
かなり粘性が強く，固くしまる
6 暗赤褐色土（Hue2.5Y3/2）
粘性は弱く，しまりもない
多量のカーボンを含む。床面２・３の地床炉
7 埋土５にカーボンも多量に含む
8 床面４？
褐色土（Hue10YR4/6） 粘性が強く，しまる
9 にぶい黄褐色土 (Hue10YR 5/4) 砂質
10 暗褐色土（Hue10YR 3/4）
砂質でやや粘性がある。1 ～ 10mm 程度の礫含む
11 暗赤褐色（Hue2.5Y 3/3）
粘質があり，しまる
12 暗赤褐色土（Hue2.5Y 3/3） P7 の埋土
粘質性があり，固くしまる
13 にぶい黄褐色（Hue10YR 5/4）
砂質 やや粘性がある

No	柱穴（cm）		
	長径	短径	深さ
P1	32	25	48
P2	20	16	40
P4	25	24	43
P5	30	22	55
P6	24	20	48
P8	20	16	40

主軸	方向	柱穴	柱間距離	
			cm	尺
N9° E	桁行	P1 － P2	120	3.97
		P1 － P8	116	3.84
		P4 － P5	136	4.50
		P5 － P6	117	3.87
	梁行	P2 － P4	168	5.56
		P6 － P8	188	6.23

第 111 図　SI 7



第 112 図　SI 7出土遺物

かりと掘り込まれている。埋土はにぶい黄褐色を呈し，やや粘性がある。Ｐ１とＰ５は埋土３の直下で，Ｐ２・Ｐ４・Ｐ６・Ｐ８は埋土４の直下で検出された。なお，Ｐ６とＰ８は段掘り部分に掘り込まれているが，柱穴に沿って地山が盛り上がったような状況である。そのことから，まず柱穴を掘り込み，その後に，段掘り部分が掘削された可能性が高い。

Ｐ７は埋土３の直下で，４つの柱穴が切り合ったような状況で検出された。掘り込みは浅く，地山までは及んでいない。Ｐ８は完掘後に，深さ２～３cm 程度の凹みとして検出された。

礫　埋土１に含まれる形で，礫が多数検出された。礫には縄文時代の石器も含まれる。方形竪穴建物としての機能喪失後に，西側から廃棄あるいは流れ込んだものと想定される。

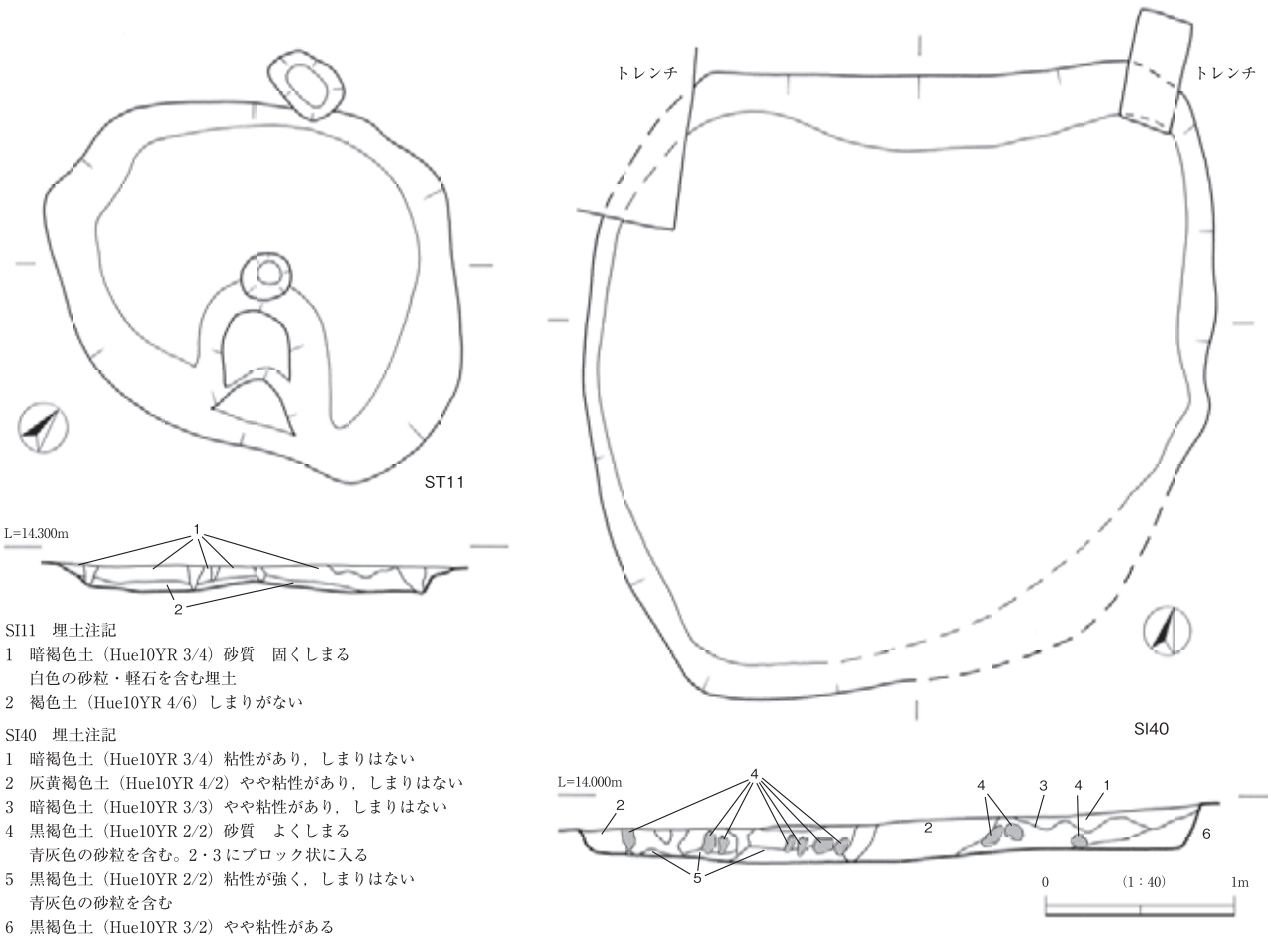
遺物　SI ７の埋土からは，土器 108 点，須恵器３点，陶器１点，滑石製品３点が出土した。遺物はいずれも破片である。土器４点，須恵器２点，陶器１点，滑石製品３点を図化した。

761 は土師器の坏で，段掘り部分から出土した。胎土に１～３mm 程度の砂礫を含む。器面は摩滅していて，底部の切り離し技法は不明である。底部から体部の立ち上がりは丸みを帯び，口縁部に向かって先細りする。

762 ～ 764 は土師器で，埋土１から出土した。色調は橙色を呈し，胎土に１～２mm 程度の白色の鉱物を含む。762・763 は坏で，底部から体部の立ち上がりは丸みを帯びて，体部は外傾する。764 は底部で，切り離しは糸切りによってなされる。

765 は須恵器の埦である。769 は須恵器の甕で，傾きは不明である。770 は陶器の甕である。

766・767 は滑石製の石鍋である。766 は鍔が巡るタイプである。外面には鑿による加工痕が明瞭に残り，全体に煤が付着する。767 も外面に煤が付着する。また，割れ口が研磨されていて，再利用が試みられている。768 は滑石製石鍋の底部付近を温石として再利用したもので，左側は欠損する。穿孔され，裏面にはその上部に紐擦れ痕と想定される擦痕が認められる。表面には線刻状の加工痕がみられる。



SI11　埋土注記
1　暗褐色土（Hue10YR 3/4）砂質　固くしまる
　白色の砂粒・軽石を含む埋土
2　褐色土（Hue10YR 4/6）しまりがない

SI40　埋土注記
1　暗褐色土（Hue10YR 3/4）粘性があり，しまりはない
2　灰黄褐色土（Hue10YR 4/2）やや粘性があり，しまりはない
3　暗褐色土（Hue10YR 3/3）やや粘性があり，しまりはない
4　黒褐色土（Hue10YR 2/2）砂質　よくしまる
　青灰色の砂粒を含む。2・3にブロック状に入る
5　黒褐色土（Hue10YR 2/2）粘性が強く，しまりはない
　青灰色の砂粒を含む
6　黒褐色土（Hue10YR 3/2）やや粘性がある

第 113 図　SI11，SI40

（イ）　竪穴状遺構（第 113・114 図）

SI11（第 113 図）

検出状況　O － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。黒くシミ状に検出され，平面形が不明瞭であった。そこで，検出後にトレンチを設定し埋土の堆積を観察し，平面形を決定した。また，SB119 － P 5 や他の柱穴に切られる。

形状・規模　平面形は歪んだ円形で，規模は長軸 208cm，短軸 194cmである。検出面からの深さは 14cmで，床面は凹凸を残し，特に南側は地山が掘り残されていて盛り上がる。壁面は緩やかに立ち上がり，外傾する。

埋土　埋土は暗褐色土で，砂質で固くしまっている。埋土は樹痕により汚染されている。

遺物　遺物は青磁の小破片が 1 点のみ出土したが，詳細は不明である。

SI40（第 113 図）

検出状況　M・N － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。南東側は SK39 に切られる。

形状・規模　平面形は隅丸方形で，規模は長軸 328cm，短軸 320cmである。検出面からの深さは 22cmで，断面形は，床面はほぼ水平で，壁面の立ち上がりは垂直に近い。

埋土　埋土は粘性のある灰～黒褐色土を基本とする。埋土２及び埋土３に，埋土４がブロック状に入る。小林哲夫氏によると，埋土４にはアカホヤ火山灰とシラスに由来する高温石英や小岩片，結晶片が含まれることから，アカホヤ火山灰とシラス物質が泥水のように流入し，その後土壌化したものと想定されるという。なお，埋土から遺物は出土しなかった。

SI19（第 114 図）

検出状況　O － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。以下で述べるように，残存状況や，調査時の所見から複数の土坑が切り合ったものである可能性も捨てきれない。東側２分の１は，Ⅱ層が堆積していた凹地の直下から検出されたため，ほとんど残存していない。また，縄文時代の土坑 SK60 と中世の土壙墓 ST62 を切っている。

形状・規模　平面形は隅丸方形を呈し，現状での規模は，長軸 305cm，短軸 275cmである。検出面からの深さは 22cmである。断面形は，床面はほぼ水平だが，中央付近に土坑状の凹みがある。壁面は緩やかに立ち上がる。ただし，埋土と地山の区別が困難であったため，床面を把握できたのは土層観察用ベルトと西側の一部のみである。

床面の中央の土坑状の凹みは，規模は長軸 156cm，短軸 122cm，深さは床面から 13cmである。

埋土　埋土は２層に分層した。埋土１を基本とし，中央の土坑状の凹みには埋土２が堆積している。床面付近でも硬化面は認められなかった。

柱穴　柱穴が埋土１の直下で１基検出された。規模は長軸 30cm，短軸 26cmで，床面からの深さは 26cmである。埋土は黒褐色で，粘性が強くよくしまる。

遺物　土器が 61 点，鉄釘が 12 点出土した。SK60 を切っていることから，縄文土器も多数出土した。土師器７点と鉄釘２点を図化した。

土師器は柱穴の北で，床面からやや浮いた状態でまとまって検出された。底部の切り離し技法は全て糸切りである。771 ～ 773 は坏で，底径に対して口径が大きく，体部は外傾する。器面には内外面ともにナデが施されるが，外面下端は雑である。774 ～ 777 は小皿である。774 は，他の小皿と比較して器高が高い。

鉄釘は埋土１から出土した。全て和釘で，779 のように木材が付着するものもある。

エ　土壙墓・土坑（第 115・116 図）

土壙墓は２基，土坑は３基検出された。

ST62（第 115 図）

検出状況　O － 25 区で，Ⅵ層をやや掘り下げた段階で検出された。南側 25cm には ST63 が隣接する。また，検出状況では SI19 に切られるが，検出面が異なるため本来の新旧関係は不明である。

人骨は出土していないが，形状及び隣接する ST63 との比較から土壙墓と判断した。

形状・規模　平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し，長軸は N12° W を示す。規模は，長軸 156cm，短軸 98cm であり，検出面からの深さは 32cm である。断面形は，床面はほぼ水平で，壁面はやや外傾する。

埋土　埋土は褐色土をベースとして，アカホヤ火山灰やシラスのブロックを含む。

遺物出土状況　遺物は，土師器３点と洪武通宝１点が出土した。遺物は全て床面から浮いた状態で検出されたが，ほぼ同じレベルである。出土状況から，供献品と判断される。

土師器　土師器は，全て底部切り離し技法が糸切りである。780・781 は坏である。780 は外面にヘラケズリの痕跡を明瞭に残す。781 は，器形が歪む。782 は小皿である。

洪武通宝　783 は洪武通宝である。

ST63（第 115 図）

検出状況　O － 25 区で，Ⅵ層をやや掘り下げた段階で検出された。平面形はやや角のとれた長方形を呈し，長軸は N10° W を示す。規模は，長軸 154cm，短軸 83cm，検出面からの深さ 34cm である。断面形は，床面はほぼ水平で，床面から壁面にかけて稜を持って立ち上がる。

埋土　褐色土をベースとし，アカホヤ火山灰やシラスのブロックを含む。

遺物　ST63 では，床面付近で骨片が検出された。また，鉄製の釘が 19 点出土した。実測図では，遺構の西側だけ出土地点を図示しているが，東側から出土したものは，出土地点を記録していないためである。また，供献品・副葬品と考えられる遺物は出土していない。784 は釜で，埋土中から出土したが，混入物と判断した。

鉄釘の出土状況から ST63 は木棺を伴う土壙墓であったと判断される。

SK15（第 116 図）

検出状況　M － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。複数の遺構との切り合いが認められ，SP80 に切られ，SK４を切る。

形状・規模　平面形は東側がやや突き出していて，五角形状になる。規模は，長軸 114cm，短軸 89cm，検出面からの深さ 24cmである。床面はほぼ水平で，壁面はほぼ垂直である。

埋土　埋土は３層に分層した。いずれも粘性が強い。なお，遺物は含まれなかった。

SK18（第 116 図）

検出状況　N － 25 区，Ⅵ層上面で検出された。

形状・規模　平面形は楕円形を呈する。規模は，長軸 156cm，短軸 118cm，検出面からの深さ 30cmである。断面形は，床面は一部凹んでいるがほぼ水平で，壁面はやや外傾する。

埋土　埋土は２層に分層した。遺物は含まれなかった。

SK39（第 116 図）

検出状況　N － 24･25 区，Ⅵ層上面で検出された。SI40 と隣接していて，北側の一部は SI40 を切っている。

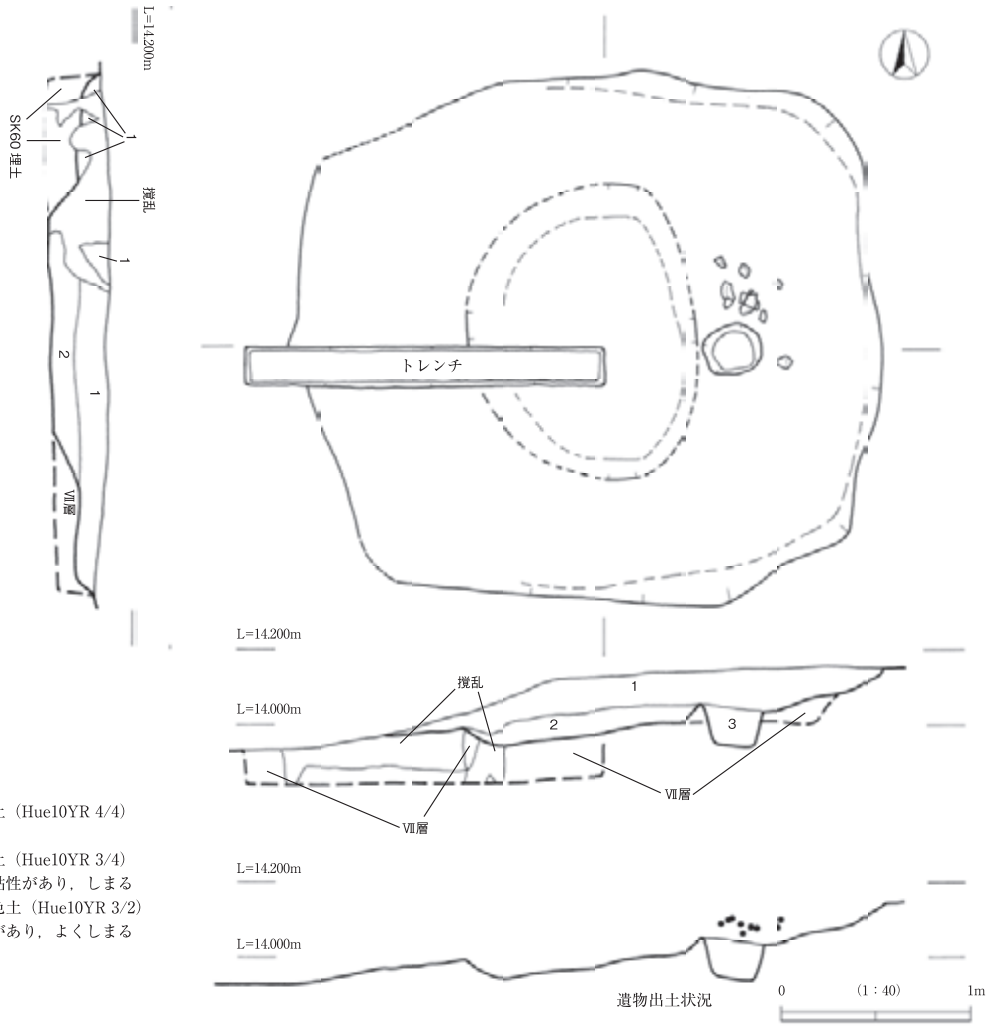
形状・規模　平面形は，北東側が突き出る歪んだ長方形を呈する。規模は長軸 187cm，短軸 137cm，検出面からの深さ 34cmである。断面形は，床面はほぼ水平で，壁面はやや外傾する。

埋土　埋土は暗褐色の砂質土を基本とする。埋土２は SI40 の埋土４と類似し，アカホヤ火山灰とシラスに由来する高温石英や小岩片，結晶片が含まれる。

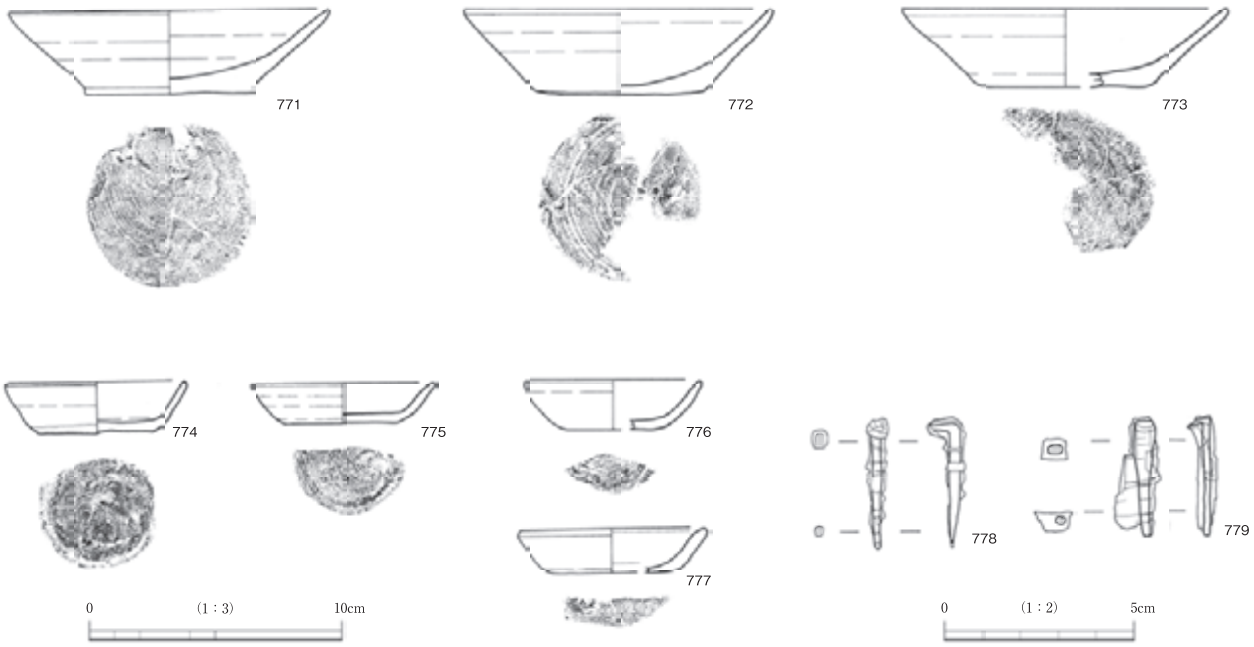
オ　焼土遺構（第 116 図）

SX1・SX3（第 116 図）

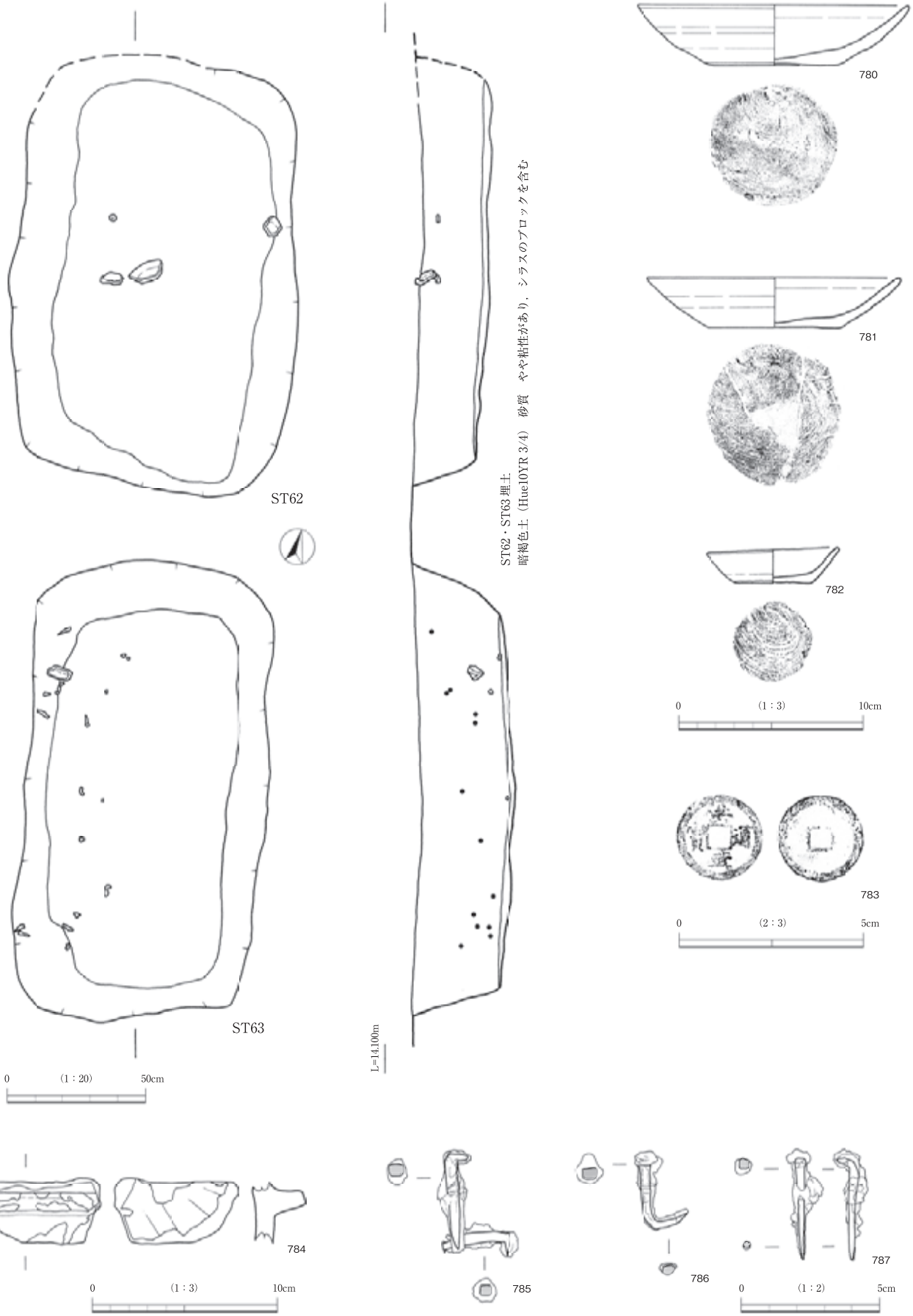
検出状況　N － 23 区，Ⅴ層上面で，被熱により赤褐色に変色し，硬化した状態で検出された。周辺から土師器が出土していることから，中世のものであると判断した。



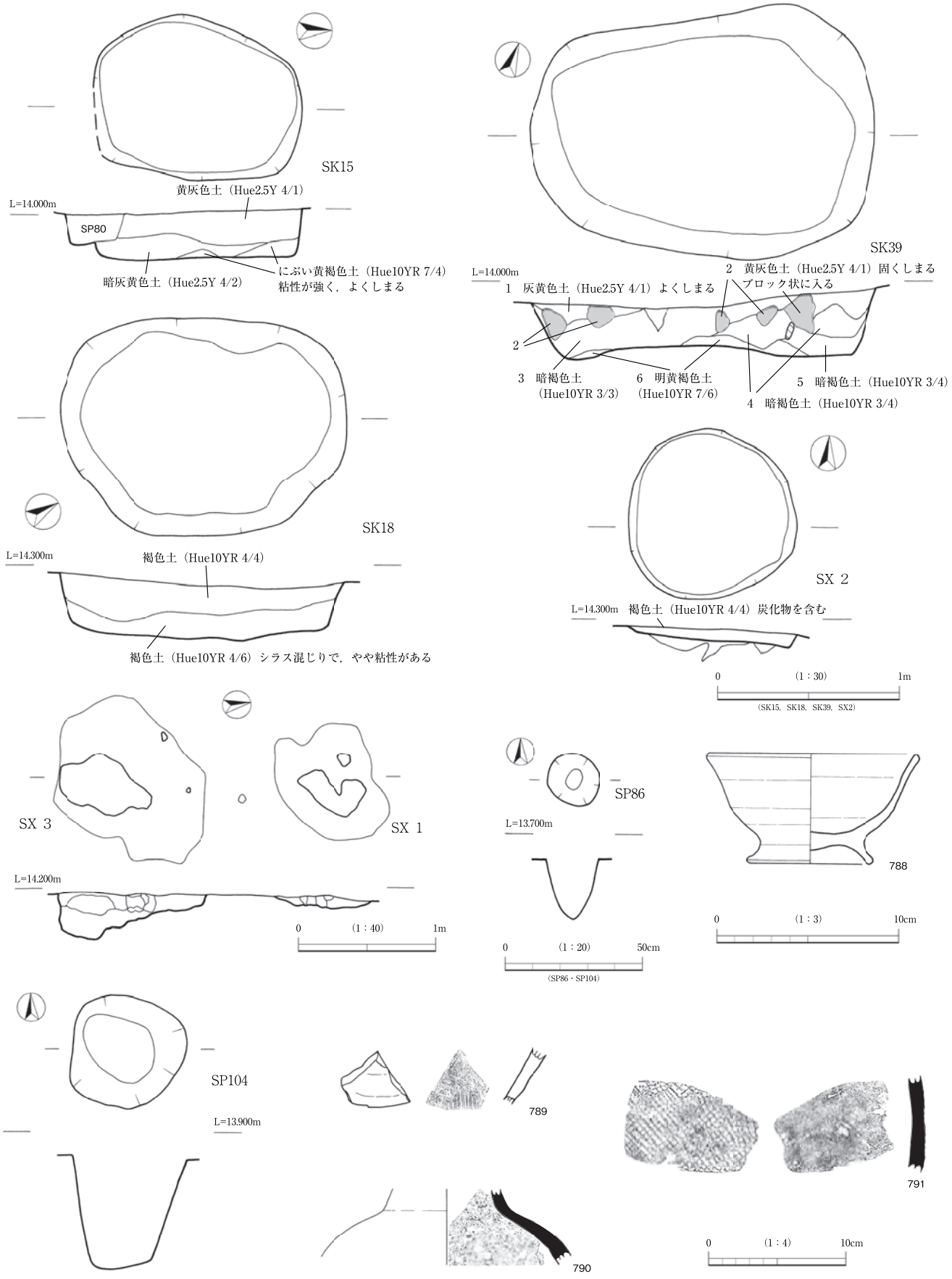
埋土注記
1　褐色土（Hue10YR 4/4）
　砂質
2　褐色土（Hue10YR 3/4）
　やや粘性があり，しまる
3　黒褐色土（Hue10YR 3/2）
　粘性があり，よくしまる



第 114 図　SI19・出土遺物



第 115 図　ST62，ST63・出土遺物



第 116 図　土坑・柱穴ほか

赤色化の範囲　SX1 は長軸 84cm，短軸 70cm，検出面からの深さ９cmで赤色化する。SX ３は長軸 120cm，短軸 106cm，検出面からの深さ 34cm で赤色化が認められた。

カ　炭化物集中箇所（第 116 図）

SX2（第 116 図）

検出状況　Ｎ － 23 区，Ⅴ層上面で検出された。

形状・規模　平面形は円形を呈し，直径約 90cmである。

埋土　埋土は褐色で，炭化物を含む。

遺物　埋土から土師器の小破片が４点出土したが，図化には至らなかった。

キ　柱穴（第 116 図）

中世に該当する柱穴は 60 基検出された。埋土は黒褐色を基本とするが，調査区の東から西に向かってしまりがなくなる。また，Ｐ － 26・27 区の柱穴は，埋土がやや明るい。当該期の遺物が出土した３基を報告する。

SP86（第 116 図）

検出状況　Ｐ － 27 区，Ⅵ層とⅦ層の境界付近で検出された。層堆積が不安定な地点で検出されたため，本来の掘り込み面は不明である。

形状・規模　平面形は円形で，直径 20cm である。検出面からの深さは 23cm である。

遺物　検出面直下で，土師器の埦が検出された。788 は，高台が「ハ」の字状に開き，体部は丸みをもって立ち上がり，口縁部は外反する。体部の下半にはヘラによるケズリの痕跡がみられる。底部の切り離し技法は不明だが，高台内面の中央の粘土が盛り上がる。

SP104（第 116 図）

検出状況　Ｐ － 26 区，Ⅵ層上面で検出された。

形状・規模　平面形は角の取れた方形状となる。規模は一辺が 43cm 程度で，検出面からの深さ 42cm である。断面形は，床面はほぼ平坦で，壁面はやや外傾する。

遺物　789 は瓦質の擂鉢である。

SP99（第 116 図）

検出状況　SP99 はＮ － 24 区，Ⅴ層上面で検出された。遺構の実測図に不備があったため，遺物のみ報告する。

遺物　790 は須恵器の壺の頸部である。791 は須恵器の甕で，外面に格子目のタタキが施されている。

（3）　遺構外出土遺物（第 117 ～ 119 図）

中世の遺構外における遺物は，包含層及び表土のものがあるが，出土量が少ないので一括して報告する。

ア　土師器（第 117 図 792 ～ 808）

792 ～ 807 は土師器である。底部の切り離し技法はいずれも糸切りである。

792 ～ 796 は坏である。器壁が厚めで，底部から体部の立ち上がりは丸みを帯びる。792 は，体部がわずかに内湾しながら口縁部へと至る。793 は口縁部は欠損している。底部内面の外縁に同心円状にナデが施され，底部内面中央が盛り上がる。794 は，体部は直線的で外傾する。口縁部内面に強めのナデが施され，口縁部は先細りする。

795･796 は底部から，体部にかけての破片である。795 は，体部が外傾するが，796 は，体部が直線的である。

797 ～ 801 は，口径が８～ 10cm の小皿である。798 ～ 801 は，底部から体部の立ち上がりは丸みを帯び，器形は 792 ～ 796 の坏に類似する。798・799 は，底部内面の外縁に同心円状に強いナデが施される。体部外面の中程に稜をもって内湾する。800・801 は，器壁が厚く，口唇部は丸みを帯びる。797 は，底部から体部は稜をもって立ち上がり，体部から口縁部に向かって先細りする。

802 は，色調が暗灰黄色を呈する。底部から体部の立ち上がりに稜を伴い，体部は直線的で，792 と比較して坏部が深い。外面にはヘラケズリの痕跡が明瞭に残る。

803 ～ 805 は，口径が約７cm の皿である。底部から体部の立ち上がりは稜を伴い，体部は直線的で外傾する。804・805 は，体部外面の下端に強いナデが施される。805 は近世以降のものの可能性もある。

806 は，やや大型の坏である。体部が外傾する。807 は大型で，鉢か盤になるものと思われる。胎土に角閃石を多く含む。他の土師器と比較して焼成が堅緻である。

808 はこね鉢である。口縁が玉縁状を呈し，体部はやや内湾する。底部が欠損しているため全体の形状は不明だが，東播系の須恵器を模倣したものの可能性がある。

イ　滑石製品（第 117 図 809）

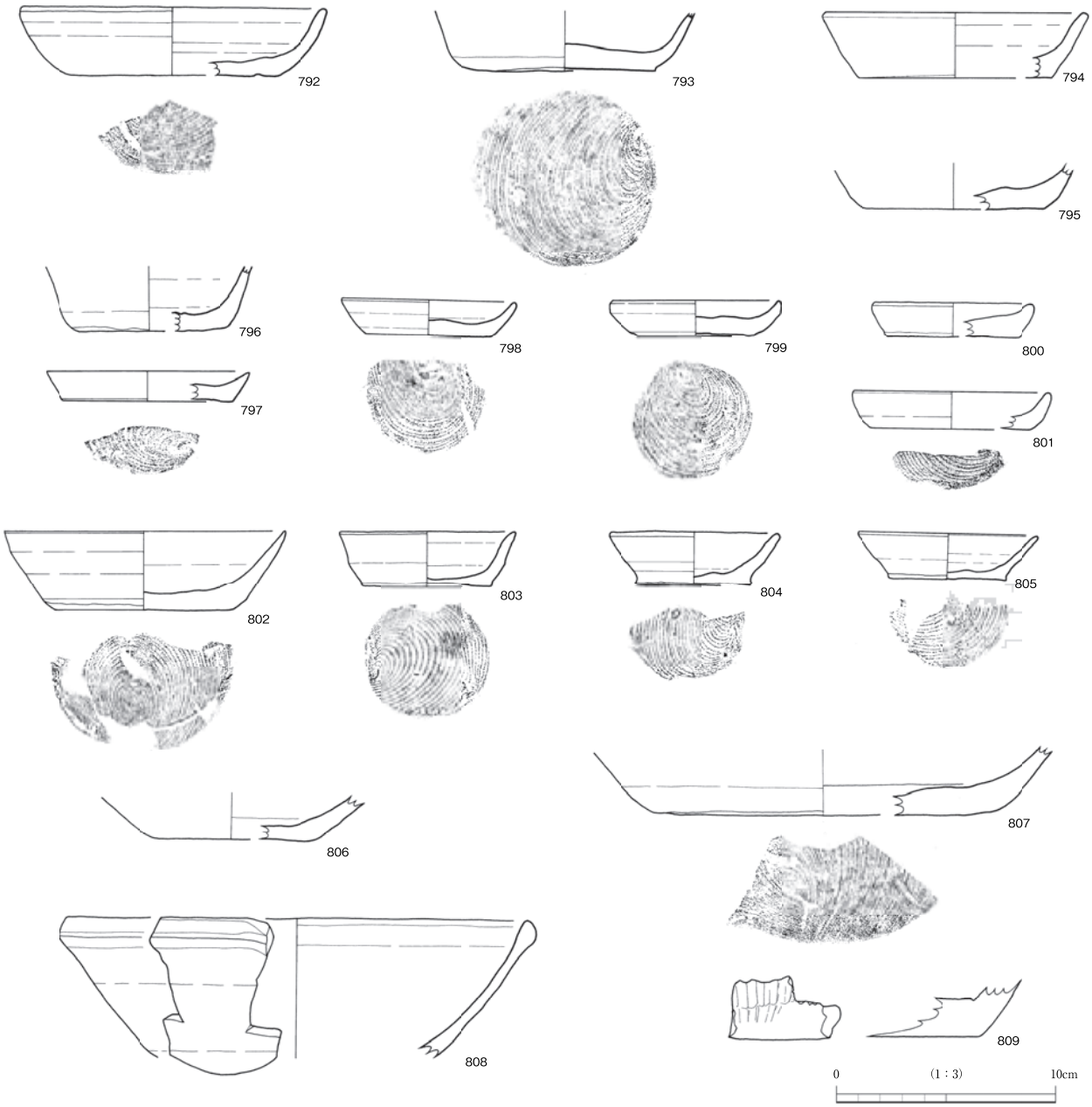
809 は，滑石製石鍋の底部である。外面に製作時の工具の痕跡が観察される。

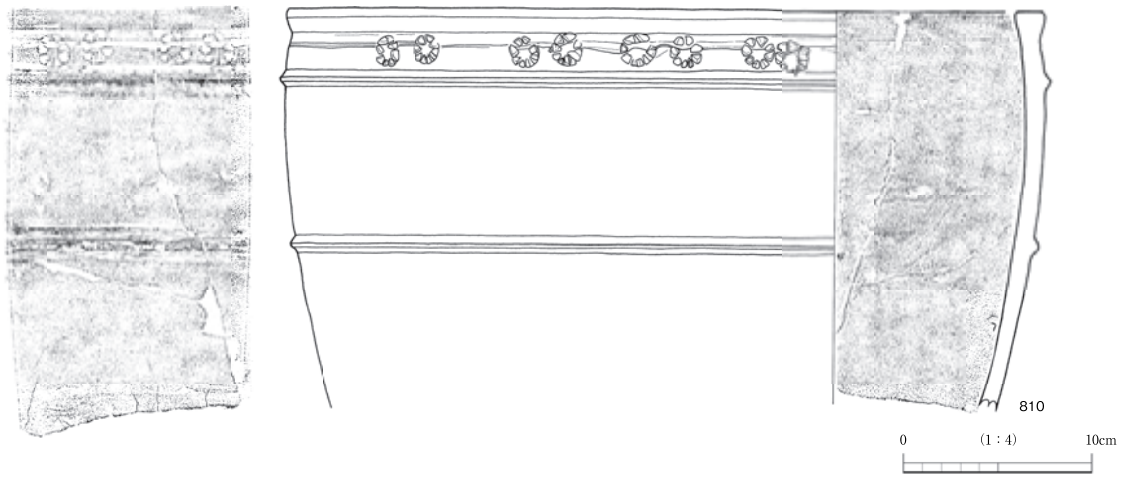
ウ　瓦質土器（第 117 図 810）

810 は口径約 40cm で，火鉢である。口唇部は平坦に成形され，口縁部はやや肥厚し，断面形は台形となる。口縁部外面の口唇から下４cm と胴部中程には突帯が巡る。また，口唇部と口縁部の突帯の間には，２つ１組の花弁状のスタンプが施文される。

エ　白磁（第 118 図 811 ～ 823）

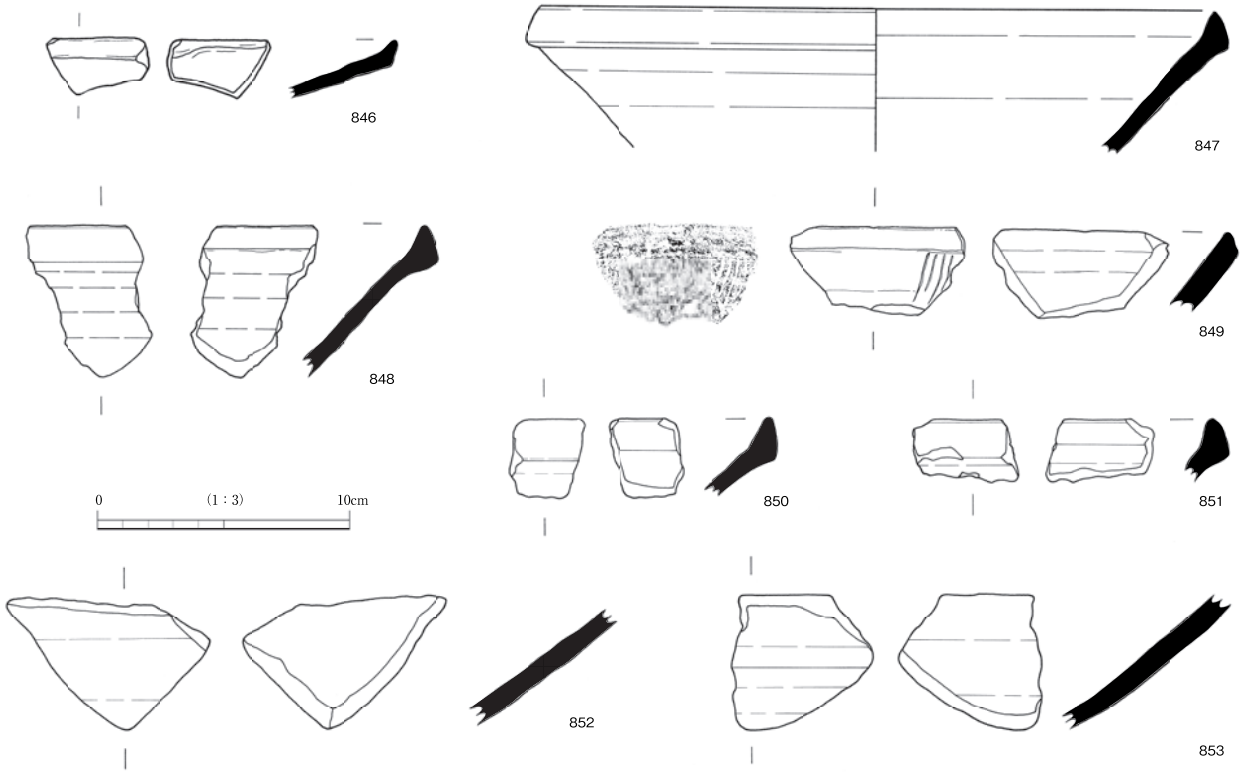
811 ～ 813 は，口縁が玉縁状を呈する白磁の碗で，大宰府編年の白磁碗Ⅳ類である。814 は，白磁碗Ⅳ類の底部である。高台が幅広で，削り出しが浅い。施釉は内面のみに認められ，体部外面と底部には施釉されていない。





第 117 図　遺構外出土遺物①

第 118 図　遺構外出土遺物②



第 119 図　遺構外出土遺物③

見込みには，沈線が巡る。

815 ～ 818 は，法量から皿と判断した。口縁部先端が口禿げとなり，口縁部は外反する。大宰府編年白磁皿Ⅸ類に該当する。815 は，外反が大きい。全面に施釉されるが，底部外面は釉薬を工具でのばしている。

819 ～ 823 は，皿の底部である。819 は，高台を持ち，外面には施釉されない。820 は，上げ底状になる。

821・822 は平底で，底部外面は施釉後に削り取られている。見込みにはヘラ描きで草木文が描かれている。大宰府編年白磁皿Ⅷ類に相当する。

オ　青磁（第 118 図 824 ～ 845）

生産地により分類を行ったが，龍泉窯系に比べて同安窯系のものは極めて少ない。

824 は，同安窯系の青磁である。小片のため傾きは不明である。外面にはやや目の粗い縦の櫛目文が施される。

825・826 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。外面は無文で，内面には方彫りで劃花文が描かれる。

827 ～ 837 は，龍泉窯系青磁の碗で，外面には蓮弁文を有すが，内面は無文のものである。827 は胴部の小破片で，傾きは不明だが，外面に櫛描状の蓮弁文を有する。

828 ～ 831 は幅広の蓮弁文で中央に稜を持ち，体部は直線的で口縁部へと至る。龍泉窯系青磁碗Ⅱ類に該当する。832・833 は蓮弁の中央に稜はみられない。

835 ～ 837 は，外面に線描きの蓮弁文が施される。施文が簡略化していて，縦線と波状文を組み合わせて蓮弁状の文様が構成される。上田秀夫氏による青磁碗Ｂ類に該当する。835 はやや幅広の蓮弁文が施される。836・837 はヘラ先による線描蓮弁文である。836 は細線と剣頭が蓮弁としての単位を意識していない。834 は，外面にやや崩れた雷文が施される。

838 ～ 845 は底部である。838・839・843 は，高台は断面四角形で，削り出しが浅く，底部は肉厚になる。大宰府編年青磁碗Ⅱ類である。見込みには，838・839 には草花文が，843 には幾何学文が刻印される。

840 は，施釉が内部にまで及ぶ。見込みには「寿」の印刻が見られる。841 は，小型で皿の可能性もある。

844・845 は，線描の蓮弁文が施される。844 は見込みに文字状の刻印が施される。845 は，見込みの釉が削り取られる。

カ　須恵器（第 119 図 846 ～ 853）

846 ～ 853 はこね鉢で，産地は全て東播系のものである。846 は，外傾が強いため，口縁部付近で口が開くタイプであると考えられる。847・848 は外面と口縁部内面にナデによる調整が施されている。

849 は外面と口縁部内面にナデによる調整が施されている。外面の一部には櫛状の工具によるヘラ記号がみられる。850 は，外面と口縁部内面にナデによる調整が施されている。851 は，外面と口縁部内面にナデによる調整が施されており，全体的に丁寧に作られている。852・853 は胴部である。内面は使用により摩滅する。

5　近世ほかの調査

（1）　調査の概要（第 120 図）

近世の遺構は，K・L － 23・24 区で土壙墓 15 基と，溝状遺構 1 条が検出された。遺構は全て，表土直下のシラス上面（Ⅶ層）で検出された。K・L － 23・24 区周辺は，調査直前まで畑地として利用されていた。また，近隣の住民の方によると，平成以降に大規模な造成が行われたということである。したがって，本来の遺構掘り込み面は，遺構検出面よりも数十 cm から数 m 上である。

遺構の調査は，他の時代の調査と同様に，平面プランの確定後に検出状況の記録写真を撮影した。ただし，土壙墓の数基と，溝状遺構の一部については，調査の当初，撹乱と判断し平面プランを確定せずに掘り下げを行ったため，検出状況の記録写真を撮影していない。

土壙墓からは，人骨，銭，釘が出土した。人骨と銭については，検出状況の写真撮影と実測を行った後に取り上げを行った。釘については，埋土から多数出土したため，一定の本数を検出した段階で検出状況の写真を撮影し，その後は釘の取り上げと掘り下げを併行して行った。なお，釘の取り上げげはトータルステーションを用いて出土地点を記録しながら行ったが，木棺の構造を想定させるような出土状況ではなかったため，図示していない。なお，出土人骨の鑑定は鹿児島女子短期大学竹中正巳氏に依頼した。

溝状遺構（SD36）については，土層観察用のベルトを 2 か所設定し，掘り下げを行った。

土壙墓群と SD36 は，南西から北東へ向かって弧を描くように配置されていて，SD36 は土壙墓群を区画するための何らかの施設であったと想定される。また，土壙墓群及び SD36 は，北に向かって調査区外へ拡がる可能性が高い。

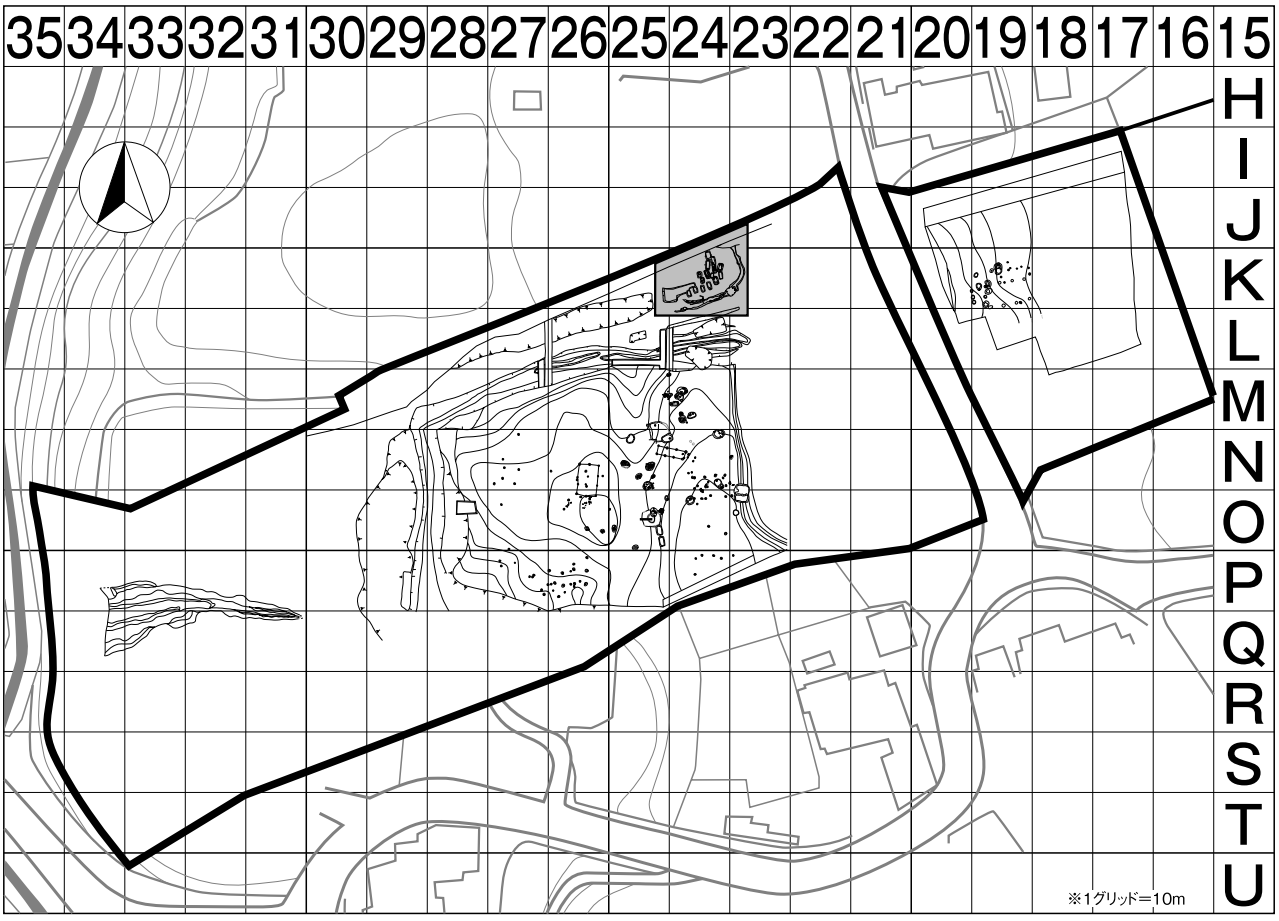
（2）　遺構

ア　溝状遺構（第 121 図）

SD36（第 121 図）

検出状況・形状　SD36 は，K・L － 23・24 区，Ⅶ層上面で検出された。南西から北西に向かって弧状に形成されている。遺構の南西端は自然に消滅し，北端は調査区境界付近で撹乱を受ける。

埋土　大部分は削平により消滅していて，検出面からの深さは最大でも 30cm 程度である。埋土は暗褐色でⅡ層に類似する。なお埋土中から遺物は出土しなかった。



第 120 図　近世の調査範囲（アミの範囲）

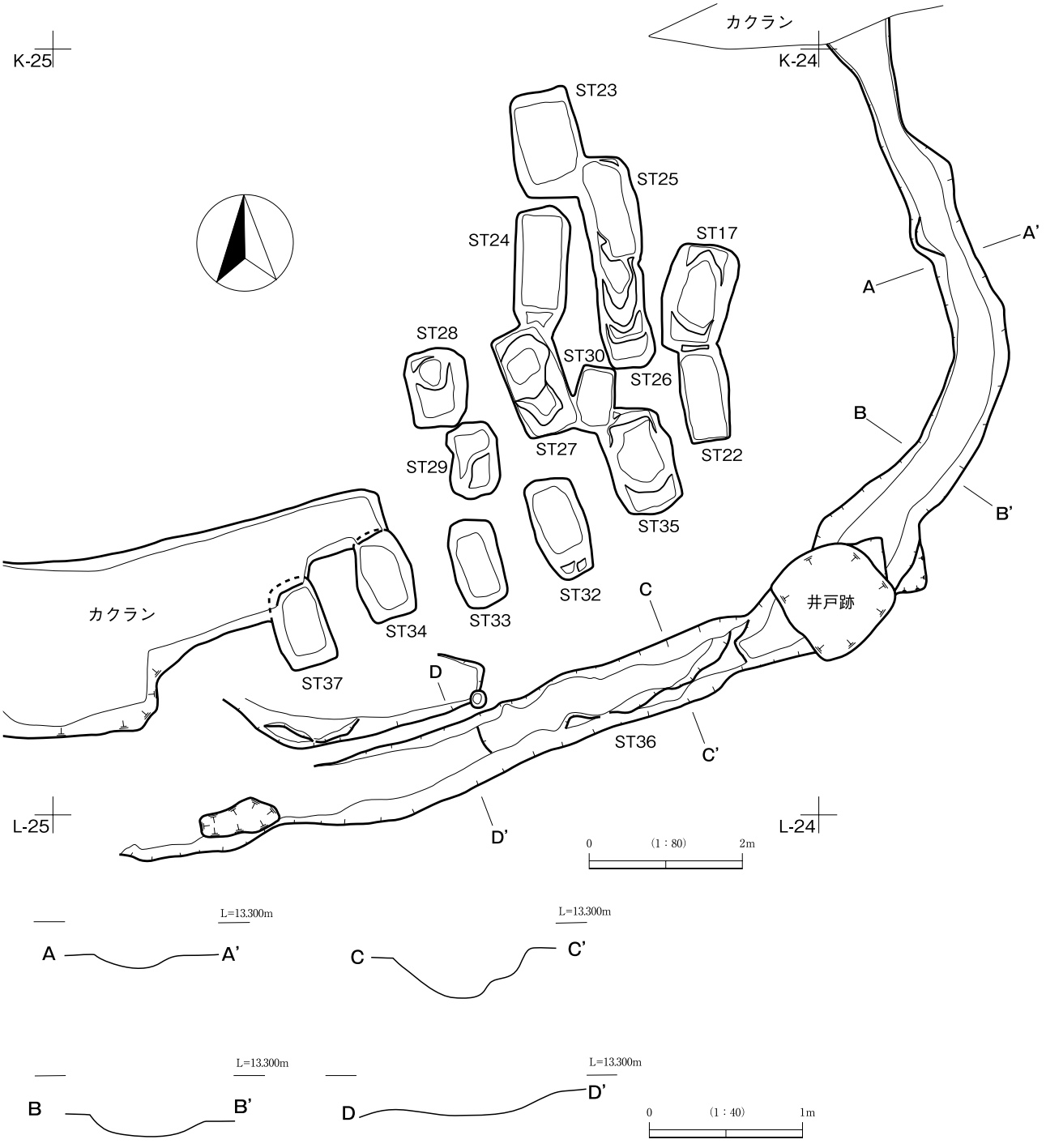
イ　土壙墓（第 122 ～ 130 図）

土壙墓は 15 基検出された。その内９基から埋葬人骨や骨片，歯が検出された。人骨が検出された９基を中心に紹介する。

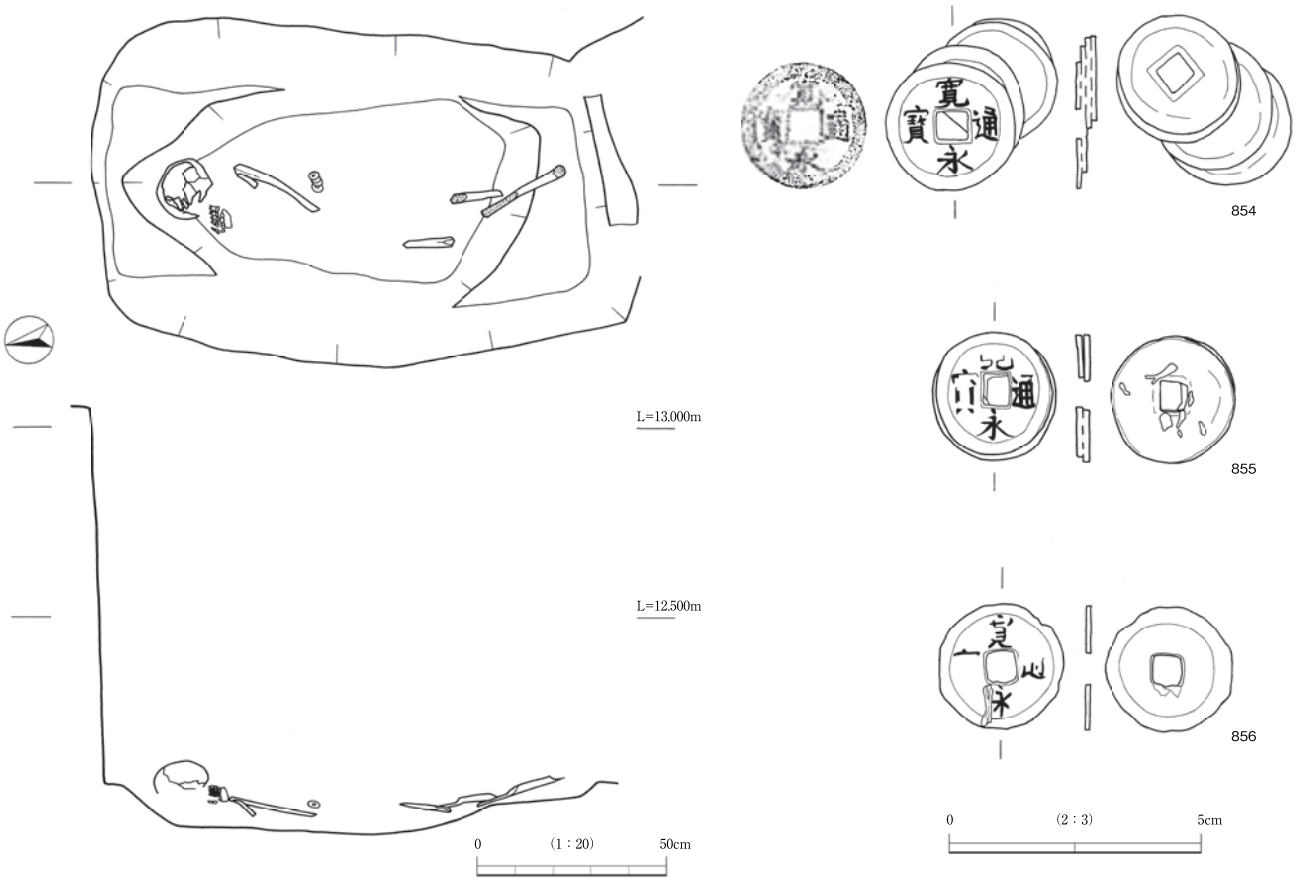
平面形態は全て長方形であり，長軸方向は全て北方向である。検出面からの深さが約 80 ～ 120cm 程度の深いもの（ST17，22 ～ 27，35）と，30 ～ 60cm 程度の浅いもの（ST28 ～ 30，32 ～ 34，37）の２パターンがみられる。

墓壙は，深いものと浅いものの一部はⅧ層まで掘り込んでいる。断面形は，床面がやや凹むものが多い。それは人体の腐食によって汚染された地山を，調査時に掘り下げてしまったためであると考えられる。したがって，本来の床面は平坦であったと考えられる。

墓壙埋土からは合計 159 点の釘が出土した。釘は全て鉄製の和釘であり，木材が付着しているものがみられる。さらに，墓壙の平面形態が全て長方形であることを考慮



第 121 図　土壙墓群・SD36



第 122 図　ST17・出土遺物

すると木棺であった可能性が高い。

土壙墓からは，六道銭と考えられる銭が出土している。銭はほとんどが銅銭で，鉄銭はわずかに含まれる。銅銭については，判読できたものは全て「寛永通寶」である。「寛」と「寶」の書体によりいわゆる「古寛永」と「新寛永」に分類し，「新寛永」はさらに背面に「文」の文字があるものを「文銭」とした。

人骨が出土しなかった土壙墓で，ST29，ST32，ST33，ST37 からも寛永通寶が出土した。土壙墓群から出土した釘と，ST29，ST32，ST33，ST37 から出土した寛永通寶は，第 130 図に一括で掲載した。

ST17（第 122 図）

検出状況・形状・規模　K － 24 区，Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸 140cm ×短軸 88cm の長方形を呈する。長軸方向は N10° E である。床面の中央付近はやや凹むが，上述のような理由で本来は平坦であったと考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは 112cm である。なお，墓壙の南側は隣接する ST22 に切られている。

遺物　墓壙からは人骨 1 体分，寛永通寶 7 枚，釘 17 点が出土した。人骨は成人で，性別は男性である。埋葬形態は頭位を北にした横臥屈葬であり，顔は西に向けられていた。寛永通寶は墓壙の中央付近の，埋葬人骨の胸付近から出土した。記銘を確認できたものは全て「新寛永」である。

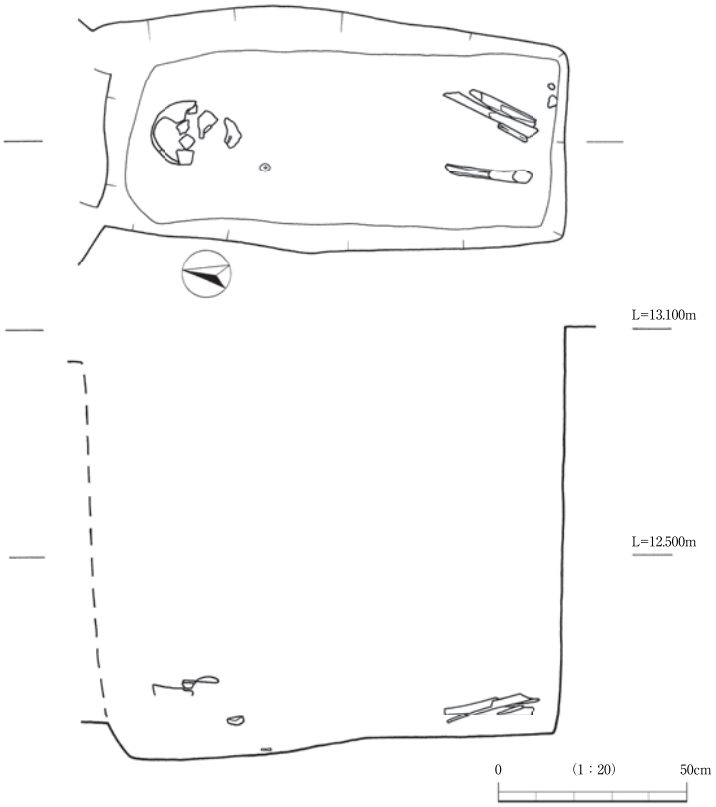
ST22（第 123 図）

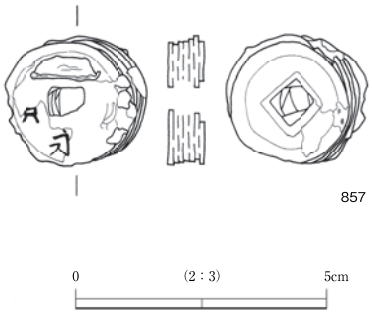
検出状況・形状・規模　K － 24 区，Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸 135cm ×短軸 65cm の長方形を呈する。長軸方向は N10° W である。断面形態は，床面の北側がやや凹み，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは 109cm である。

遺物　墓壙からは人骨 1 体分，寛永通寶 7 枚，釘 21 点が出土した。人骨は成人で，性別は女性である。埋葬形態は頭位を北にした横臥屈葬である。寛永通寶は，7 枚が密着した状態で胸付近から出土した。857 の一番上のものは「新寛永」である。

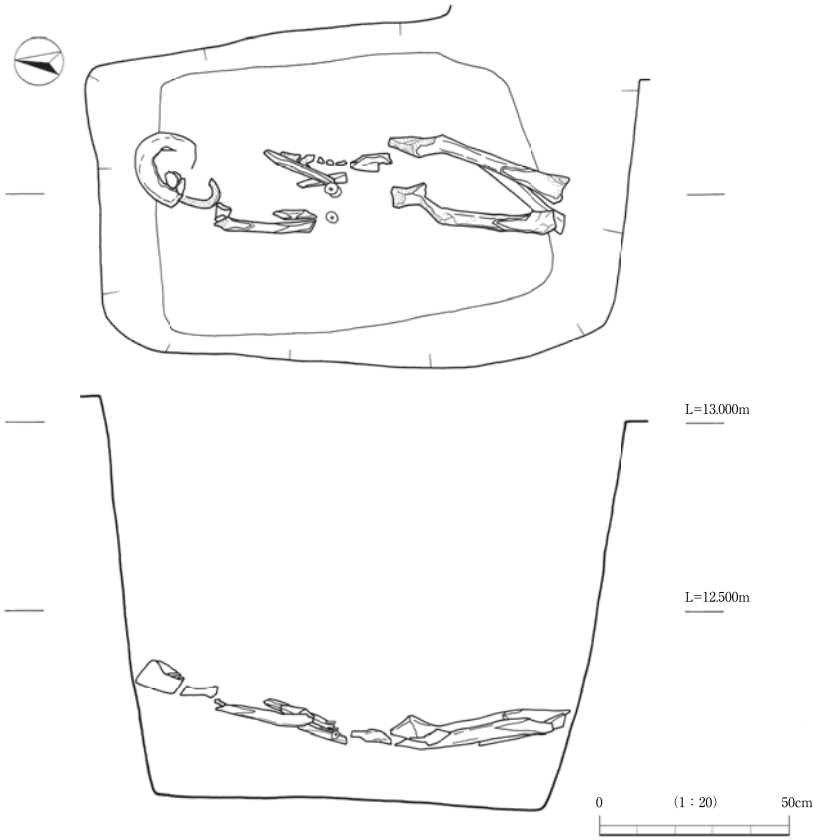
ST23（第 124 図）

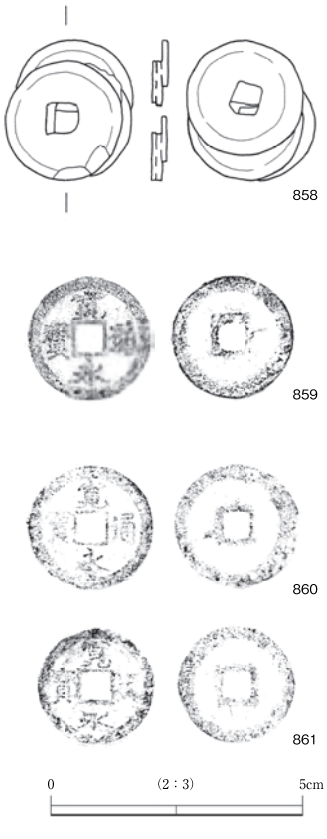
検出状況・形状・規模　K － 24 区，Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸 140cm ×短軸 88cm の長方形を呈する。長軸方向は N 8° W である。断面形態は，床面はほぼ平坦であり，壁面はやや開き気味に立ち上がる。検出面からの深さは 109cm である。人骨の検出状況か



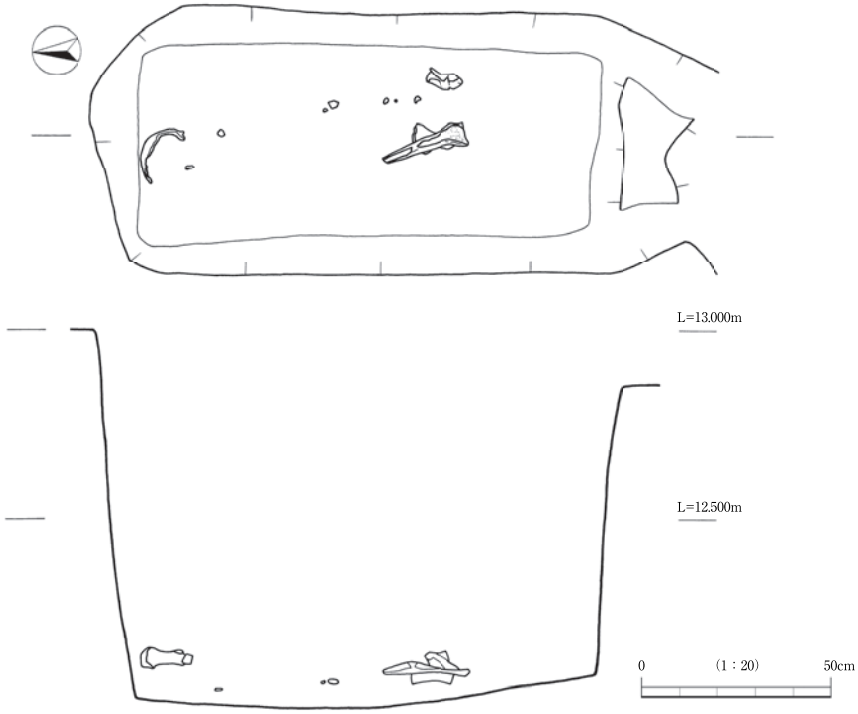


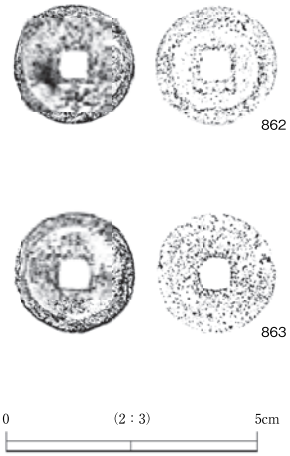
第 123 図　ST22・出土遺物



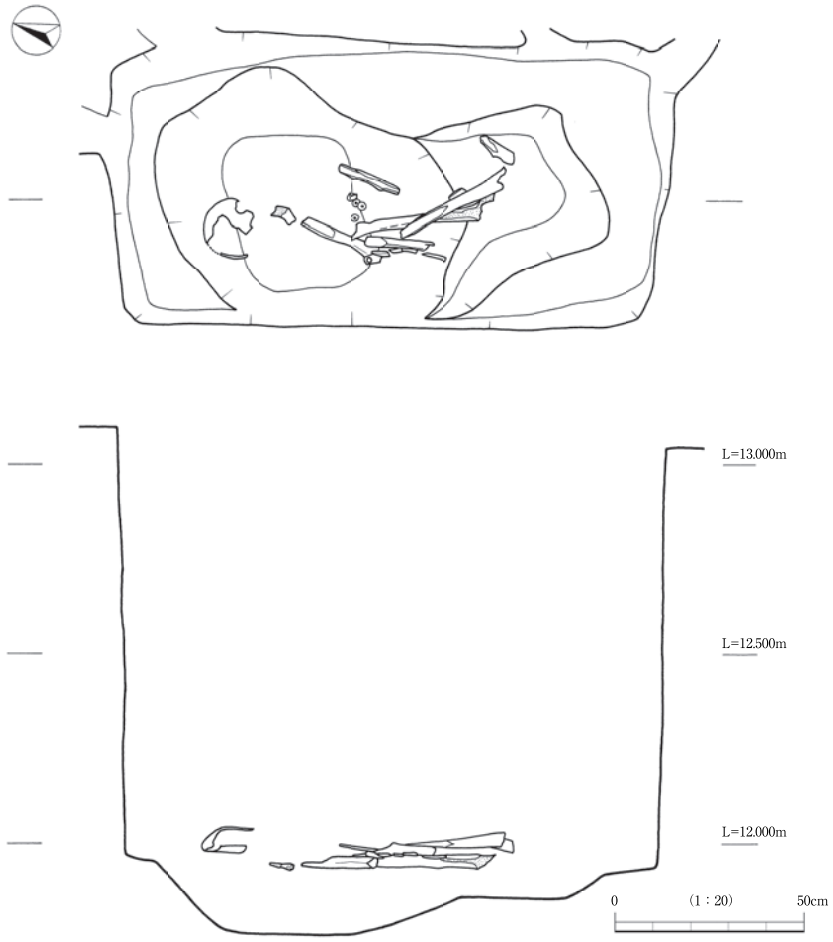


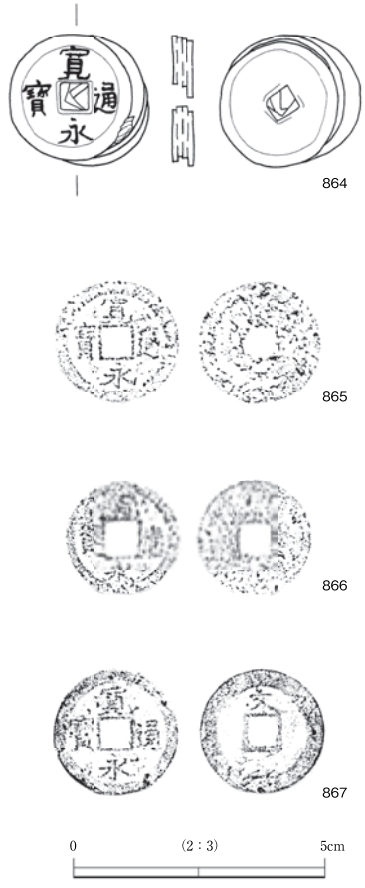
第 124 図　ST23・出土遺物



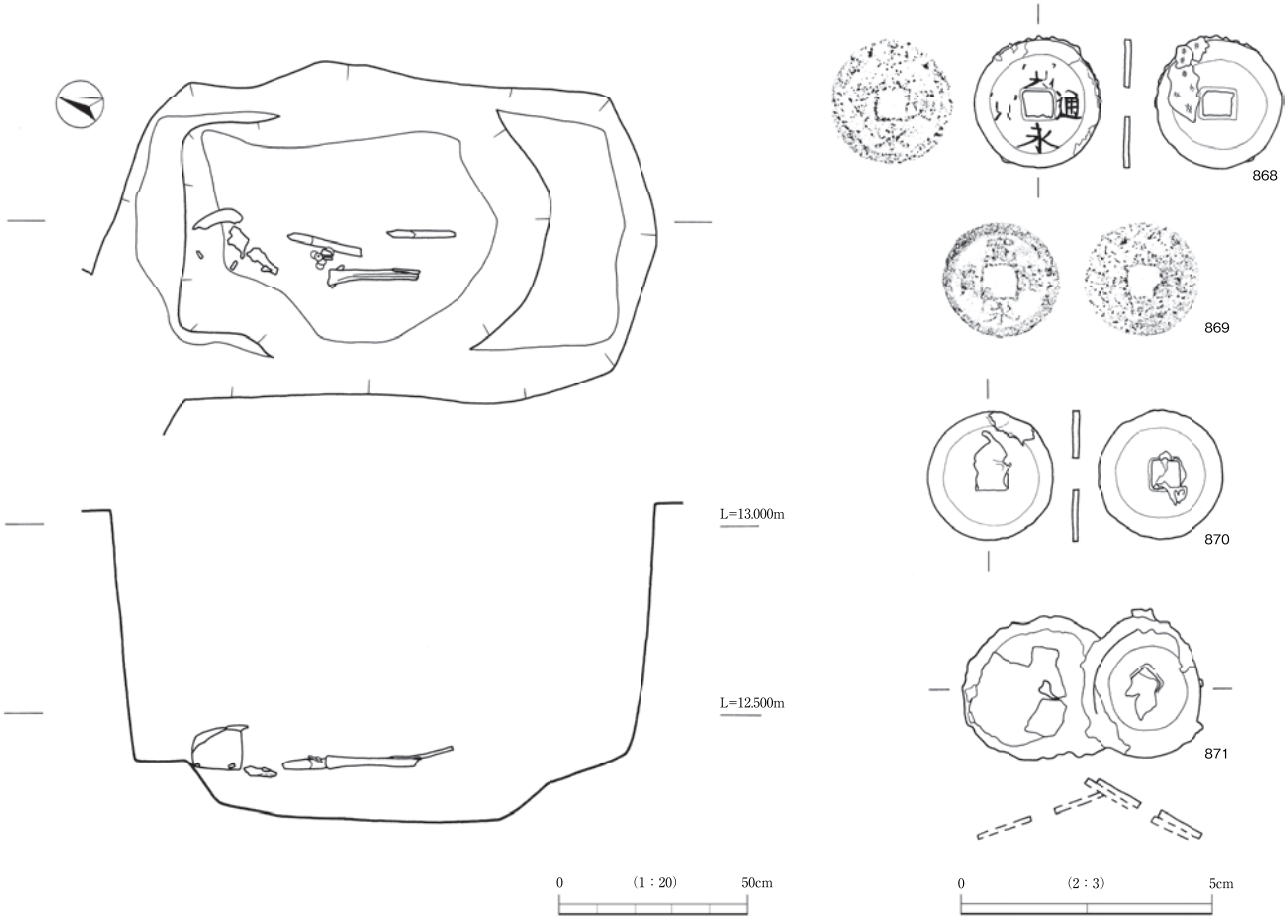


第 125 図　ST24・出土遺物





第 126 図　ST27・出土遺物



第 127 図　ST35・出土遺物

ら，本来の床面は，検出面から 80 ～ 85cm 程度の深さで，ほぼ水平な面であったと想定される。

遺物　墓壙からは人骨１体分，寛永通寶６枚，釘 14 点が出土した。人骨は老年の女性で，埋葬形態は頭位を北にした横臥屈葬である。寛永通寶は墓壙の中央で，埋葬人骨の腹部付近から出土した。確認できたものは全て「新寛永」である。

ST24（第 125 図）

検出状況・形状・規模　K － 24 区，Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸 150cm ×短軸 66cm の長方形を呈する。長軸方向はＮ３° Ｅである。断面形態は，床面がほぼ平坦であり，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは 101cm である。

遺物　墓壙からは人骨１体分，寛永通寶２枚，釘 10 点が出土した。人骨は男性で，頭位を北に埋葬されている。年齢及び埋葬形態は不明である。寛永通寶は墓壙から出土したが，出土地点は不明である。862 は「古寛永」で，863 は「新寛永」である。

ST27（第 126 図）

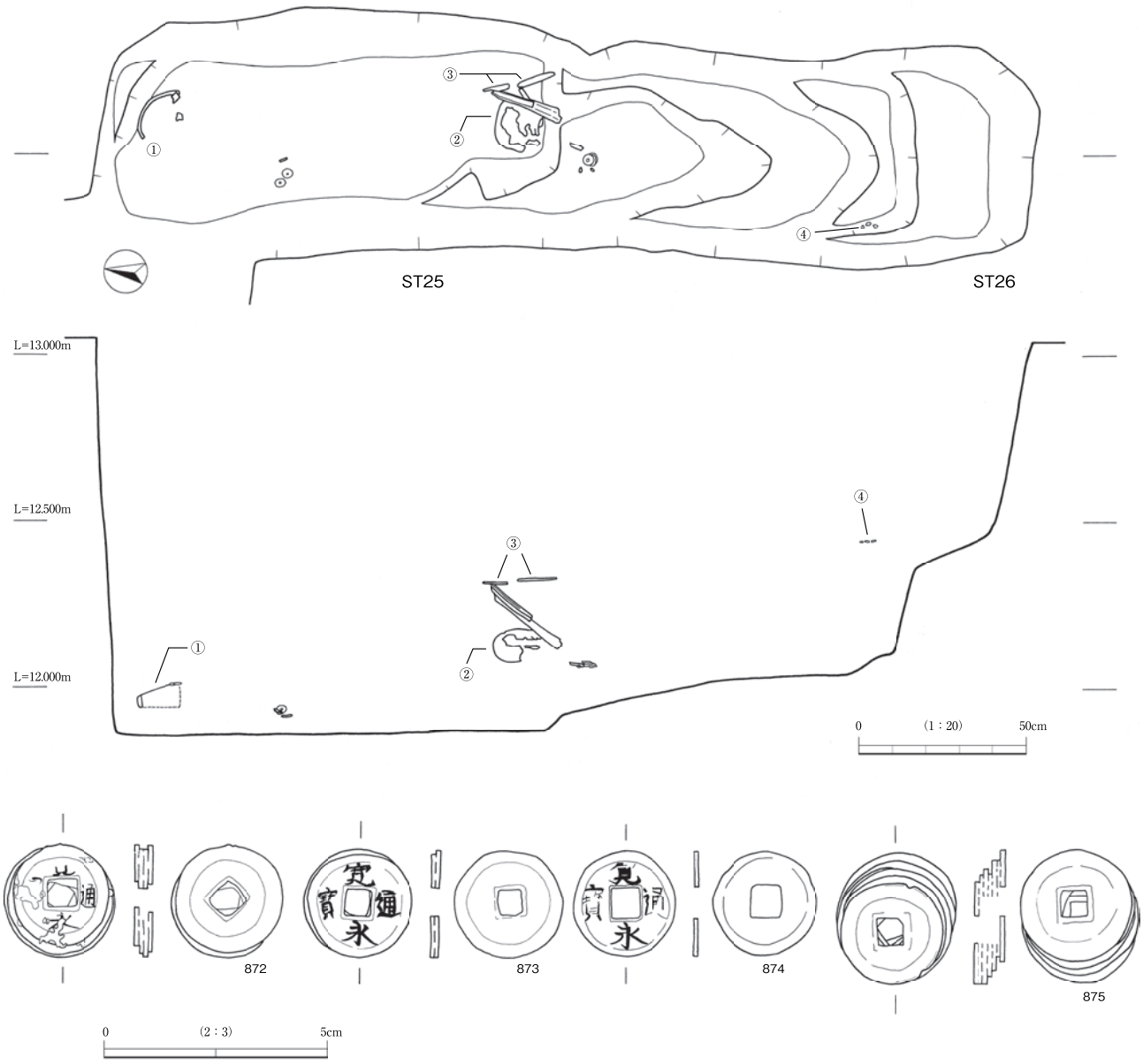
検出状況・形状・規模　K － 24 区，Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸 146cm ×短軸 75cm の長方形を呈する。長軸方向は N25° W である。断面形態は，中央が２段に凹み，壁面の立ち上がりはほぼ垂直である。検出面からの深さは 128cm である。

遺物　墓壙からは人骨１体分，寛永通寶７枚，釘９点が出土した。人骨は熟年の男性と考えられる。埋葬形態は頭位を北にした横臥屈葬で，顔は西に向けられていた。検出状況では右肘の上に右膝が重なり，さらに右膝の上に左膝が重なっていた。寛永通寶は墓壙の中央付近から出土した。確認できたものは全て「新寛永」であり，867 は「文銭」である。

ST30（第 129 図）

検出状況・形状・規模　K － 24 区，Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長方形を呈し，規模は長軸 75cm，短軸 53cm で，検出面からの深さ 60cm である。他の土壙墓と比較して小型である。

遺物　歯が１点と寛永通寶７枚が墓壙の中央付近から出土した。歯は４歳程度の幼児のものである。寛永通寶は，７枚が付着した状態で出土した。確認出来たものは全て「新寛永」である。また，埋土から鉄釘が 10 点出土した。



第 128 図　ST25，ST26・出土遺物

ST35（第 127 図）

検出状況・形状・規模　K － 24 区，Ⅶ層上面で検出された。平面形態は長軸 145cm ×短軸 75cm で，やや不整形な長方形を呈する。長軸方向は N19° W である。断面形態は，中央がやや凹み，壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは 78cm である。

遺物　墓壙からは人骨 1 体分，寛永通寶 6 枚が出土した。人骨は成人の男性である。埋葬形態は頭位を北にした横臥屈葬であり，顔は西に向けられていた。寛永通寶は墓壙の中央付近からやや北よりの地点から出土した。871 の内 1 枚は鉄銭で，それ以外はすべて「新寛永」である。868 には布と考えられる繊維が付着している。なお，ST35 から釘は出土しなかった。

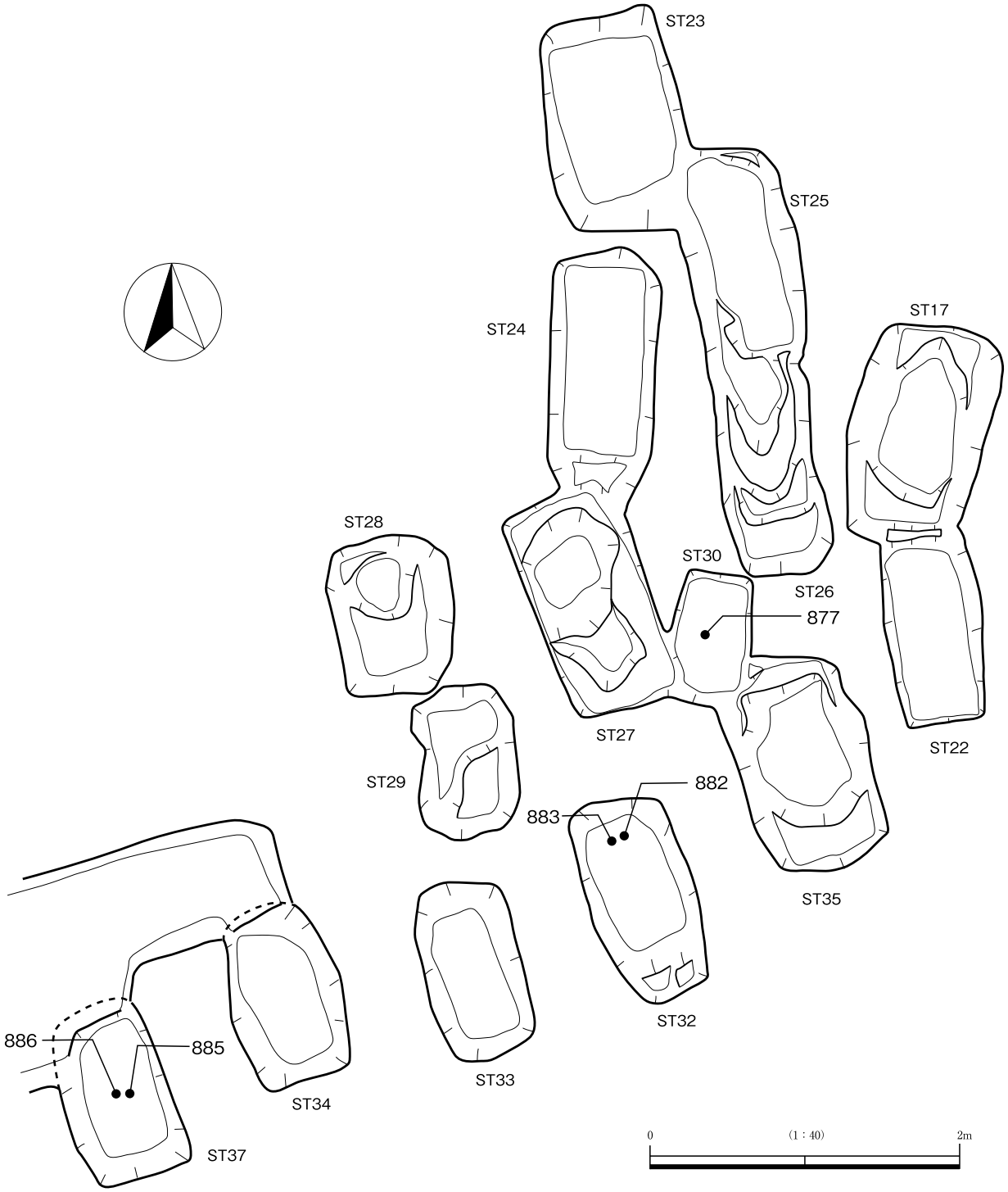
ST25・ST26（第 128 図）

検出状況・形状・規模　K － 24 区，Ⅶ層上面で検出された。ST25 の南側の墓壙を ST26 が切っていて，二つの墓壙が連結し一つの墓壙のようになっている。二つの墓壙をあわせた長軸は 280cm である。

それぞれの想定される規模は，ST25 が長軸約 140cm ×短軸 74cm で，長軸方向は N 9° W である。ST26 は長軸 160cm ×短軸 65cm で，長軸方向は N 8° W である。

断面形態は，ST25 の床面が最も深く，ST26 の南側が段掘り状になる。検出面からの深さは，ST25 は 118cm，ST26 は 100cm である。

ST25 出土遺物　ST25 からは，人骨が 1 体分（第 128 図①），寛永通寶が 7 枚出土した。人骨の残存状況は悪いが，成人の女性と判断される。頭位を北に向けて埋葬



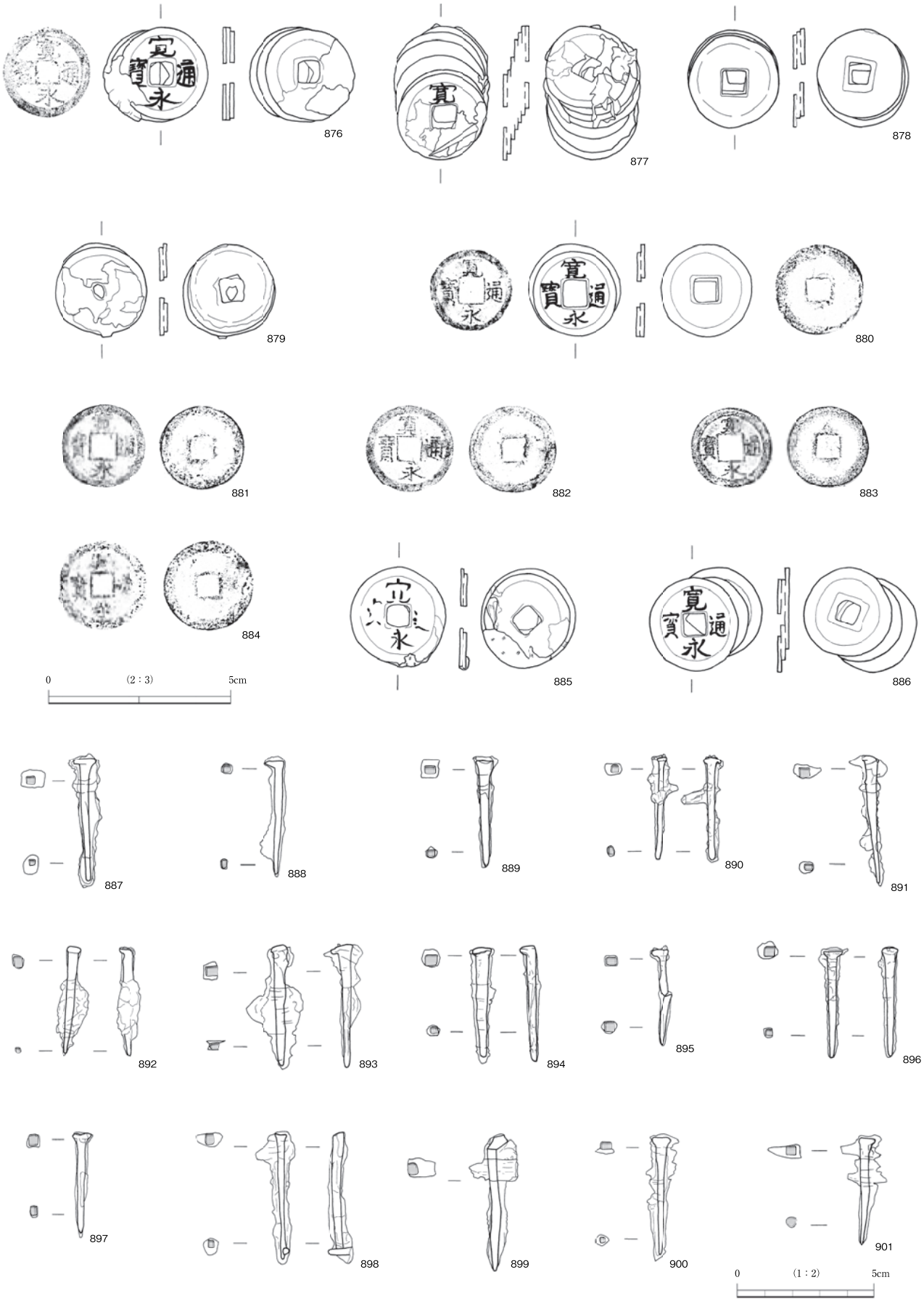
第 129 図　土坑墓郡・遺物出土地点

されている。寛永通寶は墓壙の中央からやや北東の地点で出土した。確認できたものは全て「新寛永」である。

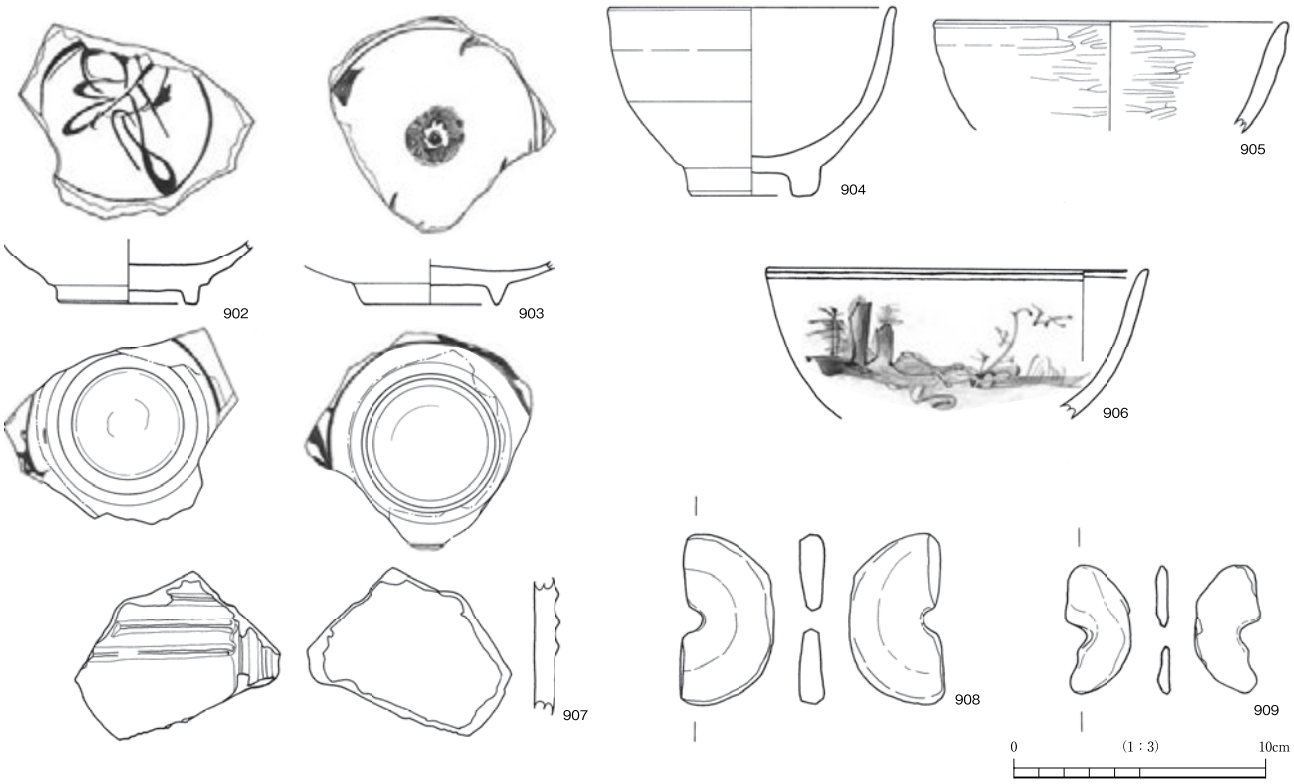
ST26 出土遺物　ST26 からは，２体分以上の人骨が出土している。人骨②は，熟年の男性で，頭位を北に，顔を西に向けた状態で埋葬されていた。これに伴う銅銭は７枚出土している。７枚は全て付着している。また，最上面の銅銭の文字は摩滅しており，銭種を特定することはできなかった。出土状況から判断して，この人骨②がST26 に埋葬されたものである。

不明遺物　人骨③と人骨④は，人骨②とは別人のものである可能性が高いが，詳細は不明である。ただし，人骨④の付近からビニールが出土して，さらに，人骨③及び④の出土したレベルと，ST26 墓壙の南側の段掘り部分の立ち上がりがほぼ一致する。以上のことから，ST26 については，改葬が行われた可能性が高い。

なお，二つの墓壙からは，合計 68 点の釘が出土した。



第 130 図　土壙墓出土遺物



第 131 図　遺構外出土遺物①

(3)　遺物（第 131・132 図）

遺構外から出土した近世及び近代，時代が不明の遺物を一括で紹介する。

902・903 は，漳州窯の碗または皿である。ともに施釉は一部高台外面にまで及ぶ。

904・906 は肥前系の陶器類である。904 は碗である。畳付きを除く全面に施釉されている陶器である。色調は深緑色で，畳付きには砂目が残る。906 は，外面に山水文を描く鉢である。905 は土師質の土器で，器形は天目碗に似る。

908・909 は，土師器の底部を加工した土製の紡錘車状のものである。いずれも半欠品であり，風化が著しい。

910 ～ 914 は，T － 34 区の近代墓群周辺で出土した遺物である。910・911 は，仏具である。土師質で無釉，底部の切り離しは糸切りで，腰部から内湾し，体部から大きく外反して口縁部へ至る。912 は，糸切り底でやや開きながら口縁部へと至るものである。土師質で無釉である。913 は，肥前系の碗である。２次焼成を受けたために，色調は青白色に近い色に変色している。914 は，灰白色を呈し，体部は緩やかに内湾して口縁部で外反する白天目茶碗である。

916 は，中国あるいは朝鮮半島産の徳利と思われる。平坦な底部からやや内湾しながら立ち上がるもので，色調は暗褐色である。

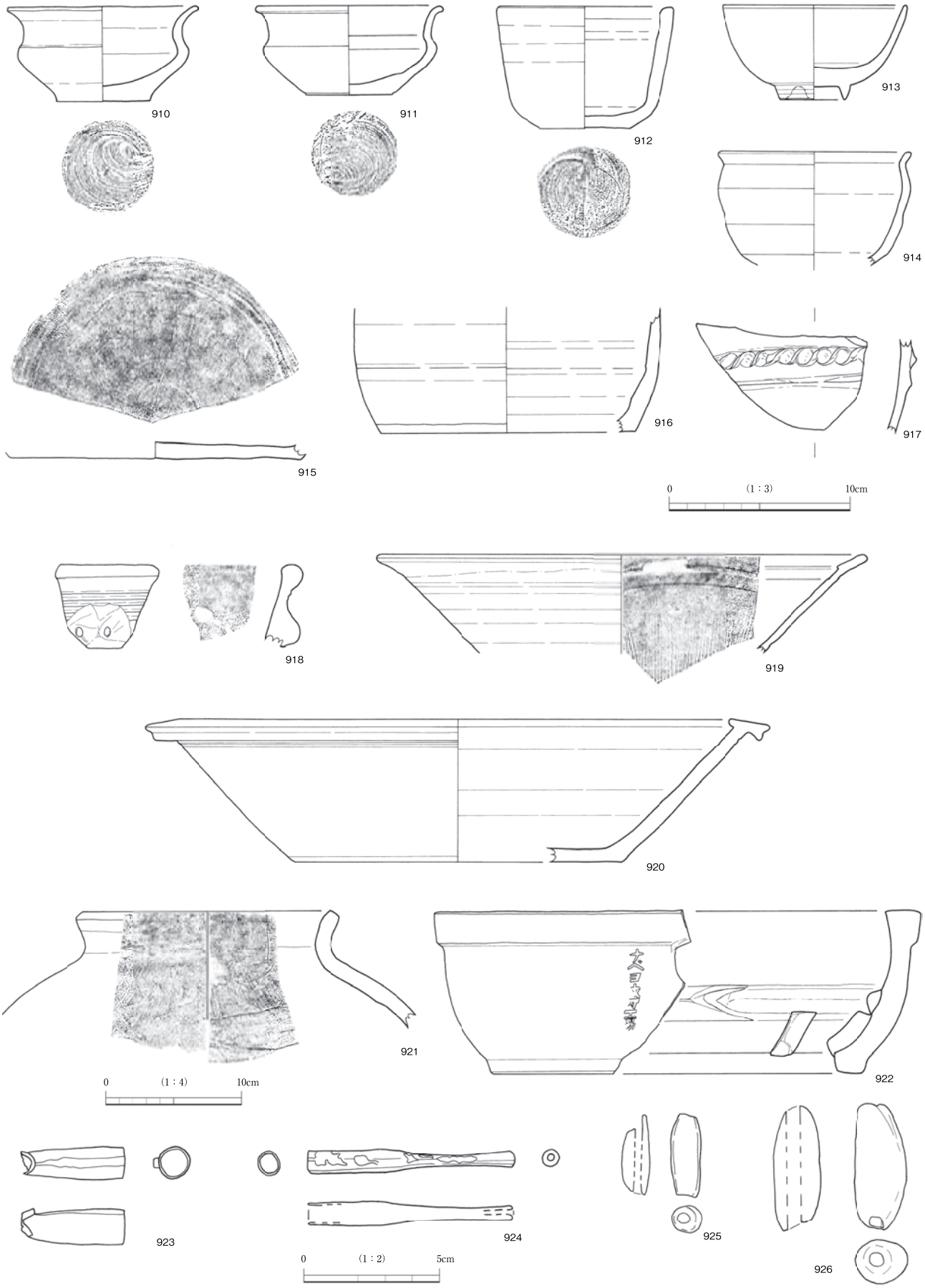
917 は，断面三角形の細い突帯を貼り付け，その１cm ほど上位に棒状工具による刻目突帯を施す苗代川系の甕の胴部である。915 は明茶褐色を呈する陶器の円盤状の底部であり，丁寧なナデ調整が施されている。

919 は肥前系の陶器の擂鉢である。胴部から口縁部は大きく開き，口縁内部が肥厚するものである。

922 は，レンガあるいは瓦質の材質で，内面の煤の付着が著しいことから，竈または五徳状に用いられたと考えられる。近代以降のもので底部径 27cm，口縁径 37cm，高さ 12cm である。内面の下位に約４cmの縦位の突帯が現存で２か所観察できる。間隔からするとこの突帯が４か所あったものと思われる。また，この縦位の突帯上部には，横位の突帯も施されている。外面には「ナベヨ□□工場」のスタンプがある。

煙管　923・924 は，煙管である。923 の雁首は材質に銅が含まれるために暗緑色に変色している。

土製品　925・926 は，筒状の土製品に穴を貫通させたものである。これら２点の土製品については，古代から近世までの広い時期の可能性がある。



第 132 図　遺構外出土遺物②

第７表　縄文時代の遺物観察表（1）

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
10	1	SK4		壺形土器	完形	外　ナデ→沈線文，擬似縄文，刺突文 内　未調整	黄褐色 Hue2.5Y5/4	黄褐色 Hue2.5Y5/4	○	○	○	白色鉱物	良	口径 4.7cm，器高 9.3cm 胴部 10.6cm
11	2	SK4	埋土２一括	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目状の沈線文，刺突文 内　ナデ	黒褐色 Hue2.5Y3/2	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○		○	黒雲母 白色鉱物	良	市来式土器系
	3	SK4	埋土２一括	深鉢	底部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	橙色 Hue7.5YR6/6	○	○	○	白色鉱物	良	平底
13	9	SK6	一括	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文，刺突文 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/8	明赤褐色 Hue5YR5/8	○	○	○		良	市来式土器系
	10	SK6	埋土１一括	深鉢？	口縁部	外　ナデ→刻目状の刺突文，横位の沈線文 内　ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○		○		良	
	11	SK6	埋土１一括	不明	口縁部	外　ナデ→刻目状の沈線文 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○			白色鉱物	良	
	12	SK6	埋土２一括	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	黒褐色 Hue10YR3/1	褐色 Hue7.5YR4/6	○	○	○		良	
16	16	SK8	一括	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目状の沈線文，横位の沈線文 内　ナデ	褐色 Hue7.5YR4/4	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4		○	○		良	
	17	SK8	一括	深鉢	口縁部	外　ナデ→刺突文？ 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/8	赤褐色 Hue5YR4/8		○	○		良	
	18	SK8	40	鉢？	口縁部	外　ナデ・ミガキ→磨消縄文 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/4	橙色 Hue7.5YR6/6	○	○	○	白色鉱物	良	
	19	SK8	一括	台付皿形土器	口縁部	外　ナデ→沈線文，刺突文？ 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	黒褐色 Hue5YR2/1	○	○	○		良	市来式土器系
	20	SK8	26，一括	不明	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○	茶色鉱物	良	
	21	SK8	22, 24, 25, 29 36, 37, 38	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/8	明黄褐色 Hue10YR6/6	○	○	○		良	摩滅が著しい
	22	SK8	25	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR4/3	にぶい黄褐色 Hue10YR4/3	○	○	○	白色鉱物	良	23 と同一個体か？
	23	SK8	10, 13, 18, 20	深鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue7.5YR5/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○	○	○	白色鉱物	良	松山式土器？ 22 と同一個体か？
	24	SK8	1,2,3,4,5,6,7 8,14,23,27	鉢	胴部～ 底部	外　ナデ・ミガキ → 沈線文，磨消縄文，渦巻文 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	黒色 Hue10YR2/1		○	○		良	鐘崎式土器？
19	26	SK55	10	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	明赤褐色 Hue5YR5/6	○	○			良	市来式土器
	27	SK55	11	深鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	黒褐色 Hue10YR3/1	黒褐色 Hue10YR3/1	○	○	○	白色鉱物	良	
	28	SK55	一括	深鉢	口縁部	外　ミガキ様のナデ 内　ナデ	にぶい赤褐色 Hue2.5Y4/3	暗赤褐色 Hue2.5Y3/3	○			砂礫	良	検出面出土
	29	SK55	5	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい赤褐色 Hue2.5YR5/3	○				良	内面に煤付着
	30	SK55	2	鉢	底部	外　－ 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	橙色 Hue5YR6/6	○	○		黒雲母	良	平底で，やや上げ底状の 底部 爪状の圧痕あり
	31	SK55	一括	深鉢	口縁部	外　条痕 内　ミガキ	にぶい橙色 Hue2.5Y6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○	白色鉱物	良	晩期相当の深鉢 検出面出土
	32	SK55	一括	深鉢	胴部	外　条痕 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○	白色鉱物	良	晩期相当の深鉢 検出面出土
23	41	SK53	1	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文，刻目状の沈線文 内　ナデ	褐色 Hue7.5YR4/4	橙色 Hue7.5YR7/6	○	○	○		良	市来式土器
24	42	SK54	一括	深鉢？	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	○	○	○		良	
25	43	SK57	1	深鉢？	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	黒色 Hue2.5Y2/1	黒褐色 Hue2.5Y3/2	○	○	○		良	
	44	SK57	2	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	○	○	○		良	内面に煤付着
	45	SK57	6, 7	深鉢	胴部	外　ナデ→沈線文，貼付文 内　ナデ	オリーブ褐色 Hue2.5Y4/4	オリーブ褐色 Hue2.5Y4/4	○			白色鉱物	良	北久根山式土器
28	49	SK13	10	台付皿形土器	脚部	外　ミガキ → 刻目状の沈線文，横位の沈線文 内　ミガキ	褐赤色 Hue5YR4/6	橙色 Hue7.5YR6/6	○	○		黒雲母 白色鉱物	良	底径 13.0㎝ 透かし孔あり 北久根山式土器
	50	SK13	一括	脚台付深鉢	脚部	外　ナデ 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/8	明赤褐色 Hue5YR5/6	○	○	○	白色鉱物	良	
	51	SK13	28	脚台付深鉢	底部	外　ナデ 内　指オサエ→ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	灰色 Hue5Y4/1	○	○		白色鉱物 茶色鉱物	良	底径 7.7㎝
	52	SK13	9	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/8	明褐色 Hue7.5YR5/6	○	○	○	白色鉱物	良	摩滅が著しい
	53	SK13	14, 23, 24	深鉢	底部	外　ミガキ 内　ミガキ様のナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	

第８表　縄文時代の遺物観察表（2）

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
29	54	SK13	1, 8, 16 17, 18	浅鉢	口縁部 ～底部	外　ナデ→沈線文，刻目，穿孔（口唇部） 　　磨消縄文（胴部） 内 ナデ	黒褐色 Hue2.5Y3/1	黄灰色 Hue2.5Y4/1	○	○	○		良	口径 27.6cm，底径 6.0cm 器高 8.5cm 市来式土器併行期の 磨消縄文系土器
	55	SK13	12	鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文，磨消縄文 内　ミガキ	黒褐色 Hue2.5Y3/2	黒褐色 Hue2.5Y3/2	○	○	○		良	外面に赤色顔料塗布
	56	SK13	一括	浅鉢	胴部	外　ミガキ→沈線文，刺突文 内　ミガキ	黒褐色 Hue10YR3/1	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	○		○	輝石 白色鉱物 黒色鉱物	良	
	57	SK13	5	鉢	胴部	外　ナデ→磨消縄文，横位の沈線文 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい赤褐色 Hue5YR4/4	○	○	○	白色鉱物	良	縄文の原体が幅広
	58	SK13	22	鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		○	○	黒色鉱物	良	
	59	SK13	6, 29	浅鉢	胴部	外　ミガキ→刺突文 内　ミガキ	黒褐色 Hue10YR3/1	黒褐色 Hue10YR3/1	○	○	○	白色鉱物	良	胴部が屈曲する
	60	SK13	2	鉢	胴部	外　ナデ，ミガキ→磨消縄文，沈線文 内　ナデ，ミガキ	明黄褐色 Hue2.5Y7/6	暗オリーブ褐色 Hue2.5Y3/3	○	○	○	白色鉱物	良	
30	61	SK13	36, 11	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/8	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4		○	○		良	市来式土器
	62	SK13	37	深鉢	口縁部	外　ナデ→押引文？ 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR4/2	灰黄褐色 Hue10YR4/2		○	○	白色鉱物	良	63 と同一個体か？
	63	SK13	21	深鉢	口縁部	外　ナデ→押引文？ 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR4/2	にぶい黄褐色 Hue10YR4/3		○	○	白色鉱物	良	62 と同一個体か？
	64	SK13	32	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	褐色 Hue7.5Y4/4	灰黄褐色 Hue10YR5/2		○	○		良	
	65	SK13	25, 28	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/8	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	
	66	SK13	30	深鉢？	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	明黄褐色 Hue10YR6/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4		○	○		良	鉢の可能性がある
	67	SK13	34	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	褐色 Hue10YR4/4	褐色 Hue10YR4/4	○		○	白色鉱物	良	
	68	SK13	19, 26	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/8	暗褐色 Hue10YR3/3	○	○	○	白色鉱物	良	
32	69	SK20	4	深鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	褐色 Hue7.5YR4/4	にぶい橙色 Hue7.5YR5/4	○	○	○		良	市来式土器系
	70	SK20	一括	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	○	○	○	白色鉱物	良	摩滅が著しい
	71	SK20	一括	鉢	口縁部	外　ナデ 内　ミガキ様のナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3			○		良	18・23 と胎土が類似 磨消縄文土器系
	72	SK20	8	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	にぶい赤褐色 Hue5YR6/4	○		○		良	
	73	SK20	2	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	褐色 Hue7.5YR4/3	赤褐色 Hue5YR4/6	○	○	○	砂礫	良	
	74	SK20	一括	鉢	胴部	外　ミガキ様のナデ 内　ナデ	黄褐色 Hue2.5Y5/3	黄褐色 Hue2.5Y5/3	○				良	
	75	SK20	一括	鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		○	○		良	
	76	SK20	一括	不明	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4		○	○		良	焼成が良好で硬質 内面に工具痕
	77	SK20	一括	鉢	胴部	外　条痕 内　条痕	橙色 Hue7.5YR6/6	黄褐色 Hue2.5YR5/6	○		○		良	
	78	SK20	一括	鉢	胴部	外　ナデ→条痕文 内　ナデ→条痕文	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	橙色 Hue5YR6/6	○			黒雲母 砂礫	良	
	79	SK20	1	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/6	褐色 Hue10YR4/4	○	○	○	白色鉱物	良	摩滅
	80	SK20	一括	脚台付 深鉢	底部	外　－ 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/8	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○	○	○		良	
	81	SK20	一括	浅鉢？	口縁部	外　ナデ→刺突文 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○		○		良	
	82	SK20	10, 11	浅鉢	胴部	外　ナデ・ミガキ→沈線文 内　ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	黄褐色 Hue2.5Y5/4	○	○			良	胴部が屈曲する
	83	SK20	一括	鉢	胴部	外　ナデ 　　→沈線文，磨消縄文，（渦巻文？） 内　ナデ→縦位の沈線文	赤褐色 Hue2.5YR4/6	赤褐色 Hue5YR4/6	○	○		黒雲母 白色鉱物	良	
	84	SK20	7	台付皿 形土器	脚部	外　ナデ→沈線文，刺突文 内　ミガキ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	○	○		黒雲母 白色鉱物	良	市来式土器

第９表　縄文時代の遺物観察表（3）

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
33	85	SK44	1B	深鉢	口縁部	外　ナデ →沈線文，縦位の刺突文（二枚貝） 内　ナデ	黒褐色 Hue7.5YR3/2	暗褐色 Hue7.5YR3/4	○	○	○		良	市来式土器
	86	SK44	13	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	黒褐色 Hue7.5YR3/1	○		○	白色鉱物	良	市来式土器
	87	SK44	10	深鉢	胴部～ 底部	外　ミガキ 内　ナデ	オリーブ褐色 Hue2.5Y4/6	オリーブ褐色 Hue2.5Y4/4	○	○	○		良	詳細不明
	88	SK44	3	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	暗褐色 Hue10YR3/3	○	○	○	白色鉱物 黒色鉱物	良	市来式土器
	89	SK44	一括	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue5YR7/6	橙色 Hue5YR7/6	○	○	○	白色鉱物	良	
34	94	SK60	4	深鉢	口縁部	外　ナデ→刺突文，凹線文 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	橙色 Hue5YR6/6	○	○		白色鉱物 滑石	良	阿高式系土器 流れ込み
	95	SK60	7	台付皿 形土器	口縁部	外　ナデ →沈線文，刻目状の沈線文（口唇部） 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	○	○	○		良	焼成が良好で硬質 松山式土器？
	96	SK60	6	鉢？	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4		○	○	黒雲母 白色鉱物	良	
	97	SK60	2, 3	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○			良	
	98	SK60	1, 5	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR6/6			○	黒雲母 滑石 茶色鉱物	良	阿高式系土器 流れ込み
	99	SK60	9	深鉢	胴部～ 脚部	外　ナデ，ミガキ 内　指オサエ，ナデ	赤褐色 Hue5YR4/6	褐色 Hue7.5YR4/6	○	○		黒雲母 白色鉱物	良	
	100	SK60	一括	台付皿 形土器	脚部	外　ナデ→沈線文，刺突文（二枚貝） 内　ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6		○	○		良	
36	105	SK61	28	鉢	口縁部	外　ナデ→凹点文，渦巻状の突起 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	○	○	○	滑石	良	阿高式系土器 流れ込み
	106	SK61	1, 2, 3, 5, 7 36, 37	深鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ →横位の沈線文，「Ｖ」字状の沈線文 内　ナデ	暗赤褐色 Hue5YR3/4	にぶい赤褐色 Hue5YR4/3	○	○	○	白色鉱物	良	北久根山式土器
	107	SK61	32	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	オリーブ褐色 Hue2.5Y4/3	褐色 Hue7.5YR4/4	○		○	白色鉱物	良	市来式土器系
	108	SK61	48	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	灰黄褐色 Hue10YR4/2	○	○		輝石	良	
	109	SK61	56	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	暗褐色 Hue10YR3/3	褐色 Hue10YR4/4		○	○	滑石	良	阿高式系土器 流れ込み
	110	SK61	42	深鉢	口縁部	外　ナデ→擬似縄文（口縁部） 擬似縄文，沈線文（胴部） 内　ミガキ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	黒色 Hue2.5Y2/1		○	○	鉱物	良	北久根山式土器
	111	SK57 SK61	5, 30	鉢	口縁部	外　ナデ→刺突文，沈線文（口唇部） 磨消縄文，沈線文（口縁部） 内　ミガキ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4		○	○	黒雲母 白色鉱物	良	初期の縁帯文土器
	112	SK61	6	鉢？	胴部	外　ナデ→沈線文，擬似縄文，渦巻文 内　ミガキ	黒褐色 Hue10YR3/1	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○	○		白色鉱物	良	
	113	SK61	49	鉢？	底部	外　ミガキ 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/6	赤褐色 Hue5YR4/6		○			良	
	114	SK61	41, 51, 55	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	明褐色 Hue7.5YR5/6	○			白色鉱物	良	
37	115	SK49	一括	浅鉢	胴部	外　ミガキ→線刻状の沈線？ 内　ミガキ	黒褐色 Hue2.5Y3/1	黒色 Hue5Y2/1	○	○			良	晩期の浅鉢
	116	SK49	3	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	褐灰色 Hue10YR5/1	○	○	○	茶色鉱物 黒色鉱物	良	焼成が良好で硬質
38	117	SK50	2	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	橙色 Hue2.5YR6/8	黄橙色 Hue7.5YR7/8	○	○	○	黒色鉱物	良	市来式土器
39	120	SK51	2	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR5/2	明黄褐色 Hue2.5Y7/6	○	○	○		良	
	121	SK51	一括	浅鉢？	胴部	外　ナデ→沈線文，磨消縄文 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	黄橙色 Hue7.5YR7/8			○		良	
	122	SK51	3	鉢？	胴部	外　ナデ→沈線文，磨消縄文 内　ナデ	褐灰色 Hue7.5YR4/1	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	○	○		黒雲母 白色鉱物	良	
	123	SK51	一括	浅鉢	底部	外　ミガキ様のナデ 内　ナデ	黒褐色 Hue2.5Y3/1	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	○	○	○	白色鉱物	良	
40	125	SX42	一括	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	明赤褐色 Hue5YR5/6	○	○	○	白色鉱物	良	
	126	SX42	1	深鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	暗黄灰色 Hue2.5Y5/2	暗黄灰色 Hue2.5Y4/2	○	○	○	白色鉱物	良	
44	129	SK46	2	深鉢	胴部～ 底部	外　ミガキ 内　ミガキ	赤褐色 Hue5YR4/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○	○		黒雲母 滑石	良	

第 10 表　縄文時代の遺物観察表（4）

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
45	130	SK69	3	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	○	○	○	輝石 茶色鉱物	良	市来式土器系
	131	SK69	一括	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	灰黄褐色 Hue10YR4/2		○	○		良	
	132	SK69	一括	鉢？	胴部	外　ナデ→磨消縄文 内　ミガキ	褐灰色 Hue10YR4/1	黒色 Hue7.5YR1.7/1	○	○		白色鉱物 茶色鉱物	良	外面に赤色顔料塗布
	133	SK69	4	深鉢	底部	外　ナデ，一部ミガキ 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR6/6	暗黄灰色 Hue2.5Y4/2	○	○	○	白色鉱物	良	
48	136	SX52	7	深鉢	胴部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	黒褐色 Hue10YR3/1	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	○		○	黒雲母	良	
52	140	SK45	7	埦？	底部	外　ミガキ 内　ミガキ	褐色 Hue10YR4/4	明黄褐色 Hue10YR6/6	○		○		良	古墳時代の丸底状の埦か？
	141	SK45	1	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	褐灰色 Hue7.5YR4/1	○	○	○	白色鉱物	良	外面の摩滅が著しい
	142	SK45	4, 5, 一括	深鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	極暗赤褐色 Hue5YR2/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○	○	○		良	
	143	SK45	3	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文，擬似縄文 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○				良	

第 11 表　縄文時代の遺物観察表（5）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
54	144	P － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→凹線文 内　ナデ	赤褐色 Hue2.5YR4/8	暗褐色 Hue5YR3/6	○	○			良	阿高式系土器
	145	O－27・28 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→縦位の凹線文 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR4/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4		○		滑石	良	阿高式土器
	146	SD38	下	深鉢	口縁部	外　ナデ→縦位の凹線文 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR4/2	褐色 Hue10YR4/4	○	○	○		良	阿高式系土器
	147	N － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→斜位の凹線文 内　ナデ	暗赤褐色 Hue5YR3/2	にぶい赤褐色 Hue5YR4/3	○		○		良	阿高式系土器
	148	SD38	下	深鉢	口縁部	外　ナデ→凹線文 内　ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR5/4	にぶい橙色 Hue7.5YR5/4		○	○		良	阿高式系土器
	149	N － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→凹線文 内　ナデ	明赤褐色 Hue2.5YR5/8	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	○	○			良	南福寺式土器
	150	P － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→凹線文 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	赤褐色 Hue5YR4/8	○	○	○		良	南福寺式土器
	151	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→凹線文 内　ミガキ	明赤褐色 Hue5YR5/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	○	○			良	南福寺式土器，赤色顔料塗布
	152	O － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→凹線文 内　ミガキ	赤灰色 Hue2.5YR4/1	にぶい赤褐色 Hue2.5YR5/3	○	○		滑石	良	阿高式土器
	153	O － 27 区	不明	深鉢	胴部	外　ナデ→横位の凹線文 内　ミガキ	橙色 Hue5YR6/6	にぶい黄色 Hue10YR5/4	○		○		良	南福寺式土器
	154	O － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ→刺突文（突起部） →沈線文，刻目状の刺突文（口縁部） 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	褐灰色 Hue10YR4/1	○	○	○		良	松山式土器
	155	N － 25 区 O － 27 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目状の沈線文（口唇部） 横位の沈線文（胴部） 内　ナデ	黒褐色 Hue10YR3/1	黒褐色 Hue10YR3/1	○	○	○		良	市来式土器系
	156	M － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目状の沈線文 内　ナデ	にぶい赤褐色 Hue5YR4/4	明赤褐色 Hue5YR5/8	○	○	○		良	市来式土器系
	157	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→斜位の沈線文 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	褐灰色 Hue10YR4/1	○	○	○		良	市来式土器系
	158	N － 23 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→斜位の刺突文（口縁部） 刺突文（口唇部） 内　ナデ	黄褐色 Hue10YR5/8	明黄褐色 Hue10YR6/6	○	○	○		良	市来式土器系
	159	N － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 刻目状の刺突文（口唇部） 内　ナデ→「S」字状の沈線文	暗赤褐色 Hue5YR2/4	赤褐色 Hue5YR4/8	○	○	○		良	市来式土器系
	160	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目文（口唇部） 沈線文（口縁部） 内　ナデ	にぶい赤褐色 Hue5YR4/3	橙色 Hue5YR6/6	○	○	○		良	市来式土器系
55	161	N － 27 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue7.5YR5/4	黒褐色 Hue7.5YR3/1	○	○	○		良	市来式土器系
	162	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ→刻目状の刺突文 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	明褐色 Hue7.5YR5/6	○	○	○		良	市来式土器系
	163	O － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→「S」字状の貼付文 →「S」字状の沈線文 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	橙色 Hue5YR6/6	○	○	○		良	市来式土器系

第 12 表　縄文時代の遺物観察表（6）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
55	164	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目（口唇部） 　　斜位の沈線文（口縁部） 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/6	赤褐色 Hue5YR6/6	○	○	○		良	市来式土器系
	165	SP80	埋土	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目（口唇部） 　　横位と斜位の沈線文（口縁部） 内　ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/3	にぶい橙色 Hue5YR6/3	○				良	市来式土器系
	166	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→貝殻刺突文（口縁部・口唇部） 内　ナデ	褐色 Hue7.5YR4/6	褐色 Hue7.5YR4/6	○	○	○		良	市来式土器系
	167	SD38	下	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文，貝殻刺突文 内　ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6		○	○		良	市来式土器系 御手洗Ｃ式土器の影響
	168	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→貝殻刺突文（口唇部） 　　沈線文，貝殻刺突文（口縁部） 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	黄褐色 Hue10YR5/6	○	○	○		良	市来式土器系 御手洗Ｃ式土器の影響
	169	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→貝殻刺突文 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	○	○			良	市来式土器系
	170	M･N－24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→貝殻刺突文 内　ナデ	暗褐色 Hue10YR3/4	暗褐色 Hue7.5YR3/3	○	○	○		良	市来式土器系
	171	O･P － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→斜位の沈線文 内　ナデ	暗褐色 Hue10YR3/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3		○	○		良	市来式土器系 胴部に穿孔あり
	172	M － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→貼付文，刻目状の刺突文 内　ナデ	橙色 Hue5YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	○	○			良	市来式土器系 北久根山式土器の影響
	173	SP102	埋土	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目状の刺突文 内　ナデ	灰褐色 Hue7.5YR5/2	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	○				良	市来式土器系
	174	O － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR4/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4		○	○		良	無文
	175	P － 23 区	不明	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		○	○		良	市来式土器系
	176	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/8	暗赤灰色 Hue2.5YR3/1	○	○	○		良	市来式土器系
	177	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	赤黒色 Hue2.5YR2/1	にぶい黄褐色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	市来式土器系
56	178	N － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→「W」字状の貼付文 　　羽状の沈線文 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	○	○	○		良	北久根山式土器
	179	O － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→「W」字状の貼付文 　　羽状の沈線文 内　ナデ	明黄褐色 Hue2.5Y7/6	浅黄色 Hue2.5Y7/4	○	○	○		良	北久根山式土器
	180	O － 26 区	Ⅰ	深鉢	口縁部	外　ナデ→「W」字状の貼付文 　　押し引き状の擬似縄文 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue2.5YR6/4	にぶい黄褐色 Hue2.5YR6/4	○	○	○	白色鉱物	良	北久根山式土器
	181	O － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目状の沈線文（口唇部） 　　斜位の沈線文（口縁部） 内　ナデ	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	○		○	輝石 白色鉱物	良	北久根山式土器
	182	P － 23 区	不明	深鉢	口縁部	外　ナデ→斜位の沈線文？ 内　ナデ	黒褐色 Hue7.5YR3/1	橙色 Hue7.5YR6/6	○	○	○		良	北久根山式土器
	183	M － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	黄褐色 Hue2.5Y5/3		○	○		良	西平式土器もしくは 太郎迫式土器か？
	184	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3		○	○		良	底径 13.1cm 底部に圧痕あり
	185	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		○	○		良	底径 11.2cm 底部に圧痕あり
	186	O・P － 28・29 区	不明	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue5YR6/6	黒褐色 Hue7.5YR3/1		○	○		良	底部に圧痕あり
	187	O･P － 25 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR6/6	○	○	○		良	底径 11.0cm
	188	M － 24 区	不明	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue2.5YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	底径 12.0cm
	189	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　－ 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/8	橙色 Hue7.5YR7/6	○	○	○		良	
	190	P － 24 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　－ 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	○	○			良	底径 12.4cm 底部に圧痕あり
	191	P － 24 区	不明	深鉢	脚部	外　ミガキ 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	明赤褐色 Hue5YR5/6	○			黒雲母 白色鉱物	良	底径 12.0cm
	192	N － 25 区 O － 27 区	Ⅲ	深鉢	脚部	外　ナデ 内　ナデ	黒色 Hue10YR2/1	褐色 Hue7.5YR4/4	○	○			良	
	193	Q － 31 区	Ⅰ	深鉢	脚部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	明赤褐色 Hue5YR5/8	○		○		良	
	194	M － 25 区	Ⅲ	深鉢	脚部	外　ナデ 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	明赤褐色 Hue5YR5/6		○	○		良	
	195	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	脚部	外　ナデ 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/8	明赤褐色 Hue5YR5/6		○	○		良	

第 13 表　縄文時代の遺物観察表（7）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
56	196	M － 25 区	Ⅲ	深鉢	脚部	外　ナデ 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/6	にぶい赤褐色 Hue5YR4/4	○	○	○		良	
	197	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	脚部	外　ナデ 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/6	明赤褐色 Hue5YR5/6	○	○			良	
	198	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	橙色 Hue5YR6/6		○	○		良	
57	199	O － 25 区	Ⅲ	鉢	口縁部～胴部	外　ミガキ→沈線文，刺突文，２箇所の穿孔（口唇部）沈線文，磨消縄文，鉤手文（胴部） 内　ミガキ	灰黄褐色 Hue10YR6/2	灰黄褐色 Hue10YR6/2	○		○	茶色鉱物	良	口径 34.0㎝ 鐘崎式土器
	200	不明	不明	浅鉢？	口縁部	外　ナデ→沈線文，刺突文 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6			○		良	表面が摩滅する 鐘崎式土器
	201	N － 26 区	Ⅲ	浅鉢	口縁部	外　ミガキ→沈線文（口唇部）磨消縄文（胴部） 内　ナデ	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2	○	○	○		良	鐘崎式土器
	202	SD38	中	浅鉢	口縁部	外　ナデ→刺突文，沈線文，穿孔（口唇部） 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	○	○	○		良	鐘崎式土器
	203	O － 26 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ→沈線文，竹管状の工具による刺突文（口唇部）沈線文，磨消縄文（胴部） 内　ミガキ	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2	○		○		良	鐘崎式土器
58	204	N － 25 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ナデ→横位の沈線文磨消縄文（擬似縄文か？） 内　ナデ	黄褐色 Hue10YR5/8	黄褐色 Hue2.5Y5/6	○	○	○		良	北久根山式土器
	205	N － 25 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ→横位の沈線文磨消縄文（擬似縄文か？） 内　ミガキ	黒褐色 Hue10YR3/1	黒色 Hue10YR1.7/1		○	○	白色鉱物	良	北久根山式土器
	206	N － 24 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ナデ→刺突文（口唇部）沈線文，磨消縄文（胴部） 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○	白色鉱物	良	北久根山式土器
	207	P － 24 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ナデ→磨消縄文 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	○	○	○		良	北久根山式土器
	208	N － 25 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ナデ→磨消縄文 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	北久根山式土器
	209	P － 24 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ナデ→磨消縄文，穿孔 内　ナデ→磨消縄文	灰黄褐色 Hue10YR5/2	灰黄褐色 Hue10YR4/2	○	○	○		良	北久根山式土器
	210	M － 27 区	Ⅰ	鉢	口縁部	外　ミガキ→沈線文 内　ミガキ	黒色 Hue2.5Y2/1	黒色 Hue2.5Y2/1		○	○	白色鉱物	良	辛川式土器
	211	SD38	下	鉢	口縁部	外　ナデ→磨消縄文，沈線文 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	灰黄褐色 Hue10YR5/2		○	○	白色鉱物	良	辛川式土器
	212	N － 26 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ミガキ→沈線文 内　ミガキ	黒色 Hue2.5Y2/1	黄灰色 Hue2.5Y4/1		○	○		良	鐘崎式土器
	213	N － 24 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ミガキ→沈線文 内　ミガキ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	○	○	○		良	鐘崎式土器
	214	O － 25 区	不明	鉢	胴部	外　ナデ→竹管状の工具による刺突文，縦位の沈線文 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	鐘崎式土器
	215	M － 25 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ナデ→沈線文，磨消縄文，渦巻文 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	黄橙色 Hue10YR6/4		○	○	白色鉱物	良	鐘崎式土器
	216	O － 25 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ナデ→沈線文，渦巻文 内　ナデ	明赤褐色 Hue2.5YR5/8	橙色 Hue7.5YR6/6		○		黒雲母	良	鐘崎式土器
	217	N － 24 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ナデ→沈線文，渦巻文，刺突文 内　ナデ	黒褐色 Hue2.5YR5/3	黄褐色 Hue2.5Y5/3	○		○		良	鐘崎式土器
	218	N － 26 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ナデ→沈線文，渦巻文 内　ナデ	黒色 Hue10YR2/1	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	鐘崎式土器
	219	O － 25 区	Ⅰ	鉢	胴部	外　ナデ→沈線文，磨消縄文 内　ミガキ	暗オリーブ褐色 Hue2.5Y3/3	黒褐色 Hue2.5Y3/2	○		○		良	西平式土器
	220	SD38	下	鉢	胴部	外　ミガキ→窓枠状の沈線文，磨消縄文 内　ミガキ	灰黄褐色 Hue10YR5/2	灰黄褐色 Hue10YR4/2		○			良	太郎迫式土器
59	221	L － 19 区	Ⅲ	鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	灰黄色 Hue2.5Y6/2	○	○		白色鉱物	良	
	222	N － 30 区	Ⅰ	鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	
	223	不明	Ⅰ	鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	上げ底状になる 底部に圧痕あり
	224	N － 24 区	Ⅲ	浅鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	○		○		良	上げ底状になる 底部に圧痕あり
	225	不明	Ⅰ	浅鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	黄灰色 Hue2.5Y4/1	浅黄色 Hue2.5Y7/3	○	○		黒雲母 白色鉱物	良	
	226	不明	不明	浅鉢	底部	外　ミガキ 内　ナデ	黄灰色 Hue2.5Y4/1	黄褐色 Hue2.5Y5/4	○		○		良	底部に圧痕あり

第 14 表　縄文時代の遺物観察表（8）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
59	227	P － 26 区	Ⅲ	鉢	底部	外　ミガキ 内　ミガキ	赤色 Hue10R5/6	褐灰色 Hue7.5YR4/1	○	○	○		良	
	228	N － 24 区	Ⅲ	鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	○	○		黒雲母	良	底部に圧痕あり
	229	N － 25 区	Ⅲ	台付皿形土器	口縁部	外　ナデ→刻目状の沈線文（口唇部） 沈線文（胴部） 内　ナデ→沈線文	暗褐色 Hue7.5YR3/4	褐色 Hue7.5YR4/6	○		○		良	市来式土器系
	230	N － 24 区	Ⅲ	台付皿形土器	口縁部	外　ナデ→刺突文（口唇部） 貝殻刺突文（口縁部） 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○	○	○		良	市来式土器系
	231	不明	撹乱	台付皿形土器	突帯部	外　ナデ→刺突文，沈線文（突起部） 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	暗褐色 Hue7.5YR3/3	○		○	黒雲母	良	磨消縄文土器系
	232	不明	Ⅲ	台付皿形土器	口縁部	外　ナデ→沈線文（口唇部） 沈線文，刺突文（口縁部） 内　ナデ→（「Ｓ」字状の）沈線文	明赤褐色 Hue2.5YR5/8	暗赤褐色 Hue5YR3/3		○	○		良	市来式土器系
	233	M － 26 区	Ⅲ	台付皿形土器	口縁部	外　ナデ→沈線文（突起部） 磨消縄文（胴部） 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/6	褐色 Hue7.5YR4/4	○	○	○	黒雲母 白色鉱物	良	磨消縄文土器系
	234	N － 25 区	Ⅲ	台付皿形土器	口縁部	外　ナデ→刺突文（口唇部） 沈線文（胴部） 内　ナデ→沈線文	黒色 Hue10YR2/1	橙色 Hue7.5YR7/6		○	○		良	
	235	N － 26 区	Ⅲ	皿形土器	口縁部	外　ミガキ→浮線状の文様 内　ミガキ	にぶい赤褐色 Hue5YR5/4	橙色 Hue5YR6/6		○			良	
	236	O － 27 区	不明	皿形土器	口縁部	外　ミガキ→浮線状の文様 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3		○			良	
	237	SD38	上 下	台付皿形土器	脚部	外　ナデ→刺突文 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/6	明赤褐色 Hue5YR5/6		○	○		良	市来式土器系
	238	O － 28 区	Ⅲ	台付皿形土器	脚部	外　ナデ→刻目状の沈線文 内　ナデ	褐色 Hue10YR4/6	灰黄褐色 Hue10YR5/2	○		○		良	市来式土器系
	239	O － 25 区	Ⅰ	台付皿形土器	脚部	外　ナデ→竹管状の工具による刺突文 沈線文，渦巻文 内　ナデ	黄灰色 Hue2.5Y4/1	黄灰色 Hue2.5Y4/1	○	○	○		良	磨消縄文土器系
	240	N － 25 区	Ⅲ	台付皿形土器	脚部	外　ナデ→竹管状の工具による刺突文 沈線文，渦巻文 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	磨消縄文土器系
	241	N － 26 区	Ⅲ	台付皿形土器	脚部	外　ナデ→刻目状の刺突文 内　ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい赤褐色 Hue5YR5/4		○	○		良	市来式土器系
	242	L － 19 区	Ⅲ	台付皿形土器	脚部	外　ハケ目状のナデ 内　ハケ目状のナデ	にぶい赤褐色 Hue5YR4/4	にぶい赤褐色 Hue5YR4/4	○			白色鉱物	良	透かし孔？ 土師器甕の可能性あり
60	243	SD38	下	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	○	○	○		良	上加世田式土器 もしくは御領式土器
	244	SD38	下	深鉢	口縁部	外　条痕 内　条痕	灰褐色 Hue7.5YR4/2	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4		○	○		良	後期末～晩期
	245	P － 24 区	不明	深鉢	口縁部～胴部	外　条痕 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	黄灰色 Hue10YR4/1	○	○			良	後期末～晩期
	246	SD38	下	深鉢	口縁部	外　条痕 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	○	○	○		良	後期末～晩期
	247	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　条痕 内　ナデ	黒色 Hue10YR1.7/1	黒褐色 Hue10YR2/2	○	○			良	後期末～晩期
	248	N － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　条痕 内　条痕	橙色 Hue7.5YR6/6	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○		○	黒雲母	良	後期末～晩期 補修孔あり
	249	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　条痕 内　ナデ	褐色 Hue7.5YR4/3	明褐色 Hue7.5YR5/6	○	○		黒雲母	良	後期末～晩期
	250	M － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	○	○	○		良	後期末～晩期
	251	J ～ M － 17 ～ 20 区	Ⅰ	深鉢	口縁部～胴部	外　条痕 内　条痕	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3		○	○	黒雲母	良	後期末～晩期
	252	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　条痕 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	橙色 Hue7.5YR6/6	○	○	○		良	後期末～晩期
	253	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	○	○	○		良	後期末～晩期
	254	SD38	下	深鉢	口縁部	外　条痕 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	後期末～晩期
	255	SD38	下	深鉢	口縁部	外　条痕 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	○	○	○		良	後期末～晩期
	256	M － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　条痕，ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○	黒雲母	良	後期末～晩期
	257	O － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○	黒雲母	良	後期末～晩期

第 15 表　縄文時代の遺物観察表（9）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
60	258	SD38	下	深鉢	口縁部	外　条痕 内　条痕	黄灰色 Hue2.5Y4/1	黄灰色 Hue2.5Y4/1	○	○			良	後期末～晩期
	259	SD38	下	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	○		○	黒雲母 白色鉱物	良	後期末～晩期
	260	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ミガキ様のナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	黒色 Hue10YR2/1	○	○		白色鉱物	良	後期末～晩期
	261	M － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	褐灰色 Hue10YR4/1		○	○		良	後期末～晩期
	262	N － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue5YR6/6	黒褐色 Hue5YR2/1	○	○	○		良	後期末～晩期
	263	O － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR4/2	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	○		○		良	後期末～晩期
61	264	K － 20 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	黒色 Hue10YR1.7/1	○	○	○		良	後期末～晩期
	265	M － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ，ミガキ 内　ナデ，ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	○	○	○		良	後期末～晩期
	266	P － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR5/2	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○	白色鉱物	良	後期末～晩期
	267	N － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	黒褐色 Hue2.5Y3/2	黒褐色 Hue2.5Y3/2	○			黒雲母	良	後期末～晩期
	268	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	黒褐色 Hue10YR3/1	黒褐色 Hue10YR2/1	○	○			良	後期末～晩期
	269	不明	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→刺突による穿孔（２箇所） 内　ナデ	黒褐色 Hue10YR3/1	浅黄色 Hue2.5Y7/4	○	○			良	後期末～晩期 孔列文の可能性あり
	270	N － 27 区 M － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	明黄褐色 Hue10YR6/6	○		○		良	入佐式土器新段階
	271	L － 19 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3		○		黒雲母	良	入佐式土器新段階
	272	O － 25 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	○				良	後期末～晩期
	273	SD38	下	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	黄色 Hue2.5Y8/6	○				良	後期末～晩期
	274	N － 25 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	灰黄褐色 Hue10YR5/2	○				良	後期末～晩期
	275	L － 20 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ，条痕，リボン状の突起 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4		○	○		良	入佐式土器新段階から 黒川式土器
	276	N － 27 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	黒褐色 Hue7.5YR3/1	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	後期末～晩期
	277	N － 28 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3		○	○		良	後期末～晩期
	278	J ～ M － 17 ～ 20 区	I	深鉢	胴部	外　ナデ，条痕 内　ナデ，条痕	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/3		○			良	後期末～晩期
62	279	O － 23 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　条痕 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR6/3	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	○	○	○		良	後期末～晩期
	280	M － 24 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	○		○	白色鉱物	良	後期末～晩期
	281	N － 27 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　条痕 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6		○			良	後期末～晩期
	282	N － 24 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ，条痕 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	灰黄色 Hue2.5Y6/2	○	○	○		良	後期末～晩期
	283	M － 24 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ，条痕 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4			○	黒雲母 白色鉱物	良	後期末～晩期
	284	L － 19 区	I	深鉢	胴部	外　条痕 内　ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/3	○	○	○		良	後期末～晩期
	285	不明	不明	深鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5YR6/4	にぶい黄色 Hue2.5YR6/3	○	○	○	白色鉱物	良	後期末～晩期
	286	O － 27 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	明赤褐色 Hue2.5YR5/6	暗赤褐色 Hue2.5YR3/4	○	○	○		良	後期末～晩期
	287	P － 26 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR6/2	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3		○	○	黒雲母	良	後期末～晩期
	288	P － 27 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	後期末～晩期
	289	O － 26 区	I	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	黄褐色 Hue2.5Y5/3	○	○	○		良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
	290	M － 27 区	I	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/8	にぶい橙色 Hue7.5YR6/6	○		○	黒雲母 白色鉱物	良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
	291	O － 26 区	I	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	黄灰色 Hue2.5Y3/1	○			黒雲母	良	後期末～晩期 底部に圧痕あり

第 16 表　縄文時代の遺物観察表（10）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
62	292	O － 24 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
	293	L － 19 区	Ⅰ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	○	○	○		良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
	294	O － 24 区 N － 26 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
	295	P － 24 区	Ⅲ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○		黒雲母	良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
	296	SD38	下	深鉢	底部	外　ミガキ→条痕文 内　ミガキ	黄灰色 Hue2.5Y5/7	灰黄色 Hue2.5Y6/2	○	○	○		良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
	297	O － 28・29 区	Ⅰ	深鉢	底部	外　ナデ 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	浅黄色 Hue2.5Y7/4	○		○	黒雲母	良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
	298	M － 27 区	Ⅰ	深鉢	底部	外　－ 内　ナデ	にぶい赤褐色 Hue5YR5/4	にぶい赤褐色 Hue5YR5/4	○				良	後期末～晩期 底部に圧痕あり
63	299	N － 26 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ→凹線状の文様 内　ミガキ	褐灰色 Hue10YR5/1	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3		○	○		良	三万田式土器
	300	N － 24 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ→凹線状の文様 内　ミガキ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	○	○	○	白色鉱物	良	三万田式土器
	301	N － 24 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ→凹線状の文様 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	明黄褐色 Hue10YR6/6		○	○	白色鉱物	良	三万田式土器
	302	O － 24 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/6	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	○		○	黒雲母	良	入佐式土器～ 黒川式土器
	303	N － 24 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	入佐式土器～ 黒川式土器
	304	O － 24 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ→沈線文 内　ミガキ	黒褐色 Hue2.5Y3/1	オリーブ黒色 Hue5Y3/1	○		○		良	黒川式土器
	305	N － 25 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ 内　ミガキ	灰黄褐色 Hue10YR4/2	灰黄褐色 Hue10YR4/2	○		○	黒雲母	良	黒川式土器
	306	SD38	下	鉢	口縁部	外　ミガキ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		○	○		良	入佐式土器～ 黒川式土器
	307	J － 20 区	Ⅲ	鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	黄灰色 Hue2.5Y4/1		○	○		良	入佐式土器以前（後期末）
	308	P － 24 区	撹乱	浅鉢	口縁部 ～胴部	外　ミガキ，ヒレ状突起（口縁部） 　　橋状把手（胴部） 内　ミガキ	明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	○		○		良	入佐式土器
	309	K － 17 区	Ⅲ	鉢	口縁部	外　ミガキ 内　ミガキ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄色 Hue2.5Y6/2			○		良	黒川式土器
	310	SD38	下	鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄色 Hue2.5Y6/2		○	○	黒雲母	良	入佐式土器以前（後期末）
	311	J～M－ 17～20 区	Ⅰ	鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄色 Hue2.5Y6/2	○		○		良	入佐式土器以前（後期末）
	312	P － 24 区	Ⅲ	浅鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	黒褐色 Hue2.5Y3/1	黒褐色 Hue2.5Y3/1	○		○	黒雲母	良	入佐式土器以前（後期末）
	313	SD38	中	浅鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	褐色 Hue7.5YR4/6	オリーブ黒色 Hue5Y3/2	○	○	○		良	入佐式土器以前（後期末）
	314	N － 25 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	黒色 Hue2.5Y2/1	○		○	黒雲母	良	
	315	I・J－ 17～21 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	黒褐色 Hue2.5Y3/1	黄灰色 Hue2.5Y4/1	○	○	○		良	
	316	N － 25 区	Ⅲ	鉢	胴部	外　ミガキ 内　ミガキ	黒色 Hue10YR2/1	灰黄褐色 Hue10YR5/2	○	○	○		良	
	317	K･L － 18 区	Ⅲ	浅鉢？	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR5/2	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	○	○	○		良	
64	318	L － 19 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線 内　ナデ	褐色 Hue7.5YR4/4	にぶい赤褐色 Hue5YR4/4	○	○			良	指宿式土器の影響か？
	319	O － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	灰黄褐色 Hue10YR4/2	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	○	○			良	
	320	O － 27 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→刻目・突帯，羽状の沈線文 内　ナデ	明褐色 Hue7.5YR5/6	橙色 Hue7.5YR6/6	○	○			良	南福寺式土器や出水式土器の影響
	321	SD38	Ⅱ	深鉢	胴部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	○	○	○		良	
	322	N － 25 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ナデ→沈線文 内　ナデ	明赤褐色 Hue5YR5/6	橙色 Hue5YR6/6		○	○	白色鉱物	良	
	323	SD38	撹乱	鉢？	口縁部	外　ナデ→２列の押引文（口唇部） 　　刻目（口縁部） 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	○		○		良	
	324	N － 25 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文（口縁部） 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	○	○	○	白色鉱物	良	上加世田式土器以前 （後期末）

第 17 表　縄文時代の遺物観察表（11）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
64	325	P － 24 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文（口唇部・口縁部） 内　ナデ	黄褐色 Hue2.5Y5/3	灰オリーブ色 Hue5Y5/2	○		○	白色鉱物	良	上加世田式土器以前（後期末）
	326	N － 26 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→沈線文，刺突文 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR6/4	にぶい黄褐色 Hue10YR6/4		○	○		良	北久根山式土器の影響？
	327	N － 25 区	Ⅲ	不明	口縁部	外　ナデ→沈線文，刺突文，磨消縄文 内　ナデ	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	黒褐色 Hue2.5Y3/2	○				良	傾き不明 北久根山式土器の影響？
	328	O － 28 区	Ⅲ	深鉢	口縁部	外　ナデ→突帯，刻目 内　ナデ	暗赤褐色 Hue5YR3/5	暗赤褐色 Hue5YR3/6		○	○		良	
	329	O － 24 区	Ⅲ	不明	胴部	外　ナデ→ハケ目状の沈線 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4				黒雲母	良	
	330	SD38	上	不明	口縁部	外　ナデ→沈線 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		○	○		良	
	331	J － 20 区	Ⅰ	深鉢	胴部	外　条痕→突帯・刻目 内　ナデ	赤褐色 Hue5YR4/8	褐色 Hue7.5YR4/6	○	○	○	白色鉱物	良	
	332	L － 19 区	Ⅲ	深鉢	胴部	外　ミガキ 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	○		○	黒雲母	良	

第 18 表　縄文時代の遺物観察表（12）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
64	333	N － 24 区	Ⅲ	－	－	外　ミガキ 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4	○	○	○	白色鉱物	良	円盤状土製品
	334	N － 24 区	Ⅲ	－	－	外　ミガキ 内　ナデ	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	明黄褐色 Hue10YR7/6	○	○	○	白色鉱物	良	円盤状土製品
	335	N － 26 区	Ⅲ	－	－	外　ミガキ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	○	○	○	白色鉱物	良	円盤状土製品

第 19 表　縄文時代の遺物観察表（13）

挿図番号	掲載番号	遺構	取上番号	器種 1	器種 2	石材		長さ (mm)	幅さ (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
						1	2					
11	4	SK4	4	磨石・敲石類	－	砂岩	－	12.1	10.1	3.4	460	被熱による破砕
	5	SK4	3	磨石・敲石類	－	砂岩	－	10.5	(9.6)	4.8	725	
12	6	SK4	1	石皿・台石	－	砂岩	－	(227.0)	(284.0)	50.0	3,600	
	7	SK4	2	石皿・台石	－	安山岩	1	(152.0)	(129.0)	80.0	2,000	
	8	SK4	11	石皿・台石	－	安山岩	1	299.0	310.0	111.0	14,600	
14	13	SK6	5	磨石・敲石類	－	安山岩	1	13.2	11.5	4.8	1,200	
	14	SK6	9	打製石斧	－	頁岩	－	(114.0)	63.5	17.5	114	
	15	SK6	1	石皿・台石	－	安山岩	1	(384.0)	332.0	71.0	12,800	
17	25	SK8	－	石皿・台石	－	安山岩	1	(405.0)	301.0	85.0	15,600	
19	33	SK55	8	磨石・敲石類	－	花崗岩	－	9.5	7.9	2.1	228	
	34	SK55	7	磨石・敲石類	－	安山岩	1	(10.4)	11.4	4.5	723	使用により表面が大きく剥離
	35	SK55	6	磨石・敲石類	－	安山岩	1	12.2	9.1	4.7	920	風化著しく観察不能
20	36	SK55	9	石皿・台石	－	安山岩	1	420.0	(283.0)	107.0	16,200	
21	37	SK78	5	石核	－	黒曜石	5	71.0	69.0	2.9	155	
	38	SK78	4	石核	－	砂岩	－	69.0	9.6	107.0	752	
22	39	SK78	16	石皿・台石	－	安山岩	3	295.0	260.0	102.0	10,400	
	40	SK78	6	石皿・台石	－	安山岩	1	306.0	(232.0)	69.0	8,400	
26	46	SK59	1	石皿・台石	－	安山岩	1	(169.0)	(207.0)	61.0	3,200	
27	47	SK57	4	石皿・台石	－	安山岩	1	332.0	334.0	56.0	10,000	
28	48	SK13	35	砥石	－	砂岩	－	118.0	104.0	9.0	144	
33	90	SK44	-	石鏃	2	黒曜石	6	17.9	13.0	3.2	1	
	91	SK44	14	石錘	－	安山岩	1	61.0	73.0	23.0	157	
	92	SK44	4	磨石・敲石類	－	石灰岩	－	(83.0)	73.0	40.0	335	敲打痕顕著
34	93	SK60	8	磨石・敲石類	－	砂岩	－	(53.0)	79.0	39.0	263	被熱による破砕
35	101	SK61	57	磨石・敲石類	－	砂岩	－	113.0	112.0	41.0	746	
	102	SK61	29	磨石・敲石類	－	砂岩	－	69.0	52.0	50.0	247	目の粗い砂岩
	103	SK61	43	磨石・敲石類	－	砂岩	－	94.0	63.0	51.0	372	
	104	SK61	38	磨石・敲石類	－	安山岩	1	(114.0)	126.0	62.0	1,400	欠損
38	118	SK50	1	磨石・敲石類	－	安山岩	1	124.0	96.0	52.0	972	磨面は限定的
39	119	SK51	1	磨石・敲石類	－	安山岩	1	176.0	168.0	45.0	1,800	
40	124	SK42	3	磨石・敲石類	－	花崗岩	－	(91.0)	(68.0)	50.0	327	欠損
41	127	SK51 SK42 SX64	2 2 2	石皿・台石	－	安山岩	1	390.0	273.0	83.0	8,800	SK51・SK42・SX64 間で接合
43	128	SK48	1	石皿・台石	－	安山岩	1	162.0	232.0	100.0	4,200	
45	134	SK69	2	磨石・敲石類	－	石灰岩	－	73.0	(78.0)	54.0	444	敲打痕顕著
	135	SK69	1	磨石・敲石類	－	安山岩	1	(91.0)	(116.0)	51.0	753	被熱による破砕
48	137	SX52	2,1	石皿・台石	－	安山岩	1	291.0	342.0	65.0	8,800	
	138	SX52	3	石皿・台石	－	砂岩	－	294.0	224.0	66.0	6,200	
51	139	SX66	2	磨石・敲石類	－	安山岩	1	119.0	115.0	44.0	976	

第 20 表　縄文時代の遺物観察表（14）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種 1	器種 2	石材		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
						1	2					
65	336	N － 25 区	Ⅲ	石鏃	1	安山岩	1	(18.4)	19.0	3.8	0.7	
	337	L － 17 区	Ⅰ	石鏃	1	黒曜石	2	16.4	14.7	5.1	0.8	
	338	M － 25 区	Ⅰ	石鏃	1	黒曜石	6	10.5	11.5	2.5	0.4	
	339	O － 33 区	表採	石鏃	1	黒曜石	6	11.5	13.0	2.5	0.2	
	340	O － 26 区	Ⅲ	石鏃	1	黒曜石	4	(10.3)	13.9	3.0	0.3	
	341	O － 25 区	Ⅲ	石鏃	1	チャート	1	15.5	14.5	2.0	0.3	
	342	M － 24 区	Ⅲ	石鏃	1	黒曜石	4	16.8	(13.7)	3.2	0.5	
	343	－	表採	石鏃	1	黒曜石	6	(12.9)	16.7	3.0	0.5	
	344	P － 32 区	Ⅰ	石鏃	2	黒曜石	4	(17.3)	14.0	3.6	0.6	
	345	O － 24 区	Ⅲ	石鏃	2	黒曜石	5	(16.3)	13.3	3.8	0.7	
	346	P － 33 区	Ⅰ	石鏃	2	黒曜石	7	25.4	15.8	3.4	0.9	
	347	N － 28 区	Ⅲ	石鏃	2	黒曜石	6	23.9	15.0	3.9	0.8	
	348	L － 18 区	Ⅲ	石鏃	2	安山岩	1	22.6	13.9	4.1	0.7	
	349	M － 24 区	Ⅲ	石鏃	2	黒曜石	5	20.2	16.2	3.0	0.5	
	350	O － 26 区	Ⅲ	石鏃	2	黒曜石	6	19.0	14.9	3.8	0.5	
	351	SD38	下	石鏃	2	チャート	1	14.0	12.6	2.9	0.3	
	352	O － 24 区	Ⅲ	石鏃	2	チャート	1	(15.2)	(14.3)	3.3	0.4	
	353	SD38	下	石鏃	2	黒曜石	3	(15.8)	(12.8)	4.7	0.6	
	354	M － 24 区	Ⅲ	石鏃	2	黒曜石	6	(16.9)	13.4	2.9	0.5	
	355	－	Ⅰ	石鏃	3	黒曜石	5	(20.1)	14.0	4.2	1.1	
	356	N － 26 区	Ⅱ	石鏃	3	チャート	2	(19.0)	16.5	4.3	1.5	
66	357	M － 26 区	Ⅲ	不明	－	黒曜石	4	14.0	13.0	6.0	0.9	微細剥離痕あり
	358	SD38	－	楔形石器	－	黒曜石	4	14.0	26.0	5.0	2.0	
	359	N － 25 区	Ⅲ	楔形石器	－	黒曜石	4	20.0	16.0	6.0	2.4	
	360	SD38	－	楔形石器	－	黒曜石	4	40.0	25.0	6.0	5.1	
	361	Q － 32 区	Ⅰ	石匙	－	チャート	1	25.7	21.1	7.6	2.6	
	362	Q － 32 区	Ⅰ	石匙	－	安山岩	2	37.6	66.7	9.9	18.7	
	363	N － 24 区	Ⅲ	スクレイパー	－	黒曜石	1	28.0	45.0	12.0	10.2	
	364	N － 24 区	－	スクレイパー	－	黒曜石	1	30.0	45.0	11.0	16.5	
67	365	O － 24 区	Ⅲ	ドリル	－	黒曜石	4	60.0	27.0	9.0	8.0	
	366	不明	不明	ドリル	－	黒曜石	4	46.0	20.0	10.0	1.8	
	367	L － 24 区	Ⅲ	石核	－	黒曜石	5	26.0	42.0	20.0	16.5	
	368	不明	不明	石核	－	黒曜石	1	37.0	50.0	25.0	41.2	
	369	M － 25 区	Ⅲ	石核	－	黒曜石	1	67.0	56.0	21.0	85.5	
68	370	不明	Ⅲ	磨製石斧	－	安山岩	1	113.0	46.0	23.5	180.2	
	371	不明	Ⅰ	磨製石斧	－	安山岩	1	(122.0)	64.0	43.5	430.0	
	372	不明	Ⅲ	磨製石斧	－	砂岩	－	(81.5)	48.0	27.5	162.3	
	373	不明	Ⅲ	磨製石斧	－	砂岩	－	(107.5)	55.0	35.0	266.5	
	374	不明	Ⅰ	磨製石斧	－	ホルンフェルス	－	(133.5)	63.5	43.0	530.0	
	375	SD38	下	磨製石斧	－	砂岩	－	(149.5)	61.0	43.0	470.0	
	376	SD38	Ⅱ	磨製石斧	－	ホルンフェルス	－	(108.0)	61.0	35.5	322.1	
	377	不明	Ⅲ	磨製石斧	－	砂岩	－	(100.5)	51.0	34.5	266.3	
	378	不明	Ⅰ	磨製石斧	－	砂岩	－	(118.0)	62.5	37.0	450.0	
	379	不明	Ⅲ	磨製石斧	－	頁岩	－	(108.0)	70.0	30.0	328.4	
69	380	SD38	-	磨製石斧	－	頁岩	－	(67.0)	62.0	20.0	100.8	
	381	不明	Ⅲ	磨製石斧	－	蛇紋岩	－	(66.0)	64.0	19.0	117.3	
	382	不明	不明	磨製石斧	－	ホルンフェルス	－	(64.0)	54.0	30.0	103.5	
	383	不明	Ⅲ	磨製石斧	－	頁岩	－	92.0	34.0	19.0	79.7	小形の鑿状
	384	不明	Ⅰ	打製石斧	－	頁岩	－	(126.0)	59.5	26.0	198.3	
	385	SD38	－	打製石斧	－	蛇紋岩	－	(170.5)	67.0	30.5	390.0	
	386	不明	Ⅱ	打製石斧	－	頁岩	－	(118.0)	67.5	18.0	118.3	
	387	不明	表採	打製石斧	－	頁岩	－	(112.5)	71.5	24.0	181.3	
	388	SD38	中	打製石斧	－	頁岩	－	(94.0)	66.0	24.0	189.6	
	389	M － 25 区	Ⅲ	石製品	－	砂岩	－	62.0	37.0	11.0	236.0	

第 21 表　縄文時代の遺物観察表（15）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種 1	石材		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
					1	2					
70	390	SD38	下	石錘	安山岩	1	67.0	96.0	33.0	302	
	391	SD38	下	石錘	安山岩	1	66.0	75.0	31.0	221	
	392	P － 24 区	撹乱	磨石・敲石類	砂岩	－	(70.0)	96.0	47.0	427	裏面中央部への垂直打撃により破損
	393	SD38	上	磨石・敲石類	安山岩	1	163.0	97.0	59.0	1,400	
	394	N － 25 区	Ⅲ	磨石・敲石類	安山岩	1	(98.0)	(106.0)	55.0	772	被熱による破砕
	395	R － 31 区	表採	磨石・敲石類	安山岩	1	104.0	67.0	55.0	630	
	396	N － 25 区	Ⅲ	磨石・敲石類	石灰岩	－	90.0	86.0	66.0	629	
	397	N － 24 区	Ⅲ	磨石・敲石類	砂岩	－	91.0	65.0	61.0	542	
	398	M － 24 区	Ⅲ	磨石・敲石類	砂岩	－	(121.0)	99.0	45.0	748	欠損
	399	N － 23 区	Ⅲ	磨石・敲石類	砂岩	－	119.0	107.0	48.0	990	
71	400	N － 26 区	Ⅲ	磨石・敲石類	砂岩	－	127.0	95.0	51.0	934	
	401	N － 26・27 区	Ⅲ	磨石・敲石類	安山岩	1	141.0	119.0	62.0	1,600	被熱による破砕
	402	L － 19 区	Ⅲ	磨石・敲石類	安山岩	1	62.0	50.0	22.0	114	
	403	O － 23 区	Ⅲ	磨石・敲石類	砂岩	－	118.0	95.0	43.0	791	
	404	P － 28 区	Ⅰ	磨石・敲石類	安山岩	1	130.0	123.0	48.0	1,200	被熱による破砕
	405	O － 24 区	Ⅲ	磨石・敲石類	安山岩	1	120.0	104.0	43.0	854	
	406	N － 25 区	Ⅲ	磨石・敲石類	安山岩	1	113.0	98.0	53.0	992	
	407	N － 26 区	Ⅲ	磨石・敲石類	砂岩	－	123.0	107.0	46.0	1,004	
	408	O － 24 区	Ⅲ	磨石・敲石類	砂岩	－	154.0	106.0	58.0	1,400	
72	409	N － 26 区	Ⅲ	石皿・台石	安山岩	1	(368.0)	268.0	111.0	13,800	
73	410	M － 25 区	Ⅲ	石皿・台石	安山岩	1	(217.0)	(225.0)	97.0	5,600	
	411	SD38	下	石皿・台石	安山岩	1	300.0	(269.0)	83.0	11,600	
74	412	SD38	上	石皿・台石	安山岩	1	(328.0)	(341.0)	87.0	16,600	
	413	O － 26 区	Ⅲ	石皿・台石	安山岩	1	(327.0)	(241.0)	98.0	7,000	
	414	O － 25 区	Ⅲ	石皿・台石	安山岩	1	(188.0)	(162.0)	92.0	3,200	

第 22 表　弥生時代・古墳時代の遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	部位	文様・器面調整等	色調		胎土				焼成	備考
							外面	内面	石英	長石	カクセン	他		
75	415	O － 27 区	Ⅲ	甕	口縁部	外　横ナデ 内　横ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	○	○	○	火山ガラス φ 1.5mm 以下の砂粒	良	黒髪Ⅰ式土器
	416	N － 33 区	Ⅰ	甕	口縁部	外　横ナデ→丹塗り磨研 内　丹塗り磨研	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	○	○	○	黒雲母 φ 2.5mm 以下の礫	不	黒髪Ⅱ式土器 丹塗り土器
	417	Q － 32 区	Ⅰ	甕	口縁部	外　横ナデ 内　横ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	○	○	○	黒雲母 φ 3mm 以下の礫	良	須久Ⅰ式土器
	418	O － 24 区	Ⅲ	甕	口縁部	外　ミガキ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	○	○	○		不	入来Ⅱ式土器
	419	O － 30 区	Ⅱ	甕	底部	外　ハケメ 内　ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/4	にぶい橙色 Hue5YR6/4	○	○	○	赤褐色の岩片 φ 2.5mm 以下の礫	良	入来Ⅱ式土器
	420	N － 28 区	Ⅲ	甕	脚部	外　ハケメ 内　ナデ	にぶい橙色 Hue5YR6/4	にぶい橙色 Hue5YR6/4	○	○	○	黒雲母，赤褐色の岩片 火山ガラス，φ 3mm 以下の礫	良	古墳時代前期
	421	N·O － 28 区	Ⅱ	甕	底部	外　ハケメ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	中津野式土器
	422	不明	Ⅰ	甕	突帯部	外　丹塗り→ナデ 内　ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	○	○	○	黒雲母，赤褐色の岩片 φ 1.5mm 以下の砂粒	不	丹塗り土器
	423	SD38	－	壺	口縁部	外　暗文→ハケ目→ナデ 内　ミガキ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	○	○	○	赤褐色の岩片 φ 1mm 以下の砂粒を含む	良	黒髪Ⅱ式土器
	424	SD38	中	壺	胴部	外　ハケメ→横ナデ 内　工具ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	○	○	○	黒雲母，赤褐色の岩片 火山ガラス，φ 3mm 以下の礫	良	弥生時代後期～ 古墳時代初頭
	425	SD38	下	壺	胴部	外　ハケメ→横ナデ 内　工具ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	○	○	○	黒雲母，赤褐色の岩片 火山ガラス，φ 3mm 以下の礫	良	弥生時代後期～ 古墳時代初頭
	426	N － 25 区	Ⅲ	壺	胴部	外　ハケメ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	中津野式土器
	427	SD38	－	高坏	口縁部 ～胴部	外　丹塗り→ハケ目→ケズリ 内　丹塗り磨研	明赤褐色 Hue5YR5/8	明赤褐色 Hue5YR5/8	○	○	○	赤褐色の岩片，火山ガラス φ 2mm 以下の礫	不	
	428	SD38	－	高坏	脚部	外　丹塗り→ハケ目→ミガキ 内　ナデ	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue2.5Y8/2	○	○	○	赤褐色の岩片，火山ガラス φ 2mm 以下の礫	不	
	429	SD38	－	高坏	脚中部	外　－ 内　－	明赤褐色 Hue5YR5/6	灰黄褐色 Hue10YR4/2	○	○	○	赤褐色の岩片，火山ガラス φ 2mm 以下の礫	不	
	430	N － 25 区	Ⅲ	高坏	器部	外　ハケメ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	○	○	○		良	中津野式土器
	431	O － 32 区	Ⅰ	不明	不明	外　丹塗り磨研 内　ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	○	○	○	火山ガラス φ 3mm 以下の礫	不	黒髪Ⅱ式土器 丹塗土器

第 23 表　古代の遺物観察表（1）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
80	432	SK68	埋土	一括	（埦・坏）	−	外　回転ヘラケズリ，横ナデ 内　横ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	12.5				○	○			良	
	433	SK68	埋土	7	（埦・坏）	−	外　回転ヘラケズリ，横ナデ 内　横ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	12.0				○	○			良	
	434	SK68	埋土	3	（埦・坏）	−	外　横ナデ 内　横ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	11.9				○	○	○		良	
	435	SK68	埋土	一括	埦	−	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4					○	○			良	
	436	SK68	埋土	一括	埦	−	外　回転ナデ（体部）ヘラ切り（底部） 内　ミガキ	黄褐色 Hue2.5Y5/3	黒色 Hue10Y2/1					○	○			良	内黒土師器
	437	SK68	埋土	4 9 10	甕		外　タタキ，ハケ目 内　ハケ目，ケズリ→ナデ（口縁部）	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	26.0		12.0		○	○	○		良	
81	443	SK70	埋土	1	甕	−	外　ハケ目→ナデ（胴部上半～口縁部） 　平行タタキ（胴部下半） 内　ハケ目→ナデ（口縁部） 　ケズリ→ナデ（胴部）	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	25.6				○	○	○		良	
83	446	SK72	埋土	一括	（埦・坏）	−	外　横ナデ→墨書 内　横ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4						○	○		良	墨書土器
	447	SK72	埋土	12	埦	−	外　横ナデ 内　横ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄色 Hue7.5YR8/3	14.4					○	○		良	
	448	SK72	埋土	11	埦	−	外　横ナデ 内　横ナデ	浅黄色 Hue7.5YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4						○	○		良	煤付着
	449	SK72	埋土	10	埦	−	外　横ナデ 内　横ナデ	浅黄色 Hue7.5YR8/3	明黄褐色 Hue10YR6/6						○	○		良	
	450	SK72	埋土	4B	埦	1	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ 内　横ナデ，押圧→ナデ（見込み）	浅黄色 Hue2.5Y8/3	浅黄色 Hue2.5Y7/4		7.9		0.8		○	○		良	
	451	SK72	埋土	1	坏	2	外　横ナデ（体部） 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		6.2			○	○		白色鉱物	良	
	452	SK72	埋土	8	埦	−	外　横ナデ 内　ミガキ	明黄褐色 Hue10YR7/6	オリーブ黒色 Hue5Y3/1	13.4					○	○		良	内黒土師器
	453	SK72	埋土	一括	埦	−	外　回転ヘラケズリ，ナデ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	黒色 Hue7.5Y2/1						○	○		良	内黒土師器
	455	SK72	埋土	9	甕	−	外　横方向ハケ目 　→ナデ（口縁部～胴部上半） 　タタキ（胴部下半） 内　横方向ハケ目 　→ナデ（口縁部～胴部上半） 　ケズリ→ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	明黄褐色 Hue10YR6/6	25.8		21.3		○	○	○		良	埋土は炭化物と焼土塊を含む
84	459	SK73	埋土	5	埦	2	外　横ナデ 内　ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	黒色 Hue7.5YR2/1	13.8				○	○	○		良	内黒土師器 高台欠損部摩滅
	460	SK73	埋土	1	埦	−	外　横ナデ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	黒色 Hue10YR2/1	15.0				○	○	○		良	内黒土師器
	461	SK73	埋土	1	坏	−	外　回転ヘラケズリ，横ナデ 内　ミガキ	浅黄色 Hue7.5Y7/3	灰色 Hue7.5Y6/1					○	○	○		良	詳細不明
	462	SK73	埋土	一括	埦	−	外　横ナデ，ケズリ 内　横ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	橙色 Hue7.5YR7/6	14.4				○	○	○		良	
	463	SK73	埋土	一括	埦	−	外　横ナデ，ケズリ 内　横ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	橙色 Hue7.5YR7/4	14.4				○	○	○		良	
	464	SK73	埋土	2	埦	−	外　横ナデ 内　横ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	黄橙色 Hue10YR8/6					○	○	○		良	
	465	SK73	埋土	一括	Ⅲ？	−	外　横ナデ 内　横ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	12.0				○	○	○		良	
	466	SK73	埋土	一括	坏	−	外　回転ヘラケズリ，横ナデ 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/4	淡黄色 Hue2.5Y8/4		6.4			○	○	○		良	
	467	SK73	埋土	一括	甕	−	外　ハケ目 内　ケズリ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	浅黄橙色 Hue2.5YR8/3					○	○	○	白色鉱物	良	焼成後に穿孔
	468	SK73	埋土	一括	甕	−	外　横方向のハケ目 内　ケズリ	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/2					○	○	○		良	
85	471	SK74	埋土	一括	（埦・坏）	−	外　横ナデ 内　ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黒色 HueN2/0					○	○	○		良	内黒土師器
	472	SK74	埋土	1	埦	4	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		6.6			○	○	○		良	
	474	SK74	埋土	11	甕	—	外　ナデ（口縁部～胴部上半） 　格子目タタキ 内　ナデ（口縁部～胴部上半） 　ケズリ（胴部下半）	橙色 Hue7.5YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	24.5				○	○	○		良	

第 24 表　古代の遺物観察表（2）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
86	482	SK77	埋土	2,3,5 8,9,10 11,12 16,17	甕	−	外　縦方向のハケ目（口縁部～胴部上半） →ナデ（口縁部のみ） 不定方向のハケ目（胴部下半） 内　ハケ目（口縁部），ケズリ（胴部） ナデ（底部）	明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue2.5Y6/6	24.0		23.1		○	○	○	白色鉱物 砂礫	良	炭化物と焼土塊が付着 器壁厚手
	483	SK77	埋土	6,8,19 20,21 22,23 24,26	甕	−	外　ナデ（口縁部） 横方向のハケ目，一部縦方向（胴部） 内　横方向のハケ目→一部にナデ（口縁部） ケズリ（胴部）	灰白色 Hue10YR7/1	褐灰色 Hue10YR6/1	25.5				○	○	○	白色鉱物	良	
	484	SK77	埋土	一括	甕		外　ナデ(口縁部)，横方向のハケ目(胴部) 内　横方向のハケ目(口縁部)，ケズリ(胴部)	橙色 Hue7.5YR7/6	黄橙色 Hue10YR8/6					○	○	○		良	
	487	SK70 SK77	埋土	一括 1	塊	2	外　反時計回りの回転ナデ→墨書 ヘラ切り→高台→ナデ 内　回転ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	13.8	6.9	6.7	0.5	○	○	○		良	墨書土器 SK70 と SK77 間で接合 回転台時計回り
	488	SK77	埋土	一括	塊	2	外　横ナデ 内　横ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	11.8				○	○	○		良	
	489	SK77	埋土	一括	塊	2	外　横ナデ 内　横ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	橙色 Hue7.5YR7/6					○	○	○		良	
	490	SK77	埋土	一括	坏	2	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	14.4	7.4	3.6		○	○	○		良	
	491	SK77	埋土	一括	坏	2	外　横ナデ 内　横ナデ	明黄褐色 Hue10YR7/6	黄橙色 Hue10YR8/6	13.0				○	○	○		良	
	492	SK77	埋土	一括	(塊・坏)	−	外　横ナデ→線刻 内　横ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	11.9				○	○	○		良	焼成後線刻
	493	SK77	埋土	一括	坏	2？	外　横ナデ 内　横ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	明黄褐色 Hue10YR6/6		5.6			○	○	○		良	
	494	SK77	埋土	一括	塊	2	外　横ナデ，ヘラ切り→高台→ナデ 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		6.8		0.5	○	○	○		良	
	495	SK77	埋土	一括	塊	−	外　横ナデ 内　ミガキ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	黒色 Hue5Y2/1					○	○			良	内黒土師器
87	497	SB67 (SP71)	埋土	1	坏	1	外　回転ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　回転ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	橙色 Hue7.5YR7/6	12.5	5.0	4.2		○	○	○		良	回転台時計回り
	498	SB67 (SP71)	埋土	一括	(塊・坏)	−	外　ナデ 内　ミガキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	黒色 Hue5Y2/1					○	○	○		良	内黒土師器 傾き不明
	500	SB67 − P1	埋土	一括	坏	−	外　ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4		6.0			○	○	○		良	
	501	SB67 − P7	埋土	一括	塊	−	外　ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ	にぶい橙色 Hue2.5YR7/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4		7.0			○	○	○		良	
	502	SB67 − P7	埋土	一括	塊	−	外　ナデ 内　ミガキ	明黄褐色 Hue10YR7/6	黒色 HueN2/0					○	○	○		良	内黒土師器
	503	SB67 − P7	埋土	一括	甕	−	外　ナデ(口縁部)，縦方向のハケ目(胴部) 横方向のハケ目→ナデ（口縁部） 内　ケズリ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	22.2				○	○	○		良	ハケの目が細かい
88	509	SP106	埋土	一括	塊	2	横ナデ（口縁部～体部上半） 外　回転ヘラケズリ（体部下半） ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　回転ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	13.5	6.3	5.7	0.7	○	○	○		良	角高台
	511	SP116	埋土	一括	塊	−	外　横ナデ 内　横ナデ	黄灰色 Hue2.5Y6/2	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2	13.2				○	○	○		良	黒色土器？
	512	SP116	埋土	一括	塊	−	外　横ナデ 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい褐色 Hue7.5YR6/3	灰黄褐色 Hue10YR5/2		6.3		0.5	○	○	○		良	黒色土器？ 高台貼付部に刻み
	513	SP107	埋土	一括	塊	−	外　横方向のハケ目（頸部），ナデ（胴部） 内　ケズリ	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3					○	○	○		良	器壁厚手
92	514	SD38	下	181 141	坏	1	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	14.2	7.3	4.3		○	○	○		良	底部外面に渦巻痕
	515	SD38	下	142	坏	1	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue5YR6/8	橙色 Hue5YR6/8	13.1	6.2	3.9		○	○	○		良	
	516	SD38	下	213	坏	1	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	橙色 Hue5YR6/8	橙色 Hue5YR6/8		5.0			○	○	○	白色鉱物	良	回転台反時計回り
	517	SD38	下	142	坏	1	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6		6.4			○	○	○		良	回転台時計回り
	518	SD38	下	153	坏	1	横ナデ（胴部） 外　回転ヘラケズリ（胴部下端） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		5.4			○	○	○		良	
	519	SD38	下	221 233	坏	2	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	11.0	5.2	3.9		○	○	○		良	

第 25 表　古代の遺物観察表（3）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
92	520	SD38	下	3	坏	2	横ナデ（口縁部～体部上半） 外　回転ヘラケズリ（体部下半） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	10.5	5.3	3.4		○	○	○		良	回転台時計回り
	521	SD38	下	34 37 40	坏	2	横ナデ（口縁部～体部上半） 外　回転ヘラケズリ（体部下半） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	11.4	6.7	3.3		○	○	○		良	
	522	SD38	下	114	坏	2	横ナデ（口縁部～体部上半） 外　回転ヘラケズリ（体部下半） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	10.4	6.0	3.3		○	○	○		良	回転台時計回り
	523	SD38	下	7 216	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	11.2	5.0	4.1		○	○	○		良	底部外面に棒状工具痕 回転台時計回り
	524	SD38	下	4, 9 152	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	10.4	5.0	4.7		○	○	○		良	回転台時計回り
	525	SD38	下	26	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/4	淡黄色 Hue2.5Y8/3	10.6	6.0	3.9		○	○	○		良	回転台時計回り
	526	SD38	下	216	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/3	10.2	5.3	3.9		○	○	○		良	回転台時計回り
	527	SD38	下	140	坏	3	横ナデ（口縁部～体部上半） 外　回転ヘラケズリ（体部下半） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	明黄褐色 Hue10YR7/6	浅黄橙色 Hue10YR8/4	10.8	5.0	3.5		○	○			良	回転台時計回り
	528	SD38	下	215	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	10.0	5.0	3.6		○	○	○		良	回転台時計回り
	529	SD38	下	90	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	灰黄色 Hue2.5Y6/2	10.4	4.4	3.7		○	○	○		良	
	530	SD38	下	22	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3	10.6	5.4	3.4		○	○	○		良	
	531	SD38	下	131	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　回転ナデ（渦巻状の痕跡が残る）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3	11.2	5.3	3.5		○	○	○	黒色鉱物	良	回転台時計回り
	532	SD38	下	16	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	10.0	5.0	2.8		○	○	○	黒雲母 茶色鉱物	良	回転台時計回り
	533	SD38	下	38	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→回転ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	11.0	5.2	2.8		○	○	○		良	回転台時計回り
	534	SD38	下	202	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	灰黄色 Hue2.5Y6/2	10.8	5.0	3.3		○	○	○		良	
	535	SD38	下	95	皿	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	淡黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	9.5	5.2	2.5		○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
	536	SD38	下	198	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	灰黄色 Hue2.5Y7/2	浅黄色 Hue10YR7/3	10.5	5.4	2.4		○	○	○		良	回転台時計回り
	537	SD38	下	17	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4	9.6	5.0	2.7		○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
	538	SD38	下	113 166	坏	3	横ナデ（体部） 外　回転ヘラケズリ（体部下端） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3		6.4			○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り 角閃石を多く含む
	539	SD38	下	121 130	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5YR8/3	淡黄色 Hue2.5YR8/3		5.2			○	○	○	黒色鉱物	良	回転台時計回り
	540	SD38	下	15	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		5.5			○	○	○		良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕？
	541	SD38	下	60	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り（底部） 内　回転ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4		5.3			○	○	○		良	回転台時計回り
	542	SD38	下	164	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，同心円状のナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	灰白色 Hue2.5Y8/2		5.1			○	○	○	茶色鉱物	良	
	543	SD38	下	104	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3		5.1			○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
	544	SD38	下	132	坏	3	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3		4.8			○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
93	545	SD38	下	184	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	灰白色 Hue2.5Y8/2	灰白色 Hue2.5Y8/2	12.6	6.6	4.6		○	○	○	白色鉱物	良	
	546	SD38	下	37	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4	11.9	6.4	4.5		○	○	○	茶色鉱物 黒色鉱物	良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕？
	547	SD38	下	25	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	11.5	6.0	4.3		○	○	○	茶色鉱物 黒色鉱物	良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕？
	548	SD38	下	94 192	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	11.0	6.2	4.2		○	○		黒雲母 茶色鉱物	良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕？
	549	SD38	下	211 234	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	10.4	5.8	3.8		○	○	○	茶色鉱物	良	
	550	SD38	下	121	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/4	11.0	6.0	5.1		○	○	○	黒雲母 黒色鉱物	良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕？

第 26 表　古代の遺物観察表（4）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
93	551	SD38	下	59	坏	4	外　横ナデ（体部下端に粘土付着） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		6.4			○	○	○	黒雲母 茶色鉱物	良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕
	552	SD38	下	62	坏	4	外　横ナデ（体部下端に粘土付着） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3		6.8			○	○	○		良	回転台時計回り
	553	SD38	下	133	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4		6.4			○	○	○		良	回転台時計回り
	554	SD38	下	102	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3		6.0			○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕
	555	SD38	下	119	坏	4	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4		6.1			○	○	○	黒雲母 茶色鉱物	良	回転台時計回り
	556	SD38	下	50 51	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	橙色 Hue5YR7/8	橙色 Hue7.5YR7/6	11.2	6.2	5.1		○	○	○		良	回転台時計回り
	557	SD38	下	231	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	8.8	6.4	4.2		○	○	○	黒色鉱物	良	回転台時計回り 底部不安定
	558	SD38	下	155 201	坏	5	外　回転ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	9.4	5.8	3.7		○	○			良	回転台時計回り
	559	SD38	下	112 168	坏	5	外　横ナデ（体部下端は未調整） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3		6.0			○	○	○	黒雲母 黒色鉱物	良	回転台時計回り
	560	SD38	下	8	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→回転ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	明黄褐色 Hue10YR7/6		6.0			○	○	○		良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕
	561	SD38	下	124	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4		7.0			○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
	562	SD38	下	9	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→回転ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	灰白色 Hue2.5Y8/2		5.9			○	○	○		良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕？
	563	SD38	下	一括	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6		5.7			○	○	○	黒雲母	良	回転台時計回り
	564	SD38	下	208	坏	5	外　横ナデ（体部下端は未調整） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→回転ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		5.8			○	○	○	黒雲母	良	回転台時計回り 底部外面に工具痕？
	565	SD38	下	57	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→回転ナデ（底部）	灰白色 Hue2.5Y8/2	灰白色 Hue2.5Y8/2		6.7			○	○	○	黒色鉱物	良	回転台時計回り
	566	SD38	下	24	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	灰黄色 Hue2.5Y7/2		6.0			○	○	○	黒雲母	良	
	567	SD38	下	45	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		5.6			○	○	○	黒雲母	良	
	568	SD38	下	94	坏	5	外　横ナデ（体部下端は未調整） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4		5.4			○	○	○		良	回転台時計回り
	569	SD38	下	41 217	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6		5.9			○	○	○	茶色鉱物	良	
94	570	SD38	下	一括	坏	6	外　回転ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3		6.0			○	○	○	黒色鉱物	良	回転台時計回り
	571	SD38	下	20	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		6.2			○	○			良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕
	572	SD38	下	1	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		6.0			○	○	○		良	回転台時計回り 底部外面に棒状工具痕
	573	SD38	下	118	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	灰黄褐色 Hue10YR6/2	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3		6.0			○	○	○	白色鉱物	良	回転台時計回り
	574	SD38	下	83	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	浅黄橙色 Hue10YR8/4		7.0			○	○	○		良	
	575	SD38	下	一括	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	黄橙色 Hue10YR8/4	黄橙色 Hue10YR8/4		6.2			○	○	○		良	回転台時計回り
	576	SD38	下	191	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3		6.4			○	○			良	
	577	SD38	下	39	坏	6	外　回転ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3		6.0			○	○	○		良	
	578	SD38	下	172 194	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい橙色 Hue7.5YR7/3		6.0			○	○	○		良	回転台時計回り
	579	SD38	下	一括	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6		6.0			○	○	○		良	回転台時計回り
	580	SD38	下	52	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	橙色 Hue2.5Y6/8	橙色 Hue2.5Y6/8		6.4			○	○	○		良	回転台時計回り
	581	SD38	下	一括	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4		5.8			○	○	○	黒雲母	良	
	582	SD38	下	48	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR7/6		5.4			○	○	○		良	回転台時計回り
	583	SD38	下	63	坏	6	外　横ナデ（体部下端に粘土付着） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		6.0			○	○	○		良	回転台時計回り

第 27 表　古代の遺物観察表（5）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
94	584	SD38	下	213	坏	6	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3		5.4			○	○	○		良	回転台時計回り
	585	SD38	下	35	坏	6	外　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　中央から強いナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3		6.2			○	○	○		良	回転台時計回り
	586	SD38	下	76	坏	6	外　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	灰黄色 Hue2.5Y7/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2		6.0			○	○	○	白色鉱物 黒色鉱物	良	
	587	SD38	下	96	坏	6	外　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　－	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4		6.2			○	○	○	黒雲母	良	
	588	SD38	下	86	坏	－	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue2.5Y8/2		5.6			○	○	○		良	底部外面のヘラ切り痕が深い
	589	SD38	下	一括	坏	－	外　横ナデ，ヘラ切り→工具痕？（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		6.0			○	○	○		良	回転台時計回り
	590	SD38	下	224	坏	－	外　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4		12.2		3.6	○	○	○		良	高台付坏 回転台時計回り
95	591	SD38	下 上	185 一括	埦	1	外　回転ナデ→赤色顔料塗布 ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ→赤色顔料塗布，ナデ（底部）	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4		9.2		0.7	○	○	○		良	内外面に赤色顔料塗布 回転台時計回り
	592	SD38	下 中	一括	埦	1	外　回転ナデ→赤色顔料塗布 ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ→赤色顔料塗布 ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6		10.0		0.7	○	○	○		良	内外面に赤色顔料塗布 回転台時計回り
	593	SD38	下	一括	埦	2	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/4	灰黄色 Hue2.5Y6/2		7.4		0.6	○	○	○	黒色鉱物	良	
	594	SD38	下	106 107 108	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	14.0	7.5	5.3	1.3	○	○	○	黒雲母 白色鉱物 茶色鉱物	不	回転台時計回り
	595	SD38	下	109	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	13.0	7.5	5.2	1.2	○	○	○	黒雲母 白色鉱物 茶色鉱物	不	回転台時計回り
	596	SD38	下	105	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	12.4	8.6	4.9	0.8	○	○	○	黒雲母 黒色鉱物	良	回転台時計回り
	597	SD38	下	163	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ 布目圧痕（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4		8.0		1.3	○	○	○		良	見込みに布目圧痕 回転台時計回り
	598	SD38	下	12	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3		8.3		1.5	○	○	○	白色鉱物	良	回転台反時計回り
	599	SD38	下	215	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6		6.8		0.8	○	○	○	黒雲母 白色鉱物	良	
	600	SD38	下	99 103	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3		8.7		1.1	○	○	○	黒雲母	良	回転台時計回り
	601	SD38	下	27	埦	3	外　横ナデ，ハケ目（高台）？ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/4		6.5		1.1	○	○	○		良	回転台時計回り ハケ目状工具痕
	602	SD38	下	46	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3					○	○	○	茶色鉱物	良	
	603	SD38	下	49	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4					○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
	604	SD38	下	120	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　回転ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3					○	○	○	黒色鉱物 茶色鉱物	良	回転台時計回り
	605	SD38	下	43	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3					○	○	○	茶色鉱物	良	
	606	SD38	下	167	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3					○	○	○	黒雲母 黒色鉱物 茶色鉱物	良	回転台時計回り
	607	SD38	下	128	埦	4	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3		8.6		1.8	○	○	○	白色鉱物	良	回転台反時計回り
	608	SD38	下	159	埦	4	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3		7.0		1.4	○	○	○	砂粒	良	回転台時計回り
	609	SD38	下	219 222	埦	4	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3		7.4		1.5	○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	
	610	SD38	下	165	埦	4	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	灰白色 Hue2.5Y8/2	灰白色 Hue2.5Y8/2		7.6		1.6	○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り

第 28 表　古代の遺物観察表（6）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カルセン	他		
95	611	SD38	下	220	埦	4	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/4	淡黄色 Hue2.5Y8/4		6.4		1.1	○		○	黒雲母	良	回転台時計回り
	612	SD38	下	68 69 162	埦	4	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4		7.2		1.2	○	○	○	黒色鉱物	良	回転台時計回り
	613	SD38	下	71	埦	4	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　強いナデ（底部）	にぶい黄褐色 Hue10YR7/4	にぶい黄褐色 Hue10YR7/4		6.1		1.0	○	○	○	黒色鉱物 茶色鉱物	良	回転台時計回り
	614	SD38	下	160	埦	4	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4		7.8		1.0	○	○	○		良	回転台時計回り
	615	SD38	下	161	埦	4	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4				1.2	○	○	○	黒雲母 黒色鉱物	良	
96	616	SD38	下	53	埦	5A	外　回転ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	14.2	9.5	7.1	2.2	○	○	○	黒色鉱物	良	回転台時計回り
	617	SD38	下	44	埦	5A	外　回転ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	13.0	8.2	7.0	1.6	○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
	618	SD38	下	100 214	埦	5A	外　回転ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	14.6	9.2	6.6	1.9	○	○	○	黒雲母 白色鉱物 黒色鉱物	良	回転台時計回り
	619	SD38	下	188	埦	5A	外　横ナデ，回転ヘラケズリ（体部下端） ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3					○	○	○		良	回転台時計回り
	620	SD38	下	157	埦	5A	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/4		9.1		2.0	○	○	○	白色鉱物	良	赤色顔料？
	621	SD38	下	101	埦	5A	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい橙色 Hue5YR6/3	橙色 Hue5YR6/6		9.0		2.0	○	○	○	白色鉱物 黒色鉱物	良	高台内面に刺突痕
	622	SD38	下	206	埦	5A	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	橙色 Hue5YR6/6		8.4		1.6	○	○	○		良	赤色顔料？
	623	SD38	下	28	埦	5A	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，木葉痕（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3		8.7		1.9	○	○	○	白色鉱物	良	内面に木葉痕
	624	SD38	下	89	埦	5A	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		9.0		1.8	○	○	○		良	回転台時計回り
	625	SD38	下	72	埦	5A	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	浅黄橙色 Hue7.5YR8/3		7.4		1.1	○	○	○		良	赤色顔料？
	626	SD38	下	30	埦	5A	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	浅黄橙色 Hue10YR8/3					○	○	○		良	
	627	SD38	下	178	埦	5A	外　ナデ（高台） 内　－	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6		8.3			○	○	○		良	
	628	SD38	下	2	埦	5B	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/2	14.2	9.6	7.6	2.2	○	○	○	茶色鉱物 黒色鉱物	良	回転台時計回り
	629	SD38	下	10	埦	5B	外　回転ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3	15.2	9.8	7.2	2.1	○	○	○	白色鉱物	良	回転台時計回り
	630	SD38	下	97 100 212 227	埦	5B	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue5YR7/8	橙色 Hue5YR7/8	13.7	7.8	6.5	1.7	○	○	○	黒雲母 白色鉱物 黒色鉱物 茶色鉱物	良	回転台反時計回り
	631	SD38	下	156	埦	5B	外　回転ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　回転ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/3	14.0	8.6	6.7	1.7	○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	回転台反時計回り
	632	SD38	下	111	埦	5B	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3		8.6		1.7	○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
	633	SD38	下	225	埦	5B	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	14.0				○	○	○		良	回転台反時計回り
	634	SD38	下	55	埦	5B	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3		9.0		1.8	○	○	○		良	回転台時計回り
	635	SD38	下	127	埦	5B	外　回転ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	灰白色 Hue2.5Y8/2					○	○	○		良	回転台時計回り
	636	SD38	下	5	埦	5B	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4					○	○	○		良	
	637	SD38	下	154	埦	5B	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	浅黄色 Hue2.5Y7/3					○	○	○		良	回転台時計回り 二次加工品？
	638	SD38	下	190	埦	5B	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/2	にぶい黄橙色 Hue10YR7/2					○	○	○	黒雲母 白色鉱物	良	回転台時計回り
	639	SD38	下	36	埦	5B	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3					○	○	○		良	回転台時計回り

第 29 表　古代の遺物観察表（7）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
97	640	SD38	下	一括	埦	6	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4		7.6		1.0	○	○	○		良	
	641	SD38	下	228	埦	6	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR3/8	浅黄橙色 Hue10YR3/8		6.2		1.1	○	○	○	黒雲母	良	
	642	SD38	下	77	埦	6	外　（横ナデ） 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ケズリ→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3							○		良	
	643	SD38	下	139	埦	6	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ケズリ→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3					○	○	○		良	
	644	SD38	下	145 146	埦	7	外　ケズリ，ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ，ケズリ→ナデ（底部）	灰白色 Hue10YR8/2	灰白色 Hue10YR8/2	14.6	8.0	5.2	1.0	○	○	○		良	
	645	SD38	下	一括	埦	8	外　ヘラ切り→高台→刺突→ナデ（底部） 内	浅黄色 Hue2.5Y7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/4					○	○	○		良	高台内面に刺突痕
	646	SD38	下	172	埦	8	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→刺突→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/6		7.4		1.3	○	○	○	黒雲母 白色鉱物	良	高台内面に刺突痕
	647	SD38	下	116	埦	–	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4		6.6		0.8	○	○	○	白色鉱物	良	
	648	SD38	下	78	埦	–	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	黄灰色 Hue2.5Y5/1	浅黄色 Hue2.5Y7/3		8.0		0.9	○	○	○		良	
	649	SD38	下	126 129	埦	–	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4		7.5		1.2	○	○	○	茶色鉱物	良	底部薄い
	650	SD38	下	122	埦	–	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4					○	○	○		良	底部薄い
	651	SD38	下	98	埦	–	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　押圧→ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6					○	○	○		良	底部薄い
	652	SD38	下	181	埦	2	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ミガキ	灰黄色 Hue2.5Y7/2	黒色 Hue2.5Y2/1	14.2	7.4	5.6	0.6	○	○	○		良	内黒土師器
	653	SD38	下	一括	埦	2	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ミガキ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	黒色 HueN2/0		8.0		0.4	○	○	○		良	内黒土師器
	654	SD38	下	一括	埦	–	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黒色 Hue10Y2/1		7.4		0.7	○	○	○		良	内黒土師器
	655	SD38	下	一括	皿	1	外　横ナデ 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	橙色 Hue5YR6/8	橙色 Hue5YR6/8	14.6	11.0	1.5		○	○	○		良	
	656	SD38	下	197	皿	1	外　横ナデ 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	14.0	9.6	1.5		○	○	○	茶色鉱物	良	
	657	SD38	下	198	皿	1	外　横ナデ 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，外縁に強いナデ（底部）	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	12.9	9.0	1.5		○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	
	658	SD38	下	32 158	皿	2	外　横ナデ 　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	11.0	6.8	3.3	1.1	○	○	○	黒色鉱物 茶色鉱物	良	高台付皿
	659	SD38	下	79	皿	3	外　横ナデ 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	10.9	5.3	2.5		○	○	○		良	「充実高台」付皿
	660	SD38	下	42	皿	3	外　回転ナデ，高台部下端に粘土付着 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	11.8	6.0	2.8		○	○	○		良	「充実高台」付皿
	661	SD38	下	56	皿	4	外　横ナデ 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	10.8	5.8	2.5		○	○	○		良	回転台時計回り
	662	SD38	下	61	皿	4	外　横ナデ 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	黒色 Hue7.5YR1.7/1	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		5.7			○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	底部外面は黒色
	663	SD38	下	117	皿	4	外　横ナデ 　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		5.6			○	○	○		良	回転台時計回り

第 30 表　古代の遺物観察表（8）　墨書土器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
97	664	SD38	下	33	坏	6	外　横ナデ→墨書 　　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4		5.4			○	○	○		良	墨書土器 回転台時計回り

第 31 表　古代の遺物観察表（9）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
98	667	SD38	下	一括	甕	－	外　ナデ(口縁部)，横方向のハケ目(胴部) 内　ナデ（口縁部），ケズリ（胴部）	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	19.8				○	○	○		良	
	668	SD38	下	一括	甕	－	外　ナデ（口縁部～胴部上半） 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3					○	○	○		良	
	669	SD38	下	一括	甕	－	外　ナデ 内　ナデ(口縁部)，横方向のケズリ(胴部)	褐灰色 Hue10YR4/1	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3	24.8				○	○	○		良	煤付着 器壁厚手
	670	SD38	下	144 189	甕	－	外　横方向のナデ 内　横方向のナデ(口縁部)，ケズリ(胴部)	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	29.3				○	○	○	小礫	良	煤付着 器壁厚手
	671	SD38	下	一括	甕	－	外　ナデ 内　ナデ（口縁部），ケズリ（胴部）	にぶい黄橙色 Hue10YR5/3	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4					○	○	○		良	煤付着 鉢形？
	672	SD38	下	一括	甕	－	外　ハケ目 内　ケズリ	黒色 Hue10YR2/1	黒色 Hue2.5Y2/1					○	○		白色鉱物	良	

第 32 表　古代の遺物観察表（10）　土師器・二次加工品

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
98	673	SD38	下	一括	坏 紡錘車	6?	外　ヘラ切り→ナデ→穿孔 内　外縁に強いナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		5.8			○	○	○		良	二次加工
	674	SD38	下	174	埦	－	外　ナデ，破損→剥離 内　ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3					○	○	○		良	二次加工
	675	SD38	下	207	埦	－	外　ナデ，破損→剥離 内　ナデ	淡黄色 Hue2.5Y8/3	淡黄色 Hue2.5Y8/3					○	○	○		良	二次加工
	676	SD38	下	14 538	埦	5A	外　ナデ，破損→剥離 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	14.5				○	○	○	黒色鉱物	良	二次加工 回転台時計回り

第 33 表　古代の遺物観察表（11）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
100	686	SD38	中	一括	埦	2？	外　ヘラ切り→ナデ→ヘラ記号 内　ミガキ→破損→剥離	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	黒色 Hue7.5Y2/1		6.0		1.1	○	○	○		良	二次加工 内黒土師器，ヘラ記号
	687	SD38	上	一括	埦	8	外　横ナデ 　　ヘラ切り→高台→刺突→ナデ（底部） 内　横ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/3	浅黄色 Hue2.5Y7/3					○	○	○	茶色鉱物	良	高台内面に刺突痕 回転台時計回り
	688	SD38	上	一括	埦	2	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3		7.0		0.9	○	○	○	白色鉱物	良	
	689	SD38	中	一括	埦	2	外　横ナデ 　　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ミガキ→赤色顔料塗布	淡橙色 Hue5YR8/4	橙色 Hue5YR6/6		8.4		0.9	○	○	○		良	内面に赤色顔料塗布
	690	SD38	上	一括	坏	3	外　回転ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue5YR6/8	黄橙色 Hue7.5YR7/8	10.0	5.2	3.3		○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	回転台時計回り
	691	SD38	中	一括	埦	5	外　横ナデ，体部下端は未調整 　　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	淡黄色 Hue2.5Y8/3	灰白色 Hue2.5Y8/2		5.5			○	○	○		良	
	692	SD38	上	一括	坏皿？	－	外　ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ 　　中心と外縁に同心円状のナデ（底部）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	灰黄色 Hue2.5Y7/2		7.8			○	○	○	白色鉱物	良	
	693	SD38	上	一括	大盤？ 鉢？	－	外　ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		12.8			○	○	○		良	底部外面に棒状の圧痕
	694	SD38	上	一括	坏	－	外　ナデ，糸切り（底部） 内　ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	16.8	12.8	3.3		○	○	○		良	
	695	SD38	上	一括	坏	－	外　ナデ，糸切り（底部） 内　ナデ	褐灰色 Hue5YR4/1	橙色 Hue5YR6/6	14.2	9.8	3.5		○	○	○		良	体部が屈曲する
	696	SD38	上	一括	坏	－	外　ナデ，糸切り（底部） 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	11.5	7.4	2.9		○	○	○		良	
	697	SD38	中	一括	坏	－	外　ナデ，糸切り（底部） 内　ナデ	橙色 Hue2.5YR6/8	橙色 Hue5YR6/6		9.8			○	○		白色鉱物	良	

第 34 表　古代の遺物観察表（12）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
								外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
101	706	SD38	－	一括	埦	2	外　横ナデ(体部), ヘラケズリ(体部下端) ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	黄橙色 Hue7.5YR8/8	黄橙色 Hue7.5YR8/8		7.0		0.4	○	○	○	白色鉱物	良	回転台時計回り
	707	K－19 区	撹乱	一括	埦	－	外　ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　ミガキ	明黄褐色 Hue10YR7/6	黒色 HueN1.5/0		7.6		0.5	○	○	○		良	内黒土師器 底部薄い
	708	SD38	Ⅱ	一括	坏	6	外　ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，押圧→ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		6.6			○	○	○		良	底部薄い
	709	SD38	－	一括	坏	3	横ナデ（口縁部～体部） 外　ケズリ（体部下端） ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/3	浅黄橙色 Hue10YR8/3	10.0	5.8	3.0		○	○	○		良	
	710	SD38	－	一括	Ⅲ	－	外　ヘラミガキ ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6		8.0			○	○	○	茶色鉱物	良	
	711	SD38	－	一括	坏	－	外　横ナデ，糸切り（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/7	15.2	11.2	3.4		○	○	○		良	体部が屈曲する
	712	SD38	－	一括	蓋	－	外　ナデ 内　ナデ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	黄橙色 Hue10YR8/6	14.0				○	○	○		良	

第 35 表　古代の遺物観察表（13）　須恵器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層位	取上番号	器種	部位	器面調整	色調		法量 (cm)			胎土				備考
								外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他	
80	438	SK68	埋土 1	6	甕	頸部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕	灰色 Hue5Y4/1	灰オリーブ色 Hue5Y5/2					○	○	黒雲母	
	439	SK68	埋土 1	一括	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4				○	○	○		
	440	SK68	埋土 1	8	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　平行タタキ	灰オリーブ色 Hue5Y5/3	灰オリーブ色 Hue5Y5/3				○	○	○		
	441	SK68	埋土 1	5	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕	灰黄色 Hue2.5Y6/2	灰黄褐色 Hue10YR6/2				○	○	○		
81	444	SK70	埋土 1	2	壺	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue7.5Y5/1				○	○	○		
	445	SK70	埋土	一括	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕	灰色 Hue5Y6/1	灰オリーブ色 Hue5Y6/2				○	○	○		
83	454	SK72	埋土 1	2	壺	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue10Y6/1	灰色 Hue10Y6/1	10.7				○			
84	469	SK73	埋土	一括	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　平行タタキ→ナデ	にぶい橙色 Hue2.5YR6/3	灰オリーブ色 Hue5Y5/2					○	○		
	470	SK73	埋土	一括	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　平行タタキ→ナデ	にぶい橙色 Hue2.5YR6/3	灰オリーブ色 Hue5Y5/2					○	○		
85	473	SK74	埋土	一括	碗	底部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3				○	○	○		
	475	SK74	埋土 4	3	甕	口縁部～胴部	外　平行タタキ 内　青海波当具痕	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1				○	○	○	黒雲母	外面～口縁部内面に自然釉
	476	SK74	埋土 4	6	甕	口縁部～胴部	外　平行タタキ 内　ケズリ→ナデ（頸部） 青海波当具痕（胴部）	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y5/1				○	○	○		外面～口縁部内面に自然釉
	477	SK74	埋土	一括	壺	胴部	外　ナデ 内　ナデ	褐色 Hue10YR4/4	赤褐色 Hue2.5YR4/6				○	○	○	黒雲母	器面全体に自然釉
	478	SK74	埋土 5	10	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕	灰色 Hue5Y5/1	灰オリーブ色 Hue5Y6/2					○	○		外面全体に自然釉
	479	SK74	埋土 5	8	甕	胴部	外　平行タタキ 内　青海波当具痕→ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y5/1				○	○	○	黒雲母	
	480	SK74	埋土 5	9	甕	胴部	外　平行タタキ 内　青海波当具痕	灰色 Hue5Y4/1	灰オリーブ色 Hue5Y6/2					○	○	黒雲母	外面全体に自然釉
	481	SK74	埋土 4	4	甕	胴部	外　平行タタキ 内　青海波・平行当具痕→ナデ	黄灰色 Hue2.5Y4/1	黄灰色 Hue2.5Y4/1				○	○	○	黒雲母	
86	485	SK77	埋土	一括	壺	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕→ナデ	灰色 Hue10Y5/1	灰色 Hue10Y5/1				○	○	○		
	486	SK77	埋土	一括	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　平行タタキ→ナデ	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	黄褐色 Hue2.5Y5/3				○	○	○		
	496	SK77	埋土	一括	坏	胴部～底部	外　ナデ 内　ナデ	灰オリーブ色 Hue5Y5/2	灰オリーブ色 Hue5Y5/2		9.2		○	○	○		

第 36 表　古代の遺物観察表（14）　須恵器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	部位	器面調整	色調		法量 (cm)			胎土				備考
								外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他	
87	499	SB67（SP71）	埋土	2	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕	赤灰色 Hue2.5YR4/1	灰赤色 Hue2.5YR4/2				○		○	黒雲母	SB67 － P9
	504	SB67 － P8	埋土	一括	壺	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	黒色 Hue10YR2/1	オリーブ黒色 Hue5Y3/1						○		
	505	SB67 － P8	埋土	一括	甕	頸部	外　格子目タタキ 内　ケズリ→ナデ，青海波当具痕	灰黄褐色 Hue10YR5/2	灰黄褐色 Hue10YR5/2						○		
	506	SB67 － P8	埋土	一括	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　平行タタキ→ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	黄灰色 Hue2.5Y4/1							黒雲母	
	507	SB67 － P8	埋土	一括	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	黒褐色 Hue2.5Y3/1						○		
	508	SB67 － P8	埋土	一括	甕	胴部	外　平行タタキ 内　平行タタキ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/3						○		
88	510	SP107	埋土	一括	坏	口縁部～胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰オリーブ色 Hue5Y5/2	灰黄色 Hue2.5Y7/2				○	○	○		
99	677	SD38	下	一括	坏	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 HueN5/0	灰色 HueN5/0				○	○			
	678	SD38	下	一括	坏	底部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue10Y4/1	灰色 Hue7.5Y4/1		11.0		○	○	○		
	679	SD38	下	一括	壺	胴部～底部	外　回転ナデ 内　回転ナデ	灰色 HueN6/0	灰色 HueN6/0		6.6		○				備前系 回転台時計回り
	680	SD38	下	一括	壺	頸部	外　ナデ 内　ケズリ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/3	灰褐色 Hue7.5YR4/3				○	○	○		備前系
	681	SD38	下	186 235	甕	胴部	外　平行タタキ 内　青海波当具痕	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y5/1				○	○	○		備前系 外面に自然釉
	682	SD38	下	193	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕→ナデ	灰オリーブ色 Hue5Y6/2	灰白色 Hue2.5Y7/1				○	○	○		
	683	SD38	下	93	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　平行タタキ	黒褐色 Hue10YR3/2	黄灰色 Hue2.5Y5/1				○	○	○		備前系 外面に茶褐色の釉薬
	684	SD38	下	一括	甕	胴部	外　平行タタキ 内　平行タタキ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1				○	○	○		
	685	SD38	上 下	一括	—	胴部	外　平行タタキ 内　ナデ	灰色 HueN6/0	灰黄褐色 Hue10YR5/2				○	○			
100	698	SD38	上	一括	—	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1				○	○			東播系（篠産）
	699	SD38	上	一括	碗	口縁部～底部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue7.5Y5/1	灰色 Hue7.5Y6/1	14.0	9.2	5.0	○	○		白色鉱物	
	700	SD38	中	一括	鉢	胴部～底部	外　回転ナデ 内　ナデ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y6/1		10.5		○	○	○	白色鉱物	
101	715	SD38	中	一括	坏	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰黄色 Hue2.5Y6/2				○	○	○		
	716	SD38	－	一括	坏	底部	外　ナデ 内　ナデ	オリーブ黒色 Hue7.5Y3/1	灰白色 Hue5Y7/1		9.2		○				外面に自然釉
	717	SD38	－	一括	鉢	口縁部	外　回転ナデ 内　回転ナデ	黄灰色 Hue2.5Y6/1	黄灰色 Hue2.5Y6/1	30.4			○	○		白色鉱物	
	718	SD38	下	一括	壺	胴部	外　平行タタキ→回転カキメ→櫛描文 内　青海波当具痕	黄灰色 Hue2.5Y4/1	灰黄色 Hue2.5Y6/2				○	○	○		
	719	SD38	下	一括	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　平行タタキ	にぶい赤褐色 Hue5YR5/4	にぶい橙色 Hue5YR6/4				○	○	○		外面に釉薬

第 37 表　古代の遺物観察表（15）　焼塩土器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	色調		法量 (cm)			胎土				焼成	備考
					外面	内面	口径	器高	器厚	石英	長石	カクセン	他		
100	705	SD38	上	－	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6				○	○	○		良	口縁部内外面に布目の圧痕

第 38 表　古代の遺物観察表（16）　緑釉陶器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	種別	器種	部位	産地	法量 (cm)			胎土色調	釉薬			備考
									口径	底径	器高		種類	色調	部位	
97	665	SD38	下	－	緑釉陶器	輪花皿	口縁部	京都産？				浅黄色 Hue5Y7/3	緑釉	オリーブ黄色 Hue7.5Y6/3	全面施釉	内外面に劃花文 越州窯系青磁の模倣品

第 39 表　古代の遺物観察表（17）　不明

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	種別	分類	部位	産地	法量 (cm)			胎土色調	釉薬			備考
									口径	底径	器高		種類	色調	部位	
97	666	SD38	下	－	不明品	－	胴部	－				にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	鉄釉？	黒色 Hue10Y2/1	内面全面施釉？	詳細不明

第 40 表　古代の遺物観察表（18）　陶磁器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	種別	分類	法量 (cm)			胎土色調	釉薬			備考
							口径	底径	器高		種類	色調	部位	
100	701	SD38	上	一括	同安窯系青磁・碗	碗Ⅰ				灰白色 Hue5Y7/1	青磁釉	灰白色 Hue5Y7/2	残存部全面施釉	外面櫛目文
	702	SD38	上	一括	龍泉窯系青磁・碗	碗Ⅰ				灰白色 Hue5Y7/2	青磁釉	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	残存部全面施釉	外面連弁文
	703	SD38	中	一括	龍泉窯系青磁・碗	碗Ⅰ		6.7		灰色 Hue5Y6/1	青磁釉	オリーブ色 Hue5Y5/4	畳付釉剥ぎ	見込みに目跡有り

第 41 表　古代の遺物観察表（19）　陶磁器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	種別	分類	法量 (cm)			胎土色調	釉薬			備考
							口径	底径	器高		種類	色調	部位	
101	713	SD38	Ⅱ	一括	龍泉窯系青磁・碗	碗Ⅰ	16.8			灰色 Hue5Y6/1	青磁釉	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	残存部全面施釉	内面方彫り
	714	SD38	Ⅱ	一括	龍泉窯系青磁・碗	碗Ⅰ				灰色 Hue5Y6/1	青磁釉	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	残存部全面施釉	内面方彫り

第 42 表　古代の遺物観察表（20）　滑石製品

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	部位	把手	石材	色調	備考
100	704	SD38	上	一括	石鍋	口縁部	縦方向	滑石	灰色 Hue5Y6/1	外面に煤付着

第 43 表　古代の遺物観察表（21）　金属製品

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	材質	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	備考
81	442	SK70	埋土２	2, 3, 4, 5	刀子	鉄	136.0	11.0	3.7	基部に木材が付着する
83	456	SK72	埋土２	5	装飾品？	青銅	8.0	5.0	1.0	銀が付着する 「へ」の字型に曲がる
	457	SK72	埋土２	7	装飾品？	青銅	8.0	5.0	2.0	銀が付着する
	458a	SK72	埋土２	6	装飾品？	青銅	2.3	5.0	2.0	銀が付着する
	458b	SK72	埋土２	6	装飾品？	青銅	1.2	5.0	2.5	銀が付着する 「コ」の字型に曲がる

第 44 表　古代の遺物観察表 (22)　土師器

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
102	720	P － 28 区	Ⅰ	蓋	－	外　ヘラケズリ，ナデ 内　ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4					○	○	○		良	
	721	P・Q － 33 区	撹乱	坏	5	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/3	12.0	6.0	4.0		○	○	○	黒色鉱物 茶色鉱物	良	
	722	P － 33 区	Ⅰ	埦	5	外　横ナデ ヘラ切り→ナデ→ヘラ記号（底部） 内　押圧→ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3		5.6			○	○	○		良	底部外面にヘラ記号
	723	R － 31 区	Ⅰ	坏	6	外　横ナデ ヘラ切り→ナデ→ヘラ記号（底部） 内　ナデ，外縁に強いナデ（底部）	黄橙色 Hue7.5YR7/8	黄橙色 Hue7.5YR7/8		5.8			○	○	○	白色鉱物	良	底部外面にヘラ記号
	724	L － 19 区	Ⅰ	Ⅲ	－	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	橙色 Hue7.5YR7/6	明黄褐色 Hue10YR7/6	15.9	10.8	2.4		○	○	○		良	
	725	P － 28 区	Ⅰ	Ⅲ	－	外　回転ヘラケズリ→ヘラミガキ ヘラ切り→ナデ（底部） 内　ヘラミガキ	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	13.8	7.0	2.5		○	○	○	茶色鉱物	良	回転台時計回り
	726	O － 25 区	Ⅲ	Ⅲ	－	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	浅黄橙色 Hue7.5YR8/6	浅黄橙色 Hue10YR8/4		6.8			○	○	○		良	
	727	M － 24 区	Ⅲ	埦	1	外　横ナデ，ヘラ切り→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4		10.4		0.5	○	○	○		良	
	728	O － 27 区	Ⅲ	埦	3	外　横ナデ ヘラ切り→高台→ナデ（底部） 内　横ナデ，ナデ（底部）	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	橙色 Hue7.5YR7/6		6.7		1.0	○	○	○		良	
	729	J ～ M － 17 ～ 20 区	Ⅰ	甕	－	外　ナデ 内　ナデ（口縁部），ケズリ（胴部）	橙色 Hue7.5YR7/6	黄橙色 Hue10YR7/4	15.6				○	○	○		良	
	730	J － 20 区	Ⅰ	甕	－	外　（ハケ目→）ナデ 内　（ハケ目→）ナデ（口縁部）ケズリ（胴部）	にぶい橙色 Hue5YR6/4	橙色 Hue7.5YR6/6	16.4				○	○	○	白色鉱物	良	

第 45 表　古代の遺物観察表 (23)　土師器

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	分類	器面調整	色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
							外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
102	731	K － 19 区	Ⅲ	甕	－	外　ナデ（口縁部），ハケ目→ナデ（胴部） 内　ハケ目→ナデ（口縁部），ナデ（胴部上半） ケズリ（胴部下半）	浅黄色 Hue2.5Y7/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	24.4				○	○	○		良	
	732	P･Q － 32 区	撹乱	甕	－	外　（櫛状の）ハケ目→ナデ（口縁部），ナデ（胴部） 内　（櫛状の）ハケ目，ケズリ（胴部）	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4					○	○	○		良	
	733	J ～ M － 17 ～ 20 区	Ⅰ	甕	－	外　縦方向のハケ目（胴部） 内　ケズリ（胴部）	にぶい赤褐色 Hue5YR4/4	にぶい赤褐色 Hue5YR4/4					○	○		滑石	良	
	734	P － 26 区	Ⅲ	甕	－	外　ナデ 内　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	にぶい褐色 Hue7.5YR5/4	21.2				○	○	○		良	鉢形？

第 46 表　古代の遺物観察表 (24)　須恵器

挿図番号	掲載番号	出土地点	層位	器種	部位	器面調整	色調		法量 (cm)			胎土				備考
							外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他	
103	735	先行 13Tr.	Ⅰ	蓋	口縁部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰黄色 Hue2.5Y6/2	浅黄色 Hue2.5Y7/3	13.2							外面に自然釉
	736	N － 24 区	Ⅲ	蓋	口縁部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰色 Hue7.5Y5/1	灰色 Hue7.5Y5/1	13.0			○	○			外面に重ね焼きによる付着物
	737	N － 25 区	Ⅲ	坏	底部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰白色 Hue10Y7/1	灰白色 Hue10Y7/1		9.2		○	○			
	738	K － 20 区	Ⅲ	坏	全体	外　ヘラ削り 内　横ナデ	灰色 Hue5Y5/1	灰色 Hue5Y5/1	15.7	7.5	3.1	○	○	○		轆轤右回転
	739	K － 20 区	Ⅲ	坏	底部	外　ヘラ削り 内　横ナデ	灰色 Hue5Y5/1	灰色 Hue10Y6/1		4.6		○	○	○		轆轤左回転
	740	K － 20 区	Ⅲ	坏	底部	外　ヘラ削り 内　横ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1		8.2		○	○	○		轆轤右回転
	741	J ～ M － 17 ～ 20 区	Ⅰ	甕	口縁部	外　横ナデ 内　横ナデ	黄灰色 Hue2.5Y6/1	黄灰色 Hue2.5Y6/1				○	○	○		
	742	I － 19 区	Ⅰ	長頸壺	胴部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1						○		
	743	J ～ M － 17 ～ 20 区	Ⅰ	壺？	底部	外　タタキ 内　ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	黒色 Hue7.5YR2/1		12.8				○		
	744	K － 19 区	Ⅰ	壺	底部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰色 Hue10Y5/1	灰色 Hue5Y5/1		14.0		○	○			
	745	先行 18Tr	Ⅰ	壺	脚部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 HueN4/1		13.4		○	○	○		
	746	O － 29 区	Ⅱ	擂鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ 内　擂溝	明黄褐色 Hue10YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6				○				擂溝 10 本 1 セット
	747	SP101	埋土	擂鉢	口縁部 ～胴部	外　ナデ 内　擂溝	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR6/6	35.4			○		○		擂溝 11 本 1 セット
	748	O － 26 区	Ⅲ	擂鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue5Y5/1	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4				○	○	○		擂溝 7 本 1 セット
	749	L － 27 区	Ⅰ	擂鉢	胴部 ～底部	外　ナデ 内　擂溝	灰オリーブ色 Hue5Y5/2	灰色 Hue5Y5/1		18.5		○		○		擂溝 10 本 1 セット 外面に指圧痕
	750	O － 24 区	Ⅲ	壺	口縁部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰色 Hue5Y4/1	灰色 Hue7.5Y6/1	14.0			○	○			
	751	O － 24 区	Ⅲ	捏鉢	胴部 ～底部	外　ナデ 内　ヘラ調整	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4				○		○		
	752	O － 26 区	Ⅱ	甕	頸部	外　カキ目 内　ナデ	暗オリーブ色 Hue7.5Y4/3	にぶい黄橙色 Hue10YR7/3						○		外面に自然釉
	753	L － 27 区	Ⅰ	捏鉢	胴部	外　「ハ」字状タタキ 内　カキ目	灰色 Hue7.5Y4/1	灰黄色 Hue2.5Y6/2				○	○			

第 47 表　中世の遺物観察表（1）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	器面調整		色調		法量 (cm)				胎土				焼成	備考
						口縁部～体部	底部	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
109	755	SP79	埋土	1	坏	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り ナデ	にぶい赤褐色 Hue2.5Y5/4	にぶい赤褐色 Hue2.5Y5/3	13.2	9.4	3.1		○	○	○		良	
	756	SP79	埋土	2	坏	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り ナデ	橙色 Hue2.5Y7/6	橙色 Hue2.5Y7/4	9.0	6.9	1.8		○	○	○		良	
112	761	SI7	埋土 11	一括	坏	外　横ナデ 内　横ナデ		明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	15.0	8.0	3.3		○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	
	762	SI7	埋土 1	1	坏	外　横ナデ 内　横ナデ		橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	13.4				○	○	○	茶色鉱物	良	
	763	SI7	埋土 1	3	坏	外　横ナデ 内　横ナデ		橙色 Hue7.5YR6/8	橙色 Hue7.5YR6/6		6.2			○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	
	764	SI7	埋土 1	2	坏	外　－ 内　－	糸切り ナデ	橙色 Hue5YR6/8	橙色 Hue5YR6/8		7.0			○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	
114	771	SI19	埋土 1	4, 5, 8, 10	坏	外　回転ナデ 内　回転ナデ	糸切り 回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	12.6	6.6	3.3		○	○	○	白色鉱物	良	
	772	SI19	埋土 1	7, 9, 12	坏	外　回転ナデ 内　回転ナデ	糸切り ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	12.2	6.4	3.3		○	○	○	白色鉱物	良	

第 48 表　中世の遺物観察表（2）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	器面調整		色調		法量（cm）				胎土				焼成	備考
						口縁部～体部	底部	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石	カクセン	他		
114	773	SI19	埋土 1	一括	坏	外　回転ナデ 内　回転ナデ	糸切り 回転ナデ	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	12.8	6.8	3.1		○	○	○	白色鉱物	良	
	774	SI19	埋土 1	11	小皿	外　回転ナデ，体部下端未調整 内　回転ナデ	糸切り	橙色 Hue5YR6/6	橙色 Hue5YR6/6	7.0	4.5	2.0		○	○	○	白色鉱物	良	
	775	SI19	埋土 1	6	小皿	外　回転ナデ，体部下端未調整 内　回転ナデ	糸切り	橙色 Hue7.5YR6/6	橙色 Hue7.5YR6/6	7.2	4.6	1.6		○	○	○	白色鉱物	良	
	776	SI19	埋土 1	一括	小皿	外　回転ナデ，体部下端未調整 内　回転ナデ	糸切り	明赤褐色 Hue5YR5/8	明赤褐色 Hue5YR5/8	7.0	4.2	2.0		○	○	○	白色鉱物	良	
	777	SI19	埋土 1	一括	小皿	外　回転ナデ，体部下端未調整 内　回転ナデ	糸切り	明褐色 Hue7.5YR5/6	明褐色 Hue7.5YR5/6	7.4	5.0	1.8		○	○	○	白色鉱物	良	
115	780	ST62	埋土	3	坏	外　回転ナデ 内　回転ナデ	糸切り 押圧→回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	14.2	6.5	3.2		○	○	○	白色鉱物	良	供献品
	781	ST62	埋土	2	坏	外　回転ナデ 内　回転ナデ	糸切り 押圧→回転ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	13.3	7.0	2.6		○	○	○	白色鉱物	良	供献品
	782	ST62	埋土	4	小皿	外　回転ナデ 内　回転ナデ	糸切り	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR6/6	7.0	4.2	2.0		○	○	○	白色鉱物	良	供献品
	784	ST63	埋土	13	釜	外　ミガキ 内　ケズリ		橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6					○	○	○		良	
116	788	SP86	埋土	一括	埦	外　回転ナデ 内　回転ナデ	糸切り	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	11.4	6.7	6.0	0.7	○	○	○	白色鉱物	良	

第 49 表　中世の遺物観察表（3）

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	類別	器種	部位	器面調整	色調		法量（cm）			胎土				備考
									外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他	
110	758	SB120 － P1	埋土	一括	瓦質土器	釜	口縁部～胴部	外　ナデ 内　ケズリ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	暗灰黄色 Hue2.5Y4/2					○	○		SP81
	759	SB120 － P1	埋土	一括	瓦質土器	擂鉢	口縁部～胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue5Y5/1	灰色 Hue5Y5/1	32.5				○			備前系？ SP81
	760	SB120 － P1	埋土	一括	瓦質土器	擂鉢	口縁部～胴部	外　ナデ 内　ナデ	黄褐色 Hue2.5Y5/3	黄褐色 Hue2.5Y5/3					○			備前系？ SP81
112	765	SI7	埋土 1	一括	須恵器	碗	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰白色 Hue5Y7/1	灰白色 Hue5Y7/1				○	○	○		
	769	SI7	埋土 1	一括	須恵器	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　青海波当具痕	灰色 HueN6/0	灰オリーブ色 Hue5Y5/2				○	○			傾き不明
	770	SI7	埋土 1	19	陶器	鉢	胴部～底部	外　ナデ 内　ケズリ	黄褐色 Hue2.5Y5/4	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2		25.4		○	○	○		
116	789	SP99	埋土	一括	須恵器	壺	頸部	外　ナデ 内　ナデ	灰褐色 Hue7.5YR5/2	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4				○	○	○		
	790	SP104	埋土	一括	瓦質土器	擂鉢	胴部	外　ナデ 内　擂溝	灰色 Hue5Y4/1	黄灰色 Hue2.5Y4/1				○	○			
	791	SP99	埋土	一括	須恵器	甕	胴部	外　格子目タタキ 内　ナデ	にぶい橙 Hue7.5YR6/4	灰黄色 Hue2.5Y6/2					○	○		

第 50 表　中世の遺物観察表（4）　陶磁器

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	種別	分類	法量 (cm)			胎土色調	釉薬			備考
							口径	底径	高台高		種類	色調	部位	
109	757	SP79	埋土	一括	龍泉窯系青磁	碗 I		5.6	0.5	灰白色 Hue5Y7/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y6/2	畳付釉剥ぎ	見込みに草花文

第 51 表　中世の遺物観察表（5）　滑石製品

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	部位	把手	色調	法量 (cm)			備考
									口径	底径	器高	
108	754	SP79 SB119 － P5	埋土 埋土	一括 一括	石鍋	口縁部～底部	鍔状	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	17.6	15.0	10.5	
112	766	SI7	埋土 1	28	石鍋	胴部	鍔状	にぶい褐色 Hue7.5YR6/3				外面に煤付着
	767	SI7	埋土 2	3	石鍋	底部	－	灰黄色 Hue2.5Y5/1		19.6		外面に煤付着 割面が研磨される
	768	SI7	埋土 3	30	石鍋・温石	（底部付近）	－	黄灰色 Hue2.5Y6/1				穿孔有り 線刻状の加工痕及び擦痕有り 石鍋を温石として再利用

第 52 表　中世の遺物観察表（6）　銭

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	銭名	材質	計測値 (cm)							重量 (g)	初鋳年代	備考
							a	b	c	d	e	f	厚さ			
115	783	ST62	埋土	1	洪武通寶	銅	2.36	2.37	1.89	1.85	0.55	0.56	0.18	2.75	1368 年	

第 53 表　中世の遺物観察表（7）

挿図番号	掲載番号	出土遺構	層	取上番号	器種	材質	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
114	778	SI19	埋土 1	一括	和釘	鉄	3.5	0.9	1.10	
	779	SI19	埋土 1	一括	和釘	鉄	3.1	0.5	1.23	
115	785	ST63	埋土	一括	和釘	鉄	3.9	1.2	4.22	2 点が付着
	786	ST63	埋土	9	和釘	鉄	2.9	0.8	1.87	
	787	ST63	埋土	8	和釘	鉄	4.1	1.3	2.07	

第 54 表　中世の遺物観察表（8）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	器面調整		色調		法量 (cm)			胎土				焼成	備考
					口縁部～体部	底面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他		
117	792	K － 20 区	Ⅲ	坏	外　横ナデ 内　回転ナデ	糸切り 回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい橙色 Hue10YR7/4	13.8	9.4	3.0	○	○	○		良	
	793	N － 25 区	Ⅲ	坏	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4		8.1		○	○	○		良	
	794	M － 26 区	撹乱	坏	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り	にぶい黄褐色 Hue10YR6/4	にぶい黄褐色 Hue10YR6/4	11.8	8.8	2.9	○	○	○		良	

第 55 表　中世の遺物観察表（9）　土師器

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	器面調整		色調		法量 (cm)			胎土				焼成	備考
					口縁部～体部	底面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他		
117	795	P － 27 区	Ⅲ	坏	外　横ナデ 内　回転ナデ	糸切り 回転ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR7/3	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4		8.1		○	○	○		良	
	796	M － 26 区	撹乱	坏	外　横ナデ 内　回転ナデ？	糸切り	にぶい黄褐色 Hue10YR5/4	橙色 Hue7.5YR6/6		7.0		○	○	○		良	
	797	M － 26 区	撹乱	小皿	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	9.2	7.8	1.3	○	○	○		良	
	798	J － 20 区	Ⅰ	小皿	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り 外縁に強いナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	7.8	5.6	1.6	○	○	○	茶色鉱物	良	
	799	近代溝	Ⅱ	小皿	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り 外縁に強いナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	7.7	5.3	1.6	○	○	○		良	
	800	O － 28 区	Ⅲ	小皿	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り ナデ	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	浅黄橙色 Hue7.5YR8/4	7.1	6.1	1.6	○	○	○		良	
	801	L － 19 区	Ⅰ	小皿	外　回転ナデ 内　横ナデ	糸切り	にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	明赤褐色 Hue5YR5/6	8.7	7.3	1.7	○	○	○		良	
	802	O － 28 区	Ⅱ	坏	外　回転ナデ，(回転ヘラケズリ) 内　回転ナデ	糸切り ナデ	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	12.6	8.0	3.6	○	○	○	白色鉱物 茶色鉱物	良	
	803	O － 28 区	Ⅱ	皿	外　横ナデ，体部下半未調整 内　横ナデ	糸切り ナデ	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	7.9	5.8	2.5	○	○	○		良	
	804	O － 28 区	Ⅱ	皿	外　横ナデ，体部下半未調整 内　横ナデ	糸切り ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい橙色 Hue7.5YR7/4	7.7	5.2	2.5	○	○	○	茶色鉱物	良	
	805	O・P － 28・29 区	不明	皿	外　横ナデ，体部下半未調整 内　横ナデ	糸切り ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue7.5YR7/6	8.0	5.2	2.1	○	○	○		良	
	806	M － 26 区	撹乱	坏	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR6/4	にぶい黄褐色 Hue10YR7/4		7.2		○	○	○		良	
	807	O － 29 区	Ⅱ	大皿	外　回転ナデ 内　回転ナデ	糸切り 回転ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	浅黄色 Hue2.5Y7/3		15.8		○	○	○		良	
	808	M － 26	撹乱	捏鉢	外　回転ナデ 内　回転ナデ		にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	明黄褐色 Hue10YR7/6	20.8			○	○	○		良	須恵器模倣品？

第 56 表　中世の遺物観察表（10）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	類別	器種	部位	器面調整	色調		法量 (cm)			胎土				備考
								外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他	
117	810	近代溝	Ⅱ	瓦質土器	火鉢	口縁部 ～胴部	外　突帯 花文のスタンプ 　　布ナデ 内　布ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	黄灰色 Hue2.5Y6/1	39.8			○	○	○		内外面に煤付着
119	846	M － 24 区	Ⅲ	須恵器	捏鉢	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	灰白色 Hue5Y8/1	灰白色 Hue5Y8/1				○	○			東播系
	847	M － 26 区	撹乱	須恵器	捏鉢	口縁部	外　横ナデ 内　ナデ	灰色 Hue5Y6/1	灰色 Hue5Y6/1	26.8			○	○	○		東播系
	848	M － 24 区	Ⅰ	須恵器	捏鉢	口縁部	外　横ナデ 内　ナデ	灰色 Hue7.5Y5/1	灰色 Hue7.5Y5/1				○	○			東播系
	849	O － 26 区	Ⅰ	須恵器	捏鉢	口縁部	外　ナデ 内　横ナデ	灰白色 Hue5Y7/1	黒色 Hue7.5Y2/1						○		東播系 ヘラ記号
	850	O － 26 区	Ⅲ	須恵器	捏鉢	口縁部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y6/1				○	○			東播系
	851	N － 24 区	Ⅲ	須恵器	捏鉢	口縁部	外　横ナデ 内　横ナデ	灰色 Hue7.5Y6/1	灰色 Hue7.5Y6/1				○	○			東播系
	852	M － 26 区	撹乱	須恵器	捏鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 HueN6/0	灰色 HueN6/0				○	○			東播系
	853	N － 24 区	Ⅲ	須恵器	捏鉢	胴部	外　ナデ 内　ナデ	灰色 Hue10Y5/1	灰色 Hue10Y5/1				○	○			東播系

第 57 表　中世の遺物観察表（11）

挿図番号	掲載番号	出土 地点	層	器種	部位	色調	備考
117	809	N － 25 区	Ⅲ	石鍋	底部	暗灰黄色 Hue2.5Y5/2	

第 58 表　中世の遺物観察表（12）　磁器

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	種別	分類	部位	法量 (cm)			胎土色調	釉薬			備考
							口径	底径	器高		種類	色調	部位	
118	811	N － 24 区	Ⅲ	白磁	碗Ⅳ	口縁部				灰白色　Hue5Y8/2	透明釉	－	残存部全面施釉	
	812	N － 24 区	Ⅲ	白磁	碗Ⅳ	口縁部				淡黄色　Hue2.5Y8/3	透明釉	－	残存部全面施釉	
	813	O － 25 区	Ⅰ	白磁	碗Ⅳ	口縁部				灰白色　Hue5Y8/2	透明釉	－	残存部全面施釉	
	814	M － 26 区	Ⅲ	白磁	碗Ⅳ	底部		6.6		淡黄色　Hue2.5Y8/3	透明釉	－	残存部内面全面施釉	

第 59 表　中世の遺物観察表（13）　磁器

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	種別	分類	部位	法量 (cm)			胎土色調	釉薬			備考
							口径	底径	器高		種類	色調	部位	
118	815	O － 24 区	Ⅲ	白磁	Ⅲ IX	口縁部～底部	11.2	6.2	3.0	灰白色 Hue5Y8/1	透明釉	－	残存部全面施釉 口縁部剥ぎ取り	底部の釉薬を工具で伸ばす
	816	M － 26 区	撹乱	白磁	Ⅲ IX	口縁部	11.0			灰白色 Hue5Y7/1	透明釉	－	残存部全面施釉 口縁部剥ぎ取り	
	817	M － 26 区	撹乱	白磁	Ⅲ IX	口縁部	11.0			灰白色 Hue7.5Y7/1	透明釉	－	残存部全面施釉 口縁部剥ぎ取り	
	818	M － 26 区	撹乱	白磁	Ⅲ IX	口縁部～胴部	11.6			灰白色 Hue2.5Y8/2	透明釉	－	残存部全面施釉 口縁部剥ぎ取り	
	819	P － 26 区	Ⅰ	白磁	Ⅲ	胴部～底部		3.2		灰白色 Hue5Y8/1	透明釉	－	残存部内面全面施釉	
	820	M － 26 区	Ⅲ	白磁	Ⅲ	底部		5.0		灰白色 Hue2.5Y8/2	透明釉	－	底部外面以外全面施釉	
	821	Q － 32 区	Ⅰ	白磁	Ⅲ Ⅷ	底部		5.4		灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	底部外面以外全面施釉	見込みに草木文
	822	N － 31 区	Ⅰ	白磁	Ⅲ Ⅷ	底部		5.0		灰白色 Hue5Y7/1	青磁釉	灰白色 Hue7.5Y7/1	底部外面以外全面施釉	見込みに草木文
	823	M － 27 区	Ⅲ	白磁	Ⅲ Ⅷ	底部				灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	底部外面以外全面施釉	見込みに草木文
	824	M － 29 区	表採	同安窯系青磁	碗Ⅰ	胴部				灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	残存部全面施釉	外面櫛目文 傾き不明
	825	SD38	上	龍泉窯系青磁	碗Ⅰ	口縁部				灰白色 Hue5Y7/1	青磁釉	オリーブ黄色 Hue7.5Y6/3	残存部全面施釉	内面劃花文
	826	N － 24 区	Ⅲ	龍泉窯系青磁	碗Ⅰ	口縁部				灰白色 Hue2.5Y8/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y6/2	残存部全面施釉	内面劃花文
	827	O － 26 区	不明	龍泉窯系青磁	碗Ⅰ	胴部				灰色 Hue5Y5/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/2	残存部全面施釉	外面櫛描きによる連弁文 傾き不明
	828	M － 26 区	Ⅲ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	口縁部	14.8			灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5YR5/3	残存部全面施釉	外面連弁文
	829	L － 25 区	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	口縁部				灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10YR6/2	残存部全面施釉	外面連弁文
	830	O － 27 区	Ⅲ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	口縁部				灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10YR6/2	残存部全面施釉	外面連弁文
	831	N － 27 区	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	口縁部				灰色 Hue7.5Y6/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10YR6/2	残存部全面施釉	外面連弁文
	832	不明	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	口縁部				灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y6/2	残存部全面施釉	外面連弁文
	833	N － 25 区	Ⅲ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	口縁部				にぶい黄橙色 Hue10Y7/4	青磁釉	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4	残存部全面施釉	外面連弁文
	834	P － 33 区	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗	口縁部				灰白色 Hue10Y8/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5YR6/2	残存部全面施釉	外面雷文
	835	P・Q － 32・33 区	撹乱	龍泉窯系青磁	碗	口縁部				灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y5/2	残存部全面施釉	外面線描きの連弁文
	836	Q － 32 区	不明	龍泉窯系青磁	碗	口縁部				灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/3	残存部全面施釉	外面線描きの連弁文
	837	O － 26 区	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗	口縁部				灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y6/2	残存部全面施釉	外面線描きの連弁文
	838	M － 24 区	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	底部		5.0		灰色 Hue5Y6/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y5/2	高台内面及び畳付き以外全面施釉	見込みに草花文スタンプ
	839	M － 24 区	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	底部		4.8		灰白色 Hue2.5Y7/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y5/2	高台内面及び畳付き以外全面施釉	見込みに草花文スタンプ
	840	N・O － 28・29 区	Ⅱ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	底部		5.6		灰白色 Hue2.5Y7/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/3	高台内面及び畳付き以外全面施釉	見込みに「寿」状のスタンプ
	841	M － 26 区	撹乱	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	底部		3.8		灰白色 Hue2.5Y7/1	青磁釉	緑灰色 Hue10GY6/1	高台内面及び畳付き以外全面施釉	
	842	L － 27 区	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	底部		5.6		にぶい橙色 Hue7.5YR6/4	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5YR6/2	高台内面以外全面施釉	
	843	M － 26 区	撹乱	龍泉窯系青磁	碗Ⅱ	底部		5.6		灰白色 Hue5Y7/1	青磁釉	灰オリーブ色 Hue7.5Y5/2	高台内面及び畳付きの一部以外	見込みに幾何学文スタンプ
	844	M － 24 区	Ⅰ	龍泉窯系青磁	碗	底部		4.9		灰色 Hue5Y5/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10Y4/2	高台内面以外全面施釉	外面線描きの連弁文
	845	O・P － 28・29 区	不明	龍泉窯系青磁	碗	底部		5.4		灰白色 Hue7.5Y7/1	青磁釉	オリーブ灰色 Hue10YR5/2	高台内面以外全面施釉 見込みは釉剥ぎ	外面線描きの連弁文

第 60 表　近世の遺物観察表（1）

挿図番号	掲載番号	出土遺構	取上番号		古銭名	分類	初鋳年代	材質	計測値 (cm)							重量 (g)	備考
									a	b	c	d	e	f	厚さ		
122	854	ST17	－	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.56	2.56	1.94	1.94	0.57	0.57	0.15	10.87	4 枚付着
				b	－	－	－	銅	－	－	－	－	－	－	0.12		
				c	－	－	－	銅	－	－	－	－	－	－	0.12		
				d	－	－	－	銅	(2.30)	(2.30)	-	-	(0.59)	(0.63)	0.12		
	855	ST17	－	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.34	2.35	1.77	1.83	0.60	0.55	0.11	5.56	2 枚付着
				b	－	－	－	銅	(2.45)	(2.44)	－	－	(0.52)	(0.57)	0.12		
	856	ST17	－	－	寛永通寶	新	-	銅	2.47	2.46	1.97	1.97	0.61	0.64	0.11	1.82	

第 61 表　近世の遺物観察表（2）

挿図番号	掲載番号	出土遺構	取上番号		古銭名	分類	初鋳年代	材質	計測値 (cm)							重量 (g)	備考
									a	b	c	d	e	f	厚さ		
123	857	ST22	−	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.40	2.47	1.92	1.93	0.53	0.64	0.10	16.08	7 枚付着
				b	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				c	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				d	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				e	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				f	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				g	−	−	−	銅	(2.39)	(2.34)	−	−	(0.63)	(0.64)	0.12		
124	858	ST23	3	a	−	−	−	銅	(2.31)	(2.32)	−	−	(0.58)	(0.59)	0.16	8.00	3 枚付着
				b	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				c	−	−	−	銅	(2.30)	(2.31)	−	−	(0.58)	(0.62)	0.12		
	859	ST23	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.45	2.45	1.94	1.95	0.55	0.56	0.14	2.17	
	860	ST23	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.52	2.52	1.93	1.96	0.55	0.55	0.15	3.43	
	861	ST23	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.35	2.36	1.88	1.86	0.50	0.55	0.15	2.72	
125	862	ST24	−	−	寛永通寶	古	1636 年	銅	2.46	2.46	1.90	1.98	0.53	0.54	0.16	3.71	
	863	ST24	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.46	2.44	1.80	1.86	0.61	0.61	0.13	2.41	
126	864	ST27	−	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.45	2.46	1.93	1.92	0.56	0.55	0.16	11.76	4 枚付着
				b	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				c	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				d	−	−	−	銅	(2.38)	(2.39)	−	−	(0.60)	(0.50)	0.14		
	865	ST27	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.49	2.49	1.97	1.91	0.56	0.56	0.18	3.90	
	866	ST27		−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.32	2.32	1.85	1.82	0.62	0.61	0.17	3.44	
	867	ST27		−	寛永通寶	新・文	1668 年	銅	2.51	2.51	2.00	1.98	0.59	0.58	0.14	3.08	文銭
127	868	ST35	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.54	2.47	1.97	1.94	0.50	0.48	0.16	3.31	布付着
	869	ST35	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.35	2.35	1.88	1.86	0.63	0.65	0.11	2.17	
	870	ST35	−	−	−	−	−	銅	2.49	2.51	1.95	1.90	0.47	-	0.15	3.76	
	871	ST35	−	a	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−	12.27	3 枚付着
				b	寛永通寶	−	1739 年	鉄	−	−	−	−	−	−	−		
				c	寛永通寶	−	1739 年	鉄	−	−	−	−	−	−	−		
128	872	ST25	−	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.26	2.29	1.74	1.74	0.60	0.62	0.13	10.94	4 枚付着
				b	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				c	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				d	−	−	−	銅	(2.38)	(2.39)	−	−	(0.57)	(0.57)	0.12		
	873	ST25	−	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.32	2.31	1.88	1.88	0.61	0.61	0.10	5.21	2 枚付着
				b	−	−	−	銅	(2.37)	(2.36)	−	−	(0.57)	(0.59)	0.13		
	874	ST25	−	-	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.26	2.25	1.87	1.87	0.65	0.67	0.11	1.87	
	875	ST26	−	a	−	−	−	銅	(2.35)	(2.33)	−	−	(0.58)	(0.56)	−	23.34	7 枚付着
				b	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				c	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				d	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				e	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				f	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				g	−	−	−	銅	(2.50)	(2.50)	−	−	(0.55)	(0.57)	0.15		
130	876	ST29	−	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.46	2.44	1.90	1.95	0.59	0.59	0.10	5.88	2 枚付着
				b	−	−	−	銅	(2.48)	(2.47)	−	−	(0.53)	(0.53)	0.15		
				c	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.48	2.46	1.98	1.97	0.58	0.57	0.16	3.22	

第 62 表　近世の遺物観察表（3）

挿図番号	掲載番号	出土遺構	取上番号		古銭名	分類	初鋳年代	材質	計測値 (cm)							重量 (g)	備考
									a	b	c	d	e	f	厚さ		
130	877	ST30	−	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.34	2.34	1.90	1.86	0.59	0.58	0.17	18.87	7 枚付着
				b	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				c	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				d	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				e	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				f	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				g	−	−	−	銅	(2.36)	(2.33)	−	−	(0.59)	(0.54)	0.18		
	878	ST33	−	a	−	−	−	銅	(2.42)	(2.38)	−	−	(0.51)	(0.54)	0.10	9.30	3 枚付着
				b	−	−	−	銅	−	−	−	−	−	−	−		
				c	−	−	−	銅	(2.48)	(2.46)	−	−	(0.55)	(0.60)	0.15		
	879	ST32	−	a	−	−	−	銅	(2.33)	(2.46)	−	−	(0.50)	(0.51)	0.12	4.38	2 枚付着
				b	−	−	−	銅	(2.34)	(2.31)	−	−	(0.55)	(0.47)	0.14		
	880	ST32	2	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.29	2.30	1.91	1.91	0.68	0.69	0.12	5.29	2 枚付着
				b	寛永通寶	新	1697 年	銅	−	−	−	−	−	−	−		
	881	ST32	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.32	2.32	1.90	1.88	0.62	0.63	0.11	2.57	
	882	ST32	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.44	2.43	1.92	1.94	0.61	0.59	0.14	3.23	
	883	ST32	2	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.27	2.26	1.75	1.74	0.63	0.64	0.12	1.93	
	884	ST35	−	−	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.46	2.47	1.88	1.89	0.57	0.56	0.16	2.46	
	885	ST37	1	a	寛永通寶	新	1636 年	銅	2.60	2.55	1.91	1.93	0.59	0.58	0.13	5.54	2 枚付着
				b	−	−	−	銅	(2.34)	(2.31)	−	−	(0.59)	(0.61)	0.13		
	886	ST37	1	a	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.51	2.53	2.02	2.00	0.56	0.55	0.15	9.23	3 枚付着
				b	−	−	−	銅	(2.34)	(2.33)	−	−	(0.61)	(0.59)	0.12		
				c	寛永通寶	新	1697 年	銅	2.39	2.40	1.85	1.85	0.55	0.55	0.13		

第 63 表　近世の遺物観察表（4）

挿図番号	掲載番号	出土遺構	取上番号	器種	材質	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
130	887	ST17	102	和釘	鉄	4.9	0.7	3.15	木片が付着している
	888	ST22	2	和釘	鉄	4.4	1.0	1.93	木片が付着している
	889	ST22	7	和釘	鉄	4.1	0.7	1.55	木片が付着している
	890	ST23	ウ	和釘	鉄	4.0	0.7	2.19	頭部付近が木片に覆われている
	891	ST23	F	和釘	鉄	4.8	0.7	2.01	木片が付着している
	892	ST24	1	和釘	鉄	4.0	1.1	2.37	
	893	ST24	11	和釘	鉄	4.5	0.7	2.86	木片が付着している
	894	ST25	4	和釘	鉄	4.2	0.6	1.67	全体が木片に覆われている
	895	ST25	27 − 2	和釘	鉄	3.7	0.6	0.96	木片が付着している
	896	ST25	32	和釘	鉄	5.0	0.5	1.14	
	897	ST26	4	和釘	鉄	3.8	0.4	1.22	
	898	ST26	A	和釘	鉄	4.8	0.6	1.78	全体が木片に覆われている
	899	ST27	−	和釘	鉄	5.0	1.2	3.68	木片が付着している
	900	ST30	1	和釘	鉄	4.7	0.8	1.35	全体が木片に覆われている
	901	ST30	10	和釘	鉄	4.0	0.6	1.19	全体が木片に覆われている

第 64 表　近世・近代ほかの遺物観察表（1）

挿図番号	掲載番号	出土区	層	種別	部位	材質	長さ (cm)	厚さ (cm)	備考
132	923	12Tr.	I	煙管	雁首	銅	3.8	1.2	
	924	12Tr.	I	煙管	吸い口	銅	7.6	0.9	

第 65 表　近世・近代ほかの遺物観察表（2）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	種別	器種	器面調整		色調		法量 (cm)			胎土				備考
						口縁部～体部	底面	外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他	
131	905	L － 19 区	Ⅲ	土師質土器	埦？	外　横ナデ→ミガキ 内　横ナデ→ミガキ		明赤褐色 Hue5YR5/6	明赤褐色 Hue5YR5/6	13.5			○				詳細不明
132	910	T － 34 区	Ⅰ	土師質土器	香炉	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り ナデ	明黄褐色 Hue10YR6/6	明黄褐色 Hue10YR6/6	10.4	5.2	5.2		○	○		近代墓周辺で出土 仏具
	911	T － 34 区	Ⅰ	土師質土器	香炉	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り ナデ	にぶい黄褐色 Hue10YR7/4	にぶい黄褐色 Hue10YR7/4	10.0	4.8	4.9		○		黒雲母	近代墓周辺で出土 仏具
	912	T － 34 区	Ⅰ	土師質土器	香炉	外　横ナデ 内　横ナデ	糸切り ナデ	明黄褐色 Hue2.5Y7/6	明黄褐色 Hue2.5Y7/6	9.7	5.0	6.7		○	○	黒雲母	近代墓周辺で出土 仏具
	915	Q － 31 区	Ⅰ	土師質土器	Ⅲ	外　－ 内　回転ナデ	回転ナデ	橙色 Hue7.5YR7/6	橙色 Hue5YR7/6		16.0		○	○	○		詳細不明

第 66 表　近世・近代ほかの遺物観察表（3）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	種別	器種	部位	器面調整	色調		法量 (cm)			胎土				備考
								外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他	
132	918	Q － 31 区	Ⅰ	陶器	不明	口縁部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい黄色 Hue2.5Y6/3	にぶい黄色 Hue2.5Y6/4				○			黒雲母	
	920	O － 25 区	Ⅱ	陶器	鉢	口縁部～底部	外　ナデ 内　ナデ	浅黄色 Hue2.5Y7/4	オリーブ黄色 Hue5Y6/3	46.0	24.0	10.6	○				
	921	N・O － 28・29 区	Ⅱ	陶器	甕	口縁部	外　ナデ	にぶい褐色 Hue7.5YR5/3	橙色 Hue7.5YR6/6	18.4			○	○	○		

第 67 表　近世・近代ほかの遺物観察表（4）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	種別	分類	産地	法量 (cm)			胎土色調	釉薬			備考
							口径	底径	器高		種類	色調	部位	
131	902	N － 25 区	不明	染付	碗	漳州窯		5.4		浅黄色 Hue2.5Y7/3	透明釉	浅黄色 Hue2.5Y8/3	外面と一部高台外面	
	903	O － 28 区	不明	染付	碗	漳州窯		5.4		浅黄橙色 Hue10YR8/4	透明釉	灰白色 Hue5Y8/2	外面と一部高台外面	
	904	P － 28 区	Ⅱ	陶器	碗	肥前系	11.2	5.3	7.5	灰白色 Hue7.5Y7/1		灰オリーブ色 Hue7.5YR6/2	畳付釉剥ぎ	
	906	O － 29 区	Ⅱ	磁器	碗	肥前系	15.0			灰白色 Hue5GY8/1	透明釉		残存部全面施釉	外面に山水文
132	913	T － 34 区	Ⅰ	磁器	碗	肥前系	10.1	3.6	5.1	灰白色 Hue5Y8/2	灰釉	灰白色 Hue5Y8/2	全面施釉	二次焼成
	914	T － 34 区	不明	陶器	碗	－	10.4			灰白色 Hue5Y8/2	透明釉		口縁部から底部付近まで	白天目茶碗
	916	O － 29 区	Ⅱ	陶器	徳利	中国・朝鮮系		14.0		黄灰色 Hue2.5Y6/1	鉄釉	暗褐色 Hue10YR3/4	残存部外面全面施釉	
	917	N・O － 28・29 区	Ⅱ	陶器	甕	苗代川系				灰黄褐色 Hue10YR5/2	鉄釉	黒褐色 Hue2.5Y3/2	残存部全面施釉	
	919	O － 29 区	Ⅱ	陶器	擂鉢	肥前系	36.2			にぶい黄橙色 Hue10YR6/4	鉄釉	灰黄褐色 Hue10YR5/2	口縁部のみ施釉	

第 68 表　近世・近代ほかの遺物観察表（5）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	器種	部位	調整	色調		法量 (cm)			胎土				備考
							外面	内面	口径	底径	器高	石英	長石	カクセン	他	
131	907	O － 28 区	Ⅲ	火鉢	胴部	外　ナデ 内　布ナデ	にぶい黄橙色 Hue10YR7/4	にぶい黄色 Hue10YR6/3				○	○	○		外面に突帯
132	922	L － 27 区	Ⅰ	竈？	口縁部～胴部	外　ナデ 内　ナデ	にぶい橙色 Hue2.5Y6/4	黒色 Hue5Y2/1	35.8	27.5	11.9		○			煤付着．外面に「ナベヨ□□工場」のスタンプ

第 69 表　近世・近代ほかの遺物観察表（6）

挿図番号	掲載番号	出土地点	層	種別	色調		胎土				備考
					外面	内面	石英	長石	カクセン	他	
131	908	L － 19 区	Ⅲ	紡錘車	灰白色 Hue2.5Y8/2	灰白色 Hue2.5Y8/2	○	○	○		土師器の二次加工品
	909	N － 24 区	Ⅲ	紡錘車	浅黄橙色 Hue10YR8/4	浅黄橙色 Hue10YR8/4	○	○			土師器の二次加工品
132	925	先行 12Tr.	Ⅰ	土錘状製品	橙色 Hue7.5YR6/8	－	○	○	○	黒雲母	
	926	先行 12Tr.	Ⅰ	土錘状製品	にぶい橙色 Hue7.5Y7/4	－	○	○	○	黒雲母	

第４章　自然科学分析

外畠遺跡の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

外畠遺跡は，鹿児島県出水市荘上に所在し，出水平野を形成する扇状地の扇端部に立地する。標高は 12 ～ 14m 程度で，遺跡の西端は野田川によって形成された河岸段丘となっている。

本報告では，古植生に関する情報を得ることを目的として，花粉分析を実施する。

１　試料

本遺跡の層序は，上位からⅠ層～Ⅶ層に分層される。各土層の概略は，Ⅰ層が表土，Ⅱ層が近世～近代（一部のみに残存），Ⅲ層が縄文後期・晩期，古代，中世の遺物包含層，Ⅳ層・Ⅴ層がアカホヤ腐植土，Ⅵ層が暗灰褐色土，Ⅶ層がシラス再堆積層とされている。遺構は，時代を問わずⅣ層・Ⅴ層の上面で検出している。

花粉分析に用いる試料は，SK4 より採取した土壌２点（試料①；小形壺形土器内埋土，試料②；土坑内埋土）である。SK4 の遺構埋土は，シルト～砂質の暗褐色土である。それは，遺構形成時の地山と考えられる層（Ⅴ層）と非常に類似している。そのため，SK4 は，土坑掘削後に短期間で埋め戻されたものと想定している。また，SK4 の検出面付近で，小形壺形土器が検出された。検出状況ではやや倒れた状況だったが，本来は立位で据えられたものと考えている。なお，調査所見による時代観は，縄文時代後期から晩期と想定されている。

２　分析方法

試料約 10g について，水酸化カリウムによる泥化，篩別，重液（臭化亜鉛，比重 2.3）による有機物の分離，フッ化水素酸による鉱物質の除去，アセトリシス（無水酢酸 9：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い，物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し，400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し，出現する全ての種類について同定・計数する。同定は，当社保有の現生標本や島倉（1973），中村（1980）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

３　結果

結果を第 70 表に示す。試料①（SK4 小形壺形土器内埋土），試料②（SK4 土坑内埋土）のいずれからも，花粉化石がほとんど検出されなかった。検出された種類は，試料①からマツ属，イネ科，ナデシコ科が，試料②からモミ属，コナラ属アカガシ亜属が，１～２個体程度検出されたのみである。イネ科は保存状態が悪いため表面形態の観察ができなかったが，いずれも小型で，発芽孔の肥厚も明瞭でないため，イネ属等栽培種に由来するものではないと思われる。なお，花粉化石の保存状態は，いずれもやや悪い。

分析残渣は，いずれの試料も少なく，そのほとんどは微細な炭化植物片（微粒炭）であった。

４　考察

今回の分析の結果，縄文時代後期から晩期とされる SK4 出土の小形壺形土器内埋土（試料①），および SK4 土坑内埋土（試料②）からは花粉化石はほとんど検出されず，古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合，元々取り込まれる花粉量が少なかった，あるいは，取り込まれた花粉が消失した，という２つの可能性があげられる。調査所見からは，土坑掘削後に短期間で埋め戻されたものと想定されることから，埋積過程で花粉が取り込まれにくかったと推測される。また，土器内・土坑内は，埋積の過程で好気的環境下にあった可能性がある。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が，常に酸化状態にあるような場合，花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている（中村 1967; 徳永・山内 1971; 三宅・中越 1998 など）。検出された花粉化石の保存状態も良好でなかったことを考慮すると，わずかに取り込まれた花粉も，その後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

なお，わずかに検出された種類を見ると，木本類ではモミ属，マツ属，コナラ属アカガシ亜属が検出され，当

第 70 表　花粉分析結果

種　類	SK4 小形壺形土器内埋土 ①	SK4 土坑内埋土 ②
木本花粉		
モミ属	-	1
マツ属	1	-
コナラ属アカガシ亜属	-	1
草本花粉		
イネ科	2	-
ナデシコ科	1	-
不明花粉		
不明花粉	3	1
シダ類胞子		
シダ類胞子	2	3
合　計		
木本花粉	1	2
草本花粉	3	0
不明花粉	3	1
シダ類胞子	2	3
合計（不明を除く）	6	5

時の遺跡周辺に，これらの木本類の生育が窺える。既存の調査事例を見ると，約8,500年前以降にアカガシ亜属，シイ属，マキ属などからなる照葉樹林の発達が開始し，縄文時代後期～晩期では，アカガシ亜属，シイ属が主体の照葉樹林が優勢であったとされている（畑中ほか1998など）。今回検出された種類は，想定されている植生に生育している種類である。

また，土器内覆土からは，イネ科，ナデシコ科等の草本類も検出される。イネ科は，その形態から栽培に由来するものと考えにくいため，ナデシコ科と併せて遺構周辺の草本植生に由来すると推測される。

引用文献

畑中健一・野井英明・岩内明子，1998，九州地方の植生史．安田喜憲・三好教夫（編著），図説　日本列島植生史，朝倉書店，151-161.

三宅　尚・中越信和，1998，森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態．植生史研究，6，15-30.

中村　純，1967，花粉分析．古今書院，232p.

中村　純，1980，日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ（図版）．大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第12，13集，91p.

島倉巳三郎，1973，日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第5集，60p.

徳永重元・山内輝子，1971，花粉・胞子．化石の研究法，共立出版株式会社，50-7

外畠遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

外畠遺跡は，鹿児島県出水市荘上に所在し，出水平野を形成する扇状地の扇端部に立地する。標高は12～14m程度で，遺跡の西端は野田川によって形成された河岸段丘となっている。

本報告では，遺構の年代観に関する情報を得ることを目的として，放射性炭素年代測定を実施する。

1　試料

本遺跡の層序は，上位からⅠ層～Ⅶ層に分層される。各土層の概略は，Ⅰ層が表土，Ⅱ層が近世～近代（一部のみに残存），Ⅲ層が縄文後期・晩期，古代，中世の遺物包含層，Ⅳ層・Ⅴ層がアカホヤ腐植土、Ⅵ層が暗灰褐色土，Ⅶ層がシラス再堆積層とされている。遺構は，時代を問わずⅣ層・Ⅴ層の上面で検出している。

放射性炭素年代測定に用いる試料は，各遺構より出土した炭化種子・炭化物，計4点（試料③～試料⑥）である。試料③は，土坑SK20の底面より出土した炭化種子。土坑埋土はシルト～砂質の暗褐色土。基本層序のⅤ層に類似。試料④は，土坑SK44の底面より出土した炭化種子。土坑埋土は砂質の暗褐色土。基本層序のⅤ層に類似。

第71表　放射性炭素年代測定および暦年較正結果

試料名 遺構名	資料状態 ・種類	測定年代 (BP)	δ 13C (‰)	補正年代 (BP)	暦年較正年代（cal）				Code No.
					誤差	calAD/BC	calBP	相対比	
試料③ SK20	炭化種子 （コナラ属子葉）	3,600 ± 30	− 26.83 ± 0.67	3,570 ± 30 (3,565 ± 28)	σ	cal BC 1,949 − cal BC 1,884	cal BP 3,898 − 3,833	1.000	IAAA − 110375
					2 σ	cal BC 2,016 − cal BC 1,996	cal BP 3,965 − 3,945	0.041	
						cal BC 1,980 − cal BC 1,873	cal BP 3,929 − 3,822	0.855	
						cal BC 1,844 − cal BC 1,815	cal BP 3,793 − 3,764	0.064	
						cal BC 1,800 − cal BC 1,778	cal BP 3,749 − 3,727	0.040	
試料④ SK44	炭化種子 （コナラ属子葉）	3,490 ± 30	− 22.82 ± 0.67	3,530 ± 30 (3,527 ± 27)	σ	cal BC 1,906 − cal BC 1,872	cal BP 3,855 − 3,821	0.380	IAAA − 110376
						cal BC 1,845 − cal BC 1,813	cal BP 3,794 − 3,762	0.349	
						cal BC 1,802 − cal BC 1,777	cal BP 3,751 − 3,726	0.271	
					2 σ	cal BC 1,937 − cal BC 1,767	cal BP 3,886 − 3,716	1.000	
試料⑤ SD38	炭化材	1,100 ± 20	− 22.29 ± 0.65	1,140 ± 20 (1,140 ± 24)	σ	cal AD 884 − cal AD 901	cal BP 1,066 − 1,049	0.258	IAAA − 110377
						cal AD 917 − cal AD 966	cal BP 1,033 − 984	0.742	
					2 σ	cal AD 783 − cal AD 788	cal BP 1,167 − 1,162	0.009	
						cal AD 813 − cal AD 844	cal BP 1,137 − 1,106	0.066	
						cal AD 858 − cal AD 980	cal BP 1,092 − 970	0.924	
試料⑥ SK72	炭化材	1,320 ± 20	− 29.91 ± 0.71	1,230 ± 30 (1,234 ± 26)	σ	cal AD 709 − cal AD 747	cal BP 1,241 − 1,203	0.388	IAAA − 110378
						cal AD 766 − cal AD 783	cal BP 1,184 − 1,167	0.195	
						cal AD 787 − cal AD 820	cal BP 1,163 − 1,130	0.292	
						cal AD 842 − cal AD 860	cal BP 1,108 − 1,090	0.124	
					2 σ	cal AD 689 − cal AD 752	cal BP 1,261 − 1,198	0.382	
						cal AD 761 − cal AD 877	cal BP 1,189 − 1,073	0.618	

1）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用.
2）BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68%が入る範囲）を年代値に換算した値.
3）暦年較正計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用．計算には補正年代に示した括弧内の丸める前の値を使用．1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%．相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したもの.

試料⑤は，溝状遺構 SD38 の底面付近より出土した炭化物。出土した層は，やや粒子の粗いにぶい黄橙色土。この土は SD38 以外では確認されていない。試料⑥は，土坑 SK72 の底面付近より出土した炭化物。遺構の埋土は褐色土や暗褐色土，黄褐色土の混合土で，底面付近に炭化物や焼土を含む。

2　分析方法

土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去，NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

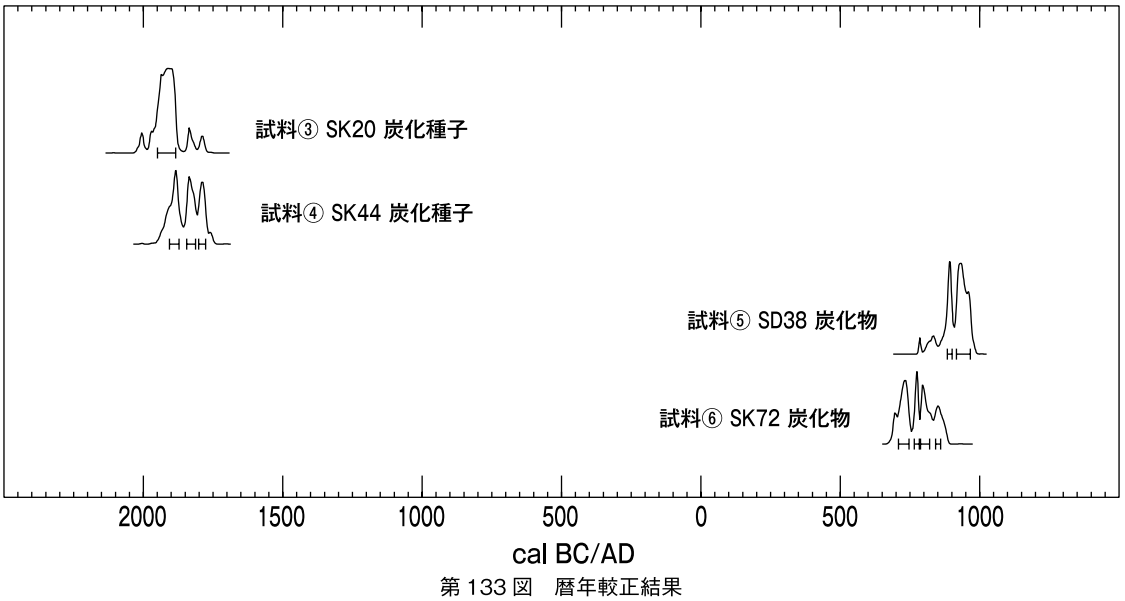
試料をバイコール管に入れ，1g の酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し，グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は、3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-II）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため，この値を用いて δ 13C を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また，測定年代は 1,950 年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。暦年較正とは，大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5，730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正は，CALIB 6.0 のマニュアルにしたがい，1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。暦年較正については，北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い，暦年較正結果は σ ・2 σ（σ は統計的に真の値が 68%の確率で存在する範囲，2 σ は真の値が 95%の確率で存在する範囲）の値を示す。また，表中の相対比（確立分布）は，σ，2 σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は，将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，1 年単位で表された値を記す。

3　結果

同位体効果による補正を行った測定結果および暦年較正結果を第 71 表，第 133 図に示す。同位体効果による補正を行った測定結果（補正年代）は，試料③（SK20 炭化種子）が 3,570 ± 30BP，試料④（SK44 炭化種子）が 3,530 ± 30BP，試料⑤（SD38 炭化物）が 1,140 ± 20BP，試料⑥（SK72 炭化物）が 1,230 ± 30BP を示す。なお，試料③，試料④は，種類を確認した結果，いずれもコナラ属の子葉（破片）であった。



第 133 図　暦年較正結果

これらの補正年代に基づく暦年較正結果（σ）は，試料③は calBC 1,949 － 1,884，試料④は calBC 1,906 － 1,777，試料⑤は calAD 884 － 966，試料⑥は calAD 709 － 860 である。

4　考察

放射性炭素年代測定を実施した結果，SK20 出土のコナラ属子葉（試料③）が 3,570 ± 30BP，SK44 出土のコナラ属子葉（試料④）が 3,530 ± 30BP と，いずれもほぼ同時期の補正年代が得られている。桒畑・東（1997）などを参考とすると，これらはいずれも縄文時代後期に相当する値である。花粉分析を実施した SK4 は，調査所見から縄文時代後期・晩期とされており，遺構埋土が当時の地山と推測される V 層と非常に類似するとされる。SK20 および SK44 の埋土も，調査所見では V 層に類似しており，SK4 と同様の特徴を持つ。得られた補正年代も，SK4 の想定年代と調和的であることから，これらはいずれも同時期の遺構と推測される。

一方，SD38 出土炭化物（試料⑤）が 1,140 ± 20BP，SK72 出土炭化物（試料⑥）が 1,230 ± 30BP であり，この 2 試料もほぼ同時期の補正年代を示す。暦年では，calAD 709 ～ calAD 966 を示すことから，概ね奈良時代～平安時代に相当する。

以上のことから，今回対象とした遺構は、概ね縄文時代後期に相当するもの（SK4，SK20，SK44），概ね奈良時代～平安時代に相当するもの（SD38，SK72）が混在していることが推定される。

引用文献

桒畑光博・東　和幸，1997，南九州の火山灰と考古遺物．月刊地球，19，4，208-214.

外畠遺跡の出土試料の自然科学分析（年代測定ほか）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

外畠遺跡では，Ⅳ層・Ⅴ層（アカホヤ腐植土）の上面から遺構が検出されている。Ⅱ層から近世～近代，Ⅲ層から縄文時代後期・晩期，古代，中世の遺物が出土している。

本報告では，竪穴建物状の遺構および土坑から出土した炭化物・炭化材を対象として，遺構の年代を確認するための放射性炭素年代測定を実施する。また，火葬墓あるいは再葬墓の可能性を検証するため土坑出土の土器内埋土や土坑埋土について，リン・カルシウム分析を実施する。

1．放射性炭素年代測定

（1）試料

試料は，SI7，SK77，SK68，SK72 から出土した炭化材 4 点（試料 1 ～ 4）である。試料 1（SI7 炭化物）は，微細な炭化材片多数と由来不明の炭化物，土壌が混在している。この中から，微細な炭化材片を抽出して試料とした。試料 2 （SK77 炭化物）は，ミカン割状の炭化材である。観察した範囲で年輪界は認められない。残存する最外部分を試料とした。試料 3（SK68 炭化材）は，節部分の破片である。いくつかある中から，最も大きな破片を試料とした。試料 4（SK72 炭化材）は，樹芯を含む破片と，樹芯の無い破片の 2 片がある。接合できないが，木材組織の特徴から同一種であり，元は同一個体と考えられる。樹芯の無い破片に最外年輪が残存しており，最外年輪を含む 2 年分を試料とした。

（2）分析方法

炭化材に土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合，これらをピンセット，超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後 HCl により炭酸塩等酸可溶成分を除去，NaOH により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去，HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分の除去を行う（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ，1g の酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて，管内を真空にして封じきり，500℃（30 分）850℃（2 時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素＋エタノールの温度差を利用し，真空ラインにて CO_2 を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製した CO_2 と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650℃で 10 時間以上加熱し，グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして，タンデム加速器のイオン源に装着し，測定する。測定機器は，3MV 小型タンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC Pelletron　9SDH-2）を使用する。AMS 測定時に，標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また，測定中同時に $^{13}C/^{12}C$ の測定も行うため，この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また，測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは，大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正することである。暦年較正に関しては，本来10年単位で表すのが通例であるが，将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算，再検討に対応するため，1年単位で表している。炭化材を試料としていることから，北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は，測定誤差σ，2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲，2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また，表中の相対比とは，σ，2σの範囲をそれぞれ1とした場合，その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

（3）結果

同位体効果による補正を行った測定結果および暦年較正結果を第72表，第134図に示す。補正年代は，試料1が820 ± 20BP，試料2が1,160 ± 20BP，試料3と試料4が1,170 ± 20BPを示す。また，測定誤差をσとして計算させた暦年校正結果は，試料1がcalAD1,215-1,255，試料2がcalAD784 − 949，試料3がcalAD782 − 935，試料4がcalAD782 − 931である。

なお，これらの炭化材については，樹種同定を併せて実施した。試料1と試料4は，道管が認められることから広葉樹であるが，種類は不明である。試料2は，落葉広葉樹のクヌギ節に同定された。試料3は，落葉広葉樹のクリまたは常緑広葉樹のシイ属であるが，節部分のため区別することができなかった。

（4）考察

SI7（方形竪穴建物）の炭化材は，遺構の底面付近で検出されており，微細な炭化材，由来不明の炭化物，土壌

第72表　放射性炭素年代測定結果

試料	遺構 試料名	種類 （樹種）	処理 方法	補正年代 BP	δ 13 C （‰）	測定年代 （暦年較正用） BP	暦年較正結果				Code No.
							誤差	cal BC/AD	cal BP	相対比	
試料1	SI7 炭化物	炭化材 （広葉樹）	AaA	820 ± 20	− 24.31 ± 0.52	810 ± 20 （818 ± 22）	σ	cal AD 1,215 - cal AD 1,255	cal BP 735 - 695	1.000	IAAA − 110848
							2σ	cal AD 1,179 - cal AD 1,264	cal BP 771 - 686	1.000	
試料2	SK77 炭化物	炭化材 （クヌギ節）	AaA	1,160 ± 20	− 26.96 ± 0.47	1,190 ± 20 （1,155 ± 22）	σ	cal AD 784 - cal AD 787	cal BP 1,166 - 1,163	0.021	IAAA − 110849
								cal AD 825 - cal AD 841	cal BP 1,125 - 1,109	0.126	
								cal AD 862 - cal AD 899	cal BP 1,088 - 1,051	0.482	
								cal AD 919 - cal AD 949	cal BP 1,031 - 1,001	0.371	
							2σ	cal AD 780 - cal AD 791	cal BP 1,170 - 1,159	0.044	
								cal AD 804 - cal AD 903	cal BP 1,146 - 1,047	0.604	
								cal AD 915 - cal AD 968	cal BP 1,035 - ,982	0.352	
試料3	SK68 炭化材	炭化材 （クリまたはシイ属）	AAA	1,170 ± 20	− 27.38 ± 0.48	1,210 ± 20 （1,166 ± 23）	σ	cal AD 782 - cal AD 788	cal BP 1,168 - 1,162	0.061	IAAA − 110850
								cal AD 812 - cal AD 845	cal BP 1,138 - 1,105	0.347	
								cal AD 857 - cal AD 894	cal BP 1,093 - 1,056	0.520	
								cal AD 927 - cal AD 935	cal BP 1,023 - 1,015	0.073	
							2σ	cal AD 778 - cal AD 899	cal BP 1,172 - 1,051	0.857	
								cal AD 918 - cal AD 950	cal BP 1,032 - 1,000	0.143	
試料4	SK72 炭化材	炭化材 （広葉樹）	AAA	1,170 ± 20	− 25.24 ± 0.63	1,170 ± 20 （1,168 ± 24）	σ	cal AD 782 - cal AD 789	cal BP 1,168 - 1,161	0.080	IAAA − 110851
								cal AD 810 - cal AD 848	cal BP 1,140 - 1,102	0.408	
								cal AD 854 - cal AD 894	cal BP 1,096 - 1,056	0.503	
								cal AD 930 - cal AD 931	cal BP 1,020 - 1,019	0.008	
							2σ	cal AD 777 - cal AD 899	cal BP 1,173 - 1,051	0.866	
								cal AD 918 - cal AD 952	cal BP 1,032 - 998	0.134	

1）処理方法は、酸処理－アルカリ処理－酸処理（AAA 処理）で、アルカリ濃度が 1N 未満の場合は AaA と表記している。
2）年代値の算出には、Libby の半減期 5568 年を使用した。
3）BP 年代値は、1950 年を基点として何年前であるかを示す。
4）年代値に付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の 68％が入る範囲）を年代値に換算した値。
5）暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を使用した。
6）暦年の計算には、暦年較正用の一桁目を丸める前の値を使用している。
7）年代値は、1 桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は 1 桁目を丸めていない。
8）統計的に真の値が入る確率はσは 68%、2σは 95%である
9）相対比は、σ、2σのそれぞれを 1 とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

が混在した状態であった。このうち，微細な炭化材を抽出して年代測定した結果は，補正年代で 820 ± 20BP（calAD1,215-1,255）であった。この結果から，遺構は中世前半に構築・使用された可能性がある。

土坑は，SK68，SK72，SK77 の 3 基であり，SK72 と SK77 は火葬墓・再葬墓の可能性が考えられている。試料 2（SK77）の炭化材は，土坑埋土から出土しており，長さ 1cm，幅 0.8cm，厚み 0.5cmのミカン割状を呈し，落葉広葉樹のクヌギ節に同定された。

観察した範囲では年輪界は認められなかった。試料 3（SK68）の炭化材は，いずれも節部分の破片であり，クリまたはシイ属に同定された。試料 4（SK72）の炭化材は，残存半径 2.4cmの芯持材であり，樹芯を含む破片と樹芯の無い破片に分かれているが，元は同一個体と考えられる。これらの炭化材の年代測定結果は，補正年代で 1,160 ± 20BP ～ 1,170 ± 20BP（calAD782 － 949）で，試料間の年代差がほとんど無いことから，遺構もほぼ同時期と考えられる。これらの土坑は，年代測定結果から平安時代前半の可能性がある。

各遺構の年代値については，今後各遺構から出土した遺物との比較・検証が必要である。

2　土壌理化学分析（リン酸・カルシウム）

（1）試料

試料は，SK72 と SK77 から採取された土壌 3 点（試料 5 ～ 7）である。SK72 では，土坑内から完形の土器が出土しており，土器内に付着していた焼土（試料 5）と土坑底面から検出された焼土（試料 6）の 2 点がある。SK77 は，土坑内から破片の状態で出土した土器に付着していた焼土（試料 7）の 1 点である。

（2）分析方法

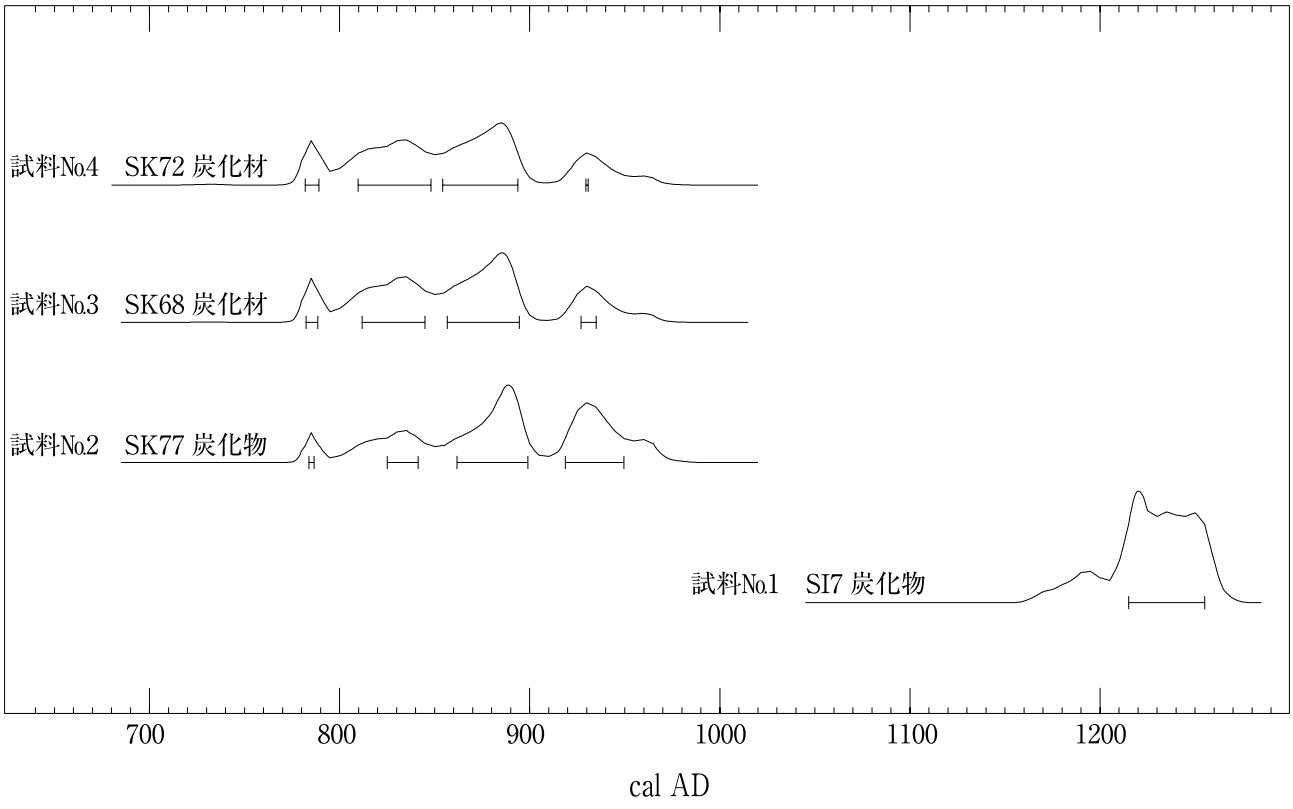
リン酸含量は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法，カルシウム含量は硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法（土壌標準分析・測定法委員会 1986）でそれぞれ行った。以下に各項目の操作工程を示す。

ア　分析試料の調製

試料を風乾後，土塊を軽く崩して 2mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし，分析に供する。また，風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し，0.5mm 篩を全通させ，粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については，105℃で 4 時間乾燥し，分析試料水分を求める。

イ　リン酸，カルシウム含量

粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し，はじめに硝酸（HNO_3）約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後，過塩素酸（$HClO_4$）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後，水で 100ml に定容してろ過



第 134 図　暦年較正結果

する。ろ液の一定量を試験管に採取し，リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し，干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

（3）結果

理化学分析結果を第 73 表に示す。野外土性（ペドロジスト懇談会編 1984）は，それぞれ SiL（シルト質壌土）とシルト質な土壌である。土色は試料 5 で 10YR2/3 黒褐，試料 6 で 7.5YR4/4 褐，試料 7 で 7.5YR3/3 暗褐である。リン酸含量は，試料 5 で 4.91mg/g，試料 6 で 1.08mg/g，試料 7 で 5.13mg/g であり，カルシウム含量は，試料 5 で 8.95mg/g，試料 6 で 2.40mg/g，試料 7 で 9.96mg/g である。リン酸含量が高い試料 5 と試料 7 では，カルシウム含量が高いことが認められる。

（4）考察

リンは生物にとって主要な構成元素であり，動植物中に普遍的に含まれる元素であるが，特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壌中に還元され、土壌有機物や土壌中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成する。特に活性アルミニウムの多い火山灰土壌ではリン酸の固定力が高いため、遺跡での生物起源残留物の痕跡確認などに有効である。

土壌中に普通に含まれるリン酸量，いわゆる天然賦存量については，いくつかの報告事例があり（Bowen1983;Bolt･Bruggenwert1980; 川崎ほか 1991; 天野ほか 1991），これらの事例から推定される天然賦存量の上限は約 3.0P_2O_5mg/g 程度である。また，人為的な影響（化学肥料の施用など）を受けた黒ボク土の既耕地では 5.5P_2O_5mg/g という報告例がある（川崎ほか 1991）。一方，カルシウムの天然賦存量は普通 1 ～ 50CaOmg/g（藤貫 1979）といわれ，含量幅がリン酸よりも大きい傾向にある。

SK72 は，土坑の底面付近と土師甕内に焼土・焼土塊が含まれているが，土坑壁面には焼成痕跡は認められない。埋土の堆積状況から一度埋め戻した後に掘り起こして再度埋め戻したと考えられている。土師甕は，二度目の埋め戻しの際に埋められたと考えられている。土師甕は完形で，内部に付着していた焼土（試料 5）と，土坑底面から検出された焼土（試料 6）の 2 点について分析を実施した。その結果，土師甕内の焼土では天然賦存量を超える 4.9P_2O_5mg/g のリン酸が検出された。カルシウム含量は，天然賦存量の範囲内であるが，試料 7 と比較して比較的高い値を示す。一方，土坑底面の焼土は，リン酸･カルシウム含量共に天然賦存量の範囲内であり，低い値を示す。土師甕内のリン酸含量は，埋葬に関連する可能性を支持する結果である。一方，土坑底面の焼土は，リン酸･カルシウム含量が低く，富化は認められない。この結果から，土坑底部の焼土が埋葬とは関係無いことや，元々はリン酸・カルシウムが含まれていたが，雨水等と共に遺構外に流亡した可能性が考えられる。

SK77 は，土坑底面付近に焼土や焼土塊を含むが，土坑壁面に焼成痕は認められない。土師甕は，復元するとほぼ完形であるが，出土時には割れた状態であった。また，割れた土師甕の下層からは別個体の土師甕が出土している。こうした状況から，SK72 と同様に一度埋め戻した後に，再度掘り起こして土師甕を埋めた可能性が考えられている。分析試料は，上位の割れた土師甕に付着していた焼土 1 点（試料 7）であり，リン酸とカルシウム含量は，SK72 の土師甕付着焼土よりも高い値を示す。この結果から，試料 7 についても，埋葬に関連する焼土の可能性がある。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信，1991，中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量 . 農林水産省農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，28-36.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久，1991，九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量 . 農林水産省　農林水産技術会議事務局編　土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発，23-27.

土壌標準分析・測定法委員会編，1986，土壌標準分析・測定法 . 博友社，354p.

農林省農林水産技術会議事務局監修，1967，新版標準土色帖 .

藤貫　正，1979，カルシウム . 地質調査所化学分析法，52，57-61.

ペドロジスト懇談会，1984，野外土性の判定 . ペドロジスト懇談会編　土壌調査ハンドブック，博友社，39-40.

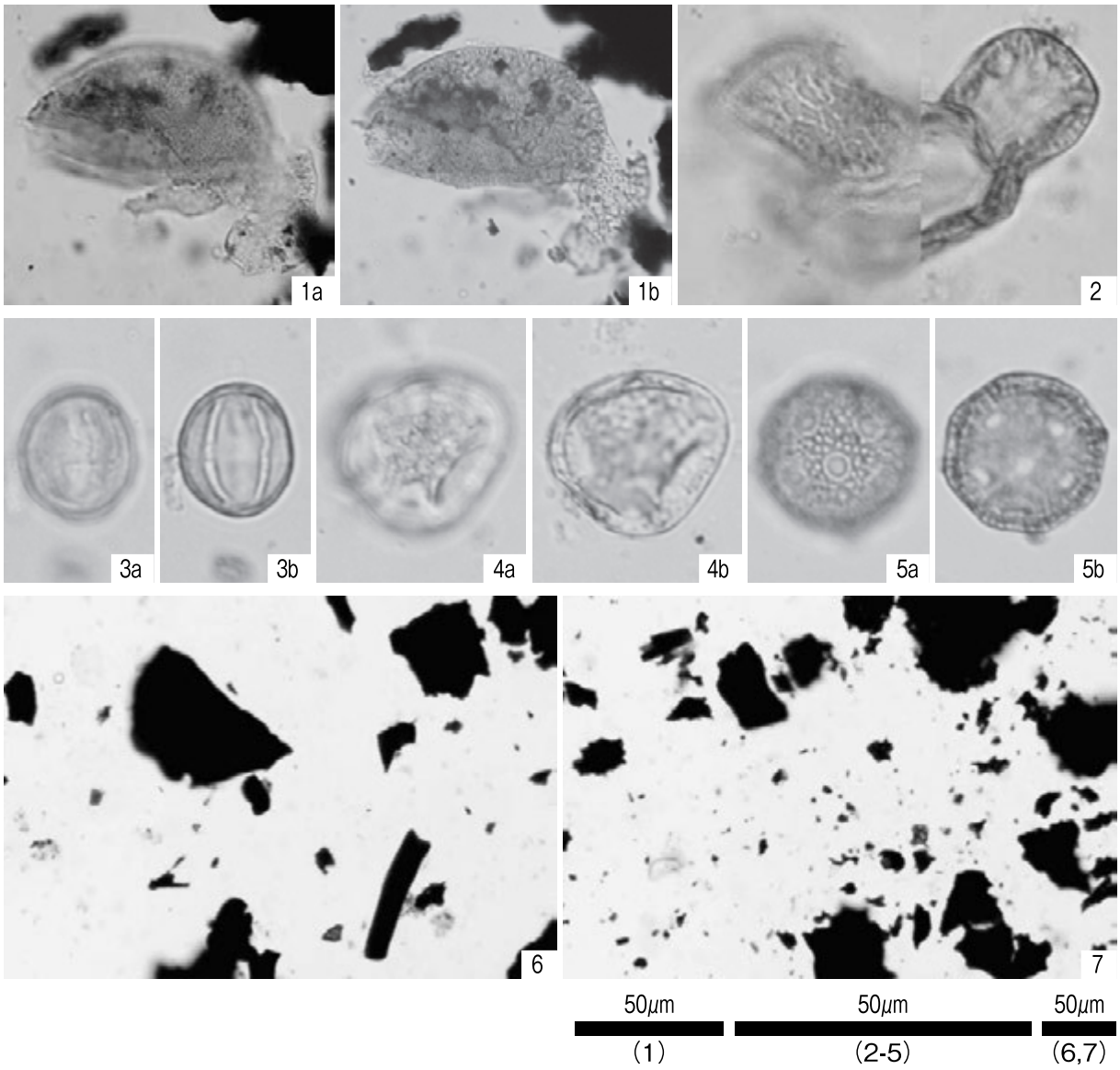
Bowen，H.J.M.，1983，環境無機化学 - 元素の循環と生化学 -. 浅見輝男・茅野充男訳，博友社，297p.

Bolt，G.H.・Bruggenwert，M.G.M，1980，土壌の化学 . 岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽　捷行訳，学会出版センター，309p

第 73 表　土壌理化学分析結果

番号	遺構	試料名	土性	土色		P_2O_5（mg/g）	CaO（mg/g）	備考
試料 5	SK72	土師甕内理土	SiL	10YR2/3	黒褐	4.91	8.95	土器への付着焼土
試料 6	SK72	土坑内埋土	SiL	7.5YR4/4	褐	1.08	2.40	底面付近の焼土
試料 7	SK77	土師甕内理土	SiL	7.5YR3/3	暗褐	5.13	9.96	土器への付着焼土

1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。
SiL…シルト質壌土（粘土 0 ～ 15%、シルト 45 ～ 100%、砂 0 ～ 55%）



1．モミ属(SK4 土坑内埋土;②)
2．マツ属(SK4 小形壺形土器内埋土;①)
3．コナラ属アカガシ亜属(SK4 土坑内埋土;②)
4．イネ科(SK4 小形壺形土器内埋土;①)
5．ナデシコ科(SK4 小形壺形土器内埋土;①)
6．分析プレパラート内の状況(SK4 小形壺形土器内埋土;①)
7．分析プレパラート内の状況(SK4 土坑内埋土;②)

第 135 図　花粉化石

付　　論

鹿児島県出水市外畠遺跡出土人骨

鹿児島女子短期大学　竹中正巳

出土人骨の所見

ST17 出土人骨（男性・壮年）

ほぼ全身の骨が遺存するが，骨の保存状態は悪い。仰臥位で埋葬されている。寛永通寶が７枚，副葬されている。

性別は，頭蓋の右乳様突起が大きいことから，男性と判定される。歯が遺存する。咬耗は Martin の１度である。遺存する歯を歯式であらわすと，以下の通りである。

８７６５４３２１	１２○４５６７８
８７６５４３２１	１２３４５６７８

四肢骨は，右上腕骨，左右大腿骨が比較的状態がよい。これらは，男性としては華奢である。いずれも筋付着部は発達していない。

ST22 出土人骨（女性・熟年）

ほぼ全身の骨が遺存するが，骨の保存状態は悪い。仰臥屈葬の状態で埋葬されている。膝の屈曲が観察できた左膝は強く曲げている。頭蓋は北頭位。顔を西に向けている。頭蓋の保存状態は比較的よい。寛永通寶が７枚，副葬されている。

性別は，頭蓋の眉弓の突出度および外後頭隆起の大きさから，女性と判定される。年齢は，頭蓋の三主縫合の内板がいずれも癒合し，外板も癒合が始まっていることから，熟年と判定した。遺存する歯を歯式であらわすと，以下の通りである。

・　・	・　・・・・
●●●○４×２×	×２×４５６７
７６５４３２×	××××５６××
・	・・

歯の咬耗は Martin の２度である。したがって年齢は，壮年と推定される。

四肢骨は左右の大腿骨に柱状形成が認められる。

ST23 出土人骨（女性・老年）

ほぼ全身の骨が遺存するが，骨の保存状態は良くない。仰臥屈葬の状態で埋葬されている。肘と膝の関節は，いずれも左右とも曲げている。寛永通寶が６枚，副葬されている。

性別は，寛骨大坐骨切痕の角度が大きいこと，頭蓋の眉弓の突出が強くないこと，乳様突起が小さく，外後頭隆起の突出も弱いことから，女性と判定される。年齢は頭蓋の三主縫合の内板がいずれも癒合し，外板も癒合が始まっていることから，熟年と判定した。

脳頭蓋は長頭（頭蓋長幅示数 73.5）である。歯は遺存していない。上腕骨は右側の保存が比較的良く，三角筋粗面が観察できるが、発達していない。大腿骨は左右が遺存し，粗線は左右とも発達している。脛骨も左右が遺存しており，節付着部は左右とも発達している。特にヒラメ筋線の発達が著しい。左右とも扁平脛骨である。右脛骨のヒラメ筋線に骨腫が認められる。身長はピアソン式により，左大腿骨の最大量から 151.8cm と計算される。

ST24 出土人骨（男性・熟年）

頭蓋と下半身の骨が遺存するが，骨の保存状態は悪い。仰臥位で埋葬されている。寛永通寶が２枚副葬されている。

性別は左寛骨の大坐骨切痕の角度が小さいこと，頭蓋の右乳様突起が大きいことから男性と判定される。年齢は頭蓋の三主縫合の内板がいずれも癒合し，外板も癒合が始まっていることから，熟年と判定した。

歯は遺存していない。ほかに特記所見は認められない。

ST25 出土人骨（女性・成人）

頭蓋が遺存するのみである。骨の保存状態は悪い。埋葬姿勢は不明。北頭位。副葬品は寛永通寶が７放出土した。

性別は頭蓋の乳様突起が小さいことから，女性と判定される。年齢は頭蓋の大きさから成人に達していたと判断される。歯は遺存していない。その他，突起所見は認められない。

ST26 出土人骨（男性・熟年）

頭蓋が遺存する。頭蓋の近くに右大腿骨が，頭蓋の上部に腓骨が遺存するが，本頭蓋と同一人物のものであるかは判断できない。したがって，埋葬姿勢は不明である。したがって，ST26 出土人骨としては頭蓋についてのみ記述する。頭蓋は北頭位。顔を西に向けている。頭蓋の保存状態は比較的よい。ただし、脳頭蓋と歯が遺存するのみである。寛永通寶が７枚，副葬されている。性別は，頭蓋の眉弓の突出および外後頭隆起の大きさから，男性と判定される。

脳頭蓋は長頭（頭蓋長幅示数 72.0）である。
歯が下顎左第二大臼歯のみ遺存し，咬耗は Martin の１度である。したがって年齢は，壮年と推定される。ほかに特記所見は認められない。

ST27 出土人骨（男性・熟年）

ほぼ全身の骨が遺存するが，骨の保存状態は悪い。仰臥屈葬の状態で埋葬されている。左右の膝を右肘の上に乗せた屈葬である。前腕は左右いずれも遺存していないので，肘をどのように曲げていたのかは分からない。寛永通寶が７枚副葬されている。

性別は，頭蓋の眉弓の突出および右乳様突起が大きいことから，男性と判定される。歯が上顎右第ｒ一大臼歯，同右第二大臼歯の２本が遊離歯の状態で遺存しており，咬耗は Martin の２度である。したがって年齢は，熟年と推定される。

四肢骨は太いが，節付着部は発達していない。大腿骨は左右とも柱状形成は認められない。脛骨も扁平性は認められない。特記所見としては，右上顎洞内に炎症反応性の骨増殖が認められる。

ST30 出土人骨（性別不明・３歳）

上顎第一乳臼歯が遺存するのみ。本歯は口腔内に萌出していた。咬耗は Martin の１度である。年齢は３歳と推定した。性別は不明である。寛永通寶が７枚副葬されていた。

ST35 出土人骨（男性・成人）

ほぼ全身の骨が遺存するが，骨の保存状態は悪い。仰臥位で埋葬されていた。北頭位で顔は西向き。寛永通寶が６枚，副葬されている。

性別は，頭蓋の眉弓の突出が強いこと，外後頭隆起の突出も強いことから，男性と判定される。年齢は，頭蓋の大きさや大腿骨の太さから成人に達している。

節付着については，左大腿骨は柱状形成が認められ，発達している。それ以外の長骨は節付着状況の判断ができない。歯は遺存していない。

おわりに

外畠遺跡から出土した人骨の中で，頭蓋長幅示数を計算できたのは ST23 人骨（女性・老年）と ST27 人骨（男性･熟年）のみであった。両人骨とも，著しい長頭を示す。これまで出土した南九州本土の近世人骨と同様の形質を示す。また，顔面の計測ができたのは ST22 人骨（女性・熟年）のみで，南九州の現代人に比べ，眼窩は低いが、他の部分は大差がない。

外畠遺跡から出土した人骨を含め，南九州の近世人の脳頭蓋は長頭を示す個体が多い。また、南九州の現代人は短頭で，日本列島の中でも短頭傾向が著しいことで知られる。南九州における短頭化現象は，明治以降，短期間に進展した可能性がより一段と強くなったと考えられる。

表 1. 外畠遺跡出土人骨の脳頭蓋計測値 (mm) 及び示数

M No.	人骨番号	外畠 ST17	外畠 ST24	外畠 ST26	外畠 ST22	外畠 ST23
	性別	男性	男性	男性	女性	女性
	年齢	壮年	熟年	壮年	熟年	老年
1	頭蓋最大長			189	175	185
8	頭蓋最大幅			136		136
17	ﾊﾞｼﾞｵﾝ・ﾌﾞﾚｸﾞﾏ高					142
3	ｸﾞﾗﾍﾞﾛﾗﾑﾀﾞ長			178	171	175
11	両耳幅	116		108		124
12	最大後頭幅			109		107
7	大後頭孔長					37
16	大後頭孔幅					30
23	頭蓋水平周					513
24	横弧長					312
26	正中矢状前頭弧長		126	128	113	
27	正中矢状頭頂弧長			156	124	122
28	正中矢状後頭弧長					116
29	正中矢状前頭弦長			114	101	
30	正中矢状頭頂弦長		106	136	112	111
31	正中矢状後頭弦長					97
8/1	頭蓋長幅示数			72.0		73.5
17/1	頭蓋長高示数					76.8
17/8	頭蓋幅高示数					104.4
16/7	大後頭孔示数		93.9			81.1
1+8+17/3	頭蓋ﾓｽﾞﾙｽ					154.3
27/26	矢状前頭頭頂示数			121.9	109.7	
28/27	矢状頭頂後頭示数		85.6			95.1
29/26	矢状前頭示数			89.1	89.4	
30/27	矢状頭頂示数		88.6	87.2	90.3	91.0
31/28	矢状後頭示数		103.5			83.6

表 2. 外畠遺跡出土人骨の顔面頭蓋計測値（mm）及び示数

M No.	人骨番号	外畠 ST17	外畠 ST22
	性別	男性	女性
	年齢	壮年	熟年
45	頬骨弓幅		((130))
46	中顔幅		((108))
48	上顔高		68
51	眼窩幅（左）		
	眼窩幅（右）		42
52	眼窩高（左）		
	眼窩高（右）		33
55	鼻高		51
H.	NLH 鼻高		51
47/45	Kollmann 顔示数		
47/46	Virchow 顔示数		
48/45	Kollmann 上顔示数		((52.3))
48/46	Virchow 上顔示数		((63.0))
52/51	眼窩示数（左）		
	眼窩示数（右）		78.6
69	ｵﾄｶﾞｲ高	32	
69(1)	下顎体高（左）		
	下顎体高（右）	30	30
69(3)	下顎体厚（左）		
	下顎体厚（右）	11	12

表 3. 外畠遺跡出土人骨の顔面平坦度

人骨番号	外畠
	ST22
性別	女性
年齢	熟年
鼻骨弦	7.5
鼻骨左辺	4.8
鼻骨右辺	4.7
鼻骨垂線	2.9
鼻骨平坦示数	38.9

表 4. 外畠遺跡出土人骨の頭蓋形態小変異の出現状況

		外畠		外畠		外畠		外畠		外畠		外畠		外畠		外畠	
	人骨番号	ST17		ST24		ST26		ST27		ST35		ST22		ST23		ST25	
	性別	男性		男性		男性		男性		男性		女性		女性		女性	
	年齢	壮年		熟年		壮年		熟年		成人		熟年		熟年		成人	
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左
1	ラムダ小骨											−		−			
2	ラムダ縫合骨					−	+										
3	インカ骨					−								−			
4	横後頭縫合痕跡					−	−					−		−	−		
5	アステリオン小骨			−		−	−					−					−
6	後頭乳突縫合骨			−		−	−					−					
7	頭頂切痕骨					−	+					−		−			
8	頭頂孔																
9	冠状縫合骨																
10	前頭縫合残存				−		−						−		−		
11	眼窩上神経溝			−								−		−	−		
12	眼窩上孔					−		+				+					
13	前頭孔					−		−				−					
14	二分頬骨											−					
15	横頬骨縫合痕跡											−					
16	頬骨顔面孔欠如																
17	口蓋隆起											−					
18	内側口蓋管骨橋																
19	外側口蓋管骨橋																
20	歯槽口蓋管																
21	顆管欠如													−	−		
22	後頭顆前結節													−	−		
23	第３後頭顆														−		
24	後頭顆旁突起																
25	舌下神経管二分													−	−		
26	頸静脈孔二分													+	−		
27	偏側頸静脈孔優位													−			
28	外耳道骨瘤	−		−		−	−	−	−	−	−	−		−	−		−
29	フシュケ孔	−				−	−		−	−	−	−		−	−		−
30	ベサリウス孔	+	−									−		−	−		
31	卵円孔形成不全	−	−									−		−	−		
32	棘孔開裂	−	−									−		−	−		
33	翼棘孔	−	−									−		−	−		
34	床状突起間骨橋																
35	左側横洞溝優位				r								−		r		r
36	鱗状縫合骨																
37	矢状縫合骨																
38	プレグマ小骨																
39	後頭顆二分																
40	副オトガイ孔																
41	下顎隆起																
42	顎舌骨筋神経管																
43	副下顎管																

表 5. 外畠遺跡出土人骨の上腕骨計測値（mm）

上腕骨 M No.	人骨番号		外畠 ST27
	性別		男性
	年齢		熟年
7	骨体最小周	左	
		右	69

表 6. 外畠遺跡出土人骨の大腿骨計測値（mm）及び示数

大腿骨 M No.	人骨番号		外畠 ST27	外畠 ST23
	性別		男性	女性
	年齢		熟年	老年
1	最大長	左		406
		右		
6	骨体中央矢状径	左		26
		右	28	
7	骨体中央横径	左		24
		右	29	
8	骨体中央周	左		74
		右		
9	骨体上横径	左	33	30
		右		
10	骨体上矢状径	左	26	24
		右		
6／7	骨体中央断面示数	左		108.3
		右	96.6	
10／9	上骨体断面示数	左	78.8	80.0
		右		

表 7. 外畠遺跡出土人骨の脛骨計測値（mm）及び示数

脛骨 M No.	人骨番号		外畠 ST27	外畠 ST23
	性別		男性	女性
	年齢		熟年	老年
8	中央最大径	左		28
		右		27
9	中央横径	左		18
		右		18
10	骨体周	左		73
		右		73
8a	栄養孔位最大径	左		34
		右	31	33
9a	栄養孔位横径	左		21
		右	24	21
10a	栄養孔位周	左		83
		右	86	87
10b	骨体最小周	左		67
		右		67
9/8	中央断面示数	左		64.3
		右		66.7
9a/8a	栄養孔位断面示数	左		61.8
		右	77.4	63.6

表 8. 外畠遺跡出土人骨の身長（cm）

人骨番号		外畠 ST23
性別		女性
年齢		老年
身長（ピアソン式）	左	151.8
	右	

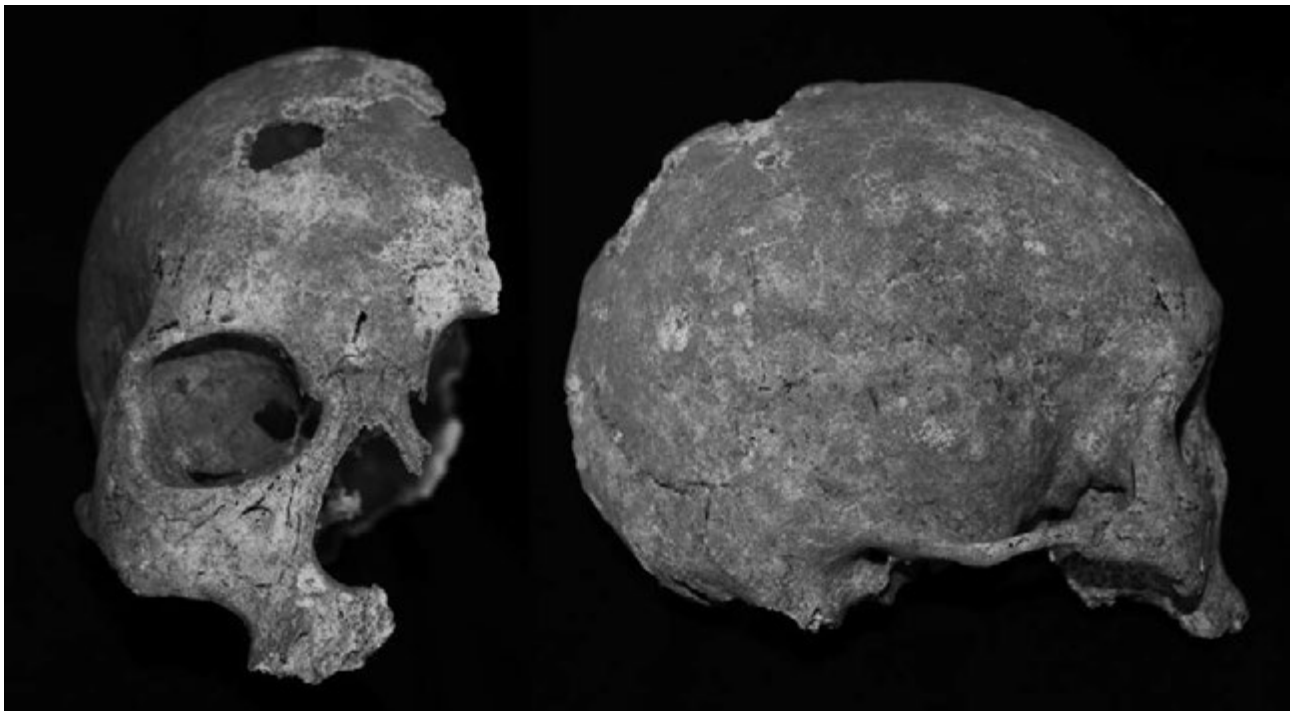


図 1. 鹿児島県出水市外畠遺跡 ST22 出土熟年女性人骨の頭蓋（正面・右側面観）

図 2. 鹿児島県出水市外畠遺跡 ST26 出土壮年男性人骨の頭蓋（上面観）

第５章　総括

第１節　縄文時代の調査

１　土坑・配石状遺構（第 136 図）

縄文時代の遺構では，土坑 26 基と配石状遺構４基が検出された。第 74 表は，時代認定が不確定な SK21 と SK45 を除いた土坑と配石状遺構についてまとめたものである。

整理の過程で，規模や形状，遺物の出土状況をもとに土坑４類と配石状遺構に分類した。全ての土坑と配石状遺構が，礫・石器類を伴う点が特徴である。

遺構に伴う土器は，深鉢では松山式土器から市来式土器，北久根山式土器が伴われ，鉢･浅鉢では鐘崎式土器，北久根山式土器が伴われる。このことから，遺構の年代は縄文時代後期中葉から後葉の時期と判断される。

前迫亮一氏は，南九州における縄文時代後期の異系統土器の相関関係について論じている。それによると，本遺跡の土坑と配石状遺構は第１段階から第３段階に相当する (前迫 2002・2004)。また，SK20 と SK44 から出土した炭化種子の放射性炭素年代測定結果も縄文時代後期の年代を示す。

各遺構間の関係について，遺構の切り合い関係と出土遺物から検討してみる。SK ４土坑Ｂ（１類）と SK50（３類）には明確な切り合い関係が認められ，SK ４土坑Ｂ→ SK50 という新旧関係が成り立つ。また，SK ４は土坑Ａと土坑Ｂが切り合ったものであり，１類の土坑Ｂが礫と磨石・敲石類を伴う土坑Ａを切っている。この１類が，礫と磨石・敲石類を伴う他の土坑を切るという関係は，SK ６でも認められる。そこで，SK ４土坑Ａ，SK ６埋土２を０類とする。

SK ８（１類）と SK44（２類）にも切り合い関係が認められ，SK ８が SK44 に切られている。SK ８からは，松山式土器の範疇に入ると想定される深鉢や，鐘崎式土器と考えられる鉢が出土しているが，SK44 からは，市来式系の土器が出土している。このことも，SK ８→ SK44 という新旧関係を裏付ける。

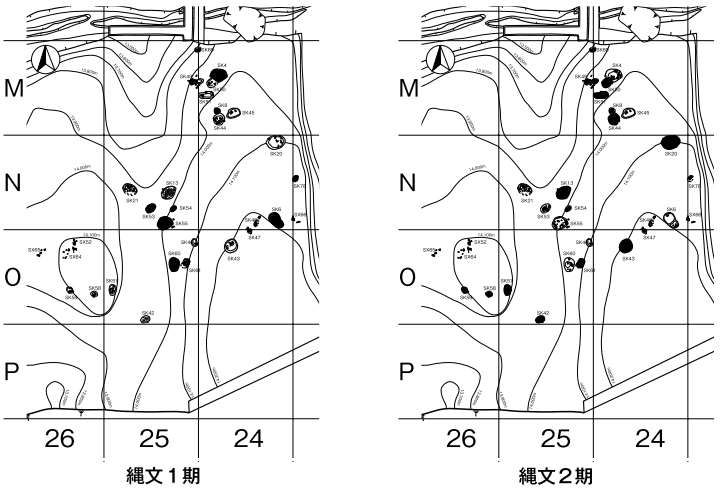
また，SK57 と SK61 の間では，流れ込みのものの可能性があるが，土器の接合がみられる。

土坑と配石状遺構の関係では，SK51・SK42（３類）

第 74 表　縄文時代の土坑・配石状遺構

遺構名	区	分類※1	長軸方向	規模 (cm)			出土遺物								備考
							土器※2						石器		
				長軸	短軸	深さ	松山	市来	鐘崎	北久	皿	不明	石皿・台石※3	魔石・敲石類	礫	
SK4 土坑Ａ	Ｍ－24	0	(N40° W)	(147)	(145)	(32)						○	▲	○	○	規模は SK4 全体の数値 SK4 土坑Ｂに切られる
SK4 土坑Ｂ	Ｍ－24	1	N40° W	120	110	32		●				○	○			SK4 土坑Ａを切り，SK50 に切られる。小形壺形土器出土
SK6 埋土１	Ｎ－24	1	N43° W	130	115	29		●				○	○			
SK6 埋土２	Ｎ－24	0	(N43° W)	(62)	(90)	18						○		○	○	打製石斧出土
SK8	Ｍ－24	1	N60° E	67	64	20	○	●	○		●		●			SK44 に切られる
SK55	Ｎ・Ｏ－25	1	N65° E	168	132	28		●					●	○	○	周辺に晩期の土器が散乱
SK78	Ｎ－23	1	N50° E	66	49	26							○		○	石核２点出土
SK53	Ｎ－25	1	N50° E	116	82	10		●					□		○	
SK54	Ｎ－25	1	N62° E	74	46	14							□		○	
SK57	Ｏ－25	1	N13° E	115	77	11				●			○			SK61 と接合
SK59	Ｏ－26	1・3？	N81° E	75	58	(10)							△			
SK13	Ｎ－25	2	N57° E	174	125	22		●	○	●	●				○	砥石（被熱）出土
SK20	Ｎ－24	2	N85° E	202	145	20		●	○		●				○	炭化種子
SK44	Ｍ－24	2	N67° E	124	120	14		●						○		SK ８を切る。炭化種子出土
SK60	Ｏ－25	2	N1° E	150	105	25		●			●				○	
SK61	Ｏ－25	2	N40° E	104	74	20			○	●				○	○	SK57 と接合
SK49 土坑①	Ｍ－24・25	3	(N70° E)	65	53	10									○	晩期の浅鉢？
SK49 土坑②	Ｍ－24・25	3	(N70° E)	77	50	8									○	晩期の浅鉢？
SK50	Ｍ－24	3	N50° E	123	80	10		●						○	○	SK ４を切る
SK51	Ｍ－24	3	N90° E	158	74	9			●				△	○	○	SK42・SX64 と接合
SK42	Ｏ－25	3	N51° E	98	71	6						○		○	○	SK51・SX64 と接合
SK43	Ｏ－24	3	N71° E	138	136	23						○			○	
SK48	Ｎ－24	4	N25° E	72	40	12							△		○	
				35	30	14									○	
SK46	Ｏ－25	4	N6° W	82	60	10						○				
SK69	Ｍ－24・25	4	N57° E	64	48	22		●						○	○	
SK47	Ｏ－25	4	N32° W	49	46	21									○	
SK58	Ｏ－26	4	N72° E	74	57	6									○	
SX52	Ｏ－26	配石	N1° E	140	50	－							○・●		○	
SX64	Ｏ－26	配石	N24° E	116	60	－							△		○	SK51・SK42 と接合
SX65	Ｏ－26	配石	N38° E	115	55	－									○	
SX66	Ｎ－23・24	配石	N63° W	100	58	－									○	黒曜石原石出土

※１　配石は配石状遺構のこと。
※２　松山＝松山式土器，市来＝市来式土器（系），鐘崎＝鐘崎式土器，北久＝北久根山式土器，皿＝皿形土器・台付皿形土器，不明＝型式不明，を示す。
　　また，●は確実なもの，○は不確実なものを示す。
※３　○は完形品・大型の破片，△は小破片，□は使用痕の無い扁平な礫を示す。また，●・▲はそれぞれ被熱しているものを示す。



縄文１期
０類：SK４土坑Ａ，SK６埋土２
１類：SK４土坑Ｂ，SK６埋土１，SK53，SK54，SK55，SK78
２類：SK60

縄文２期
１類：SK57
２類：SK13，SK20，SK44，SK61
３類：SK42，SK43，SK49，SK50，SK51
配石状遺構：SX52，SX64，SX65，SX66

第 136 図　縄文時代の遺構変遷案（S=1/800）

とSX64（配石状遺構）の間で，石皿・台石（127）が接合した。接合したのは１例のみだが，土坑３類と配石状遺構に伴われた石皿・台石及び礫には，127のような破片の資料が多くみられた。それらは人為的に破壊された可能性も想定される。遺構の検出状況や石器・礫の状況から，配石状遺構は掘り込みを検出できなかったが，本来は３類のような（検出面からの）掘り込みの浅い土坑であった可能性が高い。

４類は，埋土や遺物から縄文時代後期のものと判断できるが，他の遺構との関係は不明である。

遺構の分類別に土器の出土傾向をまとめると，以下のようになる。

０類　土器は小破片で，量も少ない。
１類　SK８の松山式土器からSK57の北久根山式土器。SK４･SK８･SK57の資料を除き小破片が多い。
２類　市来式土器・鐘崎式土器から北久根山式土器。台付皿形土器を伴うものがある。
３類　市来式土器・鐘崎式土器だが，全て小破片。
４類　土器は小破片で，量も少ない。
配石状遺構　土器を伴わない。

以上をもとに，本遺跡における縄文時代後期の土坑と配石状遺構の変遷過程を次のように想定した（第136図）。

まず，０類が造成され，次いで，土坑１類が続く。ほとんど差が無く，２類で古手の土器を伴うSK60が続き，最後に土坑３類と配石状遺構が作られる。ただし，土坑１・２・３類は明確な時期差を持つものではなく，併存していた可能性が高い。

遺構の性格については，検討すべき課題が多い。“配石遺構”や環状列石は縄文時代を通して，東日本を中心にみられるが，近年，南九州でも本野原遺跡（宮崎県宮崎市）や藤平小田遺跡（鹿児島県南種子町）などで発見されている。本野原遺跡や藤平小田遺跡の時期は縄文時代後期に該当する。両遺跡とも，中心に大型土坑があり，その周囲に“配石遺構”･土坑が環状に配置されている（南種子町2002，宮崎市2006）。石井寛氏や本野原遺跡報告書は，環状に配された“配石遺構”・土坑を掘立柱建物の柱穴跡としている（石井2008，宮崎市2006）。

本遺跡の土坑・配石状遺構は，分布状況や形態，遺物の検出状況等から判断して，現時点では掘立柱建物の柱穴の可能性は低いと判断される。

土坑１類は，大型の石皿・台石か扁平な礫を伴う。その出土状況から，当初は立位であったことを想定させるものが多い。また，SK４から石皿・台石と共に小形壺形土器が出土していたり，SK78は石皿・台石２点を立位で据え，その中間に石核が２点配されているなど特殊な事例もみられる。これらの事例から，墓や精神的活動に伴う施設であった可能性も想定される。

薩摩川内市の麦之浦貝塚では，縄文時代後期中葉の土壙墓１基と土坑２基が検出されている（川内市土地開発公社1987）。また，やや時期は下るが，いちき串木野市の川上（市来）貝塚では，石皿片と土器の完形品を伴う土坑が検出されている（市来町1993）。これらのような事例の集成と比較検討は今後の課題である。

以上，縄文時代後期の土坑・配石状遺構について検討を行った。土器型式の認定に不確実な部分が多く，時期については更なる検討を要する。遺構の性格を明らかにするためには，南九州以外の地域の事例も参考にする必要もあるだろう。また，今後同様の遺構を調査する際には，土坑埋土のサンプリング方法，礫・石器の取扱い方法に注意を要する。

２　土器について

縄文時代の土器は，中期後半頃の阿高式土器や阿高式系等の凹線文系土器から，晩期の入佐式土器や黒川式土器が出土している。主体を占めるのは，後期中葉から後葉の松山式土器や市来式土器を主体とする貝殻文系土器と，それに伴う鐘崎式土器や北久根山式土器などの磨消縄文系の土器である。本遺跡から出土した土器には，北･

中九州地方の影響が強くみられ，鐘崎式土器と供伴関係にあるとされる御手洗Ｃ式土器も数点みられる（本田道輝氏の御教授による）。また，やや時期は下るが，三万田式土器も出土している。

以上のように，出土土器の傾向には，中九州と南九州の境界付近に所在するという本遺跡の地理的環境の影響が色濃く反映されている。

地理的環境の影響は，器形や文様構成等にもみられ，各型式の典型的な特徴を備えた土器は少ない。例えば，SK ８出土の深鉢（23）や鉢（24），SK60 出土の台付皿形土器（95）などは，松山式土器や鐘崎式土器の範疇に含めたが，不確実であり，検討を要する。

また，SK13 出土の浅鉢（54・59）は，胴部が強く屈曲するタイプで，北久根山式土器の台付皿形土器と供伴している。同様のタイプのものが市来貝塚では市来式土器と供伴しているという（本田氏の御教授による。河口 1991）。同様の土器の類例と供伴関係の整理も必要である。

３　SK ４出土の小形壺形土器（1）について（第 137 図）

本遺跡から出土した遺物で最も特徴的なものはSK ４出土の小形壺形土器（1）である。１は，SK ４土坑Ｂのほぼ中央から，石皿・台石（８）と寄り添うような状態で出土した。出土状況から，１と８は土坑を埋め戻す際の最終段階かその直前に，立位で据えられたと想定される。

壺形土器は，縄文時代早期から散見され，本県では上野原遺跡（鹿児島県霧島市）の埋納例などが知られている。南九州における縄文時代後期の壺形土器については，黒川忠広氏らが「舟形口縁壺形土器」として，南西諸島との関連を指摘している（黒川 2005）。本遺跡出土例は，胴部は球形に近く，上面から見ると口縁部は円形となる。また，「舟形口縁壺形土器」の特徴である，把手をもたない。これらのことから，「舟形口縁壺形土器」とは異なる系統のものと考えられる。

器形では，上水流遺跡（鹿児島県南さつま市）の出土例や，黒橋貝塚（熊本県熊本市）の出土例が類似する（鹿埋セ 2007，熊本県教委 1998）。しかし，黒橋貝塚のものは阿高式系土器～南福寺式土器に，上水流遺跡のものは指宿式土器に伴われるものであり，両事例とも時期が遡る。

文様は，口唇部から胴部全体に，沈線文と刺突による擬似縄文が施される。口唇部には中央から外に向かって鋸歯状の沈線文が施される。胴部には，Ｂ面～Ｄ面にかけて２本１組を基本とした沈線文によって，菱形・渦巻を意識したような幾何学文が描かれる。菱形・渦巻の中央には，他の擬似縄文と比較して深く鋭い刺突が５箇所施される。Ａ面だけ曲線の沈線文が用いられ，直線と組み合わせて抽象的な文様が描かれる。残念ながら，この文様が何を表現しているのか明らかにすることはできなかった。なお，類似縄文にはハイガイが，沈線文と菱形中央の刺突文には植物質の加工具が用いられている。

土器トータルとして捉えると個性ばかりが目立つが，菱形を文様のモチーフとした同時期の土器には，大渡遺跡（鹿児島県指宿市）の例があり（本田氏の御教授による。河野 1958，乙益・前川 1978），器面全体の刺突文は磨消縄文の影響を受けた擬似縄文の範疇に収まるものである。このように，一つ一つの特徴を抽出し，それを詳細に分析することで，この土器の表現しているものに迫ることができるだろう。

４　石器・石材について

（1）　石器（第 138・139 図）

第 138・139 図は，遺構及び包含層（Ⅲ層）から出土した石器の出土数を器種ごとにまとめ，点数・組成率を示したものである。遺構・包含層ともに石鏃や石匙等の剥片石器類が少なく，磨石・敲石類や石皿・台石等の礫石器類が圧倒的に多い。すなわち外畠遺跡では，磨石・敲石類と石皿・台石を主体とする植物質食料加工具が石器の大半を占めていることになる。なお，礫石器の石材は，遺跡の西を流れる野田川で採取可能である。

磨石・敲石類は，磨り・敲き・凹みという複数の用途に用いられたものが多い。また，石皿・台石は，遺構内出土のものも含めて被熱しているものが多く，なかには表面が剥落しているものもみられた。形状では方形に近いものや五角形状のものなど多様である。

南九州の縄文時代後期の遺跡では，石鏃をはじめとする狩猟具よりも，磨石・敲石類や石皿・台石を主体とする植物質食料加工具が優勢な石器組成を示す遺跡が多く知られているが，外畠遺跡でも同様の傾向を指摘できる。

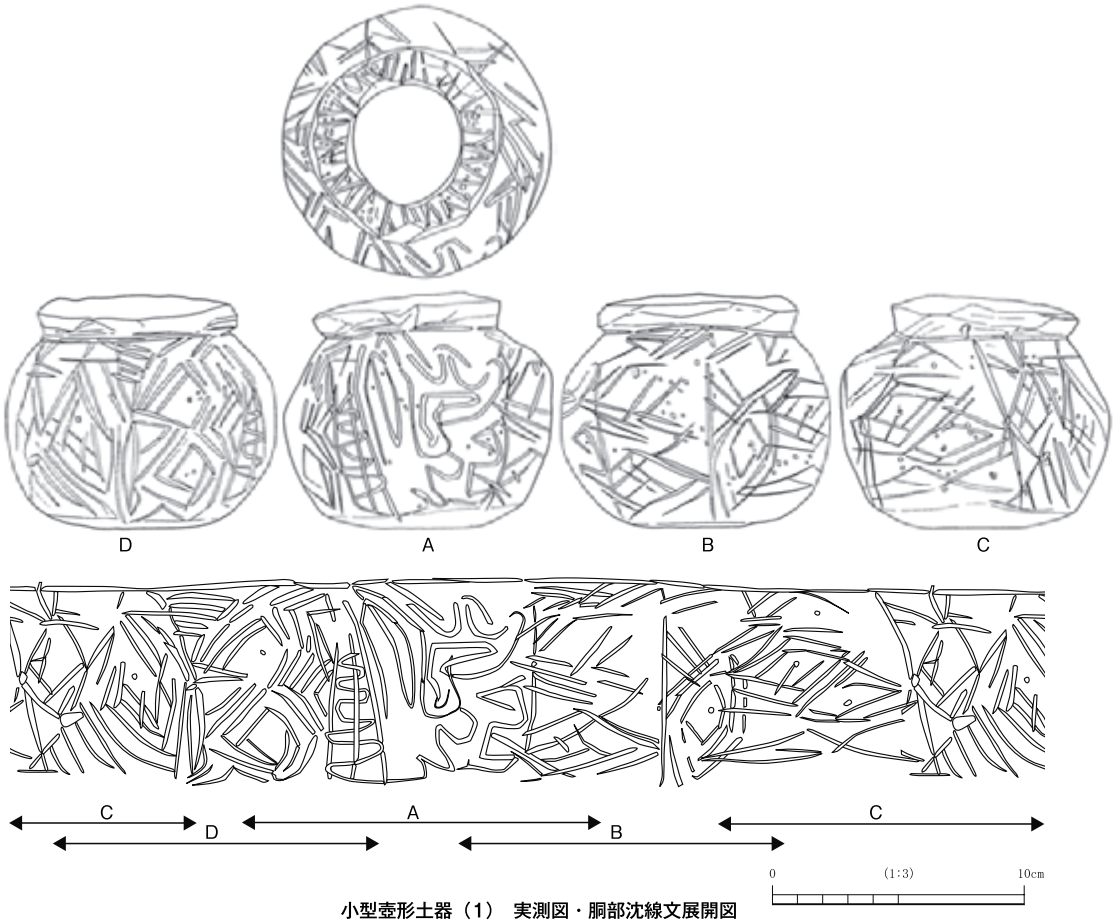
（2）　剥片石器に用いられた石材（第 140･141 図，第 75 表）

本遺跡から出土した剥片石器と剥片・破片の出土重量について，遺構内出土を除く包含層（Ⅲ層）出土の資料を対象として分析する。ただし，剥片・破片類の取り上げは，グリッド・層一括単位で行っており，分析対象から漏れた資料も存在する。

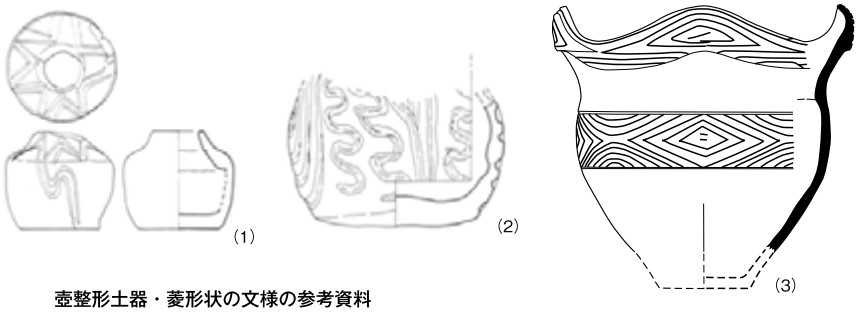
剥片石器の石材と出土重量についてまとめたものが第 75 表である。本遺跡で剥片石器製作に利用されている石材は，重量比で利用率が高い順に黒曜石１（日東産黒曜石），黒曜石５（西北九州産の良質な黒曜石），黒曜石４（腰岳産黒曜石），チャート，黒曜石６（針尾産黒曜石），黒曜石２（桑ノ木津留産黒曜石）であった。

これは，本遺跡周辺には剥片石器に適する石材産地が知られていないこと，また，鹿児島県の西北部に位置するという地理的環境を反映したものであるといえる。

石材の約６割は遺跡から直線距離で東に 50km に位置する伊佐周辺から持ち込まれたもので，残りの４割は遺



小型壺形土器（1） 実測図・胴部沈線文展開図



壺整形土器・菱形状の文様の参考資料

(1)：上水流遺跡　（鹿児島県南さつま市金峰町）
(2)：黒橋貝塚　（熊本県熊本市城南町）
(3)：大渡遺跡　（鹿児島県指宿市）
（乙益・前川1978を再トレース）

※縮尺は(1)(2)はS=1/6，(3)はS=1/8

第 137 図　小型壺形土器（1）・参考資料

跡から直線距離で西北に 180 ～ 230km 離れた西北九州から持ち込まれたものである。なお，チャートについては，近くでは南の阿久根市に原産地が知られており，そちらとの関連が伺える。

以上の結果から，本遺跡は東方にある比較的距離の近い石材に加え，遠方の西北九州の石材に依存しているという傾向が指摘できる。

第２節　古代の調査

（1）　土坑及び土坑出土土師器甕

古代の土坑はＫ－ 19 区で６基検出された（第 76 表）。土坑の特徴をまとめると以下のとおりである。

ア　平面形は SK68 を除き，楕円形である。
イ　規模は長軸 120cm 程度，短軸 90cm 程度。
ウ　床面付近の埋土に炭化物が含まれる。焼土塊が含まれるものもある。
エ　SK73 を除き，土師器の甕の完形品あるいは大型の破片を伴う。
オ　鉄製の刀子，青銅製品を伴うものがある。
カ　遺構間で遺物が接合したものがある。

これらの特徴から土坑の性格として，墳墓，特に火葬土壙墓の可能性が想定される。そこで，SK72 と SK77 の土師器甕に付着していた焼土と，SK72 の床面付近の埋土のリン・カルシウム分析を行った。その結果，SK72

床面付近の埋土では富化が認められなかったが，土師器甕に付着している焼土では両者ともにリン・カルシウムの富化が認められた。また，これらの土師器甕の器面に，煤等が付着しない点も，日常的に用いられていたものではないということを示唆している。これらのことから，土師器甕は火葬場から墳墓まで火葬後の遺体を運ぶための容器として用いられた可能性が高いといえよう。

火葬骨を埋葬後，破片のものは意図的に割られ，土坑内へ納められたと想定される。その際，SK70 の刀子や SK72 の青銅製品は副葬品として納められたと考えられる。また，土坑内に他の時代の遺物が混入しないことから，土坑が検出された K－19 区以外の場所で，火葬が行われた可能性が高い（狭川真一氏の御教授による）。

網田龍生氏は，肥後地域の古代後半の墳墓をまとめている。その中で，火葬土壙墓に伴う土師器・須恵器の甕や瓦について，必ず破片や一部を欠損させたものが用いられ，凹面を下に向けて配されることから，「被せた」と想定し，蔵骨器的な用途に否定的な見解を示している（網田 1997）。

本遺跡の事例は土師器甕の破片を基本としながらも，出土状況は様々であり，肥後地域と共通する出土状況をは SK74 のみである。特に SK72 の例は，完形品が正位置で据えられていることから，火葬骨を入れた蔵骨器的な用いられ方の可能性も残る。また，SK77 は土師器甕の出土状況から，２点の土師器甕が納められた時間差を想定することもできる。今後，同様の土坑を調査する際には，遺物の出土状況に今まで以上の注意を要する。

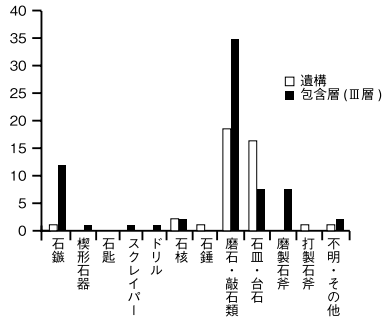
なお，SK73 は土師器甕を伴わないが，土坑の規模や埋土の堆積状況，分布域が密集することから，他の土坑と同様に墳墓（火葬土壙墓）であると判断した。土師器甕の有無及び出土状況の違い，副葬品の有無等が何に由来するものなのかということや，上部構造物の有無や形態については今後の検討課題である。

次に，土坑に伴われる土師器の甕についてみていく。これらの甕は上述のように，土坑との関係が極めて深く，土坑形成時（火葬後の埋葬時）の年代を知る重要な手がかりである。

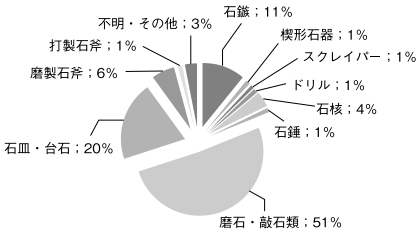
古代の土師器については，中村和美氏や曽於市財部町高篠遺跡の報告書で編年が行われている（中村 1994・1997，鹿埋文セ 2004）。本報告書では主に高篠遺跡の編年（以下，高篠編年とする）を参考にする。

土坑出土の土師器甕の特徴を抽出し，高篠編年を参考にまとめたものが第 77 表である。

器形では，SK68 のもの（437）は鉢形を呈すが，それ以外のものは，長胴で胴部がやや張り出し，口縁部は短く，器壁が薄目であるという共通性を見い出せる。一方，調整方法は，内面はケズリとナデを基本とするが，外面については多種多様であり，胴部下半にタタキ痕が観察できるものもみられる。



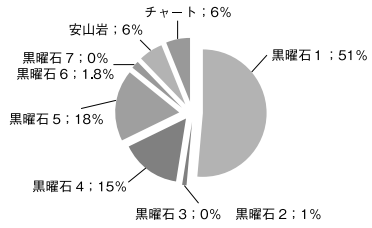
第 138 図　遺構・包含層出土石器器種別点数



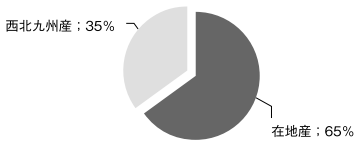
第 139 図　遺構・包含層出土石器器種別組成率

第 75 表　剥片石器利用石材一覧

石材	製品（g）	剥片・破片（g）	合計（g）
黒曜石 1	0	172.5	172.5
黒曜石 2	0.8	3.5	4.3
黒曜石 3	0.6	0	0.6
黒曜石 4	2.1	49.0	51.1
黒曜石 5	2.2	56.5	58.7
黒曜石 6	2.7	3.5	6.2
黒曜石 7	0.9	0	0.9
チャート	4.4	16.6	21.0
安山岩	20.1	0	20.1



第 140 図　剥片石器石材利用率（重量比）



第 141 図　石材利用地域依存率（重量比）

外面の調整方法に検討の余地があるが，土坑から出土した土師器甕は概ね高篠編年Ⅱ期（９世紀前半～後半）の特徴を示すと言えよう。また，土坑内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定の結果，補正年代で，

第 76 表　古代の土坑

遺構名	区	長軸方向	平面形	規模（cm）			床面付近の埋立		土師器甕の有無※1	備考
				長軸	短軸	深さ	炭化物	焼土		
SK68	K － 19	N1° W	（円形）	130	－	45	○	○	○	SK77 に切られる
SK70	K － 19	N41° E	楕円形	111	90	50	○	×	○	鉄製刀子。墨書土器が SK77 と接合
SK72	K － 19	N64° E	楕円形	126	95	61	○	○	◎	青銅製品
SK73	K － 19	N32° W	楕円形	119	90	33	○	×	×	内黒土師器
SK74	K － 19	N7° W	楕円形	115	88	35	○	×	○	
SK77	K － 19	N29° E	楕円形	120	103	40	○	○	◎・○（2 個体）	SK68 を切る 墨書土器が SK70 と接合

※1　◎は完形品，○は破片を示す。

第 77 表　土坑出土の土師器甕の特徴

遺構番号（遺物番号）	器形	胴部	口縁	器壁	外面			内面			色調	胎土
					ハケ	ナデ	タタキ	ケズリ	ナデ	ハケ		
SK68（437）	鉢形	－	短	薄	○ 縦・横			○ 左上	○	○	にぶい橙色	緻密
SK70（443）	長胴	やや張る	長	薄	○ 横	○	○	○ 左上	○		にぶい黄橙色	緻密
SK72（455）	長胴	やや張る	短	薄	○ 横	○	○	○（左）上	○	○	にぶい黄色	緻密
SK74（474）	長胴	やや張る	短	薄		○	○	○ 左上	○		橙色	緻密
SK77（482）	長胴	やや張る	短	やや厚	○ 縦・横	○		○ 左上	○	○	明黄褐色	粗粒
SK77（483）	長胴	やや張る	短	薄	○ 縦・横	○		○ 左上	○	○	灰白色	緻密

SK72 が 1,230 ± 30BP と 1,170 ± 20BP，SK68 が 1,210 ± 20BP，SK77 が 1,190 ± 20BP を示し，それは土師器甕の年代観と一致する。

当時，墳墓の造営には強い規制がかけられていたことを考慮に入れると，９世紀前半から後半にかけて当地域の有力な一族（近親者）によって造営された墳墓（火葬土壙墓）である可能性が高い。

（２）　SD38 及び SD38 出土遺物

SD38 は，調査区西端の P・Q － 31 ～ 34 区で検出された。周辺はシラス（Ⅷ層）まで掘削を受けており，本来の形状及び規模は不明だが，長軸はほぼ東西で，平面形は西側の河岸段丘に向かって「八」の字状に開いていく。断面形は，長軸方向は東から西に向かって傾斜し，短軸方向は箱形となる。おそらく自然流路を利用し，通路や区画のための溝（堀？）として機能していたものと想定される。条里や地割り等の関係を検討する必要があろう。

SD38 では，床面付近（下層）から多量の遺物が出土した。内訳は，土師器が 98％を占め，なかでも坏と埦が多い。第 142 図は土師器の坏と埦の組成を示したものである。坏では坏３類が最も多く，次いで坏６類，坏５類，坏４類の順となる。充実高台の坏４類は少ない。高篠編年では，坏１・２類がⅡ期（９世紀前半～後半），坏５・６類がⅢ期（９世紀後半～ 10 世紀前半），坏３・４類がⅣ～Ⅴ期（10 世紀前半～後半）に比定される。

埦では，埦３類が最も多く，埦５a 類，埦５b 類，埦４類が続く。高篠編年では埦１・２類がⅡ期（９世紀前半～後半），埦５b 類がⅢ～Ⅳ期（９世紀後半～ 10 世紀中頃），埦５a 類がⅤ期（10 世紀中頃～後半），埦３類がⅥ期（10 世紀後半～ 11 世紀以降）に比定される。

土師器の皿と甕は出土数が少ないが，皿１類はⅠ期（８世紀後半～９世紀前半），皿２・３・４類はⅤ期（10 世紀中頃～後半）に比定される。甕は出土量が少なく，全体の形状の判明するものはないが，土坑出土のものと比較して器壁が厚手で，口縁部が短いという特徴を示す。また，外面の調整にハケ目が施されないものが多い。このような特徴は，土坑出土のものよりも新しく，高篠編年Ⅳ期以降に現れる様相である。

SD38 は 10 世紀前半から後半にかけて機能しており，遺物はその際廃棄されたものと想定される。第 142 図は出土量の多い土師器の坏と埦の分布を示したものである。４箇所のまとまりを抽出できるが，器種及び分類による偏りは見出せず，廃棄単位等は不明である。

（３）　まとめ

以上のように，K － 19 区周辺の土坑（火葬土壙墓）群と，調査区西端の SD38 には時期差が認められる。また，土坑群と掘立柱建物跡（SB67）は切り合い関係から，土坑群→ SB67 という新旧関係が判明している。

SB67 の柱穴からは，土師器坏１類や，器壁が薄く口縁部が開くタイプの土師器甕が出土している。K － 19 区周辺から，SD38 で主体をなす坏３・４・５・６類，埦３・４・５類が出土していない。これらの点も併せて考えると，SB67 の時期は，土坑群からそれほど時期が下らない年代を想定したい。

外畠遺跡の古代の調査成果からは，東から西に向かって集落域が拡大し，土地利用が変遷していく過程を想定することができる。

第４節　中世の調査

中世の主な遺構としては，掘立柱建物跡４棟，方形竪穴建物１基，竪穴状遺構３基，土師器埋納柱穴１基，土

壙墓２基が検出された。中村和美氏が設定した土師器の編年案を参考にしながら，本遺跡の中世を以下のように２時期に大別した（以下，中村編年とする。中村2007）。

中世１期は，方形竪穴建物 SI ７，掘立柱建物跡 SB16・SB41・SB119，土師器埋納柱穴 SP79 が該当する。

方形竪穴建物 SI ７は，床面（地山）の段掘り状の掘り込み，壁面西壁の一部の地山は，スロープ状に掘り残されるなど特徴的な構造である。スロープ状の残存部は，出入口（昇降施設）の可能性が想定されるが，馬松塚遺跡（鹿児島県南さつま市）などの例がある程度で，事例が少なく，資料の増加を待って検討する必要がある。なお，現在調査中で未報告資料だが，近接する中郡遺跡群（鹿児島県出水市）でも類似した構造の方形竪穴建物が発見されており，関連が想定される。

SI ７の遺物は破片資料ばかりだが，土師器や滑石製石鍋の形状から，中村編年Ⅱ～Ⅲ期（12 世紀中頃～ 13 世紀前半）を想定したい（木戸 1995）。なお，地床炉の炭化物の放射性炭素年代測定結果は 13 世紀前半を示す。

SP79 は，土師器の坏２点が埋納されていた。SP79 の遺物出土状況や，SB119 との遺物の接合関係から，SB119 や付近の建物を廃絶する際に，地沈に関する祭祀を行ったものであろう（甲元眞之氏の御教授による）。

SP79 の土師器は中村編年Ⅳ期（13 世紀中頃～ 14 世紀初頭）に比定される。また，埋土から龍泉窯系青磁碗Ⅰ類が出土している。これらのことから，SP79 の年代は 13 世紀中頃と想定できる。SB119 も同様の時期と判断して良いだろう。

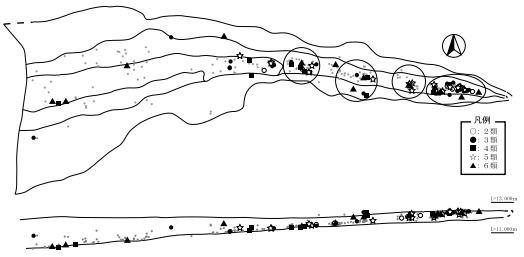
以上，SI ７，SP79，SP119 を中世１期とし，時期は 12 世紀後半～ 13 世紀中頃とする。また，SB119 と埋土が類似する SB16・SB41 も中世１期の可能性が高い。

本遺跡の中世１期の時期では，近接する荘上遺跡や荘貝塚でも同時期の遺物が出土している。中世１期の「荘」地区には，大規模な集落が形成されていたことは間違いないだろう。それは，出水市の「荘」地区に比定される中世荘園の老松荘を形成する集落であろう。また，野田川を挟んだ対岸には，木牟礼城跡や，中郡遺跡群を含めた「屋地」地区が所在する。

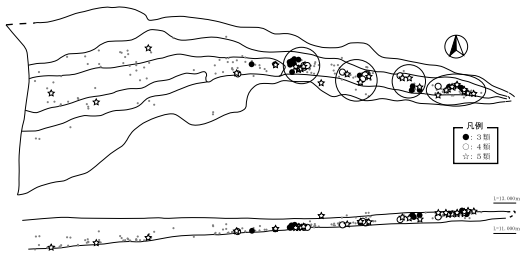
堂込秀人氏は，方形竪穴建物を通して中世流通路の復元を行い，その中で，人吉・水俣から出水平野を通して山門院木牟礼城跡へ至る流通路を想定している（堂込1999）。本遺跡の中世１期は，老松荘の一部として，広域な流通網の中に組み込まれていたのである。

中世２期には，竪穴状遺構 SI19，掘立柱建物跡 SB120，土壙墓 ST62・ST63 が該当する。

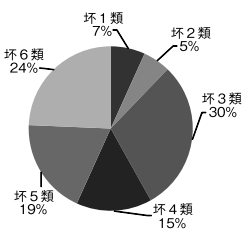
竪穴状遺構 SI19 からは，床面からやや浮いた状態だが，土師器がまとまって出土している。土師器は中村編年Ⅴ～Ⅵ期（14 世紀初頭～ 15 世紀）に該当する。



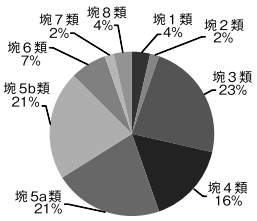
土師器坏の分布図



土師器埦の分布図　※縮尺 S=1/500



土師器坏の組成



土師器埦の組成

第 142 図　SD38 下層出土　土師器坏・埦の分布と組成

土壙墓 ST62 には供献品としての土師器の坏と小皿が出土している。土師器は，坏が大型だが，SI19 と同時期の中村編年Ⅴ～Ⅵ期に該当する。土壙墓からは洪武通寶が出土しており，この年代観を裏付ける。ST63 からは年代を特定できる遺物は出土していないが，ST62 との関係から，ST62 とほぼ同時期に該当すると判断して良いだろう。

掘立柱建物跡 SB120 は，瓦質の擂鉢や線描の連弁文をもつ青磁碗が出土している。年代は 15 世紀後半が想定される。

以上，SI19，SB120，ST62，ST63 を中世２期とし，時期は，やや幅があるが 14 世紀後半～ 15 世紀代とする。14 ～ 15 世紀は，南北朝の争乱や島津家中の総州家と奥州家の内乱の時期に相当する。

第５節　近世の調査

近世では土壙墓 15 基と，それを区画する溝状遺構（SD36）が検出された。埋葬人骨は９体分検出された。埋葬形態は，全て頭位を北に向けられた横臥屈葬であった。墓壙からは，六道銭として寛永通寶が出土したが，枚数は２～７枚である。寛永通寶は「新寛永」が大半を占めることから，この土壙墓群は近世中期以降（17 世紀後半以降）に造営が開始されたものでる。また，六道

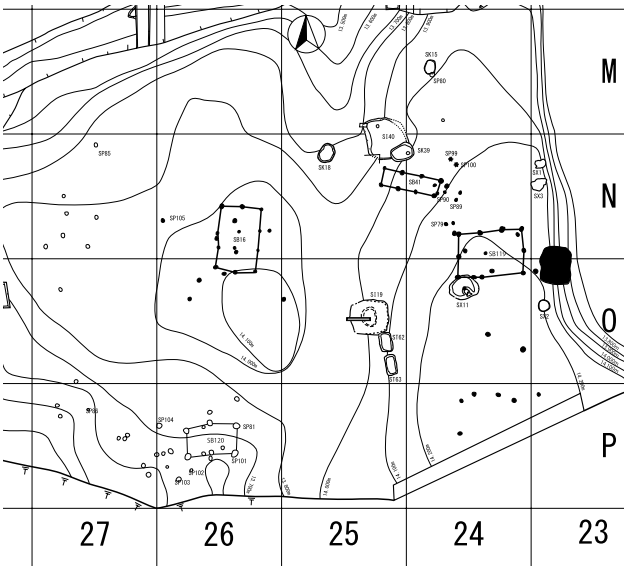
銭として７枚の貨幣を伴う事例は，本県では広く知られており，南九州全般に共通する習俗であったと言えよう。

墓地造営当初は“両墓制”を意識し，南西方向から北東方向に向かって墓地が造営されていたと想定される。年月の経過に伴い，上部構造が不明瞭になるなどの理由により墓壙の把握が困難になり，次第に墓壙同士が切り合うようになっていたと考えられる（狭川氏の御教授による）。また，土壙墓群の中央には，墓壙が造営されないことから，供養五輪塔などの構造物があった可能性も想定される。

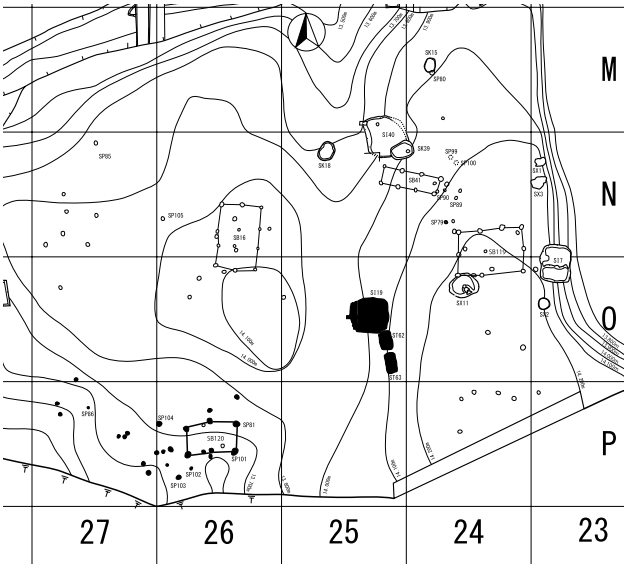
第６節　遺跡の残存状況等

外畠遺跡は平成 19 年度の分布調査で新発見された遺跡である。平成 23 年度段階で周知の埋蔵文化財包蔵地として確定しているのは，今回の調査区の範囲のみである（第 144 図太線の範囲）。今回の調査結果や周辺の地形状況から，調査区の隣接地である第 144 図のアミの部分には遺構の残存が想定される。特に，Ｐ～Ｔ－ 21 ～ 25 区では縄文時代及び中世の遺構が残存する可能性が高い。また，Ｇ～Ｉ－ 23 ～ 25 区周辺では，近世の土壙墓群及び溝状遺構がほぼ確実に残存している。

外畠遺跡では，シラス上面で遺構の残存が確認された例もある。したがって，遺跡内及び隣接地で耕作や造成等がシラスまで及んでいる場合でも，遺構が残存する可能性があり，注意を要する。

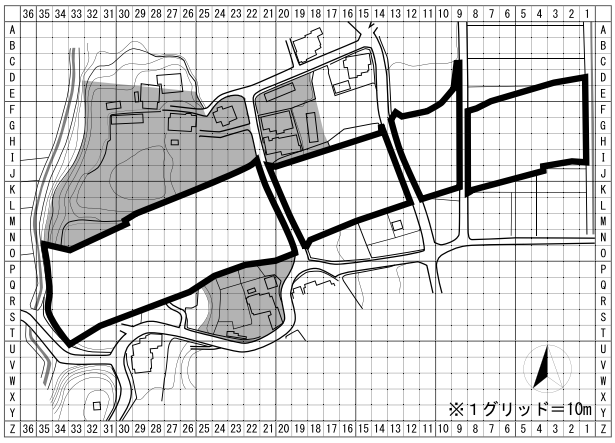


中世１期 (SI７，SB16，SB41，SB119，SP79)



中世２期 (SI19，ST62，ST63，SB120)

第 143 図　中世の遺構変遷案



第 144 図　外畠遺跡の残存状況

主要引用・参考文献・報告書

網田龍生 1997「肥後における古代後半期の墳墓」『先史学・考古学論究　Ⅱ』龍田考古会
石井寛 2008「掘立柱建物跡から観た後晩期集落址」『縄文時代』19　縄文時代文化研究会
出水市教育委員会 1979『荘貝塚』出水市文化財調査報告書（１）
市来町教育委員会 1993『川上 (市来) 貝塚　２』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）
大野亨 2001「竪穴建物とはなにか」『掘立と竪穴　中世遺構論の課題』高志書院
乙益重隆・前川威洋 1978「九州」『新版　考古学講座　３　先史文化』雄山閣
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2004『九養岡遺跡・踊場遺跡・高篠遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（71）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『大坪遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（79）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006『農業開発総合センター遺跡群Ⅱ　馬塚松遺跡・市堀遺跡・大門口遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（97）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『上水流遺跡１　縄文時代中期後半から弥生時代編』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（113）
鹿児島県立埋蔵文化財センター 2011『下鶴遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（163）
河口貞徳 1991「市来貝塚－昭和 36 年の発掘について－」『鹿児島考古』第 25 号　鹿児島県考古学会
木戸雅寿 1995「13.　石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
熊本県教育委員会 1998『黒橋貝塚』熊本県文化財調査報告第 166 集
河野治雄 1958「第１章　先史時代」『指宿市誌』指宿市
黒川忠広 2005「南九州における縄文時代後期の舟形口縁壺形土器について」『南九州縄文通信』No.16　南九州縄文研究会
狭川真一 2011『中世墓の考古学』高志書院
堂込秀人 1999「中世南九州の竪穴建物跡」『南九州城郭研究』創刊号　南九州城郭談話会
中村和美 1994「鹿児島県 (薩摩・大隅国) における平安時代の土器－土師器の変遷を中心に－」『中近世土器の基礎研究』Ⅹ　中近世土器研究会
中村和美 1997「鹿児島県における古代の在地土器」『鹿児島考古』第 31 号　鹿児島県考古学会
中村和美 2007「南九州の土器・陶器」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編　「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会
前迫亮一 2002「南の磨消縄文土器－干迫遺跡出土土器にみる磨消縄文土器の変遷に関する覚書－」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生　古稀記念論集刊行会
前迫亮一 2004「南の北久根山式土器－干迫遺跡出土資料の位置づけ－」『鹿児島考古』第 38 号　鹿児島県考古学会
水ノ江和同・前迫亮一 2010「１.九州」『西日本の縄文土器　後期』　真陽社
南種子町教育委員会 2002『藤平小田遺跡』南種子町埋蔵文化財調査報告書（９）
宮崎市教育委員会 2006『本野原遺跡　三』宮崎市文化財調査報告書第 53 集

図　　版

外畠遺跡全景（東から）

図版2

外畠遺跡近景（西から）

①・②ツル保護対策　③鳥インフルエンザ対策　④甲元眞之先生調査指導　⑤荘小学校遺跡見学
⑥～⑧作業風景ほか

図版4

①調査前風景　②～⑥土層断面　⑦N・0－24・25区遺物出土状況　⑧T－34区近代墓

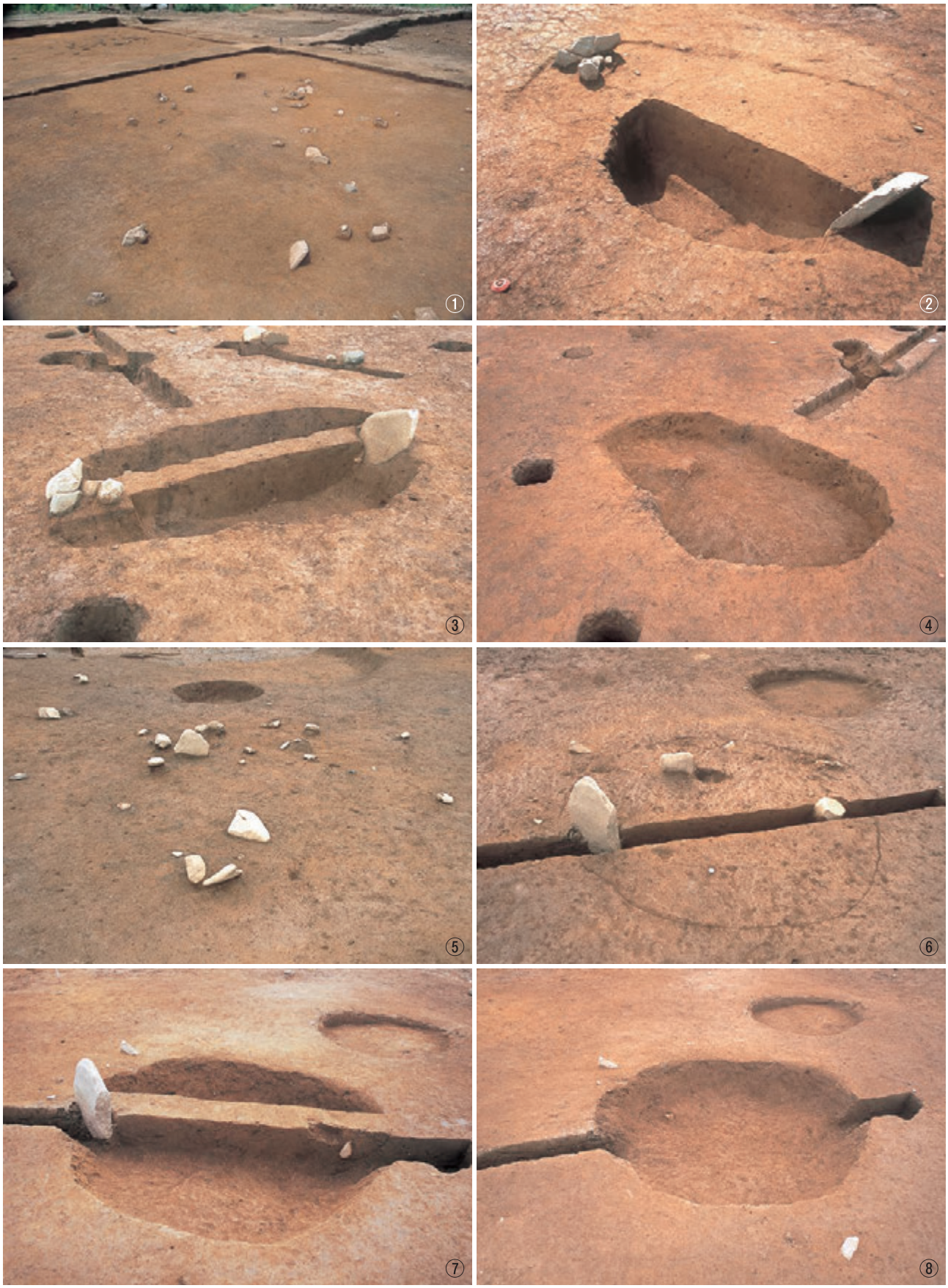
K～P－23～27区　空撮

図版6

① SK4 と周辺の遺構　② SK4 検出状況

① SK4 埋土堆積状況　② SK4 完掘

図版8



① SK6 検出状況　② SK6 半截　③ SK6 埋土堆積状況　④ SK6 完掘　⑤ SK54,SK55 検出状況
⑥ SK55 検出状況　⑦ SK55 埋土堆積状況　⑧ SK55 完掘

SK78

図版10

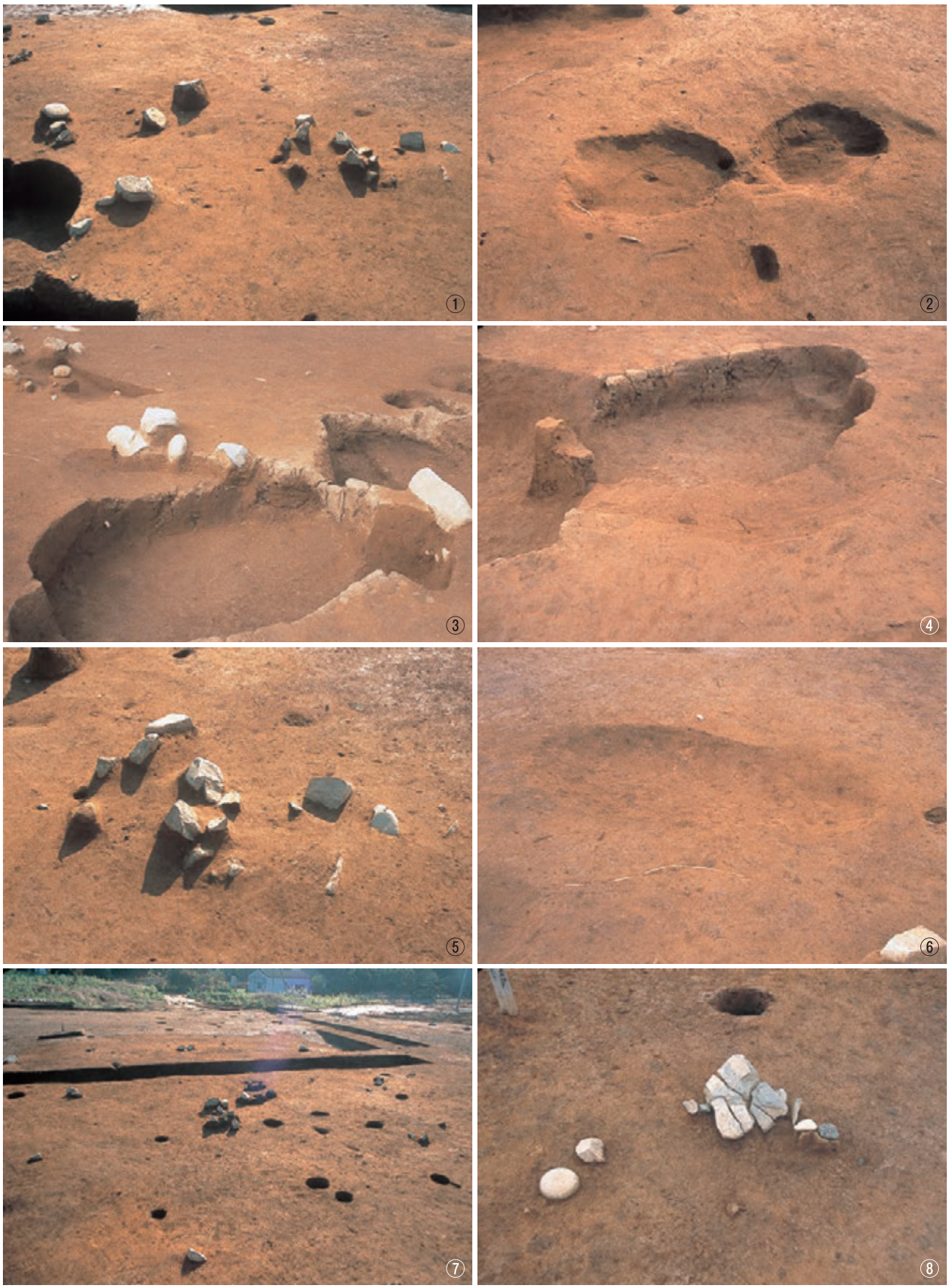
①N－25区遺構検出状況　②SK53検出状況　③SK53完掘

① SK13 検出状況　② SK13 半截　③ SK13 完掘　④ SK60（奥），SK61（手前）検出状況
⑤ SK60（手前），SK61（奥）完掘

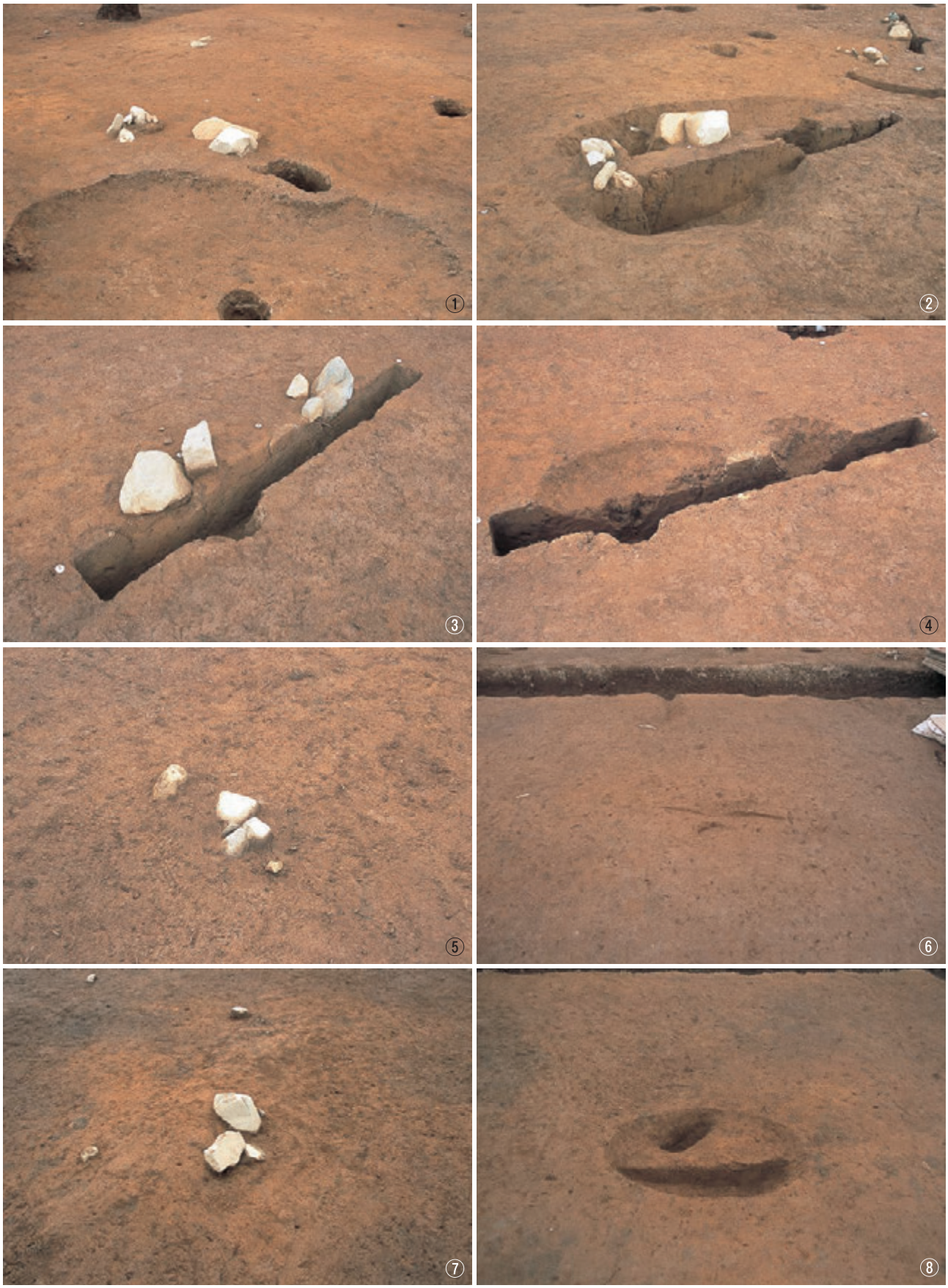
図版12

① SK20 遺物出土状況　② SK20 埋土堆積状況　③ SK20 完掘　④ SK57 検出状況　⑤ SK57 土器出土状況

①SK44 検出状況　②SK45 検出状況　③SK44・SK45 埋土堆積状況　④SK45 遺物出土状況
⑥SK8 検出状況　⑦SK8 完掘



① SK49，SK50，SK51 検出状況　② SK49 完掘状況　③ SK50 埋土堆積状況　④ SK50 完掘　⑤ SK51 検出状況
⑥ SK51 完掘　⑦ SX52（左），SX64（中央），SX65（右）検出状況　⑧ SX66 検出状況



① SK43 検出状況　② SK43 埋土堆積状況　③ SK48 検出状況　④ SK48 完掘　⑤ SK59 検出状況　⑥ SK59 完掘
⑦ SK58 検出状況　⑧ SK58 完掘

図版16

①SK69 検出状況　②SK69 完掘　③SK21 検出状況　④SK21 埋土堆積状況　⑤SK21 完掘
⑥SX42 検出状況　⑦・⑧作業風景ほか

① SK77，SK68 検出状況　② SK77 遺物出土状況

図版18

① SK77 埋土堆積状況　② SK77 完掘　③　SK68 埋土堆積状況　④ SK68 完掘　⑤ SK72（左），SK73（右）検出状況
⑥ SK72 埋土堆積状況　⑦ SK72 青銅製品出土状況　⑧ SK72 完掘

① SK73 埋土堆積状況　② SK73 遺物出土状況　③ SP71，SK70 検出状況　④ SK70 埋土堆積状況
⑤ SK70 完掘　⑥ SK74 検出状況　⑦ SK74 埋土堆積状況　⑧ SK74 遺物出土状況

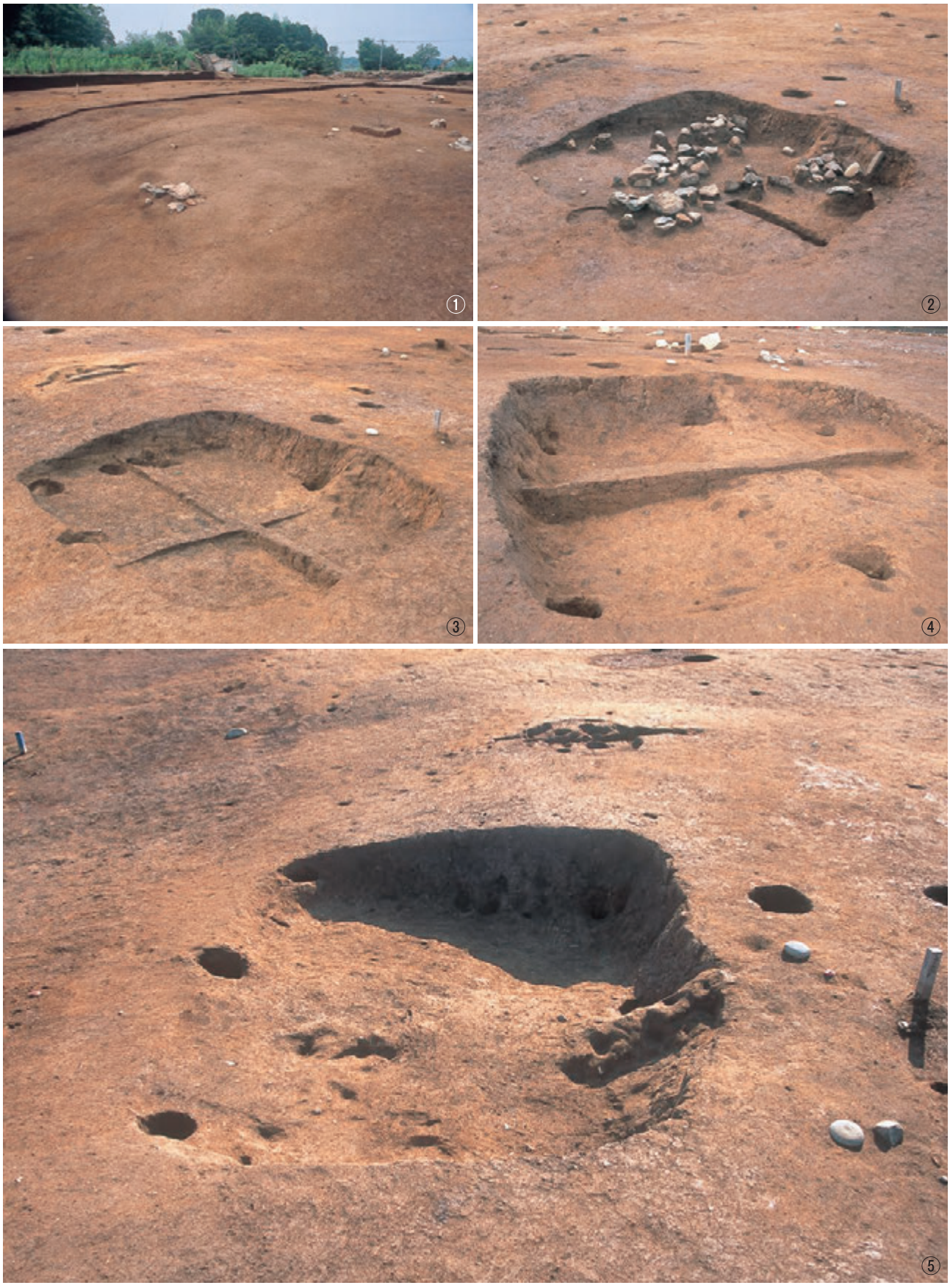
図版20

①K－18・19区遺構検出状況　②SB67完掘　③SB67－P7半截　④SP71検出状況　⑤調査風景

① SD38 検出状況（東から） ② SD38 － 1 トレンチ（A － A’） ③ SD38 － 2 トレンチ（B － B’）

図版22

① SD38 下層遺物出土状況（東から） ② SD38 完掘（東から）③ SD38 完掘（北西から）



① SI7 検出状況　② SI7 埋土中廃棄石材　③ SI7 床面 1　④ SI7 埋土堆積状況　⑤ SI7 完掘

図版24

①～③ SP79 遺物出土状況　④ SP79 完掘　⑤ SB16 検出状況　⑥ SB41 完掘状況
⑦ SI11 検出状況　⑧ SI11 完掘

①SI19 検出状況　②SI19 埋土堆積状況　③SI19 遺物出土状況　④SI19 完掘
⑤SI40，SK39 検出状況　⑥SK39 埋土堆積状況　⑦SI40 埋土堆積状況　⑧SK39，I40 完掘

図版26

① ST62，ST63 検出状況　② ST62，ST63 半截　③ ST63 骨粉出土状況　④ ST62，ST63 遺物出土状況
⑤ ST62，ST63 完掘　⑥ SK18 完掘　⑦ SK15 検出状況　⑧ SK15 完掘

①近世土壙墓群，SD36　②近世土壙墓群検出状況　③ ST27，ST30 検出状況　④ SD36 埋土堆積状況
⑤近世土壙墓群，SD36 完掘

図版28

① ST23 埋葬人骨検出状況　② ST27 埋葬人骨検出状況　③ ST17 埋葬人骨検出状況　④ ST35 埋葬人骨検出状況

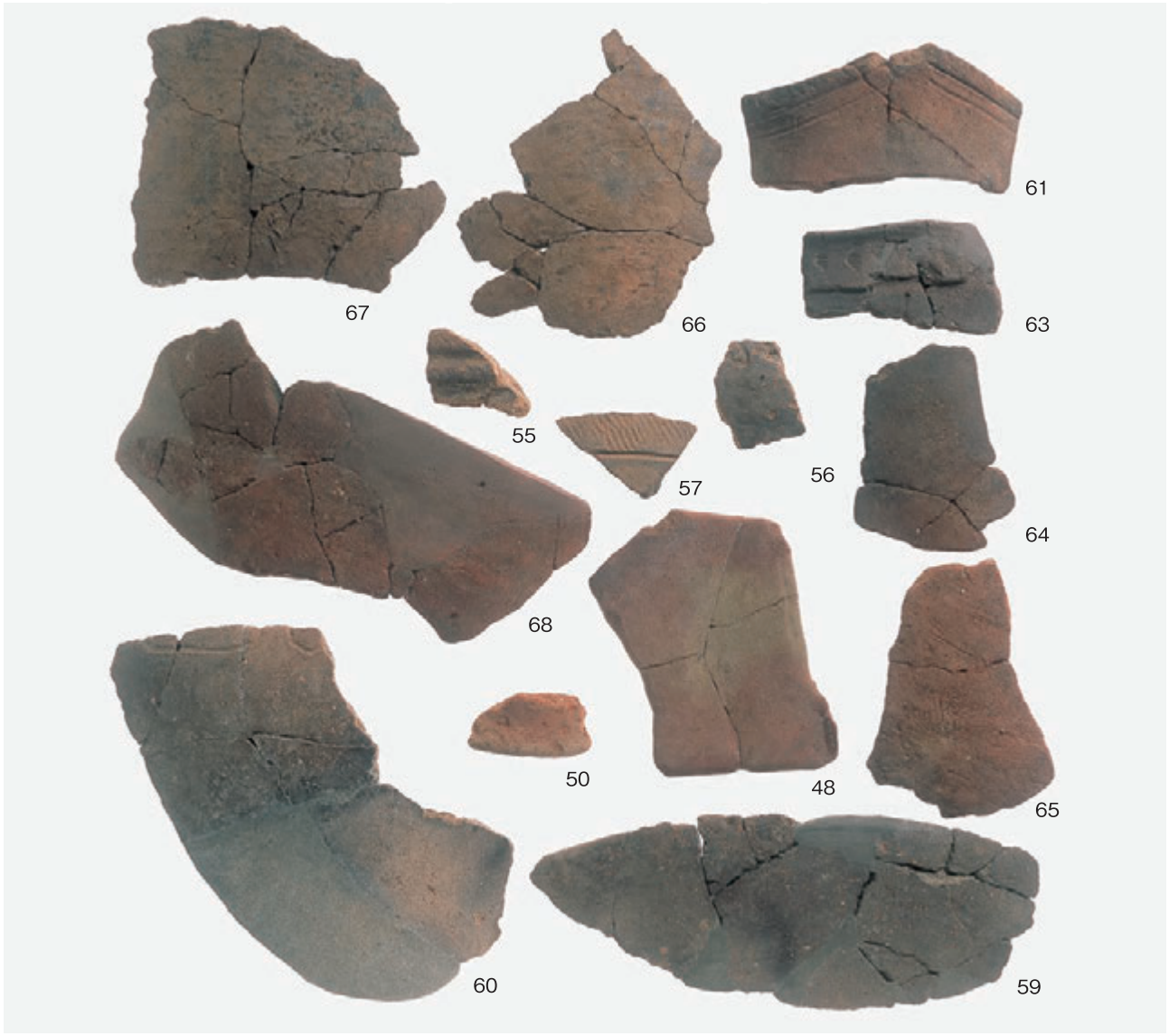
縄文時代の遺物（1）

図版30

縄文時代の遺物（2）

縄文時代の遺物（3）

図版32



縄文時代の遺物（4）

縄文時代の遺物（5）

図版34

縄文時代の遺物（6）

134

135

119
123
122

127

137 表

137 裏

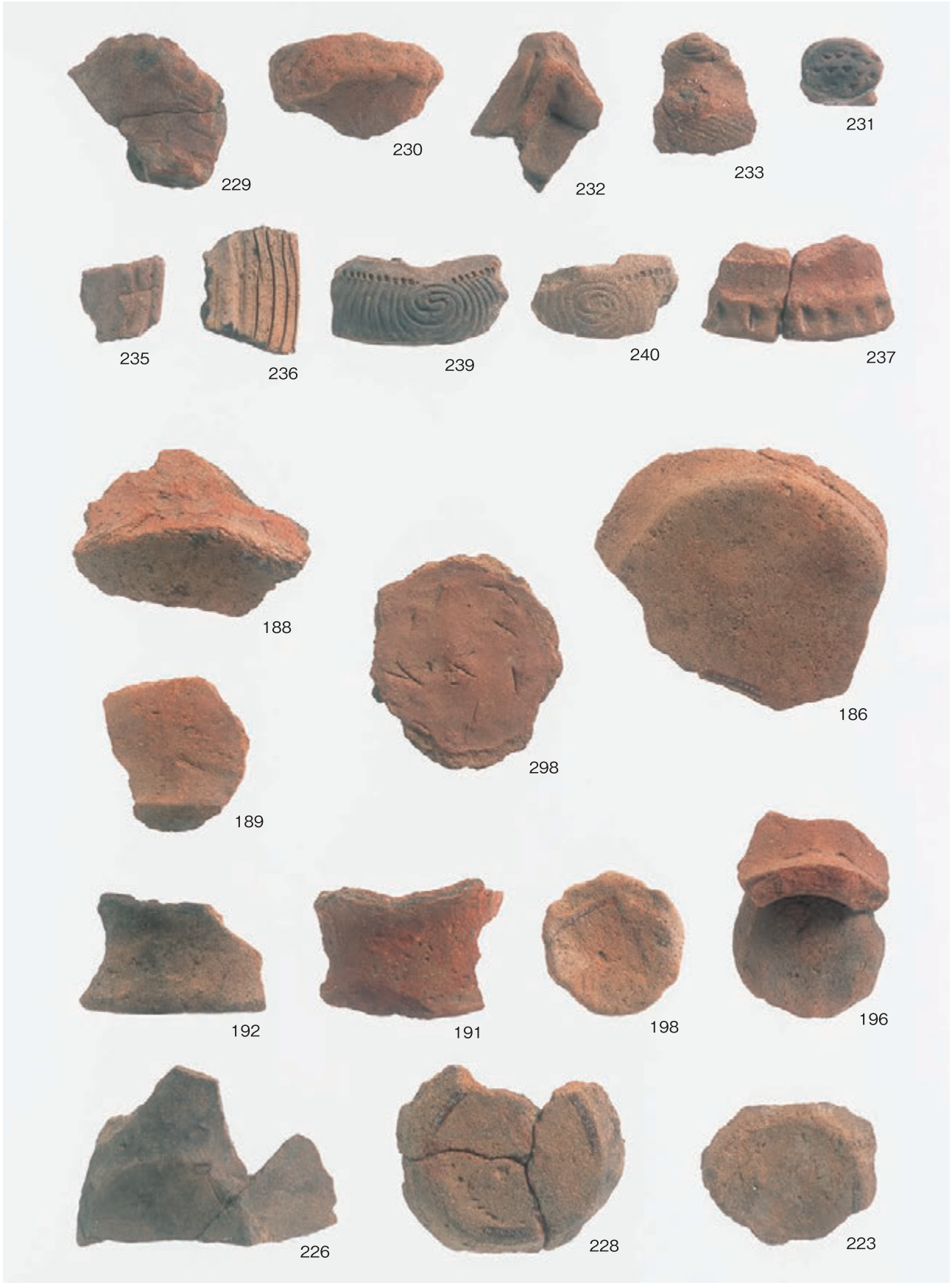
138 表

138 裏

縄文時代の遺物（7）

図版36

縄文時代の遺物（8）


229
230
232
233
231
235
236
239
240
237
188
298
186
189
192
191
198
196
226
228
223

縄文時代の遺物（9）

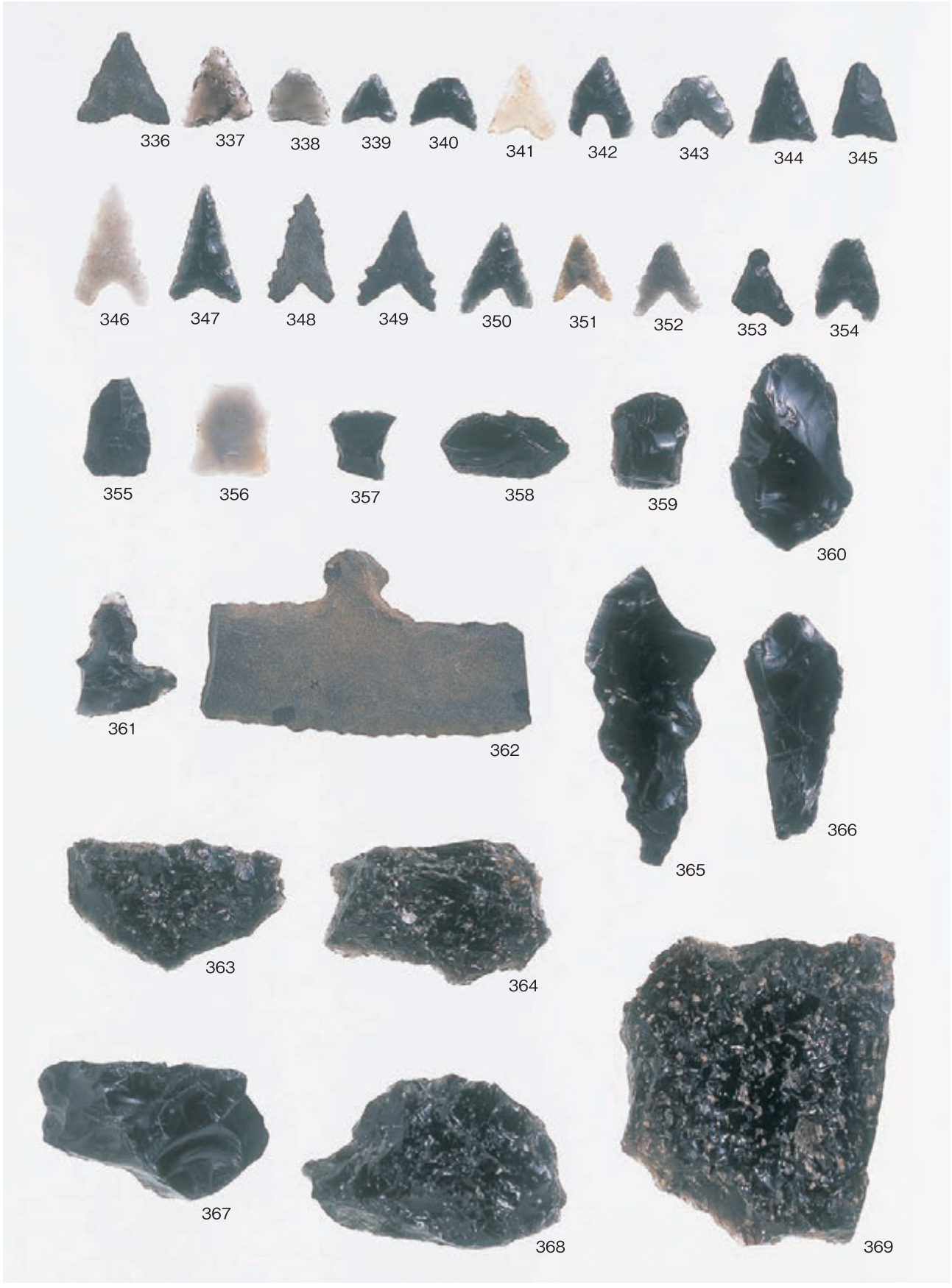
図版38

縄文時代の遺物（10）

243
269
244
245
248
254
256
270
271
317
300
301
305
304
302
299
307
310
308
309
319
325
323
329
324
318
327
322
320
330
331

縄文時代の遺物（11）

図版40



縄文時代の遺物（12）

375
371
372
373
374
370
376
377
378
379
380
381
382
384
386
387
388
385

縄文時代の遺物（13）

図版42

縄文時代の遺物（14）

弥生時代・古墳時代の遺物

図版44

443 表

443 裏

455 表

455 裏

474 表

474 裏

古代の遺物（1）

482 表

482 裏

483 表

483 裏

437

442

古代の遺物（2）

図版46

438
439
440
441
475
476
477
479
480
478
481
504
505
506
508
499
507
492
482
455
437
443
474
483
483

古代の遺物（3）

459

487

497

509

514

515

520

522

古代の遺物（4）

図版48

523

524

532

536

545

546

548

549

古代の遺物（5）

556

558

570

590

591

592

594

595

古代の遺物（6）

図版50

616

617

618

628

629

630

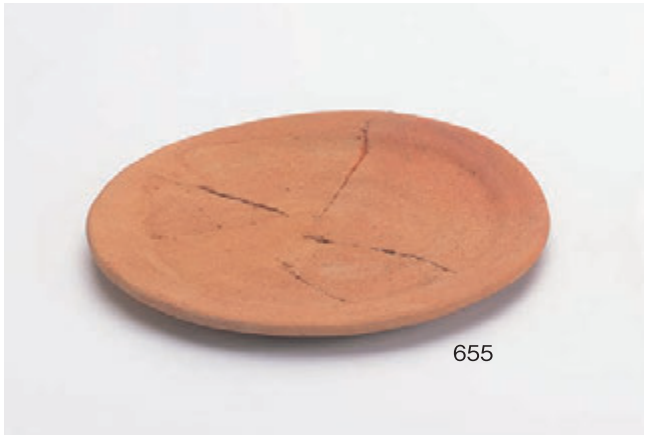
644

652

古代の遺物（7）

640

645


655

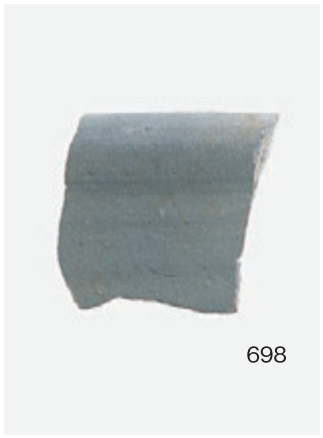
712

658

659

661

665


698

古代の遺物（8）

図版52

中世の遺物（1）

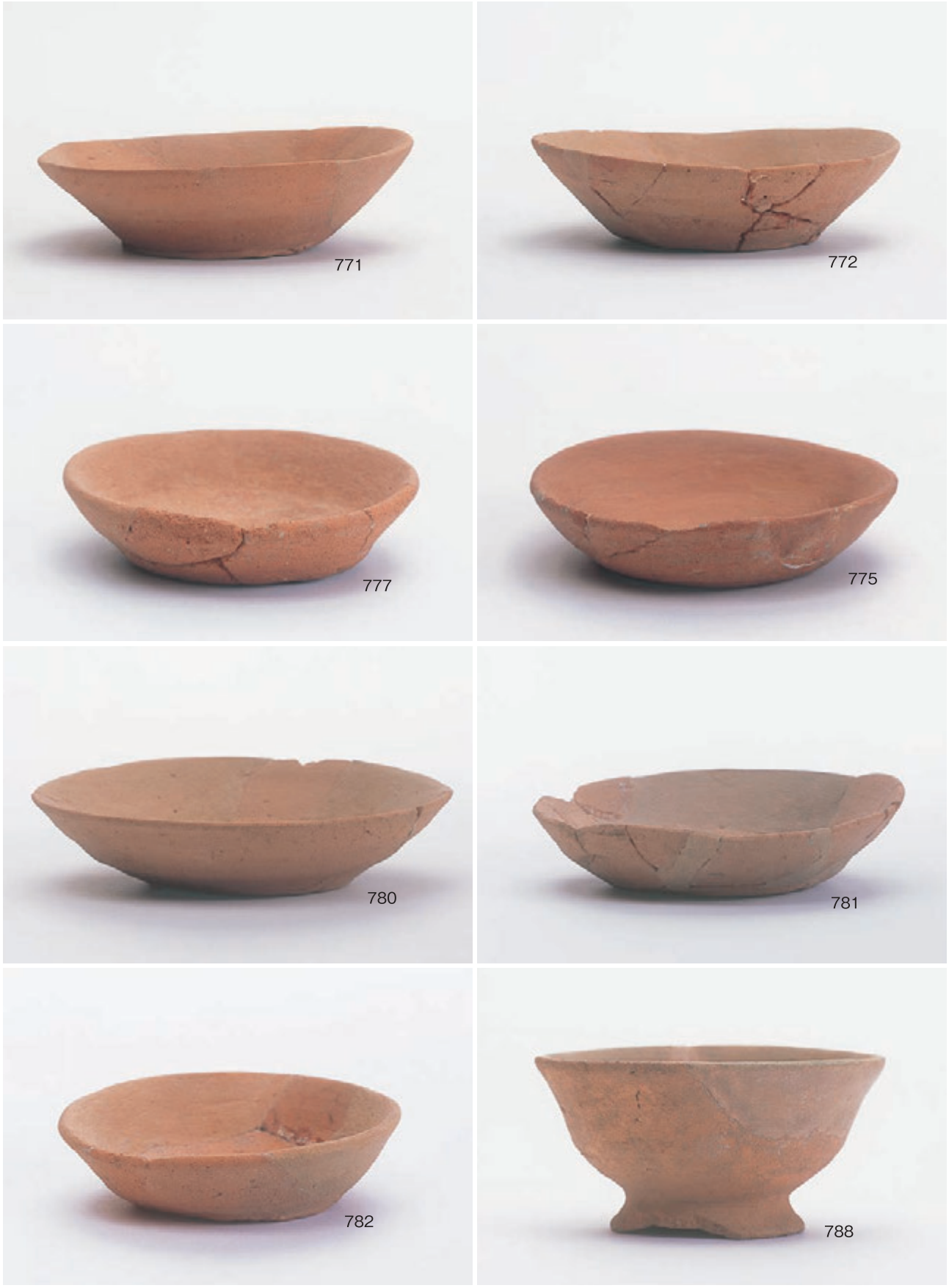
759
760
758

768
766
763
764
767
770
762
761
765
769

787
786
785
783

中世の遺物（2）

図版54



中世の遺物（3）

792

802

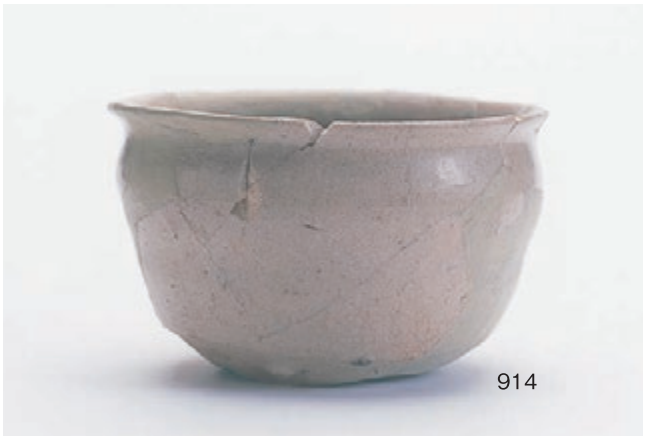
804

910

911

912

913


914

中世の遺物（4）・近代の遺物

図版56

816
817
818
815
811
812
813
822
701
829
828
835
836
839
844
840
843
848
847
850
846
849

中世の遺物（5）

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（175）
南九州西回り自動車道建設（野田 IC ～高尾野 IC 間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書（XXXV）

外　畠　遺　跡

発行年月日　2012 年 3 月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒 899 － 4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森 2 番 1 号
TEL 0995 － 48 － 5811　　FAX 0995 － 48 － 5821

印　　刷　（株）秀巧社印刷
〒 890 － 0072
鹿児島市新栄町 25 番 7 号
TEL 099 － 257 － 3300　　FAX 099 － 257 － 3322

鹿児島県